

仙台市文化財調査報告書第140集

南小泉遺跡

第16～18次発掘調査報告書

1990年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第140集

南 小 泉 遺 跡

第16～18次発掘調査報告書

1990年3月

仙台市教育委員会



第16次 S I 01出土の炭化材



第16次 S K 12鉄滓・土器の出土状況



第16次 S D01出土土師質土器皿



第16次調査区出土中国磁器



第17次調査区出土陶器



第17次調査区出土中国磁器

序 文

仙台市若林区にある南小泉遺跡は、昭和初めの霞ノ日飛行場の拡張工事に際して、一般にその存在が知られるようになりました。この遺跡は、弥生・古墳時代の集落遺跡として周知されておりましたが、昭和56年度の都市計画街路（宮城野萩通り）の建設に先立つ調査以降、平安時代の集落跡や中世・近世の構造が発見されるようになってまいりました。このように、今日に至るまで人々の居住地として、南小泉地区は重要な位置を占めております。近年まで田畠が広がる田園地帯を形成しておりましたが、市街化が急速に進み、現在ではほとんどその面影はありません。今回報告する三ヶ所の調査地点も、畑地から宅地へと変貌しようとしております。

本遺跡の調査は第18次を数えるまでになりましたが、今回特に注目される発見は第16次調査では、古墳時代の鉄器製作に関連するとみられる鉄滓の出土、大規模な中世城館の存在、第17次調査では、古墳時代の古鏡の出土、中世の屋敷跡、第18次調査では古墳時代や平安時代の良好な遺物の出土などあります。これらの発見は、地域の歴史を解明する貴重な資料となることでしょう。その意味でこの報告書が、学術研究のみならず学校教育・社会教育の場で活用されれば幸いです。

最後に、調査や報告書の作成に御協力いただきました地元の方々、関係諸機関に深く感謝申し上げます。今後とも、文化財への御理解・御協力をお願いしますて序といたします。

平成2年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

例　　言

1. 本書は、昭和63年度南小泉遺跡内の宅地造成に伴う、第16次～第18次発掘調査報告書である。すでに公表された現地説明会資料等に優先するものである。
2. 報告書作成のための遺物整理は、文化財課佐藤洋が担当し、課員太田昭夫・平間亮輔・中窓洋が協力した。本書の執筆・編集は佐藤洋が行った。
3. 自然科学的の分析については、鉄滓分析を大澤正己氏(新日本製鐵株式会社)、樹種同定をパリノ・サーベイ株式会社にお願いした。
4. 本書の作成に際し、下記の方々に御指導・御協力を賜った(順不同・敬称略)。

穴沢義功・大場拓俊・蟹沢聰史・酒井清治・藤沢敦・井上喜久男・大橋康二・鈴木功・仲野泰裕・樺嶋彰一・橋本久和・藤沢良祐・藤沼邦彦・堀内明博・村上伸之・百瀬正恒・吉岡康暢・亀井明徳・山本信夫・大場拓俊・本沢慎輔・八重樫忠郎・伊野近富・森島康雄
5. 今回の調査記録・出土遺物は、仙台市教育委員会で一括保管している。

凡　　例

1. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1:2.5万「仙台東南部」である。
2. 本書中の七色については「新版標準土色帳(小山・竹原:1973)」に基づいた。
3. 本書の報文や図面に示した方位は、真北を基準とした。なお、磁北は真北に対して西偏7°20'である。
4. 土層の水系レベルは海拔高を示す。
5. グリッドの名称は、そのグリッドの南西交点を通るライン名を組合せて使用した。
6. 遺物実測図中、中心線が一点鎖線のものは、転開し図上復元したものである。
7. 出土遺物のうち、土師器に黒色処理が認められるものは網点で実測図に部位を示した。また、器表面に赤彩のある土師器や胎土まで赤色を呈する土師器についても網点で表示した。
8. 遺物実測図中に、主に時間的制約から中心線に沿って帶状に調整痕を示したものがある。
9. 遺構名は遺構略記号を使用し、遺構の種類毎に報文に示した(検出順)。
10. 遺構図は紙数の都合上、遺構毎に独立した図版を組んでないものがある。
11. 遺物観察表用の凡例は91ページ参照。

本文目次

第1章 遺跡概要.....	1
1. 位置と環境.....	1
2. 調査の方法と要項.....	3
第2章 調査の成果.....	6
第1節 第16次調査.....	6
1. 調査に至る経緯.....	6
2. 調査の経過.....	6
3. 基本層位.....	6
4. 検出遺構と出土遺物.....	8
(1)古墳時代.....	8
(2)中世・近世.....	36
(3)その他の遺物.....	73
第2節 第17次調査.....	92
1. 調査に至る経緯.....	92
2. 調査の経過.....	92
3. 基本層位.....	92
4. 検出遺構と出土遺物.....	95
(1)古墳時代.....	95
(2)中世・近世.....	123
(3)その他の遺物.....	157
第3節 第18次調査	169
1. 調査に至る経緯	169
2. 調査の経過	169
3. 基本層位	169
4. 検出遺構と出土遺物	172
(1)古墳時代	172
(2)奈良・平安時代	195
(3)中世・近世	207
(4)その他の遺構と遺物	219
第3章 分析と考察	229

第1節 古墳時代	229
1. 土師器の分類	229
2. 須恵器	232
3. 各器種の消長と土器組成	232
4. 編年との対応	238
5. 遺構の時期	239
6. 注目される遺構・遺物	239
第2節 中世・近世	243
1. 中世遺物	243
(1)土師質土器	243
(2)中世陶磁器	249
2. 近世遺物	255
3. 第16～18次調査出土瓦	261
4. 中世・近世の遺構について	263
引用・参考文献	273
第4章 自然科学的分析	275
第1節 南小泉遺跡炭化材同定報告	275
第2節 南小泉遺跡祭祀土坑出土鉄滓学的調査	280
第5章 まとめ	290
写真図版	293

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第31図 S K12出土遺物(3)	34
第2図 南小泉遺跡次数別調査区位置図	5	第32図 S D04・05平面・断面図	35
第3図 調査地点地形図	7	第33図 S A01・02平面図	37
第4図 基本層位	7	第34図 S B01・S X02平面・断面図	38
第5図 遺構配置図	9	第35図 S B01・S X02出土遺物	39
第6図 S I 01平面図・断面図	11	第36図 S B02・03・04平面・断面図	41
第7図 S I 01カマド平面・断面図	12	第37図 VI区建物跡平面・断面図	42
第8図 S I 01出土遺物	13	第38図 S K02平面・断面図	43
第9図 S I 02平面・断面図	14	第39図 S K05・08平面図	44
第10図 S I 02出土遺物	15	第40図 VII区平面・断面図	45
第11図 S I 05平面・断面図	16	第41図 S K05・07・08・10出土遺物	47
第12図 S I 05出土遺物(1)	17	第42図 配石遺構	48
第13図 S I 05出土遺物(2)	18	第43図 S D01(II区)平面・断面図	49
第14図 S I 05出土遺物(3)	19	第44図 S D01(V区)近世面	50
第15図 S I 06平面・断面図	20	第45図 S D01(V区)平面・断面図	51
第16図 S I 06出土遺物	21	第46図 S D01橋脚跡平面・断面図	52
第17図 S I 07・10平面・断面図	22	第47図 S D01出土遺物(1)	53
第18図 S I 07・10炭化材・焼土出土状況	23	第48図 S D01出土遺物(2)	54
第19図 S I 07・10出土遺物	24	第49図 S D01出土遺物(3)	55
第20図 S I 8・S K06・11平面断面図	25	第50図 S D01出土遺物(4)	56
第21図 S I 08出土遺物(1)	26	第51図 S D01出土遺物(5)	57
第22図 S I 08出土遺物(2)	27	第52図 S D01出土遺物(6)	58
第23図 S I 09平面図	28	第53図 S D01出土遺物(7)	59
第24図 S I 11出土遺物	29	第54図 S D01出土遺物(8)	60
第25図 S K03・14平面・断面図	29	第55図 S D02・03・06・09平面・断面図	61
第26図 S K03・06・11出土遺物	30	第56図 S D02出土遺物	62
第27図 S K07・09平面・断面図	31	第57図 VI区・S D07・13平面断面図	65
第28図 S K12平面・断面図	31	第58図 S D08・11・12・15平面・断面図	67
第29図 S K12出土遺物(1)	32	第59図 S D05・11～13・15出土遺物	69
第30図 S K12出土遺物(2)	33	第60図 II区土器出土遺物	71

第61図	その他の出土遺物(1).....	74	第93図	S I 16出土遺物	116
第62図	その他の出土遺物(2).....	75	第94図	S I 17出土遺物	116
第63図	その他の出土遺物(3).....	76	第95図	S I 18平面・断面図	117
第64図	その他の出土遺物(4).....	77	第96図	S I 18出土遺物	117
第65図	その他の出土遺物(5).....	78	第97図	S K15~20、26~28平面・断面図	118
第66図	その他の出土遺物(6).....	78	第98図	S D09・10平面図・断面図	120
第67図	遺構配置図.....	93	第99図	S D09出土遺物	121
第68図	基本層位.....	95	第100図	S D10出土遺物.....	122
第69図	S I 01・02平面図.....	96	第101図	S D12平面・断面図.....	123
第70図	S I 03・07・09平面・断面図.....	97	第102図	S D12、S K26出土遺物.....	124
第71図	S I 01出土遺物.....	99	第103図	S A01平面・断面図.....	124
第72図	S I 02出土遺物.....	99	第104図	S B01・07平面・断面図.....	125
第73図	S I 03・07・15・16平面・断面図	100	第105図	S B02・06平面・断面図.....	126
第74図	S I 03出土遺物(1)	101	第106図	S B03・04・05平面・断面図.....	127
第75図	S I 03出土遺物(2)	102	第107図	S B08~12平面・断面図.....	128
第76図	S I 04平面・断面図	103	第108図	トレンチ平面・断面図.....	129
第77図	S I 04出土遺物	104	第109図	S E01平面・断面図.....	132
第78図	S I 05・06平面・断面図	104	第110図	S E01出土遺物.....	133
第79図	S I 05出土遺物	105	第111図	S K01・13・14平面・断面図	134
第80図	S I 06出土遺物	106	第112図	S K03平面・断面図	135
第81図	S I 07出土遺物	107	第113図	S K06~08、21~23平面断面図	136
第82図	S I 09平面・断面図	107	第114図	S K10・11平面・断面図	137
第83図	S I 09出土遺物	108	第115図	S K01・03・10・11・15出土遺物	139
第84図	S I 10・17平面・断面図	108	第116図	S K13・21・23出土遺物	140
第85図	S I 10出土遺物	109	第117図	S D01 (II区) 平面・断面図	141
第86図	S I 11平面・断面図	110	第118図	S D01 (IV区) 平面・断面図	142
第87図	S I 11出土遺物	111	第119図	S D01 (V区) 平面・断面図	143
第88図	S I 12平面図	112	第120図	S D01出土遺物(1)	145
第89図	S I 12出土遺物(1)	113	第121図	S D01出土遺物(2)	146
第90図	S I 12出土遺物(2)	114	第122図	S D02平面・断面図	147
第91図	S I 12出土遺物(3)	115	第123図	S D01出土遺物(3)	149
第92図	S I 14出土遺物	115	第124図	S D02出土遺物(1)	150

第125図	S D02出土遺物(2).....	151	第157図	S I 04平面・断面図(1).....	197
第126図	S D02出土遺物(3).....	152	第158図	S I 04平面・断面図(2).....	198
第127図	S D04平面・断面図.....	154	第159図	S I 04平面・断面図(3).....	199
第128図	S D04出土遺物.....	155	第160図	S I 04出土遺物(1).....	200
第129図	S D02・16遺精外出土遺物.....	157	第161図	S I 04出土遺物(2).....	201
第130図	その他の出土遺物.....	158	第162図	S D07・08・09平面・断面図.....	203
第131図	基本層位(I区).....	170	第163図	S D08出土遺物.....	205
第132図	基本層位(II区).....	171	第164図	1号・2号畝状遺構(II区) 平面・断面図.....	206
第133図	遺構配置図.....	173	第165図	1号・2号畝状遺構(II区) 平面・断面図.....	207
第134図	S I 01平面・断面図(1).....	175	第166図	5号・6号畝状遺構(I区) 平面・断面図.....	208
第135図	S I 01平面・断面図(2).....	176	第167図	S D16出土遺物.....	209
第136図	カマド付近平面・断面図.....	177	第168図	トレンチ平面・断面図.....	210
第137図	S I 01出土遺物(1).....	178	第169図	S D25・畝状遺構(I区) 出土遺物.....	211
第138図	S I 01出土遺物(2).....	179	第170図	S A01平面・断面図.....	211
第139図	S I 01出土遺物(3).....	180	第171図	S B01平面・断面図.....	212
第140図	S I 02平面・断面図.....	181	第172図	S B02平面・断面図.....	213
第141図	S I 02出土遺物.....	181	第173図	S B03平面・断面図.....	213
第142図	S I 03平面・断面図.....	182	第174図	S B04平面・断面図.....	214
第143図	S I 05平面・断面図.....	182	第175図	S B05平面・断面図.....	214
第144図	S I 05出土遺物.....	183	第176図	S B06平面・断面図.....	215
第145図	S K03~13平面・断面図.....	184	第177図	SD01・02・10・11平面断面図.....	216
第146図	S K03・10出土遺物.....	185	第178図	S D01・02出土遺物.....	217
第147図	S D03平面・断面図.....	186	第179図	S D12・13平面・断面図.....	217
第148図	S D04平面・断面図.....	187	第180図	S D10・13平面・断面図.....	217
第149図	S D05平面・断面図.....	188	第181図	S D12・14平面・断面図.....	218
第150図	S D03~05・20出土遺物.....	189	第182図	土坑平面・断面図.....	220
第151図	S D20・24平面・断面図.....	190	第183図	その他の出土遺物(遺構外).....	222
第152図	畝状遺構平面・断面図.....	191	第184図	深掘トレンチ土器出土状況.....	223
第153図	S X01・02・03平面・断面図.....	192			
第154図	S X02出土遺物(1).....	193			
第155図	S X02出土遺物(2).....	194			
第156図	S X02出土遺物(3).....	195			

第185図	その他の出土遺物（弥生）	223	第189図	中世・近世遺構変遷図（第16次）	269
第186図	各次時代別遺構配置図(1)	241	第190図	中世・近世遺構変遷図（第16次）	270
第187図	各次時代別遺構配置図(2)	242	第191図	中世・近世遺構変遷図（第17次）	271
第188図	土師質土器塊・皿類変遷試案	251	第192図	中世・近世遺構変遷図（第18次）	272

表 目 次

表1	第16次出土遺物観察表(1).....	79	表24	第18次出土遺物観察表(2)	225
表2	第16次出土遺物観察表(2).....	80	表25	第18次出土遺物観察表(3)	226
表3	第16次出土遺物観察表(3).....	81	表26	第18次出土遺物観察表(4)	227
表4	第16次出土遺物観察表(4).....	82	表27	第16~18次主要遺構器種組成表(1)	233
表5	第16次出土遺物観察表(5).....	83	表28	第16~18次主要遺構器種組成表(2)	234
表6	第16次出土遺物観察表(6).....	84	表29	段階別器種組成表と消長	237
表7	第16次出土遺物観察表(7).....	85	表30	段階別主要遺構一覧	237
表8	第16次出土遺物観察表(8).....	86	表31	遺構別土師質土器器種組成表	247
表9	第16次出土遺物観察表(9).....	87	表32	遺構別土師質土器器種組成表	248
表10	第16次出土遺物観察表(10).....	88	表33	土師質土器皿類の推定消長	250
表11	第16次出土遺物観察表(11).....	89	表34	产地別出土破片数とその比率	256
表12	第16次出土遺物観察表(12).....	90	表35	产地別出土破片数とその比率	262
表13	第17次出土遺物観察表(1).....	159	表36	産地別出土破片数とその比率	262
表14	第17次出土遺物観察表(2).....	160	表37	時期別遺構の変遷	268
表15	第17次出土遺物観察表(3).....	161			
表16	第17次出土遺物観察表(4).....	162	表1	南小泉遺跡出土炭化材の樹種	277
表17	第17次出土遺物観察表(5).....	163	表2	南小泉遺跡出土炭化材の住居址別の 樹種構成	278
表18	第17次出土遺物観察表(6).....	164	Table1	供試材の履歴と調査項目	280
表19	第17次出土遺物観察表(7).....	165	Table2	仙台市周辺出土鉄滓の化学組成	283
表20	第17次出土遺物観察表(8).....	166	Table3	高速定性分析	285
表21	第17次出土遺物観察表(9).....	167	Table4	古墳時代前・中期の鉱石系 鍛錆銀冶滓出土例	287
表22	第17次出土遺物観察表(10).....	168			
表23	第18次出土遺物観察表(1).....	224			

写 真 図 版

写真1	南小泉遺跡空中写真	293	写真27	第17次調査出土遺物	319
写真2	第16次調査遺跡全景・検出遺構	294	写真28	第17次調査出土遺物	320
写真3	第16次調査検出遺構	295	写真29	第17次調査出土遺物	321
写真4	第16次調査検出遺構	296	写真30	第17次調査出土遺物	322
写真5	第16次調査検出遺構	297	写真31	第17次調査出土遺物	323
写真6	第16次調査検出遺構	298	写真32	第17次調査出土遺物	324
写真7	第16次調査出土遺物	299	写真33	第17次調査出土遺物	325
写真8	第16次調査出土遺物	300	写真34	第18次調査検出遺構（I区）	326
写真9	第16次調査出土遺物	301	写真35	第18次調査検出遺構（I区）	327
写真10	第16次調査出土遺物	302	写真36	第18次調査検出遺構（I区）	328
写真11	第16次調査出土遺物	303	写真37	第18次調査検出遺構（I・II区）	329
写真12	第16次調査出土遺物	304	写真38	第18次調査検出遺構（II区）	330
写真13	第16次調査出土遺物	305	写真39	第18次調査検出遺構（II区）	331
写真14	第16次調査出土遺物	306	写真40	第18次調査検出遺構（II区）	332
写真15	第16次調査出土遺物	307	写真41	第18次調査検出遺構（II区）	•
写真16	第16次調査出土遺物	308		出土遺物	333
写真17	第16次調査出土遺物	309	写真42	第18次調査出土遺物	334
写真18	第17次調査検出遺構	310	写真43	第18次調査出土遺物	335
写真19	第17次調査検出遺構	311	写真44	第18次調査出土遺物	336
写真20	第17次調査検出遺構	312			
写真21	第17次調査検出遺構	313	写真1	炭化材同定	337
写真22	第17次調査検出遺構	314	写真2	炭化材同定	338
写真23	第17次調査検出遺構	315	Photo1	南小泉遺跡出土橢形鍛冶滓	
写真24	第17次調査検出遺構	316		(5C中頃) の顕微鏡組織	339
写真25	第17次調査出土遺物	317	Photo2	南小泉遺跡出土鉄滓 (MSB-11)	
写真26	第17次調査出土遺物	318		の特性X線像	340

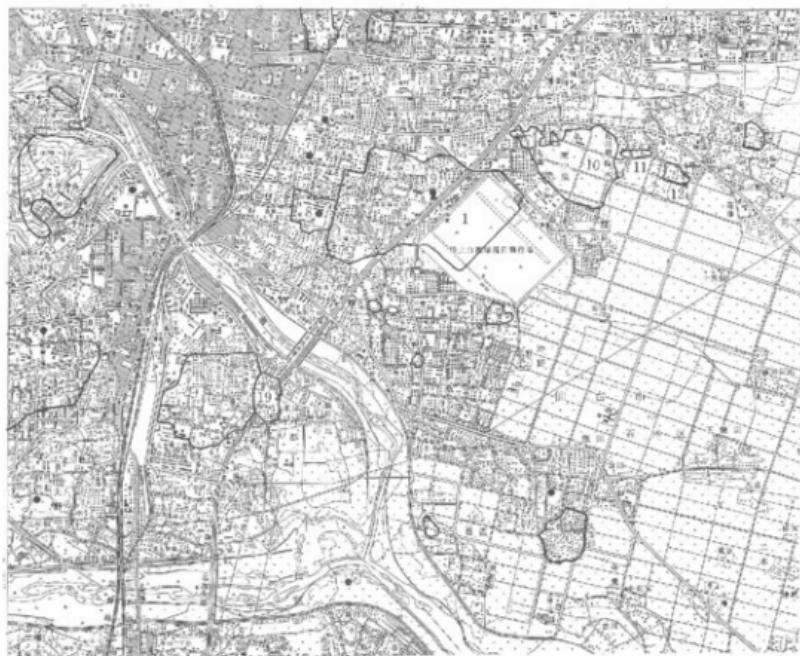
第1章 遺跡概要

1. 位置と環境

南小泉遺跡はJR仙台駅の南東約3.5kmに位置し、仙台市若林区南小泉・遠見塚・古城・霞目地内に属し、東西約1.5km、南東約1.2kmの範囲が指定を受けている。将来は、さらに西側へ拡大されるものと予想される。仙台市東部には沖積平野が広がり、「宮城野海岸平野」と呼ばれている注。遺跡はこの平野奥部の自然堤防上に立置している。標高は20m未満であるが、本遺跡ではおよそ7~11m代である。遺跡の西方には台地(段丘)と低地の地形境界がみられ、この境界は「長町一利府線」と呼ばれる断層で、その主断層は沖積層下に伏在しているといわれている(1986:北村・他)。平野はこのラインの東側に展開する。また、第四紀の地質層序は荒浜層・霞ノ目層・福田町層・岩切層となっており注、本遺跡は平野最奥部の最上位を占める霞ノ目層にのっている。この層は氾濫原の堆積物で、礫混り粗粒砂層・ローム層から成っていると言われ、遺跡のいわゆる「地山層」である。

本遺跡は弥生・古墳時代の遺跡として著名であり、その存在は戦前より知られていた。昭和14・15年の霞ノ日飛行場の拡張工事の際に多くの遺構・遺物が発見され研究者の注目される遺跡となった(1941:伊東信雄)。この時が、県内初の竪穴住居跡の発見であったという。また、伊藤信雄によれば、工事以前に松本源吉氏によって注意されていたという。注意されるようになったのはおそらく、南小泉地内では昭和11年頃より畠地の天地返しが行われるようになつたと言われ、これ以後のことと予想される。仙台市教育委員会による昭和53年度範囲確認調査によって、遺跡の範囲がほぼ確定し、飛行場の西側にも拡大されることが明らかになった。以後、継続的に調査が行われるようになり、弥生時代の包含層・古墳時代中期~後期・奈良~平安時代・中世・近世の遺構群が発見・調査されるようになり、現在に至っている。

さて、本遺跡の所在する広瀬川左岸には数多くの遺跡が存在する。時代別に概観すると、旧石器時代の遺跡はないが、続く縄文時代には今泉遺跡から後期前葉の土器が出土している。また、本遺跡でも今回報告する第17次調査地点で、中期末~後期初頭の土器が発見された。弥生時代には今泉・藤田新田・中在家南の各遺跡が知られ、特に中在家南遺跡では、この時代の墓壙や多数の木製品が発見され、注目されている。古墳時代には、本遺跡を除くと集落跡はほとんど知られていない。僅かに砂押I遺跡・今泉遺跡などに可能性がある。中在家南遺跡では、前時代に引き続きこの時代の木製品も多数出土している。弥生~古墳時代に木製農工具が盛んに製作・使用されていたことを知ることができる。左岸には幾つかの古墳が知られているが、このうち、最古・最大のものは、本遺跡内にある遠見塚古墳である。二段築成で主軸約110mの規模をもち、2基の粘土構が確認されている。しかし、この古墳の製作集団(集落)は判明し



No	遺跡名	立地	時	期	No	遺跡名	立地	時	期
1	南小泉遺跡	沖積地	編文～近世		11	中在家南遺跡	沖積地	弥生・古墳・平安～近世	
2	国分移館跡	丘陵	平安末？		12	長喜城跡	沖積地	中世	
3	陸奥國分寺跡	沖積地	奈良・平安・近世		13	荒井廻跡	沖積地	中世	
4	陸奥國分尼守跡	沖積地	奈良・平安・中世		14	藤田新田滅跡	沖積地	弥生・古墳	
5	茂ヶ崎城跡	丘陵	南北朝～室町		15	妙押I遺跡	沖積地	古墳～平安	
6	法領堺古墳	沖積地	古墳（後期）（円墳）		16	妙押II遺跡	沖積地	古墳～平安	
7	新堀古墳	沖積地	古墳（円墳）		17	神浦遺跡	沖積地	弥生～平安	
8	若林城跡	沖積地	古墳・中世・近世（円墳）		18	神野城跡	沖積地	中世	
9	遠見堀古墳	沖積地	古墳（前方後円墳）		19	北日城跡	沖積地	中世・近世	
10	仙台東郊条里跡	沖積地	奈良・平安		20	今泉遺跡	沖積地	編文～近世	

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (国土地理院発行 1:25000「仙台南東部」)

ていない。また、本遺跡の西側には猫塚・若林城跡内・法領塚の各古墳が知られ、若林城跡内のものは埴輪を伴なう円墳で、5世紀後半頃と考えられている。法領塚古墳は後期に属する横穴式石室をもつ円墳で、7世紀初頭前後と考えられている。窯業関係では、本遺跡の北方約4.5kmに大蓮寺窯跡（須恵器窯）、西方約5kmには金山窯（須恵器窯）・富沢窯（埴輪窯）があり、5世紀代の所産である。また、今回報告する16次調査において5世紀代の鉄滓が出土しており、鉄器生産が行われていたことを知ることができる。

奈良時代には、本遺跡の北方に陸奥国分寺・同尼寺が建立される。だが、周辺には集落跡確認されておらず、本遺跡でも僅かに住居跡1軒と土坑が検出されているにすぎない。

平安時代には、本遺跡内にほぼ9世紀代を中心とする集落が出現する。周辺には、砂押I・II遺跡、神棚遺跡、中在家遺跡など奈良～平安時代と見られている遺跡が散在するが、詳細は不明である。また、本遺跡の東側には奈良～平安時代の条里跡があり、その一部は東郊条理として登録されている。

中世は現状では12世紀以後と理解しているが、平安時代末期の例は今泉遺跡と今回報告する17次調査地点に限られる。鎌倉時代以後は遺跡数が増加する。本遺跡で遺構の増加に呼応するように、今泉遺跡、沖野城、長喜城、荒井館、若林城など沖積地の城館、段丘上の国分寺跡、丘陵上の茂ヶ崎城が点在する。また、陸奥国分尼寺跡では中世陶器が発見されている。

近世の開幕は、県北の岩出山城に伊達政宗が入った天正19年が目安となり、その後、広瀬川右岸の北日城にも一時陣所を置いた時であろう。また、その確立は、仙台城造営を開始した慶長5年以後である。陸奥国分寺跡には、中世以後薬師堂が建てられていたが、慶長10～12年に藩主伊達政宗によって復興され、多くの寺領が寄進されている。復興後の薬師堂は、国の重要文化財に指定されている。政宗晩年の寛永4年には、国分氏の居城と言われた城跡を若林城として改築し、その周辺には小規模な城下町が形成された。南小泉遺跡の西半部では、17世紀前半の遺構群が発見されるようになり、城下町と重複していると考えられる。城下町は、若林城が撤去（寛永16年）される以前の寛永14・15年頃には廃止されたとみられている。

2. 調査の方法と要項

第16～18次調査は、宅地開発に関わるもので、現状は第16・18次は荒地、17次は畠地となっていた。調査は道路予定地部分を主に対象としたが、開発予定地全域に5mメッシュを組み、南北にアルファベット東西に数字を付し、グリッドの南西ポイントを基準（グリッド名）とした。また、各次の調査とも便宜的に大区画名を使用した。調査では、第16次調査時の道路追加変更、梅雨期間の長期化、第16・17次の予想以上の遺構の検出等で、調査期間の延期を余儀された。以下に調査要項を示す。

(調査要項)

遺跡名：南小泉遺跡 (C-102)

所在地：第16次調査 仙台市遠見塚一丁目18番地 (若林区)

：第17次調査 ノ 遠見塚一丁目253-1番地 (ノ)

：第18次調査 ノ 遠見塚一丁目237-4番地 (ノ)

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会文化財調査係

担当職員：佐藤 洋・工藤信一郎・長島栄一

調査期間：第16次調査 昭和63年4月13日～8月26日

：第17次調査 昭和63年7月14日～12月1日

：第18次調査 昭和63年10月18日～平成元年1月10日

整理期間：平成元年1月17日～平成2年3月31日

調査対象面積：第16次調査 約7,017m² 調査面積：第16次調査 約835m²

：第17次調査 約3,741m² : 第17次調査 約867m²

：第18次調査 約3,910m² : 第18次調査 約1,116m²

調査参加者 (第16～18次) 五十音順

芦野徳松・芦野ヒデ子・安斎直子・岩間キノエ (第16次)・大槻明美・小野辰夫・小畠勝子・柿沼幸子 (第16次)・勝又洋 (第18次)・金山幾代・兼子ミヨ子・菅野正道・齊藤紀子・篠川光夫・佐藤愛子・佐藤久栄・佐藤均 (第18次)・佐藤浩道 (第18次)・佐藤よし子・庄子信哉 (第18次)・鈴木正道 (第18次)・田中さと子・田中スエ・鳥羽きみえ・針生ゑなよ・深瀬嶺子・峯岸安好 (第17・18次)・森ミヨノ・山浦文彦 (第18次)・山田太 (第18次)・吉田アキヨ (第17・18次)・渡辺久幸 (第18次)・渡辺みつゑ・渡辺陽子 (第16次) 第16次・24名、第17次・23名、第18次・31名

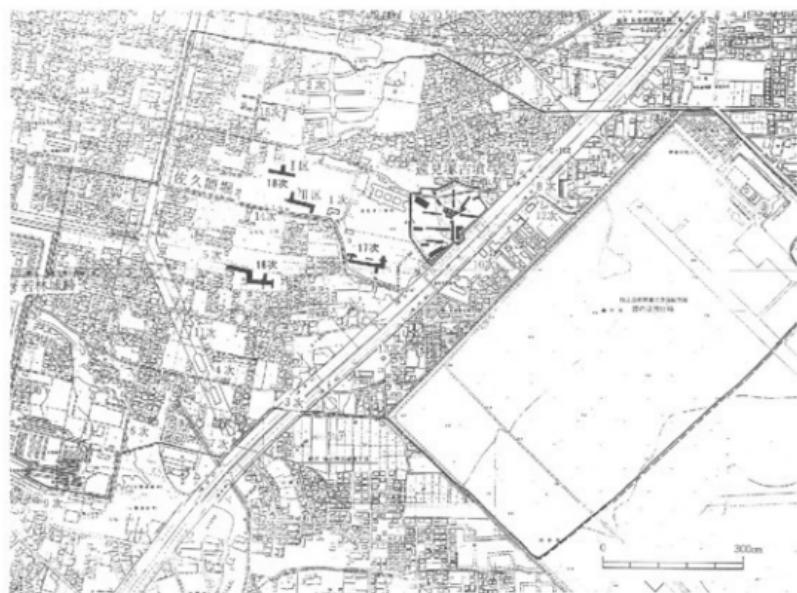
整理参加者 (第16～18次) 五十音順

相沢義徳・大槻明美・大山のり子・小佐野章子・柿沼幸子・金山幾代・菅野正道・葉原皎子・齊藤彰裕・佐藤三枝子・佐藤久栄・庄子錦一郎・菅井民子・菅谷裕子・曾根ちか子・高橋栄一・玉田喜代・外川みづ子・芳賀節子・原田由美子・深瀬嶺子・福士修司・増田瑞枝・森みほ子・谷津和広・吉田りつ子・米倉節子・渡辺好恵 (28名)

調査協力 第16次調査：仙台土地開発株式会社

第17次調査：菅原輝男・株式会社丸正吉田店

第18次調査：株式会社大東・仙台土地開発株式会社・協進開発株式会社



第2図 南小泉遺跡次数別調査区位置図



第16次調査外堀精査作業風景

第2章 調査の成果

第1節 第16次調査

1. 調査に至る経緯

南小泉遺跡内の宅地開発予定地について、昭和62年11月頃より仙台土地開発株式会社と事前協議を行い、その後、昭和62年12月14日付で発掘届が提出された。計画では盛土工法となつておらず、調査は道路部分を対象とし、必要に応じて拡張することとした。昭和63年に入り設計変更の申し入れがあり、同年3月23日に受理した。調査は、昭和63年4月より約3ヶ月間の予定で開始した。

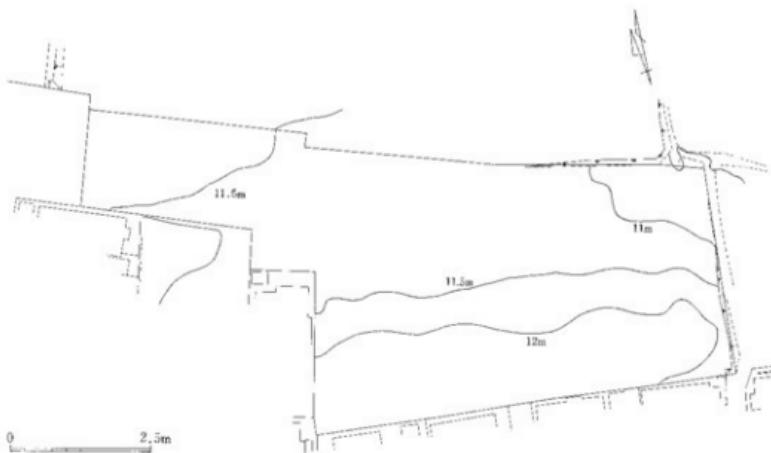
2. 調査の経過

調査は、まず道路予定地部分の表土をバックホーで除去し、以後人力による調査を行った。しかし、設計変更に伴なう道路予定面積の増加や例年ない梅雨の長雨、そして、調査前には予想できなかつた、大規模な中世城館の存在などで、調査期間の延期を余儀なくされた。城館の外堀は幅約15m、深さ2m前後と大規模なもので、その南側では土塁の一部が残存していた。一方では、戦前から行われていた畠地の天地返しが著しく、その中には多量の遺物が混在していた。特に、東側の土塁が想定される地区で際立っていた。さらに下層の調査では、古墳時代の住居跡や工房跡あるいは祭祀関連とみられる遺物群などが検出された。調査に約5ヶ月を要したが、多大な成果を上げることができた。なお、調査終了後の工事に際し、数条の溝跡を確認した。

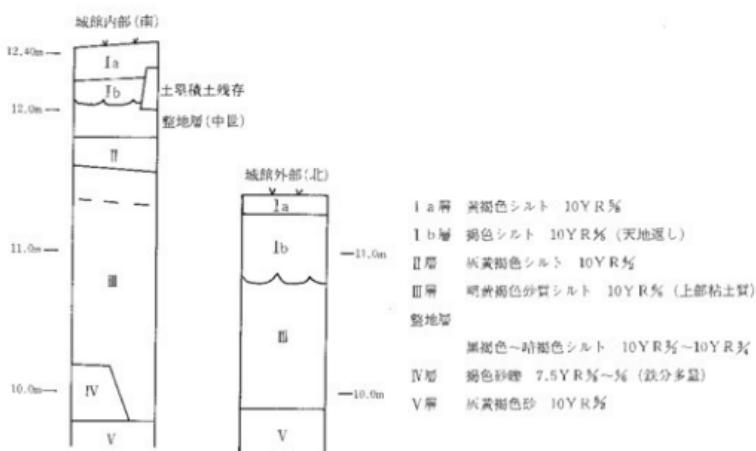
3. 基本層位

基本層位は5層に大別される(第4図)。I層は耕作土であるが、3層に細分される。Ia層は最近のものだが、Ib層は昭和10年代より行われた天地返しにより形成されたものである。Ib層を掘り込んだら攢乱坑より、電柱に使用する碍子が出土し、「1947」銘が記載されていた。Ic層は堀跡(SD01)部分にみられる土層で、多量の礫や遺物が出土する。遺物の中で最新のものは、明治～大正頃の陶磁器である。地元の古者の話では、戦後まもない頃まで堀跡部分は凹地として残っており、水が溜まりやすい状況であったという。したがって、礫や遺物は耕作に伴つて投棄されたものと考えられる。II層は暗褐色に近い灰黄褐色シルトであるが、土塁部分の下部に限つて存在している。層中から弥生～古墳時代の遺物が検出されている。城館成立以前の旧表土と理解される。層厚は20cm前後である。II層上には、中世の土塁積土や整地層の堆積が認められる部分もある。III層は明黄褐色砂質シルト層で、層厚は1.5～1.8mである。無遺物層となる。攢乱を受けない部分では、上部が粘土質となっている。IV層は褐色砂礫層で、鉄分を多量に含んでいる。層厚は、最大約40cmである。調査区北半では確認できない。V層は灰黄褐色砂である。層厚は不明で、無遺物層である。

III層以下が、霞ノ目層に相当するものと考えられ、特に、IV・V層は氾濫原の堆積物と思わ



第3図 調査地点地形図



第4図 基本層位

れる。

4. 検出遺構と出土遺物

(1) 古墳時代（第5図）

古墳時代に属する遺構は、住居跡10軒・土坑跡7基・溝跡1条を検出した。なお、SI04は精査開始後住居跡ではなく、土坑跡(SK12)であることが判明したため欠番とした。また、VII区北部で調査終了間際のため押しで、住居跡の床面・土器の一部を検出したが、精査は断念した(SI11)。SD14も後にSI09の壁溝と判明したことにより、欠番とした。

住居跡(SI)

SI01（第6～8図）

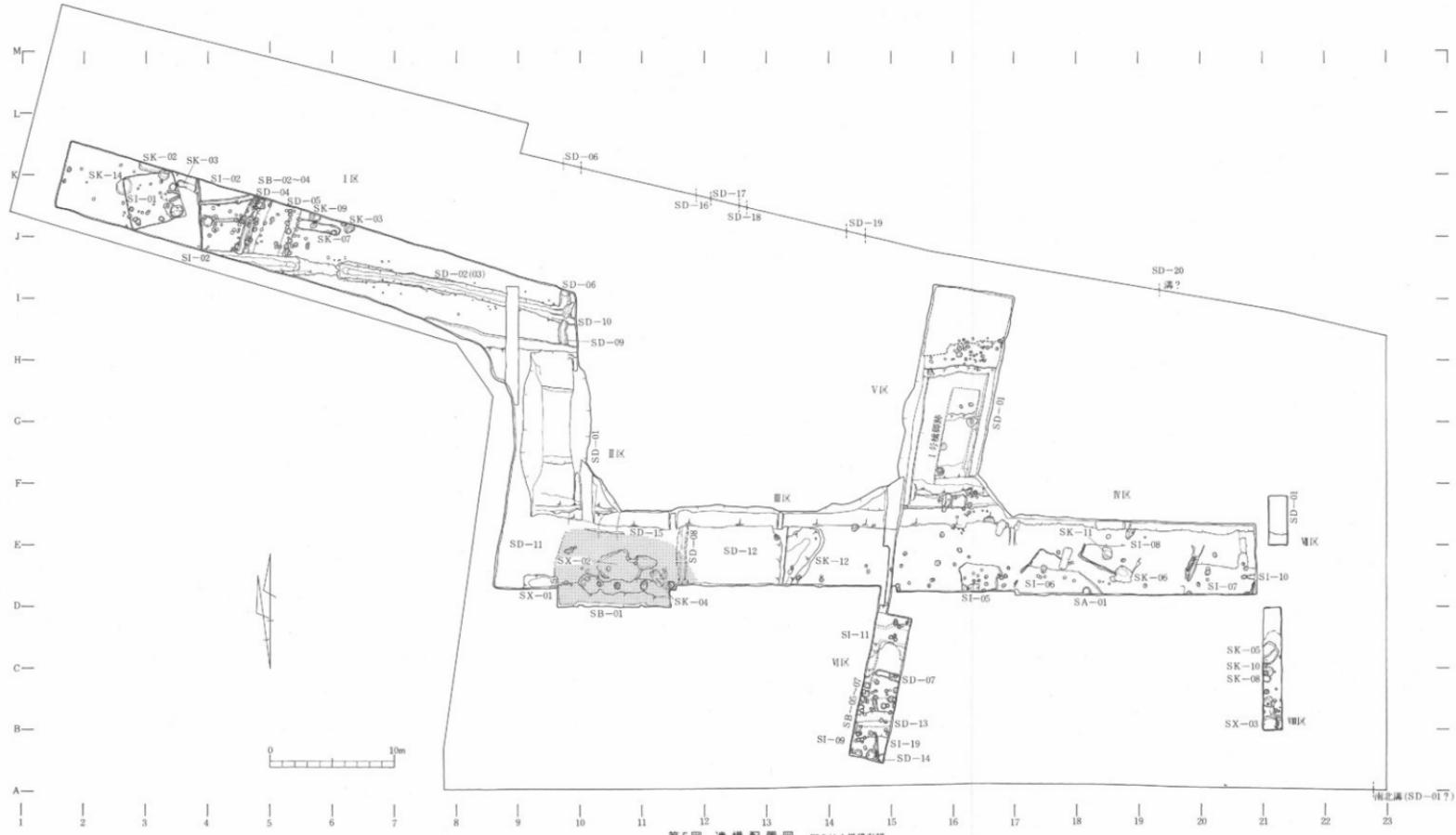
西端部J-3区に位置し、SK02に切られ、SK14を切る。規模は4.4×3.76mで、不整の正方形プランである。壁高は4～9cmで、床面は平坦である。この住居跡は火災により消失したもので、炭化材・焼土が残存していた。材はその配置から梁・桁材相当のものと垂木材が検出された。梁・桁材の周囲には炭化材片混りの焼土が分布し、材の上部にはⅢ層起源とみられる黄褐色粘土質シルトの海屑が認められた。炭化材11点について樹種同定を依頼している。

カマドは東壁中央に位置し、残存状況は上部を天地返しによって削平され不良である。煙道は確認できなかった。カマド燃焼部より小型壺が出土しており、支脚として転用されたものであろうか。ピットは7個検出されたが、このうちP₁～P₄が柱穴である。深さはP₁ 56cm、P₂ 39cm、P₃ 44cm、P₄ 39cmである。また、土坑3基が検出され、いずれも東壁側に位置する。1号・2号が貯蔵穴と考えられ、深さはそれぞれ45cm・22cmである。3号はカマド脇に付随するもので、深さ5cmである。内部には消失以前に堆積した炭屑がみられる。1号土坑の西側には灰白色シルトの分布が認められた(周堤帶)。壁際の壁溝は検出されなかった。北西部の床面上には、二ヶ所赤色顔料の分布が確認できた。

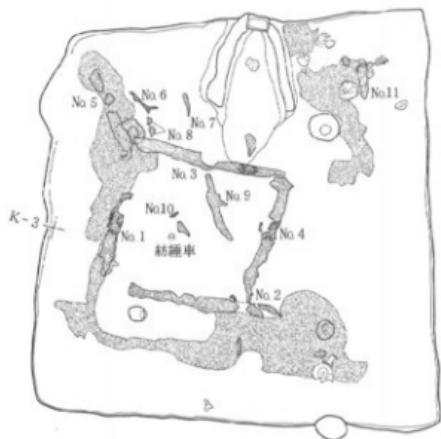
出土遺物には、土師器壺・高壺・小型壺・壺、石製模造品(円板・剣形各1点)、石製紡錘車が出土している。壺は出土していない。壺では内面黒色処理をしたもの、高壺では開脚タイプで低脚のもの、壺では弦線による山形文を描くものがあり、極めて特徴的である。これらの遺物は火災による消失を下限とする一括性の高い遺物と考えられる。他に、種子・琥珀?出土。

SI02（第9・10図）

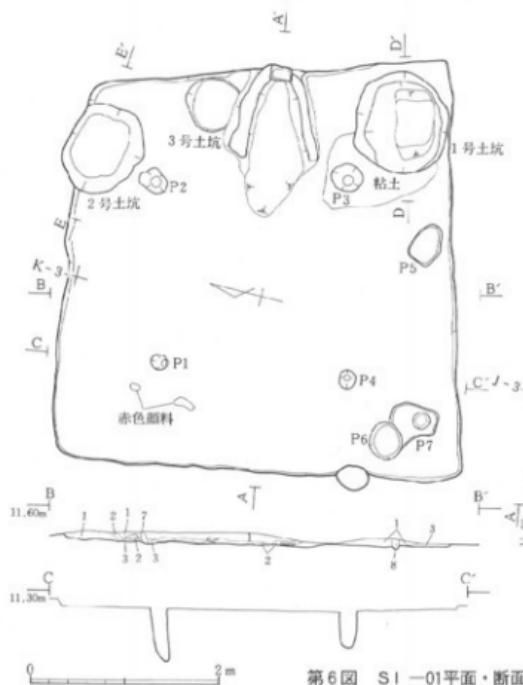
I区西部(I-4・5区付近)に位置し、SI03を切り、SD02・04・05に切られる。規模は不明であるが、北辺4.4m以上、西辺3.7m以上である。壁高は上部が天地返しを受けており、4～5cm程度である。カマドは確認できず、西壁寄りに深さ4～5cmの浅い土坑が検出され、焼土が堆積していた。この土坑は炉跡とみられる。その周辺には炭化物の分布が認められた。北側には貯蔵穴が検出され、深さ13cmを測る。内部からは土師器片・石製模造品が出土してい



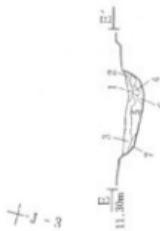
第5図 遺構配置図 線点は土塀残存部



SI-01 遺物出土状況 (番号は樹種同定用サンプル番号)



第6図 SI-01平面・断面図

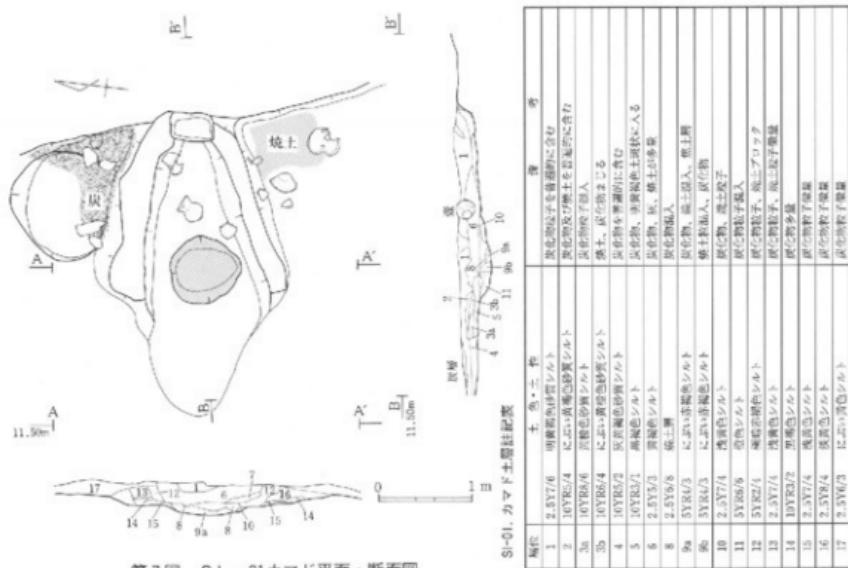


2号土坑



1号土坑

SI-01 土層記述表	
1 10YR7/8	灰化物質・普通的 赤褐色シート
2 10YR5/1	褐灰色シート
3 10YR7/6	灰褐色土
4 10YR7/6	における青緑色シート
5 10YR5/4	における黄褐色シート
6 10YR7/6	褐灰色シート
7 10YR7/6	における黄色シート
8 10YR7/6	褐褐色土シート



第7図 SI-01カマド平面・断面図

る。ピットは10個検出されたが、柱穴と確定できるものはなく、後述するSI03との帰属の不明なものもある。壁溝は2辺で確認され、全周するものと予想される。

出土遺物には、土師器壺・高壺・甕・甌(大型)、石製模造品(円板・剣形・白玉)がある。また、炉跡内・貯蔵穴より骨片が少量出土している。甕(破片)・模造品は、いずれも貯蔵穴より出土している。

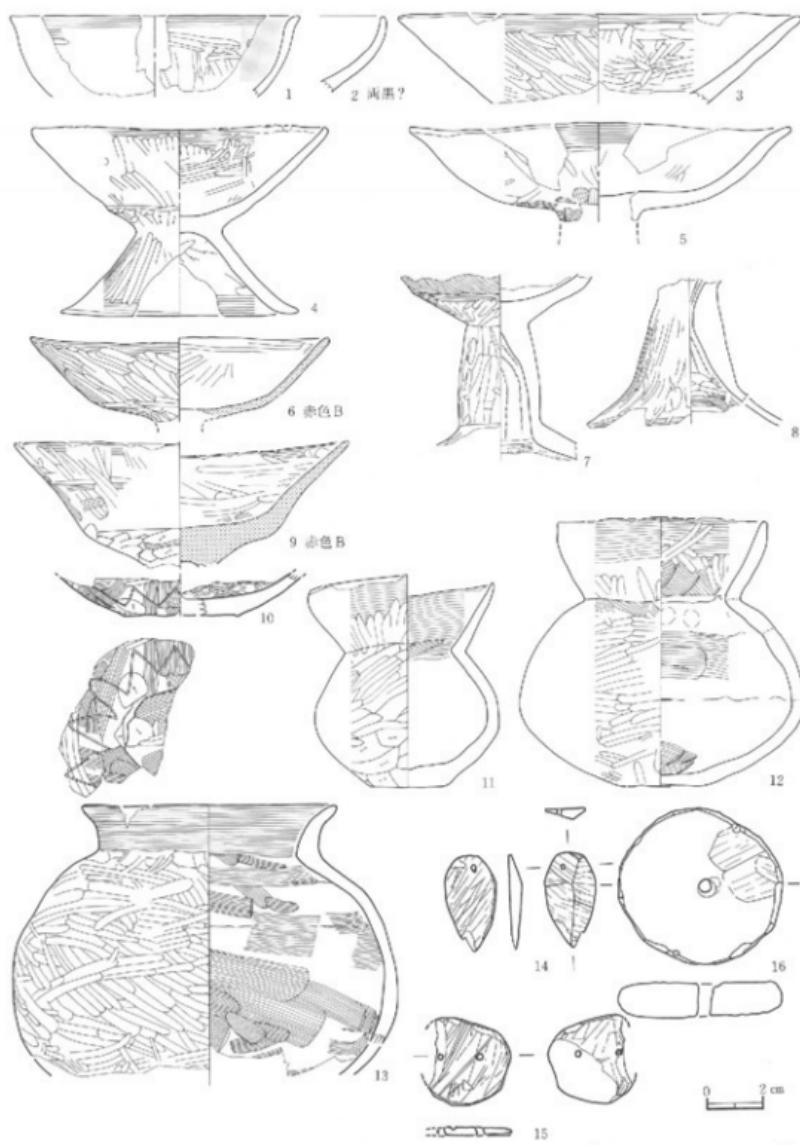
SI03(第9図)

I区西部(J-4区)に位置し、SI02、SD04・05に切られる。SK13との重複関係は不明である。規模は不明であるが、南辺4.3m以上、西辺3.5m以上を測る。カマド・炉は確認できない。壁溝は西壁・南壁で確認され、おそらく全周するであろう。なお、南壁溝はSI02の床下で検出された。壁溝中央で数個のピットが検出された。柱穴は不明である。

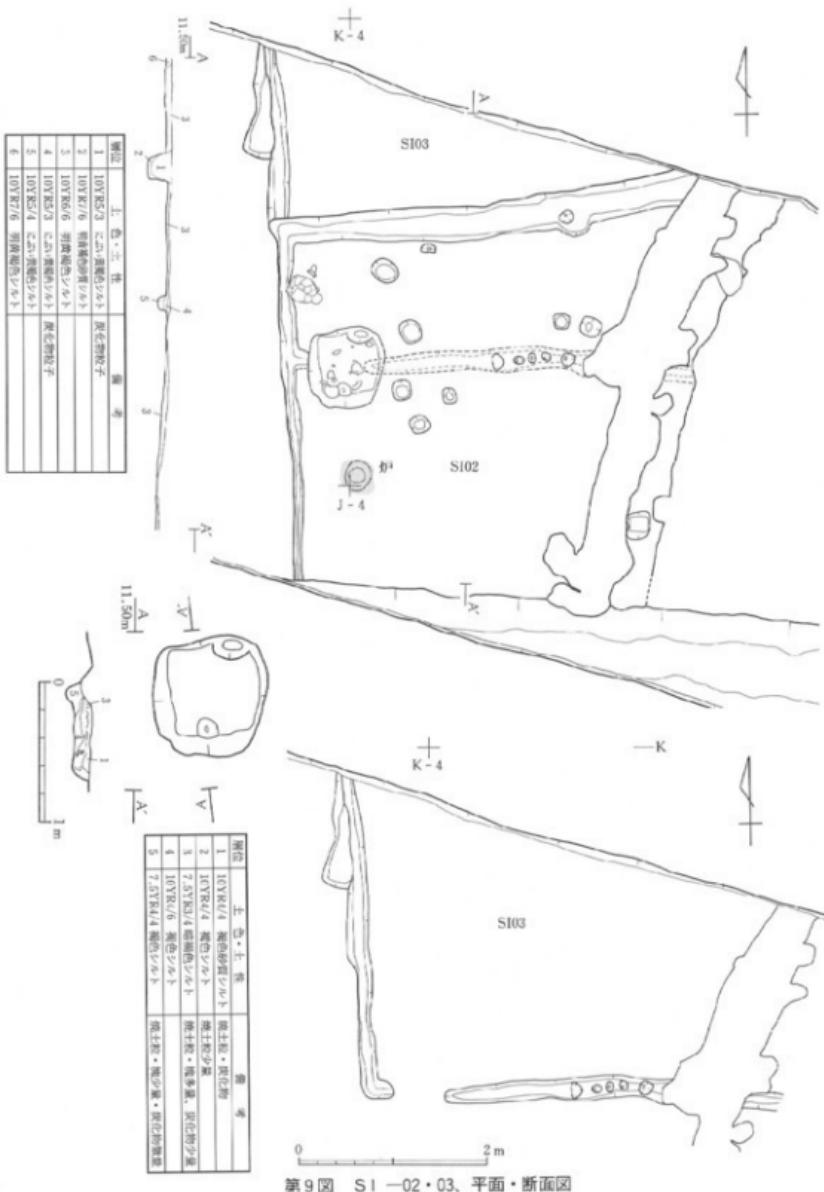
出土遺物は、床面上で少量の土師器片があるが、時期決定できるものはない。

SI05(第11~14図)

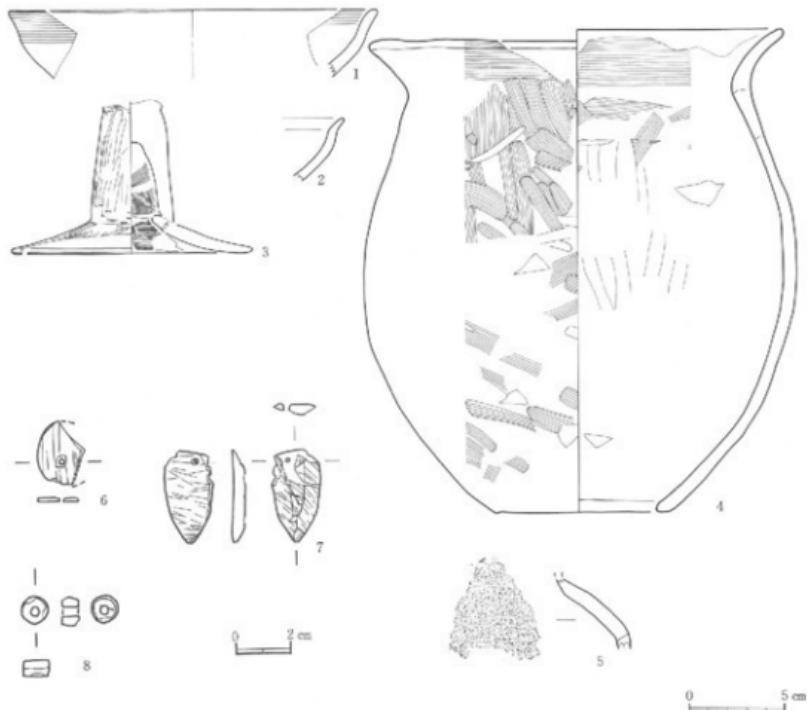
IV区西部(D-16区)に位置し、中世の柱穴と重複する。北部は、天地返しにより削平されている。規模は不明確であるが、約3.3m×2.6mと推定される。形状は長方形で、東壁が張り出している。壁高は最大15cmを測る。カマドや炉は確認できない。ピットは3個検出されたが、



第8図 S I - 01出土遺物
14~16: 1/2



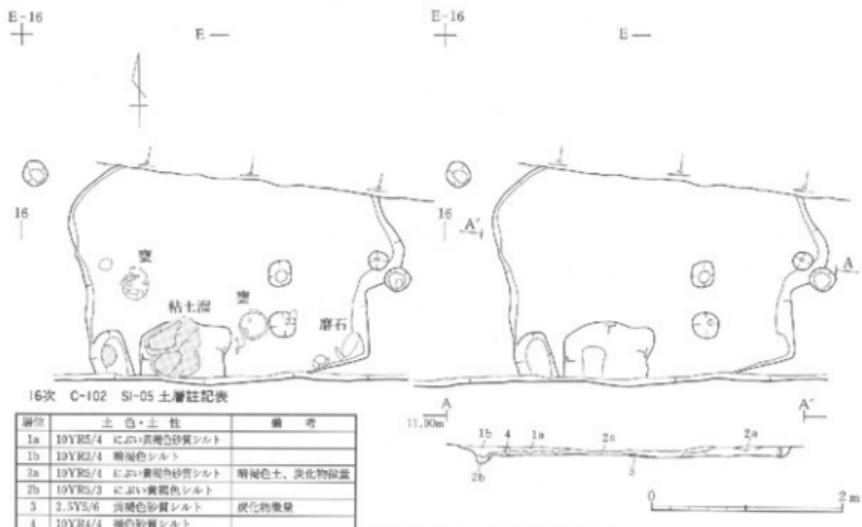
第9図 SI-02・03、平面・断面図



第10図 SI-02出土遺物 6~8:1/2

柱穴かどうか不明である。なお、Pより壊れた完形品が出土している。南西コーナーに2基の土坑を検出した。いずれも内部に粘土が堆積しており、特に、1号土坑では溢れ出る程の状況を呈し、粘土中に須恵器壺の下半部が出土している。おそらく、粘土の受皿や捏ね鉢に転用されたものであろう。壁溝はなく、東側の床面の一部に貼床が認められた。この遺構は、通常の住居跡ではなく、竪穴遺構であり工房や作業場の性格が考えられる。

出土遺物には、土師器壺・甕、須恵器壺、据え置きの磨石（擦痕あり）がある。高壺は出土していない。遺物は南半部に偏在し、特に粘土（第1土坑）の周辺より多く出土している。また、出土した粘土について、陶芸家大場拓俊氏に焼成実験していただいた。その結果、「粘土中に粒径の比較的揃った砂粒を含み、その混入量は約10%で意図的に混入したとみられる。腰のある弾力性の強い特性をもち、単身でも土器製作が可能である」との指摘をいただいた。従つ



第11図 SI-05平面・断面図 (底点は粘土)

て、この粘土は土器製作用に貯蔵されていた可能性が強い。同様の粘土は、後述する SK06 でも出土している。遺物の接合関係では、壺（第12図6）がSK12のものと接合した。

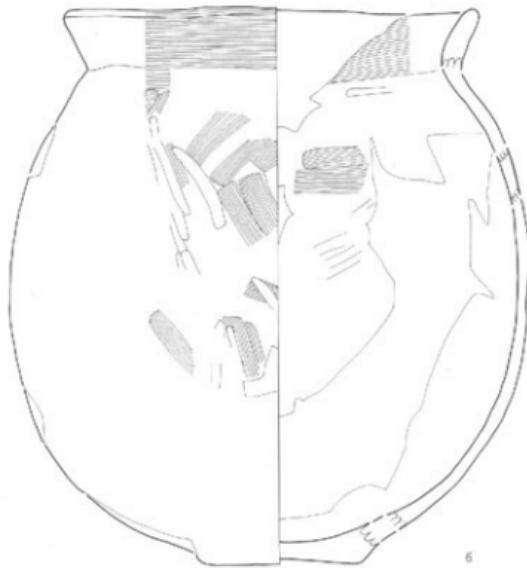
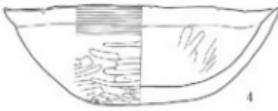
SI06（第15・16図）

IV区中央部（D-17区）に位置し、中世の柱穴と重複する。北部は、天地返しや電柱坑で搅乱を受けている。しかし、床面は失われたものの、コーナー付近のプランは確認できた。規模は不明だが、北壁6.2m以上、西壁4.2m以上を測る。第16次調査で最も規模の大きいものである。壁高は、保存の良い部分で27cmを測る。カマドや炉は確認できない。北部で柱穴1個が検出され、深さ51cmを測る。北東コーナー付近で、貯蔵穴北半部を検出した。深さは69cmである。西壁で壁溝を検出した。

出土遺物には、土師器壺・高壺・複合口縁壺・壺、須恵器壺・壺、石製模造品（3点）、刀子（2点）、フレーク、怪石がある。西壁寄りの床面と貯蔵穴の炭層から比較的多く出土している。須恵器は、埋土上部より壺2点、同下部より壺1点が出土し、いずれも破片である。

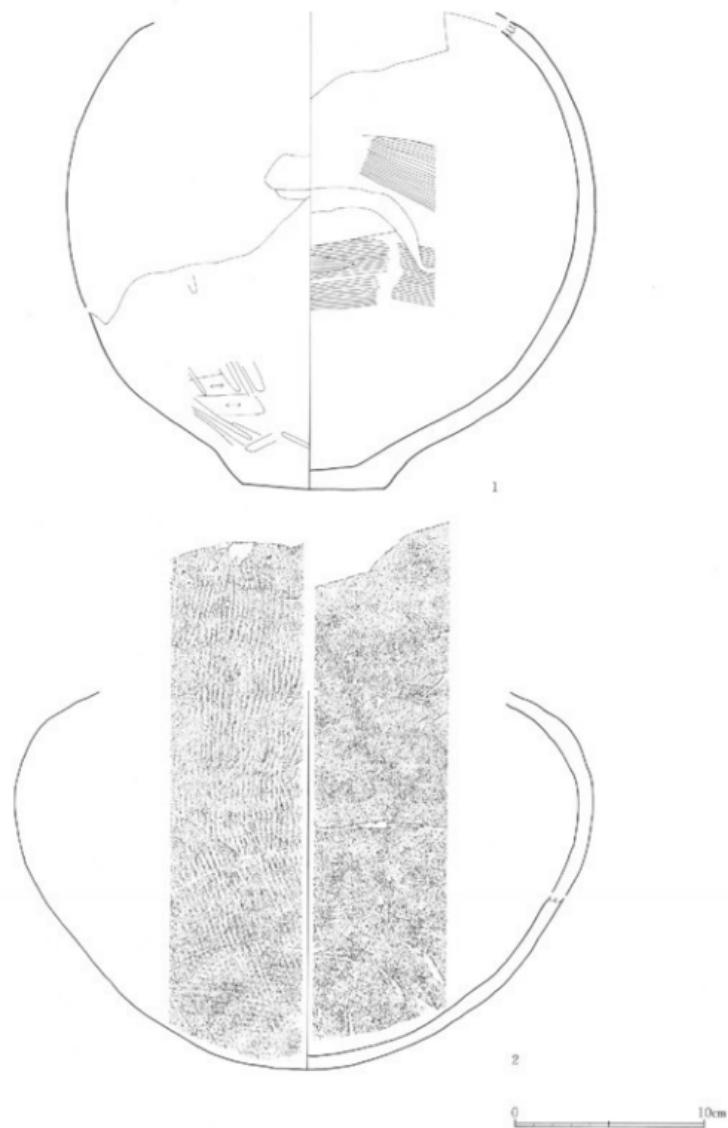
SI07（第17~19図）

IV区東端部（D-20区）に位置し、大部分を天地返しによって搅乱を受け、北部で著しい。SI10と重複するが、この部分にも天地返しが上部に及んでおり、不明確である。おそらく、SI10が新しいものと考えられる。また、中世の柱穴とも重複する。この住居跡は、炭化材や焼土が

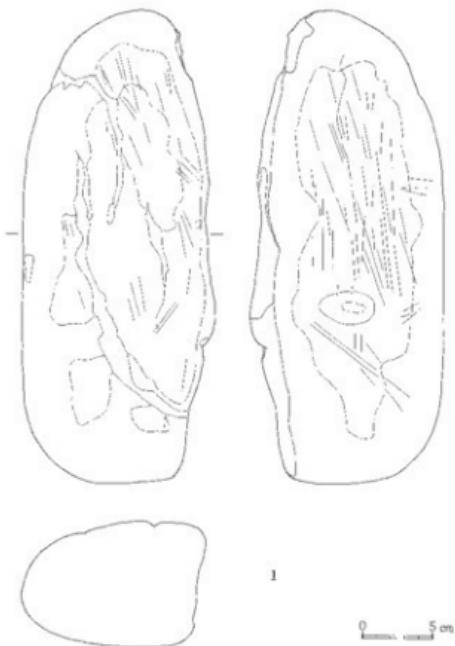


第12図 S I -05出土遺物 (1)





第13図 S1-05出土遺物 (2)



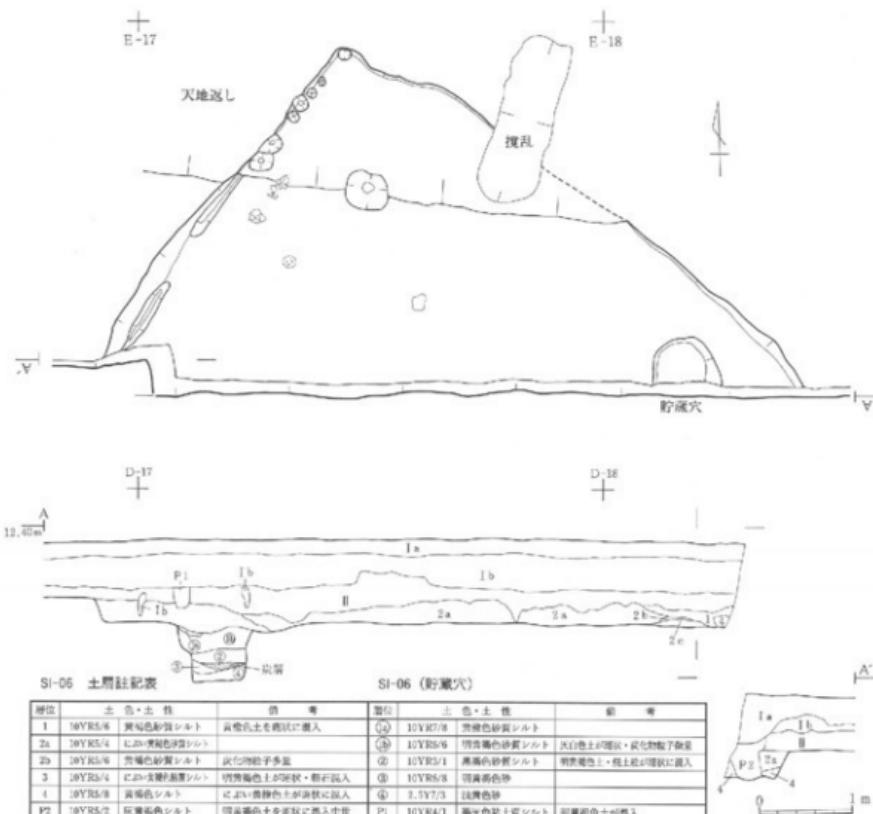
第14図 SI-05出土遺物（3）

検出されたことから焼失住居であることがわかる。炭化材2点を樹種同定分析している。規模は不明だが、東西約5.6mと推定できるし、西辺は4.2m以上とみられる。形状は方形と考えられる。壁高は、保存の良い部分で約25cmを測る。西壁寄りで、P₁とP₃の中間に火跡を検出した。ピットは4個検出したが、P₁～P₃が柱穴である。深さは、P₁ 32cm・P₂ 41cm・P₃ 51cmを測る。壁溝は東壁と西壁で検出したが、西壁側は2条認められ、内側の壁溝に焼土の流入が確認できた。内側の壁溝が新しい。また、北西コーナー付近に土坑が検出された（深さ22cm）が、重複関係は明らかではない。土坑が住居跡より古いものと思われる。床面は傾斜しており、南北で最大20cmの比高差がある。この住居跡は改築されたか、さらに古い住居跡が存在していたものと考えられる。

出土遺物には、土師器壊・壺・甕があり、赤彩のある高壊片も出土している。このうち、第19図1は、外側の古い壁溝内から出土した壊である。

SI08（第20～22図）

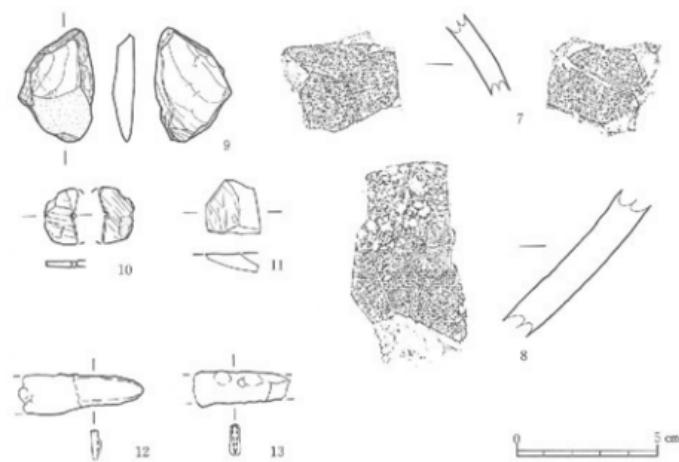
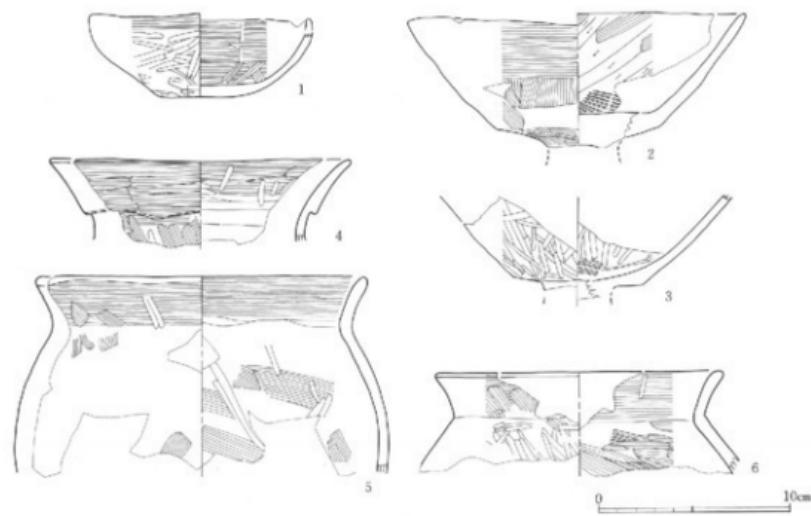
IV区中央部（D-18区）に位置し、SD01、SK06・11に切られる。また、北半部は天地返し



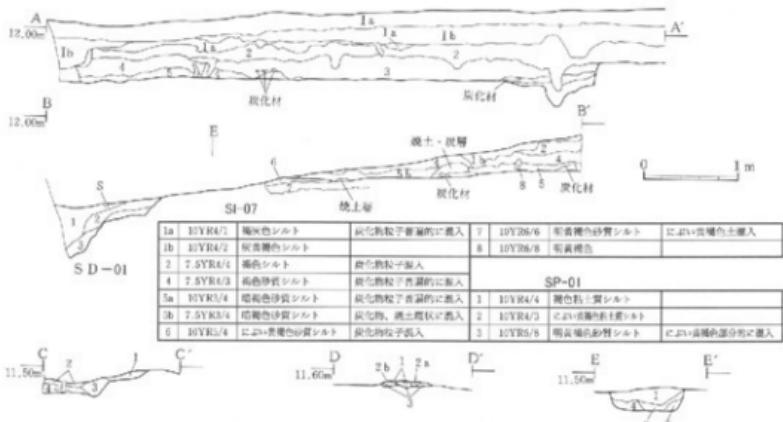
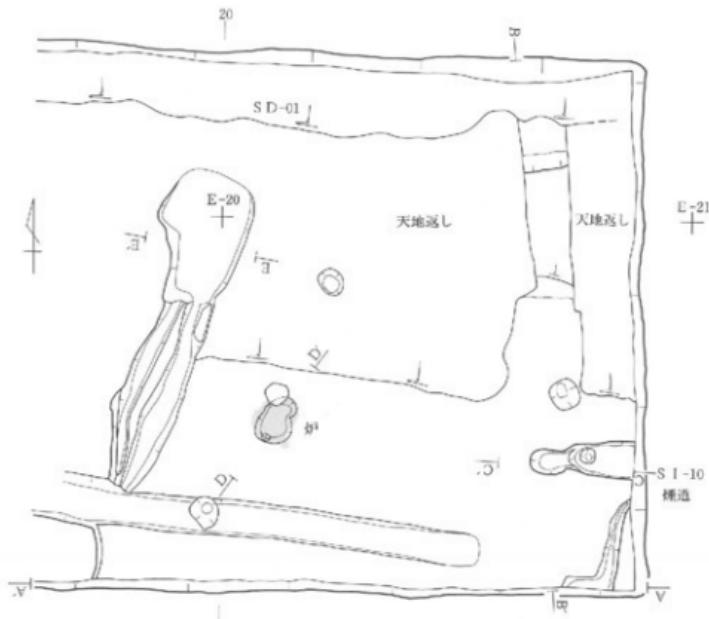
第15図 SI-06平面・断面図

により床面を失っている。規模は南壁約4.45m、東壁4m以上を測る。炉は北壁寄りで検出した。形状は不整椭円形を呈し、深さ約14cmを測る。北端部は削平されている。壁高は、最大約21cmを測る。柱穴ははっきりしないが、南東部のピットが柱穴と考えられる。ただ、深さ12cmと浅い。壁溝は、南壁と西壁で検出された。貯蔵穴の有無は不明である。

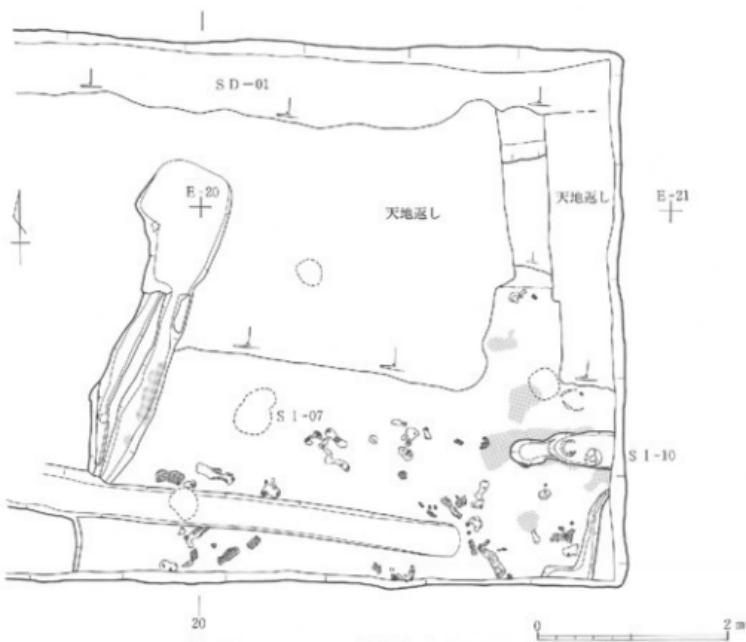
出土遺物には、土師器壺・甕、須恵器甕・甕、敲石（擦痕もみられる）、敲打痕と磨面をもつ石器、石製模造品（15点）、炭化米がある。他に弥生土器片・フレークが出土している。土師器甕の破片で、SK11と接合するものがある。床面出土の壺（第21図2）も、SI06の1層出土破片と接合している。このことは、本住居跡よりSI06が古いことを示唆するものであろう。石製



第16図 S I - 06出土遺物



第17図 S I-07・10平面・断面図



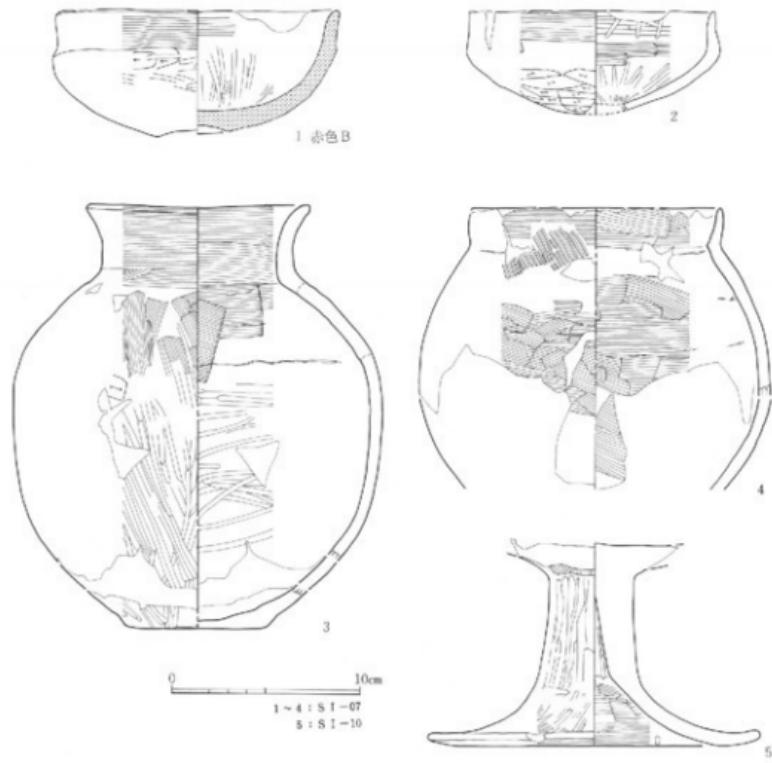
第18図 SI-07・10歳化材・焼土出土状況 (網点は焼土)

模造品は完成品の剝形が埋土中出土であるが、他はすべて床面出土である。この床面出土品をみると、荒削段階のもの・側辺部に加工を加えるもの・さらに側辺部に加工を加えて整形段階に入ったもの（未完成）・製作途中で生じたフレーク・チップによよそ分類できる。研磨段階のものはない。だが、石製模造品製作用と考えられる標石器2点のうち、1点に磨面をもつものがあり、研磨工程がなされたことは確実であろう。住居内で模造品を製作したことは明らかであるが、出土量から考えて専業工房と理解するのは難しい。須恵器はいずれも埋土中のもので、總はTK208～23頃とみられる。

SI09（第23図）

VII区南部（A・B-14区）に位置し、SD13・16・柱穴など中世遺構群に切られる。また、中世の時期に、床面付近まで削平を受けている。従って、床面及び東壁壁溝の一部を検出するに留った。規模は不明だが、東壁4.9m以上を測る。形状は方形を呈するものであろう。床面上で、ピット（深さ5cm）と土坑（深さ13.5cm）を検出した。カマド・炉は確認できない。

出土遺物は僅かで、高環脚部片などである。



第19図 S I 07・10出土遺物

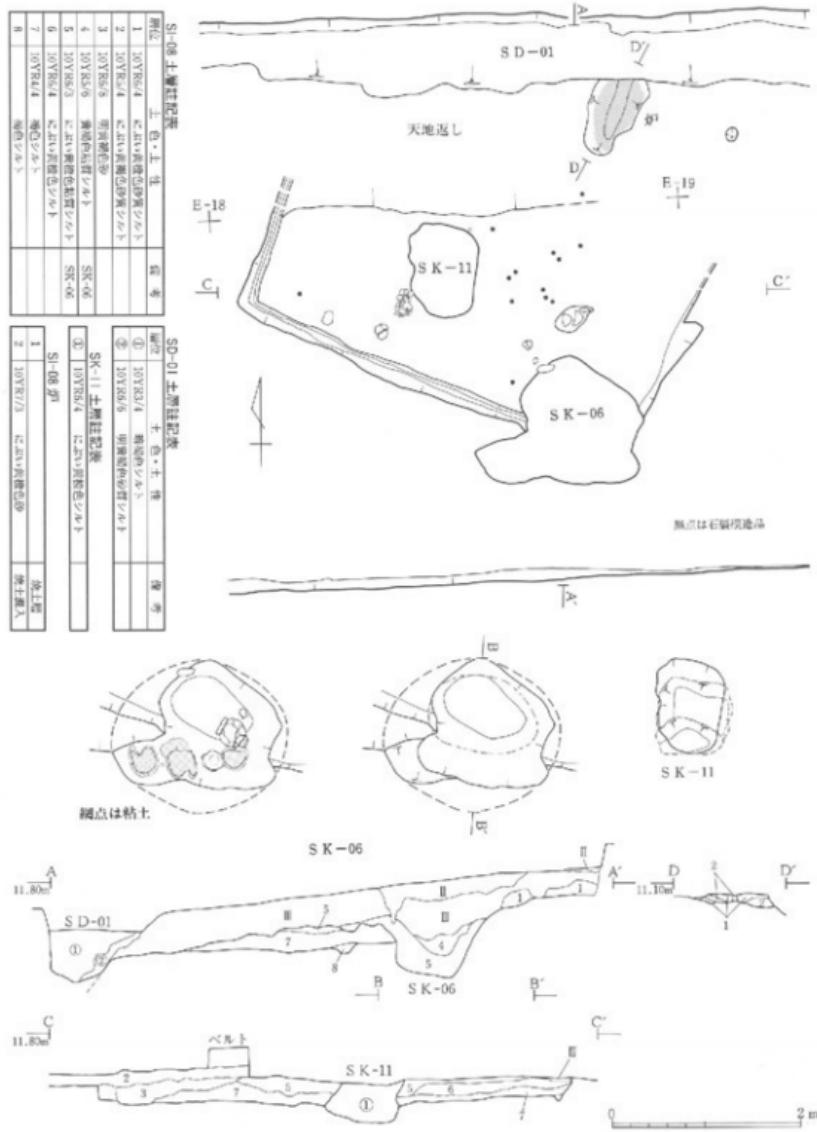
SI10 (第17~19図)

IV区東端部 (D-20区) に位置し、上部に搅乱を受け明確ではないが、SI07を切っているようだ。煙道部のみの検出で、主体は調査外 (D-21区) にある。煙道部は、長さ 1.1m・幅 0.41 m を測る。底面に段差があり、低い部分で高壙脚部が出土した (第19図5)。おそらく、支脚に転用されたものであろう。

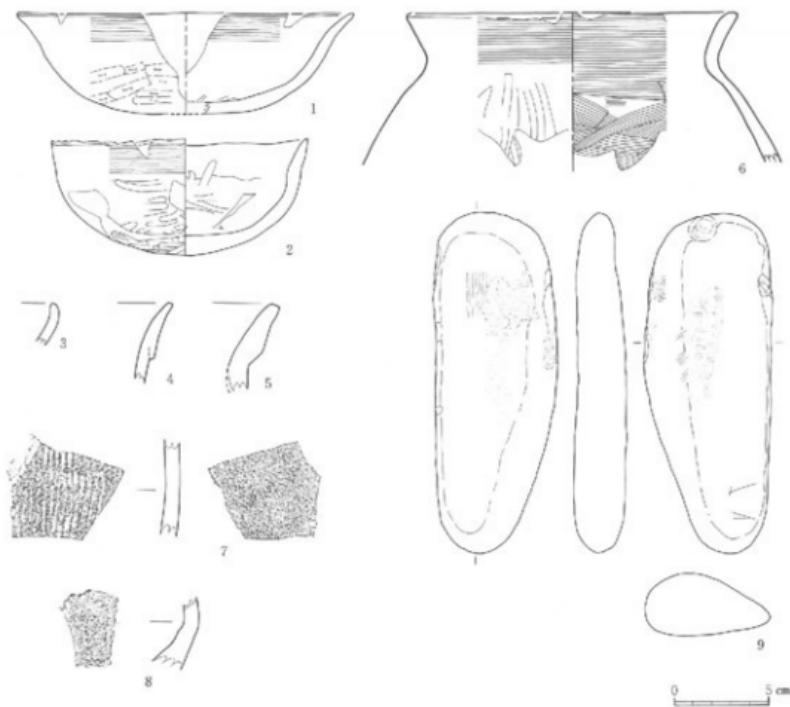
出土遺物には、前述の高壙のほかに、埋土出土の甕 (口縁部) がある。

SI11 (第57・24図)

VI区北部 (C-14・15区) に位置する。VI区の西壁に入れたサブトレンチで、住居の存在を確認したが、精査は行っていない。床面の一部と土師器や炭化材が検出された。



第20図 S1-08、SK-06・11平面・断面図



第21図 SI-06出土遺物（1）

出土遺物には、土師器高環・複合口縁壺・壺？がある。高環は3点出土したが、床面出土は1点であり、外面が赤彩された脚部片である。複合口縁壺は、口縁部に凸帯を貼付する形態のものである。

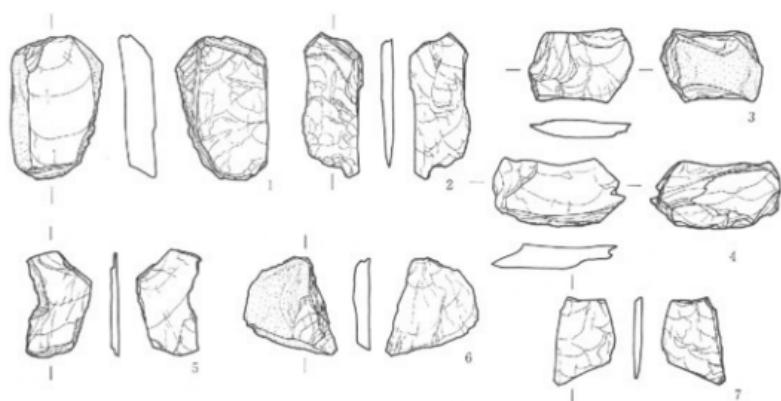
土坑跡（SK）

土坑跡は5基検出したが、この他に古墳時代の可能性のあるもの2基を含めて報告する。

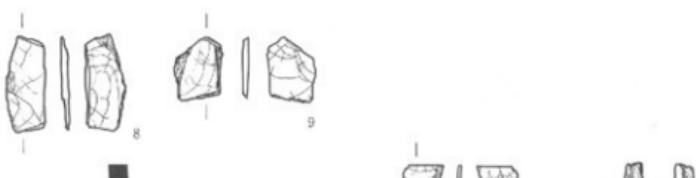
SK03（第25・26図）

I区中央部（J-6区）に位置し、他の遺構との重複はない。不整梢円形を呈し、深さ約78cmを測る。埋土中より櫛（完形品）・高環が出土している。また、西側に接して、浅いピット（深さ約13cm）が検出され、内部に粘土の貯蔵が認められた。

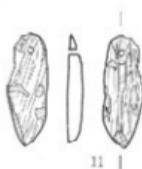
SK06（第20・26図）



剥剝・形削（側面部加工）



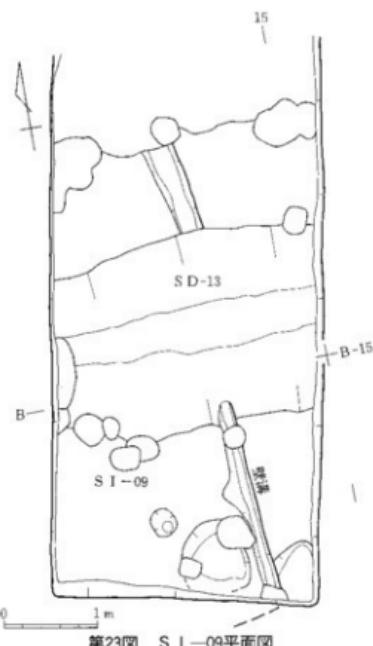
剥片・チップ



完成品



第22図 SI-08出土遺物（2）



第23図 SI-09平面図

IV区東部(D-18区)に位置し、SI08を切る。上部には天地返しにより削平を受けている。規模は、東西1.82m・南北1.4m・深さ0.97mを測るが、本来はもう少し大型であったと考えられる。形状は不整梢円形で、南壁はテラス状の軽い段をもつ。この段の部分に大きな粘土ブロックが3ヶ所検出され、その周囲にも小ブロックが認められた。

出土遺物には、土師器壺・甕、須恵器器台・甕、石製模造品(円板未完成? 1点)、弥生土器3点がある。粘土脇で甕(底部付近)、粘土直上で器台片が出土した。ほぼ完形である土師器壺・甕は埋土1層に半ば埋まるような出土状況で、上半には基本層III層起源とみられる黄褐色シルト層が堆積している(再堆積か)。なお、2つの土器内より少量の炭化米が出土した。

SK07(第27図)

I区中央部(J-6区)に位置し、SD05と重複関係にあるが、新旧不明である。上部は天地返しにより削平され、保存状況は良くない。規模は、東西3.5m以上・幅0.8m・深さ0.12mを測り、長方形を呈する。底部はほぼ平坦であり、ピットが3個検出された。中央のピットは約31cmと深く、他は深さ5~7cmである。SD02と関連する可能性があるかもしれない。

出土遺物には、土師器壺片1点とフレーク(黒曜石)1点がある。

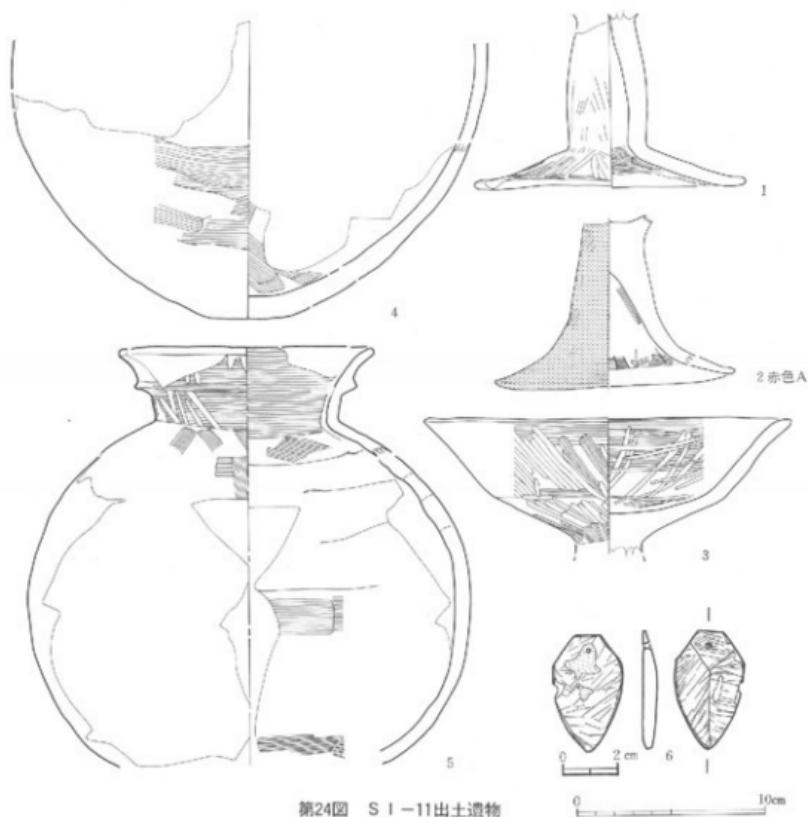
SK09(第27図)

I区中央部(J-5区)に位置し、他の遺構との重複はない。しかし、この土坑自体が二つの土坑が重複したものであることが判明した。西側をa、東側をbとして区別した。規模は2基合わせたもので、東西89cm、南北57cm以上である。深さは、aが約32cm、bが約22cmである。

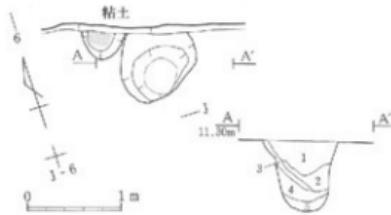
出土遺物はないが、埋土の特徴がSK03などと類似することから、古墳時代のものと理解しておきたい。

SK11(第20・26図)

IV区東部(D-18区)に位置し、SI08を切る。規模は南北約1m、東西0.8m、深さ約0.35

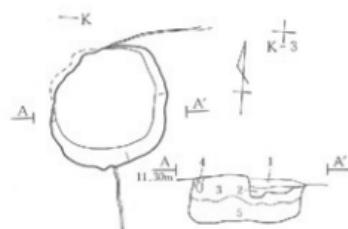


第24図 SK I-11出土遺物



SK-03 土層柱記表

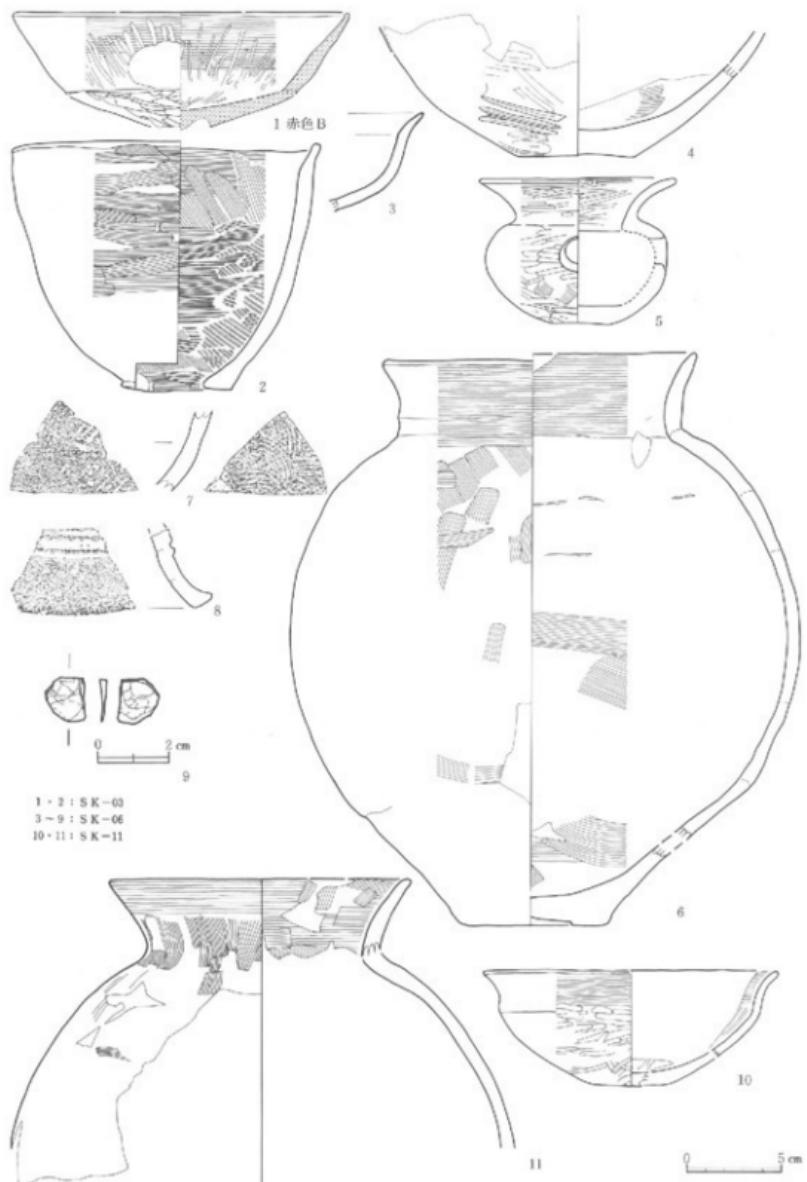
層位	土色・土性	備考
1	16YR5/8 黄褐色粘土質シルト	炭化物粒子を背景中に含む
2	16YR5/4 に赤い黄褐色シルト	炭化物粒子を背景中に含む
3	10YR5/4 に赤い黄褐色シルト	炭化物粒子を背景中に含む
4	10YR6/6 明黄色細砂質シルト	
5	10YR6/2 淡黄褐色粘土質シルト	



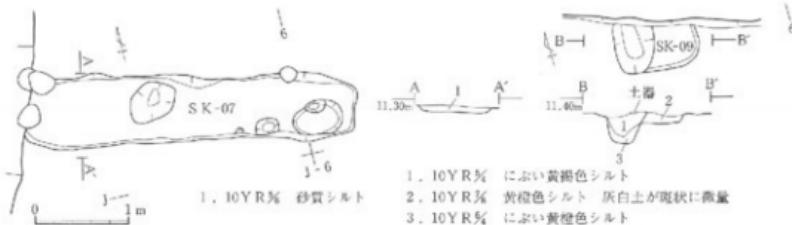
SK-14 土層柱記表

層位	土色・土性	備考
1	2.5YR7/4 淡黄色シルト	SK-01
2	2.5YR7/3 棕黄色シルト	炭化物粒子混入 SK-01
3	2.5YR7/6 明黄色細砂シルト	炭化物粒子混入 SK-14
4	10YR6/4 に赤い黄褐色シルト	炭化物粒子混入 SK-14
5	10YR7/6 明黄色シルト	炭化物粒子混入 SK-14

第25図 SK-03・14平面・断面図



第26図 SK-03・06・11出土遺物 9:1



第27図 SK-07・09平面・断面図

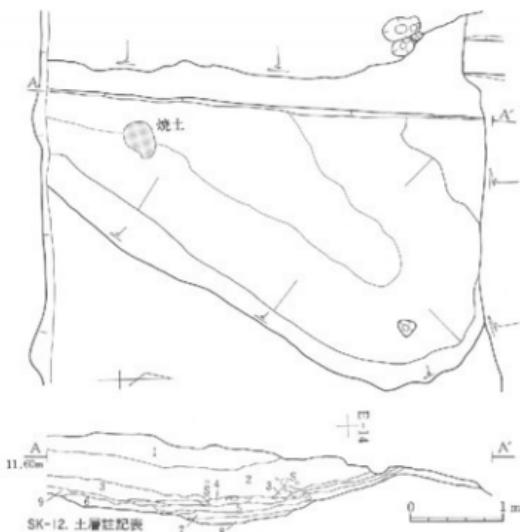
mを測る。形状は不整椭円形を呈し、底面は階段状に南側に下がる。南壁は一部オーバーハングしている。

出土遺物には土師器壺・甕がある。いずれも底面出土である。

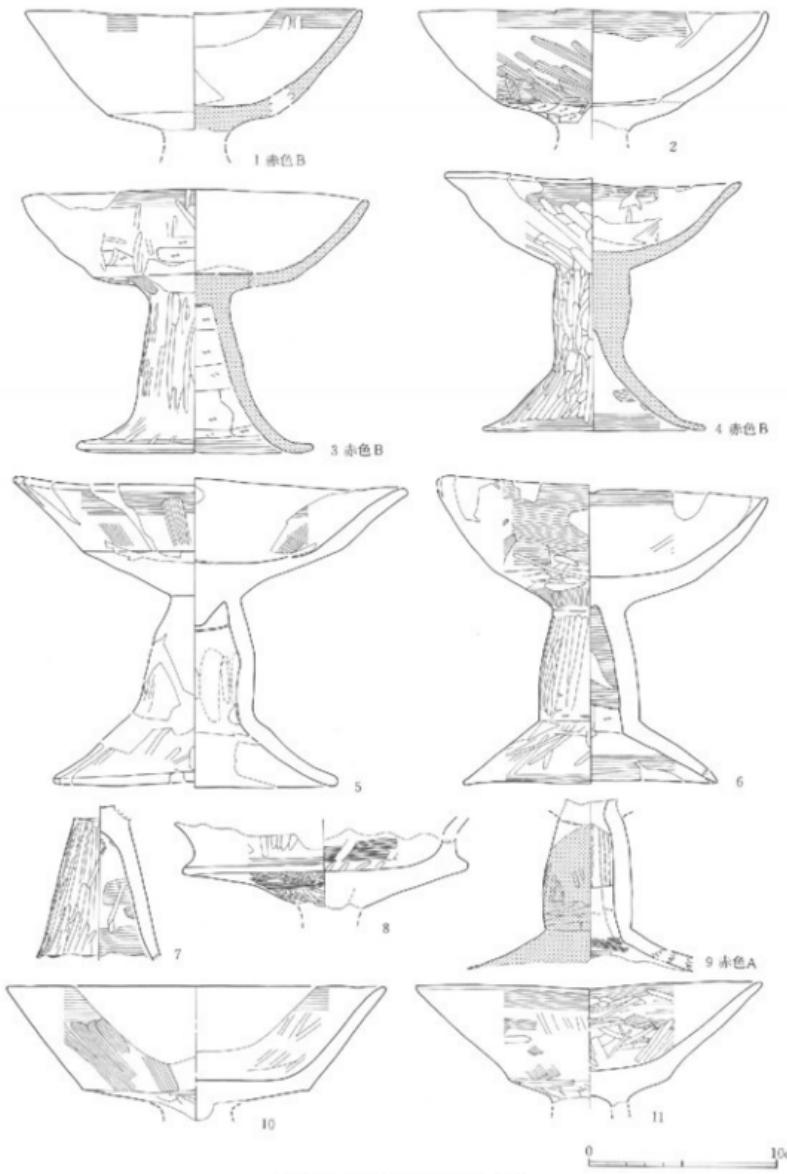
SK12 (第28~31図)

III区中央部 (D-E-13区) に位置し、SD01・SD12に切られる。上部は天地返しにより削平されている。本遺構は溝跡の可能性も残るが、土坑跡と理解しておきたい。規模は長軸で5.3m以上、短軸で2.7m以上、深さ0.79mを測る。埋土1層は、SD12掘削時の排土の可能性もある。遺物は多量に出土したが、北部の2~5層に集中する。

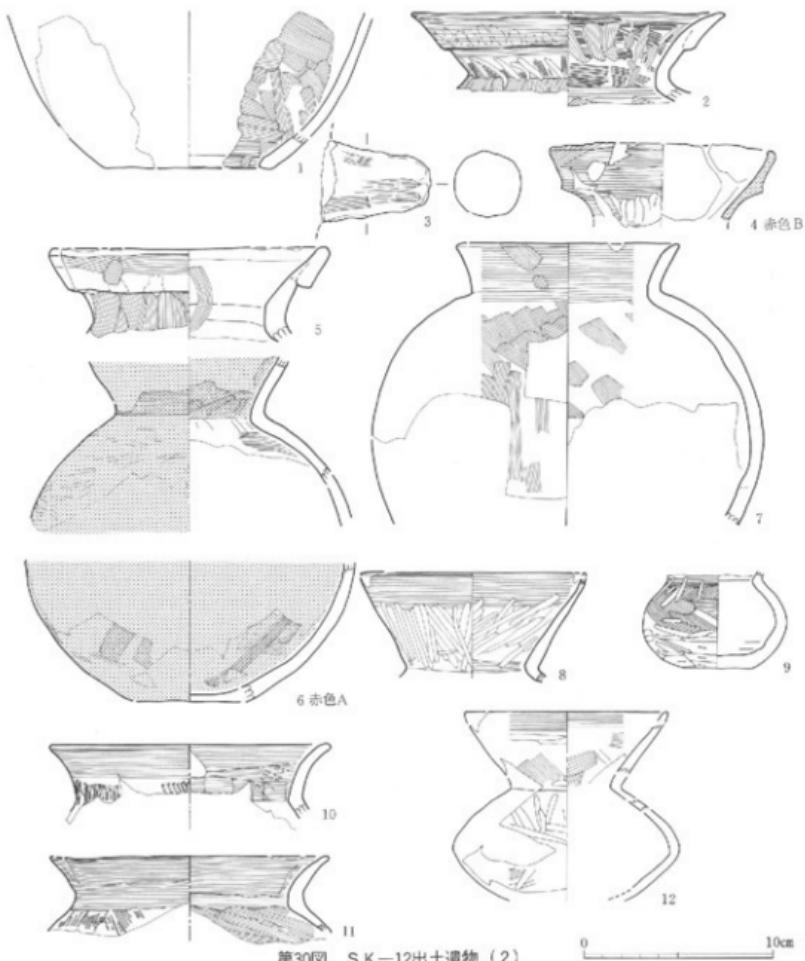
出土遺物には、土師器壺・高坏・小型壺・壺・複合口縁壺・甕・瓶・須恵器甕（体部破片4点）、石製模造品（円板2点・劍形1点・原石？2点）、有孔磁石（小型）1点、黒色蛭石（多孔質）3点、骨片・粘土ブロック・鐵滓2点がある。また、弥生土器9点、剝片4点（黒曜石2点）が出土している。破片集計を行っていないが、土師器壺・高坏・



第28図 SK-12平面・断面図

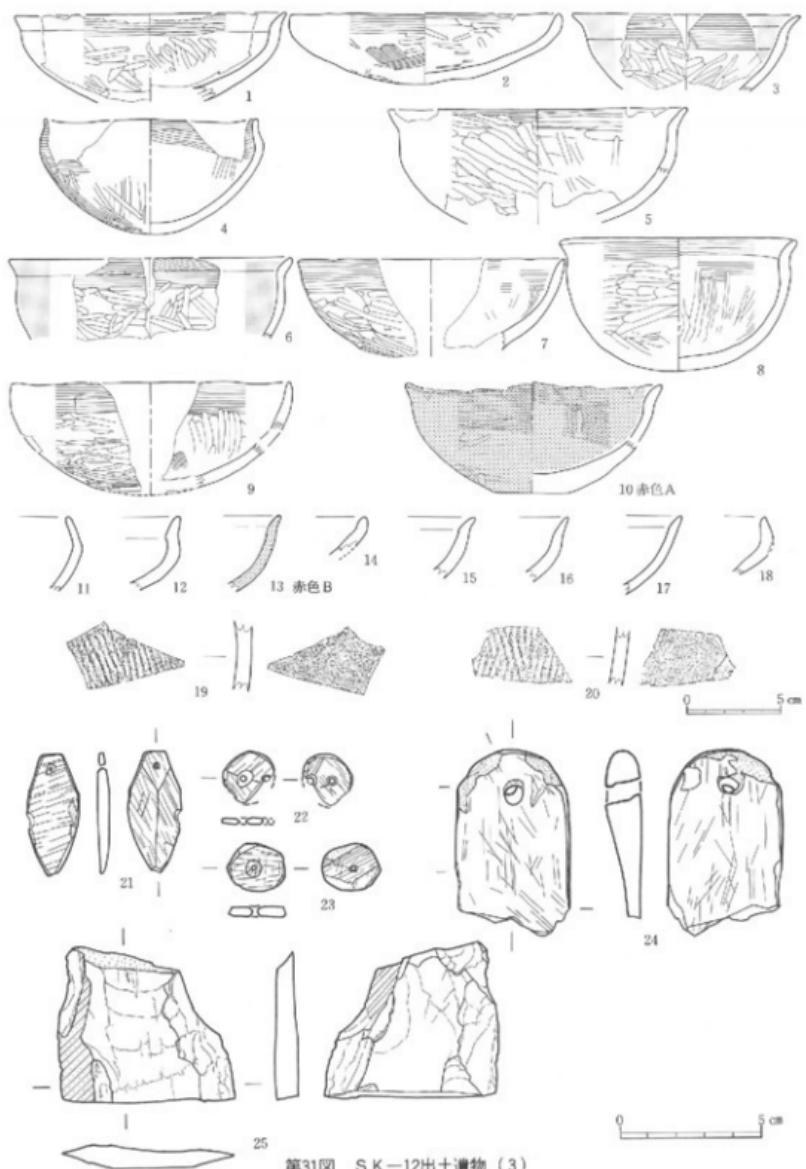


第29図 SK-12出土遺物（1）



第30図 SK-12出土遺物（2）

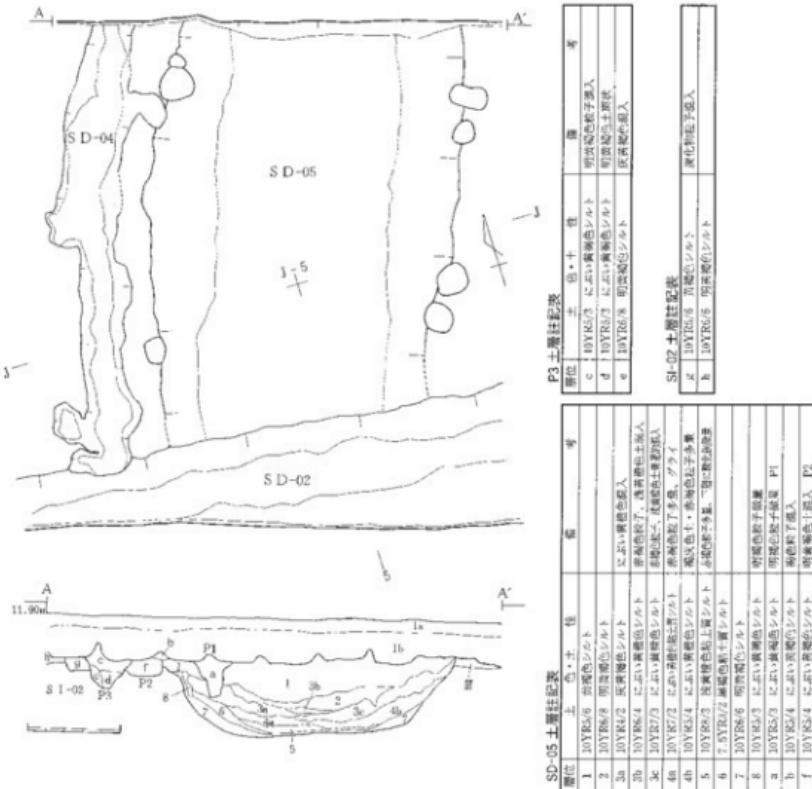
小型壺が圧倒的に多く、甕は少なく、甌は僅か2片である。壺・高壺・壺は外面を赤彩するものや高壺などで器表に限らず、胎土も赤色～橙色を呈するものが目立つ。壺には両面黒色処理をしたと思われるもの2点、高壺の脚部には、壺内底面が残存し黒色を呈しているもの(第29図7)がある。また、第29図9は高壺の壺部が接合面で剥離しているものだが、この先端には被熱の痕跡が認められる。融解した鉄の付着は認められないことから、羽口に転用されたも



第31図 SK-12出土遺物（3）

のかは不明である。最も注目したい遺物は、2層から出土した鉄滓である。この鉄滓は鍛冶滓と思われ、遺跡内で鉄器製作が行われていたことを物語るものであろう。すぐ北側の第14次調査地点でも、溝跡(SD07)より1点鍛冶滓と思われるものが出土している。出土土器は、2層+4層、4層+5層で接合関係が認められる。3層では土器出土量が少なく、他の層との接合関係は認められない。いずれにしろ、短期間のうちに廃棄され遺物群と考えられる。

これらの遺物は、出土土器の器種の偏在性や赤彩・黒色処理の土器、そして本遺跡で初めて確認した把手付壺の存在(第30図3)などから、祭祀行為が付近で行われ SK12に廃棄されたものと考えられる。祭祀行為が、鉄器製作に関連するものか、どのような性格の工人集団が存在したかは今後の課題である。この点、把手付壺の評価がポイントになるかもしれない。



第32図 SD-04・05平面・断面図

SK14 (第 25 図)

I 区西部 (J-2 区) に位置し、SI01 に切られる。規模は東西 1.2 m、南北 1.23 m、深さ 0.51 m を測る。出土遺物は、土師器細片が数点ある。

溝跡 (SD)

溝跡は 1 条検出した。遺跡内では過去の調査において、古墳時代の溝跡は 2 地点 (第 11 次・第 14 次) で検出されている。

SD05 (第 32 図)

I 区中央部 (J-6 区付近) に位置し、SD02・SB02~04 に切られる。また、上部は天地返しにより削平されている。規模は、幅 2.8~3.25 m、深さ 0.74 m を測り、長さ約 4 m 程を確認した。断面形は鍋底状を呈する。

出土遺物には、土師器・須恵器壺片 6 点・石製模造品 (円板未成品? 2 点)・弥生土器片 4 点がある。土師器には、壺・高壺・壺などがあり中期のものが多いようであるが、いずれも細片で時期決定資料とみてよいかは疑問が残る。また、この溝跡は、第 14 次調査の SD07 と同一のものである可能性が強い。

(2) 中世・近世

中世・近世に属する遺構は、柵跡 2 条・掘立柱建物跡 4 株・土坑跡 4 基・溝 (堀) 14 条・配石遺構 1 基・橋脚跡 1 基・土塁跡 1 条・通路跡 1 条・性格不明遺構 2 基がある。また、建物跡の一部の可能性のあるもの 4 株分がある。なお、精査後遺構ではないと判断したものがある。SK01・SK04・SX01 と登録したものは、現代の電柱やゴミ穴と判断されたため欠番とする。

柱穴列跡 (SA)

SA01 (第 33 図)

IV 区 (D-16~19 区) に位置し、SI05・06 を切る。上部は天地返しによる搅乱を受けている。規模は、全長 13.8 m (約 45.5 尺) を図り、5 間分 (柱穴 6 個) を検出した。柱穴は 20~30 cm で、深さは 6~37 cm である。本來の深さは、いずれも 40 cm 以上あったものと予想される。柱間寸法は、8.7~9.4 尺である。柱穴列は、さらに角度を変えて東あるいは南へ続く可能性がある。

出土遺物はないが、周辺の他の柱穴が II 層上面より検出されるものがある点、あるいは土師質上器皿が出土する柱穴がある点から、中世の遺構と考えられる。また、この位置には後述するごとく土塁が存在していたと考えられることから、土塁構築以前とみられる。方向は N-84°-W である。この柱穴列は、区画・防御を目的とした柵跡と考えられる。

SA02 (第 33 図)

III・IV 区 (D-13~15 区) に位置し、SK12 を切り、SD12 に切られると判断される。上部は

天地返しにより搅乱を受けている。規模は、全長 11.7 m 以上を測り、4 間分（柱穴 4 個）を検出した。方向は N-90°-E である。柱穴は、P₁ が約 40 cm と大きく、他は 20 cm 前後である。深さは 13~40 cm であるが、本来はいずれも 40 cm 前後とみられる。P₃ と P₄ の間にも柱穴が存在したものと思われる。この柱穴列は、さらに西へ続く可能性があり、SA01 と対になる柵跡であろう。出土遺物はない。

掘立柱建物跡 (SB)

建物跡は 4 棟検出したが、他に VI・VII 区で建物跡になる可能性のあるものがあり、これについても報告する。また、SX02 と SB01 は一体のものと考えられることから、SX02 もここで扱う。

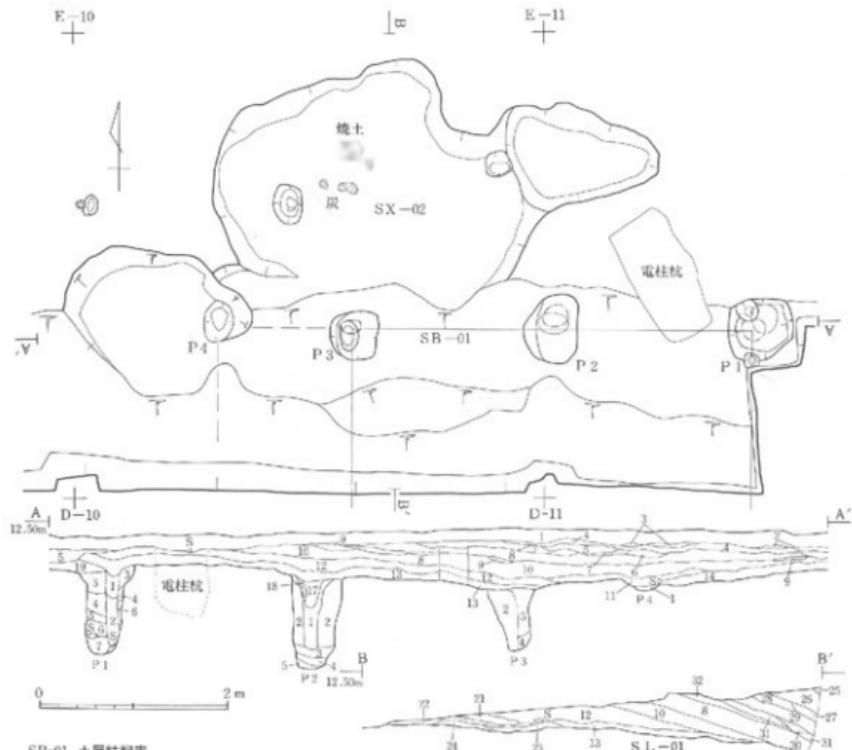
SB01・SX02 (第 34・35 図)

II 区南部 (D-10・11 区) に位置し、SD12・15 を埋め立てた後に構築されている。また、SB01・SX02 上に土壠積土が堆積している。建物規模は不明だが、北辺部 2 間分（柱穴 3 個）を検出した。北柱列の方向は、N-89°-W である。柱間寸法は、2.12 m (約 7 尺) + 2.18 m (7.2 尺) を測る。P₁～P₃ は、他の柱穴群に比べ掘り方が大きく、柱痕跡が確認できる。深さは、P₁ が 93 cm、P₂ が 102 cm、P₃ が 66 cm と極めて深い。なお、P₄ としたものが浅い柱穴（深さ 18 cm）とみてよければ、西側に土間庇のような簡便な施設が付属していた可能性もある。柱穴の特徴や SD01・11 のコーナー部に位置する点などを考慮すれば、矢倉跡が想定できよう。

出土遺物には、土師質土器皿・板状鉄製品 2 点がある。土師質土器は小皿の破片が多く、總



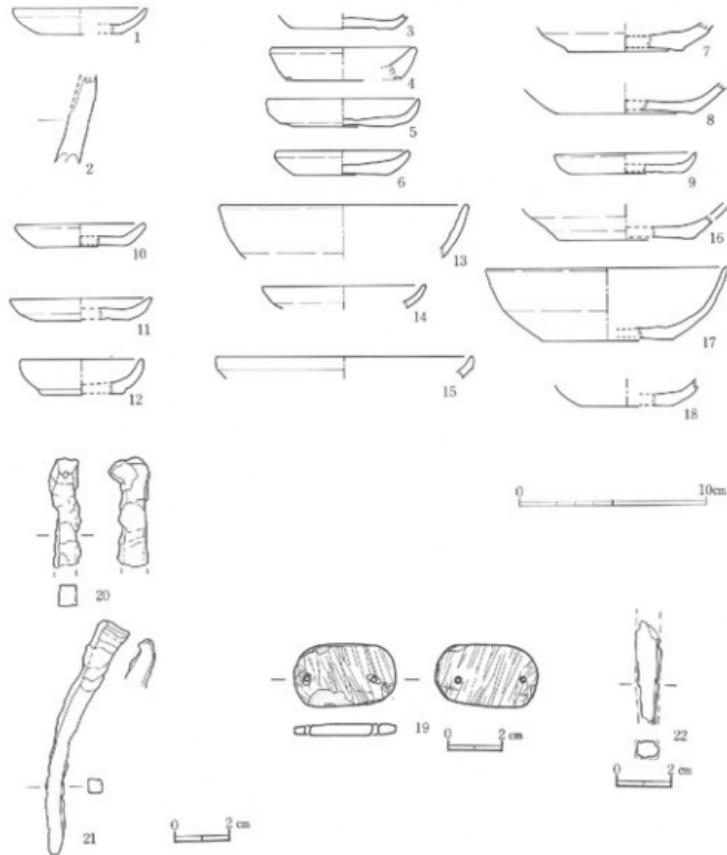
第33図 SA-01・02平面図



SB-01. 土層計表記

層位	土色・土性	備考	層位	土色・土性	備考
1	10YR6/2 に赤い黄褐色砂質シルト	赤土	4	10YR5/1 K-赤い黄褐色砂質シルト	
2	10YR7/8 黄褐色砂質シルト	小粒多數天地返し	5	10YR6/4 K-赤い黄褐色砂	小砂砾含有
3	10YR6/1 赤褐色砂質シルト	鐵化鉄粒子融入グライ	P3		
4	10YR5/6 橙灰色	鐵化鉄粒子グライ	2	10YR5/6 黃褐色砂質シルト	小砂砾含有
5	10YR6/6 明黄褐色砂質シルト	鐵化物粒子	3	10YR6/6 明黃褐色砂質シルト	
6	10YR6/1 海灰色	無機鉄粒子、下部に鐵化鉄質グライ	4	10YR5/4 K-赤い黄褐色砂質シルト	砂ブロック
7	10YR5/2 桂葉色	グライ	P4		
8	10YR5/8 黃褐色砂質シルト	鐵化物多量	1	10YR5/4 に赤い黄褐色砂質シルト	鐵化物
9	10YR4/1 嘴状色砂質シルト	グライ			
10	10YR5/8 明黄褐色砂質シルト	鐵化米多量、鐵化物			
11	10YR6/4 に赤い黄褐色砂質シルト				
12	10YR5/0 雪質褐色砂質シルト	鐵化米少量	8	10YR6/8 黃褐色砂質シルト	鐵化米多量、鐵化物
13	10YR5/4 に赤い黄褐色砂質シルト	鐵化物粒子	9	10YR6/8 明黃褐色砂質シルト	鐵化米多量、鐵化物粒子
14	10YR3/3 桂葉色	鷺山山麓侵入	10	10YR6/6 明黃褐色砂質シルト	鐵化米少量、小礫
15	10YR5/1 楊葉色砂質シルト	鐵化物普遍的に混入	11	10YR5/4 に赤い黄褐色砂質シルト	鐵化物粒子
P1			12	10YR7/8 黃褐色砂質シルト	鐵化物粒子
1	10YR4/1 楊葉色砂質シルト	明黃褐色土、鐵化物、砂	13	10YR5/4 に赤い黄褐色砂質シルト	鐵化物粒子、に赤い鐵化土ブロック
2	10YR4/1 純米色砂質シルト	鐵化物微量	14	10YR5/1 楊葉色砂質シルト	鐵化物
3	10YR6/6 明黃褐色砂質シルト	鐵化物微量	15	10YR5/4 に赤い黄褐色砂質シルト	鐵化物粒子
4	10YR5/1 楊葉色砂質シルト	鐵化物微量	16	10YR4/4 級層シルト	褐色土ブロック、小礫、鐵化物
5	10YR6/6 明黃褐色砂質シルト		17	10YR6/4 褐色砂	小礫多量、褐褐色ナトリウムブロック少量
6	10YR5/1 楊葉色砂質シルト		18	10YR5/8 黃褐色砂	小礫風化土ブロック少量
7	10YR5/4 黃褐色砂質シルト	砂砾混入	19	10YR5/8 黃褐色砂	褐
P2			20	砂砾地	
1	10YR5/4 に赤い黄褐色砂		21	10YR5/6 黄褐色砂	
2	10YR7/6 明黃褐色砂	砂砾含有	22	10YR5/8 黄褐色砂	
3	10YR6/8 明黃褐色砂	砂砾含有	23	10YR5/8 黄褐色砂質シルト	

第34図 SB-01、SX-02平面・断面図



第35図 SB-01、SX-02出土遺物

数30点で、P₁・P₂が多い。P₃出土のもので実測できたものがある。

SX02はSB01の北西部の同一面で検出したもので、SB01と一体のものと判断される。この遺構は、中央の不整堅穴部と東側及び西側の土坑部とから成り立っている。堅穴部の規模は、東西約3.5m、南北2.7m以上、深さ10cmで、底面はほぼ平坦である。底面中央部北寄りには焼土の堆積が認められ、その南側には炭化物の集中がみられる。これは、恒常的な炉ではなく、一時的な焚き火跡と考えられる。また、底面には2個のピットが検出され、いずれも浅い。

P_3 は 6 cm、 P_4 は 13 cm の深さである。西側土坑部規模は、東西 1.6 m × 南北 1.1 m、深さ 12 cm である。底面は平坦である。東側土坑部規模は、東西 2 m × 南北 1.56 m、深さ 21 cm を測る。南側は SB01 同様、土墨構築の際その内側（南側）に掘られた溝？によって切られている。なお、埋土は断面図の 13・22～24 層が該当する。

出土遺物は、竪穴部で渥美（壺？）1 点、瓦質土器？1 点、土師質土器片 261 点、釘 4 点、金具片 2 点、他に須恵器・石製模造品などがある。東側土坑部では、土師質土器片 22 点出土。西側土坑部では、在地陶器片 1 点、土師質土器片 10 点、釘 1 点が出土している。実測可能となつた比較的大型の破片は、いずれも竪穴部出土の資料である。また、竪穴部及び東側土坑部出土のものに 1 点ずつ油煙の付着したものがみられ、燈明皿に使用されたことがわかる。土師質土器など多くの遺物はいずれも底面直上付近である。

SB02 (第 36・55 図)

I 区中央 (J-5 ポイント付近) に位置し、SI02・03、SD05 を切る。上部は、天地返しにより削平される。桁行 3 間（北辺総長 4.3 m）、梁行 1 間（東辺総長 1.9 m）の東西棟建物跡である。方向は南辺桁行で N-90°-E である。柱穴は約 30 cm 前後、深さ 20～30 cm のものが多い。SD05 と重複する柱穴は深い傾向がみられる。

出土遺物は、古墳時代の土師器細片が少數あるが、時期決定資料ではない。建物方向が真北に直交し、SD02 の方向ともほぼ一致することから、SD02 と関連する建物跡と考えられる。

SB03 (第 36・55 図)

I 区中央 (J-5 ポイント付近) に位置し、SI02・03、SD04・05 を切る。上部は天地返しにより削平される。桁行 2 間（北辺総長 4.48 m）、梁行 2 間（東辺総長 2.91 m）の東西棟建物跡である。方向は南辺桁行で N-88°-E である。柱穴は 20 cm 前後のものが多く、深さ 20～30 cm 代のものが多い。SD04・05 と重複する柱穴は、深くなる傾向がある。なお、南辺側の柱穴は変則的に 3 間となり、中央の間隔が広い。

出土遺物は、古墳時代の土師器細片が少數あるが、時期決定資料ではない。この建物跡も SB02 と同様の理由から、SD02 と関連するものと考えられる。

SB04 (第 36・55 図)

I 区中央 (J-5 ポイント付近) に位置し、SI02・03、SD04・05、SK07、SB02 を切る。上部は、天地返しにより削平されている。身舎は桁行 2 間以上（東辺総長 3.6 m 以上）、梁行 1 間（南辺総長 3.31 m）の南北棟建物跡である。西辺側には南北 2 間以上の庇（あるいは縁）が取り付く。身舎との間隔は 99 cm である。方向は、東辺桁行で N-19°-E である。柱穴は 20～30 cm のものが多く、深さは 20 cm 前後である。

出土遺物は、弥生土器・古墳時代の土器の破片が少量あるが、時期決定資料ではない。この

建物跡の方向は、遺跡内の現在の道路方向とほぼ一致し、この道路は江戸初期の若林城下町に起源があると予想されている。これまでの調査で検出された江戸初期の建物跡とも、方向が一致している。さらに、SB02を切る点を考慮すれば、江戸初期の建物跡と想定されよう。

SB05 (第37図)

VI区(A・B-14区)に位置する。柱穴4個(3間)で、およそ7尺+8尺+7尺で建物跡の一部を構成する可能性がある。土師質土器片が出土している。

SB06 (第37図)

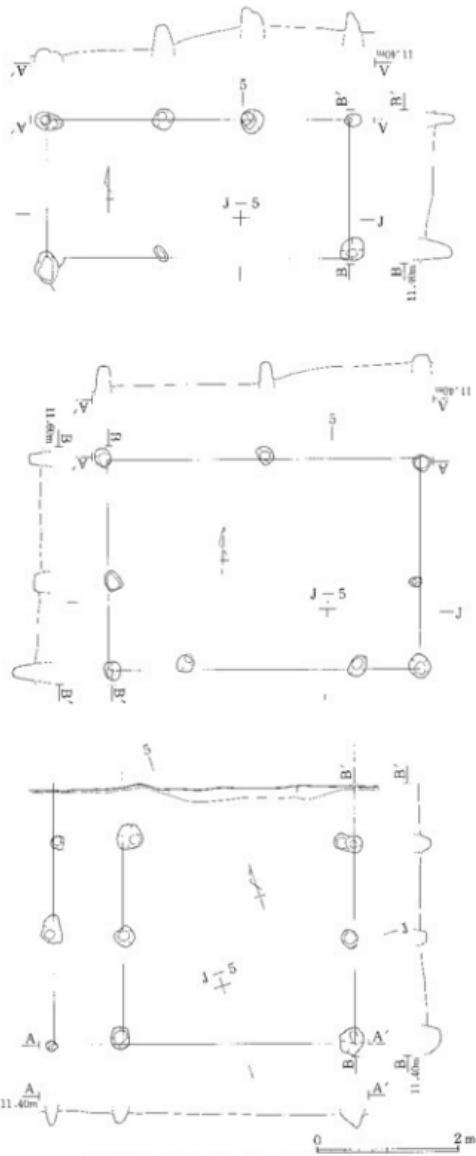
VI区(A・B-14区)に位置する。柱穴4個(西辺2間以上・北辺1間以上)で、建物跡の一部を構成する可能性がある。柱間寸法は6~8.5尺である。土師質土器が出土している。

SB07 (第37図)

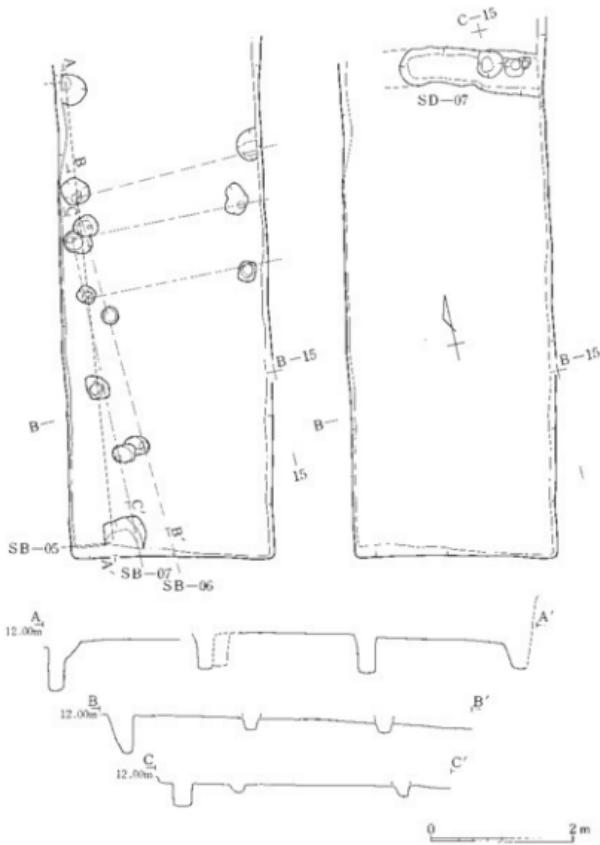
VI区(A・B-14区)に位置する。柱穴5個を検出した。身舎部分は西辺・北辺とも1間以上で、北辺には庇(あるいは縁)が付くと考えられる。柱間寸法は約8尺、身舎と庇(縁)の間隔は約3尺である。土師質土器片が出土している。

SB08 (第39図)

VIII区(B-21区)に位置する。



第36図 SB-02・03・04平面・断面図



第37図 VI建物跡平面・断面図

柱間寸法が約8尺の建物跡になる可能性がある。

SB05~08は建物跡と考えてよければ、いずれも層位・出土遺物から中世の時期と考えられる。

土坑跡（SK）

土坑跡は6基検出されている。

SK02（第38図）

I区西部（K-2・3区）に位置し、SI01を切る。上部は天地返しにより削平されている。規

模は東西約2.55m、南北0.6m以上、深さ40cmである。埋土は人為的に埋められたものとみられる。出土遺物は、在地産中世陶器(甕?)1点、土師質土器片2点があり、他にフレーク1点がある。陶器は、SK08出土のものと接合した。土師質土器は小皿片で、外底は糸切り、板状圧痕、内底には指ナデがみられる。

SK05 (第39~41図)

VIII区北部(C-21区)に位置し、SK15を切る。

上部は、一部天地返しにより搅乱を受けている。

規模は1.6m以上×1.44mで、深さは北側約

17cm、南側約7cmである。この土坑跡は、若干位置をずらして掘り直しているものと考えられ、2時期に分かれる。埋土は人為的に堆積したものとみられ、炭化物が多量に含まれ、黄橙色シルトブロック・疊・焼土も多い。ゴミ穴として掘られたものであろう。

出土遺物には、在地産陶器壺片6点・土師質土器皿片3点・不定形甕(あるいは未成品?)1点・釘2点があり、他に須恵器施片1点・石製模造品(円板)1点がある。陶器壺は白石窯とみられるもの1点、他は遺跡周辺のものと推定される。土師質土器では、不明瞭ながら板状圧痕・内底指ナデ調整をするものが1点含まれる。

SK08 (第39・40図・第41図8)

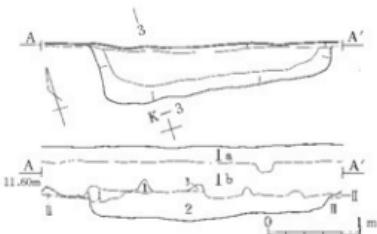
VIII区中央(B-21区)に位置し、SK10を切る。規模は東西約70cm、南北55cm、深さ約22cmである。断面形は鍋底状で、埋土は単層で多量の小礫と少量の焼土粒が含まれている。おそらく、人為的に埋められたものと思われる。出土遺物は、在地産陶器壺片2点・須恵器施片1点がある。陶器片のうち1点は、SK02出土のものと接合した。これらの陶器片は、遺跡周辺に生産地のある製品と推定される。この土坑跡は楚石の据え穴かどうか不明である。

SK16 (第39図)

VIII区南部(B-21区)に位置する。SX03との重複関係は明らかではなく、むしろ同時期の可能性がある。形状は不整形で、規模は東西73cm以上、南北85cm、深さ約7cmである。底面中央には柱穴がある。北辺には炭化物の集中が認められる。この土坑は、柱穴の掘り方とみてよいかは明らかでない。出土遺物はない。

SK10 (第39・41図)

VIII区中央(B-21区)に位置し、SK05・08に切られ、SK15を切る。また、SB08と重複するが、層位的所見では建物跡より新しい。形状は、東西方向に長軸をもつ略長方形のプランに



SK-02 土層記表

層位	上色・上性	側 面
1	10YR4/1 緑灰色砂質粘土。	において窓の内土が現れ、井戸の粘土侵入
2	10YR7/4 イエローベージュ粘土	緑灰色土が透視に入る

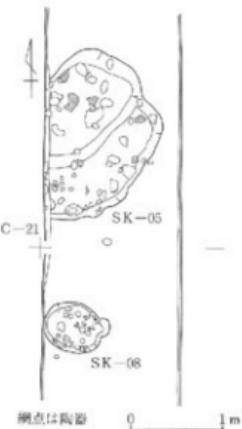
第38図 SK-02平面・断面図

なるものと考えられる。規模は東西 77 cm 以上、南北 82 cm、深さ 48 cm である。埋土 2・4 層では、多量の炭化物・木炭がみられた。東壁には柱穴跡がみられる。

出土遺物は、在地産陶器片 4 点・土師質土器皿片 4 点、他に須恵器甕片 1 点がある。陶器 4 点のうち 2 点は白石窯のものと考えられ、他の 2 点は遺跡周辺のものとみられる。土師質土器皿は、板状圧痕や内底の指ナデの確認できない薄手のものである。

SK15 (第40図)

VII区中央 (C-21 区) に位置し、SK05~10・P₆に切られる。全体の規模・形状は不明であるが、東西 36 cm 以上、南北 60 cm、深さ約 7 cm を測る。柱穴の掘り方の可能性もあるが、明確ではない。出土遺物はない。



第39図 SK-05・08平面図

集石遺構 (第40図・第42図)

VII区南端 (B-21 区) に位置する。3 層上部で検出した。南北約 1.8 m に渡って帯状に分布する。北部では散漫となるが、幅は 50~60 cm となる。石は大半が円礫である。

遺物は礫直上や周辺より出土している。古瀬戸灰釉盤？ 1 点 (図 1)、常滑壺？ 1 点 (図 2)、在地産陶器甕片 2 点 (図 3・4) が出土している。灰釉盤とみられるものは口縁部破片で、15世紀かそれ以前と考えられる。3 層は、VI区の 3 層と同一の層とみられる。また、VII区セクション図にみられる版築状の堆積層 (4~7 層) は、この集石遺構部分には認められない。

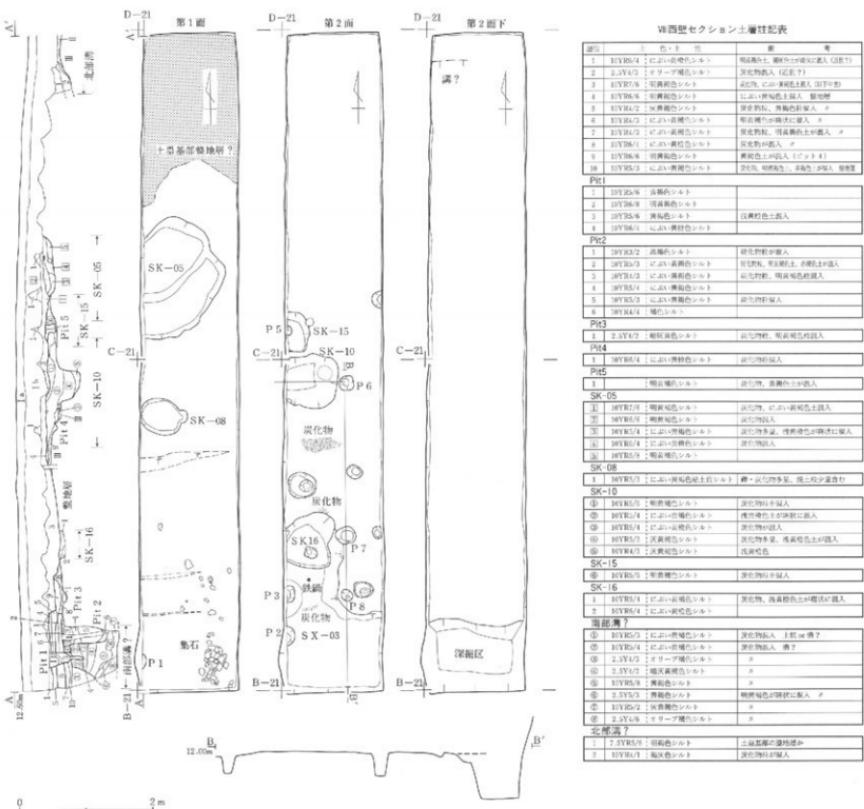
溝跡 (SD)

溝跡は 14 条検出されている。このうち、SD01 は堀跡とみてよい。また、調査終了後の工事立ち合い時に発見した溝跡 5 条 (2 条は調査区内検出の延長部分) についても、ここで述べる。したがって、検出した溝跡は、合計 17 条になる。

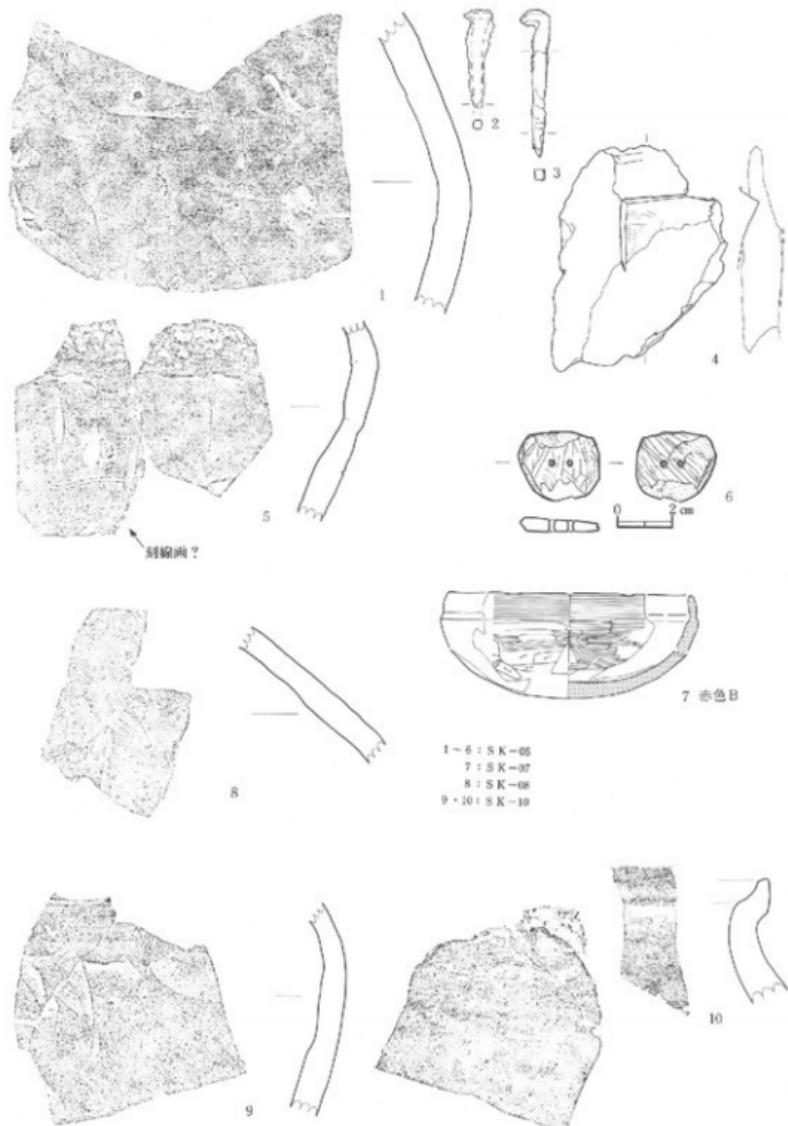
SD01 (第 43~54 図)

SD01 は調査対象区を東西に貫く溝跡だが、その規模や特徴から堀跡と考えてよい。精査は II 区と V 区を行った。また、I・III・IV・VII 区などでもプランの一部を検出している。ここでは、II・V 区の特徴について述べる。なお、精査の結果、SD01 は中世に開削され、江戸期に再び掘削・使用されていることが明らかで、大別 2 時期の変遷が判明している。

(II 区) 上部は天地返しに削平されるが、確認面からの規模は上幅約 15.6 m、下幅約 6.1 m、深さは北壁側約 1.7 m・南壁側約 2.5 m である。江戸期は 8 層上面が底面と考えられ、下幅約 9.4 m、深さは北壁側約 0.9 m、南壁側 1.8 m である。また、中世期には断面形状と 8 層以下の



第40図 雷 SK-05・06・10平面・断面図



第41図 SK-05、07、08、10出土遺物 6 : 12

0 5 cm

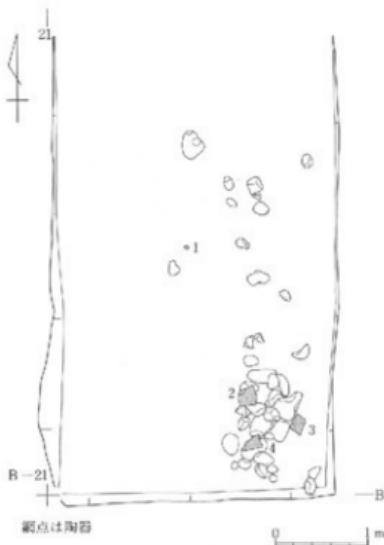
堆積層の対応から2～3回の改修が行われ、下幅がその都度拡張されている。ところで、近世の底面上には、堅い鉄分集積層（7層）がみられる。

出土遺物は、まず近世の堆積層である1～7層から、大堀相馬（碗・皿）、瀬戸・美濃（灰釉皿・志野菊皿・笠原鉢・飴釉火入・鉄釉擂鉢）、唐津系（青緑釉皿・灰釉系壺？（内面あて具痕））、産地不明陶器（擂鉢（福島市岸窯類似））、肥前磁器（染付皿・小壺、白磁瓶？）、瀬戸磁器？（染付碗）、中世陶器（源美・常滑・在地）、中国（青磁碗・染付碗）、土師質土器皿、近世焼瓦、産地不明磁器（摺絵皿・人形？）、角釘、銅製金具、古錢（寛永通宝・開元通宝）が出土し、他に古墳～平安の須恵器（壺・瓶・壺・器台・壺）、石製模造品（円板・剣形・原石？）、弥生土器、石器（スクレイバー）などが出土している。

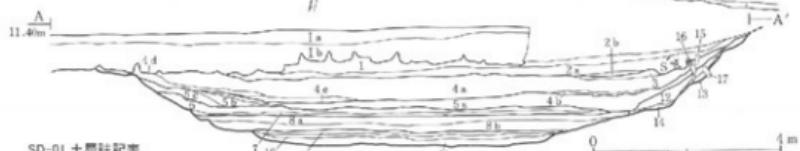
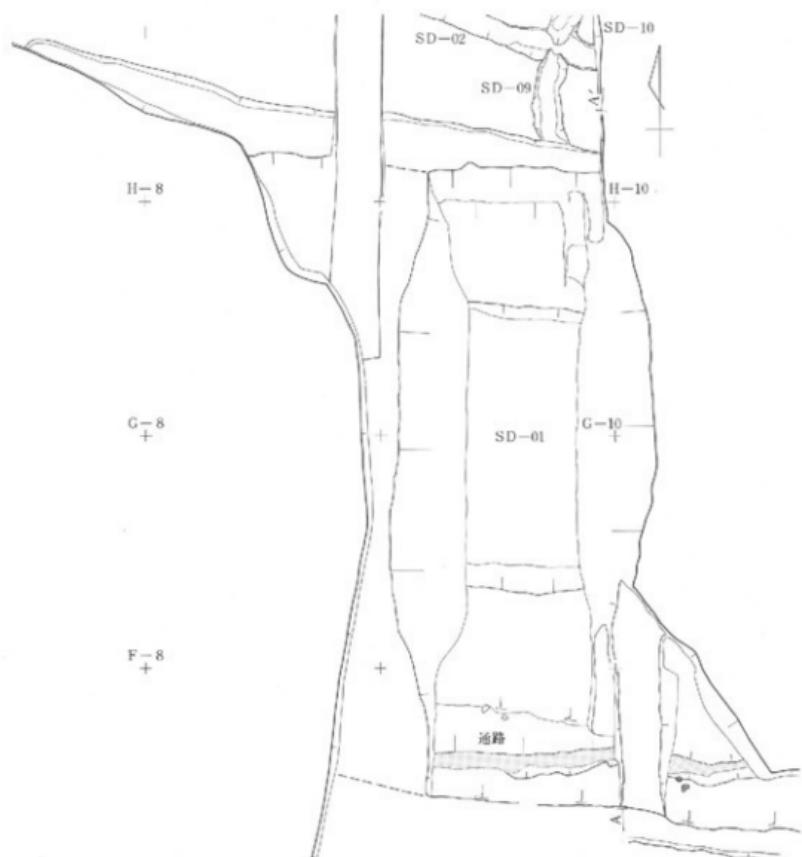
1層では、大堀相馬、産地不明の摺絵皿・ガラス小瓶などが出土し、幕末～明治頃が下限とみられる。一方、6層では、志野菊皿・唐津系壺？・産地不明擂鉢など16世紀末～17世紀前葉に限定できる遺物が出土している。なお、7層では出土遺物がない。中世の堆積層である8層以下では、常滑（窯・鉢）、在地（白石窯片口鉢）、中国磁器（龍泉窯系蓮弁文碗・染付四方攢文碗）、土師質土器皿、古錢（永楽通宝・洪武通宝）が出土し、他に須恵器・弥生土器・スクレイバーが出土している。このうち、8層で中国染付磁器・古錢が、底面で常滑窯片が出土した。中世の層出土の陶磁器は、およそ14～16世紀後半頃を主体とするものと考えられる。

(V区) 上部はII区同様天地返しによる削平を受けるが、確認面での規模は上幅約14.3m、下幅約6.4m、深さは北壁側約2.2m、南壁側2.8mである。なお、北壁側では一部緩斜面で張り出す部分があり、多數のピットを検出した。張り出し部で、上幅約15.6mを測る。江戸期は6b層上面が底面と考えられ、上幅約14.2m、下幅約8.7m、深さは北壁側1.42m、南壁側1.98mである。南壁側には壁に平行して、幅約1mの溝状の落ち込みが検出された。この遺構はII区で認められないことから、SD12・15と関連する溝跡と思われる。

出土遺物は、南壁側で多く出土する傾向が指摘できる。近世の堆積層である1～6a層では、



第42図 集石遺構

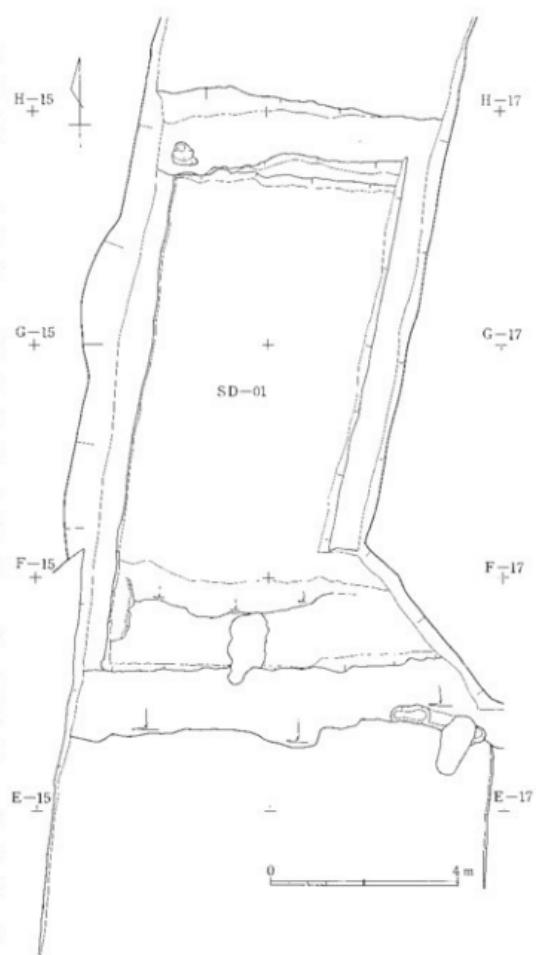


SD-01 土層記表

位置	土色・土性	編 号	地盤	二色・土性	備考
1	7.5Y4/3 黄褐色シルト		7	SYR5/F 明赤褐色	酸化鉄岩
2a	10YR5/6 黄褐色シルト		8a	2.5Y4/1 黄褐色粘土質シルト	赤褐色土粒子多量、酸化鉄岩からグライ移行
2b	10YR5/6 黄褐色シルト		8b	2.5Y4/1 黄褐色土質シルト	赤褐色土粒子普遍的に混入
3	7.5Y4/4 黄褐色シルト		9	2.5Y6/2 暗赤褐色土質シルト	赤褐色土粒子多量
4a	10YR4/3 黄褐色シルト		10	5YR1/6 水系粘	酸化鉄岩
4b	10YR4/3 にJb1 黄褐色シルト 黑褐色土層状		11	10YR6/1 暗赤褐色土質シルト	赤褐色土粒子多量、酸化鉄岩からグライ移行
4c	10YR5/1 黄褐色シルト	1a	12	10YR6/1 暗赤褐色土質シルト	赤褐色土粒子普遍的に混入
4d	10YR4/4 黄褐色シルト	1b	13	5YR4/6 暗赤褐色砂質シルト	灰白色粘土鉄鉬入
4e	10YR4/4 黄褐色シルト	1c	14	7.5Y4/1 暗赤褐色砂質粘土	赤褐色粘子
5a	10YR4/4 黄褐色シルト	1d	15	7.5Y4/1 黄褐色シルト	ボソボソ
5b	10YR5/3 にJb1 黄褐色シルト 前黄褐色土質シルト	16	10G-Y4/1 暗灰色砂質粘土	酸化鉄、グライ	
5c	10YR5/4 にJb1 黄褐色シルト	17	10YR5/4 にJb1 黄褐色シルト		
6	10YR5/6 黄褐色シルト				

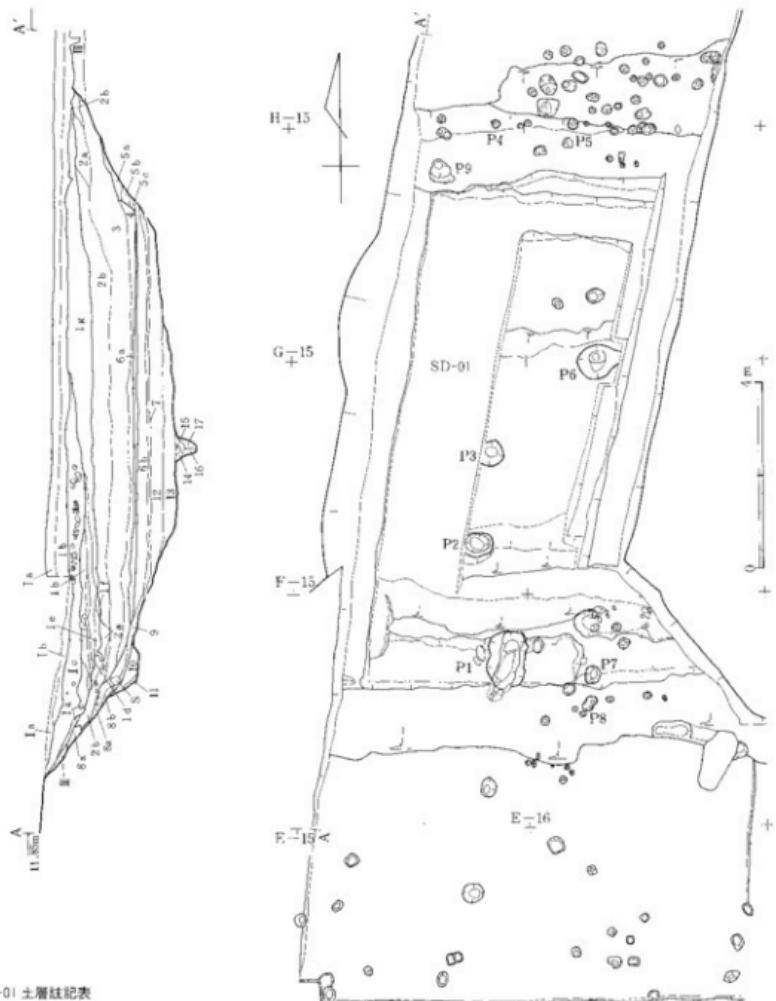
第43図 SD-01 (II区) 平面・断面図

濱戸・美濃（鉄袖鉢・擂鉢・
 黄瀬戸袖皿）、唐津系（灰釉
 碗・青緑釉皿・刷毛文鉢・長
 石袖鉢）、產地不明陶器、肥前
 （染付碗・皿・瓶、色絵皿）、
 大堀相馬（碗）、堤（器種不明）、
 瓦質火鉢、瓦、中世陶器（古
 濱戸・常滑・渥美・在地）、中國
 （青磁・白磁）が出土し、
 他に古墳～平安の須恵器
 （壺・甕・壺）、土師器、土師
 實土器皿、羽口片、鉄滓、煙
 管、刀子？ 角釘、砥石、礫
 石？、馬齒などが出土してい
 る。近世陶磁器では17～18世
 紀代の製品が比較的多く、幕
 末頃のものは少ない。一方、
 6b～13層が中世の堆積層で
 あるが、古瀬戸（灰釉盤・壺）、
 常滑（甕・壺？）、在地（白石
 窯の甕・片口鉢・小形壺、產
 地不明の甕）、中國（青磁碗・
 盤、青白磁瓶蓋）、鉄滓、角釘
 が出土し、他には古墳～平安
 の須恵器・土師器、瓦などが
 出土している。出土陶磁器の
 うち古瀬戸の盤（第47図20・
 21）は15世紀前半である。常



第44図 SD-01 (V区) 平面図 (近景面)

滑については体部破片で年代が不明である。中國の青磁碗・盤は13～14世紀前半に納まるが、器底
 出土の碗は玉縁口縁で内面に陽刻の花文がみられ、14世紀後半～15世紀前半に納まるものであろう
 (第49図11)。青白磁蓋(梅瓶か)は13世紀のものである。一方、南壁際の8a層では土師質土器
 皿が重って出土している (第51図24～30、第52図1～4)。搬入に際して落下したものか、一



SD-01 土層性記表

剖面	土色・土質	備考
1a	10YR5/4 : 深い褐色砂質シルト	
1b	10YR5/3 : 深い褐色砂質シルト	炭化物粒子
1c	10YR4/4 : 深い褐色砂質シルト	炭化物を普遍的に挟入
1d	10YR3/2 : 深い褐色砂質シルト	
1e	10YR3/4 : 深い褐色	
1f	10YR4/3 : 深い褐色	
1g	10YR6/8 : 灰褐色シルト	小礫を普遍的に混入
1h	10YR4/4 : 深い灰褐色砂質シルト	
2a	10YR5/6 : 褐色砂質シルト	
3	10YR6/4 : 深い褐色砂質シルト	
4	10YR4/3 : 深い褐色シルト	
5a	10YR4/4 : 褐色シルト	
5b	7.5YR5/2 : 褐色	
5c	10YR4/1 : 褐色シルト	
6a	2.5YR4/6 : 褐色シルト	
6b	10YR4/1 : 褐色	粘化鉄、グライ
7	10YR6/1 : 褐色	グライ

剖面	土色・土質	備考
8a	10YR4/2 : 褐色シルト	かわらけ多量
8b	10YR6/2 : 灰褐色砂質シルト	
9	10YR4/5 : 褐色シルト	灰質褐色+、褐色色ナップラック
10	10YR4/1 : 褐色砂質シルト	赤褐色土、深混入、グライ
11	10YR4/2 : 灰褐色砂質シルト	
12	10YR4/1 : 褐灰色砂質シルト	耕作跡松多量、グライ
13	10YR5/1 : 褐色砂質シルト	田中場植土、深多量
14	10YR4/2 : 灰褐色砂質シルト	灰褐色土深入
15	10YR6/2 : 深い褐色砂	耕作色土深入
16	10YR6/2 : 灰褐色砂	深い黄褐色土深入
17	10YR4/2 : 灰褐色砂	

第45図 SD-01 (V区) 平面・断面図

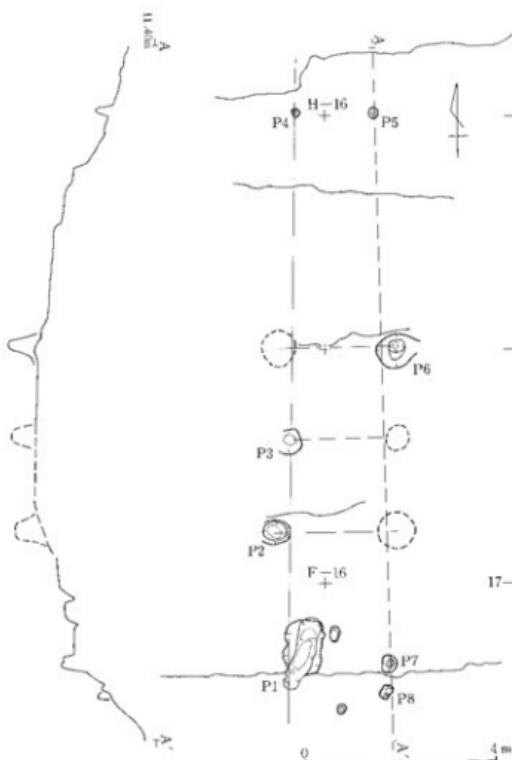
括性の高い土器である。前述した SX02 出土の皿と特徴が一致している。又、8a~11 層は堀跡最下層（13 層）より、堆積順序が古いのではないかとみられる。

次に、SD01 に付設された通路跡・橋脚跡について述べる。

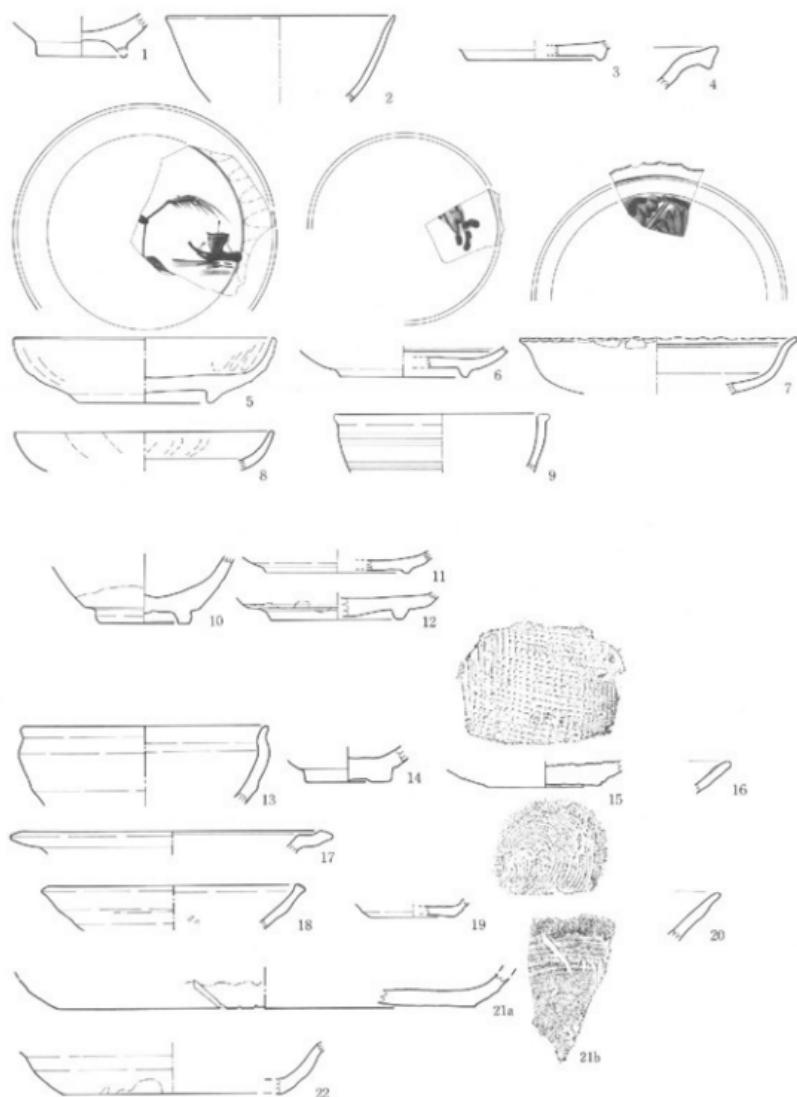
通路跡（第 43 図）II・III 区（E-9・10 区）の SD01 の南壁に位置し、東側へ下がる通路跡である。規模は、全長 6.8 m を測るがさらに東西に伸びる。通路幅は 15~79 cm である。この通路は、伴出遺物がなく時期が明確ではないが、SD11・15 より新しいことから、中世でも新しい時期かあるいは江戸時代に下るものであろう。

橋脚跡（第 46 図）V 区（16 ライン付近）に位置し、堀底や壁面で検出したが、南壁の 2 基は 8a 層上面で検出した。このことは、前述した 13 層より 8a~11 層が古いことを示している。

さて、橋脚柱穴跡は 7 基確認できたが、本来は 10 基で構成されていたと推定される。すなわち、1×4 間の配置となり、特に堀跡最深部に 1×2 間を配し、北側 1 間分は約 5 m と間隔が広い。検出した橋脚跡の規模は、P₁ 80×162 cm・深さ 73 cm（古）・70.5 cm（新）、P₂ 52×60 cm 以上・深さ 68 cm、P₃ 53×42 cm 以上・深さ 43 cm、P₄ 16×18 cm・深さ 23 cm、P₅ 21×23 cm・深さ 37 cm、P₆ 73×86 cm 以上・深さ 72 cm、P₇ 31×37 cm・深さ 55 cm を測る。橋脚長は西辺と東辺で一定しないが、約 12 m を測り、幅も一定せず約 2 m 前後となる。ただし、橋脚全長は堀幅にはほぼ等しくなると考えられ、約 15 m 前後と予想される。また、P₁ では柱穴が

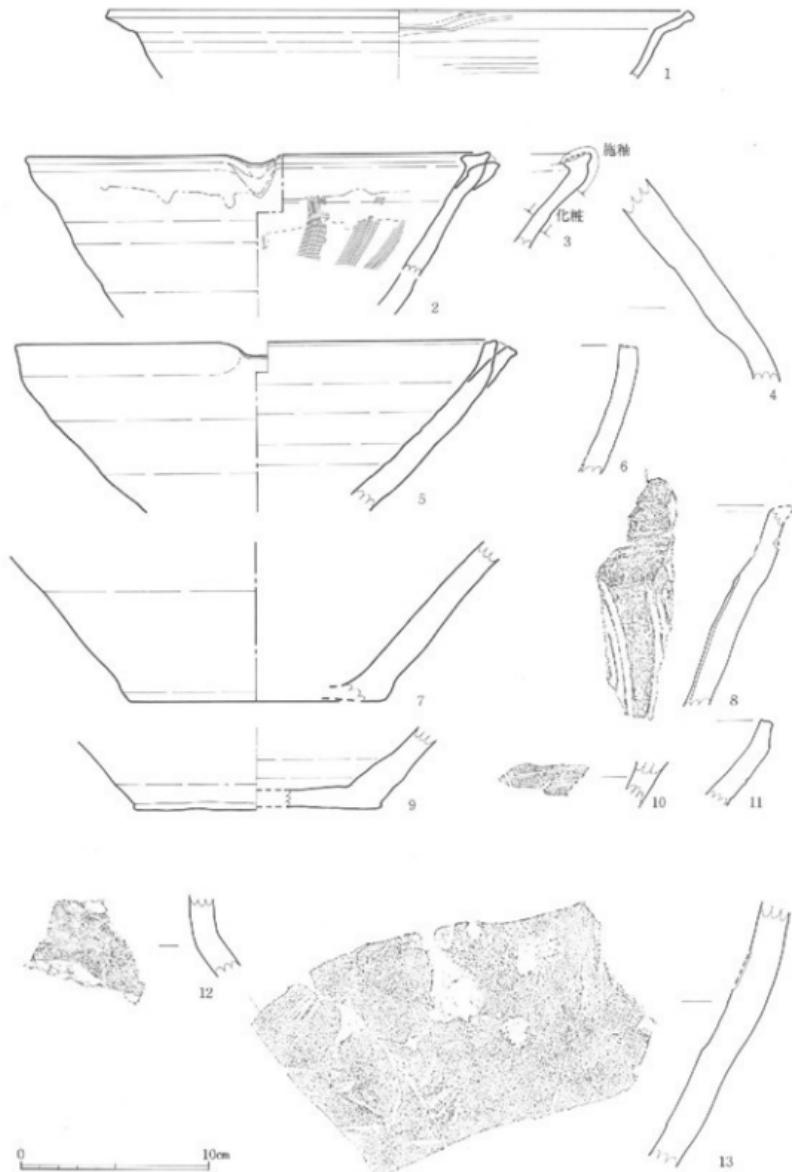


第 46 図 SD-01 橋脚跡平面・断面図

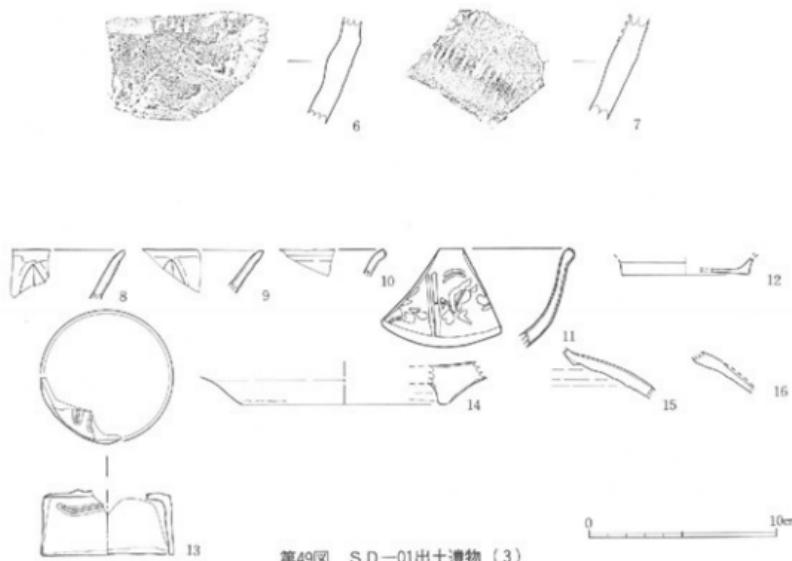
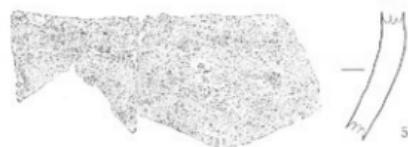
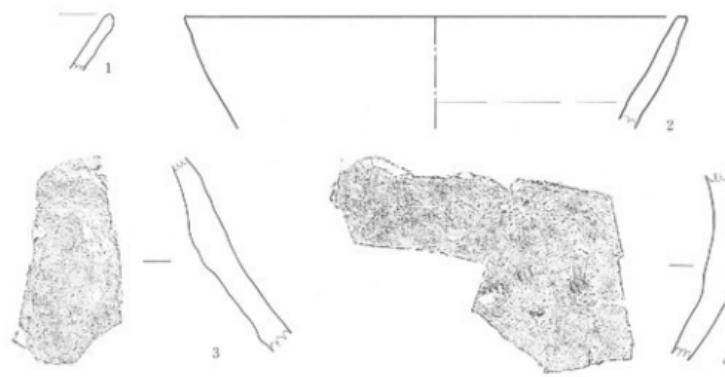


第47図 SD-01出土遺物 (1)

0 10cm



第48図 SD-01出土遺物 (2)



第49図 SD-01出土遺物 (3)



第50図 SD-01出土遺物（4）

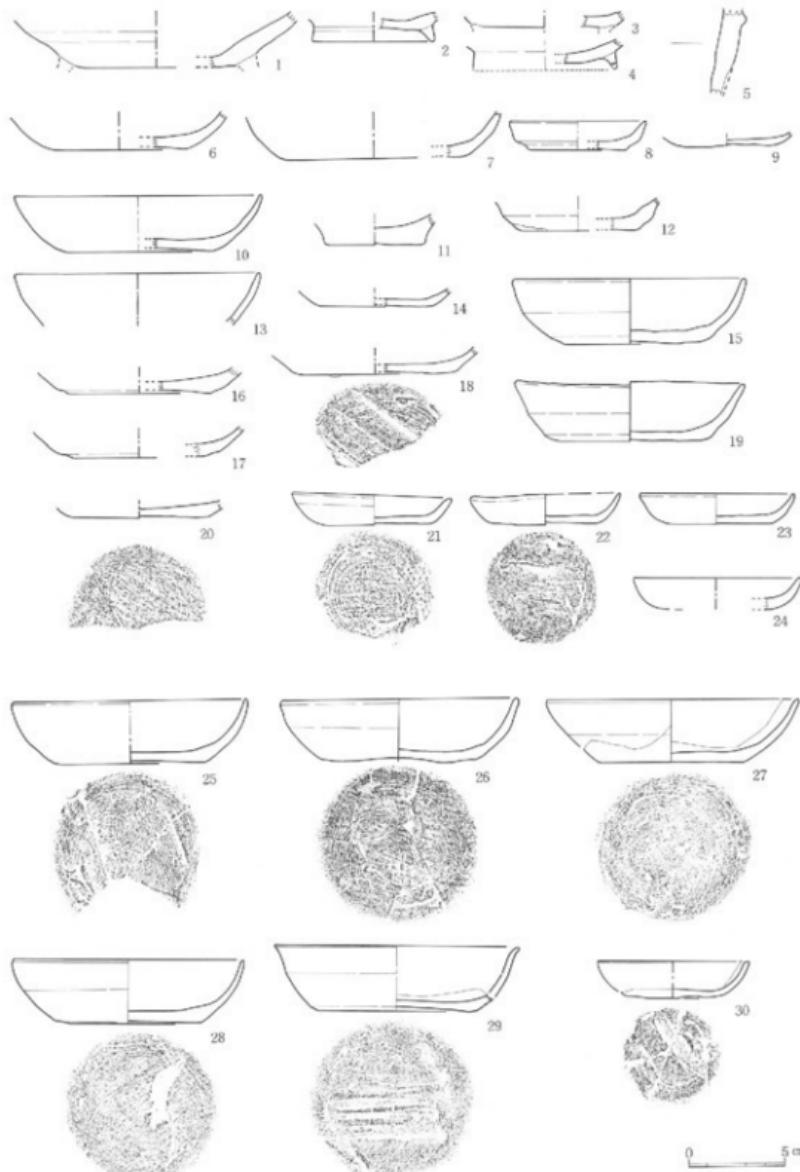
2基検出され(南側が古い)、柱の据え変えが行われたものと考えられる。さらに、北壁側西端のP_sは深さ63cmを測る柱穴だが、このよう柱穴の存在から、他にも堀跡に付設された施設が存在する可能性があるかもしれない。出土遺物は、土師器片・須恵器片・角釘が少量出土したにすぎず、直接橋脚跡の年代を示すものはない。ただ、堀底面や13層出土遺物のうち、最新のものが14世紀後半～15世紀前半である点から、橋脚跡の付設時期は15世紀前半かそれ以前になろう。上限時期は、8a層出土遺物が参考になるだろう。

なお、SD01は調査終了後の工事に際して、E-22区東寄りの地点で南側へ方向を変えることが確認できた。ここから、SD01(北辺堀)の長さは少なくとも約76m以上の規模であることが判明した。また、方向は真北に対して、ほぼ直交する。

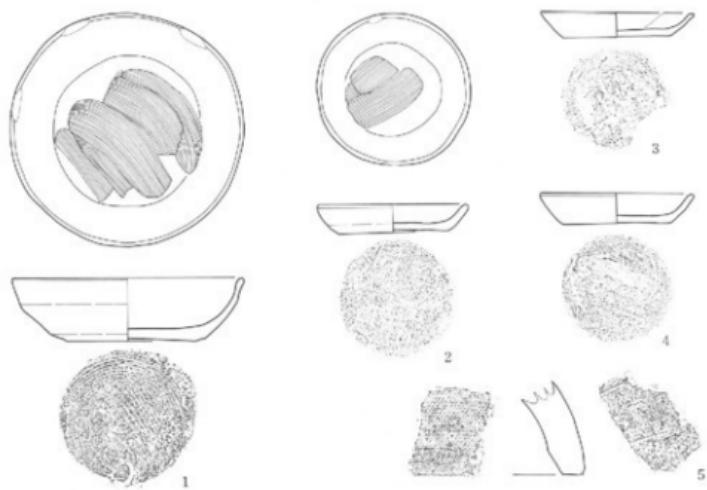
SD02(第55図)

I・II区(I-3区～H-9区)に位置し、SI02・SD05を切る。また、後述するSD06・09・10は、この溝と一連のものである。SD09はSD01に切られることから、SD02もSD01より古い。溝跡上部は約30cm前後、天地返しにより削平されている。なお、調査時にI-6・7区で重複が認められたことから、古い溝をSD03としたが、精査後SD02のプランを大きく逸脱することはなく、重複する部分も一部であることから、溝の改修などが行われた結果と判断し、SD03は独立して扱っていない。溝跡の規模は、検出長約30.5m・深さ0.6～0.7m、幅は約1m前後であるが、I-6区やI-5区西部では約1.5mを測る。また、I-5区内では長さ約3.2mに渡って浅い部分が認められ、通常の溝跡の特徴と異なる事から、屋敷の入口と想定できると考えられる。溝幅は0.8～1.2m、深さ17cmであるが、上部が削平されていることから、本来はもう少し規模も増すであろう。ところで、溝跡はさらに西方へ伸びる訳であるが、昭和62年に本調査区の西側隣接地で行われた調査(埋文研:1988)で検出されたSD3(真北基準でN-5'～E)は、SD02(N-81'～W)と規模等が類似し、方向がほぼ直交し、一連の溝跡ではないかと想定される。この想定が正しいとすれば、SD02は全長約55m(半町)規模で「コ」字形又は、方形の区画溝となろう。さらに、北東側に位置する第5次調査地点(仙台市教育委員会:1982)で検出された1号溝跡は、前述のSD3と一連の溝跡である可能性が考えられる。

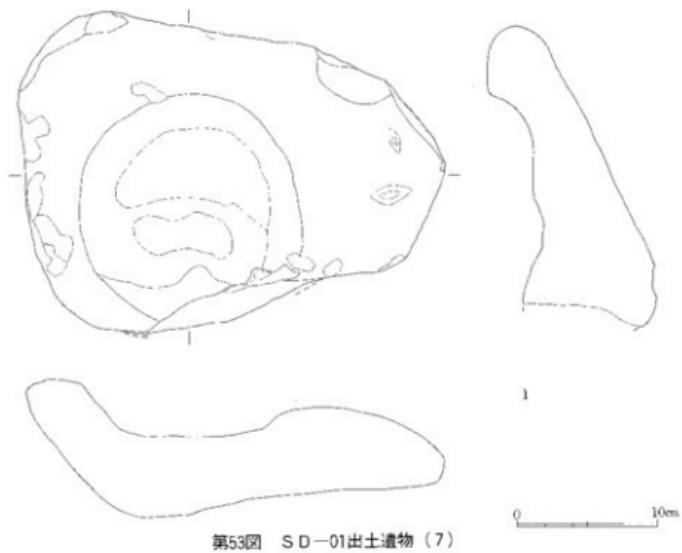
SD02は断面は「U」字形で埋土は自然堆積を示し、壁面・底面には薄い鉄分の集積層が認められる。



第51図 SD-01出土遺物 (5)



第52図 SD-01出土遺物 (6)



第53図 SD-01出土遺物（7）

出土遺物は、在地産（白石窯？）鉢1点、中国青磁盤1点、金属製器（金輪）1点、土師質土器皿18点があり、他に、須恵器（7点）・弥生土器（10点）・石製模造品（2点）・剝片（8点）瓦1点が出土している。なお、埋土上部では木炭片が目立った。このうち、土師質土器皿は器厚の厚いものが多く、底部切り離しが静止系切りの可能性のあるもの（第56図1）や底部を厚く平高台状に切り離したもの（第56図3・4）がある。

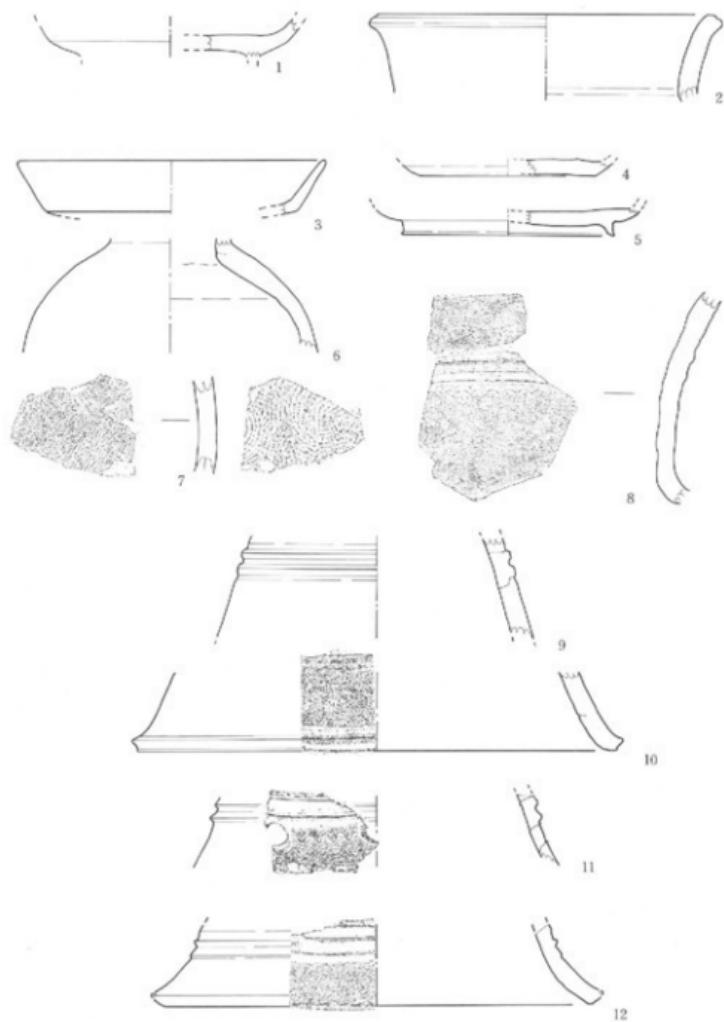
SD04（第32図）

I区（I・J-4区）に位置し、SI02・03を切り、SB02～04に切られる。SD02とは重複関係が不明であり、同時期か古い溝と考えられる。規模は長さ4.9m・幅0.3～0.5m・深さ0.2m前後である。断面は鍋底状を呈し、埋土は自然堆積を示す。方向は弧状を呈すが、およそN-18°-Eを示し、前述のSD05とほぼ平行している。

出土遺物は、土師器・弥生土器の破片少量とチップ1点が出土したが、時期決定資料にはならないと思われる。

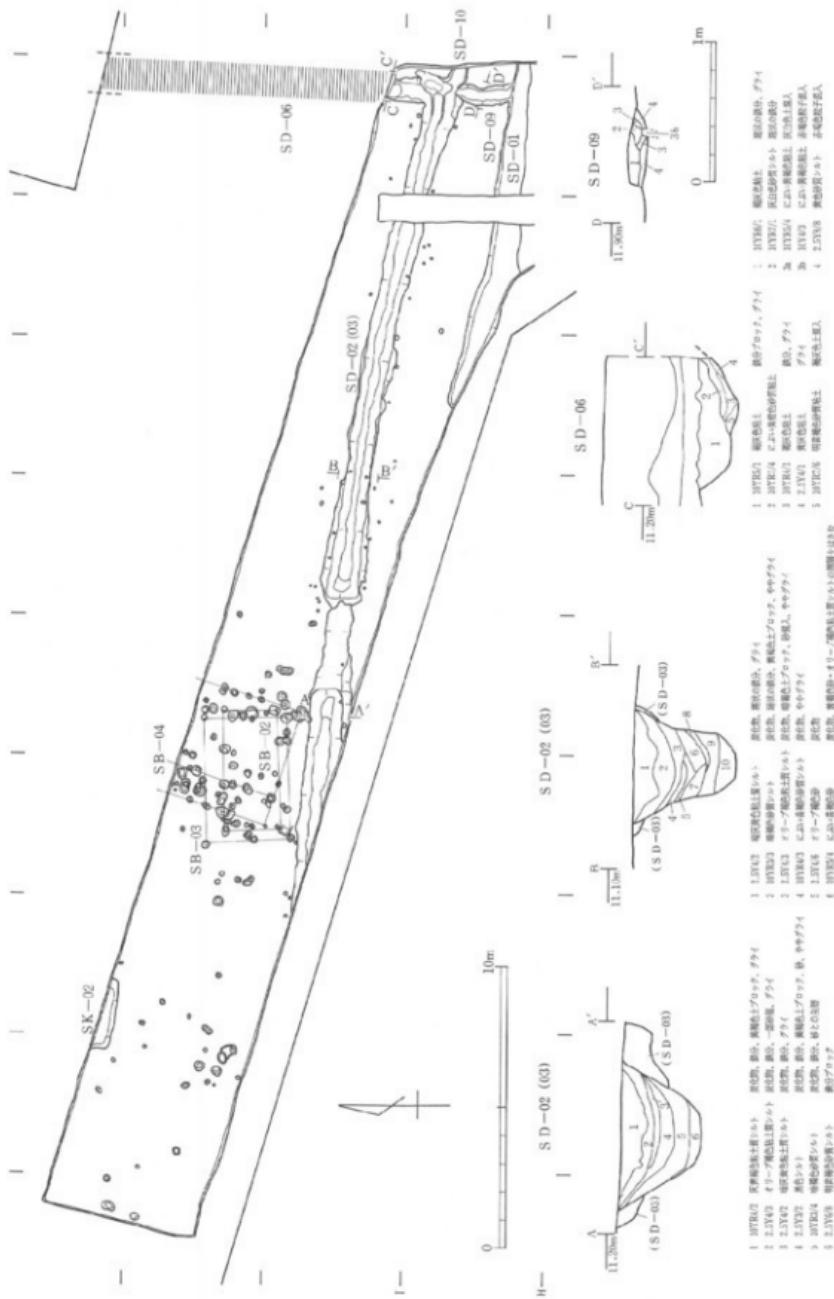
SD06（第55図）

II区（H-I-9区）に位置し、SD02・09・10と一緒にものである。規模は、長さ1.4m・幅約1.2m・深さ約0.28mを測る。方向は真北方向に近く、北へ伸びる。屋敷跡の西辺を区画する溝跡である。溝底には段差があり、埋土の堆積状況から、2時期の変遷が考えられ、SD02と

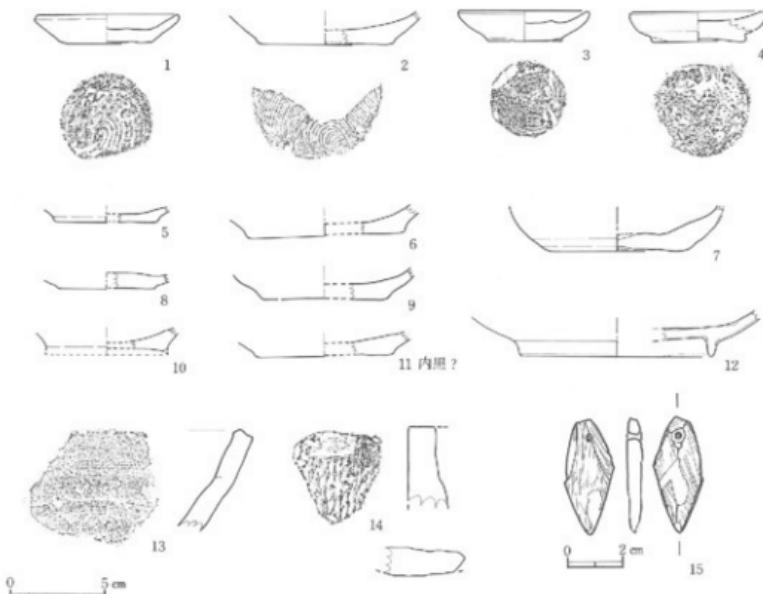


0 10cm

第54図 SD-01出土遺物 (8)



第55図 SD-02・03・06・C9平面・断面図



第56図 SD-02出土遺物 15: 1/2

対応するものと思われる。出土遺物はない。

SD07 (第 57 図)

VII区 (B-14・15区) に位置し、天地返しによる搅乱を受けていたものの、掘り込み面はII層上面と推定される。規模は精査時には底部付近しか残存していないが、断面観察等によれば、長さ 2.9 m 以上、幅 1.35 m 以上、深さ 0.4 m を測る。方向は約 N-73°-W で、現在の道路や過去に調査された近世の溝跡や建物跡と方向がおよそ一致する。断面は皿状に近く、埋土は疊混り暗褐色シルトの単層である。底面には浅いピットがみられる。出土遺物はないが、中世の遺物包含層を切る点や前述の方向性の問題から、近世の溝跡と考えられる。

SD08 (第 58 図)

II区 (D-E-11区) に位置し、SD12 内部で検出した。従って、SD12 より新しく、SD15 や SB01 より古いことが明らかである。規模は、長さ約 4.69 m 以上、幅 0.49~0.75 m、深さ 0.16~0.23 m を測り、方向は N-3°-E である。断面は鍋底形である。埋土は基本的には黒色粘土質シルトの単層であるが、南端部では 2 層に細分される。また、南端部では浅い土坑が伴

なう。この溝の上部は SD12 と共に埋め立てられたものと判断される。出土遺物は弥生土器片 1 点のみで、時期を決定できる遺物はない。

SD09 (第 55 図)

II 区 (II-9 区) に位置し、SD02・06 のコーナー部分から南側へ伸びる。SD01 に切られるが、SD02・06・10 とは一連の溝と考えられる。規模は、長さ 2.3 m 以上、幅 0.5~0.6 m、深さ 0.15 m を測るが、上部は天地返しにより搅乱を受けていることから、本来はもう少し規模が大きかったと考えてよい。断面は鍋底状に近く、埋土は粘土・砂質シルトが堆積している。溝の方向は、およそ真北方向と同じである。出土遺物はない。

SD10 (第 55 図)

II 区 (H-9 区) に位置し、SD02・06 のコーナー部分から東側へ伸びる。上部は、天地返しによる搅乱を受けている。SD02・06・09 と一連の溝と考えられる。規模は、長さ 0.7 m 以上、幅 0.55~0.6 m、深さ約 5 cm を測る。方向は不明だが、SD02 とほぼ同じになるだろう。ただ、V 区で検出できないことから、南北どちらかに屈曲するか SD01 に切られているものと予想される。出土遺物はない。

SD11 (第 58 図)

II 区 (D・E-9 区) に位置し、上部は近代のゴミ穴によって一部搅乱を受けている。近世の時期の SD01 や通路跡に切られる。土壠や SB01 (SX02) との関係は明確ではないが、溝上に土壠積土が認められないことから、土壠が機能していた時期と同じではないかと予想される。調査は、上面プランの確認と SD01 との接合部の精査に留めざるを得なかった。規模は、長さ約 7.5 m 以上、上幅 5 m 以上、深さ 1.48 m を測る。南北方向の溝跡だが、方向は明確ではない。SD01 との接合部には緩い段差があり、SD11 の方が浅くなっている。出土遺物は、1 層で常滑壺？ 1 点、2 層で土師質土器皿片 12 点があり、他に弥生土器・須恵器破片各 1 点ずつ出土している。時期決定資料は得られなかった。この溝は、城館内部をさらに区画するためのものと考えられ、同様の性格の溝は SD12・15 も指摘できよう。

SD12 (第 58 図)

III 区 (D・E-11・12 区) に位置し、SD08・15、SB01 (SX02) に切られ、SK12 を切る。本溝跡については完掘できなかった。規模は、長さ 5 m 以上、上幅約 9 m、深さ 1.5 m 以上を測る。方向は、南北方向で真北に近い。埋土は、下半部が自然堆積を示し、前述の SD08 使用後埋め立てられたもの (2a~5a 層) と考えられる。埋め立ての理由は、後述する SD15 の構築に求められよう。出土遺物は、下半の自然堆積層では鉄滓・多量の土師器片・石製模造品などがあるが、いずれも時期決定資料にならない。また、上半の盛土層では土師質土器皿丸瓦・須恵器などが出土し、土師質土器は SX02 などと類似した特徴をもっている。しかし、SD01 (中世

段階）に接続する溝跡であり、内部を区画する溝跡では最古のものである。溝内に古墳時代の遺物が多いのは、SK12 を切っているためであろうか。

SD13（第 57 図）

VI 区（A-14 区）に位置し、SB05・06 などの柱穴群に切られ、SI09 を切る。規模は、長さ 2.7 m 以上、上幅 1.6~2.0 m、深さ約 0.7 m を測る。方向は東西方向を示し、N-89°-W ではなく北に直交する。出土遺物は、36 層で土師質土器皿片 4 点・須恵器 3 点、下部（39 層相当か）では、土師質土器か赤焼土器か判別し難いもの 2 点、須恵器 2 点が出土している。

古代か中世古段階の時期が想定され、城館造営以前とみられる。

SD15（第 58 図）

II 区（D・E-10 区）に位置し、SB01（SX02）に切られ、SD08・12 上の盛土層を切っている。規模は、長さ 6 m 以上・上幅約 5.3 m・深さ 1.45 m を測る。方向は南北方向で、約 N-1°-W を示す。この溝跡も一部の精査に留まった。埋土は、上層（1・2 層）は黄褐色系砂層、下層（3・4 層）は黒褐色ないし黄褐色砂質シルトでブロック土混入が見られ、最下層（5 層）のみが自然堆積と思われる。大部分は人為的堆積ではないかと思う。また、壁面の下半部は入り組みが著しく、かなり水の影響があったものと予想される。

出土遺物は上層に多く、涅美壺？ 1 点・土師質土器皿片 3 点（厚手）が出土し、他には須恵器・弥生土器・石製模造品などがある。

SD16（第 57・65 図）

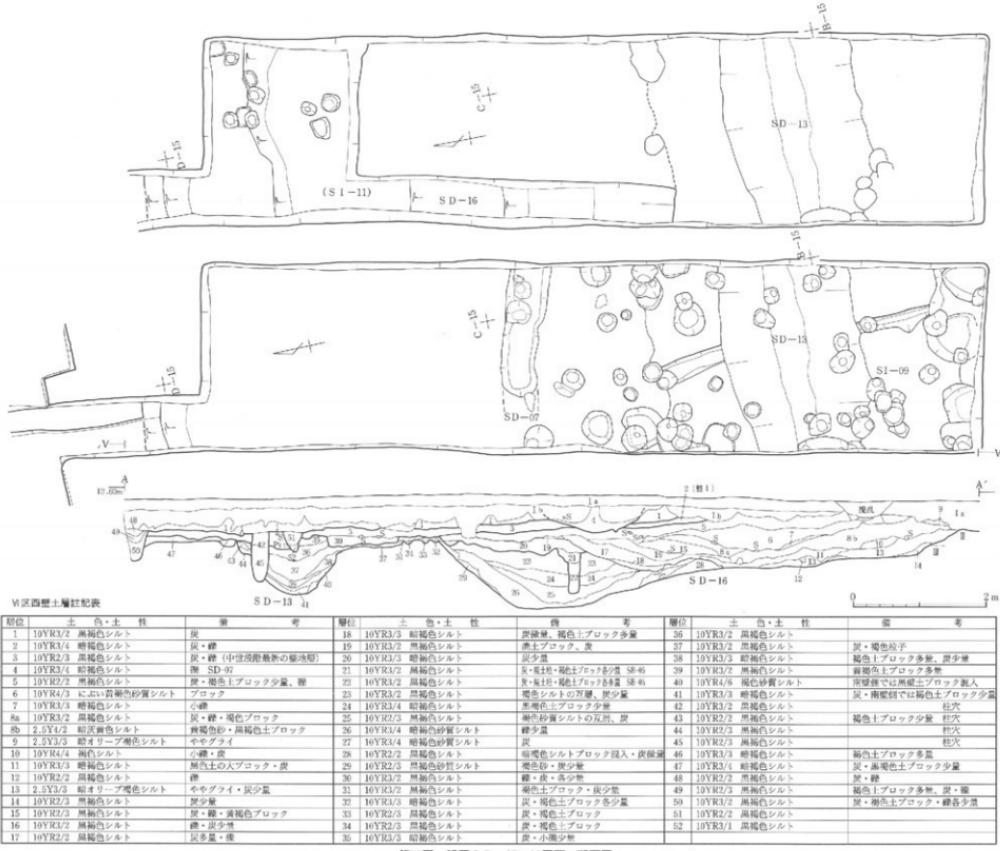
VI 区（B-C-14 区付近）に位置する。本遺構は調査区が狭いため性格が明確ではないが、溝跡として扱っておきたい。本溝跡は 2 時期に分かれ、古期段階はその上層に中世第 2 面が形成され、柱穴が検出されている。また、新期は古期の溝及び中世第 2 面を切り、埋土の上に中世の包含層及び中世第 1 面が形成されている。埋土の特徴は、両期とも褐色系と黒褐色系シルトの互層となっており、新期の 8a・8b 層には大量の礫が混入している。

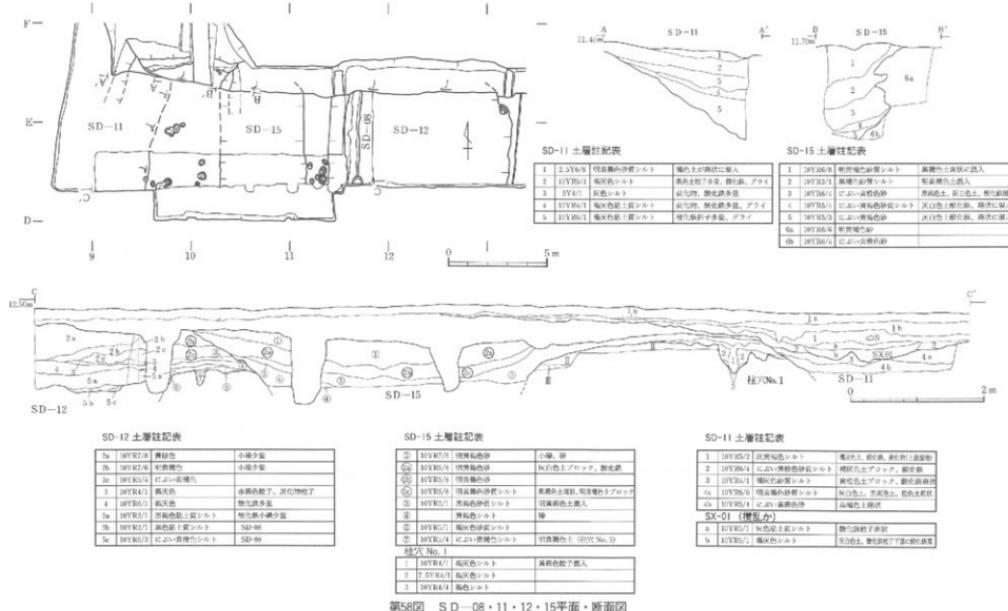
出土遺物は、新期段階では在地鉢（8 層）・土師質土器皿（8b 層 8 点・13 層 8 点・14 層 4 点）・在地産壺？ 壺（埋土下部）が出土し、他に古代の丸瓦・須恵器・土師器・弥生土器・石製模造品が出土している。古期段階は若干の土師器が出土したものの、中世の遺物は出土していない。ただ、後述するように、中世第 2 面上の 20 層では土師質土器皿や常滑の製品が出土している。この 20 層の土師質土器は、新段階の 8b・13 層・SX02 などと同様の特徴をもつ。

SD16 は一般的な溝形態とは印象を異にし、特に新期のものは埋め戻された印象を強くもつ。土壘の構築などの土取り穴という見方もあるが、調査区が狭まい点明確でない。

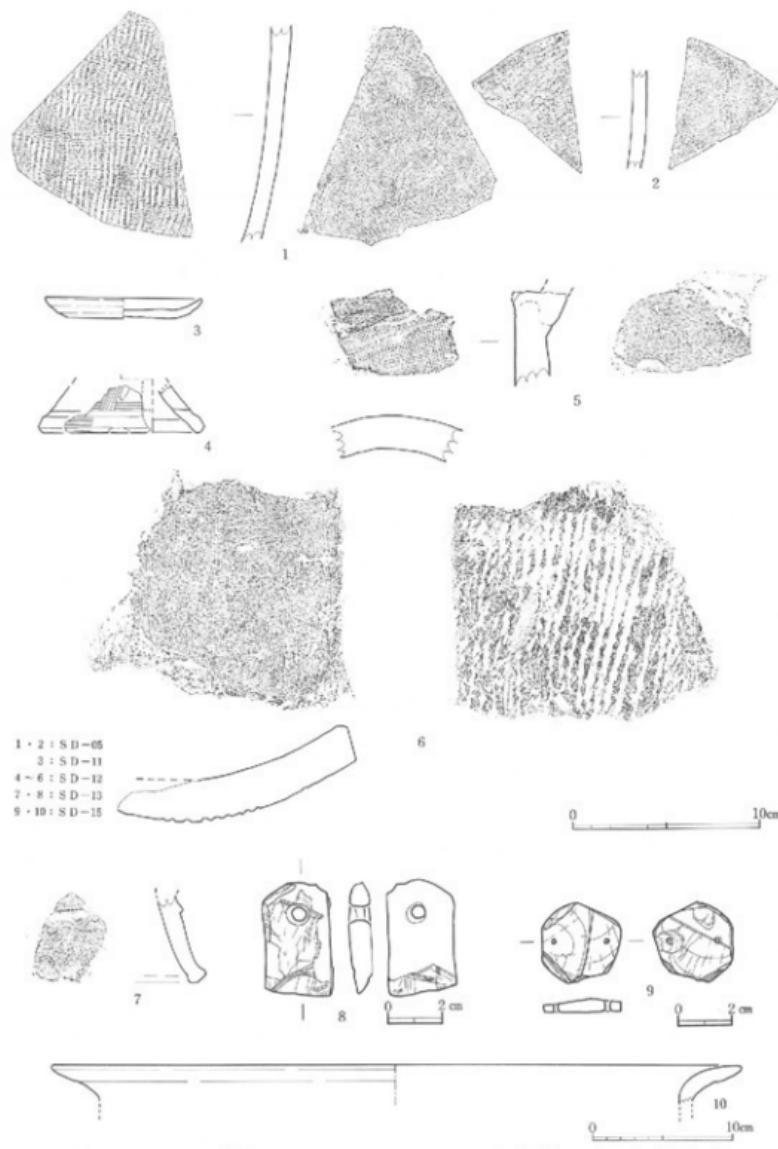
その他の溝跡（第 5 図）

ここでは、調査終了後の工事に際し確認した溝跡について列記する。





第58図 SD-08・11・12・15平面・断面図



第59図 SD-05・11・12・13・15出土遺物

SD06 : II区の北側 K-9 区で南北溝確認。SD06 の続きである。

SD17 : J-11・12 区南北溝。幅 1.2 m・深さ約 0.25 m。SD18 と接する。

SD18 : J-12 区南北溝。幅 2.4 m・深さ 0.42 m。SD17 の東側に接する。

SD19 : J-12 区南北溝。幅 0.4 m・深さ 0.1 m。SD18 の東側で平均 0.25 m 離れている。

SD20 : J-14 区。方向・規模不明。溝跡でない可能性もある。

SD21 : J-20 区。方向・規模不明。SD01 に接続する溝跡か？。

SD22 : H-21 区。方向・規模不明。溝跡でない可能性もある。

SD23 : B-22 区東西溝。幅約 2 m。VI区 SD13 あるいはVII区南端溝？の続きか。

SD01 : 調査区東辺 23 ライン付近で、A～E ライン付近まで連続する南北大溝を確認。これは、SD01 から続く、城館の西辺を区画する堀跡である。

土塁跡 (SL01) (第 5・34・60 図)

土塁跡は、D-9～11 区の精査開始後まもなく、北側から南側へ傾斜する人為堆積層を検出できることにより、その存在が確認できた。人為堆積層は、土塁基底付近の積土と理解される。また、その範囲は調査区南壁付近まで確認でき、ちょうど、土塁基底部の南辺は D ライン付近である。これに対応するように、VI区北部及びVII区北部（セクション図参照）で段差が認められた。こうした特徴から、この城館跡の北辺には東西方向の土塁が存在していたことは確実である。ただし、城館造営当初から存在したものではない。重複関係をみると、土塁は SB01 (SX02) より新しく、また SA01・02 よりも新しいものと思われる。SD11 との重複は認められず、同時期のものと理解している。規模は搅乱・削平が著しく明確ではないが、其底幅は約 6 m、長さは約 60 m と推定される。橋脚跡の南側では、土塁が切っていた可能性がある。また、E-10 区では、長さ 3.2 m・幅 0.5～0.6 m の規模で段差が検出された。したがって、土塁と堀の間に幅の狭いテラス面が存在した可能性があろう。

出土遺物は、積土上面で渥美壺？ 1 点・東濃産山茶碗 1 点・土師質土器皿 1 点・鉄製品（茎？）1 点が出土し、他に瓦（古代）・須恵器・弥生土器がある。積土上部で渥美鉢？ 1 点・角釘 1 点、8 層で中同青磁碗 1 点・土師質土器皿片 27 点・炭化種子（米など）・弥生土器片 3 点が出土している。10 層で東濃産山茶碗 1 点・土師質土器皿片 50 点・角釘 2 点・鉄製品 1 点・塊状を呈する炭化米が出土している。12 層で土師質土器皿片 9 点・炭化種子（米など）が出土している。32 層（東西セクションの 5 層相当）で土師質土器皿片 7 点・角釘 1 点・炭化種子（米など）が出土。積土最下部（11・12・14 層相当）で渥美壺？ 1 点・產地不明陶器 1 点・土師質土器皿片 7 点・須恵器 1 点が出土している。南側拡張区で土師質土器 3 点（層位不明）が出土している。これらの遺物のうち、最新のものは上面と 10 層で出土した山茶碗で 14 世紀後半とみられ、土塁構築時期はこれ以後になる。また、土師質土器皿は、SX02 などと共にロクロ調整で、底



第60図 II区、土塁出土遺物

部に板状压痕・内底面（見込）に指ナデ調整のみられる薄手のものが主体を占めている。なお、土塁が存在したと考えられるIII・IV区でも、天地返しによる攢乱坑から多数の遺物が出土している。特にIV区に多い。III区では中世陶器（渥美・常滑・在地）・中国白磁・土師質土器皿などが、IV区では中世陶器（古瀬戸・常滑・在地）・東濃産山茶碗・楠葉型瓦器椀・中国磁器（龍泉窯系蓮弁文碗・小型盤、青白磁瓶子・合子蓋、白磁水滴）・土師質土器皿が出土している。土師質土器皿については、III区ではSX02など共通する薄手のものが主体で、逆にIV区のものは、古

相を呈するとみられる厚手のものが主体である。また、III区で渡金飾金具・炉壁、IV区で鉄渟・角釘・茎？などが出土しているが、攪乱坑からは古代～近代のものも出土しており、時代を特定できない。中世の遺物については、おそらく土墨構築以前のものが主体となろう。瓦器楓は県内初の出土であり、山茶碗についてもそうであろう。

VI～VII区の調査状況

VII区（第5・57図）

VII区ではIa・Ib層で中・近世の遺物が出土しているが、それ以下の層では近世の遺物の出土はない。1～3・5・20層が中世の遺物包含層である。遺構は2・3層上面と20層下面（SD16古期の上面やSI09埋土上面）に認められる。前者を中世第1面、後者を中世第2面と理解している。こうした理解は柱穴の検出面に基づくが、SD16新期の検出面が20層上面である点で、20層上面が生活面であった可能性も考慮すべきであるが、調査区内では明確にできなかった。各層の遺物について述べる。1層では瀬戸瓶子？・在地産甕・土師質土器皿片29点、3層で土師質土器皿片73点、中國銭（宣和通宝）・刀子？・角釘・板状鉄製品・羽口片各1点が出土し、他に須恵器・土師器・弥生土器がある。5層では瀬戸灰釉盤（15世紀前半）・瓶類？・在地産（白石窯）甕・中國磁器（白磁合子身・青白磁梅瓶？）各1点、土師質土器皿片45点が出土し、他に須恵器などがある。20層では常滑甕1点、土師質土器皿片22点が出土し、他に須恵器などがある。このうち、土師質土器皿は、各層ともロクロ使用で底部に板状圧痕・内底面（見込）にナデ調整のある薄手のものが主体的である。ただし、20層ではロクロ使用の厚手も目立つ。薄手としたものは、SX02やSD01V区8a層出土のものと共通した特徴をもつ。

VIII区（第5図）

VIII区としたトレンチは、SD01が南側へ方向を変える徵候が認められないかを確認するため設けたものである。しかし、ここでは確認できなかった。SD01が方向を南側へ変えるのは、23ライン付近であることは、すでに述べた。出土遺物は中・近世の陶磁器・土師質土器皿片などが少量出土している。そのうち、第63図8は常滑の壺系片口鉢で、市内では珍しい例である。

VIII区（第5・40図）

VIII区は、城館跡内部のコーナー付近の状況を知る目的で設けたトレンチである。柱穴は減少し、SK05（ゴミ穴）や配石遺構・土坑などが検出された。生活の主要な空間ではないことが確認できた。VIII区では天地返しによる攪乱で明確ではないが、3・5層上に生活面があったようだ。また、12層上や精査最下面（III層起源の整地層上面）に生活面がある。前者を第1面、後第2面と考えてよいが、VII区の生活面と直接対応するかは明確でない。特に、本区の場合、遺構の重複や細かな盛土整地、性格不明の落ち込みなどかなりの細かな変遷が予想される。第2

面の下を深掘した結果、さらに溝跡らしいもの（SX03）が存在している。充分な精査は行なえなかったが、これは、VI区のSD16と同様の溝の一部ではないかと推測される。北端の段差（セクション図参照）は、VI区北端部のものと同様ものであろう。また、北部ではIII・IV層起源とみられる盛土整地層（23層）がみられ、土壌と関連する整地層ではないかと推測している。

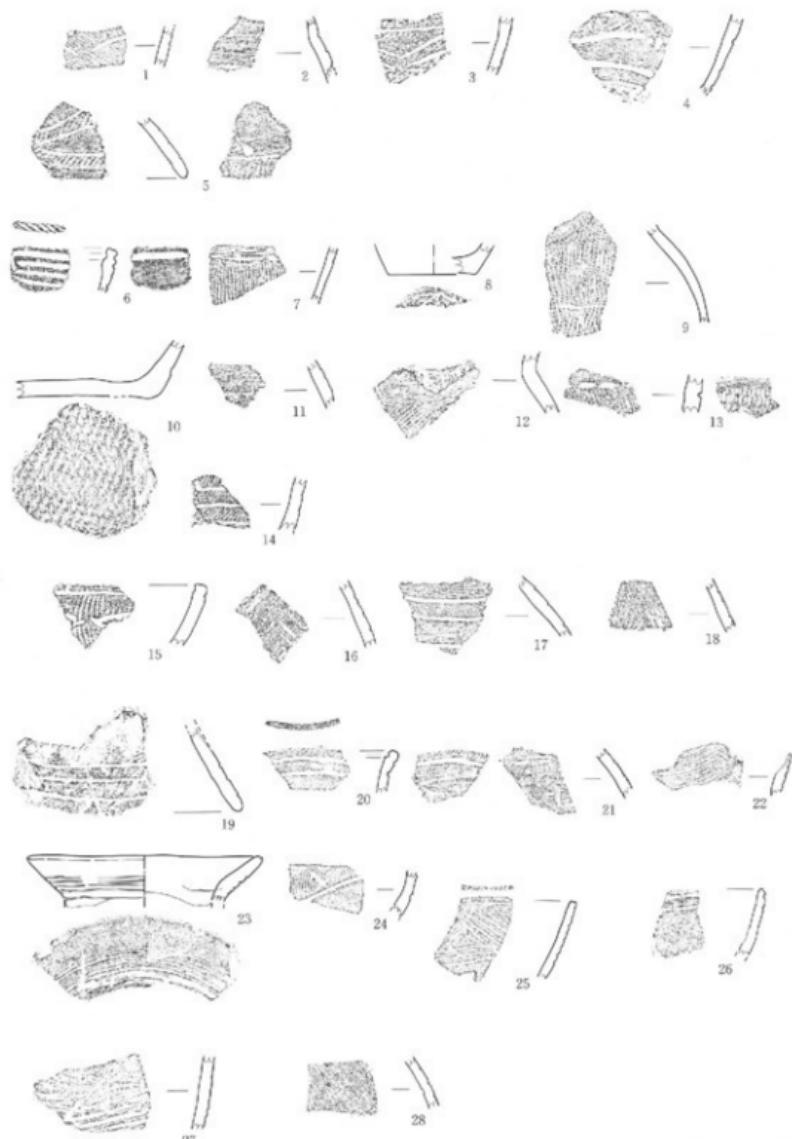
出土遺物はIa・Ib層で中・近世の遺物が出土している以外は、いずれも中世以前の遺物である。ただし、1層は遺物が出土しておらず明確でないが、他区の状況から近世以後の堆積層であろう。3層以下が中世の堆積層と考えられる。3層では、瀬戸鉄釉天目茶碗（15世紀）・灰釉盤（14世紀末～15世紀前半）、常滑壺？・在地産陶器（白石窯の甕・壺？、不明窯の甕・壺鉢）、角釘・鉄鍋（SX03のものとは別個体の口縁部破片）が出土し、他に須恵器・弥生土器などがある。23層では、中国白磁水滴、土師質土器皿片5点が出土している。南端の深掘区では、在地産陶器（白石窯鉢・不明窯鉢）、土師質土器皿片5点が上部（6～8層）で、土師質土器皿片6点が下部（9～11層）で出土している。土師質土器は、いずれもVI区と同様薄手のものがほとんどであり、わずかに、深掘区の下部のものに厚手のものがみられる。

（3）他の遺物

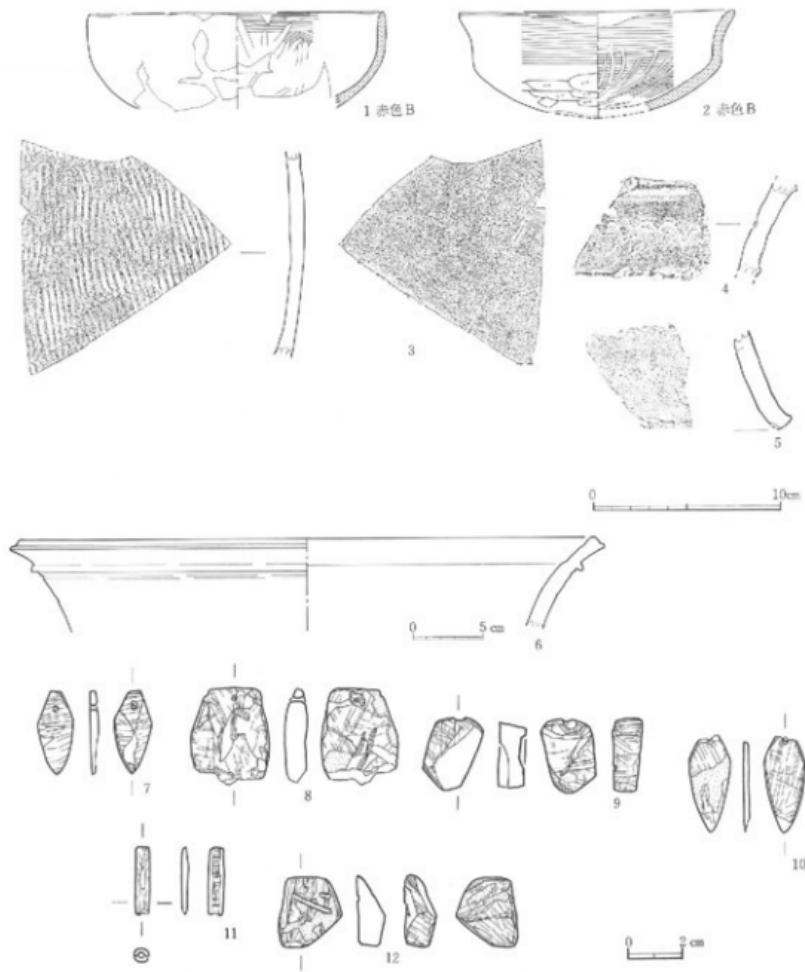
ここでは弥生時代の遺物を扱う。遺構の検出ではなく、いずれも古墳時代以後の遺構や包含層から出土したものである（第61図・第10・11表）。

第61図4・6は樹形團式以前と考えられ、特に、6は変形工字文とみられ、青木畠式併行と思われる。1～3・5・7・13～15・17・19・20・24～26は樹形團式に属し、高坏・鉢・甕・壺・蓋などがある。この時期の遺物が最も多いようである。11・16・18～21～23・28は十三塚式に属し、ほとんど壺に限られるようである。その他については、地文のみで型式を特定できないものが大半である。また、破片総数240点のうち、天王山式の可能性をもつものは僅か1点である。

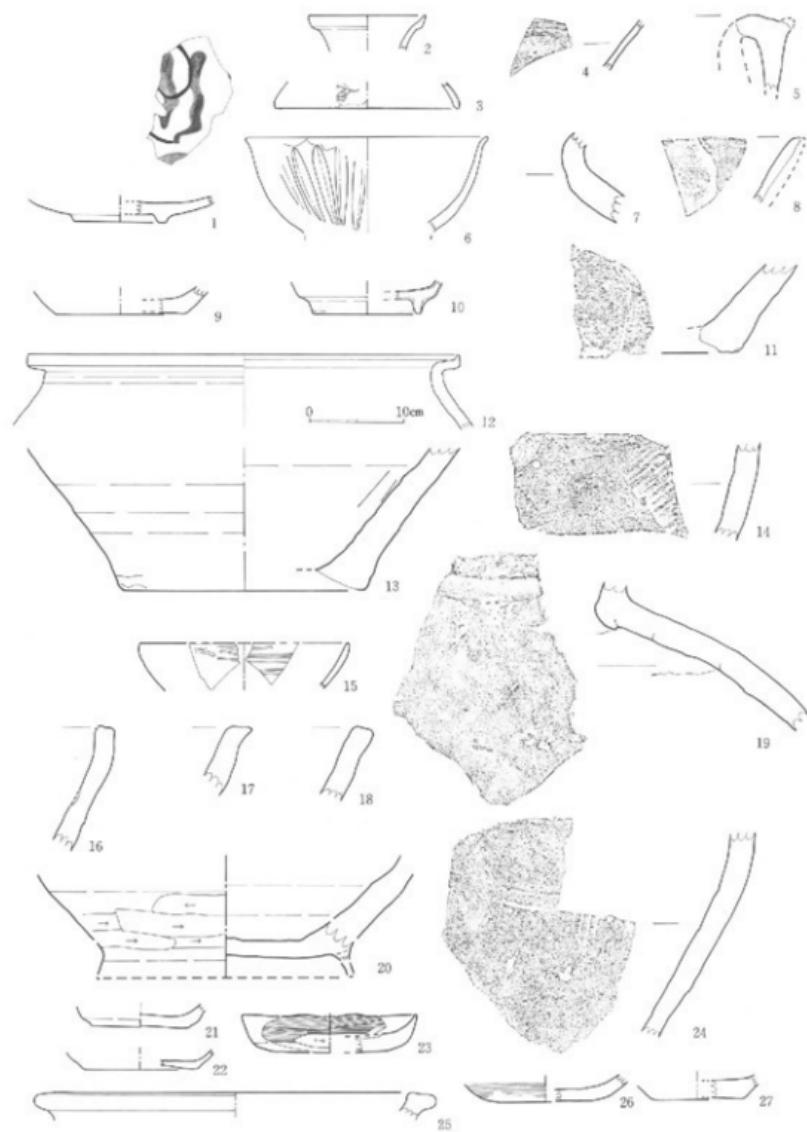
なお、中・近世の遺構などから出土した土師器・須恵器、遺構外から出土した中・近世の遺物については、特に説明を加えないで図・観察表を参照していただきたい（第62～66図・第11・12表）。



第61図 その他の出土遺物(1)弥生土器

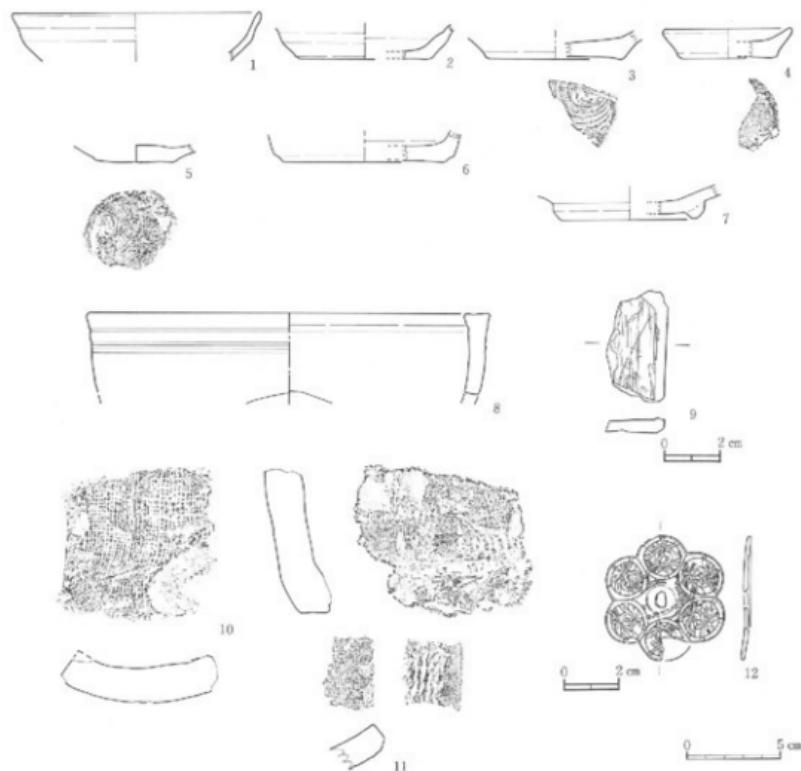


第62図 その他の出土遺物(2)造構外(古墳) 7~12: 13

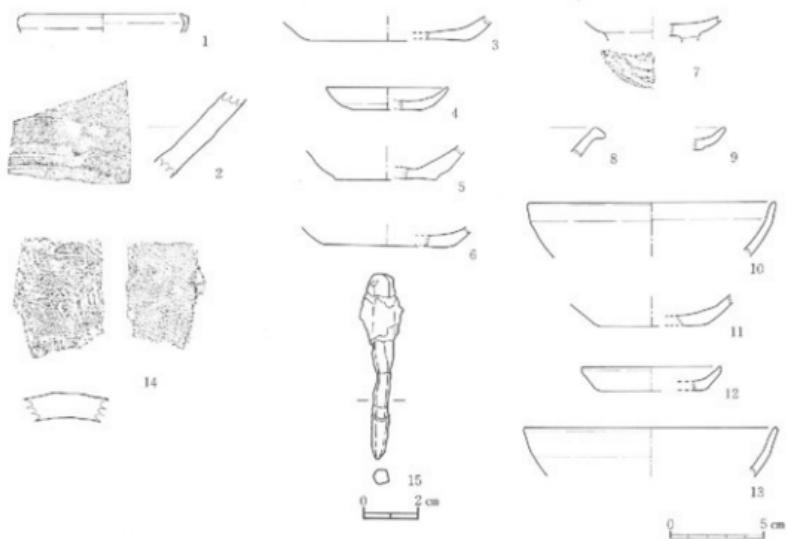


第63図 その他の出土遺物（3）遺構外（中・近世）

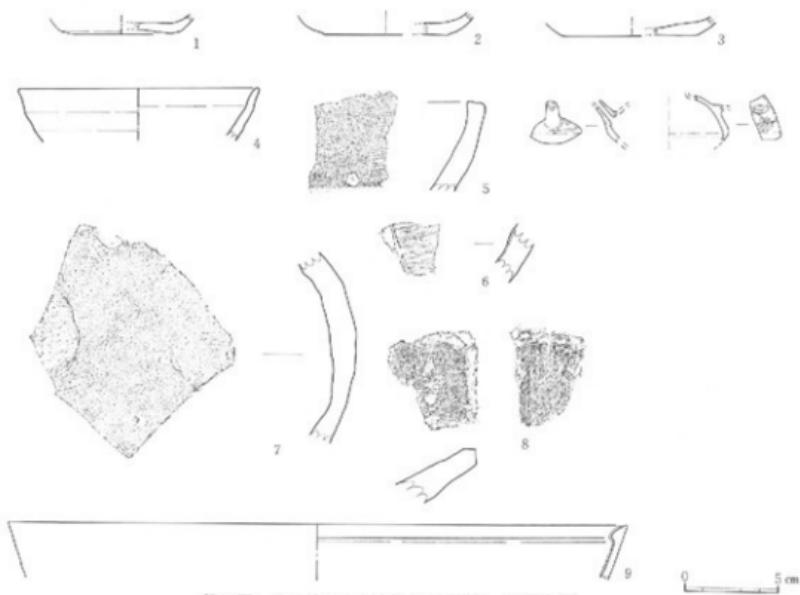
0 5 cm



第54図 その他の出土遺物（4）遺構外（III区・V区中世） 9・12：3分



第65図 SD 16・その他の出土遺物（5）遺構外（VI区中世）15：図



第66図 その他の出土遺物（6）遺構外（VII区中世）

1. 第16次出土遺物觀察表(1)

(単位 cm)

目次No.	文物No.	層位	種類	状態	寸法	特徴	備考	
SI-01 (古墳)								
8-1	954	セマツ園墳内 土 葵 壁	坪	11世 12.4	横径 (4.3)	表面(?)漆面b、体部d、内面口縁部b、体部c→d、内面基部修理、NO.12	Aa	
2	890	座 旗 上 銀 罫	坪	-	(1.1)	外面白漆面b、体部e→d、内面白漆面b、体部c→d、内面黑色修理?	B	
3	926 951	セマツ園 土 葵 壁	高 壁	21.4	-	(4.0) 外面白漆面b、体部d、内面口縁部b、体部d、白粉、M.O.15		
4	925 1002 941	セマツ園 土 葵 壁	二 階 壁	15.8	13.7 19.9	外面白漆面b、体部d、内面口縁部b、体部d、白粉、M.O.13、17、19	Aa	
5	945	セマツ園 土 葵 壁	外 面	26.2	-	(5.3) 外面白漆面b→d、体部c→d、内面口縁部b→d、体部b→d、白粉		
6	1007	セマツ園 土 葵 壁	高 壁	15.9	-	(4.0) 外面白漆面b→d、内面c→d、内面口縁部b、体部e→d、漆色目		
7	1056	灰 瓦 土 葵 壁	高 壁	56	-	(12.3) 表面M部c→d、底部d、内面底部c→d、底部c→d、底部、NO.3	B	
8	913 931	灰 瓦 土 葵 壁	高 壁	-	(8.0)	外面白漆面b、d、内面修理c(?)→d?、NO.1	Aa	
9	926	灰 瓦 土 葵 壁	高 壁	37.8	-	(6.8) 外面白漆面b→d、体部c→e→d、内面白漆面b→d→c、体部b→d、赤色B NO.?		
10	861	灰 瓦 土 葵 壁	底?	-	(8.7) (2.3)	外面白漆面c→d、内面白漆面c→d、白粉、墨青文、8-13c同一個體か		
11	1010	セマツ園 土 葵 壁	直 (心)	10.1	4.05 31.35	外面白漆面b→d、底部c→d、内面白漆面b→d、体部c、NO.14	小量A	
12	1009	セマツ園 土 葵 壁	直 (心)	11.0	4.5 14.6	外面白漆面b→d、底部c→e→d、内面白漆面b→c(?)→d、体部c	小型B	
13	923 932	セマツ園 土 葵 壁	二 階 壁	壁	13.7	-	(14.5) 外面白漆面b、体部c→e→d、内面白漆面b、体部c(?) NO.5	中量B
14	596	灰 瓦 石 製 品 例 形	高 5 1.8	-	壁厚 0.8 0.45	次類		
15	987	灰 瓦 石 製 品 有孔円盤	(3.0)	3.15	9.3	乳2×、次類		
16	917	灰 瓦 石 製 品 有孔圓盤	壁厚 (5.5) 0.80	1.3	裏24.5g、器形不清楚、NO.5			
SI-02								
10-1	524	座 旗 上 銀 罫	坪	口徑 19.3	横径 (3.6)	外面白漆面b、体部c→d、内面白漆面b、体部不明、無形	Aa	
2	880	座 土 葵 壁	坪	-	-	外面白漆面b、体部d、内面白漆面b、体部d、斜形	Aa	
3	908	座 土 葵 壁	高 壁	12.8	-	(8.2) 外面白漆面b、底部a→b→d、内面白漆面c、底部b→b、白粉、NO.2	Bb	
4	888	座 上 銀 罫	坪	21.8	9.31 25.9	外面白漆面b、体部e→c→d、内面白漆面b、体部e→c→d、白粉、基底式、NO.1	Aa	
5	423	大丸瓦し 漆表記	通	-	-	外塗隕灰。内用ナフ、アリ、TK208 頭付骨	人型A	
6	970	座 上 石 製 品 有孔円盤	高さ (1.7) 壁厚 (2.0) 0.15	-	壁厚 2×、次類			
7	965	座 土 台 製 品 例 形	3.3	(1.73)	0.45	次類		
8	911	座 土 台 製 品 口 土	0.5	0.47	0.3	-		
SI-03								
12-1	313	座 旗 上 銀 罫	坪	口徑 13.5	横径 (4.0)	外面白漆面b、体部e、内面白漆面b→d、体部c→d、白粉、無形、有漆	C	
2	615	座 土 三 階 壁	坪	15.95	-	(5.3) 外面白漆面b不明、体部e?、内面白漆面b、体部不明、白色B	A	
3	903	K NO.1 土 葵 壁	坪	15.7	-	(3.8) 外面白漆面b→d、体部c→d、内面白漆面b→d、体部d、白粉、無形	B	
4	1002	灰 NO.2 土 葵 壁	坪	14.6	-	(5.2) 外面白漆面b、体部e→d、内面白漆面b不明、体部d、白粉、無形	Aa	
5	694	K NO.2 土 葵 壁	坪	11.7	-	(6.0) 外面白漆面b、体部c→d、内面白漆面b→d、体部c→d、白粉、赤色B	Aa	
6	712	座 NO.4 土 葵 壁	坪	22.0	8.2 29.8	外面白漆面b、体部c→d、内面白漆面b、体部c→d?	人型B	
13-1	785	座 NO.3 三 階 壁	壁?	-	7.6 (25.1)	外面白漆面c→d、内面白漆面c(?)、白粉		
13	789	土 葵 壁	漆 壁 器	坪	-	(20.2) 外面白漆面b、無灰、内面白漆面b、漆面凹凸状である。漆面最大幅直径30.8cm		
14-1	782	座 台 製 品	-	高さ 33.8 (2.0)	壁厚 9.1	裏面は漆面が多い。壁厚か		
SI-04								
16-1	1903	K NO.1 土 葵 壁	坪	口徑 12.2	高さ 3.5 4.5	手口白漆面b、体部e→d、内面白漆面b→c(?)、体部c(?)→d、白粉、斜形	B	
2	720	座 NO.2 三 階 壁	坪	17.9	-	(7.1) 外面白漆面b、体部c、内面白漆面c→c、体部e→a、白粉、無形		

2. 第16次出土遺物観察表(2)

(単位 cm)

出土地名	遺物名	層位	種類	寸法	状態	特徴	圖
3 882	野 異 陶	土 壤 面	上 級 陶	高 球	-	-	(5.15)
4 718	野 異 陶	土 壽 面	下 級 陶	壺	16.0	-	(4.7)
SI-06(古期)							
16-5 723	深 NO.3	土 壽 面	壺	口徑 15.4	底径 12.0	外腹口縫部 b → c、d、体部 c → d ?, 内腹口縫部 b → c、d、体部 c → d ?, 白附	A型 C
6 718	埋 土 下 部	土 壽 面	壺	15.4	-	(5.6)	外腹口縫部 b → c、体部 c → d、内腹口縫部 b → c → e、白附
7 480	埋 土 下 部	灰 瓦	瓦?	-	-	-	外腹口クロ。内腹ナガリ。白附。Se
8 167	埋 土 上 部	灰 瓦	瓦	-	-	-	外腹口縫部 b → c、体部ハジケ多岐。Se
9 489	埋 土 上 部	石 制 品	灰 制 品	高さ 4.0	幅 2.2	厚さ 0.7	-
10 499	床 直	石 制 品	石 制 品	2.0	(1.2)	0.2	孔 1 ピ、火痕
11 481	床 直	石 制 品	石 制 品	7.0	(1.9)	(0.7)	火痕
12 458	灰 土 上 部	金 属 制 品	刀 刀?	4.4	1.05	0.2	鉄。直
13 727	野 異 六 野 土 上 部	金 属 制 品	刀 刀?	3.4	1.0	0.2	鉄。刀根?
SI-07							
19-1 1005	内 壇 沟	上 四 面	环	口径 19.1	底径 13.8	周長 6.8	外腹口縫部 b、体部 c → d、内腹口縫部 b、体部 c → d、赤色。NO.2
2 816	底 壇 NO.1	土 施 瓷	环	13.1	-	(5.5)	外腹口縫部 b、体部 c → e、内腹口縫部 b → d、体部 c → d、白附
3 825	底 壇 NO.3	二 面 瓷	环	13.6	7.4	(22.1)	外腹口縫部 b、体部 c → d、内腹口縫部 b → c (ヘラ)、体部 c (ヘラ) → d、白附
4 415	埋 土 上 部	云 鹿 瓷	环	13.2	-	(15.6)	外腹口縫部 b → e、体部 c (ヘラ)、内腹口縫部 b → c (ヘラ)、体部 c (ヘラ)、内附。小環 A
SI-08							
21-1 327	埋 土 上 部	土 芥 瓶	瓶	27.8	-	5.4	外腹口縫部 b、体部 c、内腹口縫部 b、体部 d、口附
2 734	底 壇 NO.3、4	土 芥 瓶	瓶	13.6	-	6.2	外腹口縫部 b、体部 d、为内腹口縫部 b、体部 d、白附。SI-06 と接合
3 740	埋 土 上 部	土 芥 瓶	瓶	-	-	-	外腹口縫部 b、内腹口縫部 b → d ?、内腹体部 c → d
4 483	埋 土 上 部	土 芥 瓶	瓶	-	-	-	外腹口縫部 b、内腹口縫部 b、複合口縫
5 312	南 朝 土	土 芥 瓶	瓶	-	-	-	外腹体部 b、内腹体部 b、複合口縫
6 356	床 直	土 芥 瓶	瓶	27.6	-	(8.4)	外腹口縫部 b、体部 d、片腹口縫部 b → c、体部 c、白附
7 785	埋 土 上 部	土 芥 瓶	瓶	-	-	-	外腹口縫部 b、内腹ナダ、内附。Se
8 323	埋 土 上 部	土 芥 瓶	瓶	-	-	-	外腹ナダ、内腹口クロ、孔は侵入從より上位。TK200~220噴か
9 784	床(S 12)	石 製 品	石	高さ 28.3	幅 6.8	厚さ 3.4	2面使用
22-1 270	床(S 4)	石 製 品	片	5.2	3.25	1.05	荒削り面
2 775	床(S 9)	石 製 品	片	5.2	2.13	0.4	丸削り面
3 297	床	石 製 品	片	2.05	2.7	0.65	荒削り面
4 297	床	石 製 品	石	4.8	2.5	1.0	荒削り面
5 762	床(S 2)	石 製 品	片	3.8	2.3	0.25	丸削り面
6 773	床(S 7)	石 製 品	片	2.55	3.35	0.6	荒削り面
7 772	床(S 6)	石 製 品	片	3.15	2.5	0.3	荒削り面
8 709	床(S 3)	石 製 品	片	3.5	1.4	0.25	-
9 776	床(S 10)	石 製 品	フレーク	2.4	1.75	0.5	成形破壊(内板?)
10 771	床(S 3)	石 製 品	木 成 品	2.2	2.1	0.5	乳1 p
11 321	床 土	石 製 品	片	4.0	1.05	0.6	孔1 p

3. 第15次出土遺物観察表(3)

(単位 cm)

河原名	遺物名	層位	種類	容積	法	特	性	
12	774	床(S-8)	石製品	チップ	1.9	1.5	0.1	(複数品)
13	787	床(S-1)	石製品	チップ	1.6	0.7	0.3	(複数品)
14	777	床(S-11)	石製品	フレーク	2.6	1.85	0.1	形狀記?
15	778	床(S-14)	石製品	-	2.0	0.9	0.15	點状記?
SI-10 (点) SI-11								
19-3 446	718	カマド底面	土器	器	蓋	11.5	17.6 (11.1)	外面部e、性状記、側面d、内面部c→b、口部、支脚付
SI-11								
24-1	897	C-14区層 上	土器	器	高	坪	口径 14.4 (7.5)	外底部b→d、内底部c→b、複合口縫
2	897	C-14区層 中	二重器	高	坪	-	底径 12.0 (9.0)	外底部c→b、内底部c、c(へり)、白村、赤色A
3	403	C-14区層 上	土器	器	高	坪	19.45 (7.3)	外底部c→c、d、側面c→d、c、内面部b、d、体部d、c、d区分しに付
4	787	C-14区層 上	土器	器	高	坪?	- 4.0 (5.9)	外底部c、内底部b、自然
5	396	C-14区層 上	土器	器	高	坪	13.6 (2.5)	外底部b→d、内底部b、体部c、a、複合口縫
6	786	C-14区層 下	石製品	剥	離	高さ 4.25 (2.5)	幅 2.5 (0.5)	大型C
SK-02								
26-1	614 759	埋	土	土器	器	高	口径 17.8 (6.5)	外面部縫合上b→d、底部下平c、内底部b、体部d、赤色B
?	1064	基土-下部	土器	器	高	坪	16.4 (3.5)	外面部縫合c(凹)、体部c(窪)、内面部縫合b→c、体部a、白村
SK-06								
26-3	689	埋 1	土器	土器	器	高	口径 21.5 (7.6)	外面部縫合b、体部d、内底部b→d、体部d
4	845	利 売 埋 (タヌキ)	土器	器	高?	-	6.0 (7.6)	外面部b→d、内底部c、自然
5	1001	埋 1	土器	土器	器	高	16.4 (2.0)	外底部c→d、体部c、c→d、内底部b→d、体部c?、自然
6	695 901	埋 1	土器	土器	器	高	16.3 (7.6)	外面部b、体部c、内底部b、体部c、自然
7	705	埋 2	土器	土器	器	高	-	外面部平底a、内底部c、底部不規
8	116	新 埋	土器	土器	器	合	-	外頂ロクロ、内頂ロクロ、凸縁2条(2条の可逆性あり)xc
9	713	埋 2	土器	土器	チップ	高さ 1.55 (0.5)	幅 1.45 (0.25)	(複数品)
SK-11								
26-10	675 892	埋 2	土器	土器	器	高	口径 15.6 (6.5)	外面部縫合b、体部c、内底部b、d、体部d、赤色B
11	675 892	埋 2	土器	土器	器	高	16.1 (6.5)	外面部b→c、体部c→d、内底部b→c、体部c(へり)、白村 大型 A?
SK-13								
29-1	96	埋 1	土器	土器	高	坪	口径 17.9 (6.5)	外底部b、体部c、内底部b、d、体部d、赤色B
2	813	埋 2 墓下部	土器	土器	高	坪	18.6 (6.4)	外底部b、体部c、e、内底部b、d、体部d
3	813	埋 2 墓上部	土器	土器	高	坪	15.4 (12.3)	外底部b→c、e、d、体部b→d、内底部b、d、体部c→c、d、内底部c→c、d、赤色B
4	829	埋 2 墓下部	土器	土器	高	坪	15.7 (11.7)	外底部b→d、d→b、内底部b→d→c、d→b、d→c、d、白村、赤色B
5	809	埋 2 墓 上部	土器	土器	高	坪	21.0 (15.1)	外底部b→c、d、体部b→d、内底部b、c、d、白村、赤色B
6	811	埋 2 墓下部	土器	土器	高	坪	17.0 (12.4)	外底部b→c、d、体部c?→d、内底部b→d、d、白村、赤色B
7	808	埋 2 墓下部	土器	土器	高	坪	- (16.0)	外底部c、内底部c→d、白村
8	806	埋 2 墓	土器	土器	高	坪	- (5.0)	外底部b→d、d、内底部c→d、内底部c→d、内底部c→d
9	577 807	埋 4	土器	土器	高	坪	口径 12.0 (7.2)	外底部b、体部c、d、内底部b、c、d、白村、赤色A
10	764	埋 4	土器	土器	高	坪	口径 20.3 (7.0)	外底部b、体部c(へり)、内底部b、d、体部d

4. 第16次出土遺物觀察表(4)

(单位 cm)

調査番号	位置	種類	器種	法	基	特	備
11	830	堆 3 層	土 賽 瓶	瓶	18.4	-	(6.60) 外面口縁部 b → d、体部 c、e → d、内底口縁部 b → d、体部 c → d
30-1	101	堆 1 層	土 賽 瓶	瓶	-	8.9	(8.4) 外面口縁部 c ?、内底口縁部 c、白粉、熟成
2	794	堆 2 層下部	土 賽 瓶	瓶	16.6	-	5.0 外面口縁部 c → e → d、体部 c、e → d、内底口縁部 b → a → c → d、下部 e → b → c、内底口縁部 b → d、白粉、熟成
3	741	堆 2 層上部	土 賽 瓶	瓶	16.6	-	5.7 外面 c (～?) 手
4	836	堆 2 層	土 賽 瓶	瓶 (小)	12.0	-	14.3 外底口縁部 b → c、内底口縁部 b ?、白粉、赤色 A
5	582	堆 4 層	土 賽 瓶	瓶	14.2	-	13.3 外底口縁部 b、体部 e → d、内底口縁部 b、内底 d、白粉、熟成
6	828	堆 3 層	土 賽 瓶	瓶	-	6.0	(17.6) 外底口縁部 b、体部 d、内底口縁部 c、体部 c、白粉、赤色 A
SK-12 (古窯)							
30-7	817	堆 4 层	土 賽 瓶	瓶	11.6	高径比 : 高身 : (8.60) 11.4	外底口縁部 b、体部 c、内底口縁部 b、体部 c (～?)
6	747	堆 4 层	土 賽 瓶	瓶 (小)	12.0	-	5.6 外底口縁部 b → d、内底口縁部 b、d、白粉
9	897	堆 4 层	土 賽 瓶	瓶 (小)	-	3.65	(5.7) 外底口縁部 b → d、下部 c → d、内底口縁部 b、手
10	568	堆 2 層下部	土 賽 瓶	瓶	17.8	-	(4.2) 外底口縁部 b → a、内底口縁部 a → b → c (～?)
11	814	堆 3 层	土 賽 瓶	瓶	14.8	-	(4.7) 外底口縁部 b、体部 c、内底口縁部 b、体部 c (～?)、白粉
12	814	堆 3 层	土 賽 瓶	瓶 (小)	10.8	-	(10.00) 外底口縁部 b → d、体部 c (～?) → d、内底口縁部 b、c (～?) → d、体部 c、白粉
31-1	103	堆 1 层	土 賽 瓶	瓶	14.4	-	(4.7) 外底口縁部 b、体部 c、内底口縁部 b、d、体部 d、白粉、黑彩 A
2	812	堆 2 層下部	土 賽 瓶	瓶	14.3	-	3.8 外底口縁部 b、体部 c → e → d、内底口縁部 b → d、体部 d、白粉、黑彩 B
3	580	堆 2 層下部	土 賽 瓶	瓶	12.2	-	4.1 外底口縁部 b → d、体部 d、内底口縁部 b、体部 d、内底黑色 A / 深
4	597	堆 2 层	土 賽 瓶	瓶	11.4	-	6.1 外底口縁部 b、体部 d、内底口縁部 b、体部 c (～?) → d、黑彩
5	573	堆 2 层	土 賽 瓶	瓶	15.8	-	5.8 外底口縁部 b → d、体部 c → d、内底口縁部 b → d、体部 d、黑彩
6	569	堆 2 层	土 賽 瓶	瓶	15.0	-	(4.2) 外底口縁部 b、体部 d、内底口縁部 b、体部 d、深黑色 A / 深
7	582	堆 4 层	土 賽 瓶	瓶	14.2	-	5.3 外底口縁部 b、体部 c → d、内底口縁部 b、体部 d、白粉、黑彩
8	831	堆 4 层	土 賽 瓶	瓶	12.6	-	(5.15) 外底口縁部 b → c、内底口縁部 b、体部 c → d、黑彩
9	883	堆 4 层	土 賽 瓶	瓶	14.8	-	(5.8) 外底口縁部 b → d、体部 c → d、内底口縁部 c → b、白粉、黑彩
10	890	堆 5 层	土 賽 瓶	瓶	13.6	3.8	(5.9) 外底口縁部 b、体部 d、内底口縁部 b、体部 c → d、白粉、赤色 A
11	571	堆 4 层	土 賽 瓶	瓶	-	-	外底口縁部 b、体部 c → e、内底口縁部 b、体部 c (～?)、白粉、黑彩 B
12	741	堆 1 层	土 賽 瓶	瓶	-	-	外底口縁部 b、体部 d、内底口縁部 b、体部 c → d、黑彩
13	729	堆 1 层	土 賽 瓶	瓶	-	-	外底口縁部 b、体部 c、内底口縁部 b、体部 d、白粉、黑色 A / 赤色 A
14	589	堆 1 层下部	土 賽 瓶	瓶	-	-	外底口縁部 b、体部 c ?、黑彩
15	599	堆 1 层下部	土 賽 瓶	瓶	-	-	外底口縁部 b、体部 c、内底口縁部 c、黑彩
16	103	堆 1 层	土 賽 瓶	瓶	-	-	外底口縁部 b、体部 c → d、内底口縁部 b、体部 d、白粉、黑彩
17	897	堆 1 层	土 賽 瓶	瓶	-	-	外底口縁部 b → e、内底口縁部 b → e、体部 c → d、白粉
18	558	堆 2 层	土 賽 瓶	瓶	-	-	外底口縁部 b、体部 c ?、内底口縁部 b、体部 b → c ?、白粉、黑彩
19	572	堆 1 层	土 賽 瓶	瓶	-	-	外底口縁部 b、体部 c ?、黑彩
20	546	堆 1 层	土 賽 瓶	瓶	-	-	外底口縁部 b、内底口縁部 b、白粉
21	586	堆 1 层	石 制 壺	壺	員身 : (4.30)	厚さ : 3.9	厚さ : 0.4 陶製壺
22	569	堆 1 层	石 制 壺	壺	1.45	0.8	0.25 孔 2ヶ、火痕、模様 A
23	599	堆 1 层下部	石 制 壺	壺	1.7	2.1	0.35 孔 1ヶ、模様 A
24	571	堆 1 层	石 制 壺	壺	(6.65)	4.1	1.25 孔 2ヶ、火痕

5. 第16次出土遺物観察表(5)

(単位 cm)

販種名	造形%	質	施加	表面	状態		特徴	
25	57%	陶	土質質土	粗	5.5	6.25	9.85	輪形切7、煮沸?
SB-01(中型)								
25-1	43%	陶	土質質土	粗	5.5	6.25	1.4	B、ロクロ、切り残し不規
SK-02								
35-2	117	陶	土	半塑陶器	粗?	口徑	底径	断面 外輪削毛片、表面、12~13c
3	117	陶	土	土質質土	粗	—	5.4	(9.8) A、ロクロ、見込みナメ、輪形切7、煮沸?
4	117	陶	土	土質質土	粗	7.6	(5.4)	1.8 A、ロクロ、切り残し不規、厚手
5	117	陶	土	土質質土	粗	8.1	5.4	1.5 B、ロクロ、切り残し不規、輪形
6	115	陶	土	土質質土	粗	7.6	5.1	1.5 A、ロクロ、見込みナメ、輪形切7、煮沸?
7	115	陶	土	土質質土	粗	—	6.1	(3.5) A、ロクロ、見込みナメ、輪形切7、輪形切7
SK-07(中型)								
26-8	115	陶	土	土質質土	粗	口徑	底径	A、ロクロ、見込みナメ、輪形切7
9	115	陶	土	土質質土	粗	7.6	8.0	1.1 A、ロクロ、見込みナメ、輪形切7、輪形切7
10	115	陶	土	土質質土	粗	6.8	4.9	1.2 A、ロクロ、内輪み切?
11	115	陶	土	土質質土	粗	7.5	3.1	1.2 B、ロクロ、切り残し不規、板状底模
12	115	陶	土	二重質土	粗	6.5	4.5	1.0 A、ロクロ、切り残し不規
13	115	陶	土	二重質土	粗	—	12.9	A、ロクロ
14	115	陶	土	二重質土	粗	8.6	—	(1.2) A、ロクロ
15	115	陶	土	土質質土	粗	13.7	—	1.2 B、ロクロ
16	115	陶	土	二重質土	粗	—	7.3	(1.9) D、ロクロ、見込みナメ、輪形切7、輪形切7
17	351	陶	下	土質質土	粗	12.8	7.1	3.9 A、ロクロ、内輪み切?
18	642	陶	面	土質質土	粗	—	5.0	(3.5) B、ロクロ、内輪み切?
19	117	陶	土	石製品	有孔	通さ	幅さ	通さ 2.25 3.7 0.4
20	239	陶	土	金属性品	粗	(3.6)	0.8	0.75 楕、折沿、歩道欠損
21	115	陶	土	金属製品	粗	8.4	0.5	0.5 楕、折沿
22	125	陶	土	金屬製品	粗	7	0.9	0.6 楕、欠損、圓筒状出土
SK-05								
41-1	226	陶	J.素面	中古陶器	粗	口徑	底径	表面剥離、在毛辺?、14c、取り上げ NO.3+NO.5
2	486	陶	土	丸頭製品	粗	通さ	幅さ	通さ 5.25 0.4 0.48 距、折沿
3	486	陶	土	金頭製品	粗	7.9	0.36	0.5 距、折沿
4	535	陶	土	石製品	粗	(11.1)	(0.3)	(2.1) 天然品、輪形切7未加工、斜板面
5	527	陶	土	中古陶器	粗	—	—	— 輪形面、薄壁 (底子缺?)、在毛辺、14c
7	486	陶	土	石製品	有孔	通さ	幅さ	通さ 2.25 3.7 0.4
SK-07								
41-6	620	陶	土	等器	粗	口徑	底径	外側: 斜面b、斜面e → c → d、内側面斜面b、斜面c、底計、底色B
SK-08								
41-8	626	陶	土	等器	粗	—	—	外側タリガリ: 底地、ヘラ書き SK-02 と複合
SK-10								

6. 第16次出土遺物觀察表(6)

(单位 cm³)

器種名		遺物名		層位		埋め方		性質		測量		特徴	
日 9	662	屋上土	中世陶器	灰	-	-	-	黒芯、灰褐色	-	-	-	-	-
10	684	堆 1	中世陶器	灰	-	-	-	白腹型(縦14cm)、白石頭系?、13c~14c	-	-	-	-	-
SD-U1													
17-1	31	堆 2 屋上	近世陶器	灰	口横 13.8	直徑 (13.8)	深さ (2.3)	灰褐色、透明な灰褐色、質入、灰付のみ留め(留目)、肥頸系、京焼系。17c後半~18c初葉	-	-	-	-	-
2	123	堆 3、4 墓	近世陶器	灰	12.0	-	(1.0)	灰褐色、不透明、光沢なし、全体に黒い質入、肥底平明(肥底無か)、17cか	-	-	-	-	-
3	33	堆 2 屋	近世陶器	丸 2?	-	7.3	(1.0)	灰褐色、透明白灰褐色、質入、削り出し舟形~高台内腹部、美濃、17c	-	-	-	-	-
4	38	堆 2 屋下部	近世陶器	灰 黑	-	-	-	黒芯、不透明な灰褐色、外腹に削り付、美濃、17c	-	-	-	-	-
5	38	堆 2 屋下部	近世樹脂物	灰	13.0	7.1	3.3	半透明點、1(縦)、灰付のみ留め、黒芯か、肥頸、1640年代	-	-	-	-	-
6	38	堆 2 屋下部	近世樹脂物	灰	-	高台径 6.3	(1.7)	半透明點、1(縦)、灰付留め、肥頸、1640~50年代	-	-	-	-	-
7	38	堆 2 屋下部	近世樹脂物	ロ ブ 通	14.5	-	(3.0)	灰付、青緑の島々透明な物、島状壓模狀、京焼、1630~40年代	-	-	-	-	-
8	225	堆 3 屋	近世陶器	灰 花 瓶	13.8	-	(2.1)	黒芯、不透明な灰白色質、口式、内腹内側付近に削離	-	-	-	-	-
9	229	堆 2 屋	近世陶器	火 入	(11.3)	-	(2.1)	黒芯、灰褐色の質細糸、質入、大底、17c	-	-	-	-	-
10	192	青 磁 杯 泡	近世陶器	天目茶碗	-	高台径 4.8	(3.7)	黒芯、黑褐色、削り出し舟形、撇口茶碗、17c後葉	-	-	-	-	-
SD-U2													
47-11	24	堆 1、2 屋	近世陶器	灰 血 ?	口横 12.0	高台径 (12.0)	深さ (2.2)	黒芯茶碗、不透明な黄褐色、削り出し舟形、内腹墨付~舟台内腹部、質入、美濃、17c後葉	-	-	-	-	-
12	670	堆 7	近世陶器	丸 2?	-	高台径 2.1	(1.4)	黒芯茶碗、透明白灰褐色、削り出しあわらか、全体に質入、見込みに凸凹、美濃、17c後葉	-	-	-	-	-
13	37	堆 1 七面	近世陶器	天目茶碗	12.8	-	(4.2)	灰色系の物、丸底あり、縦 реб裏、大底、16c末	-	-	-	-	-
14	32	堆 1 上	中世陶器	天目茶碗	-	高台径 1.5	(1.0)	レトロ調感、削り出し舟形、外腹斜削、内腹全面施物、黒芯、光沢なし、15c前~前半	-	-	-	-	-
15	39	堆 1 屋	近世陶器	おろし皿	-	高台径 5.9	(1.0)	円底余切り、底付15c前半	-	-	-	-	-
16	49	堆 1、2 屋	中世陶器	繩 織 盆	-	-	(1.5)	ロクロ、30款、繩目地、底付、12c前半	-	-	-	-	-
17	274	堆 3 屋	中世陶器	灰 筒 盆	17.2	-	(1.2)	灰芯、底付無、質入、粗削糞、削付、14c後半	-	-	-	-	-
18	60	堆 4 屋	中世陶器	おろし皿	13.1	-	(2.4)	ロクロ、灰芯、透明白灰褐色、質入、底付、14c前半~15c前半	-	-	-	-	-
19	61	堆 5 屋	中世陶器	人丁小皿	-	4.4	(1.0)	圓底余切り、内外レフラー→底凸みテグ、粗削糰、底付、15c	-	-	-	-	-
20	963	堆 10 屋	中世陶器	灰	-	-	(2.0)	ロクロ、灰芯、透明白灰褐色、質入が悪いし、底付、15c前半	-	-	-	-	-
21	384	堆 11 上	中世陶器	灰	-	22.2	(1.0)	灰芯、外腹底付崩れあり(文字?)、底付、15c前半、底付近縁剥	-	-	-	-	-
22	961	堆 1 上	中世陶器	灰 筒 盆	-	11.9	(2.7)	灰芯、底付無、質入、粗削糰、底付、14c後半	-	-	-	-	-
SD-U3													
56-1	33	青 2 屋	近世陶器	新井文太 鉢	31.8	-	(3.0)	質入灰系、直化裡工(新井文太)、質入、17c	-	-	-	-	-
2	977	青 磁 杯 泡	近世陶器	灰	21.6	-	(8.7)	底付無、口縁部に質離	-	-	-	-	-
3	367	青 6 屋	近世陶器	灰 瓶	-	-	-	底付無、底付10cm、1(縦)部に施物、強化系、質離系か、17c前半	-	-	-	-	-
4	253	堆 1 上	中世陶器	瓶	-	-	-	底付20、29、34、38と複合	-	-	-	-	-
5	93	青 磁 杯 1	中世陶器	青 17 錐	(35.2)	-	(9.0)	ロクロ、内腹部に複数の吹き出し、底付30、14c	-	-	-	-	-
6	694	堆 1 上 部	中世陶器	灰 瓶	-	-	-	内腹に底付6本以上、底付は口縁部底付までくる、在庫10、15c	-	-	-	-	-
7	54	堆 3 7 部	中世陶器	灰 瓶	-	13.8	(8.3)	ロクロ、内腹や中腰部、S字付着、衣附、14c	-	-	-	-	-
8	189	堆 2 2 部	中世陶器	灰 瓶	-	-	-	口縁付近に複数の底付4本あり、在庫7、15c以後?	-	-	-	-	-
9	52	堆 3 屋	中世陶器	瓶	-	13.2	(4.0)	ロクロ、内腹剥离し悪化、在庫7、14c	-	-	-	-	-
10	60	堆 4 屋	中世陶器	瓶	25	-	-	瓶底2本以上、在庫9、14c(Ⅴ区)	-	-	-	-	-
11	50	堆 5 屋	中世陶器	瓶	-	-	-	口縁部欠け、底付9、13c~14c、5b 墓崩れ	-	-	-	-	-
12	253	堆 1 屋	中世陶器	瓶?	-	-	-	自然無、底付9、14c、V区	-	-	-	-	-

7. 第16次出土遺物観察表(7)

(単位 cm)

回収No	遺物No	層位	種類	性質	法 番	特徴	備 考
13	251	壁 1 層	中空陶器	漆	-	-	外圍に赤目紅斑、各地点
49-1	264	壁 4 層	中空陶器	漆	-	(2.0)	赤褐色の自然地、常滑、13c 常滑、山形窯系
2	187	壁 8 層	中空陶器	片口鉢	26.8	-	(5.0) 口縁端部取扱い、変底形状、変滑、14c 後半
3	62	壁 3 層	中空陶器	漆	-	-	瓦黒釉、常滑 (V区)
4	214	壁 4 層	中空陶器	漆	-	-	瓦黒釉、押印 (平行) あり、常滑
5	385	壁 5 層	中空陶器	漆?	-	-	内、外漆ナガ、常滑13c、14cと部分
6	499	壁 6 層	中空陶器	漆?	-	-	内、外漆ナガ、常滑13c、14cと部分
7	206	壁 1 層	中空陶器	漆	-	-	自然釉、押印 (平行) あり、常滑、13c? (V区)
8	174	調 区 中 国	漆	漆	-	-	(2.4) 青磁、透明な青緑色、錦織文、13c~14c 青
9	189	調 区 中 国	漆	漆	-	-	(3.0) 青磁、透明な青緑色、錦織文、14c 中~後半
10	187	調 区 中 国	漆	漆	-	-	(1.4) 青磁、不透明な青色、無文少、織紋口縁、14c 後半以後
11	979	瓦 四 隅 中 国	(山形) 漆	-	-	(5.0)	青磁、透明な青緑色 (若干剥落あり)、内面に織紋文様あり、14c 後半以後
12	25	壁 1、2 層 中 国	小 漆	-	6.8	(0.9)	青磁、西朝良賀真田 (岩手質入あり)、外面銀色、13c
13	82	壁 7 層 空 中 国	漆	-	7.1 (頂上部 6.7)	(3.5)	青磁、半透明な青緑色、外底のみ剥離、内面に漆塗施用跡 13c~14c
14	960	11 層 上面 中 国	漆	-	16.9	(2.3)	青磁、淡緑色、大型品、盤付のみ露せ、鐵多石、14c 中~後半
15	982	壁 1 層 中 国	漆?	-	-	(3.7)	青白磁、半透明な青緑色、外底は無施
SD-II (中井)							
16	33	壁 2 層 中 国	小 漆?	口縁	漆器	(2.2)	青白磁、不透明な淡青色、質入、外底に落墨部あり、13c~14c
59-1	39	壁 3 層 中空陶器	漆	57.5	-	(9.0)	ナガ、在施21c、14cか
51-1	48	堆3脚下部	赤陶土質	高台骨牌	-	8.2	(3.0) A、ロクロ、切り離し不明、付落石
2	612	壁 11 層 漆底土質?	高台骨牌	-	8.0	(1.4)	A、ロクロ、切り離し不明
3	196	南部堆土	赤陶?	高台骨牌	-	6.6	(0.9) B、ロクロ
4	382	南壁付近	赤陶土質?	高台骨牌	-	7.4	(1.4) D、ロクロ、圓範条切り
5	977	南壁付近	一郎質土質?	不 明	-	-	外側凸出 (脚付) 白芯土+ロクロテナガ下部ヘラナダ、凹隙一箇内面にクロナダか
6	333	壁 1 層 土質質土質	漆	-	7.1	(2.0)	A、ロクロ、見込みナダ、圓範条切り、内外面に油煙付着
7	231	壁 1、2 層 土質質土質	漆	-	9.4	(2.5)	D、ロクロ、切り離し不明
8	44	壁 3 層 土質質土質	小 漆	7.2	3.0	1.6	D、ロクロ、見込みナダ、圓範条切り
9	53	壁 7 層 土質質土質	小 漆	-	4.8	(0.7)	A、ロクロ、圓範条切り、波状压痕
16	225	壁 4 层	土質質土質	漆	15.0	7.8	3.0 D、ロクロ、切り離し不明、磨耗が激しい (内外とも)
11	389	壁 5 层	土質質土質	小 漆	-	5.4	(1.6) D、ロクロ、切り離し不明、厚手
12	276	西南付近	土質質土質	小 漆	-	6.2	(1.0) A、ロクロ、圓範条切り
13	428	壁8号壁下	土質質土質	小 漆	12.8	-	(2.8) A、ロクロ、被削
14	147	壁8号壁上	土質質土質	小 漆	-	6.0	(1.0) D、ロクロ、圓範条切り
15	172	壁 8 層	土質質土質	漆	12.3	7.8	3.5 A、ロクロ、見込みナダ、円範条切り、横状压痕
16	82	壁 8 層	土質質土質	漆	-	7.8	(1.4) D、ロクロ、見込みナダ、圓範条切り、波状压痕?
17	712	壁 8 層 二郎第一	土質質土質	漆	-	7.2	(1.0) A、ロクロ、圓範条切り
18	82	壁 8 層 二郎質土質	漆	-	8.0	(3.5)	A、ロクロ、見込みナダ、圓範条切り、横状压痕
19	173	壁 8 層 土質質土質	漆	-	12.2	7.5	3.3 A、ロクロ、見込みナダ、圓範条切り、波状压痕 NO. 173 と 2 項セット

8. 第16次出土遺物観察表(8)

(単位 cm)

登録No	遺物No	層	種類	特徴	法量	特	性
30	82	埋 5 a 層	土質質土 材	柱	7.2 (10.3)	A. ロクロ、山根舟切り、板状压縫	
21	148	埋 5 a 層	土質質土 材	小 柱	8.3 3.6 1.8	A. ロクロ、見込みナダ、山根舟切り、板状压縫、露床あり	
22	141	埋 5 a 層	土質質土 材	小 柱	7.9 5.6 1.7	A. ロクロ、見込みナダ、山根舟切り、板状压縫	
23	32,341	埋 5 a 層 (木質構造)	土質質土 材	小 柱	8.0 5.5 1.7	A. ロクロ、山根舟切り、全体に露床	
24	341	埋 5 a 層 (木質構造)	土質質土 材	小 柱	8.6 - 1.7	A. ロクロ、全体に露床	
25	161,261	埋 5 a 層	土質質土 材	柱	19.4 8.0 3.4	A. ロクロ、見込みナダ、山根舟切り、板状压縫	
26	173	埋 5 a 層	土質質土 材	柱	12.6 7.6 3.4	A. ロクロ、見込みナダ、山根舟切り、露床压縫、透視が美しい	
27	966	埋 5 a 層 (木質構造)	土質質土 材	柱	13.2 7.7 3.3	A. ロクロ、見込みナダ、山根舟切り ?, 一括 (NO.9)	
28	966	埋 5 a 層 (木質構造)	土質質土 材	柱	12.7 7.8 3.5	A. ロクロ、見込みナダ、山根舟切り ?, 板状压縫 ?, 一括 (NO.4)	
29	165	埋 5 a 層 (木質構造)	土質質土 材	柱	13.0 8.4 3.5	A. ロクロ、見込みナダ、板状压縫, 一括 (NO.2)	
30	966	埋 5 a 層 (木質構造)	土質質土 材	柱	8.1 5.0 2.0	B. ロクロ、見込みナダ、山根舟切り、板状压縫、一括 (NO.8)	
32-1	966	埋 5 a 層 (木質構造)	土質質土 材	柱	12.2 6.7 3.4	A. ロクロ、見込みナダ、板状压縫、一括 (NO.2)	
2	966	埋 5 a 層 (木質構造)	土質質土 材	柱	8.0 5.8 1.6	A. ロクロ、見込みナダ、山根舟切り、板状压縫、一括 (NO.5)	
3	966	埋 5 a 層 (木質構造)	土質質土 材	柱	8.1 5.2 1.5	A. ロクロ、見込みナダ、山根舟切り、板状压縫、一括 (NO.2)	
4	966	埋 5 a 層 (木質構造)	土質質土 材	柱	8.2 5.3 1.7	A. ロクロ、見込みナダ、山根舟切り、板状压縫、一括 (NO.6)	
5	232	埋 1~2層	瓦	瓦	大きさ (4.5) (2.3)	厚さ 1.9	田舎町目、瓦面ナダ
6	978	埋 5 層	石製品	下 帽	5.1 (5.30)	内側有裂隙、多角形 (10角) 破片	
7	36	埋 2層下部	石製品	底	6 (4.73)	内側有裂隙	
8	272	埋 4 層	石製品	底 石	7.0 3.25 (2.4)	内側有裂隙	
SD-01 (竹村)							
32-9	1012	埋 1 層	金具詰合	釘?	長さ (14.8)	幅 0.3	頭、頭部先端欠損、木質付着、柱穴 NO.1
19	308	埋 1、2 層	金屬製品	針	4.5	0.6	頭、頭部欠損、頭部幅1.0
11	49	埋 1、2 層	金屬製品	小的刀子	長さ 2.6	幅 0.4	頭、刀身長2.5、幅0.7、第30.15、次腹筋、全身1.65
13	323	埋 6 層	金屬製品	刀子?	長さ (4.0)	幅 0.8	頭、竿
13	89	埋 1、2 層	金屬製品	刀?	10.6	1.9	頭、2点結合部長7.15以上、現存長13.7以上
14	82	埋 5 a 層	金屬製品	刀?	長さ (3.63)	幅 0.3	本体横径2.2、用一個抜か
15	229	埋 2 层	金屬製品	刀	長さ 4.3	幅 0.9	頭、平打、次頭、頭部幅1.05 cm
16	164	埋 1、2 層	金屬製品	刀?	長さ (1.77)	幅 0.65	合板、次頭、次物文様、溝溝しはない。
17	225	埋 3 層	金屬製品	金	長さ 1.26	幅 1.4	頭、変形
18	522	埋 10 層	金屬製品	釘	長さ (2.7)	幅 0.4	頭、折れ、先端部欠損
19	38	埋 2 層	金屬製品	金	長さ (4.7)	-	合板、次頭、次頭、次物 (鑑字無) 深度1.1.
20	1	埋 3 層	石 製品	巻石?	26.2 23.1 13.8	巻石の底径約16.5 cm	
24-1	421	埋 1 層	中空陶器	口盤	直径 9.5	厚さ (2.1)	露床、腰鉢、コロ→鉢輪へラ起り、座地不明、Dc: 腹中以前6
2	361	埋 4 層	中空陶器	底	17.5	(4.7)	内側ロクロ調節、軸分の吸き出し、不明、12c~13c、測定所無
5	32	埋土上部	骨 素志	耳	16.4 -	(2.9)	骨棒ロクロ。内面ロクロ、露床ヘラ起り、丸底か、7c~8c
4	366	埋 6 層	中空陶器	耳	19.30	(0.9)	外面レクロ、内面ロクロ、内面ヘラ起り、切り落し不規
5	38	埋土上部	骨 素志	耳	(11.4)	(1.4)	外面ロクロ、内面ナダ、露床ロクロナダ、刃立端なし明、白骨、7c~8c
6	349	未発行付近	骨 素志	耳	長さ (6.4)	(6.1)	外側銀色糸然然、内面ロクロ、プラスコ形? 内裏後輪か(漁入品?)

9. 第16次出土遺物観察表(9)

(単位 cm)

調査No.	遺物No.	層	状	種類	法	法	特	
7	155	埋土	白	漆器	圓	-	外周削毛足? → ナギ、内面削毛目? → あて脚、古墳時代か、17次に類似あり	
8	77 193	埋土	白	漆器	大和鏡	-	外周ロクロ、内面ロクロ。波状文+凸帯2条、Sc	
9	283	埋土	黄	漆器	盆	-	(5.4) 外周ロクロ。片面ナギ、凸帯2条、鋸歯通し孔(2段以上)4ヶ所、Sc	
10	32	埴土上部	灰	漆器	盆	厚約 (5.5)	外周ロクロ。内面ナギ、波状文1条	
11	976	埋土	5	漆器	漆盒	-	(3.7) 内面ロクロ。波状文1条、凸帯2条、透し孔、内形丸台形?、Sc	
12	517	埋土	3	漆器	漆盒	-	(34.0) (4.5) 内面ロクロ。波状文1条、透し孔	
SD-10								
56	232	埴土上部	土	土師質	小	円	口径 7.0 高さ 4.1 底径 1.6 A. ロクロ。鋸歯み切り?、底盤が立つ	
2	217 252	埋土上部	土	土師質	三	圓	-	7.2 (1.8) A. ロクロ。底盤み切り
3	962	埋土上部 (アライ層)	土	土師質	小	圓	6.9 6.0 1.6 D. ロクロ。底盤み切り	
4	974	埋土下部	土	土師質	小	圓	7.4 5.0 1.6 D. ロクロ。内面系切り	
5	278	埋土	土	土師質	小	圓	- 5.3 0.8 D. ロクロ。切り離し不明、磨耗	
6	233	埋土上部 (アライ層)	土	土師質	三	圓	- 8.1 (1.5) A. ロクロ。底盤み切り、底盤が立つ	
7	167	埋土上部	土	土師質	三	圓	7.4 (2.4) D. ロクロ。内面系切り、斜面、質軽	
8	153	埋土	土	二輪質	小	圓	- 5.0 (0.9) D. ロクロ。内面系切り	
9	211	埋土上部	土	土師質	三	圓	- 6.5 (1.7) D. ロクロ。切り離し不明、磨耗	
10	235	埴土上部	土	漆器	圓	- 6.4 1.3 外周ロクロ。内面内裏?、つよみ出しの臺台?、底底が美しい		
11	233	埋土上部 (アライ層)	土	土師質	三	圓	- 7.0 (1.2) D. ロクロ。内面系切り、底耗	
12	170	埋土	土	土師質	三	圓	- 10.2 (2.1) 磁器(黄褐色)、青入多、幾付のみ縦縫、14c前~中	
13	234	埋土	土	土陶器	盆	-	(片口) ロクロ、白石墨?、13c後半~14c前半	
14	233	埴土上部	瓦	平	瓦	厚約 (4.9) (3.4)	厚約 2.5 内面剥落、凸面起	
15	211	埋土上部	石	製成	劍	形	4.2 3.8 0.55 鍔化鉢竹番(全体)	
SD-05(内窓)								
59	1	500	埋土上部	白	漆器	大	漆盒	
2	503	埋土下部	黑	漆器	大	漆盒	-	
SD-11								
59-3	762	(大型2個)	土	土師質	小	圓	8.4 6.0 1.1 B. ロクロ。切り離し不明、底盤が美しい	
SD-12								
59-4	844	埋土	4	漆器	三	圓	- 8.3 (2.75) 外周削輪廓線、底盤、体部b→c→d、内面剥離面c、透し孔。(折方形)?、底盤	
5	981	埋土	2	漆器	瓦	丸	底 厚約 (3.0) (2.0) 2.7 底面凸凹、凸面ケズ	
6	335	埋土	2	漆器	瓦	丸	(8.0) (32.7) 2.3 底面剥離、凸面純四	
SD-23								
59-7	442	埋土	1	漆器	漆盒	圓	- 内面ロクロ。波状文凸帯、Sc	
8	442	埋土	1	漆器	漆盒	圓	4.15 3.4 (0.5) 底面約0.5cm剥離(片刃)か	
SD-25								
59-9	462	埴土上部	石	質	有孔瓦板	2.9	2.4 厚約 (2.0) 2.7 底面瓦	
10	721	黒色シシントリック層	石	質	有孔瓦板	19.4	19.4 厚約 (2.8) 2.5 ロクロ、1周側内壁灰成り、底盤、13c中葉以前	

10. 第16次出土遺物観察表(II)

(単位 cm)

出発地	着物No.	層位	種類	容積	法	量	特	徴
SD-16								
65 T	718	3 層	土師質土器	-	-	-	(1.2)	D、ロクロ、圓輪底切り
9	441	5 層	土師質土器	小 直	-	-	1.2	A、ロクロ、圓輪底切り
11	441	5 層	土師質土器	小 直	-	5.8	(1.6)	A、ロクロ、見込みナダ、圓輪底切り
12	649	5 層地盤下部	土師質土器	小 直	7.3	5.4	1.3	A、ロクロ、切り落し不規、SD-16新規
14	649	7 層上部	瓦	丸瓦 ?	高さ (6.7)	幅 (6.5)	厚さ 1.3	四面削り、内凹、開口→ナダ出し、SD-16新規
II区上部								
60-1	11	上 層	土師質土器	小 直	口径 6.2	底径 5.3	高さ (1.5)	B、ロクロ、見込みナダ、圓輪底切り、板状孔裏
2	516	積 ± 10 層	土師質土器	直	-	8.8	(1.1)	B、ロクロ、見込みナダ、圓輪底切り、内側凹か
3	518	積上 8 層	土師質土器	直	-	8.4	(1.3)	A、ロクロ、圓輪底切り、板状底裏
4	518	積上 8 層	土師質土器	小 直	-	5.2	(1.5)	B、ロクロ、圓輪底切り ? 板状底裏
5	551	積 ± 12 層	土師質土器	直	-	7.3	(1.7)	A、ロクロ、見込みナダ、圓輪底切り、板状底裏
6	504	積上 12 層	中世陶器	直	-	-	-	灰破り、小墨縁、包地 (7)
7	28	積土 上 面	中世陶器	直?	-	-	-	オリーブ色の地、片印あり、内面に凹凸付着、選X、13c~15c
8	504	積土 32 層	中世陶器	直?	-	-	-	内面焼付ナダ、外成層位ナダ、在地跡
9	11	上 層	中世陶器	山茶 瓶	-	-	(2.3)	ロクロ、落手、内面焼付、高底座、14c後半
10	649	積上 10 层	中世陶器	山茶 瓶	-	-	(2.7)	ロクロ、落手、内面焼付、高底座、14c 後半
11	611	積土 32 層	生糞製品	直	高さ (6.5)	幅 (6.5)	厚さ 0.1	鉛、頭部欠損
Ⅱ区上部								
出発地	着物No.	层位	种类	容积	法	量	特	徴
61-1	942	SI-01	深 土 直?	圓文(丸網)	実形×字文?	-	側面式	
2	964	SD-02	6. 7 層 直(小) 瓶	圓文	平行弦様文	-	側面式	
3	378	SD-02	埋 土 筒?	横文(唐函)	実形×字文	-	側面式	
4	195	I 区 西 部	火鉢返し	縦	圓文	実形×字文	側面式	側面式
5	963	SD-02	3. 4 層 筒?	圓文	実形×字文	-	側面式	側面式
6	653	SK-02 下	帶塗1層 筒?	-	平行弦(丸網×字文?)	-	背木造式? 帯行、口唇部削り	
7	729	SD-15	3 層 縦	圓文	平行弦様文	-	側面式	
8	182	SD-01	開窓付瓦 縦 or 棒	圓文	-	-	造形4.8、標高1.7、本葉組	
9	515	SD-01	埋土上部	直?	圓文	-	粗?	
10	116	標. 亂 瓦 (SK-01)	埋 土 筒?	-	-	-	織代瓦(織代織)	
11	380	SD-01	埋 土 直?	-	找縫文(二木 縱)	-	十三層式	
12	182	SD-01	雨竈附近 縦	圓文	-	-	粗?	
13	316	標. 亂 瓦 (SK-01)	埋 土 筒	角縫文(植物型)	斜先文	-	側面式	
14	514	II 乱 瓦 区 埋 土 筒	不 明	圓文	平行弦縫文	-	側面式、漆跡	
15	495	SD-12	4. 5m 筒 直?	圓文	沈縫文	-	側面式	
16	107	II 区 中央	火鉢返し	直	-	沈縫文(二木一縫)	十三層式	
17	585	SK-12	埋 土 直?	圓文(廢消)	平行弦縫文	-	側面式	
18	168	SK-12	埋 土 直?	-	-	-	沈縫文(二木一縫)	十三層式
19	341	SD-01	1 層 土 斜	圓文	平行弦縫文	-	側面式	
20	325	-	II 加 直	圓文	平行弦縫文	-	側面式、内面口唇部、圓文、SI-07 上	

11. 第16次出土遺物観察表(II)

(単位 cm)

図版No	遺物No	層	種類	断面	文		特徴
					横	縦	
21	69	IV 区 西 領	大地甃し	否?	-	-	北漢文(二本一組) 十三瓣式
22	303	IV 区 中 火	天地甃し	否	有	-	造孔文 十三瓣式
23	386	IV 区 中 火	天地甃し	有	-	-	平行斜鉛文
24	374	SI-08	2 扇	鉢	北漢文(廣鏡)	対称二字文 or 優游文	側面四式
25	329	SI-08	葉上部 鉢	テ	-	-	重山形文 側面四式、口部鉢純文
26	25	IV 区 中 火	天地甃し	鉢	?	-	対称文
27	268	IV 区 中 火	天地甃し	盤	-	-	捺水文+絞繩文
28	446	SD-16	葉 上	対	-	-	北漢文(二本一組) 十三瓣式
遺物外(古墳)							
図版No	遺物No	層	種類	横	縦	断面	特徴
62 1	67	IV 区 中 反	土 壁 瓷	环	11.4 13.6	幅さ 厚さ (3.1)	外周口縁部・体部磨耗、内面に斜部b→d、仰部e→d、白粉、赤色B
2	181	IV 区 中 反	土 壁 瓷	环	14.6	-	外周口縁部b、体部c、内面口縁部b、体部c→d、赤色B
3	274	D-125	漆 布 盒	漆	-	-	平行印き、スリ裂痕、白粉、5c 中窓
4	34	V IC	漆 布 盒	漆	-	-	内窓ナマ、波状文1条、内窓2条、施彩(荷葉)多條、5c
5	140	漆 瓶	漆 漆 漆	瓶	-	-	内窓ナマ、5c
6	308	NK-01	陶 土 壁 瓷	瓶	(40.0)	(6.6)	外周口クリ、内面口クリ、白粉(深荒)
7	169	N K 火 地 甃 し	石 製 品 相	瓶	高さ 1.9	幅 1.4 厚さ 0.3	-
8	122	I K 火 地 甃 し	石 製 品 瓶	?	3.45	2.8	0.8
9	152	I K 火 地 甃 し	石 製 品 小 瓶	?	2.65	2.2	(1.0)
10	153	I K 火 地 甃 し	石 製 品 瓶	?	(2.5)	1.5	0.2
11	74	IV K 火 地 甃 し	石 製 品 瓶	?	2.35	2.35	-
12	84	IV K 火 地 甃 し	石 製 品 瓶	?	(2.5)	2.2	1.0
遺構外(中窓~近壁)							
63 1	81	IV 区 西 領	近壁陶器	瓶	口径 5.0	幅 (1.4)	吹付、質入、高台装付輪郭、研磨、肥厚、13c 純茶
2	57	IV 区 部 体	中 国 瓶	瓶	6.2	(1.9)	白粉、乳白色、施切痕が密ない、柄窓か
3	56	IV 火 地 甃 し	中 国 瓶	合子(直)	-	9.8	(1.4)
遺構外(中窓~近壁)							
4	674	D-125	漆 大 地 甃	漆 陶器	山 条 濃	口径 12.7	ロクロ厚手、内面削鉗、朱濃塗、14c 純茶
5	450	V 区 上	中 地 甃	漆	-	-	竹席15c 席
6	190	E-1-2 区 火 地 甃 し	中 地 甃	?	12.9	(5.1)	寄附、唐文、焼口擦痕、若干の落入りあり、13c 来~14c 前半、E-201K
7	135	日 1-2 区 火 地 甃 し	中 地 甃	?	-	-	中窓? 黑漆
8	16	IV IC	区 中	中 地 甃	漆	-	L1縫隙取扱い、朱漆、14c 前半、(片口)
9	7	漆 案	近壁陶器	小 盆	?	6.8	(1.4)
10	63	D-125 火 地 甃 し	中 地 甃	?	-	5.8	(1.7)
11	34	V IC	中 地 甃	漆	-	-	(片口)、焼口擦耗(落石利用?)、常滑
12	164	E-1-2 区 火 地 甃 し	中 地 甃	?	(45.6)	-	焼口11縫、内面剥離補り、朱漆、13c 朱漆
13	34	V IC	中 地 甃	漆 瓶	-	12.8	(7.6)
14	568	E-1-2 区 火 地 甃 し	中 地 甃	?	-	-	朱灰~オフ~オフ灰色(自然鉢か)、押研、肩刃、13c~13c
15	198	IV 区 中 室	五 瓶	坛	(10.0)	-	(1.5)
遺構外(中窓~近壁)							

12. 第16次出土遺物観察表(1)

(単位: cm)

遺物名	層位	種類	寸法	性質	特徴
16	92 IV 火炎 灰 付 し	中井陶器	鉢	-	- = (片口) 底面2)
37	67 IV 火炎 灰 付 し	中井陶器	鉢	-	- = (片口) 灰面り (内凹)、底面1)
18	139 IV 火炎 灰 付 し	中井陶器	鉢	-	- 口縁削片、底盤?
19	568 E-2 D-X 火炎 灰 付 し	中井陶器	鉢	-	- 面区へオーバーSE角の縁 (底面丸か)、押印、底深、12cm~13cm
20	191 V 火炎 灰 付 し	中井陶器	高台付鉢	(13.0) (6.0)	再び体下部削り→高台付近ナメ、内面つるぎ、断面が複雑。往地13cm前半か
21	391 D 10 火炎 灰 付 し	土師質土 器	小 皿	3.2	(1.3) C、ロクロ、見込み引抜孔のナメ→横方向ナメ、内底余切り、内側面か
22	69 IV 火炎 灰 付 し	土師質土 器	小 皿	5.9	(1.1) D、ロクロ、見込みナメ、内底余切り
23	85 IV 火炎 灰 付 し	土師質土 器	小 皿	(9.2) 15.0	9.1 A、内底余ナメ→凹形ナメ、丁目ね、笠屋焼成か
24	34 V 火炎 灰 付 し	中井陶器	鉢	-	- = 深5 (手形) あり、常滑
25	152 D -14 火炎 灰 付 し	土師質土 器	鉢	18.3	- (1.4) D、ロクロ
26	346 IV 火炎 灰 付 し	土師質土 器	小 皿	4.8	(1.4) A、L字脚削りナメ、手捏ね
27	177 D -14 火炎 灰 付 し	土師質土 器	小 皿	5.0	(1.2) A、ロクロ、見込みナメ?、静止余切り→ナメ
64-1	13 H 火炎 灰 付 し	土師質土 器	小 皿	13.0	- (2.4) A、ロクロ、内底余切り
7	13 H 火炎 灰 付 し	土師質土 器	皿	7.0	(1.9) C、ロクロ、内底余切り、ロクロ6等厚
3	85 IV 火炎 灰 付 し	土師質土 器	皿	-	(3.5) D、ロクロ、内底余切り
4	262 IV 229 火炎 灰 付 し	土師質土 器	小 皿	6.6	5.2 - 1.6 A、ロクロ、見込みナメ、静止余切り
5	29 V 火炎 灰 付 し	土師質土 器	小 皿	-	4.1 (0.9) D、ロクロ、内底余切り、厚手
6	32 V 火炎 灰 付 し	土師質土 器	皿	8.6	(0.0) D、ロクロ、内底余切り、厚手
7	19 H 火炎 灰 付 し	赤陶二輪 土器	高台付鉢	7.0	(1.8) D、ロクロ、切り離し不規
8	25 V 火炎 灰 付 し	土師質土 器	大 鉢	18.8	- (4.9) 硬質
9	23 V 火炎 灰 付 し	石 灰 付 し	塊	7 (1.0) (2.15)	厚さ 厚さ
10	196 D -12 火炎 灰 付 し	江 野平質土	皿	(8.3)	1.0 斧削面目、凸面彫刻ナメなし
11	25 IV 火炎 灰 付 し	瓦	瓦	(4.0) (3.0)	1.5 門面目目、凸面彫刻、乳突輪、焼成良好
12	69 IV 火炎 灰 付 し	金剛輪胎 加 合 真	4.5	0.3	0.18 外部鋸歯、最大幅1.50 cm、中央に薪穴あり
65-1	699 V 1 火 炎 灰 付 し	中 國 陶 器 (中井)	片口舟	8.2	- (1.0) 白質、薄削りやや褐色、底丸?、土煙に貫入あり
2	230 VI E 火 炎 灰 付 し	中井陶器	鉢	-	(4.5) 脱胎、くすんだ銀色体、刷毛塗りか、沈墨2条、窓戸、15cm前半
3	783 VI 火 炎 灰 付 し	土師質土 器	鉢	8.4	(1.0) D、ロクロ、見込みナメ?、内底余切り、接続状況?
4	421 H -14 火 炎 灰 付 し	土師質土 器	小 皿	6.4 (3.0)	1.2 D、ロクロ、内底余切り
遺構(内側)					
65-5	421 B 3 -14 火 炎 灰 付 し	土師質土 器	小 皿	17.8 5.6	A、ロクロ、内底余切り、VII区
6	421 B 3 -14 火 炎 灰 付 し	土師質土 器	皿	- 6.8	(1.1) D、ロクロ、内底余切り、VII区
8	417 C 3 -14 火 炎 灰 付 し	土師質土 器	皿	-	(1.0) D、VI区
19	411 C 3 -14 火 炎 灰 付 し	土師質土 器	皿	19.0	- (2.9) A、ロクロ、VII区
13	14 H 火 炎 灰 付 し	土師質土 器	皿	13.2	- (3.6) A、ロクロ、VII区
15	722 H 5 火 炎 灰 付 し	金剛輪胎	軒	6.6 0.6	0.9 D、斜削
66-1	694 H 火 炎 灰 付 し	土師質土 器	小 皿	17.8 3.4	A、ロクロ、見込みナメ、内底余切り、板状一筋、VIII区背和
2	667 V 3 火 炎 灰 付 し	土師質土 器	皿	- 6.6	(1.3) A、ロクロ、見込みナメ、内底余切り、板状正筋

出典No.	遺物No.	層位	種類	記述	特徴		質			
					形	色	形	色	質	
3	694	南壁上 上部	土師器 鉢	器	-	7.2	(1.0)	D、ロクロ、丸込みナデ、輪郭未切り、環区南部		
4	387	B-21 3層上部	中世陶器	天井瓦脚	12.6	-	(1.0)	織胎（薄灰色）、光沢なし、焼戻、15（後半か）		
5	694	南壁上 下部	中世陶器	鉢	-	-	-	(片口)、内外型ロクロテ、白引系か、環区南部		
6	667	WIC-3 層	中世陶器	罐	鉢	-	-	網目あり、往復印		
7	536	堅石遺構	中世陶器	鉢?	-	-	-	自然熱、内外粘着後被結合、質厚、NO.2、B-21区		
8	473	環区表土	J	平 瓦	高さ (5.0)	幅 (1.7)	厚さ (1.0)	表面平滑、凸筋網目→ナデ消し		
9	658	SX-B1 3層	古瓦類	瓦	高さ (3.0)	幅 (3.0)	厚さ (0.4)	U脇部厚さ0.60cm		
10	1011 759	WIC-23 層	中世	瓦	高さ (1.0)	幅 (1.0)	厚さ (0.4)	凸筋、草文、輪筋の草文?、13c~14c、II区、IV区と四一か		

古墳

出典No.	遺物No.	遺物名	地名	層位	鉄 名	切跡 年 (古墳)	時代	書体	備 考
1	977	SD-01	II区	飛駆原土	寛永通宝	寛文8年 (1668年)	江戸	真	背文、正字文、2.5g
2	972	SD-01	II,G-8区	堅土上部	開元通宝	成治4年 (621年)	唐	真	2.0g II区
3	972	SD-01	II区	堅土面	開元通宝	開元2年 (1266年)	唐	真	-
4	969	SD-01	F-7区	堅土層	永平通宝	永平6年 (1403年)	唐	真	- II区
5	968	-	C-14区	5層	寶物通宝	寛和元年 (1109年)	北宋	篆	- VII区
6	970	10130	IV区	堆上	祥符元宝	大中祥符元年 (1008年)	北宋	真	-

観察表凡例 (第16~18次共通)

土師器「特徴」の説

a : 刷毛調整 (刷毛門)

b : 横ナデ

c : ナデ調整 (ヘラ・拍)

d : 磨き

e : 刈り

矢印は新旧を示す (古→新)

土師質土器皿類「特徴」の説

胎土A : 砂粒を多く含み、白針 (動物珪酸体) を含むもの

胎土B : 砂粒は目立たないが、褐色粒や金雲母を含むもの

胎土C : 砂粒は目立たないが、黒色粒を含むもの

胎土D : 比較的均質な細砂を含む (or 粉質)

第2節 第17次調査

1. 調査に至る経緯

南小泉遺跡内の宅地開発予定地について、昭和62年11月26日に開発行為者である菅原輝夫氏との間で事前協議が成立し、昭和63年3月15日に発掘届が提出された。計画では盛土工法となっており、調査は道路部分を対象とし、必要に応じて拡張することとした。調査は昭和63年7月より約3ヶ月間の予定で開始した。

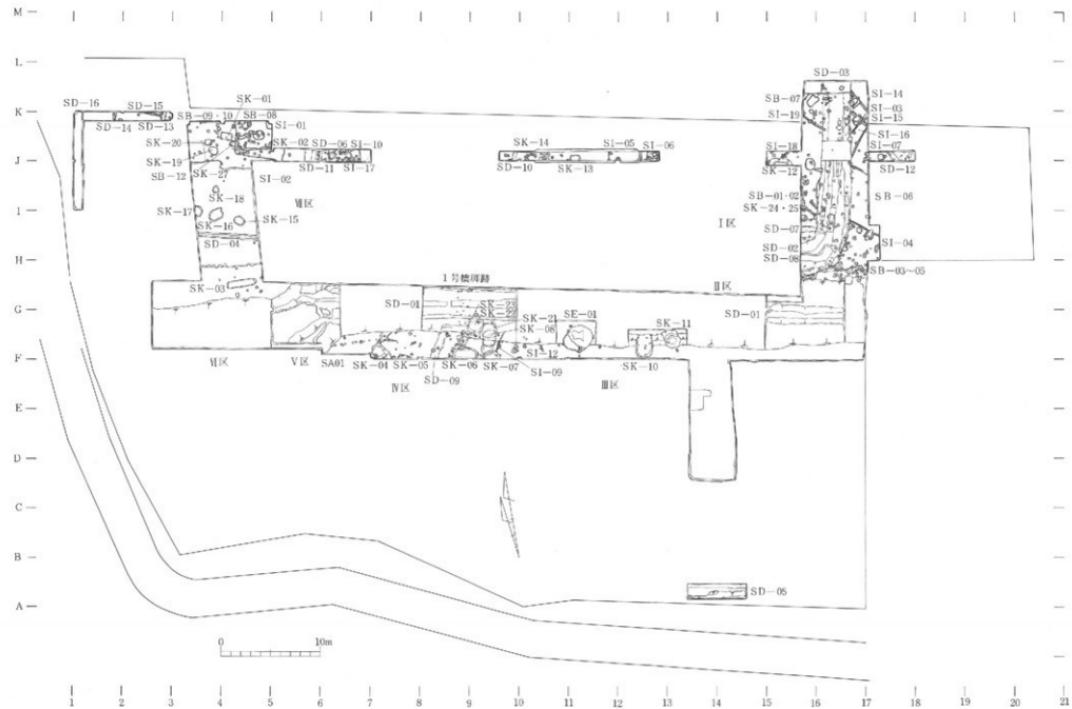
2. 調査の経過

調査は、まず道路予定地部分の表土を機械力で除去し、以後人力による排土作業を行った。拡張トレンチも人力によった。調査開始後約1カ月間は、16次調査と併行の調査を余儀なくされる一方で、予想を上回る遺構が検出された。特に、当初これほどの中、近世遺構は予想できなかった。調査地は北から南へ下がっており、調査地北部と南側の堀付近とでは1mの比高差がある。この比高差は、南側の遺構ほど残存状況が悪いことから、削平によるものと考えられる。古墳時代中・後期の集落や中世の屋敷跡の変遷など、大きな成果を上げることができた。

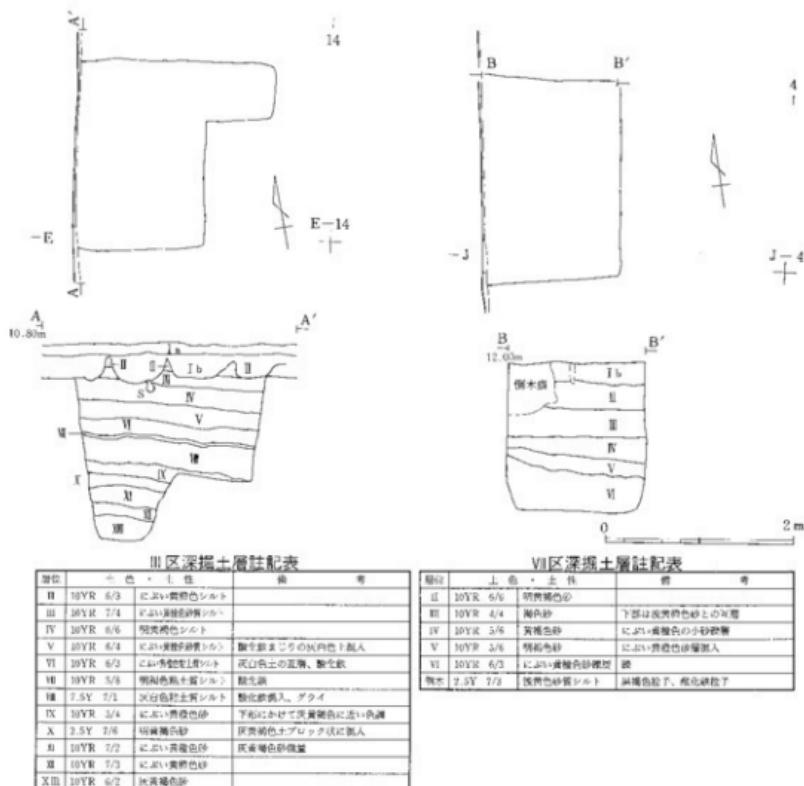
3. 基本層位（第68図）

基本層位は、二ヶ所の深堀トレンチ（III・VII区）を設定して、観察を行った。しかし、対応する層は少ない。I層は2層に細分される。Ia層は現耕作土（畑）、Ib層は畠地の土壤改良を目的とした天地返しにより形成された層で、I区南部～II区北部・III区・VII区南部などに認められた。II層は黄橙色系のシルトで、やや粘性がある。層厚は、擾乱を受けない部分で20～25cmである。この層は普遍的に認められ、近世に埋没を完了したSD01上にも認められる。したがって、近世～近代に形成されたものである。ただし、北部ではII層が認められない所が多い。III層は黄褐色～黄橙色シルトであるが、上部は粘土質、下部は砂質である。層厚は約30cmである。VII区付近では、上部の粘土質部分が失われている。今回検出された遺構は、この層の上面で検出されている。III層以下の層は、無遺物層である。

IV層以下の層は、III区・VII区では対応せず、最下層の砂礫層のみが対応すると推定される。III区では、IV～VII層が粘土質シルトでVII区には認められない。酸化鉄を含む層が多く、VII層は鉄分の集積が著しい。また、下部に下がるほどグライ化が認められる。IX～XIIは砂質シルト～砂層で、鉄分の含有もなく、グライ化も弱い。XIII層は砂礫層で、標高は8.8mである。VII区は、IV～VI層は黄褐色～褐色の砂質シルト主体の層で、薄い砂層が介在する。VII層は砂礫層で、径10cm前後の円礫を含んでいる。標高は9.8m前後で、III区の砂礫層とは1m前後の標高差



第67図 通構配図



第68図 基本層位

がある。全体的に、南東方向へ下がっているものと推定される。これらの砂礫層は、第16次調査地点のIV層、第14次調査地点のIII層に対応するものと考えられる。

4. 検出遺構と出土遺物

(1) 古墳時代

古墳時代に属する遺構は、住居跡18軒・土坑跡9基・溝跡2条を検出した。なお、SI08は精査後溝跡(SD12)と判明したため欠番とし、時期決定資料を欠くが古墳時代として扱う。

住居跡(SI)

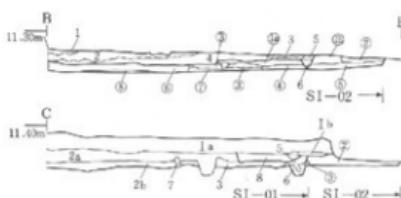
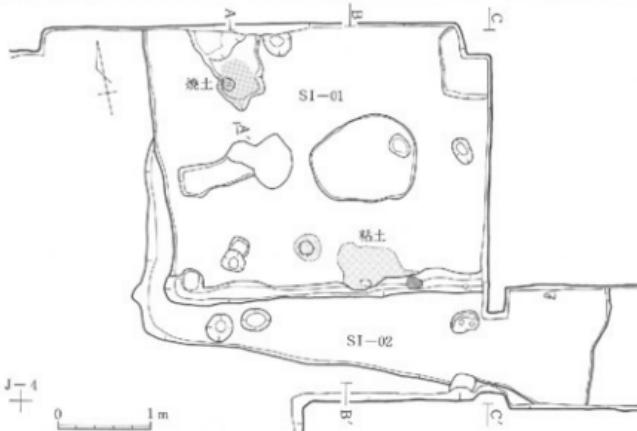
SI01(第69・71図)

SI-02 土層柱記表

層位	土色・土性	備考
① 10YR 5/4	に近い黄褐色シルト	灰黃褐色の小ブロック状に混入
② 10YR 6/4	に近い黄褐色シルト	
③ 10YR 6/3	に近い黄褐色シルト	炭化物粒子わずか混入
④ 10YR 5/3	に近い黄褐色シルト	炭化物粒子混入
⑤ 10YR 5/4	に近い黄褐色シルト	に近い黄褐色上境法に混入
⑥ 10YR 7/4	に近い黄褐色シルト	
⑦ 10YR 6/4	に近い黄褐色シルト	に近い黄褐色土小ブロック状に混入
⑧ 10YR 6/3	に近い黄褐色シルト	
⑨ 10YR 1/6	暗黄褐色シルト	

SI-01 土層柱記表

層位	土色・土性	備考
1 10YR 5/2	灰黃褐色シルト	
2a 10YR 3/2	黒褐色シルト	炭化物粒子わずか混入
2b 10YR 3/1	黒褐色シルト	に近い黄褐色土混入
3 10YR 5/3	に近い黄褐色シルト	炭化物粒子混入
4 10YR 5/4	に近い黄褐色シルト	炭化物粒子混入、褐黃褐色土層下部に混入
5 10YR 5/2	灰黃褐色シルト	灰白色わずか混入
6 10YR 4/3	に近い黄褐色シルト	に近い黄褐色土混入
7 10YR 6/3	に近い黄褐色シルト	
8 10YR 4/2	灰黃褐色シルト	[図-02 黄褐色土と褐黃褐色土層状に混入]



A-A'

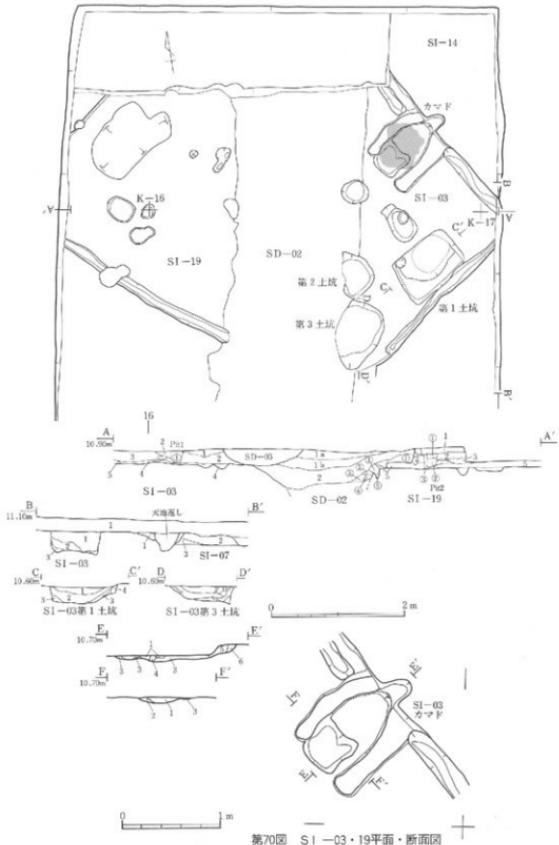
B-B'

層位	土色・土性	備考
1 5YR 5/3	褐黃褐色シルト	溝土本底が入る
2 5YR 7/4	に近い黄褐色シルト	

第69図 SI-01・02平面、断面図

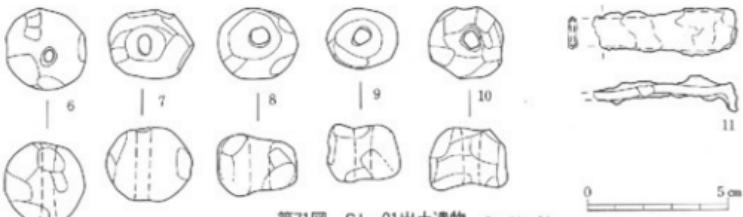
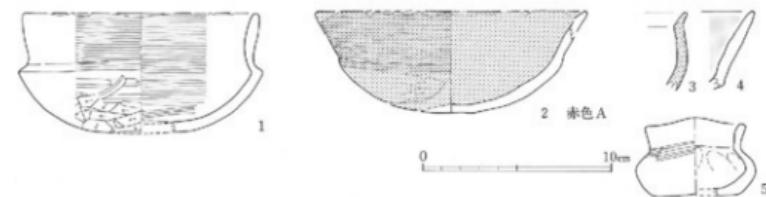
VII区北部 (J-4) 区に位置し、SB08+10・12、SK02 に切られ、SI02 を切る。規模は、全体の2/3程の検出に留まったため不明であるが、西辺約3m・南辺約3.3mを検出した。壁高は上部が削平されており、最大10cmである。形態は方形で、北壁あるいは東壁にカマドが取り付くものと推測される。床面上で、不整の浅い土坑を4基検出したが、主柱穴は明らかでない。南壁で壁溝を検出し、粘土塊二ヶ所・赤色顔料が出土している。

出土遺物には、土師器壺・ミニチュア、須恵器甕、土玉、鉄製品があり、他に弥生土器片・フレークがある。第71図1.は須恵器模倣とみられる無彩有段の壺である。2は軽い段を有し、口縁が外傾する壺で、内外面とも赤色塗装である。3は南小泉式壺の混入品か。4は内面黒色処理の壺である。5は手捏ねによるミニチュアである。6～10は、埋土・床などから出土した土玉である。11は、基部に屈曲がみられる点から鉄錐と予想される。須恵器は図示していない。

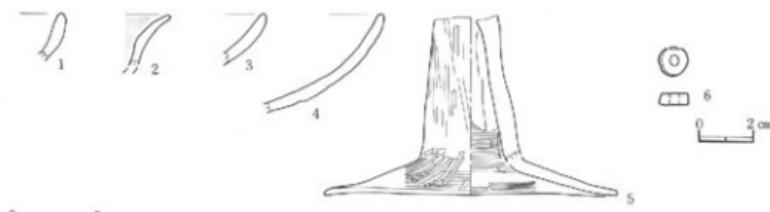


第70図 SI-03・19平面・断面図

SI-03・上級記号	
部位	三 一 色・筆順
1	HYW 4/2 水筒形シルク にない黄色色シルク
2	HYW 3/2 ついでに黒色シルク 黒色のアーチマーク、黒色のアーチマーク
3	HYW 4/2 黒色のアーチマーク 黒色のアーチマーク
4	HYW 4/2 黒色のアーチマーク 黒色のアーチマーク
5	HYW 4/1 緑色のカット にない緑色色シルク
6	HYW 5/2 にない黒色シルク 黒色のアーチマーク、黒色のアーチマーク
7	HYW 4/2 黑色のアーチマーク 黒色のアーチマーク
8	HYW 4/2 黒色のアーチマーク 黒色のアーチマーク
9	HYW 6/1 にない黄色色シルク にない黄色色シルク
SI-03・3部式	
1	HYW 7/2 にない黒色シルク 黒色のアーチマーク、黒色のアーチマーク
2	HYW 7/2 にない黒色シルク 黒色のアーチマーク、黒色のアーチマーク
3	HYW 8/2 黒色のシルク 黒色のアーチマーク
4	HYW 8/2 黒色のシルク 黒色のアーチマーク
5	HYW 8/2 黒色のシルク 黒色のアーチマーク
SI-03・カタツムリ	
1	2 SYW 4/2 黒色のカット 黒色のアーチマーク
2	2 SYW 4/2 黒色のカット 黒色のアーチマーク
3	2 SYW 4/2 黒色のカット 黒色のアーチマーク
4	SYW 8/2 にない黒色シルク 黒色のアーチマーク
5	SYW 8/2 にない黒色シルク 黒色のアーチマーク
6	SYW 8/2 黒色のシルク 黒色のアーチマーク
SI-03・1部式	
1	SYW 1/1 黒色のカット 黒色のアーチマーク
2	SYW 1/1 黒色のカット 黒色のアーチマーク
3	SYW 1/1 黒色のカット 黒色のアーチマーク
4	SYW 1/1 黒色のカット 黒色のアーチマーク
5	SYW 1/1 黒色のカット 黒色のアーチマーク
6	SYW 1/1 黒色のカット 黒色のアーチマーク
SI-03・1部式	
1	SYW 1/1 黒色のカット 黒色のアーチマーク
2	SYW 1/1 黒色のカット 黒色のアーチマーク
3	SYW 1/1 黒色のカット 黒色のアーチマーク
4	SYW 1/1 黒色のカット 黒色のアーチマーク
5	SYW 1/1 黒色のカット 黒色のアーチマーク
6	SYW 1/1 黒色のカット 黒色のアーチマーク



第71図 SI-01出土遺物 6~11: 1/2



第72図 SI-02出土遺物 6: 1/2

が、甕小片で外面平行叩き、内面ナデ消し？が見られ、混入品であろう。また、ミニチュアや土玉は祭祀具であろう。

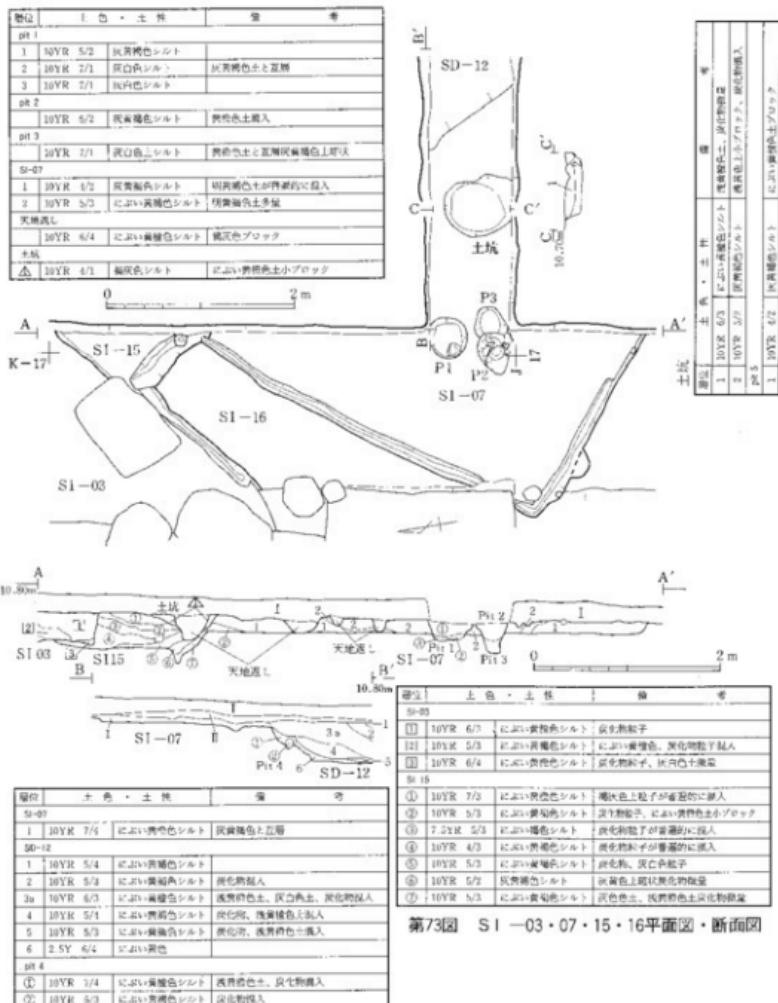
SI02 (第68・72図)

VII区北部 (J-4 区) に位置し、SB08・10・11・12・SI01 に切られ、SK27 を切る。大半が SI01 に切られ規模不明だが、南辺約 4.8 m、西辺 3.25 m 以上で、壁高は最大 9 cm である。西壁際には焼土を伴なう土坑が検出されたが、炉あるいはカマドに関連するものは明らかでない。柱穴は不明であり、壁溝はない。

出土遺物は、土師器環・高坏、臼玉があり、他に弥生土器片がある。第72図 1・3・4 は口縁部が内弯する坏である。2 は内面黒色処理の坏で、SI01 の混入品であろう。5 は床面出土の高坏。6 は P₁₂ 出土の白玉である。

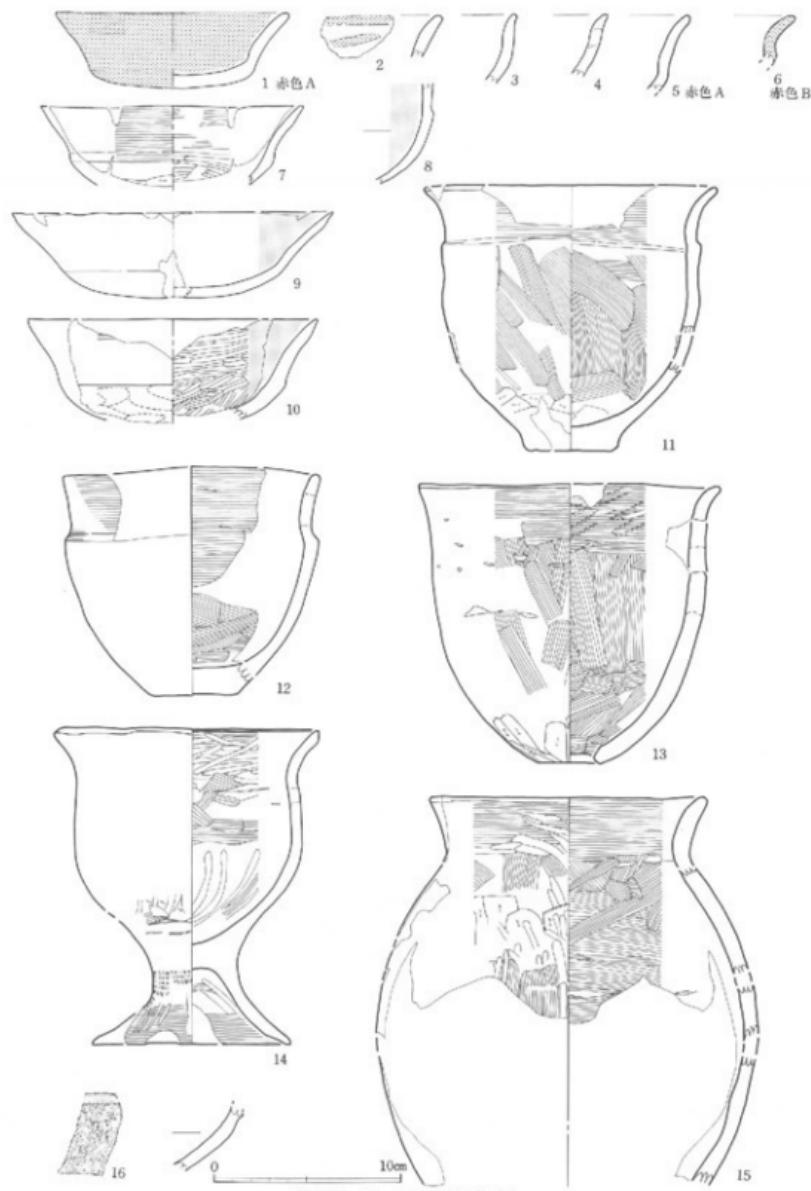
SI03 (第70・74・75図)

I 区北部 (J-K-16 区) に位置し、SB01・SD02 に切られ、SI14~16 を切る。また、直接確認できないが、SI19 とも重複関係にあったものと思われる。東半部の調査に限られ、規模は明

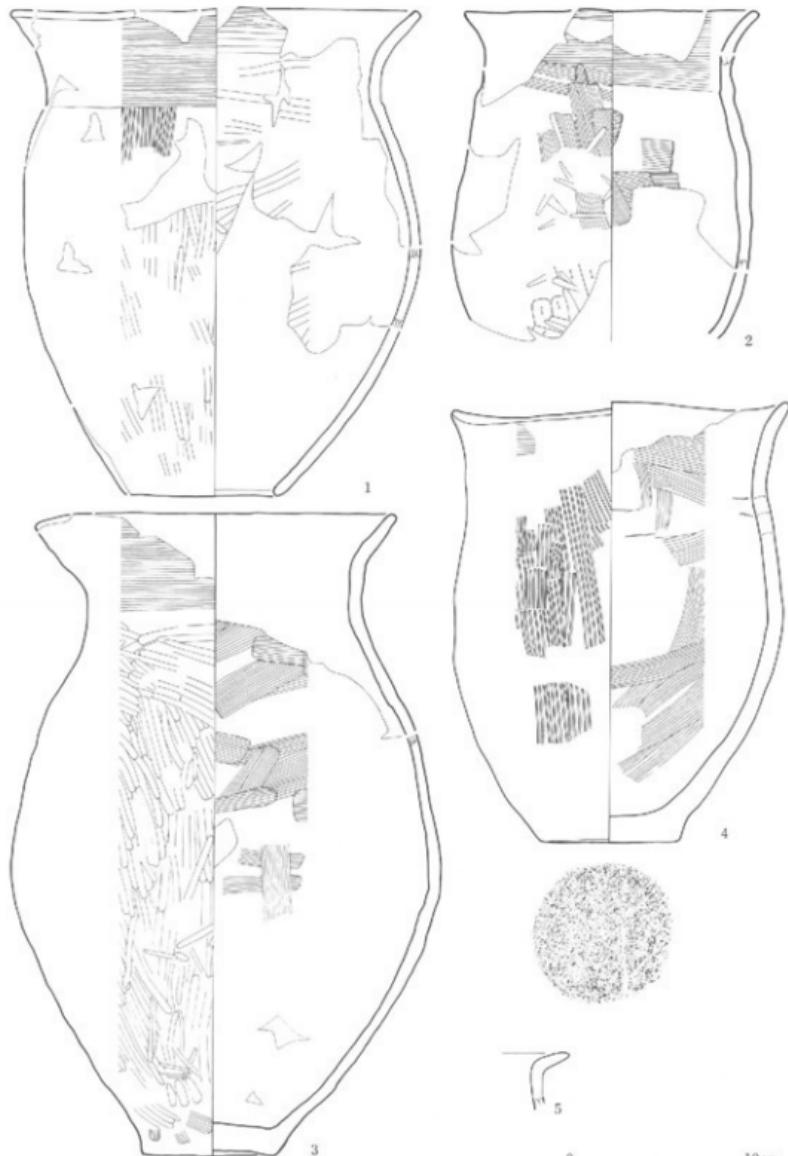


確ではない。東壁 2.4 m 以上、南壁 2.5 m 以上を測る。壁高は上部を削平されているが、最大 23 cm を測る。形状は方形である。カマドは東壁中央部に位置すると予想されるが、削平を受け特徴を充分把握できない。煙道の底面が一部残存している。床面は平坦で、土坑 3 基・ピット 3 基が検出された。このうち、1 号土坑は方形を呈し、貯藏穴（深さ 37 cm）と考えられる。P₁ が主柱穴の一部であろう（深さ 44 cm）。また、南壁に壁溝が確認された。カマド周辺に土器

第73図 S1-03・07・15・16平面図・断面図



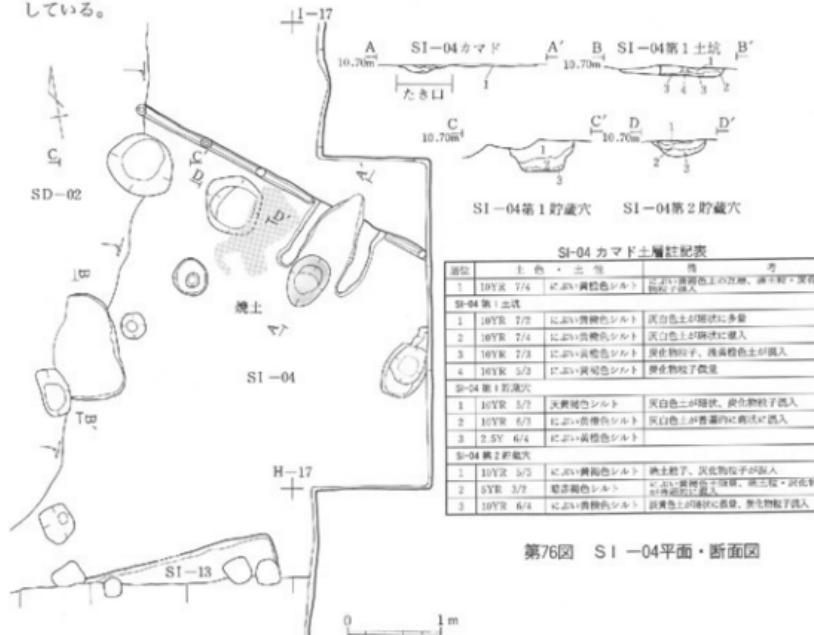
第74図 S1-03出土遺物(1)



第75図 SI-03出土遺物(2)

が出土し、東側に集中傾向が認められた。

出土遺物は、土師器壺・鉢・甕・須恵器高壺？、敲石？、フレークがある。壺は第74図1・2・5・6が赤色塗彩（以下、「赤彩」と省略する）を施すもので、1は内外全面、2は内部と外面に文様風に施すもの、5は内面全面と外面口縁部に施す。6は砂粒が目立たず、胎土も赤色系の色調を示している。図示できないが、外面赤彩・内面黒色処理を施す壺片もある。8～10は内面黒色処理を施すもので、8は塊形のものである。3・4・7は無彩の壺である。壺は有段で口縁部が外反あるいは外傾するものが主体で、赤彩するものが多いようである。12は段を有する小型鉢である。11・14・15・第75図2～5は甕で多様である。11は広口の小型甕、14は台付小型甕で、台というより形態や調整は高壺の脚と類似している。15・第75図3は胴部の膨らむもの、第75図2は下膨らみであろうか。同図5は甕の口縁部か。甕は、最終調整が粗粗の差はあるものの、ミガキ調整が主体である。第74図13は小型甕、第75図1は大型で胴の膨らむ甕である。また、甕や壺の口縁部下半には、横ナブ調整以前にヘラで押さえられるものがあるようだ。その結果、下半が直立ぎみとなり、時には下端（頸部）に段を形成する。第74図16は須恵器高壺の壺部とみられる。5世紀代の混入品か。他に、骨片・種子・琥珀片（？）が出土している。

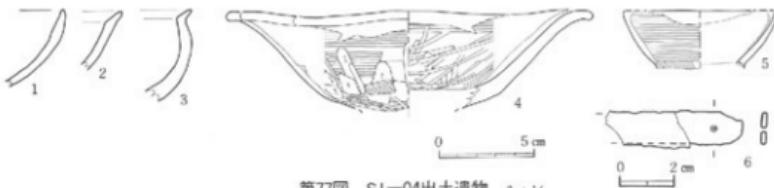


第76図 SI-04平面・断面図

SI04 (第 76・77 図)

I 区南部 (J-16・17 区) に位置し、SD01~03・SB04 に切られる。また、SI13 と重複関係にあるが、南部は床面を失なうほど削平を受け、新旧は確認できない。規模は北壁で 3.4 m を測る。おそらく、一辺 5 m 以上の方形プランとなろう。壁高は最大 10 cm で、後世の削平が著しい。カマドは北壁に位置し、袖は上部が削平され、煙道部は不明、焚き口の焼土は明瞭に残っている。カマドの西脇には、炭化物混りの焼土が検出された。柱穴とみられるビットは 3 基確認できた。西側に偏在して、土坑 3 基を検出した。このうち、2 号土坑は床下で検出した古い土坑である。いずれも不整形で、深さは 1 号 30 cm・2 号 20 cm・3 号 8 cm と比較的浅い。2 号から骨片・炭化物が出土した。北壁では壁溝が検出された。

出土遺物は、土師器壊・高壺・小型壺、刀子？がある。第 77 図 1～3 は壺で、口縁部が屈曲するものと内湾ぎみのものがある。4 は高壺で、口縁部が外反し下部の稜は不明瞭である。5 はビット出土の小型壺である。6 は 1 号土坑出土の刀子の茎であろうか。7 は剣形模造品。



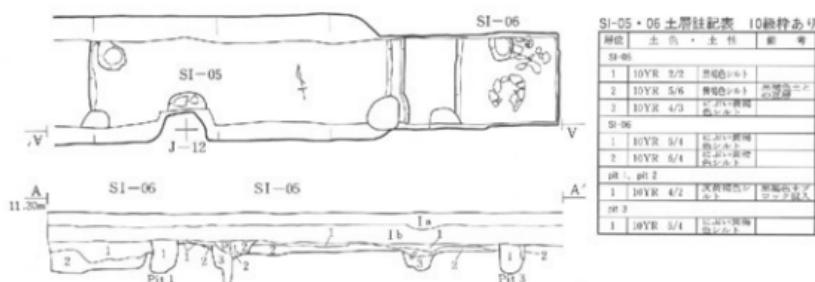
第 77 図 SI-04 出土遺物 6 : ½

SI05 (第 78・79 図)

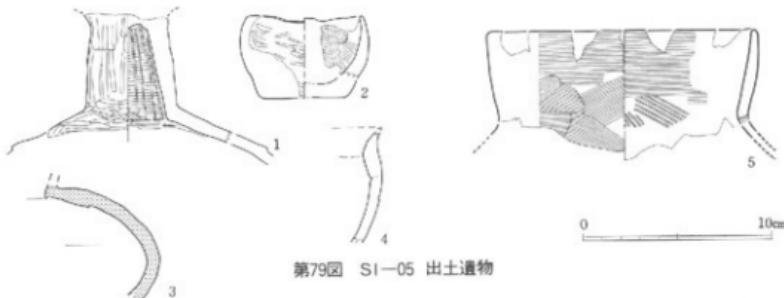
3 トレンチの東部 (J-12 区付近) に位置し、中世の柱穴群に切られる。規模は不明だが、東西約 3.35 m、壁高は最大 18 cm を測る。床は平坦であることから、住居跡あるいは竪穴遺構と考えられる。

出土遺物は、土師器高壺・鉢・小型壺・壺・ミニチュア、弥生土器がある。第 79 図 1 は脚部

1



第 78 図 SI-05・06 平面・断面図



第79図 SI-05 出土遺物

に段を有する高壙である。2はミニチュア土器である。これは東壁で重複する柱穴出土だが、住居に帰属するものと推定した。3は、砂粒をほとんど含まず、胎土が赤褐色を呈する小型壙であろう。

SI06 (第78・80図)

3トレンチ東端部 (I-J-12区) に位置し、中世の柱穴群に切られる。トレンチ調査のため、特徴は不明である。壁高は約24cmを測る。床面は平坦で、北部で深さ約13cmの浅い土坑を検出した。遺物は、床面から土坑に落ち込むように分布している。

出土遺物は、土師器壙・壺・甕、須恵器（器種不明）がある。第80図1～5は壙で、1・5は内湾するもの、2は直立する口縁部をもつもの、3・4は口縁部に屈曲をもつものである。6・7は甕と考えられる。8は大型で広口の甕であろう。須恵器は底部の破片で、壙かもしれない。

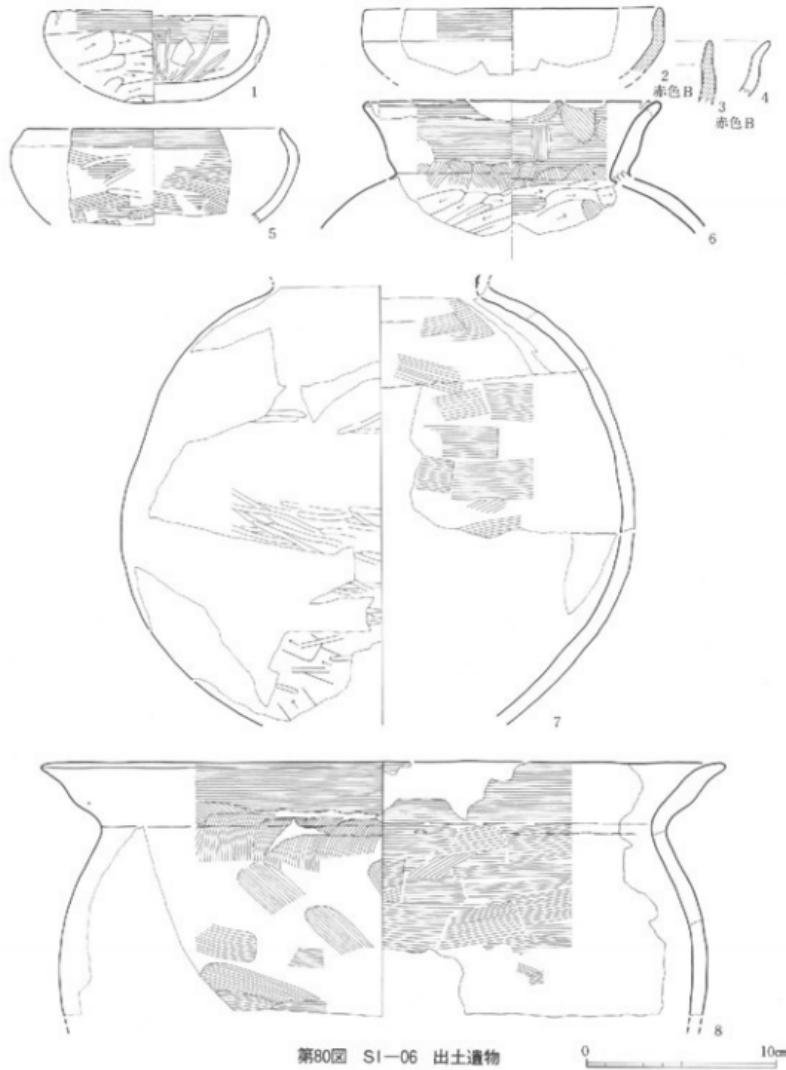
SI07 (第73・81図)

1トレンチ (J-16・17区付近) に位置し、SB06、SD02・03・12に切られ、SI15・16を切る。規模は明確ではないが、西辺4.2m以上、南辺2.3m以上を測る。上部は削平されているが、壁高は最大14cmである。床面は平坦で、柱穴・土坑各1基、ピット3基が検出された。このうち、ピット1は柱穴を切っており、壙・高壙が出土している。3基のピットは性格が不明である。深さは、柱穴42cm・土坑17cm・ピット1 18cm・ピット1・2 12cmを測る。西壁・南壁で、壁溝が検出された。カマド・炉は確認できない。

出土遺物は、土師器壙・高壙、石製模造品がある。第81図1～6は壙で、2は内湾ぎみの口縁をもち、4は口縁端部に屈曲をもち、5は口縁部外面の一部にミガキ調整がみられ、下端に軽い稜が形成されている浅めの壙である。6は底部に台を有し、口縁端部に面取りが施されている特異なものである。7～9は高壙、10は石製模造品円板である。土坑より骨片出土。

SI09 (第82・83図)

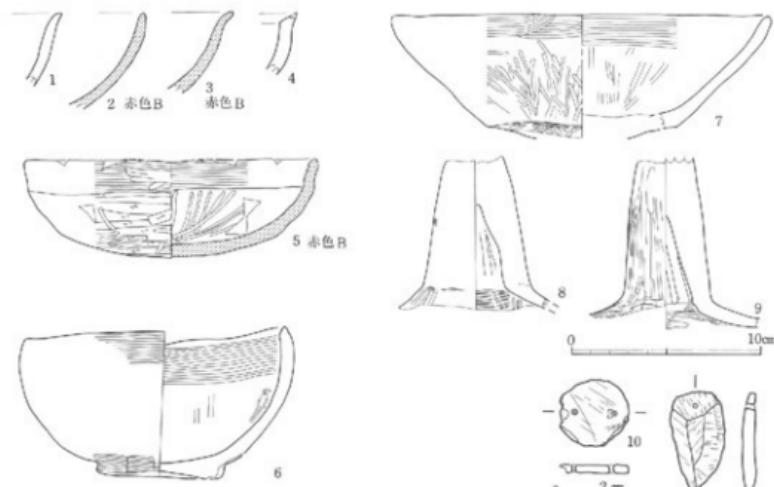
IV区東部 (F-9区) に位置し、SD01・09、SK 6～8・21～23に切られる。上部の削平や



第80図 SI-06 出土遺物

0 10cm

他の遺構との重複が著しく、壁は消失している。規模は不明だが、東辺・南辺とも 2.2 m 以上を測る。カマドか炉か不明。貯蔵穴 1 基 ($1.16 \text{ m} \times 1 \text{ m}$ 以上、深さ 0.43 m) とピット 3 基 (いずれも柱穴とはならない) を検出した。東辺と南辺で壁溝を検出した。



第81図 SI-07出土遺物
10・11・12

出土遺物は、土師器環・小型

壺・壺?がある。第83図1~4

は壺で、1はミニチュアである。

5は小型壺。6は壺とみられる口縁部破片である。他に、石製模造品(円板?)の残欠2点と弥生土器1点が出土している。

SI10 (第84・85図)

4トレンチ(J-6区)に位置し、SB13、SD06-11に切られ、

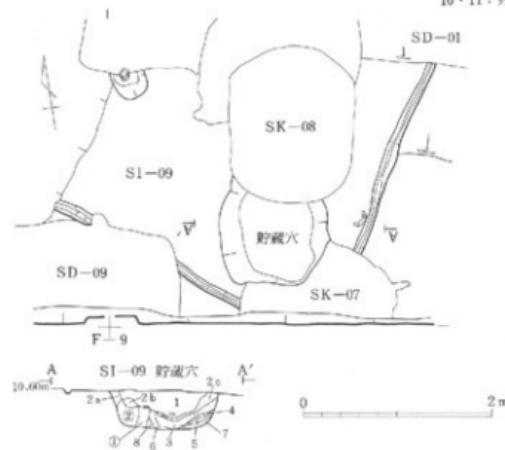
SI17を切る。トレンチ調査のた

め規模不明である。東壁・カマド・貯蔵穴の一部、柱穴1基を

検出した。壁高は約25cmであ

る。また、カマド前の床面で、深さ5cm前後の浅い不定形の

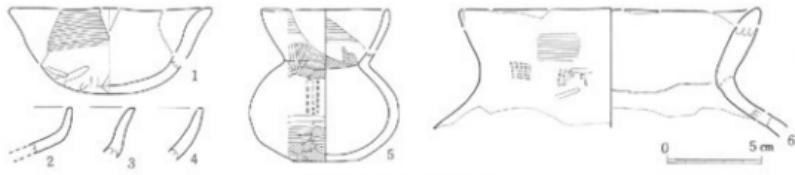
凹地が認められた。遺物は、カマド内やその周辺及び貯蔵穴内



SI-09 貯蔵穴土層記表

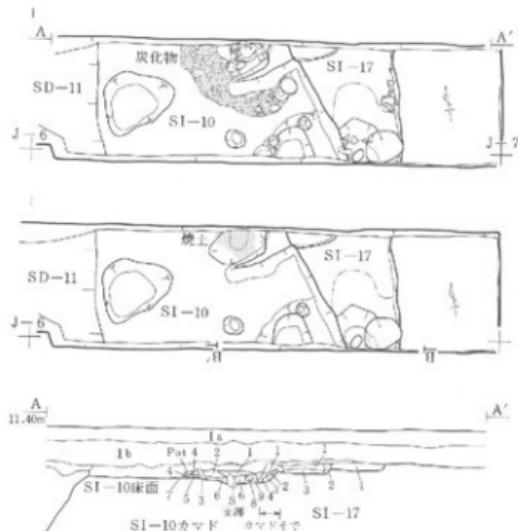
部位	土色・土性	標高	部位	土色・土性	標高
1 10YR 5/6	黄褐色シルト	試験坑下限(手標高)-25cm	5 10YR 6/2	灰黄褐色シルト	黄褐色粘子盛入
2a 10YR 5/3	灰褐色シルト	10YR 5/6(4)	6 5Y 8/2	灰褐色シルト	灰褐色が斑状に
2b 10YR 5/2	灰褐色シルト	灰褐色土の互層	7 10YR 6/2	灰黄褐色シルト	灰褐色土が混入
2c 5Y 8/2	灰褐色シルト	灰褐色土の互層	8 2.5Y 1/3	浅黄色シルト	灰褐色土の互層
3 10YR 5/1	褐色シルト	化成土の互層	① 10YR 7/3	灰褐色シルト	灰褐色土の互層
4 10YR 6/2	灰褐色シルト	化成土の互層	② 10YR 5/3	灰褐色シルト	灰褐色土の互層

第82図 SI-09平面・断面図



第83図 SI-09出土遺物

S-17 墓誌記載	
生年	正月
死年	45 歳
性別	男
姓氏	劉
名前	玄祐
官職	司馬
墓所	西面
年齢	45 歳
性別	男
姓氏	劉
名前	玄祐
官職	司馬
墓所	西面

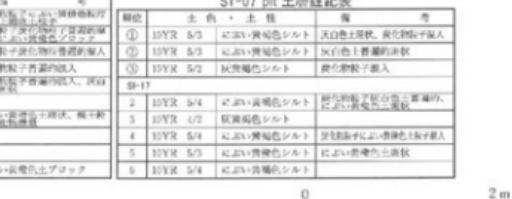


S-1(0)カマド土蔵付記載	
主	主 付
1 7.57R 3/4	薄黄色カルト
2 側主	
3 5YR 2/3	深褐色カルト
4 5YR 3/3	深褐色カルト
5 10YR 3/6	薄黄色カルト
6 5YR 3/6	薄黄色カルト
7 10YR 2/1	黑色カルト
8 側主	
9 5YR 2/4	薄褐色カルト

S-10 段落空占開始記入

SH-1U 施工用工具配色表	
番号	七色・土・石
1	LYR 3/2 にじみ・黄褐色シート
2	LYR 3/1 黒褐色シート
3	LYR 5/3 にじみ・黄褐色シート
4	LYR 4/5 にじみ・黄褐色シート
5	LYR 5/4 にじみ・黄褐色シート
6	LYR 7/4 にじみ・黄褐色シート
7	LYR 5/5 にじみ・黄褐色シート
8	LYR 5/5 にじみ・黄褐色シート
9	LYR 6/5 にじみ・黄褐色シート
10	LYR 5/4 にじみ・黄褐色シート

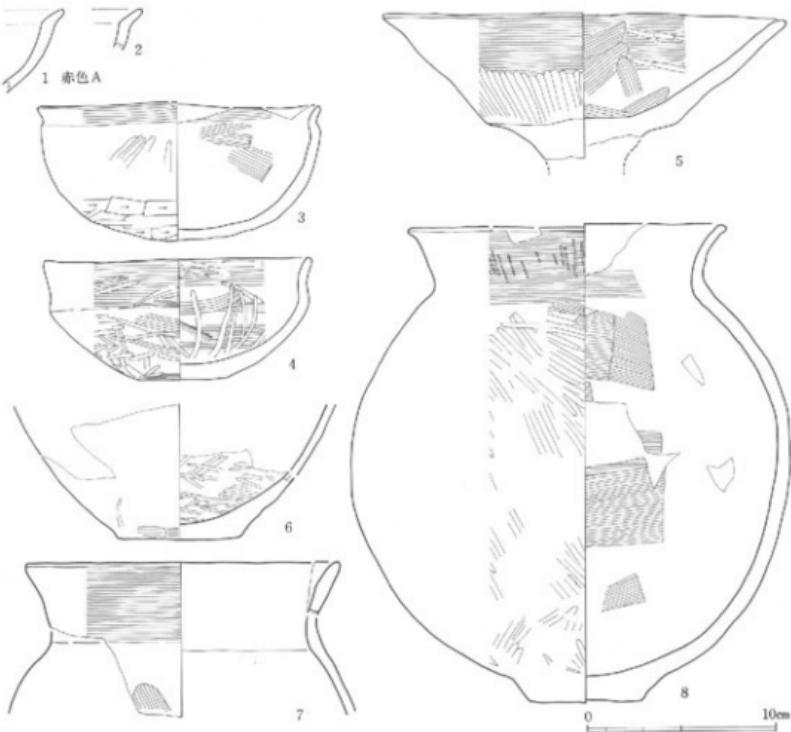
S1-02 啟動監視器



第84圖 $S_1 = 10:17$ 平面：斷面圖

で比較的まとまって出土している。

出土遺物は、土師器壺・高壺・壺があり、他に弥生土器・フレークが出土している。第85図
1~4は壺で、口縁部に屈曲をもつものが多いが、4のように口縁部が外反傾向を示し、口縁
部外面にミガキ調整が施されるものもある。6~8は壺で、特に6・7は長胴化の傾向が認め



第85図 S I-10出土遺物

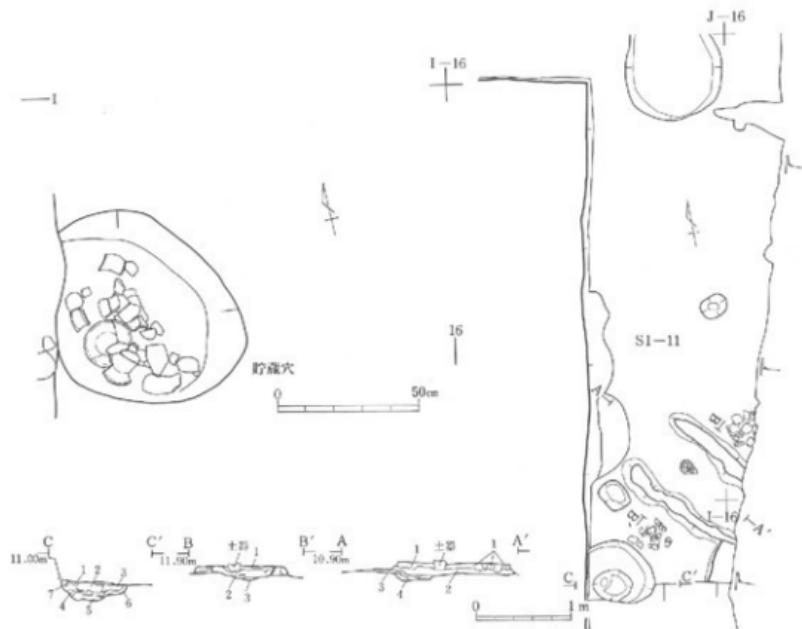
られる。5は貯蔵穴壁面にへばり付くように出土した高壺である。他に、骨片・琥珀?出土。

SI11 (第86・87図)

I区中央 (I-15区付近) に位置し、SB01・02、SD02・07に切られる。削平が著しく、壁は確認できず、床面も大部分を失っている。規模は、全く不明である。カマド・東壁の一部・貯蔵穴・ピット2基を検出したに過ぎない。カマドの袖は長い特徴をもつ。カマド内及び周辺、貯蔵穴で遺物が出土した。なお、カマドの西側の土坑は、本住居に帰属するかどうか不明であ

る。

出土遺物は、土師器壊・鉢・壺・甕・壺？、石製模造品がある。第87図1・3～10は壊であり、1は内外赤彩で口縁部が屈曲するもの、4・5・8～10は屈曲が省略化されて、口縁部が外反するもの、3・6・7は口縁部が内湾するものである。3は表面だけでなく、胎土も赤い。6・7は口縁部横ナデ後、端部付近までミガキ調整が施される。11はカマド支脚に転用された鉢である。12は複合口縁の壺。13は口縁部に最大径をもつ、単孔の甕である。後期に一般化する形態に近づきつつあるものであろう。14は甕であろうか。3は、体部に孔のある破片



SI-11 貯蔵穴土層註記表

層位	土色・土性	備考
1 10YR 5/2	灰青褐色シルト	
2 10YR 6/4	に赤い黄褐色シルト 粘土質土	灰白色土が混入、薄灰褐色 粘土質土
3 10YR 5/4	に赤い黄褐色シルト	赤い褐色粘土が普通的に混入
4 10YR 5/2	灰青褐色シルト	灰化物粘土、明黄色土が混入
5 10YR 4/3	に赤い黄褐色シルト	灰化物粘土、浅土灰を普通的に混入
6 10YR 6/4	に赤い黄褐色シルト	赤い褐色粘土が普通的に混入

SI-11 カマド（南北）土層註記表

層位	土色・土性	備考
1 10YR 5/3	に赤い黄褐色シルト	礎かべ焼土粒が隙間に混入
2 SYR 3/3	鶏卵褐色シルト	
3 10YR 5/4	に赤い黄褐色シルト	に赤い黄褐色土が普通に混入
4 2 SYR 7/4	淡黃褐色シルト	黒褐色土の互疊、燒土粒混入
5 10YR 4/2	に赤い黄褐色シルト	

SI-11 カマド（東西）
1 2.5YR 4/6 赤褐色シルト
2 10YR 2/4 に赤い黄褐色シルト
3 2.5Y 1/3 淡黃褐色シルト

第86図 SI-11平面・断面図

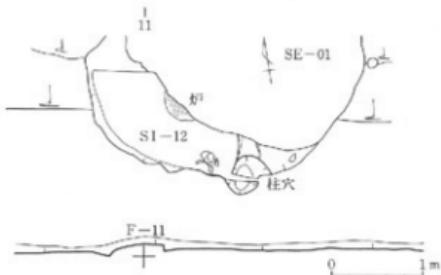


第87図 S1-11出土遺物

で、須恵器模倣の態であろう。15は床面出土の白玉である。他に、骨片・種子出土。

SI12 (第88・89~91図)

IV区 (F-11・12区) に位置し、SD01・SE01に切られる。本住居跡は削平が著しく、井戸跡 (SE01) 側に床面が約40cmずり落ちた状態で検出された。周辺では、住居跡の痕跡はほとんどない。炉跡約1/3が残存している。炉内より骨片出土。柱穴1基検出したが、北半と南半で断層のごとくレベル差が生じている。規模や特徴はほとんど不明である。しかし、遺物は多く、埋土から床面に達するように検出され、一括廃棄されたものと推定される。また、井戸内から



第88図 SI-12平面図

多く出土し、本来本住居跡に帰属するものが多分に含まれていると考えられる。

出土遺物は、土師器壺・高壺・小型短頸壺・壺・複合口縁壺・甕・鉢形甕・刀子?・敲石・弥生土器がある。第89図1~4は壺で、1~3は内湾するもの、4は口縁部に屈曲をもつものである。また、1・2は表面・胎土とも赤色を呈する。5は小型の短頸壺で、須恵器の器形と共通する。6は高壺で、柄部はスロープを描き屈曲はみられない。7は単孔の鉢形甕であろう。8・9は壺で、8は複合口縁壺で、SI04の破片と接合した。第90図1は壺、2・3は甕であろう。4は敲石である。円礫を握り安くするために半裁しプランディングを加え、端部を主要な使用面としている。また、半裁面にも僅かに敲打痕が認められる。5は、刀子と考えられる。第91図はSE01出土の土師器であるが、本住居跡に帰属すると推定される土器である。1~3は高壺である。2・3は第89図6と同類であり、表面・胎土が赤色を呈している。4は鉢形甕で、単孔となる。

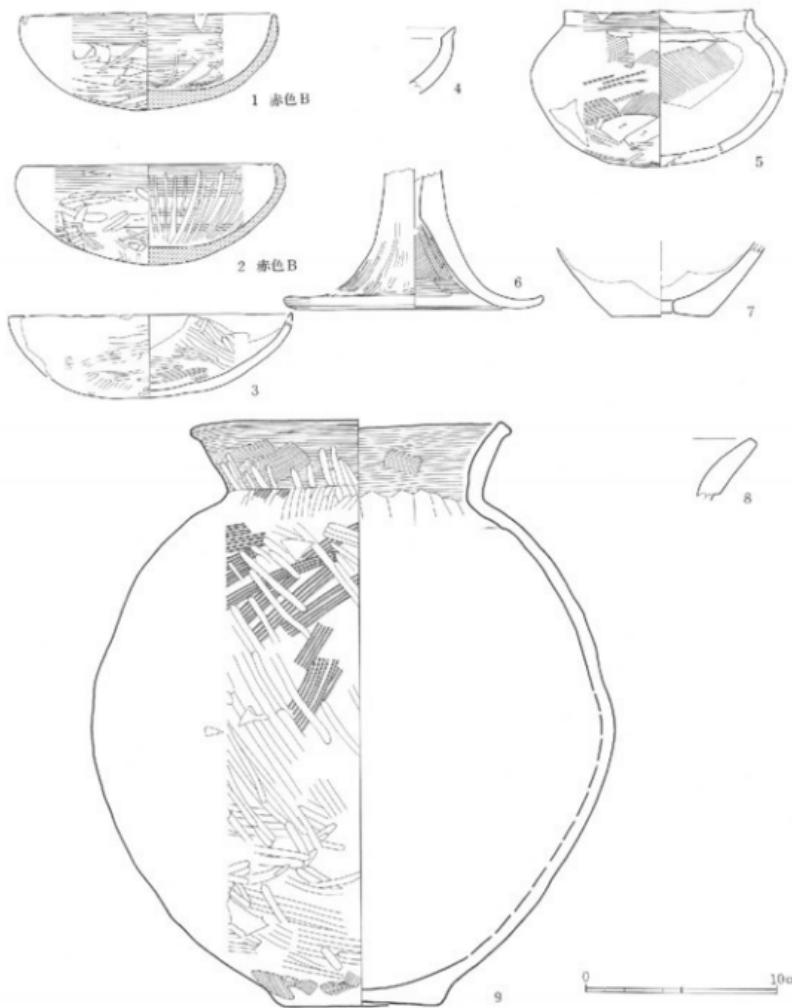
SI13 (第76図)

I区南端 (G-16区) に位置し、SB03~05・SD01に切られる。また、SI04と重複関係にあるが、その新旧は不明である。SD01の開削や近年の天地反しにより大半を失っており、規模は不明である。僅かに、北壁 (約2m) と東壁 (約0.5m) そして床面の一部を検出したに過ぎない。壁高は12cmを測る。住居跡あるいは竪穴構造の一部とみてよい。

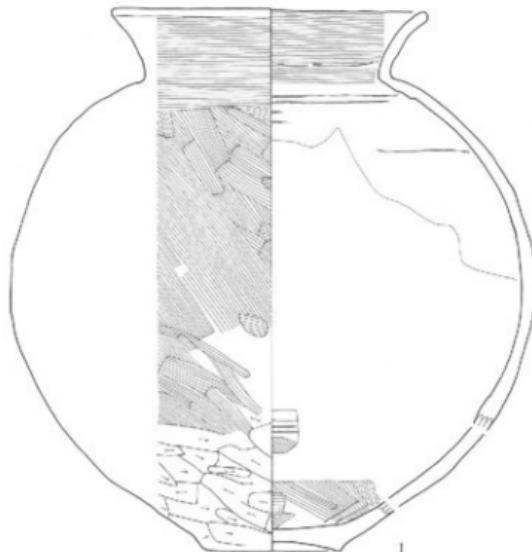
出土遺物は、赤彩の高壺など、土師器が少量出土している。

SI14 (第70・92図)

I区北端 (K-16区付近) に位置し、SD02・03・SI03に切られる。SI15と重複しているが、

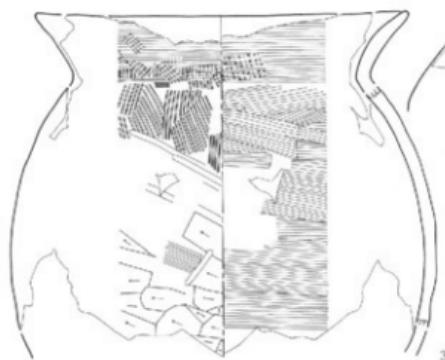


第89図 SI-12出土遺物(1)



1

0 10cm



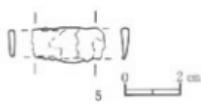
2



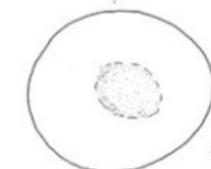
3



4

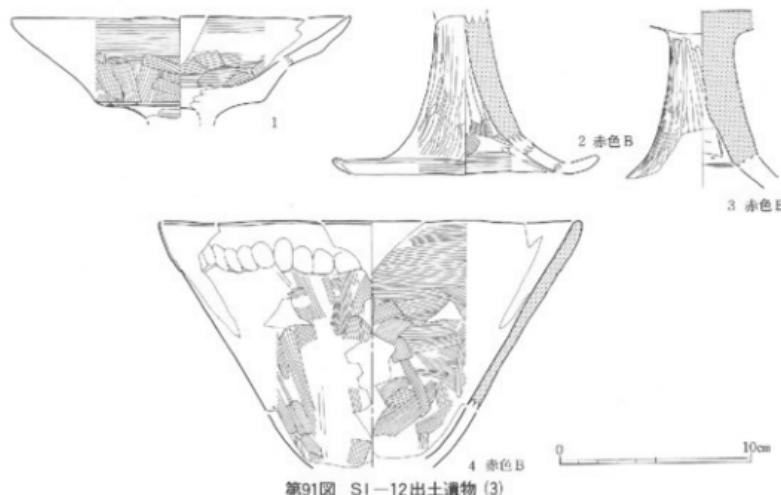


5



4

第90図 S I -12出土遺物 (2) 4・5: 1/2

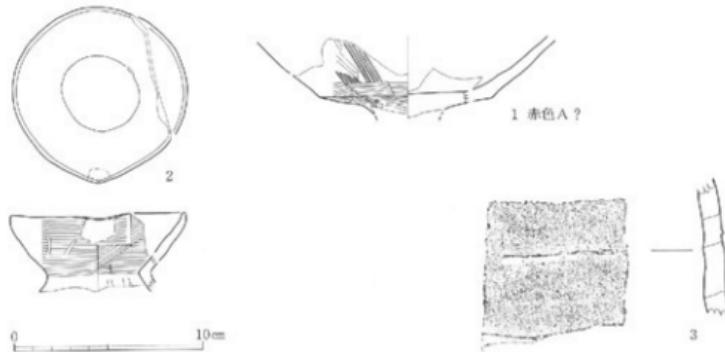


第91図 SI-12出土遺物(3)

新旧は不明である。規模や特徴は全く不明で、床の硬化面と少量の遺物を検出するに留まった。出土遺物は、土師器高坏・小型壺・須恵器器台である。第92図1は高坏、2は指頭による摘み出しで形成された注口をもつ小型壺である。3は須恵器器台の破片で、凸帯は線状に近く、波状文が4条みられる。側辺には長方形の透しの存在が確認できる。存地の製品であろう。

SI15 (第73図)

I区北部 (J-17区付近) に位置し、SI03・07に切られる。また、SI15・SD12と重複すると



第92図 SI-14出土遺物

考えられるが、新旧不明である。南西コーナー付近を検出したに過ぎず、規模・特徴は不明である。壁高は、残りの良い場所で約25cmを測る。南壁には、壁溝が確認できた。

出土遺物は、土師器片が僅かにあるが、図示できるものはない。

SI16(第73・93図)

I区北部(J-16区)に位置し、SB01・SD02・03・SI03・07に切られ、SI15を切る。

硬化した床面のみの検出で、規模・特徴は全く不明である。柱穴2基の帰属は不明である。

出土遺物は、土師器片が僅かにあるが、図示できるのは高壺に限られる(第93図1)。

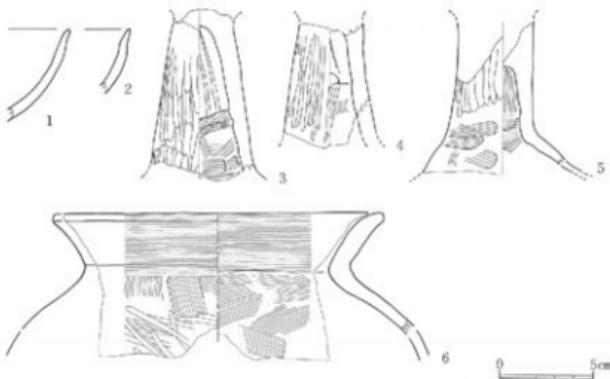
SI17(第84・94図)

4トレンチの東部(J-6区)に位置し、SB13・SI10に切られる。トレンチ調査のため、規模・特徴は不明であるが、東壁約1.2m・壁高9cmを測る。床面は北半に貼床が認められ、南側に1号土坑(深さ26cm)、北側に2号土坑(深さ約3cm)が検出された。遺物は、1号土坑と東壁際で出土している。

出土遺物は、土師器壺・高壺・甕・弥生土器・剣片がある。第94図1・2は壺で、2は口縁部に弱い屈曲がある。3～5は高壺の脚部で、5は裾部が屈曲せず、スロープ状になりそうである。6は体部が不明だが、甕であろう。

SI18(第95・96図)

2トレンチ(J-15区)に位置し、SB01・SK12に切られる。トレンチ調査のため規模は不明



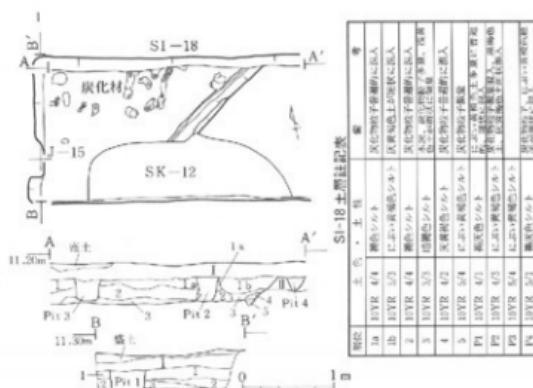
第93図 SI-16出土遺物

だが、東壁(約1m)と床の一部を検出した。壁高は12cmを測る。床面には、土器・円礫・炭化材が検出され、東壁には壁溝が確認された。本住居跡は焼失住居である。

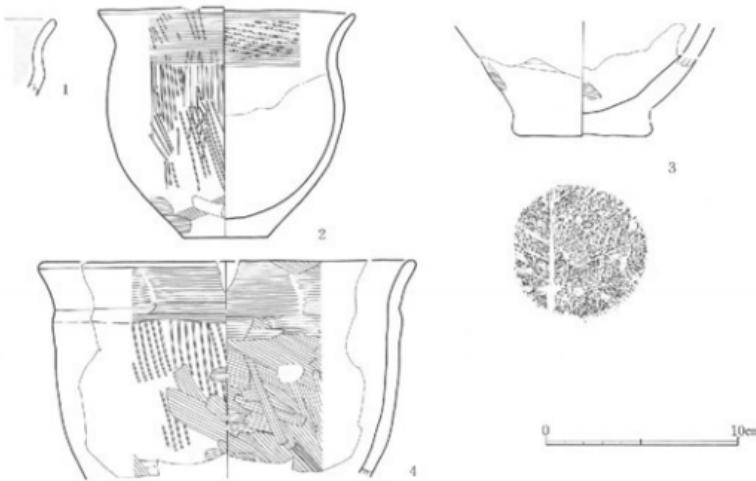
出土遺物は、土器部壺・小型壺・壺・削片がある。第96図1は内面黒色処理の壺。2は小型壺。3・4は壺であるが、3は長胴になると予想され、底部に木葉痕がある。

SII19(第70図)

I区北部(K-16区付近)に位置し、SB01・07・SD02に切られる。また、SI03と重複関係にあると考えられるが、直接確認できない。出土遺物から、本住居跡が古いと予想される。規模は明確ではないが、コーナー部分を推定すると、南辺3m以上、西辺1.8m以上になろう。



第95図 SI-18平面・断面図



第96図 SI-18出土遺物

壁高は2~3cmの確認に留った。南壁に壁溝を伴なう。床面は不明瞭で、ピットや不整土坑が検出されたが、いずれも極めて浅い。

出土遺物は、古墳時代中期頃の土師器細片が少量出土しているが、図示できるものはない。

土坑跡（SK）

土坑跡は9基検出した。住居跡の分布の希薄なVII区に多い。

SK15（第97図）

VII区（H-4区）に位置し、天地返しによる搅乱を受けている。規模は、1.05m×0.83m、深さ0.26mを測る。平面は不整梢円形を呈する。遺物は出土していない。

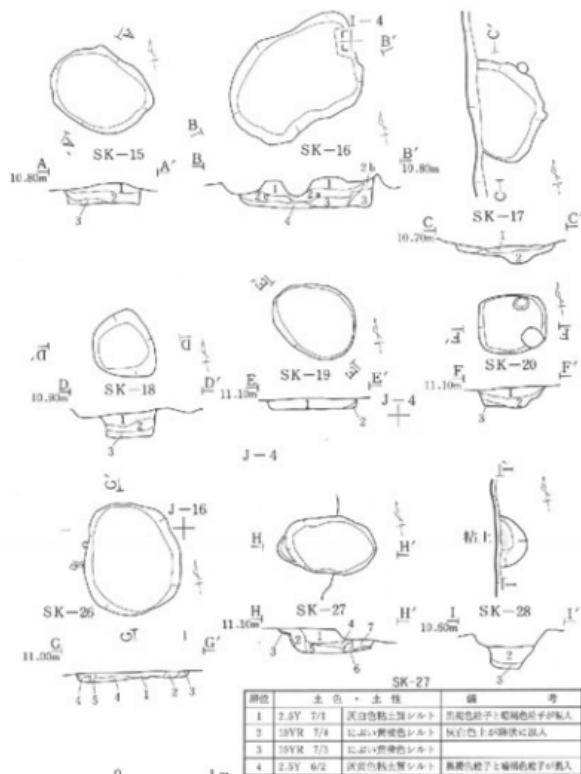
SK16（第97図）

SK-15 土層註記表

番号	土色・土性
1	10YR 8/2 淡黄褐色粘質シルト
2	10YR 8/2 に赤・黄褐色シルト
3	2.5Y 7/2 灰黄色砂

番号
1
2a
2b
2c
3
4
5

番号
1
2
3



第97図 SK-15~20・26~28平面図・断面図

VII区(H-3区)に位置し、天地返しによる攪乱を受けている。規模は、1.54m×1.05m、深さ0.33mを測る。平面は不整形である。遺物は出土していない。

SK17(第97図)

VIII区(H-I-3区)に位置し、天地返しによる攪乱を受けている。規模は明確ではないが、0.8m以上、深さ0.18mを測る。平面は不整方形であろうか。遺物は出土していない。

SK18(第97図)

VII区(I-3区)に位置し、天地返しによる攪乱を受けている。規模は、0.77m×0.64m、深さ0.29mを測る。平面は不整橢円形である。遺物は出土していない。

SK19(第97図)

VII区(J-3区)に位置し、SK20の北側に隣接する。規模は、0.95m×0.77m、深さ0.11mを測る。平面は橢円形である。遺物は出土していない。

SK20(第97図)

VII区(J-3区)に位置し、SB11の柱穴に切られている。規模は、0.71m×0.62m、深さ0.21mを測る。平面は隅丸方形である。遺物は出土していない。

SK26(第97・102図)

I区(I-15区)に位置し、上部は削平を受けている。規模は1.2m×1.03m、深さ0.12mを測る。平面は橢円形である。遺物は第102図5のミニチュア土器1点がある。また、土坑の周囲にも土師器片が少量出土している。

SK27(第97図)

VII区(J-4区)に位置し、SI01・02に切られる。規模は1.07m×0.62m、深さ0.21mを測る。平面は楕円形で、西側に張り出しがある。遺物は弥生土器細片1点がある。

SK28(第97図)

I区南部(G-15区)に位置し、SD08底面で約1/2を検出した。規模は南北で0.54m、深さ0.24mを測る。遺物は土師器片少量と白色粘土塊が出土している。

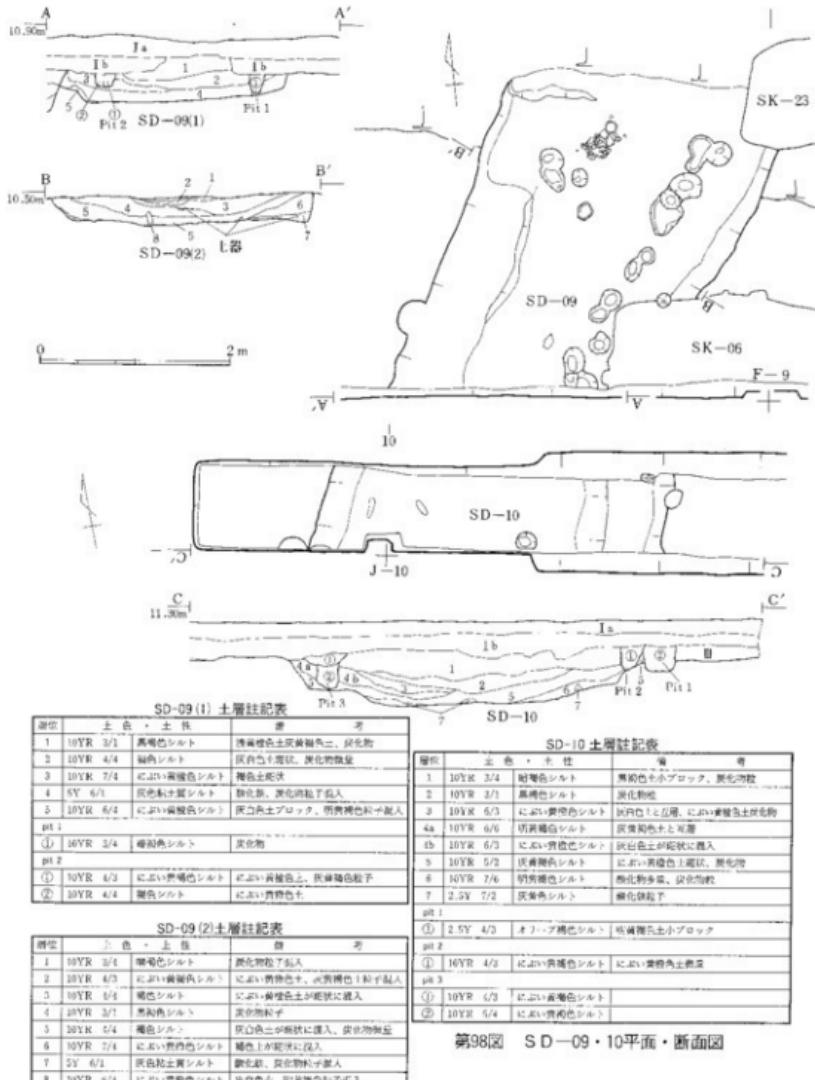
これらの土坑のうち、SK15~20・27は埋土が灰白色~浅黄橙シルトで類似した特徴をもつ。それぞれ単独もので、およそ同時期と予想される。これらに類似するものは、第11次・14次調査地点で検出されている。SK27がSI02に切られている点を考慮すると、古墳時代中期以前のものであろう。また、SK26・28は単独で存在したかどうか不明で、あるいは住居跡などに付属するものだった可能性もある。これらは、出土土器片から古墳時代中期以後と予想される。

溝跡(SD)

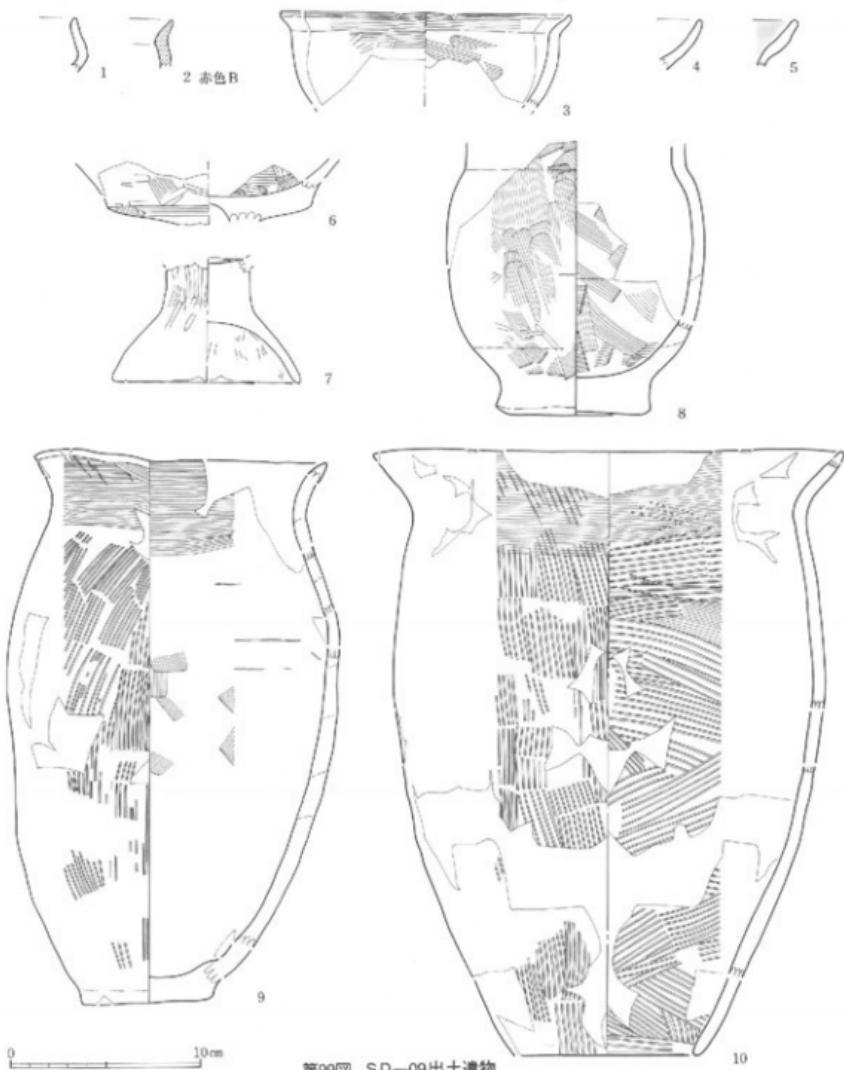
溝跡は3ヶ所で検出されている。

SD09(第98・99図)

IV区西部(F-8区)に位置し、SK06・22・SD01に切られ、SI09を切る。規模は、長さ3.6mを確認し、さらに南北に伸びる。幅2.95m、深さ0.4mを測る。西壁寄りにテラス状の段差がみられ、東壁側には連続するピットが検出された。このピットは4~14cmでいずれも浅い。方向は、N-31°-Eである。遺物は各層より出土しているが、特に3層に集中する傾向が認め



第98図 SD-09・10平面・断面図



第99図 SD-09出土遺物

られた。

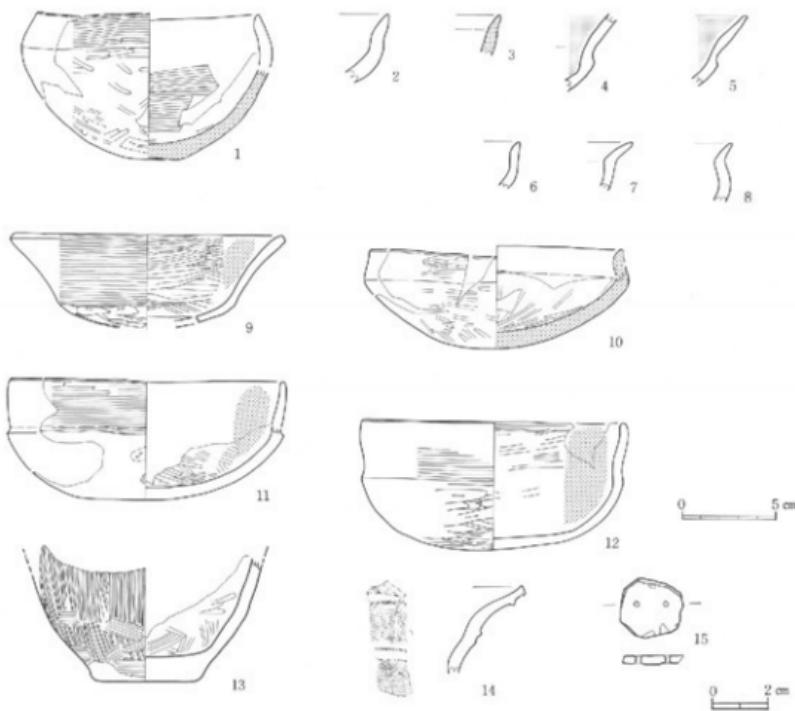
出土遺物は、土師器壺・高壺・小型甕・甕・瓶・弥生土器・剝片（黒曜石など）、赤色顔料塊？

が出土している。第99図1～5は壊で、1・4は内湾するもの、2・3は屈曲をもつもの、5は外傾するものである。2は表面・胎土も赤色を呈し、5は内面黒色処理を施す。また、3は、口縁端部は面取りされ沈線が巡ぐる。6・7は高壊で、6は古い時期の混入品であろうか。8は小型壺、9は長胴壺で底部に木葉痕がある。10は大型壺である。

SD10 (第98・100図)

3トレンチ西部(I-10区)に位置し、SB14・SK14に切られる。規模は、長さ1mを確認し、幅3.50m・深さ0.56mを測る。方向は、N-32°-Eである。東壁寄りにテラス状の段差がある。遺物は各層より出土しているが、特に5層に多い。規模・形態・方向が類似していることから、SD09と一連の溝跡と理解される。

出土遺物は、土師器壊・小型壺・須恵器小型壺・甕・石製模造品、剝片(黒曜石)がある。第100図1～12は壊である。1・10は、口縁部が内湾あるいは内傾するもの、2・7・8は屈曲するもの、3・11・12は有段で直立ぎみのもの、4・5は有段で外傾するもの、9は大きく



第100図 SD-10出土遺物 15:15

外反するものである。4・5・9・11・12は、内面黒色処理を施す。1・3・10は、表面・胎土とも赤色を呈する。13は小型の甕と考えられる。14は須恵器小型甕と推定され、おそらくTK208頃であろう。混入品である。15は石製模造品(円板)で、これも混入品であろう。剝片については、帰属不明である。SD09とともに、関東系土器は出土していない。

SD12 (第101・102図)

1トレンチ(J-17区)に位置し、SB06に切られ、SI07を切る。トレンチ調査のため、規模は不明であるが、深さ0.36~0.39mで、底面は平坦ではない。東端部はさらに一段下がり、深さ0.59mを測る。方向は、N-28°Wである。遺物は土師器細片が多く、時期決定資料がない。一応、古墳時代と推定しておく。また、土坑の可能性も残る。

出土遺物は、土師器壺・弥生土器・石製模造品(細片種類不明)・フレークがある。第102図1~4は壺である。1・2は、口縁部が直立するもの、3・4は屈曲するものである。3はSK26と接合した資料である。

(2) 中世・近世

中・近世に属する遺構は、柱穴列1条・掘立柱建物跡14棟・井戸跡1基・土坑16基・溝跡13条がある。なお、当初SK09で登録した遺構は、井戸跡(SE01)と判明したので欠番とした。

柱穴列(SA)

SA01 (第103図)

V区~IV区西部(F-6・7区)に位置し、SD01に切られ、SK04を切る。上部は、耕作により削平されている。柱穴は、打込みの杭だった可能性があり、SD01におよそ平行に並ぶ。柱穴は浅く、深さ6~22cmである。二本単位のようにも思え、櫛あるいは垣根が想定されよう。時期を決める遺物はないが、長期間使用されたSD01の古い段階(中世)に並設されたものと推定しておきたい。確認できる長さは、約6.7mである。

掘立柱建物跡(SB)

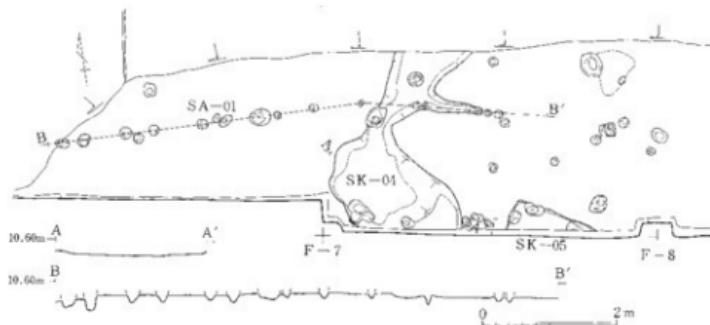
SB01 (第104図)



第101図 SD-12平面・断面図



第102図 SD-12・SK-26出土遺物 1~4:SD12, 5:SK26



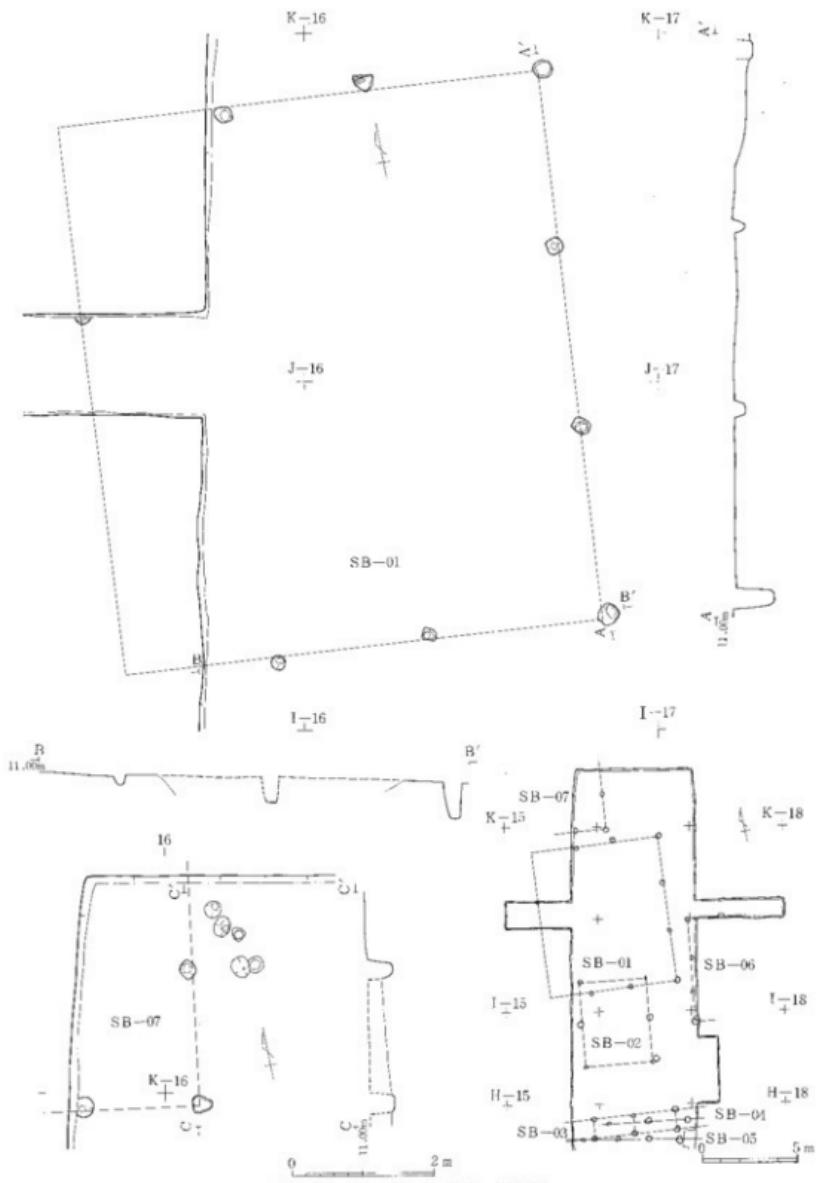
第103図 SA-01平面・断面図

I区北部に位置し、SD03に切られ、SD02・08・SI07・11・15・18・19を切る。上部は耕作によって削平されている。桁行3間（東辺総長7.9m）、梁行3間（南辺推定総長約6.8m）の南北棟建物跡である。西辺側は不明であるが、底や縁は付かないものであろう。方向は、東辺で約N-2°-Eである。柱穴は20~30cmで、深さ14~26cmであるが隅柱は53cmと深い。柱穴寸法は、7尺・9尺が使用されている。一部に角柱が認められる。床束のような柱穴は検出されていない。時期を決定できるような遺物は出土していない。

SB02（第105図）

I区南部（H・I-16区付近）に位置し、SD02・03に切られ、SI11を切る。上部は削平されている。桁行2間（西辺総長4.56m）、梁行1間（南辺総長3.66m）の小規模な南北棟建物跡である。梁行は2間だった可能性も残る。方向は、西辺でN-6°-Eを示す。柱穴は20~30cmで、深さは20cm前後であるが、残りのよいものは45cmを測る。時期決定できる遺物はない。

SB03（第106図）



第104図 SB-01・07 平面・断面図

I区南端 (G-16区付近)に位置し、SD01・02・08に切られ、SI04を切る。大部分はSD01に切られ、規模は不明である。北辺部2間分 (4.44m)以上で、少なくとも北側に約1.2m幅の底または縁をもつ建物跡であろう。方向は、北辺でN-86°-Wである。柱穴は30cm前後で、深さは残りのよいもので36cmを測る。時期を決定できる遺物はない。

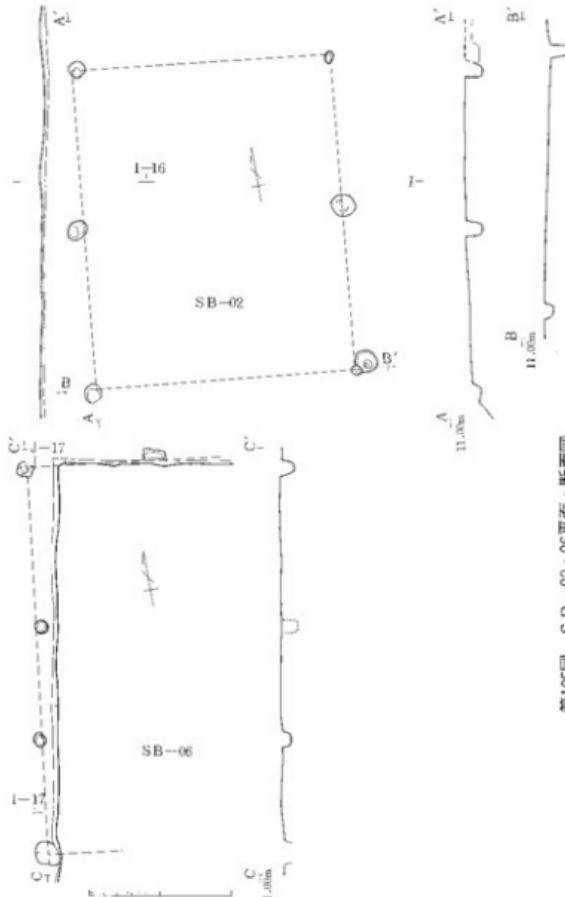
SB04 (第106図)

I区南端 (G-16区)に位置し、SD02・08に切られ、SI13を切る。天地返しによる搅乱を受けている。北辺部2間分を検出したに過ぎないが、ほぼ7尺等間隔に並ぶことから建物跡と推定した。柱穴は25~30cm、深さ

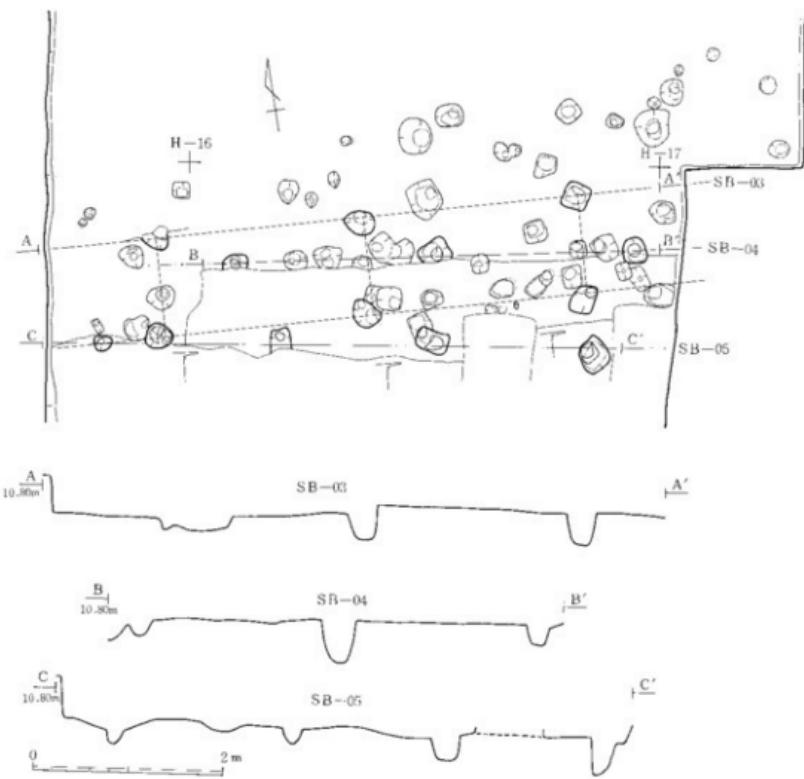
は残りの良いもので46cmを測る。方向は、北辺でN-82°-Wである。遺物は須恵器片などが出土しているが、時期決定できるものはない。

SB05 (第106図)

I区南端 (G-15・16区)に位置し、SD01に切られる。天地返しによる搅乱を受けている。北辺部3間分を検出した。建物跡か廻跡と予想されるが、間尺がやや不揃いである点とSD01に並行することから後者と理解しておきたい。おそらく、時期決定できる遺物はないがSD01の古い段階に並設されていたものではないだろうか。柱穴は、柱穴痕跡も掘り方も角形であり、20×



第106図 SB-02・06平面・断面図



第106図 SB-03・04・05平面・断面図

30 cm、深さ 18~29 cm で残りの良いものは 43 cm を測る。方向は、N-80°-W である。

I 区南端では、さらに多数の柱穴が検出されており、他にも建物跡が予想される。

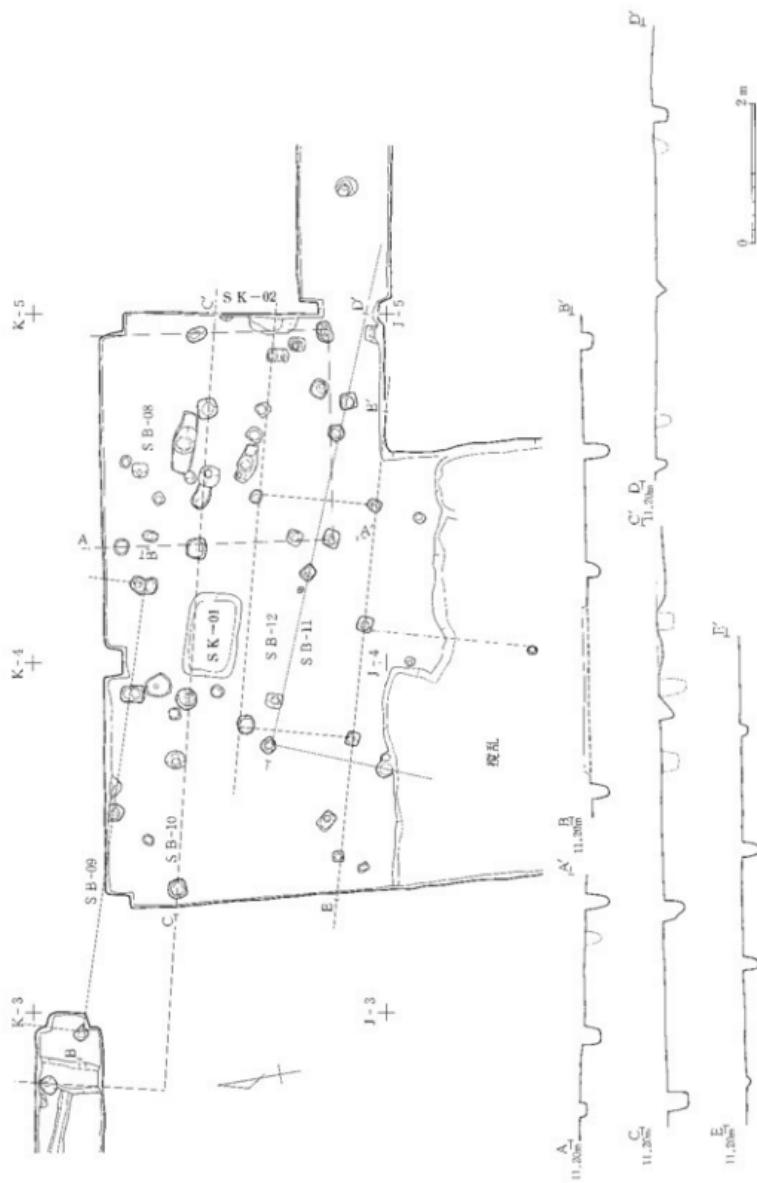
SB06 (第 105 図)

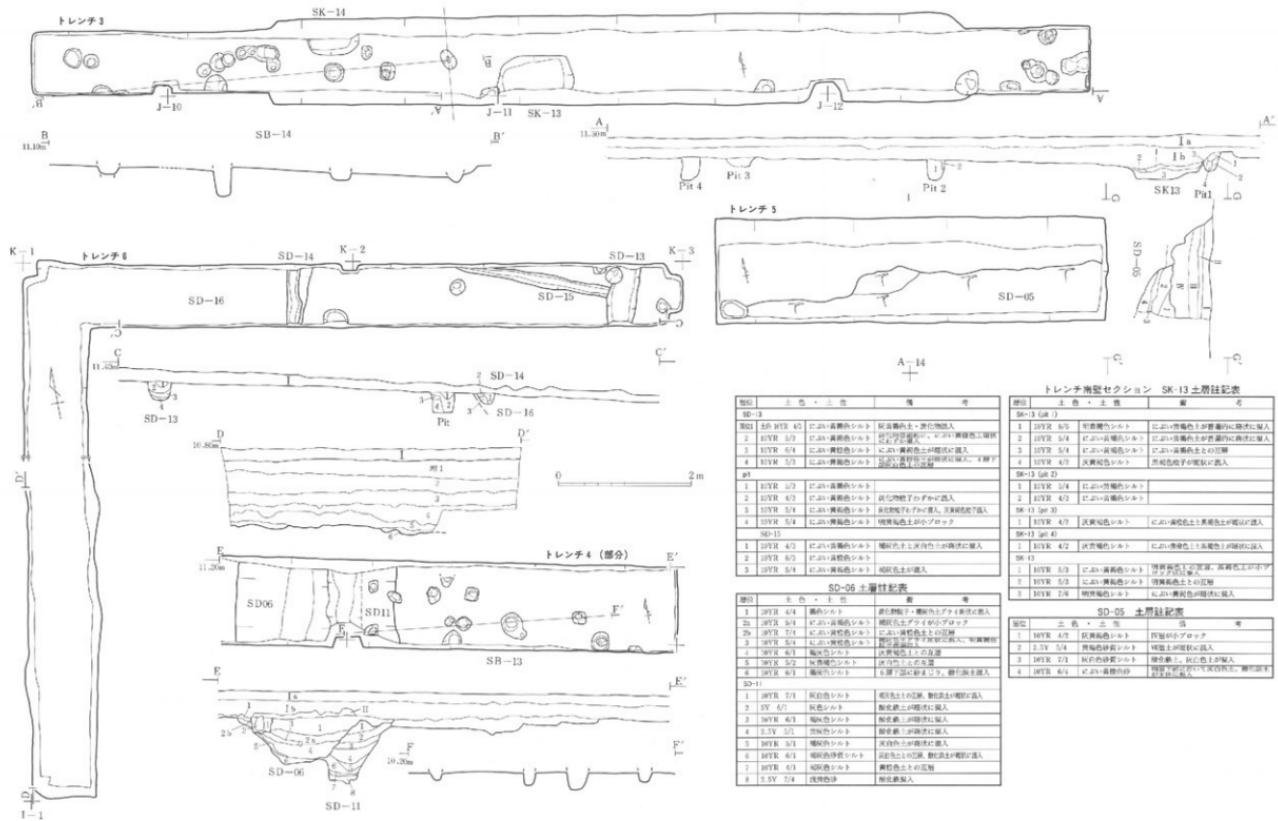
I 区中央 (I-17 区) と I トレンチにかけて位置し、SI07 を切る。上部は削平されている。規模は不明だが、西辺 3 間 (5.5 m)、北辺 1 間 (1.86 m 以上) を検出した。方向は、西辺 N-7°-W である。柱穴は約 20 cm、深さも 20 cm 前後である。遺物は出土していない。

SB07 (第 104 図)

I 区北端 (K-15 区) に位置し、SI19 を切る。また、直接重複はないが、SD02 より層位的に新しい。規模は不明だが、建物跡の一部と推定した。南辺・東辺とともに 1 間分である。方向は、

第107图 SB-08~12平面·断面图





第108図 トレンチ平面・断面図

東辺で N-6°-E である。柱穴は 20~30 cm、深さは 35~40 cm である。西端の柱穴は 86 cm と深い。遺物は出土していない。

SB08 (第 107 図)

VII 区 (J-4 区) に位置し、SI01・02 を切る。また、SB10~12 と重複関係が認められるが、直接柱穴の重複はない。桁行 1 間以上 (東辺長 3.21 m)、梁行 2 間 (南辺総長 3.01 m) の南北棟と考えられる。柱穴は 20~30 cm、深さ 19~33 cm である。方向は、西辺で N-8°-E である。柱痕跡を確認できるものは、いずれも角形である。時期の決定できる遺物はない。

SB09 (第 107 図)

VII 区 (J-3 区付近) に位置し、SB10 と重複関係にあるが、その新旧は不明である。上部は、耕作により削平されている。規模は不明であるが、南辺 4 間 (総長推定約 6.4 m) が推定できる。柱穴は 20 cm 前後で、深さ 16~33 cm である。方向は、南辺で N-71°-W である。SD13 に平行しているものと思われる。柱間寸法はやや不揃いで狭まい点、簡便な建物であろう。柱痕跡には、角形のものがみられる。遺物は出土していない。

SB10 (第 107 図)

VII 区 (J-3・4 区) に位置し、SI01・02・SD13 を切り、SB08・09・SK01 と重複関係にある。後者の場合、直接切り合いがないので新旧不明である。規模は不明だが、南辺推定 3 間 (推定長 11 m) 以上、西辺 1 間 (推定長 1.7 m) 以上で、比較的大型の建物跡と予想される。柱穴は上部を削平されているが、25~30 cm、深さは残りの良いもので 30 cm ある。南辺の柱間寸法は約 9 尺間隔であるが、西辺は約 6.5 尺であることから、庇部分を検出した可能性がある。柱痕跡には、角形のものがみられる。方向は、南辺で N-77°-W である。時期を決定できる遺物は出土していない。

SB11 (第 107 図)

VII 区 (J-3・4 区) に位置し、SI02・SK20 を切る。上部は削平を受け、南側は天地返しにより大半を失っている。規模は不明だが、北辺 2 間 (7 m) 以上、西辺 1 間 (1.7 m) 以上である。北辺の柱間寸法が約 8 尺に対して、西辺は 6 尺未満であることから東西棟であろうと予想される。柱穴は約 20 cm、深さ 14~22 cm で、角形の柱痕跡をもつものがある。方向は、北辺で N-67°-W で、SB09 とほぼ平行する。時期を決定できる遺物はない。

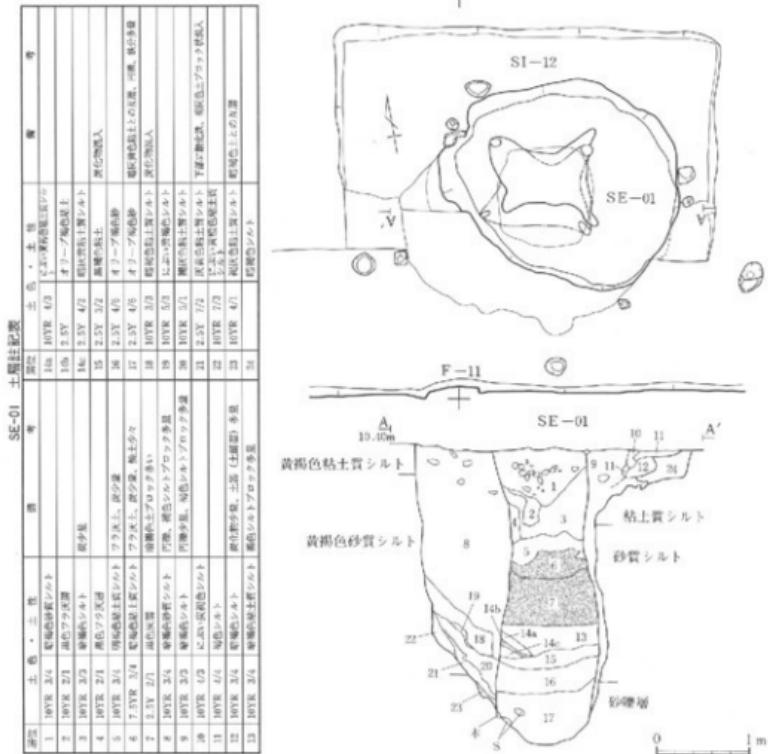
SB12 (第 107 図)

VII 区 (J-3・4 区) に位置し、SI02 を切る。他にも重複する遺構があるが、いずれも建物跡より古いと考えられる。柱穴上部は削平を受け、南側の主要な部分は天地返しにより攪乱を受けている。規模は不明だが、北辺部 3 間 (5 m) 以上で、さらに北側で 1 間分の張り出し又は庇が付く可能性がある。柱穴は 20 cm 前後で他より小型であり、深さ 7~26 cm である。柱穴掘り

方はいずれも四角形で、柱痕跡も角形と確認できるものが多い。方向は、北辺で N-74°-W である。SB10 とほぼ平行する。時期を決定できる遺物はない。

SB09~12 については、柱穴埋土が黄褐色~褐色シルトで類似し、基本層の I・II 層とも類似している。これに対し、SB08 は I 区の建物跡と類似して、暗褐色シルトで区別される。この特徴は建物跡の方向差とも良く合致しており、時期差あるいは時代差を反映していると考えられる。SB08 が古いと考えられる。SB09~12 は、現在の道路区画と方向がおよそ合っている。また、VII 区やその周辺の表土中には、古墳時代の土師器や近代の陶磁器を除くと、志野織部丸皿や段付白天目茶碗（第 120 図 18・4）など江戸時代初期のものが多く、建物跡の時期を推定する傍証になると思われる。

SB13 (第 108 図)



第109図 SE-01平面・断面図

4トレンチ (J-6区) に位置し、SD06・11・SI10・11を切る。柱穴4個が並び、建物跡の一部と推定される。規模・特徴は不明である。方向はN-85°-Wで、柱痕跡に角形のものが認められる。時期を決定できる遺物はない。

SB14 (第108図)

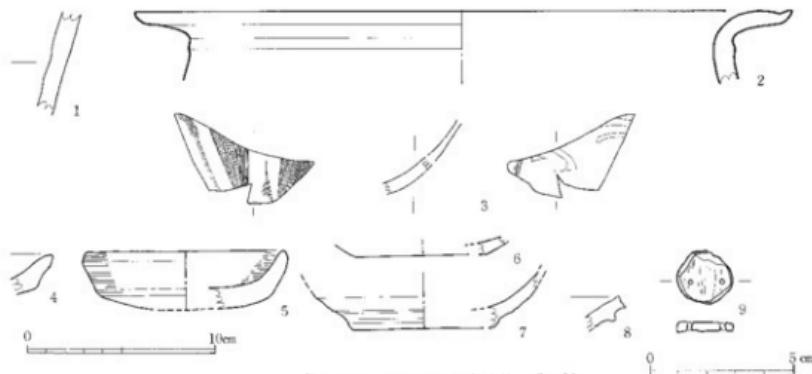
3トレンチ (J-10区付近) に位置し、SD10を切る。上部は耕作によって削平を受けている。一列に並ぶ柱穴4基(3間分)を検出し、建物跡の一部と推定される。長さ5.2mで、柱穴は約5.8尺等間隔で並ぶ。柱穴は約30cm、深さ12~20cmであり、角形の柱痕跡をもつものがある。方向は、N-86°-Wである。時期の決定できる遺物はない。

井戸跡 (SE)

井戸跡はIV区で1基検出されたが、SD02や07で区画された北部には、さらに井戸跡の存在が予想される。なお、SE01については、当初SK09と登録したが、後に井戸跡と判明したことから改称し、SK09は欠番とした。

SE01 (第109・110図)

IV区(F-10・11区)に位置し、SI12を切り、SD01に切られる。上部は削平を受けている。また、南西側は約34~40cm地滑りを起こし、変形している。この地滑りは、使用中に起きたものと考えられる。前述したSI12は、結果的に地滑り範囲部分のみが残り、他は削平されている。変形したために本來の規模は不明だが、掘り方は2.6m×2.1mの不整円形を呈する。井戸本体プランは、確認面で約1m幅の不整形、中間の支柱プランの確認時には約1m四方の整形プランを呈している。底面では4本の支柱穴、本体壁面では縦板材残欠が検出された。支柱穴間の長さは、東西約1m・南北0.75~0.85mを測り、長方形を呈している。本井戸跡は、

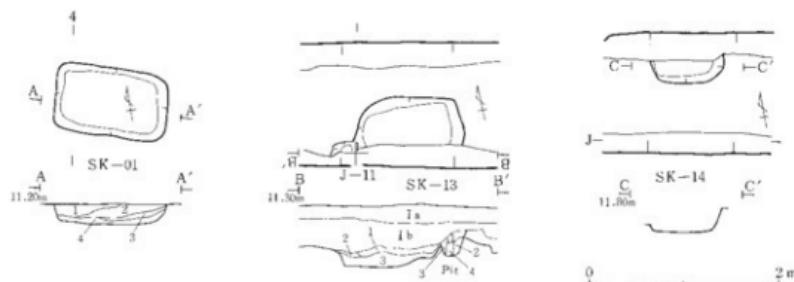


第110図 SE-01出土遺物 9:½

その特徴から「縦板組隅柱横棟どめ井戸」(宇野隆夫: 1982)に分類される。井戸の深さは約2.75mで、深度約2.5m(標高約7.8m)で砂礫層に至り、さら掘り込んでいる。埋土の特徴は、本体部の1層で多量の円礫を含み、6・7層で多量の黒色(炭化?)の草の堆積がみられる。

出土遺物は、常滑窯口縁部(第110図2)・部片(格子状押印)、中国龍泉窯系檻描蓮弁文碗、土師質土器皿(手捏ね2点、ロクロ使用4点)、外面橙色を呈する硬質の土器片(塊?)4点(第110図7)、炭化米・炭化種子があり、他に古墳時代の土師器多数、須恵器2点、有孔円板1点、平安時代の土師器壺・須恵器壺、布目瓦各1点、弥生土器片6点がある。古墳時代の土師器は、大半がSI12に帰属するものとみられる。須恵器片もその可能性がある。陶磁器や土師質土器が、井戸跡の時期決定資料となろう。

土坑(SK)



SK-01 土層註記表

層位	土 型	土 性	標 号
1	10YR 4/2	灰青褐色シルト	炭化泥・灰青褐色土塊状に混入
2	10YR 5/2	灰青褐色シルト	灰青褐色土多量・洞穴に混入
3	10YR 3/1	灰褐色シルト	クタ底
4	10YR 4/2	灰青褐色シルト	灰青褐色土・普遍的・斑状に混入

SK-13 土層註記表

層位	土 型	土 性	標 号
1	10YR 5/2	に赤い黄褐色シルト	赤青褐色土との互層・高褐色土小ブロック
2	10YR 5/3	に赤い黄褐色シルト	赤青褐色土との互層
3	10YR 7/6	明黄褐色シルト	に赤い黄褐色土層状に混入
P1	10YR 6/6	明黄褐色シルト	に赤い黄褐色土・普遍的に
P2	10YR 5/5	に赤い黄褐色シルト	に赤い黄褐色土・普遍的に
P3	10YR 5/4	に赤い黄褐色シルト	に赤い黄褐色土・普遍的に
P4	10YR 4/2	灰青褐色シルト	灰青褐色土斑状に混入

第111図 SK-01・13・14平面・断面図

SK01(第111・115図)

VII区(J-3・4区)に位置し、他の遺構と直接切り合はない。なお、SB10と重複関係にあるが、その新旧は不明である。上部は削平されている。規模は、1.2m×0.75m・深さ0.22mを測る。形状は長方形で、底はほぼ平坦である。内部に、黒色の草の堆積層が認められた。

出土遺物は、須恵器壺片・弥生土器片・勾玉(第115図1)、スクリイバーがある。これらは、遺構の時期を決定できるかは疑わしい。埋土は、周囲の建物跡(SB09~12)柱穴埋土と類似し、長軸方向(N-72°-W)も、先の建物跡(SB10・12)と類似する。従って、建物跡と関連するものと理解したい。

SK02 (第107図)

VII区(J-4区)に位置し、SI01を切る。また、SB08・12と重複関係にあるが、その新旧は不明である。土坑の主体は調査区外にあり、規模・形状は不明である。深さは0.11mである。埋土は黒褐色シルトの単層である。遺物は、弥生土器片1点が出土しているが、時期決定資料ではない。埋土の特徴から中世のものであろう。

SK03 (第112図)

VI区(G-4区)に位置し、単独のものである。規模は、2.99m×0.7m・深さ0.36mである。底面には起伏がみられる。埋土は、黄褐色シルト主体で基本層I層と類似する。

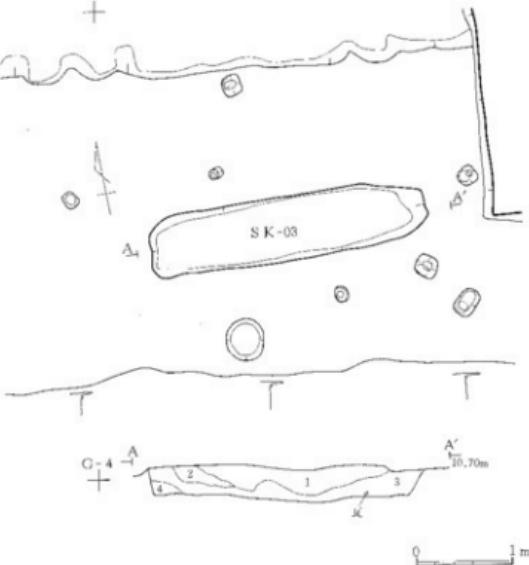
出土遺物は、土師質土器皿・壙瓦(丸瓦3点・平瓦3点)・近世陶器壺・弥生土器がある。土師質土器(第115図2)は、外底面に板状圧痕、内底面(見込)に指ナデがみられ、明らかに中世のものである。瓦は近世のものである。陶器は大堀相馬とみられ、海鼠釉風の釉であることから、18世紀以後のものであろう。建物跡との関連はないであろう。

SK04 (第103図)

IV区西端部(F-7区)に位置し、SA01・SD01に切られる。上部は、耕作により削平を受ける。規模は、約2.9m×1.35m・深さ6cmである。不定形で、中央に屈曲がみられる。土坑として扱ったが、溝の可能性も残る。遺物は出土していない。重複関係から、中世以前とみられる。

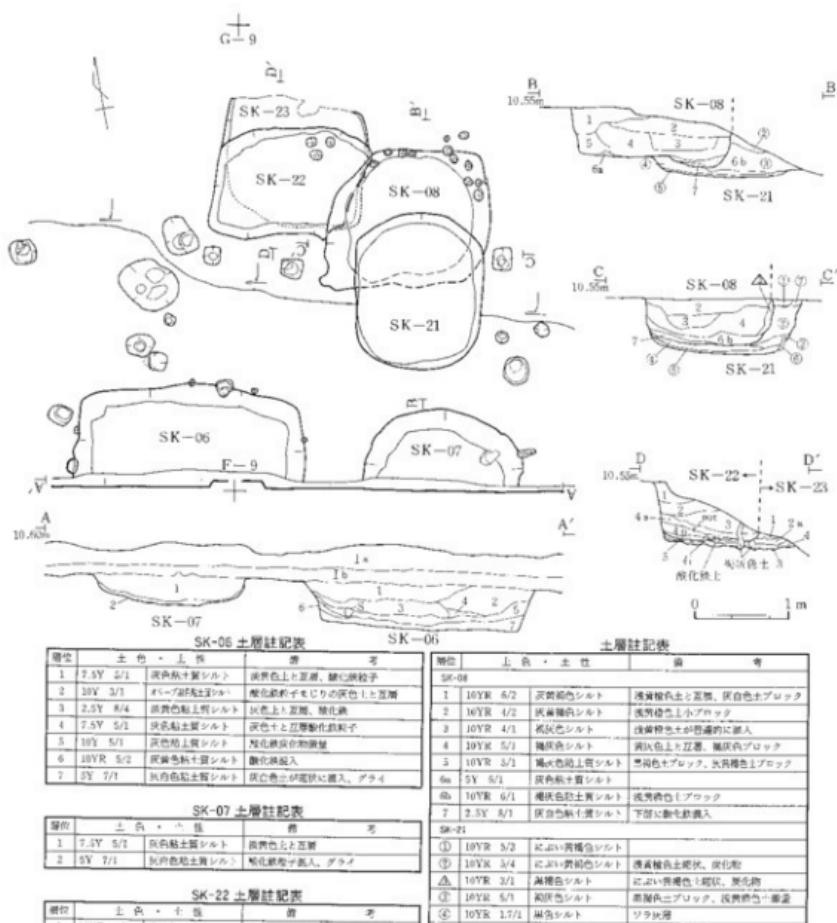
SK05 (第103図)

IV区西端部(F-7区)に位置し、柱穴に切られる。上部は、耕作により削平を受ける。規模は不明だが、北辺で約1.24m・深さ3cmである。遺物は出土していない。埋土の類似から、



SK-03 土層記表		
層位	地・上・世	層 号
1	10YR 5/3 に近い黄褐色シルト	褐色土瓦層、灰白色土が小ブロック混入
2	10YR 5/3 に近い黄褐色シルト	
3	10YR 5/2 黄褐色シルト	
4	10YR 5/3 に近い黄褐色シルト	J層土が小ブロック混入

第112図 SK-03平面・断面図



第113図 SK-06～08・21～23平面・断面図(IV区)

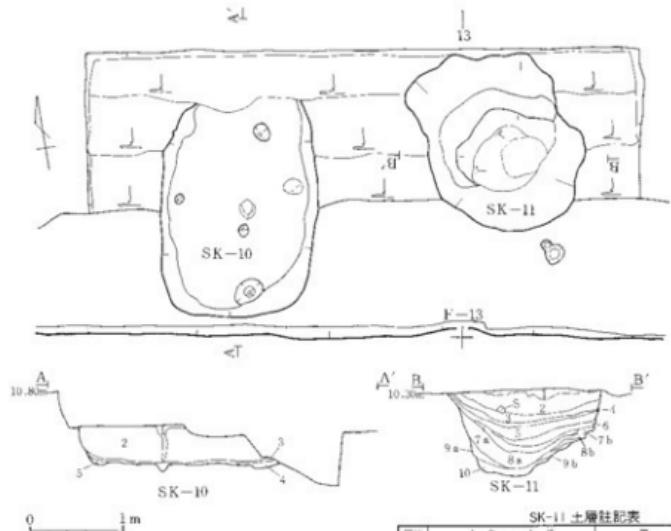
SK04と関連するものと予想される。

SK06(第113図)

IV区(F-8・9区)に位置し、SI09・SD09を切る。規模は、東西2.49m・南北0.94m以上、深さ0.46mで、長方形を呈すると予想される。埋土は、いずれもグライ化し、酸化鉄を含んでいる。埋土1~4層は、ブロック土が混入し、人偶的に埋められたものとみられる。壁際に小ピット(杭?)が検出されている。遺物は、外面橙色を呈する硬質土器片(塊?)・須恵器甕(古墳時代?)・弥生土器が出土している。時期を推定できるのは硬質土器片で、同様のものがSE01で出土していることからほぼ同時のものであろう(第110図7と類似)。この土器は、他の遺跡の類例がないが土師質土器と理解しておきたい。

SK07(第113図)

IV区(F-9区)に位置し、SI09を切る。上部は削平を受けている。規模は東西1.68m・南北0.76m、深さ0.33mを測り、楕円形を呈するものと予想される。埋土1層は、ブロック土が多数入り、人偶的に埋められたものとみられる。底部には、鉄分の集積層が形成されている。底面直上で川原石が出土したが、他に遺物は出土していない。



番号	土色・性状	層	備考
1	10YR 5/3	に赤い黄褐色シルト	須恵器甕子、明眞褐色粘子骨器の混入
2	10YR 6/5	明眞褐色粘質シルト	須恵器甕上層
3	5YR 7/3	に赤い黄褐色シルト	
4	5YR 5/2	灰褐色シルト	
5	10YR 8/1	灰褐色粘質シルト	

第114図 SK-10・11平面・断面図(III)

層	土色・性状	層	備考
1	10YR 5/6	須恵器甕入、赤褐色粘土状	
2	10YR 3/1	赤褐色シルト	1層上に赤い手形陶器がブロック混入
3	10YR 3/1	赤褐色シルト	須恵器甕、に赤い須恵器がブロック混入
4	10YR 4/4	褐色シルト	上部に赤い須恵器、に赤い須恵器土器状
5	10YR 5/3	に赤い須恵器シルト	須恵器子多量須恵器脚? 7面鏡状
6	10YR 4/4	褐色シルト	
7	10YR 5/2	に赤い黄褐色シルト	須恵器子多量須恵器脚? 7面鏡状
8	10YR 5/2	赤褐色シルト	須恵器子多量須恵器脚? 7面鏡状
9a	10YR 5/4	須恵器甕入	
9b	10YR 5/4	x赤い須恵器シルト	
10	10YR 7/7	赤い須恵器シルト	須恵器甕入
11	10YR 5/3	x赤い須恵器シルト	須恵器甕入
12	10YR 5/2	に赤い須恵器シルト	須恵器子多量須恵器脚? 7面鏡状

SK08 (第 113 図)

IV 区 (F-9 区) に位置し、SI09・SK21 を切り、SD01 に切られる。規模は 1.68 m × 1.29 m、深さ 0.53 m を測り、梢円形を呈する。この土坑も SK06・07 と同様、浅黄褐色シルトブロックが埋土 1~5・6 b 層に認められ、人為的に埋められたものとみられる。底面付近には酸化鉄が斑状に混じる。SK21 と重複する部分の底面は窪んでいる。遺物は、ロクロ使用の白色土器 (皿?)・須恵器壺 (古墳時代?)・弥生土器が出土している。白色土器片は SD01 でも出土しているが、これらは類例を知らず評価できない。一応、遺構の類似性から SK06 などと同時期と理解したい。

SK10 (第 114・115 図)

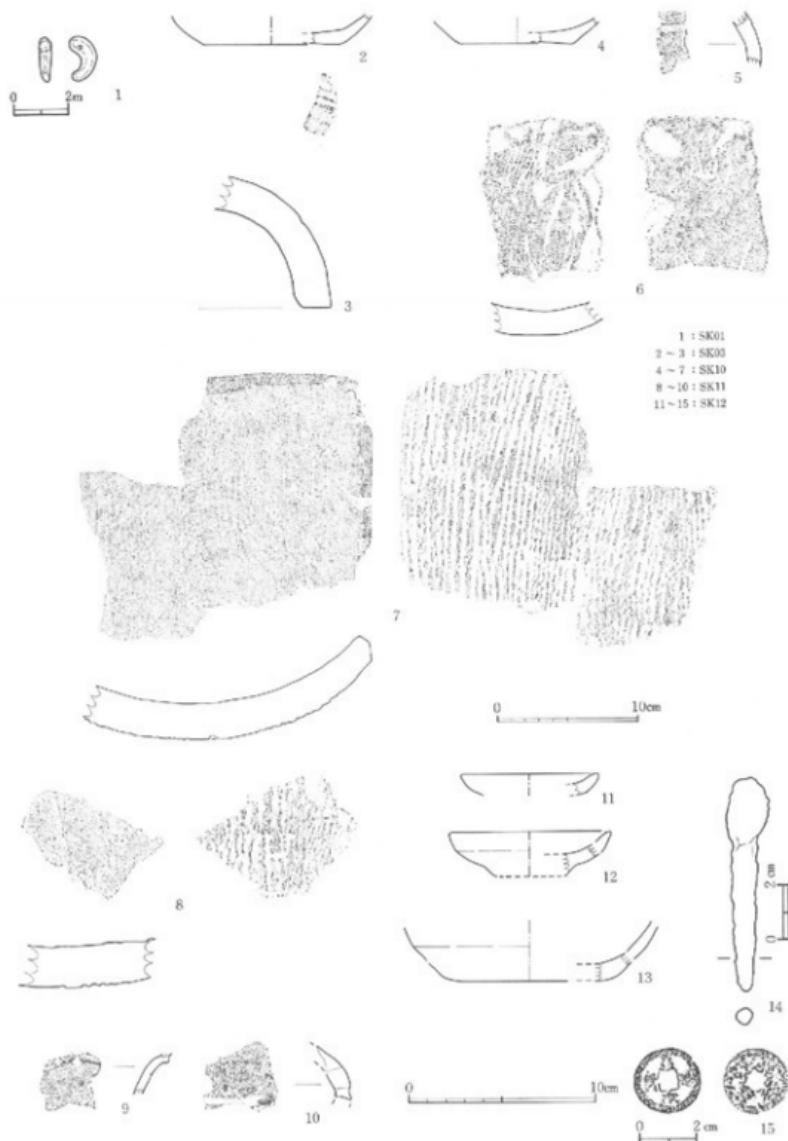
IV 区 (F-12 区) に位置し、SD01 に切られる。上部は削平を受けている。規模は、南北 2.3 m 以上・東西 1.69 m、深さ 0.43 m を測り、隅丸長方形を呈する。埋土の大部分 (2 層) はブロック状になっており、人為的に埋められている。底面には鉄分の集積層が形成され硬化している。また、4 基の深いビット (深さ 3~10 cm) と礫 2 個が検出された。SK07・08 と類似した特徴をもっている。遺物は、土師質土器皿?・須恵器壺 (平安?)・二重甕片 (第 115 図 5)・布目瓦 (第 115 図 7、SE01 と接合) が出土している。この土坑も、SK06 などと同時期のものと考えられる。なお、遺物はいずれも人為堆積層中のもので、甕片は SD08 出土のものと同一個体の可能性がある。このことから、SD08 開削時に本土坑始め他の土坑も埋められたことも予想される。

SK11 (第 114・115 図)

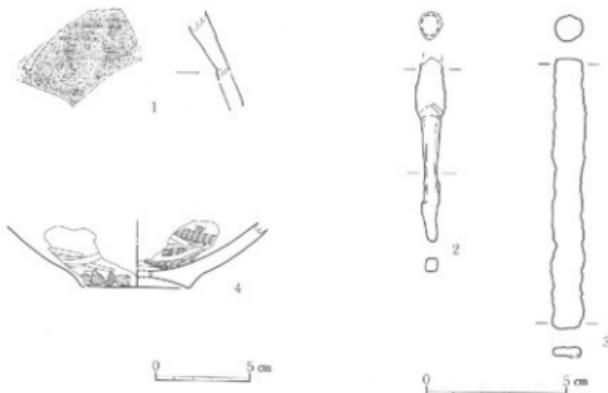
IV 区 (F-12・13 区) に位置し、SD01 に切られる。上部は削平を受ける。規模は、2.08 m × 1.55 m、深さ 1.23 m を測る。形状は、SD01 と重複する部分は不整であるが、元来は梢円形とみられる。北側は階段状になる。埋土各層には、人為的とみられる、ブロック土が混じり、また、1・2 層に焼土粒、4・5 層に炭化物がみられる。遺物は第 115 図 9・10 の須恵器壺 (平安?)・壺・二重甕 (古墳)、フレーク・チップが出土している。図示したものも含めていずれも小片であり、遺構の時期を示すかは疑わしい。むしろ、SK06・10 などと同じ頃と見るべきではないかと考えられる。

SK12 (第 68・115 図)

2 トレンチ (I・J-15 区) に位置し、SI18 を切る。また、SB01 と重複関係にあるが、直接切り合いがない。SB01 の重複関係と本土坑の出土遺物の比較から、SB01 が新しいと考えられる。規模は不明だが、東西 2.44 m・南北 0.7 m 以上、深さ 1.03 m を測る。形状は、上面が梢円形、下半部が方形を呈するものと予想される。遺物は土師質土器皿、角釘・中國錢 (皇宋通宝) があり、他に古墳時代の石製模造品の未製品が出土している。土師質土器には皿・小皿 (第



第115図 SK-01・03・10・11・12出土遺物 1・14・15:3/2 7:3/4



第116図 SK-13・21・23出土遺物

図11～13)があり、図示していないが、16次で多く出土した外底面に板状圧痕・見込ナデ調整を施すものもある。これらの皿類はいずれも埋土1・2層出土で、一応この土坑の下限時期に近いものであろう。

SK13 (第111・116図)

3トレンチ(J-11区)に位置し、単独のものである。上部は削平を受けている。規模は不明だが、東西1.14m・南北0.5m以上、深さ0.29mを測る。埋土1・2層にはブロック土が混り、人為的に埋められた可能性がある。IV区の土坑と類似している。遺物は須恵器器台(第116図1)とチップが出土している。器台は土坑の時期推定資料と考えるには疑わしく、IV区の土坑との類似から中世と予想しておきたい。

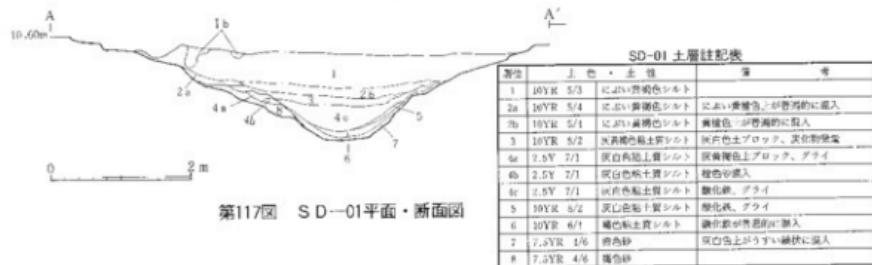
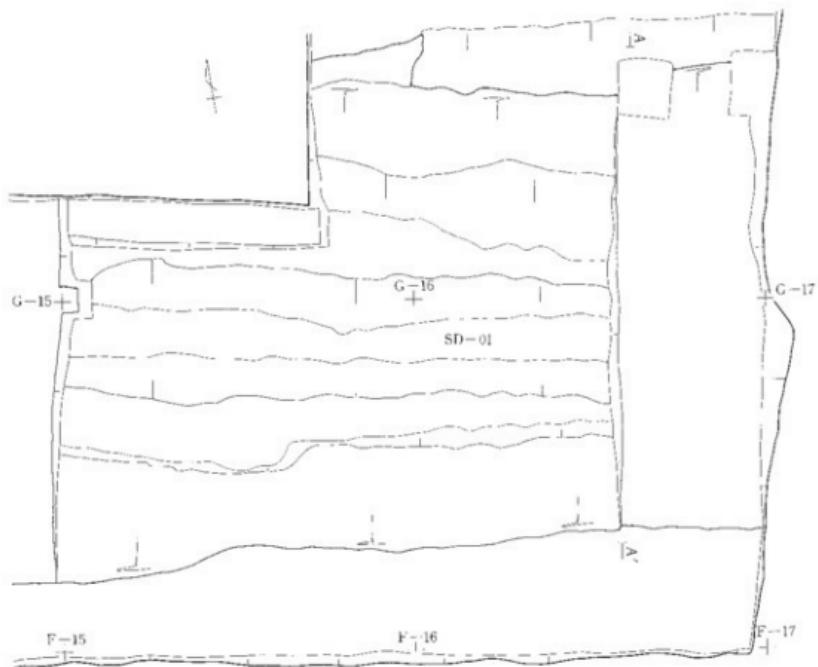
SK14 (第111図)

3トレンチ(J-10区)に位置し、SD10を切る。上部は削平を受けている。規模は不明だが、東西0.8m・南北0.25m以上、深さ0.25mを測る。遺物は出土していない。IV区の土坑と特徴が類似していることから、中世と予想しておきたい。

SK24 (第122図)

I区(I-15区)に位置し、SI11・SK25を切る。上部は削平を受ける。規模不明で、深さ0.15mである。埋土は暗褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。時期不明だが、埋土の特徴から、中世と推定しておきたい。

SK25 (第122図)

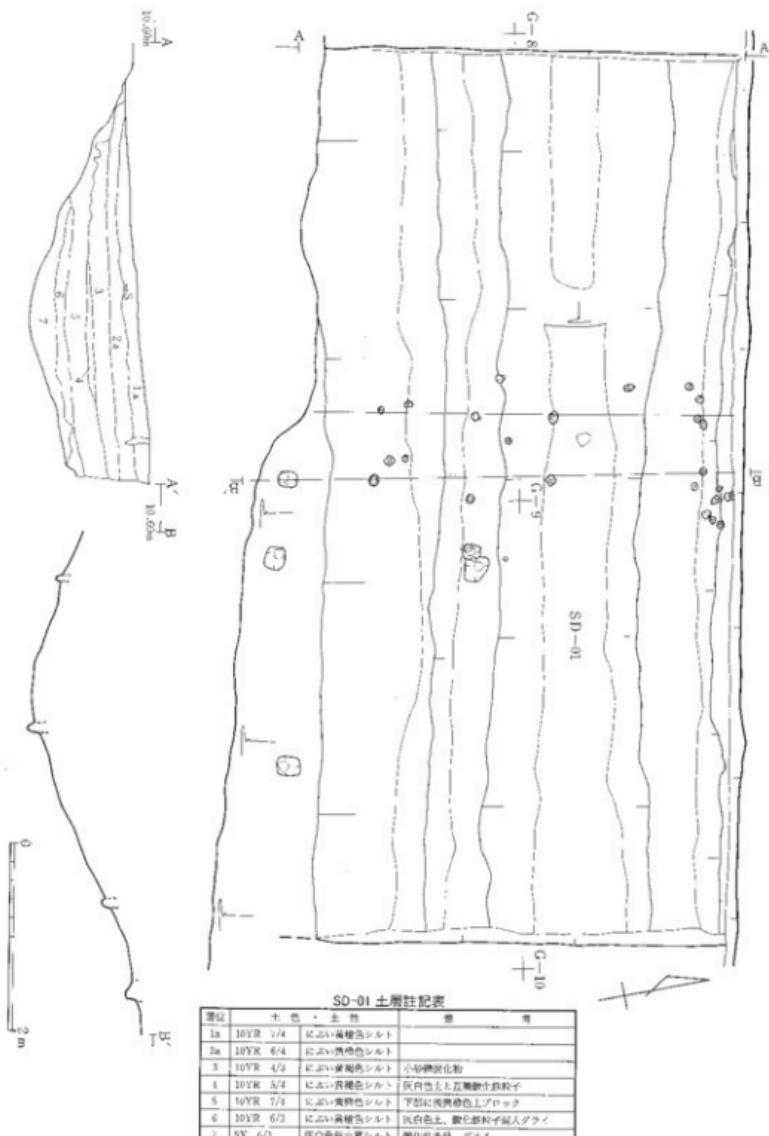


第117図 SD-01平面・断面図

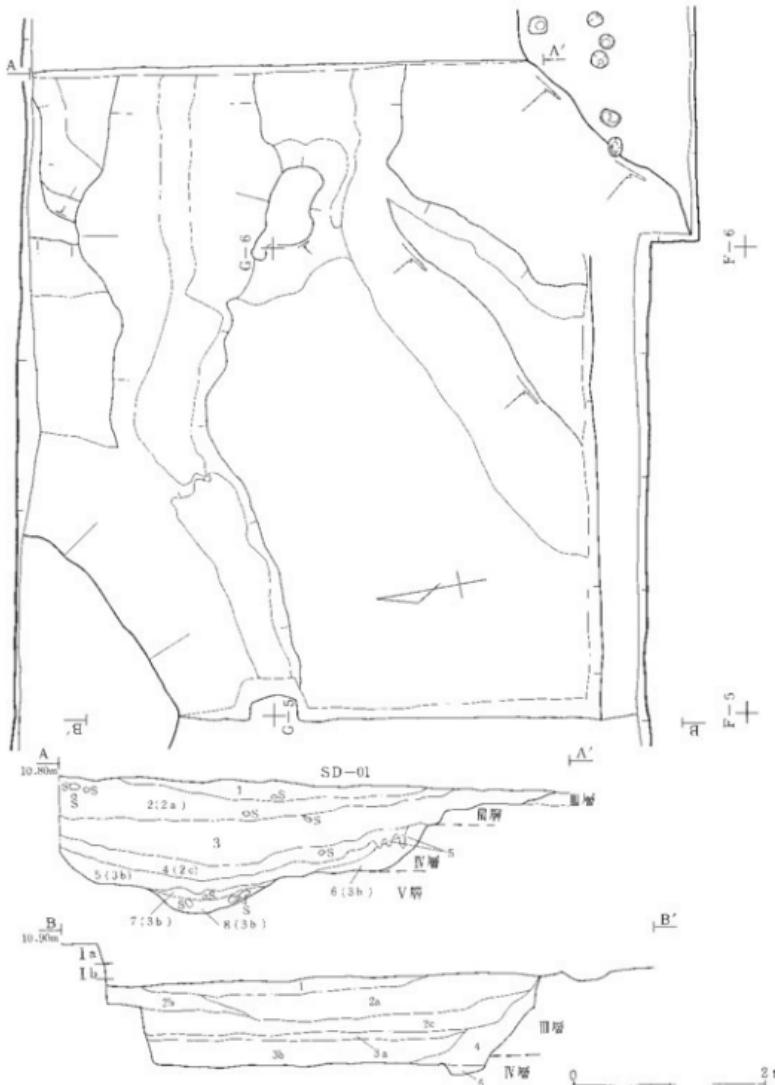
I区(I-15区)に位置し、SI11を切り、SK24に切られる。規模不明で、深さ0.06mである。埋土は暗褐色シルトの単層で、SK24より明るい色調である。遺物は出土していない。時期不明だが、これも一応中世と推定しておきたい。

溝跡 (SD)

SD01 (第117~119図)



第118図 SD-01 平面、断面図(IV区)



SD-01 西壁 土層註記表

層位	土名・土性	備考
1	10YR 6/6 明眞赤色砂質シルト	少硬多量
2a	10YR 5/4 にかい黄褐色シルト	小粒含有的に入
2b	10YR 6/4 にかい黄褐色シルト	微小粒物質多く有り
3c	10YR 5/3 にかい黄褐色シルト	地表面微弱、灰褐色十灰白色(新地盤地盤)
3a	5Y 6/2 灰色シルト	
3b	5Y 6/1 灰色シルト	グライ化鉄鉱化、微細色粒子多量
3b'	5Y 5/1 灰色シルト	アリモドコロ子、走筋状で有開隙
4	10YR 6/3 混凝鉄鉱土質シルト	にかい黄褐色土との接觸、下部に鉄鉱化
5	10YR 2/1 灰色砂	上部に多く鉄鉱化、下部に少無鉄化
	上部砂よりのページ	砂で、堅硬砂上にブロックで盛入

SD-01 東壁 土層註記表

層位	土名・土性	備考
1	10YR 6/6 明眞褐色シルト	17~18c の自然堆積
2	10YR 5/4 にかい黄褐色シルト	2a 層
3	10YR 5/3 にかい黄褐色シルト	小粒を含有的に入、部分的に硬い
4	10YR 5/3 にかい黄褐色シルト	小粒・混凝鉄鉱化上層に多く入
5	5Y 7/1 灰色沙粗土質シルト	ブリケート、堅硬鉄鉱化する有機的に入
6	5Y 6/1 灰色砂土質シルト	上部は無鉄化、下部は鉄鉱化
7	5Y 7/1 灰色砂土質シルト	ブリケート、堅硬鉄鉱化する有機的に入
8	5Y 6/1 灰色砂	グライ化鉄鉱化、少しづつ硬く入

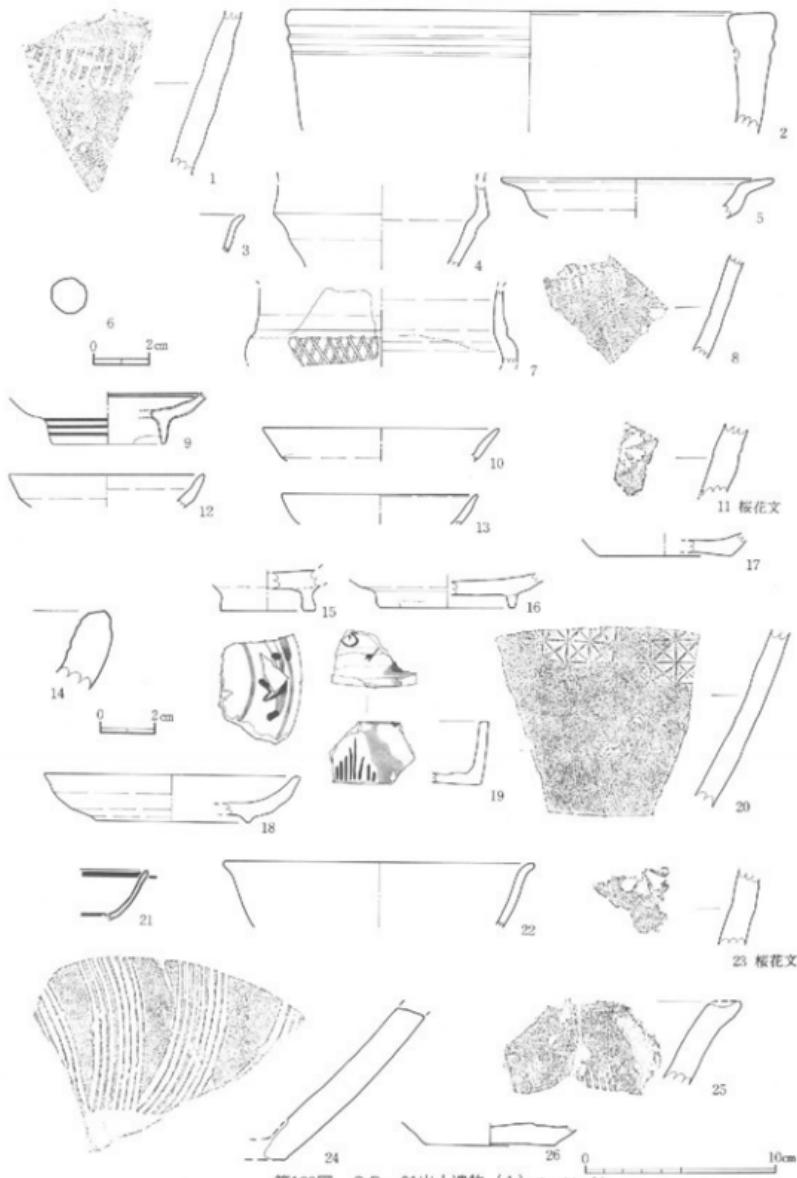
第119図 S-01平面・断面図

II区～VI区に位置する東西方向の溝である。全体を完掘できなかつたので、全体を1段掘り下げ、II、IV、V区については溝底まで精査した。SD01は、重複するすべての遺構を切つてゐる。I区南端では、SD02・08を切つてゐる。西側では、後述するSD16に接続していると考えられる。規模は、検出長72m・最大上幅7.27m、深さ最大1.77mを測る。東西方向の溝跡で、約N-80°-Wを示す。II区では、上半部が緩斜面で、下半部は「U」字形に近い形態となり急傾斜となる。下半部では壁から底面に酸化鉄の薄い集積層が形成され、埋土はグライ化していることから、流水があったと考えられる。また、埋土の堆積状況から改修を受けて2時期の変遷があつたようだ。また、北壁側上部では、天地返しにより搅乱されている。IV区では、南壁側の溝幅が狭まくなり、この部分の溝内に杭列が検出された(第118図)。また、杭列の西側の溝底が一段(10cm前後)低くなる。

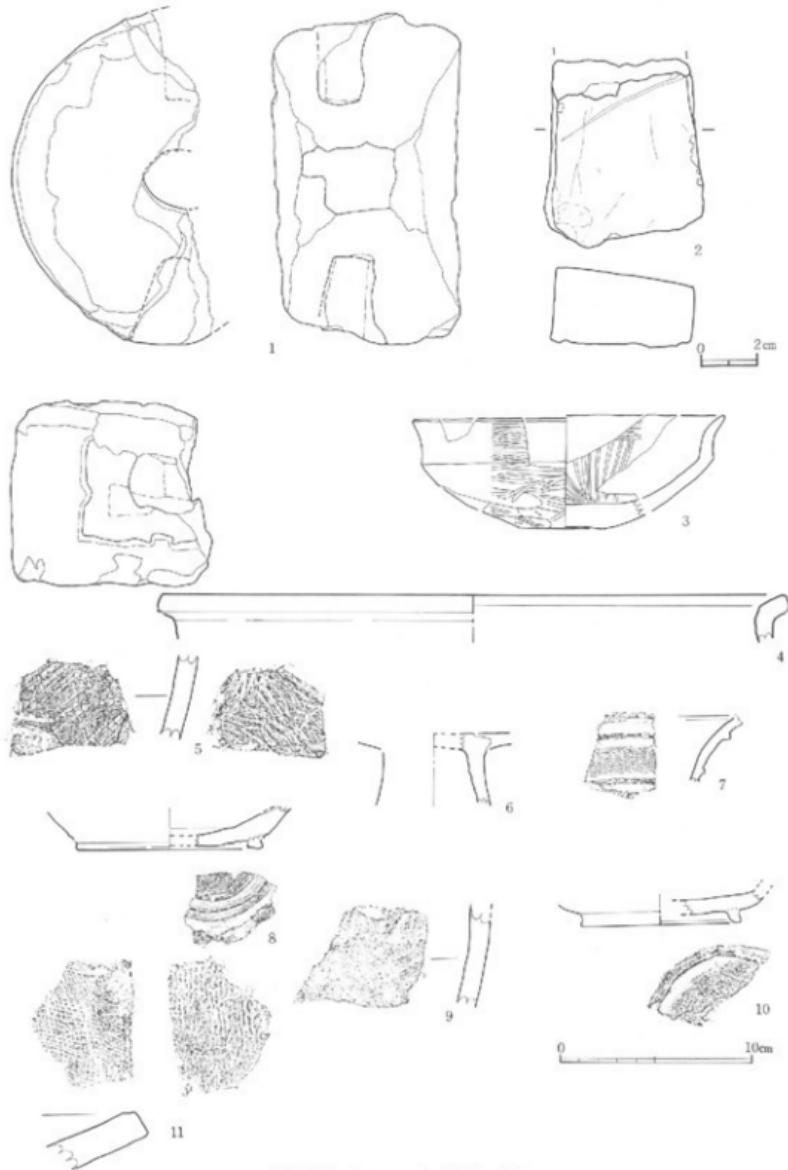
杭列については、2本一対で組むものが6本あり、1間×2間(北側の未調査部分にさらに1間分存在する可能性もある)となる。梁行が0.7～0.75m、桁行は平均1.86m+1.56mを測る。杭跡は10cm前後、深さも10cm前後である。組まないものも含めてみた場合、5層上面や6層上面から打ち込んだものがあるので、深さはさらに深かったものと思われる。溝開削時ではなく、使用期間のある時期に構築されたものと予想される。橋脚跡あるいは堰跡などの性格が考えられるが、規格性があることから前者の可能性を指示しておきたい。

V区では溝の屈曲が認められ、北壁側が一段深い溝となる。さらに北へ伸びる溝あるいは張り出し部が予想される。南壁側は、底面より約40cm程高いテラス状の段が検出された。また、底面東寄りでは、不整形の凸部が検出された。V区では、基本層のVII層(砂礫層)を掘り込んでいる。ここでは、埋土2～3層は人為的な埋め立て土で小砾を多く含んでいる。これらの層は、およそ8ライン以西でVI区まで分布しており、IV区以東では認められない。埋め立て土中には江戸初期の遺物が出土しており、VII区(建物跡付近)の出土品と接合するものもある。建物跡と溝の埋め立てとは密接な関連があつたと考えられる。溝跡はこの埋め立てで機能を停止し、IV区以東も出土遺物から江戸後期頃(18C)にはほぼ埋没が完了している。性格は、用水堀であろう。

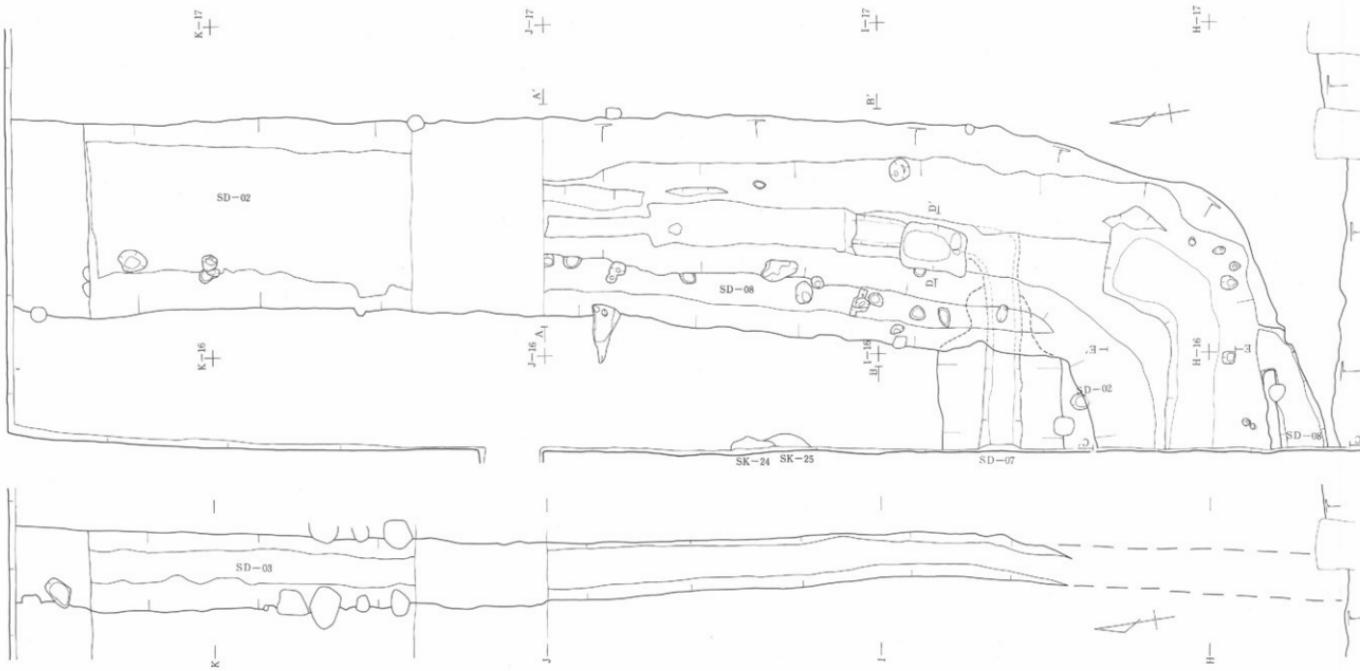
出土遺物については、区別に述べる(第120・121・123図)。II区は瀬戸・美濃？碗1点、在地(白石窯)壺4点、在地甕1点、常滑甕1点、渥美甕1点、中国陶磁器3点(青磁蓮弁文碗・青磁無文端反碗・染付)、角釘1点、鉄滓1点が出土している。他に、土師器・須恵器・布目瓦・石製模造品(母岩?)・弥生土器・スクレイバー・剝片がある。須恵器には猿投産の長頸瓶(9C)が含まれている。大部分の陶磁器は中世であるが、瀬戸・美濃？は近世と考えられる。IV区は大堀相馬白濁釉碗1点、美濃皿3点(志野皿・黄瀬戸釉皿・織部折線皿)、唐津青緑釉皿1点、在地(白石窯)壺2点、在地甕2点(桜花文)、常滑甕2点、渥美甕1点、古瀬戸灰釉香炉(斜



第120図 SD-01出土遺物(1) 6・14:分



第121図 SD-01出土遺物 (2) 2: 1/2



SD-02 土層註記表

番号	土色・土性	層名
1 a	10V87/4 にこい黄褐色シルト	汚泥の底
1 b	10V87/1 褐色色シルト	褐色色土質汚泥の底層
1 c	10V87/1 にこい黄褐色シルト	汚泥の上部
1 d	10V87/1 褐色色シルト	褐色色
2 e	2.3Y7/2 黄灰色シルト	汚泥地
2 f	2.3Y7/2 褐色色土質シルト	褐色色
2 g	10V86/1 褐色色土質シルト	褐色色底層の上部
2 h	10V86/1 褐色色土質シルト	褐色色底層
2 i	10V86/2 褐色色土質シルト	褐色色
2 j	10V86/1 褐色色土質シルト	褐色色
2 k	10V86/1 褐色色土質シルト	褐色色

SD-02 土層註記表

番号	土色・土性	層名
A	10V87/4 褐色色シルト	褐色色汚泥質汚泥
B	10V87/1 褐色色シルト	褐色色
C	10V87/4 にこい黄褐色シルト	汚泥
D	10V87/2 黄褐色シルト	褐色色
E	2.3Y7/1 黄灰色シルト	褐色色
F	2.3Y7/2 褐色色土質シルト	褐色色
G	SY8/1 褐色色シルト	褐色色

SD-02 土層註記表

番号	土色・土性	層名
1	10V87/1 褐色色シルト	褐色色
2	SY8/1 褐色色シルト	褐色色
3	SY8/1 褐色色シルト	褐色色
4	SY8/2 にこい黄褐色シルト	褐色色
Pt2		
1	SY8/1 褐色色シルト	褐色色
2	10V86/1 褐色色シルト	褐色色
3	10V86/1 褐色色シルト	褐色色
SD-08		
1	10V87/1 褐色色シルト	褐色色
2	SY8/1 褐色色シルト	褐色色

土坑 (D-D')

番号	土色・土性	層名
1	SY8/1 褐色色シルト	褐色色
2	SY8/1 褐色色シルト	褐色色
3	SY8/1 褐色色シルト	褐色色
4	SY8/1 褐色色シルト	褐色色

土坑 (E-E')

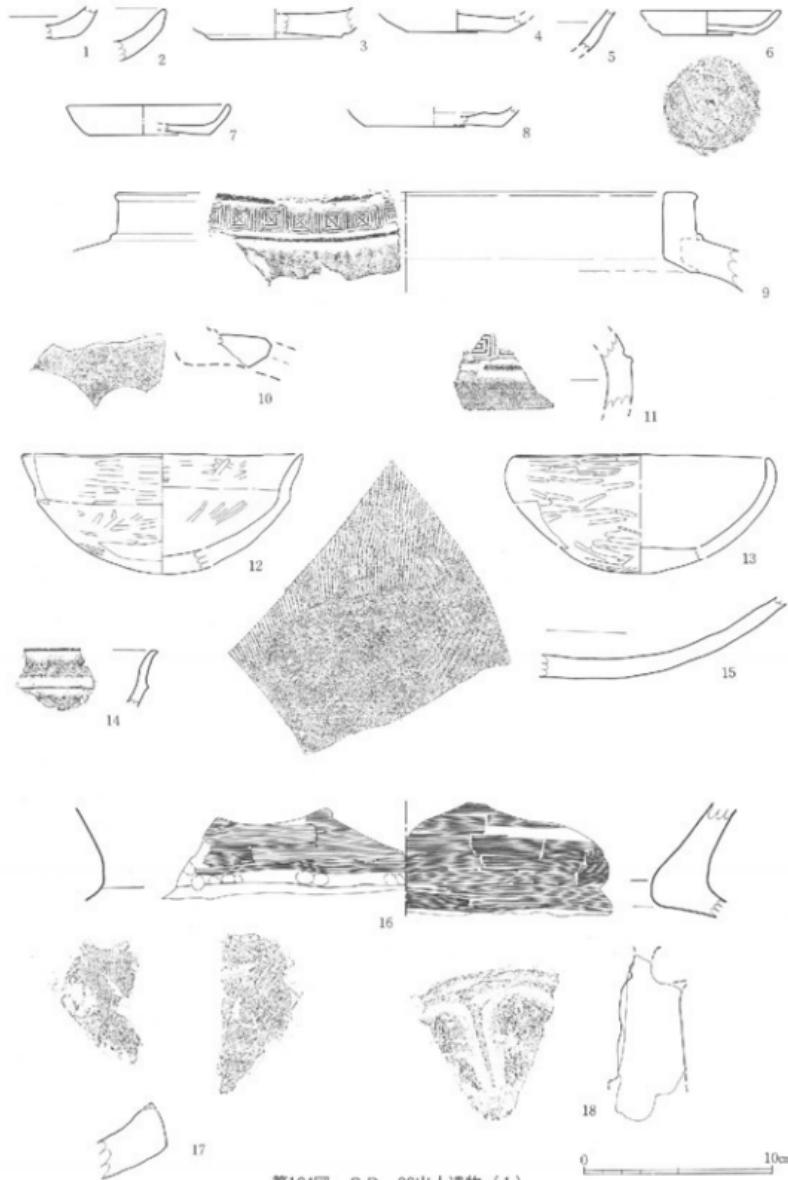
番号	土色・土性	層名
1	SY8/1 褐色色シルト	褐色色
2	SY8/1 褐色色シルト	褐色色
3	SY8/1 褐色色シルト	褐色色
4	SY8/1 褐色色シルト	褐色色

第122図 S D-02・03・07・08平面・断面図

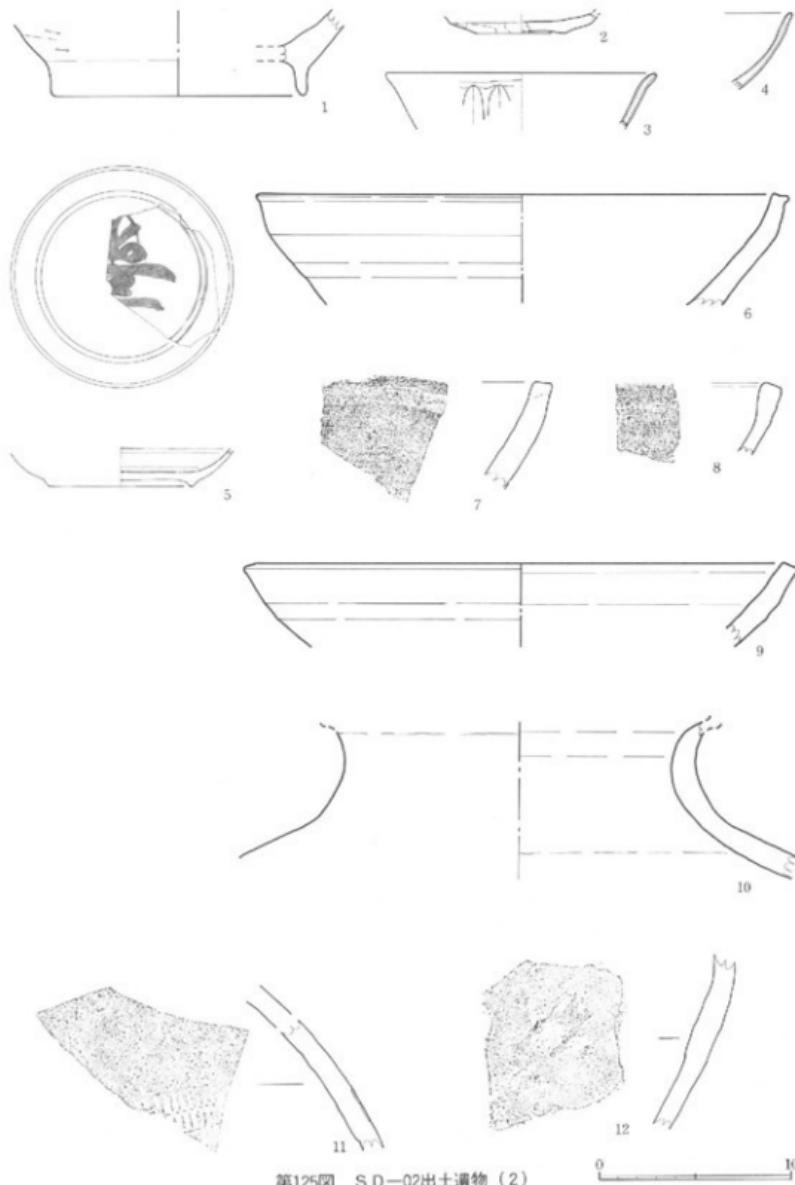


第123図 SD-01出土遺物（3）

格子文）1点、中国陶磁器4点（青磁蓮弁文碗・青磁割花文碗・白磁皿・染付碗）、產地不明鉄軸蓋、土師質土器5点（皿1・小皿4）、白色土器1点、釘4点、鉄滓6点、壙塙1点（内面に金粒？付着）が出土した。他に、土師器・須恵器（环・蓋环？・高环・甕・瓶？）・銅鏡・石製模造品・弥生土器・石鎌・スクレイバー・剝片がある。銅鏡については、本遺跡で初めて出土したもので、古墳時代中期以前の倣製鏡であろう（第123図1）。約1/4が残存し、乳・鉢がある。陶磁器は、大堀相馬・美濃・唐津・中国染付は近世で、他は中世である。また、須恵器甕には内面に布目压痕をもつものがある。V区は大堀相馬白濁釉塙1点、瀬戸・美濃灰釉塙1点、美濃5点（灰釉系折線皿・織部皿・織部角形向付・志野塙・志野織部鉄絵皿）、產地不明陶器香炉1点、肥前染付磁器2点（碗・瓶）、肥前白磁1点、焼瓦7点、在地（白石窯）甕6点、鉢1点、在地甕4点、古瀬戸4点（鉄釉天目茶塙2・灰釉大鉢・盤）、常滑2点（甕・鉢）、渥美甕2点、中国磁器5点（青磁無文碗・青磁端反碗・青白磁梅瓶・染付皿2点）、瓦質掘鉢17点、瓦質？火鉢1点、土師質土器4点（皿2・小皿2）、角釘9点、鏡1点、鉄滓2点、銅製金具1点、砾石1点、茶臼（上臼）1点が出土した。他に、土師器、須恵器（环・高台付环・小型甕・長頸瓶）、弥生土器・石鎌・スクレイバー・剝片・石製模造品・骨片がある。須恵器長頸瓶は湖西産とみられる。IV区の溝底面で、在地（白石窯）甕6点内の1点が出土している。また、瀬戸・美濃、美濃、肥前磁器、焼瓦などの近世陶磁器はいずれも3層より上位の層で出土している。VI区は大堀相馬白濁釉碗1点・土瓶？1点、堤鉛釉（橙色）焰烙1点、美濃段付白天目茶塙1点、產地不明陶器1点、肥前染付皿1点、中國染付皿1点、羽口1点が出土している。他に、土師器、須恵器（环・甕）、弥生土器がある。この他に、地区不明の土師質火鉢1点がある。全体的にみると、上層では近世陶磁器が出土し、17C前半代が主体で一部は18C以後のものもみられる。下層では、量は少ないが中世陶磁器に限られる。V・VI区中心の埋め立てによって、近世初期には機能をほぼ停止したとみてよい。



第124図 SD-02出土遺物（1）

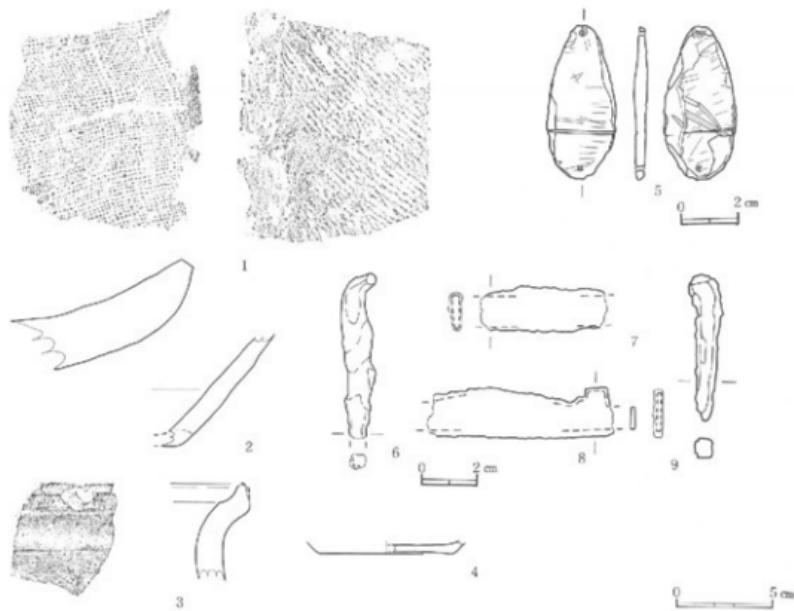


第125図 SD-02出土遺物（2）

SD02 (第122・124~126図・129図1)

I区に位置する南北溝で、南端では西側へ屈曲する。SI03・04・07・11・14・16・19、SB02~04、SD07・08を切り、SB01・07、SD01・03に切られる。ただし、SD01と中世段階には並存していた。溝底下にSD07が検出されている。規模は、長さ南北約18m・東西約2.8m、溝幅最大3.4m、深さ0.9m前後である。溝コーナー部には「L」字形や長方形の土坑状の掘り込みがみられる。前者は深さ0.35m前後、後者は約0.4mを測る。溝西壁側では、ある程度埋没した段階で、柱穴が穿たれており簡易な柵が存在した可能性をもつ(SD08と重複する部分)。溝の方向は、南北が約N-11°-Wである。この溝跡はさらに北と西へ伸びるが、西へ伸びる溝はVII区で検出できることから、4トレンチのSD06に接続し「コ」字あるいは方形プランになるものと考えられる。屋敷跡を区画する溝跡とみられ、半町規模と予想される。

出土遺物は、1層で在地(白石窯)甕3点、在地鉢2点、常滑薺口壺1点、青磁蓮弁文碗3点、同劃花文碗1点、中国染付皿1点、白磁皿1点、瓦質風炉3点、産地不明陶器鉢2点、土師質土器(小皿)14点、鉄滓1点が出土し、他に瓦、須恵器(壺・無蓋高壺・甕)、剝片がある。2層では在地(白石窯)甕3点、在地甕1点・鉢3点・壺1点、常滑甕1点、産地不明



第126図 SD-02出土遺物 (3) 5~9: 1/2

陶器鉢 1 点・塊？ 1 点、土師質土器皿 21 点（皿 4・小皿 16・手捏ね小皿 1）、瓦質風炉 3 点、角釘 3 点、鉄滓 1 点が出土し、他に古代瓦、須恵器（壺・壺？・甕）、弥生土器、石製模造品、剝片がある。3 層では、在地甕 2 点・鉢 3 点、常滑甕 1 点、產地不明陶器有台鉢 1 点・鉢（須恵器系？）1 点、中国白磁皿 1 点、瓦質風炉 1 点、土師質土器小皿 3 点が出土し、他に古代瓦、須恵器（甕）、弥生土器、剝片がある。4 層では在地（白石窯）甕 1 点、產地不明陶器鉢 1 点、土師質土器小皿 1 点、漆器片 1 点が出土し、他に須恵器（甕）、土師器、弥生土器がある。また、屈曲部の土坑より在地鉢 1 点、常滑甕 1 点、須恵器甕、石製模造品剝片、壺面ピットより中国銭が出土している。なお、1～4 層より出土した產地不明陶器鉢（有台）は、同一個体と考えられ、常滑の製品の可能性がある。また、江戸時代以降の陶磁器は出土していない。

SD03（第 122 図）

I 区に位置する南北溝で、SD02 上（東壁寄）にある。SB01・SI03・04・SD02 を切る。I 区では最新の遺構である。規模は検出長約 14 m、幅 1.22 m、深さ 0.26 m を測る。方向は N-10°-E である。南半はプランが不明確で、SD02 東壁面に一部残存している。本来は、SD01 に接続していたものと考えられるが、接続部付近は削平を受けている。埋土 2 層上部に鉄分の集積層が認められ、1 層（基本層 III 層起源か）は、人為的な埋立て土である。遺物は角釘・須恵器・弥生土器が出土している。時期は、重複関係などから中世末～近世初期とみられる。VII 区の江戸初期頃の建物跡と関連するものと予想される。使用時には流水があったようだ。

SD04（第 127・128 図）

VII 区（II-3・4 区）に位置し、他の遺構との重複は認められない。上部は、天地返しにより削平されている。規模は検出長 6.05 m、幅 0.47 m、深さ 0.63 m を測る。方向は東西方向で、N-77°-W を示す。SD06・16 と接続している可能性がある。遺物は埋土中より土師質土器 7 点（皿 1・小皿 6）、土師器、弥生土器が出土している。第 128 図 1・2 は土師質土器である。

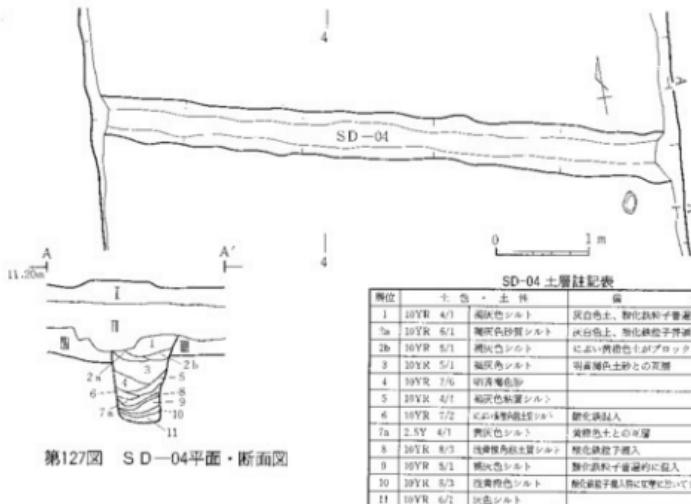
SD05（第 108 図）

5 トレンチ（A-13・14 区）に位置し、他の遺構との重複は認められない。規模は検出長 5.8 m、深さ 0.58 m 以上である。かなり大きな溝（堀か）と予想されるが、トレンチ調査のため明確ではない。方向は東西を示し、約 N-82°-W である。およそ SD01 と平行する。遺物は、土師器細片が少量出土した。おそらく、中世あるいは近世の所産とみられる。

SD06（第 108・128 図）

4 トレンチ（J-5・6 区）に位置し、SI10・SD11 を切る。規模は、検出長 1.2 m、幅 2.37 m、深さ 0.7 m を測る。方向は南北で、N-12°-E を示す。東壁には軽い段差がみられる。

規模・形態・出土遺物から、SD02 と同一の溝跡と予想される。また、SD01 とも接続していた可能性が残る。



第127図 SD-04平面・断面図

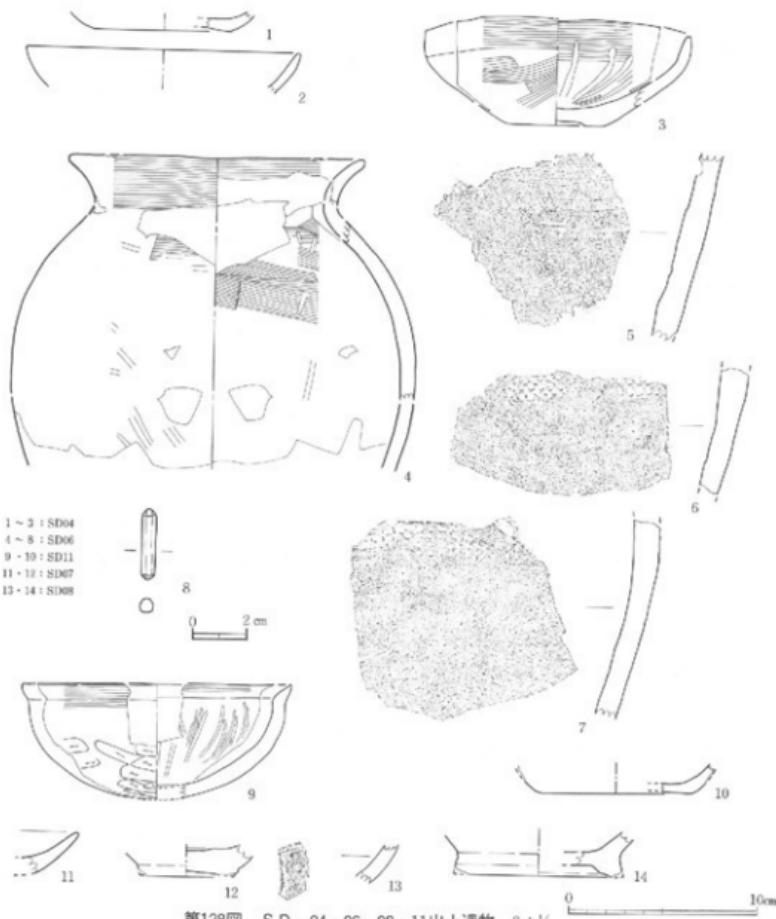
遺物は、在地（白石窯）甕1点、在地甕3点、涅美壺？1点、中国青磁蓮弁文碗1点、瓦質風炉1点、不明鉄製品1点、棒状石製品1点が出土し（第128図4～8）、他に土師器・須恵器・弥生土器・繩文土器・石製模造品・剝片がある。在地陶器甕には格子状押印をもつもの（5層）、桜花文押印をもつもの（1層）がある。瓦質風炉とみられるもの（2層）は、SD02のものと類似する。繩文土器は中期末～後期初頭の深鉢片と考えられ、本遺跡では初めての出土である。

SD07（第108・128図）

I区に位置する南北溝で、南部で西側へ屈曲する。SI11・SD08を切り、SD02に切られる。SD02と重複関係にあるが、本溝跡が新しいものと予想される。SD02と重複する部分では、SD02の溝底より検出される。規模は不明確な部分が多いが、SD02と重複しない部分（H-15・16区）では、幅1.9m、深さ1.13mを測る。SD02と重複する部分では、長さ約15m、深さ1.27m、幅は不明である。方向は、SD02と同じである。遺物は産地不明陶器鉢1点（常滑？・有台か）、土師質土器皿4点（小皿2点、手捏ね？2点）が出土し、他に須恵器（甕）、弥生土器、敲石、剝片がある。陶器鉢は1層、土師質土器は1・2・4層から出土し、厚手のものもある。なお、規模・形態の類似から、SD11と同一溝の可能性が高い。

SD08（第122・128図）

I区に位置する南北溝（SD02西壁部）で、南部で西側へ屈曲する。SI11・19・SK28・SB03・04を切り、SB01・07・SD02・07に切られる。規模は上部の削平や他の遺構との重複で不明確であるが、検出長（南北）約19.4m、幅0.71m、深さ0.62mを測る。溝幅は、本来1m前後であったものと予想され、第16次調査のSD02等と類似した印象をもつ。方向は、やや湾曲して



第128図 SD-04・06~08・11出土遺物 8:½

いるが第17次SD02とほぼ同じで、N-11'-Eである。遺物は埋土中より、土師質土器？4点、須恵器2点（長頸瓶・二重罐）、剝片1点が出土している。また、SD02との帰属が不明確となった古代瓦2点（平瓦・軒丸瓦）がある。出土した遺物では時期を明確にすることはできないが、他の遺構との重複から中世の溝跡と考えられる。SD08→SD07→SD02と規模を拡大し、防御性を増しながら変遷したものと思われる。ただ、SD08に関しては、西側で検出できずどのように展開するかは明らかにできなかった。

SD11 (第 108・128 図)

4 トレンチ (J-6・7 区) に位置し、SB13・SD06 に切られ、SI10 を切る。規模は SD06 に切られ明確ではないが、検出長 1.16 m、幅 1.1 m 以上(推定約 1.5 m 前後)、深さ 0.99 m を測る。方向は約 N-7°-E を示す。西壁には段が付く。埋土中には酸化鉄を多く含み、最下層は砂層である。遺物は土師質土器小皿 2 点、土師器、弥生土器が出土している。土師質土器は埋土の上半より出土し、板状圧痕・見込みナデ調整がみられる。土師器は、元来 SI10 に帰属していたものが落下したものと思われる。本溝跡は、規模・形態等から SD07 と一連のものと考えられる。

SD13 (第 108 図)

6 トレンチ (J-2 区) の東端に位置し、SB10 に切られる。また、SD15 が連結する。SB09 は東側で並行している。規模は、検出長 0.85 m、幅 0.46 m、深さ 0.28 m を測る。方向は南北方向で、N-18°-E である。埋土は、黄褐色シルトが主体で、SD14・15 や SB09~12 と類似する。遺物は弥生土器・石製模造品・剝片が出土したが、時期決定資料にはならない。

SD14 (第 108 図)

6 トレンチ (J-1 区) に位置し、SD16 を切る。また、SD15 が連結するものと予想される。SD14~15 は、同時期とみてよい。規模は検出長 0.82 m、幅 0.28 m、深さ 0.16 m を測る。方向は南北方向で、N-12°-E である。遺物は弥生土器が出土したが、時期決定資料ではない。なお、上部は耕作により削平されているが、本来はもう少し規模が大きかったものと思われる。SD13 とほぼ平行し、この 2 条の溝跡は道路の側溝の可能性もある。

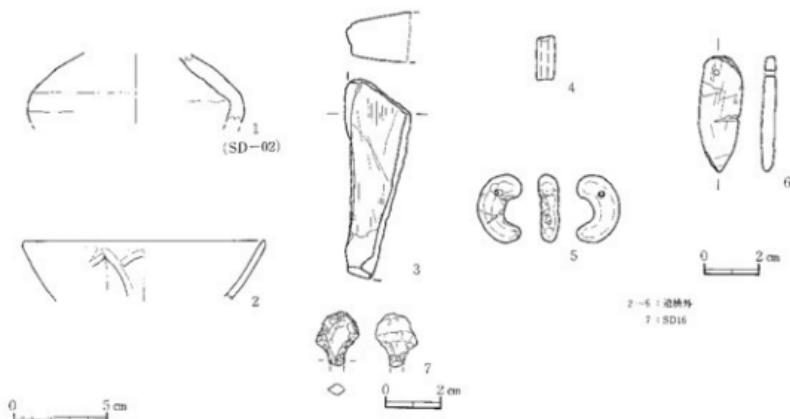
SD15 (第 108 図)

6 トレンチ (J-2 区) に位置し、SD13 に連結し、SD14 とも連結するものと予想される。規模は検出長 2.32 m、幅 0.2 m、深さ 0.15 m を測る。方向は東西方向で、N-70°-W である。遺物は出土していない。SD13・14 間の連絡溝とみられる。

SD13~15 は、VII 区の建物跡の西側を規制する同時期の道路側溝と理解したい。ただ、SB10 は、道路上にはみ出した (蚕食) 建物跡と考えられる。

SD16 (第 108・129 図)

6 トレンチ (J-K-1 区) に位置し、SD14 に切られる。規模・特徴はトレンチ調査のため明確ではないが、幅 4.3 m 以上、深さ 1.1 m 以上である。方向は南北方向を示す。かなり大型の溝跡 (堀) と予想される。埋土 4 ~ 6 層は、グライ化し酸化鉄を多く含んでいる点から水堀と考えられる。遺物は中世が最も新しく、近世のものは出土していない。在地 (白石窯) 壱 1 点、壺 2 点、崖地不明陶器壺 1 点、土師器、須恵器 (壺)、弥生土器、石製模造品、石錐 (第 129 図 7) が出土している。



第129図 SD-02・16・遺構外・出土遺物 (4~7は3分)

SD16の西側には現在も使用されている用水堀(佐久間堀)が南流し、東へ屈曲して5トレンチの南側を東流している。この佐久間堀は、SD16やSD05が位置をやや変えながらも跡襲され、今日に至った可能性が充分考えられる。

(3) その他の遺物

その他として、遺構外や遺構の時期と異なる遺物が多数出土している。ここでは、それらの遺物の一部を紹介する。また、遺構の時期と異なる遺物でも、その遺構図版中に示したものも多い。SD01に図示した古墳時代の銅鏡など注目される遺物がある。

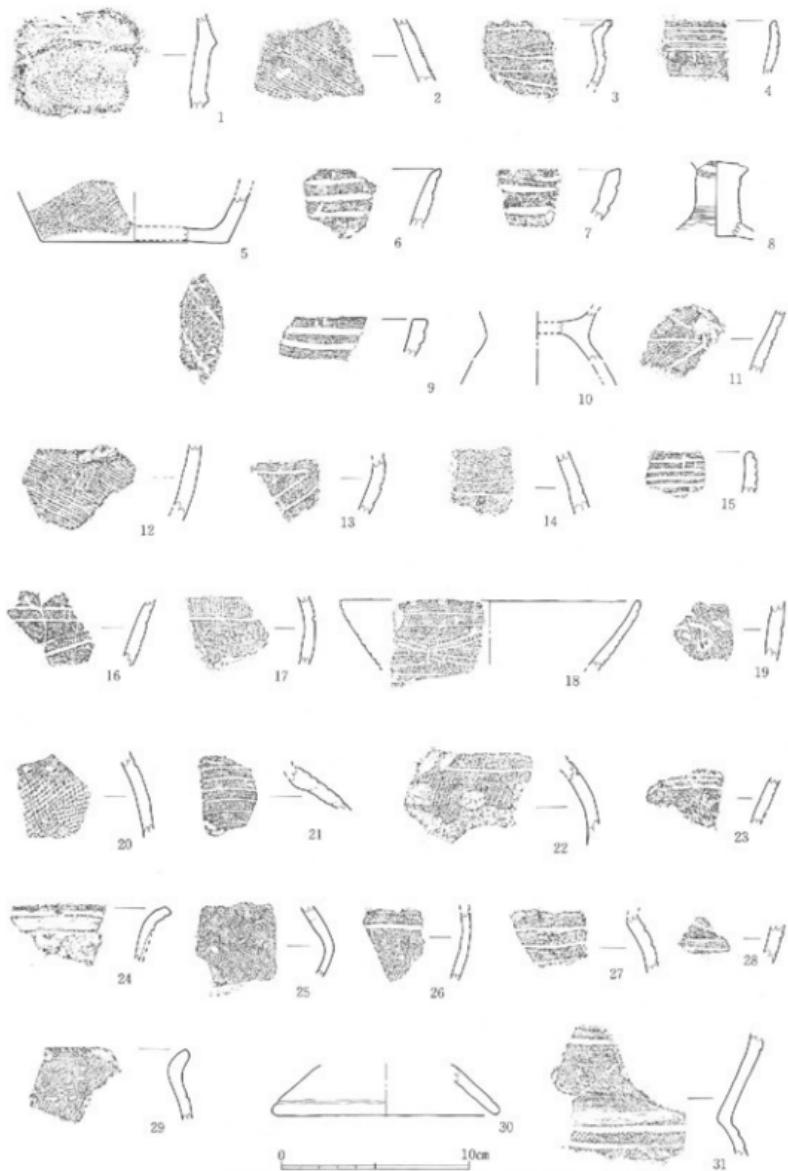
第129図1は常滑窓口壺とみられ、当初帰属不明となったもので後にSD02出土と判明した。2は3トレンチI層出土青磁碗である。このトレンチでは土師質土器片が比較的多い。3・4は建物跡にならなかった柱穴出土の砥石・管玉である。5はV・VI区南壁清掃時に出土した勾玉である。管玉や勾玉は、本遺跡では珍しい出土品である。6はVII区北部出土の剣形模造品である。

縄文土器 (第130図)

第130図1は縄文時代中期末～後期初頭の深鉢片である。SD06の項でも述べたが、縄文土器は本遺跡で初めての出土である。

弥生土器 (第130図)

古墳時代以後の遺構から多く出土しており、ここでは比較的時期の分かるものについて述べる。第130図2・8は十三塚式期のもので、8は高坏であろう。3・11・13・16～18・20～27・



第130図 その他の出土遺物(縄文、弥生土器)

13. 第17次出土遺物観察表(1)

(単位 cm)

遺物No.	出土地	層	種類	特徴	測定	備考	
SI-01 (古墳)							
70-1	455 床 NO.1	二 邦 墓	环	口径：12.9cm 底径：9.4cm 高さ：4.0cm	外周口縁部b、体部c→d (←b)、内周口縁部b、体部c (へフ?)、赤系、如意形模様	C	
2	366 木 号 七 扇	土 筒 墓	环	14.6	外周口縁部b、体部c、内周口縁部b、内底d、赤色A、白粉	E	
3	309 床 上 鋼 罐	环	-	-	外周口縁部b、体部c→d、内周口縁部b、体部d、赤色B	A	
4	282 地土(山35)	土 筒 墓	环	-	-	外周口縁部b、体部d、内周口縁部b、内底	B
5	454 -	土 筒 墓	1/2テク	5.4	4.3	外周口縁部c (へフ)、内周口縁部c (←b)、体部c (厚)、薄b、白粉、NO.2	
6	910 屋 1 層	土 製 品 土 工	灰陶	厚約3.8cm 高さ2.3cm	重量21.5g、全高1.2?		
7	282 地土(山35)	土 製 品 土 工	灰陶	3.0	3.5	重量16.3g、全高1.2?	
8	282 地土(山35)	土 製 品 土 工	灰陶	2.8	2.6	重量13.6g、全高1.2?	
9	461 pH 15 15	土 製 品 土 工	灰陶	2.6	2.1	重量10.6g、全高1.2?、白粉	
10	300 床 (瓦器)	土 製 品 土 工	灰陶	2.6	2.6	重量14.8g、全高1.2?、白粉	
11	300 床	金屬製品	鍍 か	高さ1.5cm 幅1.5cm	重量1.5g 鍍、末端四角		
SI-02							
21-1	284 屋 1 層	土 筒 墓	环	-	-	外周口縁部b、内周口縁部d、赤彩	B
2	419 床 土 上面 布	土 筒 墓	环	-	-	外周口縁部b、内周口縁部d、内底、白粉	B
3	672 床 直 土 筒 墓	环	-	-	外周口縁部b→d、内周口縁部c→d、赤彩	B	
4	883 床 黑 土 筒 墓	环	-	-	外周口縁部b、体部d、内周口縁部b、内底d、赤彩	B	
5	891 床 直 上 2 鋼 罐	环	底径：15.0cm 高さ：9.6cm	外周口縁部b、体部b→d、内周口縁部c (へフ)、体部b→e、白粉、NO.1	B		
6	888 pH 12 石 製 品 土 工	外底：10.0cm 高さ：9.2cm	厚さ3.5cm				
SI-03							
71-1	568 床 直 三 鋼 罐	环	口径：12.4cm 底径：9.6cm	外周口縁部b、体部c→d、内周口縁部c (へフ)、赤色A	E		
2	750 床 直 土 筒 墓	环	? -	-	外周口縁部b、赤彩文様?、内周口縁部b→d、赤粉、白粉	E?	
3	565 里上 下部 土 筒 墓	环	-	-	外周口縁部b、体部c、内周口縁部b、体部d、赤彩	A	
4	774 穀 15 15 土 上 鋼 罐	环	-	-	外周口縁部b、体部c→d、内周口縁部c、体部d、赤彩	A	
5	774 穀 15 15 土 筒 墓	环	-	-	外周口縁部b、体部c→d、内周口縁部b、赤色A	B	
6	10 杜 六 四 土 筒 墓	环	-	-	外周口縁部b、内周口縁部b→d、赤色B	E 7	
7	855 床 直 上 鋼 罐	环	14.0	(4.3)	外周口縁部b、体部c、内周口縁部d、体部d、赤彩	E 7	
8	789 穀 15 15 土 筒 墓	环	-	-	外周口縁部b→d、体部c、内周口縁部b、体部d、内底	C	
9	896 床 直 土 筒 墓	环	17.0	-	外周口縁部b、体部c→c (へフ)、有d、内周口縁部b、体部c (へフ)、白粉、NO.2	E	
10	909 穀 15 15 土 筒 墓	环	15.1	-	外周口縁部b→d、体部c、内周口縁部d、体部d、内底、白粉、NO.2	E ?	
11	828 床 直 土 筒 墓 小型 壺	环	15.1	4.6	16.2	外周口縁部b、体部c→c (へフ)、有d、内周口縁部b、体部c (へフ)、白粉、NO.5 小型C	
12	898 床 直 上 鋼 罐	环	13.6	4.7	12.2	外周口縁部b、体部c→d、内周口縁部b、体部c (へフ)、蒸熟阿噶、内粉、NO.9	
13	891 床 直 土 筒 墓 壺	环	16.0	2.3	14.9	外周口縁部b、体部c (へフ)、基底e、内周口縁部a→b、体部c (へフ) 赤粉、内底黒い 小型B	
14	817 第1号上坑 土 筒 壺 小型 壺	环	14.1	10.6	16.8	外周口縁部b→d、体部c→d、a、底部b→d、e、内周口縁部b→d、体部c (へフ)、 底粉、白粉、蒸熟阿噶、白粉 小型E	
15	568 地下下部 上 鋼 罐	环	16.8	-	20.8	外周口縁部b→d、体部c→c (へフ)→d、内周口縁部c (へフ)→d、体部c (へフ)、 白粉	
16	568 地下下部 土 筒 壺 壺 不 ?	环	-	-	-	外周口縁部b、体部d、内周口縁部b、体部c (へフ)、赤色	
75-1	849 床 直 土 筒 墓	环	21.8	8.2	38.2	外周口縁部b、体部上部c→d、下部c→d、内周口縁部b→d、体部d、無底式、白粉 NO.15	
2	826 床 直 三 鋼 罐	环	12.6	-	(17.9)	外周口縁部b、体部c (へフ)→d、e、内周口縁部b、体部c (へフ)、内粉 NO.10、13 中型E	
3	1055 穀 15 15 土 筒 墓	环	19.0	7.1	34.4	外周口縁部b、体部d、内周口縁部b、体部c (へフ)、白粉、NO.11 大型D	

14. 第17次出土遺物観察表(2)

(単位 cm)

測定No.	遺物No.	層位	種類	解説	法基	幅	長	形
75-4	816	第3土層 上	土器	甕	18.0	7.5	23.6	外周口縁部b、体部c、内周口縁部b→c(へき)。体部c(へき)、木葉模 中型B
5	815	井戸 底	土器	甕	?	-	-	外周口縁部b、内周口縁部b、体部模様?。口縁延出
SI-03								
95-3	1069	埴 土	漆 朱 塗 銅 灰	片	口径	幅	長	表面に漆膜が確認(2箇)、内面にクロ、TK208~33付近
SI-01								
77-1	655	灰 黑 土 部	土器	甕	-	-	-	外周口縁部b?、体部c→d、内周口縁部b、体部模様d、無芯
2	806	分離式大口 土器	甕	坏	-	-	-	外周口縁部b、体部模様c、内周口縁部c→d?、無芯
3	709	灰 黑 水 口	土器	甕	-	-	-	外周口縁部b、体部c?、内周口縁部c→d?、無芯、白附
4	605	第1阶段式 土器	甕	坏	19.4	-	(5.4)	外周口縁部b、体部c(へき)→e→d、内周口縁部b、体部d、無芯、白附
5	1018	陶	土 壺	甕(小)	(8.30	-	(3.1)	外周口縁部(へき)→b、体部不明、内面不明
6	213	陶	罐 容	甕	高6.4 (2.8)	幅7.1	9.2	無芯品
7	616	灰 黑 土	石製品	刀子?	長6.5 (3.5)	幅2.0	2.5	鐵、直打目1ヶ、革
SI-05								
79-1	414	深 2.5 付	土器	甕	口径	幅	長	外周口縁部(へき)、内面口縁部c(へき)
2	764	上 付	土器	甕	6.15	1.8	4.4	外周d(へき)、内面c(へき)、無芯
3	422	灰 黑 土	土器	甕	-	-	-	外周口縁部b、内周口縁部c、無芯B
4	122	灰 付	土器	甕	-	-	-	外周口縁部b、体部d、内周口縁部b、体部c
5	422	灰 付 近	土器	甕	14.0	-	(7.0)	外周口縁部b→c、内周口縁部a→c(へき)、b、白附
SI-06								
80-1	717	陶 土	上	瓦製	牙	11.2	高径 3.5	外周口縁部b、体部c(へき)、内周口縁部b→d(へき)、体部d(へき)、白附
2	153	上 瓦層 土	土器	甕	15.6	-	(3.3)	外周口縁部b、内周口縁部b、赤色B、白附
3	717	陶 土	上	瓦製	坏	-	-	外周口縁部b、体部c、内周口縁部b、体部c、無芯B
4	717	陶 土	上	瓦製	坏	-	-	外周口縁部b、体部c?、内周口縁部b、体部c、無芯、白附
5	838	上 瓦	土器	甕	23.4	-	(5.2)	外周口縁部b、体部c→d(へき)、e(へき)、内周口縁部b、体部c、無芯
6	997	灰 陶 土	土器	甕	?	-	(7.3)	外周口縁部b、体部c(へき)、e(へき)、内周口縁部b、体部c→c
7	245	陶 土	土器	甕	-	-	(23.5)	外周口縁部c(へき)→d(へき)、内周口縁部c(へき)、白附
8	272-276	灰 陶 土 灰 陶 磚	土器	甕	26.4	-	(32.5)	外周口縁部b、体部c(へき)→c、内周口縁部b、体部c(へき)、白附
SI-07								
81-1	567	灰 土	土器	甕	口径	幅	長	外周口縁部b、体部c→d、内周口縁部b、体部c→d、無芯
2	726	上 瓦 層	土器	甕	-	-	-	外周口縁部b、体部c→d、内周口縁部b、体部c→d、無芯B
3	730	上 瓦層 土	土器	甕	-	-	-	外周口縁部b、体部c→d、内周口縁部b、体部c→d、無芯B
4	729	土 壤 土 下	土器	甕	-	-	-	外周口縁部b、体部c→d、内周口縁部b、体部c? (複数)、無芯、白附
5	720	土 壤 土 下	土器	甕	15.2	-	3.3	外周口縁部b→d、体部c→d、内周口縁部b→d、体部c→d、無芯B
6	807	ビット1	土器	甕	13.9	6.6	8.3	外周口縁部b、体部c?、内周口縁部b、体部c→d、内周口縁部c(へき)、門柱、NO.12
7	700	灰 土	七 頭 頭	甕	(39.1)	-	16.0	外周口縁部b、高径d、内周口縁部b、体部d、無芯、白附
8	567	灰 土	土器	甕	-	-	(8.7)	外周口縁部b、高径d、内周口縁部b、外周斜塔窓なし、白附
9	840	ビット1	土器	甕	-	-	(9.3)	外周口縁部c→d、内周口縁部c(へき)、加部c、黑色をおりる、白附、NO.3
10	290	灰 土	石製品	円 直	高5.1 (2.4)	幅2.6	0.3	孔1ヶ

15. 第17次出土遺物観察表(3)

(単位 cm)

区分	遺物名	層位	性質	裏面	計量	特	備	
SI-09 (古跡)								
83-1	911	鉢 穴六	土 布革	坪	口径 (16.8)	底径 14.6	外周口縁部b、体部d、内面脚部の無い頃。柱形、白附	Aa
2	965	壺 土	土 陶器	坪	?	-	-	D?
3	901	壺 土	土 陶器	坪	-	-	-	B
4	911	壺 上	土 陶器	坪	-	-	-	B
83-3	979	壺 土7	土 陶器	立(小)	口径 4.8	底径 3.3	内周口縁部c(「へ」)→d、体部a→c(「へ」)→d、体下部c(「へ」)、内面口縁部c(「へ」)、内周口縁部c(「へ」)、内面脚部の無い頃。柱形、白附	A
6	237	床 土	土 陶器	坪	15.5	-	(6.9) 外周口縁部a→b→d、内部不明、内面脚部が著しい。	
SI-10								
83-1	484	壺 1	土 陶器	坪	口径 15.0	底径 13.0	外周口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部c→d、赤色A、白附	Aa
2	361	壺 2	土 陶器	坪	-	-	-	Aa
3	992	壺 土	土 陶器	坪	15.0	-	7.4 外周口縁部b、体部e(「へ」)→d、内面口縁部b、体部c(「へ」)、白附、NO.6	Aa
4	992	壺 口穴上曲	土 陶器	坪	13.8	4.6	6.5 外周口縁部b→d、体部e、c(「へ」)→d、内面口縁部b→d、体部c(「へ」)→d、赤脚E、柱形、白附、NO.2	E
5	1031	壺 小	土 陶器	高 沢	21.4	-	7.9 外周口縁部b、体部d、内面口縁部b→c→d、体部c→d、NO.1	
6	1033	壺 土	土 陶器	裏 ?	-	6.5 (7.2)	为周体形c→d、内面体形c(「へ」)→d、NO.5	
7	994	壺 土	土 陶器	高 沢	15.6	-	(8.2) 外周口縁部b、体部c、内面口縁部b、体部c(「へ」)、白附、NO.3、10	中型B?
8	1036	-	土 陶器	透	16.0	6.0	35.6 外周口縁部a→b、体部c→d、方孔口縁部b、体部c(「へ」)、底部付近#	中型A
SI-11								
87-1	658	壺 上	土 陶器	坪	口径 14.0	底径 12.0	外周口縁部b、体部e、内面口縁部d、体部c→d、赤色A	Aa
2	660	壺 上	土 陶器	坪	-	-	-	
3	866	壺 上	土 陶器	坪	-	-	外周口縁部b、体部c、内面口縁部b、体部c、赤色B、白附	B
4	741	床 土	土 陶器	坪	-	-	外周口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部d、柱形	Aa
5	927	床 褐	土 陶器	坪	-	-	外周口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部d、柱形	Aa
6	653	灰 白	土 陶器	坪	14.1	-	6.2 外周口縁部b→d、体部e→d、内面口縁部b?、体部d、柱形、白附	B
7	957	壺 突穴	土 陶器	坪	14.6	-	(4.7) 外周口縁部b、体部e→d、内面口縁部b、体部c→d、柱形、白附、NO.3、15	B
8	957	壺 突穴	土 陶器	坪	15.6	-	6.4 外周口縁部b、体部e、内面口縁部b、柱形、白附、NO.15	Aa
9	959	壺 突穴	土 陶器	坪	(15.0)	-	7.15 外周口縁部b、体部c、内面口縁部b、柱形、白附、NO.16	Aa
10	963	壺 突穴	土 陶器	坪	13.0	-	5.4 内面口縁部b→d、体部c、内面口縁部b、体部d、柱形、白附、NO.20	Aa
11	877	カマド内	土 陶器	坪	14.6	-	11.1 为周口縁部b、体部c(「へ」)、内面口縁部b、体部c(「へ」)、白附、NO.2	
12	942	床 突穴	土 陶器	坪	17.0	-	5.4 外周口縁部b、体部c→d、内面口縁部b、下部b→d、複合口附、柱形、NO.1	人足B
13	943	床 突穴	土 陶器	坪	18.4	7.4	26.4 外周口縁部b、体部c→d、内面口縁部b、体部c、a、底部付近+d	大型B
14	719	カマド突穴	土 陶器	坪	7	- (8.0)	20.0 外周口縁部c→d、内面体形c	
15	1095	床 白	石 石器	坪	厚2.0	0.45: 0.3: 0.4	孔1+(S-1)	
SI-12								
89-1	367	壺 土	土 陶器	坪	口径 13.7	底径 9.5	外周口縁部b→d、体部e→d、内面口縁部b、体部c→d、赤色D、白附	B
2	368	壺 上	土 陶器	坪	13.5	-	5.4 外周口縁部b→d、体部c→d、内面口縁部b、体部c→d、赤色B、白附	B
3	690	壺 上	土 陶器	坪	13.0	-	4.45 外周口縁部b、体部c→d、内面口縁部b、体部d、柱形、白附、小B	B
4	366	壺 土	土 陶器	坪	-	-	外周口縁部b、内面体形c→d?、柱形	Aa

16. 第17次出土遺物観察表(4)

(単位 cm)

試掘番	遺物名	層位	種類	材質	法 量	特 徴
90-5	676 塵 土	土 著 磁	青	10.2	-	8.4 外表面褐色、体部a→c (ヘラ)、下部e→c (ヘラ)→d、内表面褐色、体部c (ヘラ)、内側b (NBL-01と整合)
6	366 塵 土	上 面 磁 高 磁	青	-	13.8 (7.6)	外表面褐色b→d、内表面褐色c (ヘラ)、体部b、黑色、白針
7	676 底 泥	土 著 磁	青	(3.7)	(4.0)	夢面の為調査小坑、單孔、白針
8	566 野 葉 六 八	土 著 磁	青	-	-	外表面褐色b→c、内表面褐色d?、複合口縫、N-04前歯穴と整合
9	346 野 葉 十 七 面 磁	青	15.6	8.5	31.4 小口径鋸面b→c、体部上部a→d、下部c、内表面褐色b→c、体部上部c、下部c、内側c (NBL-01と整合)	
90-1	670 横 上 下 鋸 面	土 著 磁	青	16.8	7.2	29.2 外表面褐色b、体部上部c (ヘラ)、下部e (ヘラ)、内表面褐色b、下部c (ヘラ)、体部c (ヘラ)、内側b (NBL-01と整合)
2	434 塵 土	土 著 磁	青	14.6	-	(9.9) 外表面褐色b→d、体部d、内表面褐色b→d、体部e→c、白針
3	680 塵 土	土 著 磁	青	29.0	-	(10.8) 外表面褐色b→b、体部上部b→d、下部c→c→d、内表面褐色a→b、体部c (ヘラ)、内側c (NBL-01と整合)
SI-12(2号坑)						
90-4	341 塵 土	石 製 品	鰐 右	高さ: 6.5 幅: 3.25 厚さ: 4.95	重さ 244.5g、破片数二ヶ所	
5	366 塵 土	金屬製品	刃 下	長さ: 12.0 幅: 1.1 厚さ: 0.29 頭、茎部0.95、基部0.2.2、内側無不明		
90-1	794 深 方形 小	土 著 磁	著 磁	上部: 18.0 底面: 18.0	外表面褐色b、体部c (ヘラ)、内表面褐色b、体部c (ヘラ)、内側c (NBL-01と整合)	
2	468 塵 1 磁	土 著 磁	高 扇	(14.2) (8.15)	外表面褐色b、斜面b、内表面c・シリコリム、薄暗b、赤色b、白針、(SE-01と整合)	
3	512 塵 13 磁	土 著 磁	高 沢	-	-	
4	794 塵 8 磁	土 著 磁	低	22.5 (14.2)	外表面褐色薄オサギ、体部c (ヘラ)→d、内表面褐色c (ヘラ)、体部c (ヘラ)、斜形、白色b、白针	
SI-14						
90-1	1068 塵 二	土 著 磁	芦 斧	-	-	外表面褐色a→d、下部a→c (ヘラ)、内表面褐色d、赤色a?、白針 (1.5)
2	830 塵 高	上 面 磁	豆 (小)	口径: 9.3	(4.2)	外表面褐色b→d、内表面褐色b→c (ヘラ)、肩口 (肩つまみ口) L、白針
3	1065 塵 上	深 容 磁	著 磁	-	-	真圓、凸等、波次文2段、TK208~32号
SI-16						
90-1	692 底 面	正 斜 磁	著 磁	(8.8)	-	(4.9) 外表面褐色b→d、体部d、内表面褐色b→d、体部c (ヘラ)→d、GP、NO.3
SI-17						
90-1	1040 塵 土	土 著 磁	坏	-	-	外表面褐色b、体部e→d、内表面褐色b、体部c→d?、焦形、白針
2	1053 黒 一 五 磁	土 著 磁	坏	-	-	外表面褐色b、体部d? 内表面褐色b、体部c?、焦形
3	1053 黒 土 板 上	土 著 磁	高 磁	-	(9.32)	外表面褐色d、内表面褐色c (ヘラ)
4	1054 黒 一 五 磁	土 著 磁	高 磁	-	(8.37)	外表面褐色d、内表面褐色c (ヘラ)、NO.9
5	1060 黒 一 五 磁	土 著 磁	高 磁	-	(8.2)	外表面褐色d、c、内表面褐色c、NO.8
6	1056 黒 土	土 著 磁	青	17.8	-	(8.0) 外表面褐色b、体部c (ヘラ)→d (ヘラ)、内表面褐色b、体部c (ヘラ)、内側、NO.1
SI-18						
90-1	1054 塵 土	上 面 磁	耳	-	-	外表面褐色b、体部e→d、内表面褐色b、体部c (ヘラ)、黑色毛髮、白針 R.?
2	1057 塵 土	三 著 磁	裏 (小)	口径: 13.6 幅: 4.4	褐色 内側: 接合部a→b、体部d、体下部c (ヘラ)、内表面褐色a→b、体部c?、内表面半透明 化物、内側、NO.4	
3	1058 塵 土	土 著 磁	裏	-	(7.0) (6.1)	外表面褐色c (ヘラ)→d、内表面褐色c (ヘラ)、体部木质化、白針
4	896 黒 1 塵 土	上 面 磁	裏	(19.0)	-	(11.3) 外表面褐色b→c (ヘラ)、接合部a→c (ヘラ)、体下部e→c (ヘラ)、内表面褐色b、体部c→a (ヘラ)、内表面褐色不規則、白針
SI-19						
90-1	430 塵 1 塵	土 著 磁	牙	-	-	外表面褐色d、内表面褐色c、焦形
2	796 塵 1 塵	土 著 磁	牙	-	-	外表面褐色b、内表面褐色b、体部c、赤色b、白針
3	515 885 塵 5 塵	土 著 磁	牙	(15.2)	-	5.0 赤色b、内表面褐色b、体部d、内側c、焦炭斑、白針
4	808 黒 5 塵	土 著 磁	牙	-	-	外表面褐色b、外側d、内表面褐色b、体部c、白針
5	521 黒 1 塵	土 著 磁	牙	-	-	外表面褐色b、内表面褐色d、黑色毛髮、白針 B?

17. 第17次出土遺物観察表(5)

(単位 cm)

器種名	遺物名	施主	層	性 種	法 葉	特 質	
10 - 6	511 地 土 上 鋼 筒	高 級	-	10.5	3.4	外底(底部) → d、内面(底部) c (ヘラ) → d、内面顶部 c (ヘラ)、白粉	
7	513 地 土 土 鋼 筒 高 級	-	(0.0)	(4.7)	-	外底(底部) d、底部鉛錫、環面凸起 d、内面底部 d、無孔、白粉	
8	450 地 2 層 土 鋼 筒 強(小)	-	-	7.4	(14.6)	外底(底部) c (ヘラ) d、内面体部 c (ヘラ)、白粉	
9	568 地 2 層 土 鋼 筒 強	-	-	14.5	7.0	(9.7)	外底(底部) a → b → c、深腹 a、内面(底部) c → b、体部 c、b、木製底、白粉 中型 B
10	896 地 2 層 土 鋼 筒 強	-	-	21.6	10.0	22.5	外底(底部) a → b、体部 c (ヘラ) → a、内面(底部) a → b、体部 a、c (ヘラ)、白粉 大型 B
SD 10							
100 - 1	829 地 土 J. 鋼 筒	年	(11.8)	2.0	7.8	外底(底部) b、浅腹 e → d、内面口縁部 b、体部 c (ヘラ)、d、漆色 B、P針	
2	695 地 2 層 土 鋼 筒	环	-	-	-	外底(底部) b、体部 d、内面(底部) d、無孔	
3	1077 墓上土 鋼 筒	年	-	-	-	外型、内部肥乳、黑色 B	
4	1077 墓土下部 土 鋼 筒	环	-	-	-	外底(底部) b、体部 d ?、内面口縁部、体部 d、内底、白色	
5	598 地 5 層 土 鋼 筒	环	-	-	-	外底(底部) b、内面体部 d、黑色底漆	
6	982 地 5 層 土 鋼 筒	年	(11.8)	漆質	-	外底(底部) b、内面口縁部 b、体部 c、無孔	
7	508 地 5 層 土 鋼 筒	环	-	-	-	外底(底部) b、体部 e、内面口縁部 b、体部 c、無孔	
8	825 地 5 層 土 鋼 筒	环	-	-	-	外底(底部) b、体部 d、内面(底部) b、体部 c、無孔	
9	875 地 5 層 土 鋼 筒	环	14.5	-	5.0	外底(底部) b、底漆 c、内面(底部) b、体部 d、黑色底漆、白粉	
10	829 533 地 5 層 土 鋼 筒	年	13.9	-	5.3	外底(底部) b → d、体部 c → d、内面(底部) b → d、体部 d、白色 B、白粉	
11	568 825 地 5 層 土 鋼 筒	环	14.6	-	6.3	外底(底部) b → d、体部 c、内面(底部) b → d、体部 d、黑色底漆、白粉	
12	- 地 5 層 土 鋼 筒	环	11.2	-	6.9	外底(底部) b、体部 c、内面口縁部 b → d、体部 d、黑色底漆	
13	568 825 地 5 層 土 和 瓶 強(小)	-	-	5.3	(7.3)	外底体部 a → c、内面体部 c (ヘラ) → d、白粉	
14	483 地 1 層 鋼 筒 強(小)	-	-	-	-	外底凸起状突起、内面ヨクロ、c (TK360 併行)	
15	832 地 5 層 鋼 筒 強	円 直	2.3	2.25	厚さ 0.30	孔 2 ♀	
SD 12							
107 - 1	903 地 1 層 土 鋼 筒	环	口径: 直径:	内底:	外底口縁部 b、体部 d、内面口縁部 b、体部斜削状 d、無孔		
2	316 地 3 層 土 鋼 筒	环	-	-	-	外底(底部) b → d、内面(底部) b → d (縫隙)、体部斜削状 d、無孔、白粉	
3	519 地 3 層 土 和 瓶	环	-	-	-	外底口縁部 b、体部 d ?、内面(底部) b → d、体部 d、無孔 SK26 と合併	
4	645 地 3 層 土 鋼 筒	环	-	-	-	外底口縁部 b、体部 c、内面口縁部 b → d、体部 d、無孔	
SK 26							
102 - 5	762 地 土 和 瓶	1.6×2.8	4.5	3.8	3.6	外底磨耗、内面 c → 滑面 b、無孔、白粉、NO.1	
SK - 01 (443)・追跡							
115 - 1	154 地 1 潤 石 鋼 筒	4.9	1.6	0.3	厚さ	孔 1 ♀、滑石製 (古墳時代)	
SK 03							
113 - 2	532 地 上 上鉛蓋土 鋼 筒	小 直	口径: 直径:	内底:	△、ロクロ、鍍込みナダ、圓軸切欠き ?、板状压痕、中华		
3	394 525 地 土 瓦 天	X	直径: (12.0)	直徑:	厚さ (1.8)	圓孔、近狀	
SK 10							
115 - 4	1074 地 土 上鉛蓋土 鋼 筒	小 直	口径: 直径:	内底:	表面 (1.4) △、ロクロ、圓軸切欠き、内面述縫付着 (空隙部)		
5	1074 地 2 瓦 天 鋼 筒	直	-	-	-	或次元 (2段) SK - 11 と同一側面か (追跡時代)	
6	401 地 2 瓦 天	直	直	直	直	出露小口 (縫隙)、内面開口 → ナメ済し、焼成不良薄手	

18. 第17次出土遺物觀察表(6)

(単位 cm)

BIR003		遺物名	層位	種類	性質	法量	特	記
115-7	1005	鐵 土	瓦 平 瓦	磚	(29.1)	(19.0)	(3.6)	四面有目、内面黒目(火)。SE-01と接合
SK-12								
115-8	306	鐵 土 上 部	瓦 平 瓦	磚	(7.0)	(9.0)	厚さ (2.2)	凹面有目、凸面黒目(火)、横骨有
9	306	鐵 土 上 部	角 急 落	瓦?	-	-	-	外面ロクロ、波紋文、内側ロクロ、Sc
20	652	鐵 土 上 部	鐵 水 瓶	二重底?	-	-	-	外面ロクロ、波紋、内側ロクロ、内口落しあり、TK208-23併行中
SK-12								
115-11	415	鐵 土 上 部	半 圓 形	小 皿	山形 7.4	直径 (1.18)	B (波紋)、ロクロ、見込みナメ、厚手	
22	414	鐵 土 上 部	半 圓 形	小 皿	9.4	(3.7)	(2.4)	A、ロクロ、内側赤み切り、厚手
23	614	鐵 土 上 部	土帶 青 漆	漆?	-	7.8	(3.3)	B、ロクロ、見込みナメ、波状底面、厚手
14	415	鐵 土 上 部	陶 器類	丸?	黄8	幅 (2.05)	厚さ (0.5)	厚
15	1091	鐵 土 上 部	金銀製品	古 錢	-	-	-	重末銅五、光化元年(1028)年、20.6cm、直徑、重さ2.9g
SK-13								
116-1	580	鐵 土 上 部	唐 忍 態	漆 合	-	-	-	外面波紋文(2箇)、内面黒目ナメ、厚手、Sc
SK-22(中位)								
116-2	680	鐵 土 下 部	金銀製品	漆 瓶?	裏 (6.5)	幅 (1.05)	厚さ (0.9)	漆
3	660	鐵 土 下 部	金銀製品	木 柄	9.6	1.15	厚さ (0.3)	漆(工具?)
SK-23								
116-4	773	鐵 土	山形青 漆	碗	山形 10.6	直径 (5.6)	厚さ (3.1)	D、外面C(ヘラ)→d、内面C(ヘラ)→d、刷り出し高台?、外底面ミガキ
SE-01								
110-1	696	15	層 中世初期	碗?	-	-	-	楕子凹印、内面黒目(火)のナメ、波擦
2	699	16	層 中世初期	盤	34.8	-	(3.9)	内外面ロクロナメ、波擦り、波擦、12cm→13cm前
3	584	17	層 中 (中位)	碗	-	-	-	青磁、斜溝窓文面、内面赤文?、難具系、12c後半以後
4	557	本 体 17	半 圓 形	小 皿	-	-	-	D(灰白色)、11瓣模様ナメ、厚手、子型ね。
5	648	本 体 17	半 圓 形	盤	10.6	-	3.1	D(灰白色)、口縁部模ナメ、厚手、手取ね。
6	645	本 体 18	半 圓 形	小 皿	-	8.8	19.30	D、ロクロ、内側赤み切り
7	646	拂 方 18	半 圓 形	碗?	-	7.4	(3.0)	A、ロクロ、内側赤み切り
8	262	本體 中 位	漆 漆	漆	-	-	-	内漆、波紋文、Sc、TK208以前
9	648	15	層 石 製品	円 板	周 (9.3)	幅 (1.05)	厚さ (0.4)	乳ココ
SD-01								
120-1	150	日 月 星 三 合	半 圓 形	漆 漆	口徑 25.6	直径 - (16.4)	厚さ - (2.1)	平行脚印、波擦、13c?
2	149	日 月 星 三 合	半 圓 形	火 盆	25.6	-	(16.4)	北緯2度、内面赤化物付属、在地?
3	22	日 月 星 三 合	半 圓 形	漆 漆	-	-	-	青磁、又幾人、延朝な模様面、波擦、底多氣孔、14c後半以後
4	162	VI 13 45	日 月 星 三 合	近世肉桂	天干年號	-	(2.1)	天干輪、某人、段付内凹目、青磁、12c第2回半期
5	145	IV 13 33	日 月 星 三 合	近世肉桂	折 紙 五	16.4	- (2.1)	紙被物、某人、1(漆面内面沈沫)、美濃、地脚部、12c前
6	9	日 月 星 三 合	半 圓 形	漆 漆	底面 (1.25)	-	-	知、底さ5.5cm
7	258	背 板	半 圓 形	中 世 陶 器	漆 漆	口徑 (14.4)	- (1.0)	灰磁、浅褐色、某人、斜斜子文、滴口、15c前半
8	39	稻 土 上 部	中 世 陶 器	碗?	-	-	-	雙子片脚印、内底ナメ、青磁、小型か
9	33	稻 土 上 部 (牛糞)	中 世 陶 器	碗	高台 (6.0)	- (2.8)	-	双足片脚印、内底ナメ文様(△印)、漆面青磁、新井燒原灰、16c後半以後

19. 第17次出土遺物観察表(7)

(単位 cm)

通号	遺物名	層位	種類	形態	法身	特徴	備考
120-50	316	IV 層 1	土器	中筒 (中筒)	口幅 底径	- (1.6) 22.5	当磁?、無文、直オリーブ灰陶。希珍入。13c か。
11	285	IV 層 1	土器	口上開口 深?	-	-	模花摩印、芯地
12	311	IV 層 1	土器	土器質土 筒	小 直	10.4	- (1.8) D、ロクロ?、内外唇丸 G-9区
13	328	IV 層 1	土器	土器質土 筒	小 直	10.4	- (1.6) A?、ロクロ、内底リロ織 F-9区
14	43	IV 層 1	土器	品 壷	高さ (7.75)	- 1.4	浮き 内面に金銀?付箋、《赤道工場か》
15	139	V 層 2	近世陶器	瓶	口幅 底径	6.0 (2.10)	青石釉、荷台底高弧、内面部に只あと。上部、13c 案件以前
16	52	V 层 1	近世陶器	瓶	-	7.1	(3.6) 青石釉、施成不良、荷台底高弧、内面部に只あと。上部、13c 案件以前
17	222	V 层 1	土器	土器質土 筒	小 直	7.0	- (1.2) A、ロクロ、底部余切り(縮出)、芯手。F-9区
18	119	V 层 2	近世陶器	丸 瓶	13.6	8.2	(2.5) 黄石釉、内底丸足、芦縫、黄油、足跡強調。17c 案件
19	73	V 层 2	近世陶器	筒 扇	-	-	3.4 銅錫鉢、施し掛け、錫鉢、火道、帶隔部、17c 前半
20	112	V 层 3	近世陶器	中腹開口	-	-	外圓押印、荷台凸、内面暗目口、ナデ、足見。13c?
21	182	V 层 2	近世陶器	底 (中筒)	-	-	(2.7) 芯付、内外器に界線、青碧鐵窯系。16c 後~17c 案
22	170	V 层 3 上	近世陶器	中 (中筒)	瓶	16.5	- (3.5) 青碧、深火、褐灰化、直人、鋸口絞、熟灰窯系。14c
23	168	V 层 3 下	近世陶器	中腹開口	-	-	板状押印 (8cm), 芯地压
24	74	V 层 2	近世陶器	瓶 鉢	-	-	(8.2) 芥黄、内面ケア、瓶口2本、凸筋、芯地。17c 前半
25	71-66	V 层 2 上	近世陶器	腹 鉢	-	-	(4.9) 芥黄、芯地。17c 前半。21と同一個体か

SH-02 (中型)

120-26	169	V 层 3	土器質土 筒	土器質土 筒	小 直	口幅 底径	高さ (1.3)	A、ロクロ、底部余切り、内外壓制、F-5区
121-1	161	V 层 2	土器	な 製 釜	底径 (8.4)	底径 2.0	身高 5.9	青石釉、3.5~3.9、芯拂3.2。欠損
2	187	V 层 2	近世陶器	石 刻 釜	石	底径 (6.7)	身高 2.7	青石釉、表面使用
3	27	V 层 1	土器	土 成 器	三	口幅 底径	高さ 6.1	青口拂印→a (ヘラ)、休擦 (ヘラ) →d (ヘラ)、内面口拂印b →d (ヘラ) E.
4	18	V 层 1	近世陶器	燒 釜	燒	33.0	-	(2.6) 青焼、施成良好、底端不明。17c 前
5	195	V 层 2	近世陶器	燒 釜	燒	-	-	外圓平行叩き、芯地凹頭。古燒鐵頭?
6	39	IV 层 1	近世陶器	燒 釜	高 口	-	-	外圓ロクロ、内底ロクロ。芯なし。古燒鐵頭以後?
7	368	V 层 2 下	近世陶器	燒 釜	燒 (小)	-	-	内壁鐵紋狀、内底ロクロ。次焼き。TK308 伊藤?
8	361	V 层 2 下	近世陶器	燒 釜	燒	(8.7)	(2.3) 外圓青竹形、外底ロクロ。兩面蓋?。5cm~8cm 前	
9	307	IV 层 1	近世陶器	燒 釜	燒	-	-	外圓平行叩き、内底ナデ。芯目張、泉井一安?
10	105	V 层 2	近世陶器	高 口	高 口	-	(1.6)	外側ロクロナデ、内側ロクロナデ、擦入品?
11	147	II 层 1	燒 釜	高 平 瓦	高 平 瓦	底径 (7.0)	身高 (3.7)	瓦面拂印 (相)、凸面圓柱、凸面あり。板石點用か
122-1	83	IV 层 1	土器	土器製品	瓶	底径 5.5	身高 6.0-4.0	青釉、腰肩火?、孔1ヶ、口折鉢。(折支系?)
2	363	IV 层 2	近世陶器	石 烧 釜	石 烧 釜	身高 1.75	1.0	重量 0.5g
3	161	V 层 2	近世陶器	石 烧 釜	石 烧 釜	口幅 (1.90)	身高 0.5g	重量 0.5g

SD-02

124-1	639	堆 土	土器質土 筒	八 直	L.横 底径	高さ	D、四輪余切り、厚丁
2	1068	堆 土	土器質土 筒	小 直	-	-	D、ロクロ、芯手、3.2.列、偏体?
3	205	堆 土	土器	土器質土 筒	小 直	7.0	(1.6) D、ロクロ、見込みナデ、回転余切り、芯手、2と同一個体?
4	206	堆 土	土器	土器質土 筒	L.横 底径	高さ (1.1)	A、ロクロ、見込みナデ、回転余切り、内底油煙付
5	209	堆 土	土器質土 筒	小 U	-	-	A、手捏入、口端堅模ナデ、内底の傾付等

20. 第17次出土遺物観察表(8)

(単位 cm)

目次	遺物名	層	位	種類	寸	幅	高	特	備
124-6	211 墓2層下部	北朝賀土器	小	皿	7.4	6.9	1.3	A、ロクロ、丸込みナメ、圓板糸切り、板状江底	
7	682 墓 2 層	二輪車輪	小	皿	8.1	6.4	1.6	A、ロクロ、丸込みナメ、14枚糸切り、板状江底	
8	693 墓 2 z 層	三輪車輪	小	皿	-	7.2	(1.1)	D、ロクロ、14枚糸切り?	
9	674 墓 3 層	瓦質土器	盤	炉	33.5	-	(5.4)	スタンプ文(口縁)、内外ロクロナメ、浮面内面ナメ、16c	
10	697 墓 3 層	瓦質土器	灰	匣	-	-	-	内部研光、外側磨滅、16c	
11	209 墓 2 層	瓦質土器	灰	匣	?	-	-	凸形、神社(雷文)、外側磨滅、16c	
12	245 251 墓 上	上 26 瓷	坪	(35.0)	-	6.4	苏術17通部b-d、体部d、内面口沿部b-d、体部d、底部d、底部、口付	E	
13	252 259 墓 2, 3層	土器	器	片	13.7	-	(8.4)	外底口縁部b-d、体部e(ヘラ)-d、内口縁部b-d、体部d、底部	B
14	1979 墓 1 层	漆器	漆器	無	-	-	-	外底凸型、波紋文、内底ロクロ、TK23 横行か	
15	246 墓 3 層	漆器	漆器	器	-	-	-	平行叩き。内底→ア泡し、叩き目・ケズリ、5c?	
16	465 2 c 层	漆器	漆器	器	-	-	(6.1)	外底ロクロ→網目三→虎ナメ・刷毛目、底部径 33 cm、古墳後期?	
17	242 墓 2 层	瓦	瓦	平	高さ (5.7)	幅 (2.4)	厚さ (0.6)	窓口口目(窓)、凸面、鏡面、磨面あり、紙打板用か	
18	224 墓 2 层	瓦	瓦	坪丸瓦	(8.4)	-	(2.3)	蓮花文(SD08 の可逆性もある)	
125-1	218 墓 3 层	中空陶器	器	口付	-	直径 (3.3)	厚さ (0.6)	外底体部ケズリ、内面磨滅、底地不明(深埋?)、13c	
2	666 墓 2 层	中国磁器	器	-	4.95	-	(0.9)	青磁?、オーバープレート、下半透明、体部・底部、内底ヘラケズリ、13c	
3	658 墓 1 层	中空陶器	器	-	14.4	-	(3.0)	青磁、半透明な粘膜色(厚い)、輪邊文、底身又、貫入、縦及び横、足底空洞、13c 末~14c 初	
4	263 墓 1 层	中国磁器	器	-	-	-	(4.1)	青磁、半透明な粘膜色(厚い)、輪邊文、輪眞挖空、13c 末~14c 初	
5	196 墓 1 层	中国磁器	器	-	-	-	(2.1)	青磁、青磁「方」?、若干貫入、蓋付~高台内深窓、斜放、16c 青磁?	
6	295 墓 2 层	中空陶器	器	-	28.2	-	(5.9)	内外ロクロ、在地II	
7	219 墓 2 层	半掛陶器	器	-	-	-	-	ロクロ、在地	
SD-02 (中日)									
125-8	336 墓 2 层	中空陶器	器	口付	-	直径 (13.0)	厚さ (0.9)	内外ロクロ調査、在地	
9	211 墓 2 下部	中空陶器	器	口付	23.4	-	(4.5)	内外ロクロ調査、各部、16c?	
10	677 墓 2 层	中空陶器	器	?	-	-	-	外底自然底、内面調査、該分の吹き出し、分底(白石突)、13~14c	
11	737 墓 2 层	中空陶器	器	-	-	-	-	押印、在地	
12	211 墓 2 下部	中空陶器	器	-	-	-	-	外底自然底、内面ナメ、在地	
126-1	224 西 東 墓	瓦	瓦	高さ (13.0)	幅 (0.9)	厚さ (0.6)	高さ (0.7)	窓口、右目(左目)、朱切り窓(SD08 の可逆性もある)	
2	237 墓 4 层	中空陶器	器	-	-	-	-	内底削尾、外底ケズリ、在地II	
3	213 墓 4 层	中空陶器	器	-	-	-	-	内底削尾、右目に脚窓(窓石使用?)在地、13c	
4	227 墓 4 层	土質質木器	小	皿	-	7.0	(0.7)	A、ロクロ調査?、内底糸切り?、内外磨耗	
5	408 土 3 極	石製品	円	板	持さ 0.5	幅 0.3	厚さ 0.5	孔2つ、変形	
6	21 土 1 極	金屬製品	鉢	(5.9)	0.45	0.45	鉢、(折鉢)		
7	21 墓 1 極	金屬製品	片	?	(4.3)	1.1	0.3	鉢、米	
8	1069 墓 1, 2 层	金屬製品	平	板	(6.7)	(1.30)	7.15	鉢、(折鉢?)	
9	209 墓 2 层	金屬製品	片	-	5.2	0.7	0.6	鉢、(折鉢)	
SD-04									
128-1	171 日 4 区	上部質木器	皿	口付	-	直径 (7.4)	厚さ (1.1)	A、ロクロ、田巻糸切り、板状ナメ	
2	174 日 4 区	二輪車輪	皿	-	14.6	-	(2.13)	A、ロクロ	

21. 第17次出土遺物観察表(9)

(単位 cm)

回収No	発掘No	層位	器種	構成	法量	特徴
118-3	174	H層 4段	土器	片	(11.3) (3.2) (5.75)	外周口縁部b、体部c、内周口縁部b、体部d、無e、无f
SD-06						
128-4	166	堆 土	上 鋸 壁	瓦	口径 15.6	底面 -(16.7) 外周口縁部b、体部c (へタ) →d、内周口縁部b、体部c (へタ) →d、白灰
5	236	物 1 層	中世陶器	壺?	-	-
6	506	漆 5 層	中世陶器	壺	-	-
7	506	漆 5 層	中世陶器	壺	-	-
8	489	堆 1 层	石 烧品	?	高さ 7.50 幅 0.31 厚さ 0.31	柱状石製品、表面凹凸
SD-07						
128-11	610	堆 1 层	上 鋸 壁	瓦?	口径 15.1	底面 -(12.3) D、調査不明
12	642	堆 4 层	土器等二 種	八 瓢	-	3.8 (1.7) D、ワクロ、内底糞切り(縫合)、手平
SD-08						
128-13	608	堆 上	漆 漆 壁	二重底?	-	-
14	608	堆 土 中部	漆 漆 壁	瓦 壁	-	9.0 (2.5) 外周口クロ、内側口クロ、内底、白灰
SD-11						
128-9	522	堆 上	漆 漆 壁	瓦	口径 14.30	- (6.1) 外周口縁部c、体部e、内周口縁部c、体部d、内底
10	518	堆 土	土陶瓦上 壁	皿	-	8.0 (1.6) D、ワクロ、足込みナガ、内底糞切り?、板状瓦頭
SD-16						
129-7	1011	堆 4 层	石 製品	器	高さ (1.9)	幅 1.5 厚さ 0.4 重量 0.75g、A部欠損
その他付土壤物						
129-1	1097	SD 堆 1 层	中世陶器	直内夢?	口径 14.5	底面 -(13.2) 外周口縁部c、内底ナゲ、素滑、15c
2	109	3トレンチ 堆	中世陶器	破	13.0	- (13.2) 青磁、透明な緑色、燒造分乏、13c末~14c前
3	627	G-16 pit19	石 制品	器 石	高さ (2.1)	底面 -(1.8) 大盤品、調査用?
4	577	K-16 pit19	石 制品	寶 玉	1.6	外周 -(0.5) 孔溝約0.25、へき玉製?
5	4	V-16 坑壁 付	石 制品	石 玉	高さ 2.05	底面 -(1.0) 丸1r
6	89	堆 江戸上 部	石 制品	刻 形	4.15	底面 -(0.5) 孔1r、質なし、擦切跡、繊維品
調査土部						
回収No	遺物名	層位	器種	文 样	特 徴	
130-1	234	SD-06	堆 3 层	瓦 破	-	方判区画文 中範水~後頭斜
衛生土部						
130-2	721	SI-03	最下層	器	沈織文(三本一撓)	小三撓式
3	265	SI-03	堆 2 层	瓦?	焼灰	点彩文×子文 横折式、小窓状口縁、内向洗波文
4	923	I pit150	堆 土	器	-	平行状波文 青木組入~門口式
5	424	SI-12	堆 1 层	-	織文	- 木案頭(頭部)
6	247	SK-06	堆 土	-	-	平行状波文 青木組入~山形組織式斜行
7	39	SD-01	堆上部	瓦 破?	-	平行状波文(木) 青木組入~山形組織式斜行
8	450	SD-09	堆 上	瓦 场	-	沈織文(二本一撓) 三撓式
9	794	SK-01	土 场	器?	-	平行状波文(木) 青木組入~山形組織式

22. 第17次出土遺物觀察表(II)

(単位 cm)

測定番号	測定場所	遺物名	用 位	器 様	文 標		特 徴		
					文	標			
130-10	226	SI-01	壇 1 層	高 口	-	-	樹形團式以前		
11	219	SI-01	壇 1 層	鉢	鶴鱗文	底部工字文	無出目式		
12	210	SI-01	壇 1 層	-	鶴文	-			
13	300	SI-01	壇 1 層	鉢	鶴文 (擦過)	変形ノ字文	樹形團式		
14	206	SI-01	壇 2 層	壺	-	平行沈縫文	-		
15	449	SI-02	壇 上	-	-	平行沈縫文(5条)	青木烟式～山王山式		
16	199	SK-01	壇 土	鉢	鶴文 (擦過)	変形ノ字文?	樹形團式		
17	199	SK-01	壇 土	壺?	鶴鱗文 (擦過)	平行沈縫文	樹形團式		
18	174	SD-04	壇 上	鉢	鶴鱗文 (擦過)	底部工字文	無出目式		
19	174	SD-04	壇 土	壺?	-	捺狀兩面鶴文	-		
20	276	VII pe 47	壇 土	壺	鶴文	鶴文	樹形團式		
21	129	J-4, 5直	壺 上	壺	鶴文 (擦過)	円心凹文(擦過文)	樹形團式		
22	131	J-4, 5直	壺 上	壺	鶴文(凹)?)	平行沈縫文	樹形團式		
23	489	SD-06	壇 1 層	鉢	-	平行沈縫文	樹形團式		
24	489	SD-06	壇 1 層	壺	-	平行沈縫文	樹形團式, 1着毛地文?		
25	358	SD-11	壇 土	壺	鶴文	-	無出目式		
26	922	SD-11	壇 土	壺	鶴文 (擦過)	平行沈縫文	樹形團式		
27	494	SI-10	壇 1 層	-	鶴文 (擦過)	平行沈縫文	樹形團式?		
28	494	SI-10	壇 1 層	鉢?	鶴文 (擦過)	底部工字文	-		
29	824	SI-10	壇上下部	壺	鶴文	鶴文	樹形團式		
30	1028	SI-17	壇上部	壺	-	枕頭文 (1角)	樹形團式		
31	235	J-5, 6	壺 七	壺?	鶴文 (擦過)	平行沈縫文	青木烟式～山王山式		
古鏡									
図示番号	遺物番号	発見場所	堆積名	基 位	銘 文	規 格	時代	書体	重 量
1	1082	SD-02	I-4	山王山式	鶴鱗通寶	直径 14cm	621	唐 真	
2	1090	SD-08	I-16	鶴鱗通寶	鶴字光宣	直径 14cm	1064	北宋 刻	
3	41	-	VII区	天地取し 地上	青土一鉢	直径 17cm	1942	昭和	0.5g

29・30は樹形團式期のものである。18は鉢、30は蓋である。6・7・9・15・31は樹形團式以前で、青木烟式～山王山式に納まるものであろう。4は壺とみられ、青木烟式以後、円田式以前のものであろう。5・12・14・19・28については、時期不明である。樹形團式が主体であるが、それ以前のものも目立つ。天王山式に属するものは出土していないようである。

第3節 第18次調査

1. 調査に至る経緯

南小泉遺跡内の宅地開発予定地について、昭和62年度に開発行為者の株式会社大東・仙台土地開発株式会社、協進開発株式会社(仲介者)との間で事前協議が成立し、昭和63年7月12日に発掘届が提出された。計画では盛土工法となっており、調査は道路部分を対象とし、必要に応じて拡張することとした。調査は昭和63年10月18日より約3ヶ月間の予定で開始した。

2. 調査の経過

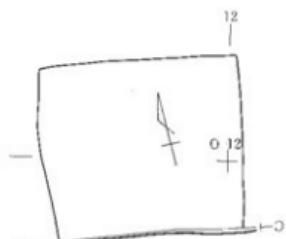
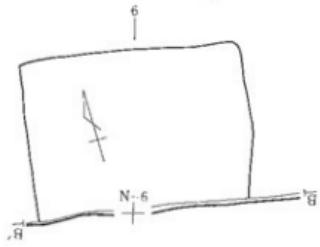
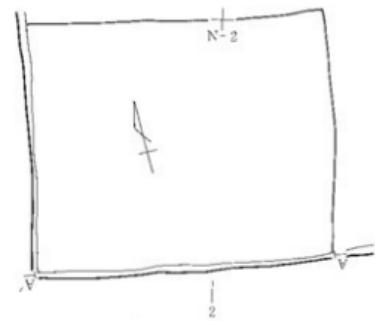
調査は、道路予定地部分の表土を機械により除去し、以後人力による排土作業を行った。調査開始後、1.5ヶ月間は第17次調査と併行の調査を余儀なくされた。調査に際して、道路部分が南北二ヶ所に分かれることから、北側をI区、南側をII区として区別した。I・II区とも天地返しや擾乱が認められたが、特にII区の天地返しは著しい。また、I区とII区の間に塚が存在するが、土地所有者が不明で調査することができず、周辺のトレンチ調査をした。

調査の結果、古墳時代後期の集落や中世の遺構群の拝がりを確認することができた。また、平安時代の保存良好な住居跡の調査を行うことができた。

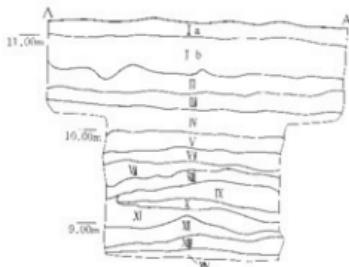
3. 基本層位

砂礫層に至るまでの基本層を確認する目的で、I区3ヶ所・II区2ヶ所の深掘トレンチを設定し観察を行った。その結果、どのトレンチも埋没河川と関連することから、本来の連続的な層序を確認できなかったが、その中でII区東部のトレンチセクションが比較的良好であったことから、これを基準とした。なお、I区のトレンチは過去の調査から判断して、砂層が厚く堆積していることなどから、いずれも埋没河川内とみられる。

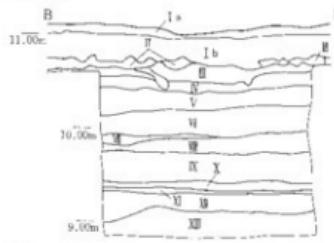
I層は2層に細分される。Ia層は現耕作土、Ib層は畑地の土壤改良を目的とした天地返しにより形成された層で、にぶい黄褐色シルトであり時に暗褐色～黒褐色シルトブロックが混じる。調査区全域に広がっている。層厚は様々である。II層は褐色シルトを主体とするもので、層厚は良好な地点で20～30cmである。全域に分布するが、天地返しなどで消失した所も多い。II層は中世の遺構上を覆っていることから、およそ近世以後の堆積と考えられる。III層は暗褐色シルト主体で、黄褐色シルトブロックが混入する場合がある。層厚は6～7cmである。II区の天地返しを受けない地点やI区の北部で確認できる。本来は、広く遺跡内に分布していたと予想されるが、大部分は天地返しにより消失したようだ。この層に類似する層は、16次調査地点や中世の遺構内で認めることができる。IV層は褐色シルトで、灰白色火山灰ブロックを混入



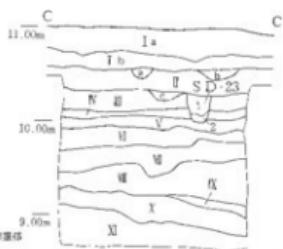
層位 土 色・土 性		
I a	10YR 3/4	暗褐色シルト
I b	10YR 5/4	に赤い黄褐色シルト
II	10YR 5/4	に赤い黄褐色シルト
III	10YR 5/3	に赤い黄褐色シルト 弱風化泥
IV	10YR 4/4	褐色シルト
V	10YR 5/2	に赤い黄褐色砂質シルト
VI	2.5Y 5/6	黄褐色砂
VII	10YR 5/2	赤褐色砂質シルト
VIII	10YR 6/3	赤褐色砂色と褐灰色との互層
IX	10YR 5/4	に赤い褐色色
X	10YR 5/4	に赤い褐色色と褐灰色との互層
XI	10YR 6/6	褐色色
XII	10YR 6/6	赤褐色色と褐灰色との互層
XIII	10YR 7/3	褐灰色と明褐色砂色との互層
XIV	10YR 5/4	褐色色
→入る層は段丘地層と考ふる。		



No. 1 深掘部



No. 2 深掘部



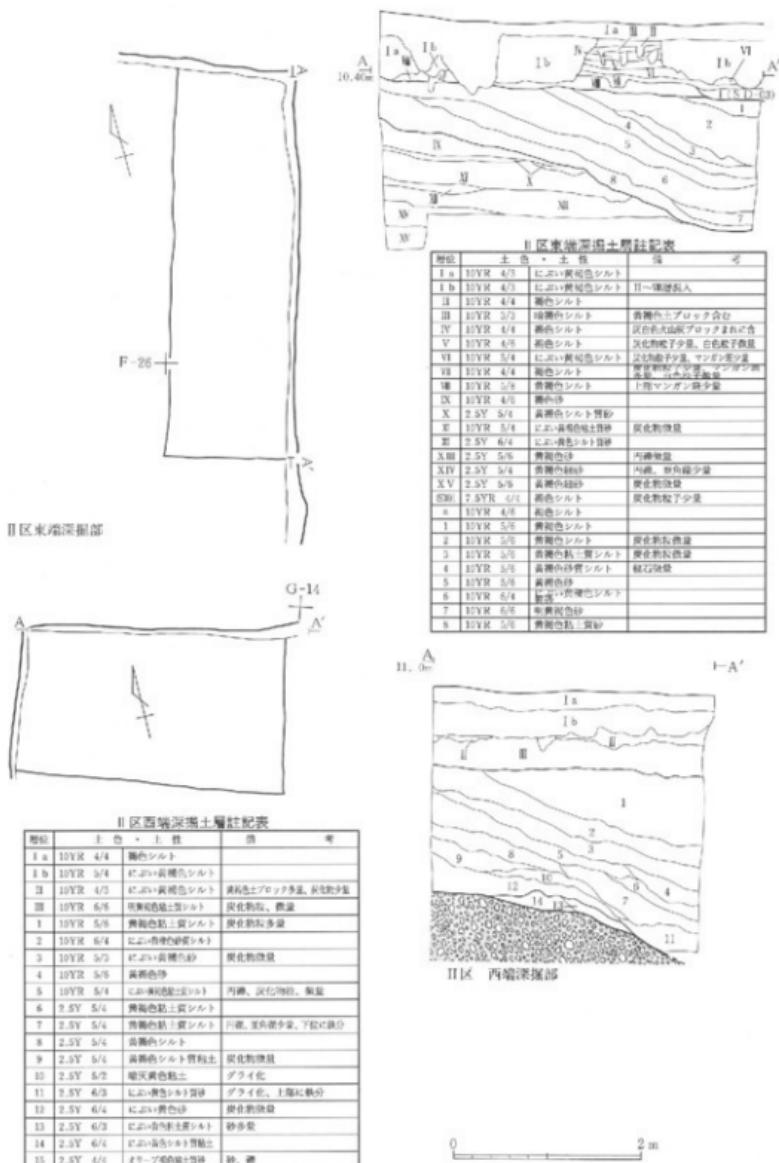
No. 3 深掘部

0 1 m

No. 3 深掘部 (東端)

層位 土 色・土 性		
I a	10YR 3/4	暗褐色シルト
I b	10YR 5/4	に赤い黄褐色砂質シルト
II	10YR 5/4	に赤い黄褐色シルト
III	2.5Y 5/4	赤褐色シルトと赤褐色シルトの互層
IV	10YR 5/4	赤褐色砂色・褐色砂質シルトが混在
V	10YR 4/3	に赤い黄褐色砂
VI	10YR 4/3	に赤い黄褐色砂と褐灰色との互層
VII	20YR 2/3	褐色色
VIII	10YR 4/4	褐色色と褐灰色との互層
IX	10YR 6/6	褐色砂と赤褐色砂との互層
X	10YR 7/3	赤褐色シルト
XI	5YR 3/3	赤褐色シルト
XII	10YR 6/1	褐色色砂・葉質シルト
XIII	10YR 5/1	褐灰色粘土質シルト
→入る層は段丘地層と考ふる。		

第131図 基本層位 (I区)



第132図 基本層位 (II区)

する場合がある。層厚は約 10 cm である。IV層も遺跡内では、大部分失なわれている。火山灰が混入することから平安時代前半以後に形成されたものであろう。V層は褐色シルト主体で、炭化物粒子が混じる。VI層はにぶい黄褐色シルト主体で、炭化物粒子を含む。層厚は 5~10 cm である。この層も、大部分天地返しにより失なわれている。VII層は褐色シルト主体で、炭化物粒子を含む。層厚は約 5 cm 前後である。古墳時代の土器を含んでいる。VIII層は黄褐色シルト主体で、粘性がある。層厚は 20 cm 前後である。従来、いわゆる「地山」と認識してきた層である。遺跡内では多くの場合、天地返しがこの層まで達する。本層の上面で、古墳時代中～後期の遺構が検出される。ところで、VI~VIII層は層位的に区別できない場合も多いし、I 区西部の深掘トレンチでは、VI・VII層相当層に弥生土器が含まれていた。弥生時代の生活面がどの層か、解明されていない。IX層は褐色砂で、層厚は約 30 cm である。VIII層との間に埋没河川の堆積層が介在することから、VIII層と整合性のある堆積層序であるか確認できなかった。X層は黄褐色シルト質砂で、層厚は 5 cm 前後である。XI層はにぶい黄褐色粗砂で、層厚は約 30 cm である。炭化物を僅かに含んでいる。XII層はにぶい黄色シルト質砂で、層厚は 10 cm 前後である。XIII層は黄褐色砂で、1 cm 前後の円礫が混じる。層厚は 20 cm 前後である。XIV層は黄褐色細砂で、3 cm 前後の円礫～亜角礫が混じる。II 区西部のトレンチでは、約 20 cm の円礫がみられる。層厚は 25 cm 前後である。XV層は黄褐色細砂で、礫は含まないようである。層厚は 25 cm 以上とみられる。

現状では、VIII層以下が無遺物層と考えられる。これまで、本遺跡では層位別に時代を理解することが困難であったが、今回時代別の層位が理解できたのは大きな成果である。17 次調査で縄文土器が発見されたことから、縄文時代・弥生時代の生活面や遺構の存在の確認が課題となる。

4. 検出遺構と出土遺物

(1) 古墳時代

古墳時代に属する遺構は、住居跡 3 軒・竪穴遺構 1 基・土坑跡 6 基・溝跡 5 条・畝状遺構 2 基・性格不明遺構 3 基を検出した。SK09 は性格不明遺構 (SX03) に改称した。

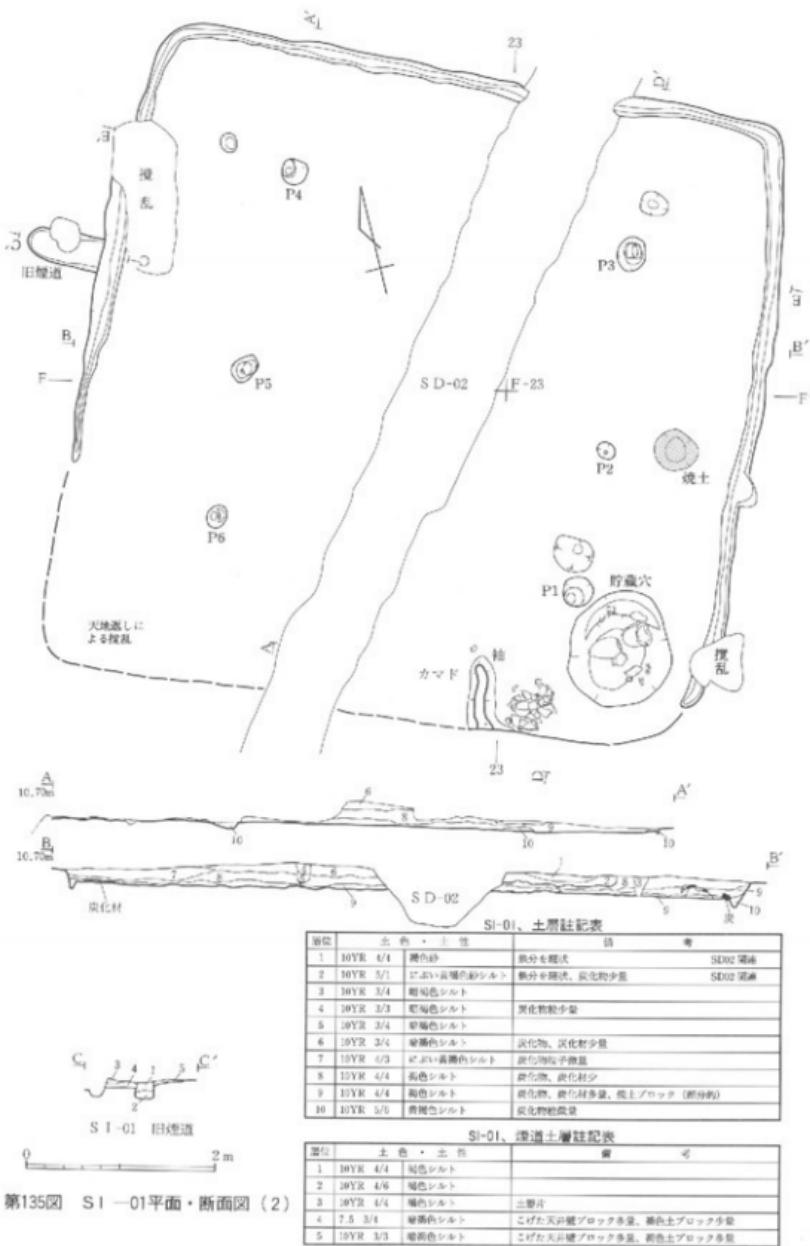
住居跡 (SI)

SI01 (第 134~139 図)

II 区 (E・F-22・23 区) に位置し、SD02・2 号畝状遺構 (溝 f) に切られる。上部は天地返しにより削平を受け、南西部は特に著しい。床面やカマド西袖を失っている。規模は一辺約 6.4 m で方形を呈する。壁高は最大 22 cm である。この住居跡は火災にあったもので、炭化材・焼土が残存していた。材はその出土状況から判断して葦木材であり、梁・桁材は確認できなかっ







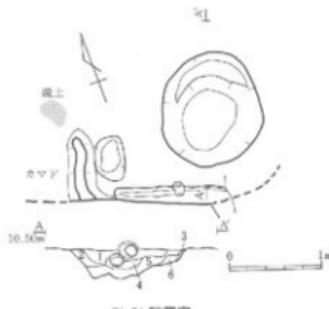
第135図 SI-01平面・断面図(2)

た。ただし、カマド寄りの位置に、角形の柄穴をもつ材が出土しており、後者の可能性がある。材は広葉樹を使用している(第4章参照)。カマドは南壁やや東寄りに位置し、片袖と燃焼部・煙道部を天地返しにより失っている。カマド東脇に浅い窪みが認められた。柱穴は、主柱穴と考えられるものを6個検出した。柱穴の深さは、P₁ 30 cm・P₂ 36 cm・P₃ 44 cm・P₄ 58 cm・P₅ 50 cm・P₆ 41 cmである。また、南東コーナー付近に貯蔵穴が検出され、規模は1.26 m×1.09 m、深さ0.35 mを測る。北壁には段が付く。内部から、炭化材と共に土師器甕・壺・瓶などが出土した。壁際には壁溝があり、全周しているようだ。西壁には古い煙道、東壁床面には焼土の詰まった浅い土坑(カマド燃焼部?)が検出された。

出土遺物は、土師器壺・甕・壺・瓶・支脚?・高环?・ミニチュア土器・切子玉(琥珀?)・石製模造品(円板・破片)・弥生土器・剝片が出土している。壺は有段で黒色処理するもの(外面赤彩のものあり)と古墳時代中期の系譜をひく内湾するものや口縁部に屈曲をもつものがある(赤彩のものあり)。甕は長胴のもの、広口のもの、小型品の三種がある。瓶は泡弾形に近い大小二種がある。支脚?としたものは、西壁の古い煙道部から出土したものである。ただ、塩釜式の器台の可能性も残るが、調査区内では塩釜式の土師器は出土していない。祭祀具とみられるミニチュア土器が、カマド内や脇などから出土した。琥珀らしい褐色の切子玉や石製模造品(円板)が出土しているが、後者はこの住居の時期まで存続するのか、混入品とみるべきか問題が残る。これらの遺物の大部分は、住居の東半部より出土し、特にカマド付近と貯蔵穴に集中する。また、炭化材が多数検出されたが、板状のもの、分割材、角形に近い分割材がみられた。炭化材の一部は分析を依頼し、コナラ属が多く、クリ・ヤマグワが判明している。

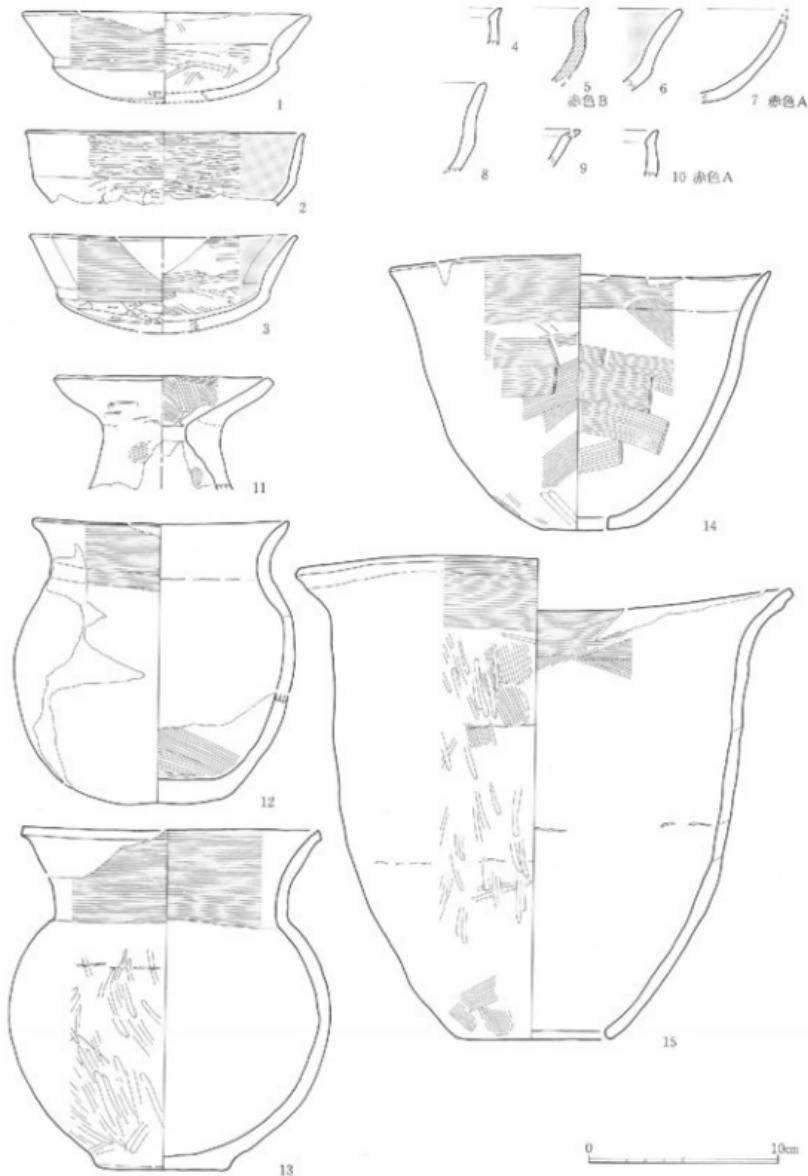
SI02(第140・141区)

II区(F-20・21区)に位置し、他の遺構との重複は認められない。天地返しや搅乱坑により、残りは良くない。規模は不明であるが、南辺で約6m前後と推定される。壁高は残こりの比較的良い所でも約7cmである。大半は削平されている。カマドの存在ははっきりしないが、東壁

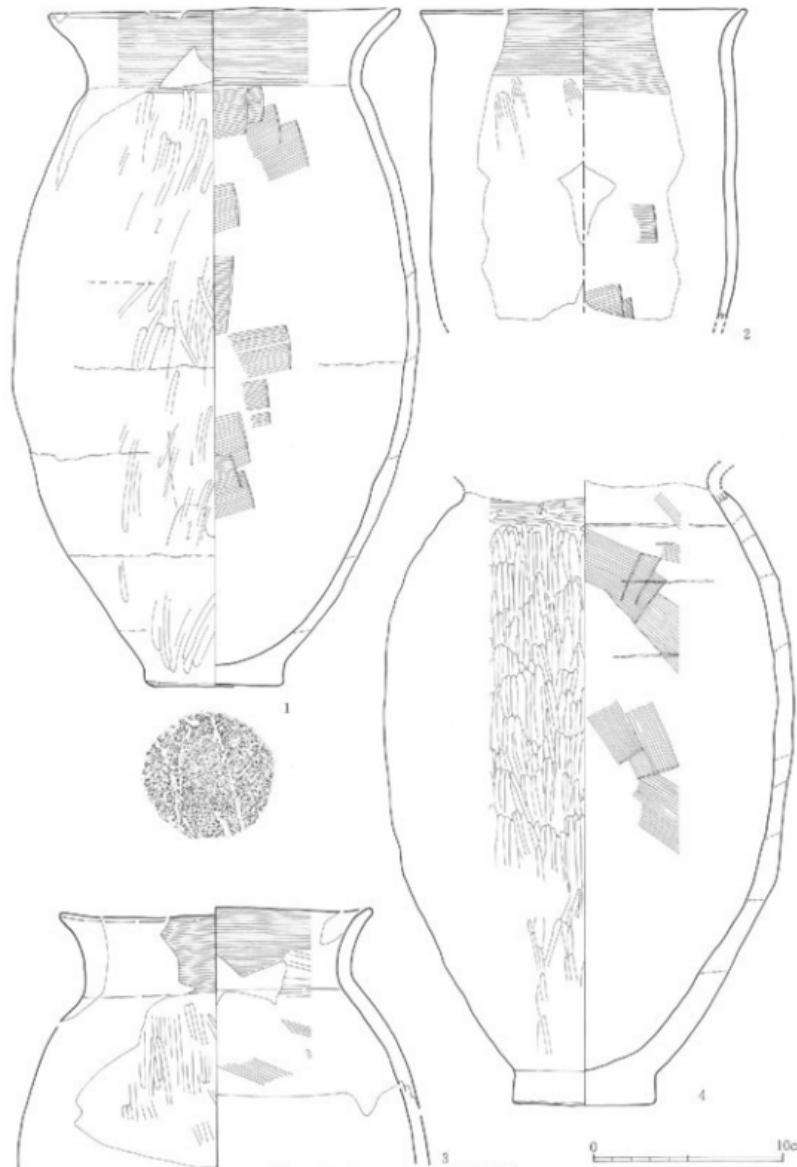


SI-01 貯蔵穴		
順位	土色・土性	備考
1	30YR 5/2	土色・土性: 黒褐色 備考: 炭化物粒子が質的に
2	30YR 4/3	土色・土性: 黑褐色 備考: 炭化物粒子が質的に
3	30YR 6/4	褐色色シート
4	10YR 4/3	10YR 4/3 黒褐色シート 備考: 土色・土性: 黑褐色 炭化物粒子が質的に
5	10YR 2/2	褐色色シート 炭化物多量
6	10YR 3/4	灰褐色色シート 炭化物粒子が質的に

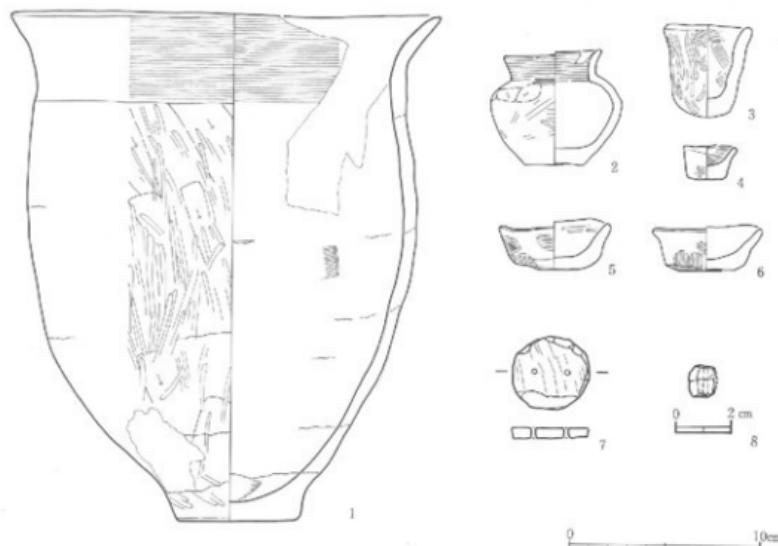
第136図 カマド付近平面・断面図



第137図 S I - 01出土遺物 (1)



第138図 S I - 01出土遺物 (2)



第139図 S I -01 出土遺物 (3) 7・8: 1/2

推定部分に焼土の詰った浅い土坑が検出された。これはカマドの燃焼部の残存とみられる。柱穴は、 P_1 ・ P_2 としたものが該当し、それぞれ深さ 17 cm・26 cm である。その他のビットは、いずれも浅く、柱穴ではない。貯蔵穴・土坑は検出されなかった。壁溝は全周するものと予想される。床面上には炭化材や炭化物が出土しており、火災にあった住居と考えてよい。

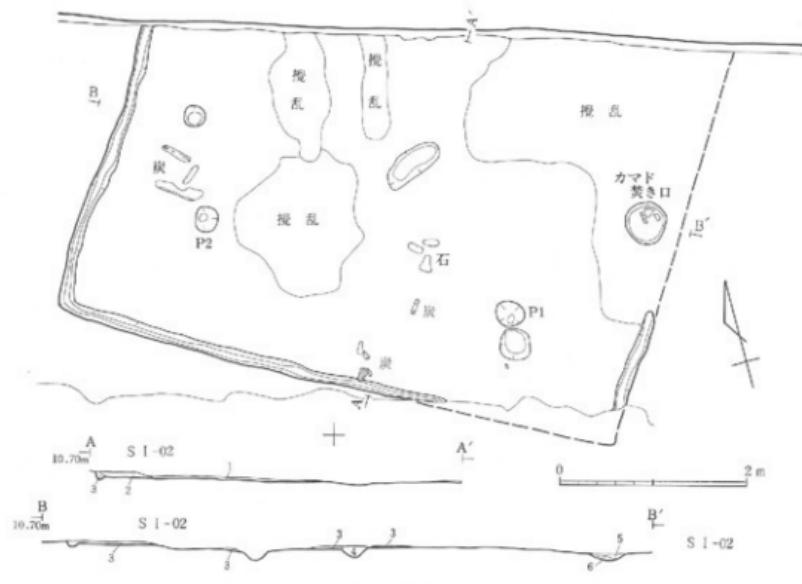
出土遺物は僅かで、土師器坏・弥生土器がある。坏は、燃焼部とみられる土坑と床面から出土したものである。弥生土器は床下の掘り方から出土している。燃焼部より炭化米・炭化種子が出土している。SI01 とほぼ同時期の住居跡と考えられる。

SI03 (第142図)

II区北部 (K-15 区) に位置し、極く一部を検出したに過ぎない。規模や特徴は不明である。直立する壁と壁溝が確認され、住居跡と推定しておく。遺物は、古墳時代とみられる土師器片が僅かに出土している。

SI05 (第143・144図)

I区東部 (O-9 区付近) に位置し、他の遺構との重複は認められない。攪乱坑や天地返しにより削平され、非常に残りの悪い遺構である。特に東壁は全く不明であり、床面上には新しい搅乱坑以外にも時期不明の不整土坑やビットにより切られている。規模は西壁が 4.12 m、南壁



SI-02 土層記
地層 土色・土性 細粒
1 10YR 3/3 (暗褐色シルト) 塗化物、鉄化物を含む
2 10YR 4/3 暗褐色シルト 塗化物少
3 10YR 4/4 暗褐色シルト 鉄化物少
地層 土色・土性 細粒
4 10YR 3/3 暗褐色シルト 暗褐色シルトブロック多量、塗化物少
5 10YR 3/4 暗褐色シルト 地上ブロック、塗化物多量、鉄化物少
6 10YR 4/4 暗褐色シルト 地上ブロック、塗化物多量

第140図 SI-02平面・断面図



第141図 SI-02出土遺物

3m以上で、壁高は残こりの良い場所で約15cmである。カマド・炉は検出できない。南西コーナーの床面上に、淡い焼土が検出された。ピットが5個検出されたが、柱穴ではない。壁溝も検出されなかった。こうした特徴から、この遺構は竪穴遺構と理解される。

出土遺物は少なく、土師器壺・ミニチュア土器がある。壺は有段で内面黒色処理をするものと無影で口縁が直立するものの2種が出土している。

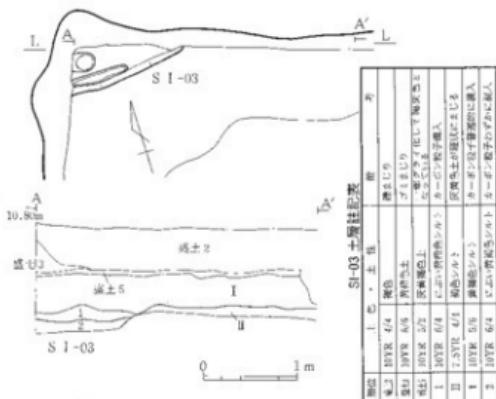
土坑（SK）

SK03（第145・146図）

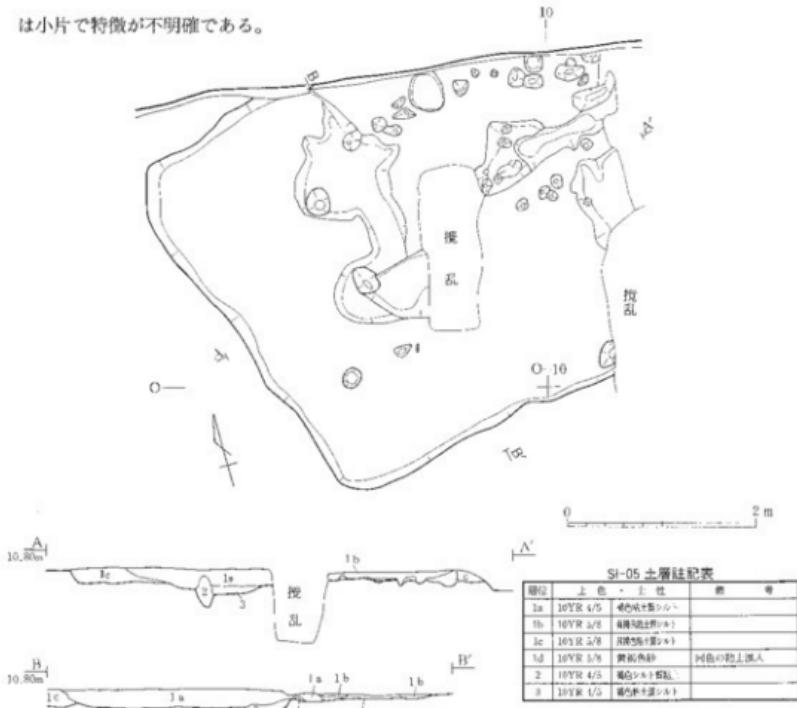
I区西部（N-4区）に位置し、ピット（P₆）に切られる。上部は天地返しにより削平されて

いる。規模は2.85m以上×1.36m、深さ0.18mで、略長方形を呈する。底面や壁面にはピットが検出された。

出土遺物は、土器壺壺・須恵器壺・弥生土器が出土している。壺は古墳時代中期の内湾する壺の系譜をひくものと考えられるが、口縁部は直立ぎみである。中期のものに比較して浅い。体部へ底部は内外面ともハケ調整で、ミガキや削りが認められない珍しい例であろう。須恵器は小片で特徴が不明確である。



第142図 S I-03、平面、断面図



第143図 S.I.-05平面・断面図



第144図 S I - 05 出土遺物

SK05 (第145図)

II区東部(E-25区)に位置し、重複は認められない。上部は天地返しにより削平されている。規模は1.35m×1.34m、深さ0.22mで、円形を呈している。

出土遺物は、土師器壺(内黒)・高壺・小型壺・甕があるが、図示できるものはない。

SK06 (第145図)

II区東部(E-26区)に位置し、SD03・04を切る。上部は天地返しにより削平される。規模は0.65m×0.44m、深さ0.22mで、不整方形を呈する。

出土遺物は土師器甕の口縁部1点であるが、図示できない。

SK07 (第145図)

II区東部(E-26ポイント)に位置し、SD03・04を切る。上部は天地返しにより削平されている。規模は0.74m×0.44m、深さ0.19mで、橢円形を呈する。遺物は出土していない。

SK08 (第145図)

II区東部(D-25区)に位置し、SD03・04を切る。上部は天地返しにより削平されている。規模は0.63m×0.42m、深さ0.19mで、不整橢円形を呈する。遺物は出土していない。

SK10 (第145・146図)

I区北部(P-7区)に位置し、SD13から北へ派生する溝に切られる。北側は、天地返しやゴミ穴により搅乱を受けている。規模は1.34m以上×0.96m、深さ0.21mで、不整形である。北端では、さらに幅が広がり伸びていくようである。

出土遺物は、土師器小型甕あるいは小型瓶とみられる土器が1点出土している。

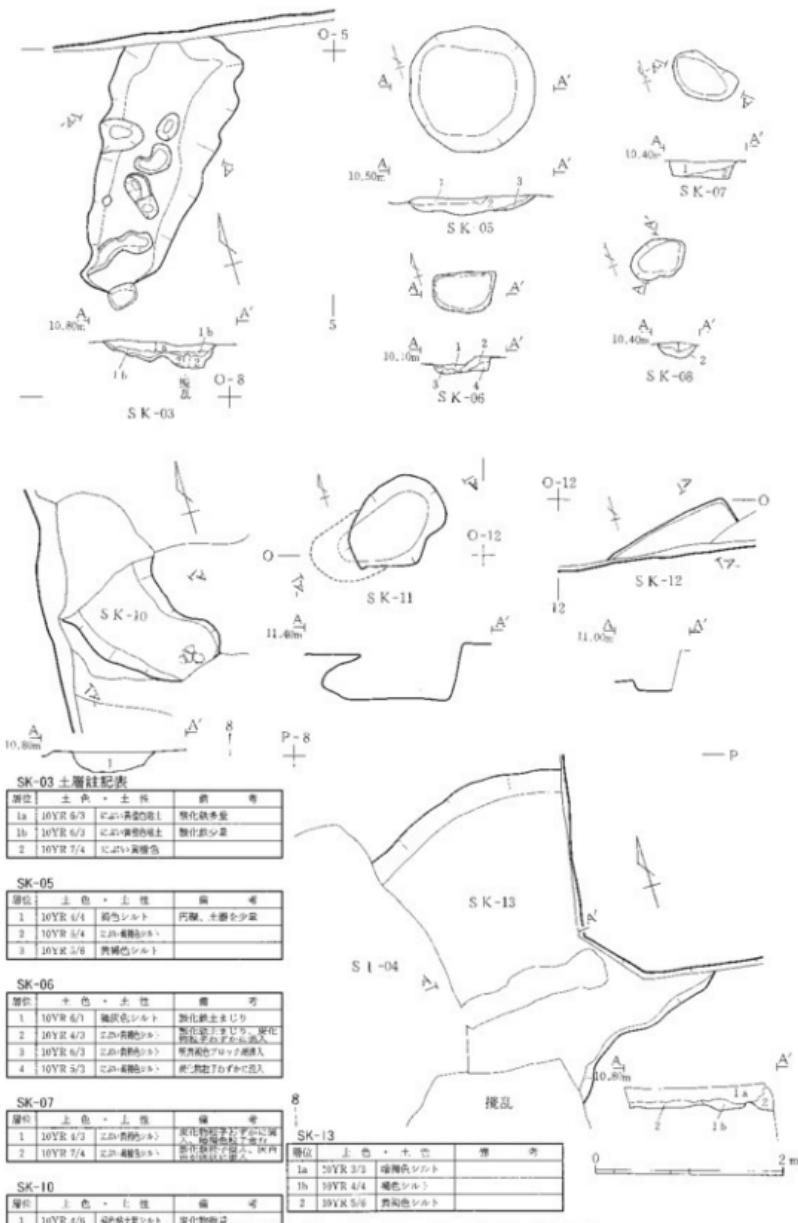
溝跡(SD)・畝状遺構

SD03 (第147・150図)

II区東部に位置し、Ⅷ層上面で検出した。SK06～08に切られ、4号畝状遺構(溝i-j)・SD04を切る。規模は、検出長約12m、幅1.1m、深さ0.16mを測る。方向は約N-37.5°-Eで、南端部で若干方向が変わるものである。

出土遺物は、土師器片少量と石製模造品の原石?1点である。無彩で口縁部が外傾する壺(第150図1)や有段丸底で黒色処理を施す壺などがある。

SD04 (第148・150図)



第145図 SK-03~13平面・断面図

II区東部に位置し、埋没河川上にある。溝として扱ったが、埋没河川の凹部の可能性もある。底面下には基本層Ⅷ層の2次堆積とみられる黄褐色シルト層、さらに下位は砂質シルト・砂層となる。規模は検出長約13m、幅4.6m、深さ0.7mを測り、断面は皿状に近い。埋土は、薄層が幾重にも重なるようで、いずれも自然堆積を示す。方向はゆるい弧を描くが、およそN-52.5°-Eである。

出土遺物は、土師器壺・甕、砥石、石製模造品(円板・原石)、スクレイパーが出土している。第150図2の壺は、歯状遺構との関係から直接溝跡埋土として扱えないが、溝跡の下限を予想できる資料であろう。また、同図4の甕は壁面直上で潰れた状態で出土したものである。古墳時代中期のものと考えられる。

SD05(第149・150図)

II区西部に位置し、SA01・SB02~05・1号歯状遺構に切られる。上部は、天地返しにより削平されている。溝として扱ったが、埋没河川上にあり河川の凹部の可能性もある。SD04と同様、ここでも底面下にはⅧ層の2次堆積とみられる層がある。規模は検出長約11m、幅約4.2m、深さ0.23mを測る。断面形は皿状を呈す。方向は約N-30°-Wである。

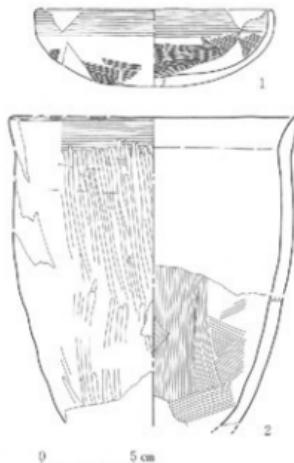
出土遺物は、土師器壺・ミニチュア土器、須恵器甕、剝片(チップ)がある。壺は第150図8のように有段丸底と予想されるものが多いが、内面黒色処理をするものが主体とはなっていない。同図11の壺は、表面・胎土とともに赤色を呈するものである。

SD20(第151・150図)

II区西部に位置し、SA01・SB02~05・SD08・1号歯状遺構に切られる。上部は、天地返しにより削平されている。これも溝として扱ったが、埋没河川上にあり河川の凹部の可能性もある。SD05と同様、底面下にはⅧ層の2次堆積とみられる層がある。規模は検出長約18.5m、幅約5m、深さ0.37mを測り、断面形は皿状を呈す。方向は約N-30°-Wである。

出土遺物は僅かで、土師器高壺、須恵器甕?・甕、石製模造品(劍形・白玉)、剝片がある。いずれも、古墳時代中期とみられ、後期の遺物はないようである。

3号歯状遺構(第152図)



第146図 SK-03・10出土遺物

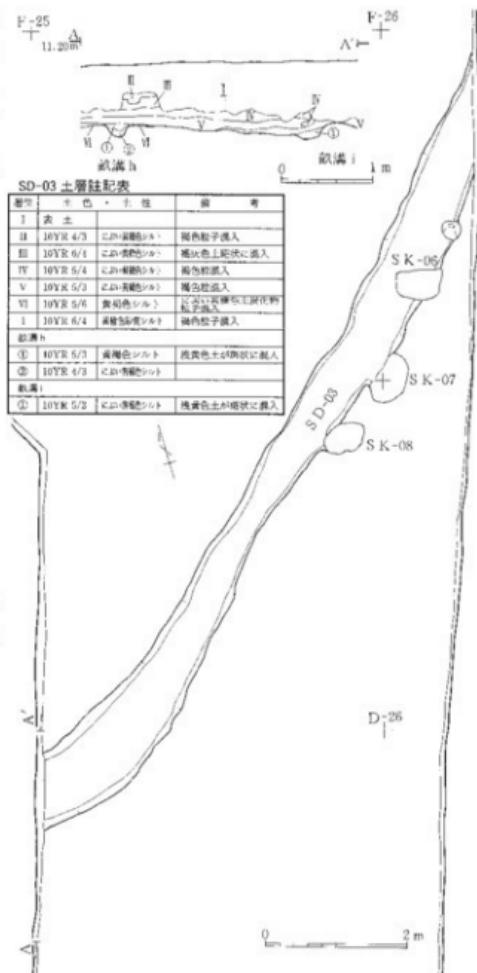
およそ並行する細い溝が3条以上検出された場合、これを畠状遺構とし、報告する。この場合、畠跡と断定できないものの、その可能性があることから溝跡間の平坦部分も含めて一つの遺構と理解したい。各溝跡の名称は小文字のアルファベットを付して呼ぶことにする。

3号畠状遺構は、II区東部に位置し、4号畠状遺構に切られ、SD04を切る。上部は、天地返しにより削平を受けている。規模は、溝b・cに基づくと南北約11.2m、東西は5.8m以上を測る。東西にさらに広がる。溝跡は溝a～dで構成され、長さ約11.2m、幅0.2～0.7m、深さおよそ0.1～0.4mを測る。方向はやや不規則で、N-0°～11°-Eとばらつきがある。溝跡の深度は、中央部が深く両端が浅くなる特徴がある。溝跡間の平坦部では不規則な小ピット群が検出されたが、SD04と重複する部分では明確にできなかった。

出土遺物は、古墳時代の甕細片が少量出土しているが、溝bの南部で比較的多い。

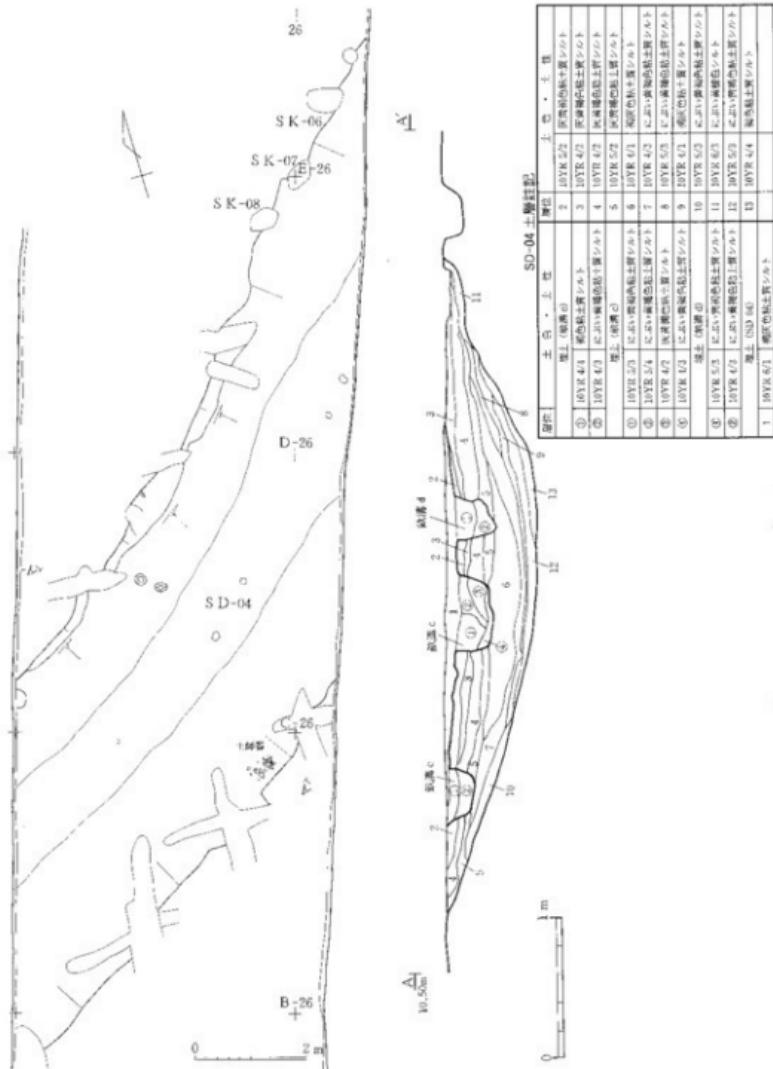
4号畠状遺構（第152図）

II区東部に位置し、SD03に切られ、SD04・3号畠状遺構を切る。上部は天地返しにより削平を受けている。規模は南北約10m・東西6m以上で、この範囲におよそ平行する溝が7条検出された。溝跡はe～kで構成され、長さ約6m、幅0.2～0.4m、深さ0.03～0.2mを測る。



第147図 SD-03平面・断面図

溝跡の間隔はおよそ 1.4~1.5 m である。溝跡は弧状を呈しているが、その方向は約 N-88°-W である。この 4 号及び前述の 3 号とともに、SD04(埋没河川?) を意識した立地を示しているようと思われる。出土遺物はない。

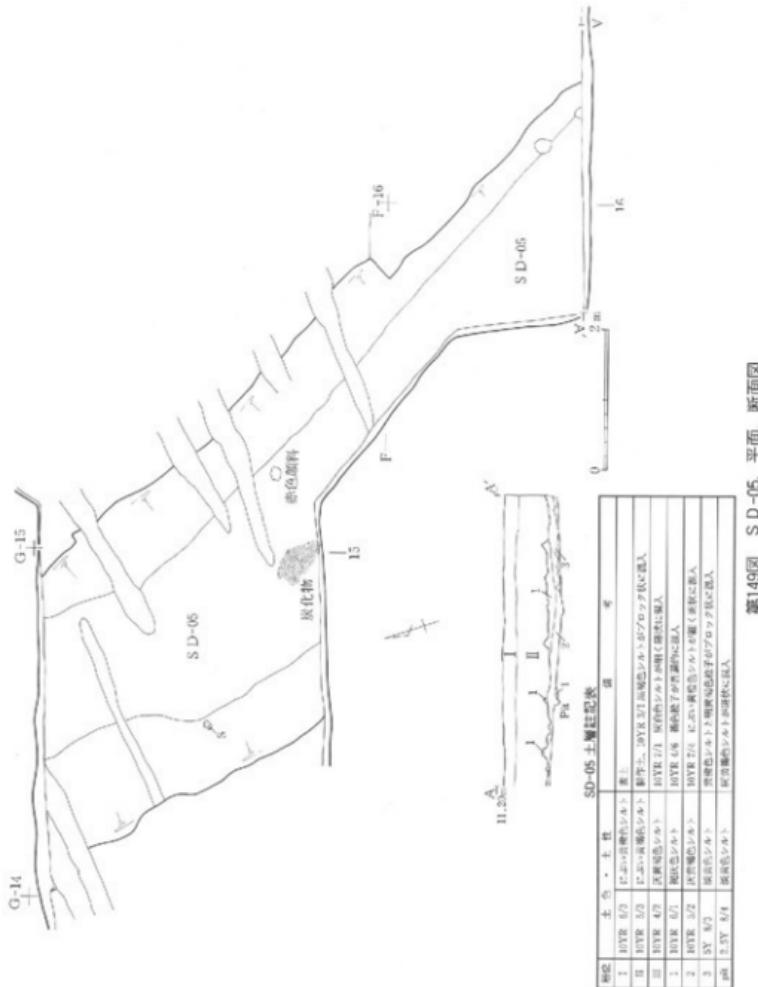


第148圖 SD—04平面圖・斷面圖

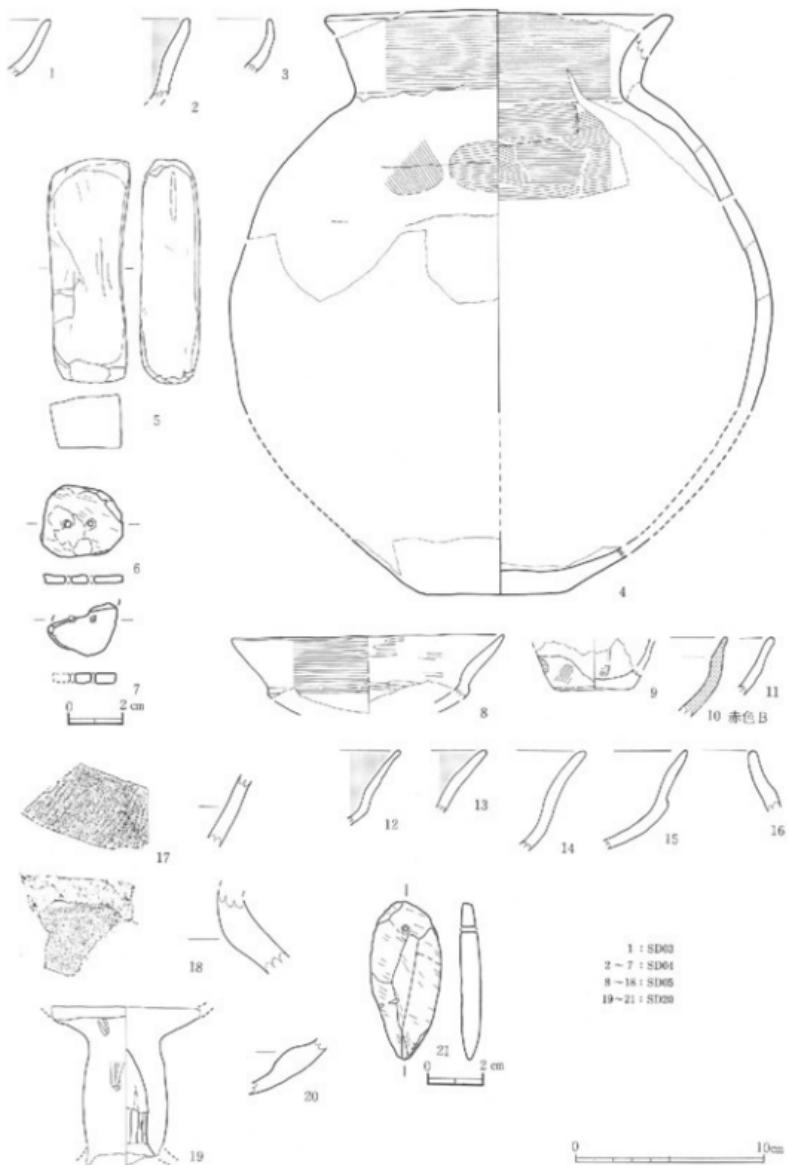
性格不明遺構 (SX)

SX01 (第 153 図)

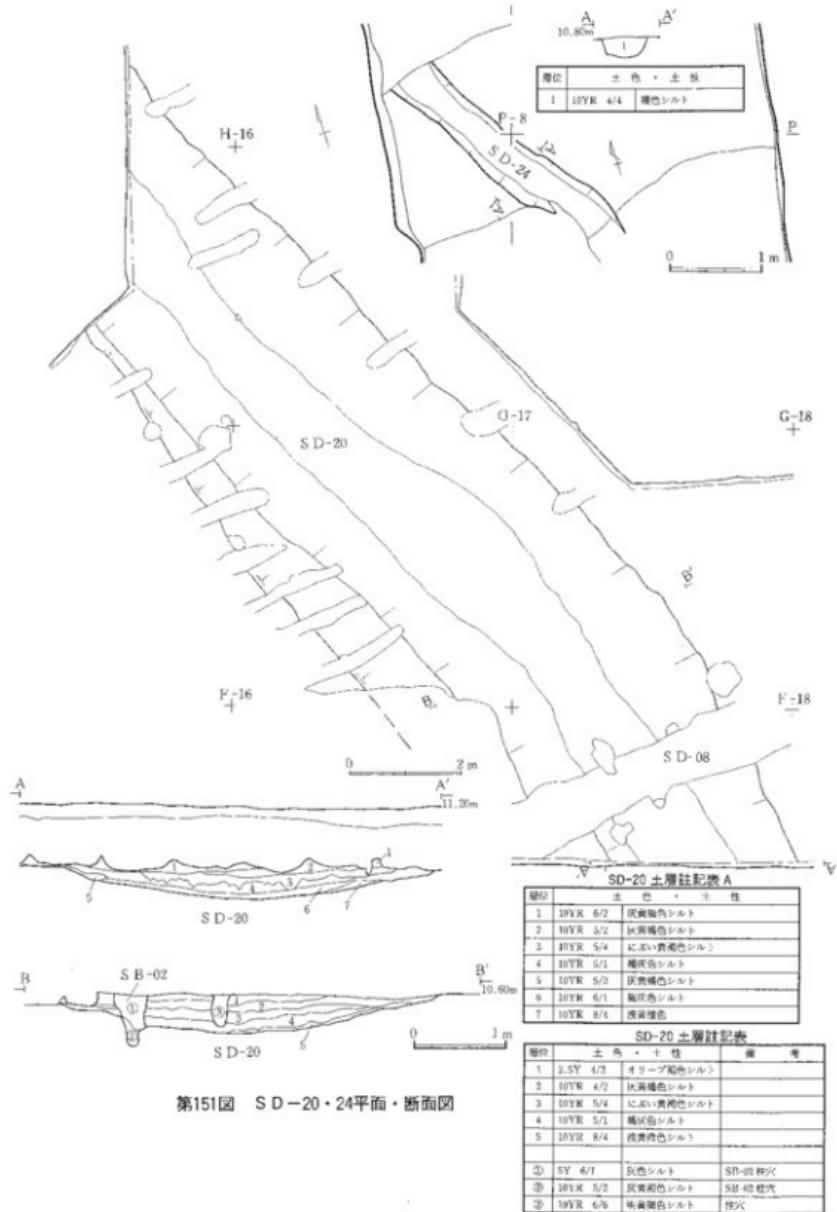
I 区東部 (0-11・12 区) に位置し、5 号畝状遺構 (溝 b・c) に切られる。また、II 区から続くとみられる埋没河川跡上に位置している。規模は 3.23 m × 2.21 m、深さ 0.07 m で、形状は不定形である。

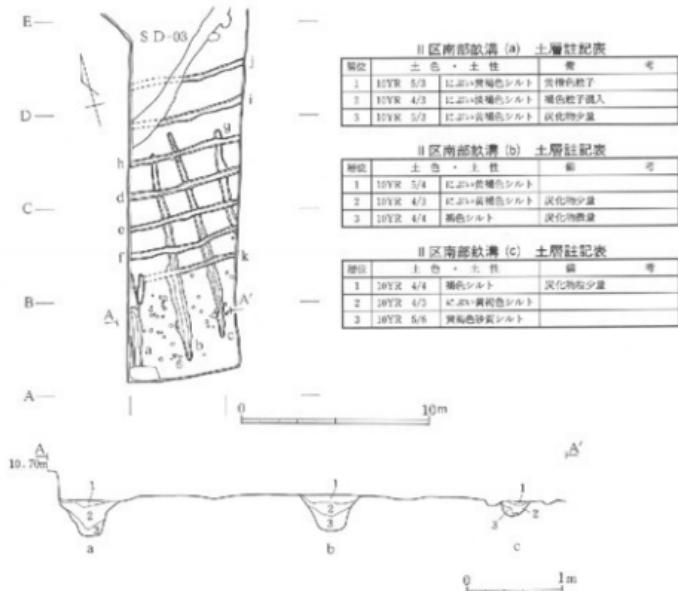


第149図 SD-05、平面、断面図



第150図 SD-03・04・05・20出土遺物 6・7・21: 1/2





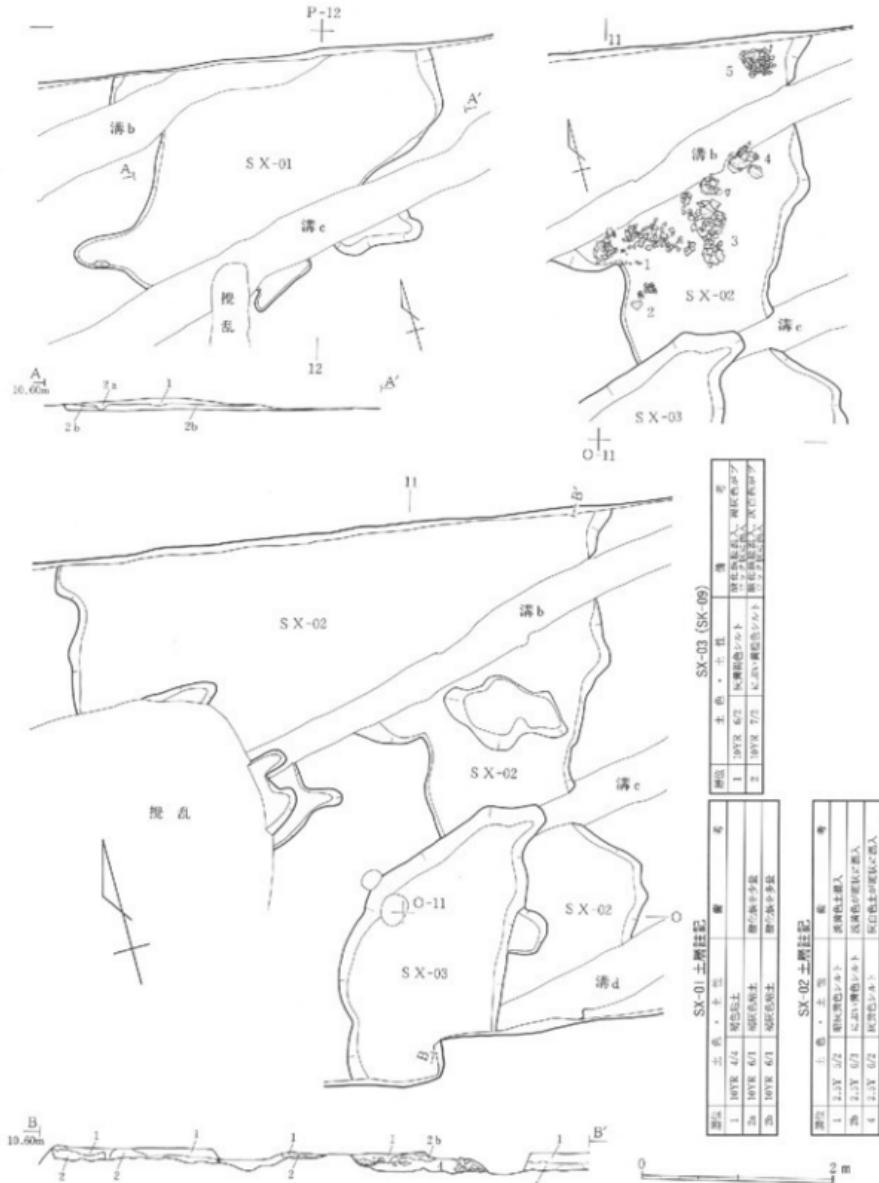
第152図 鉱状遺構、平面・断面図（II区）

出土遺物はない。後述する SX02・03 と一連のものである。

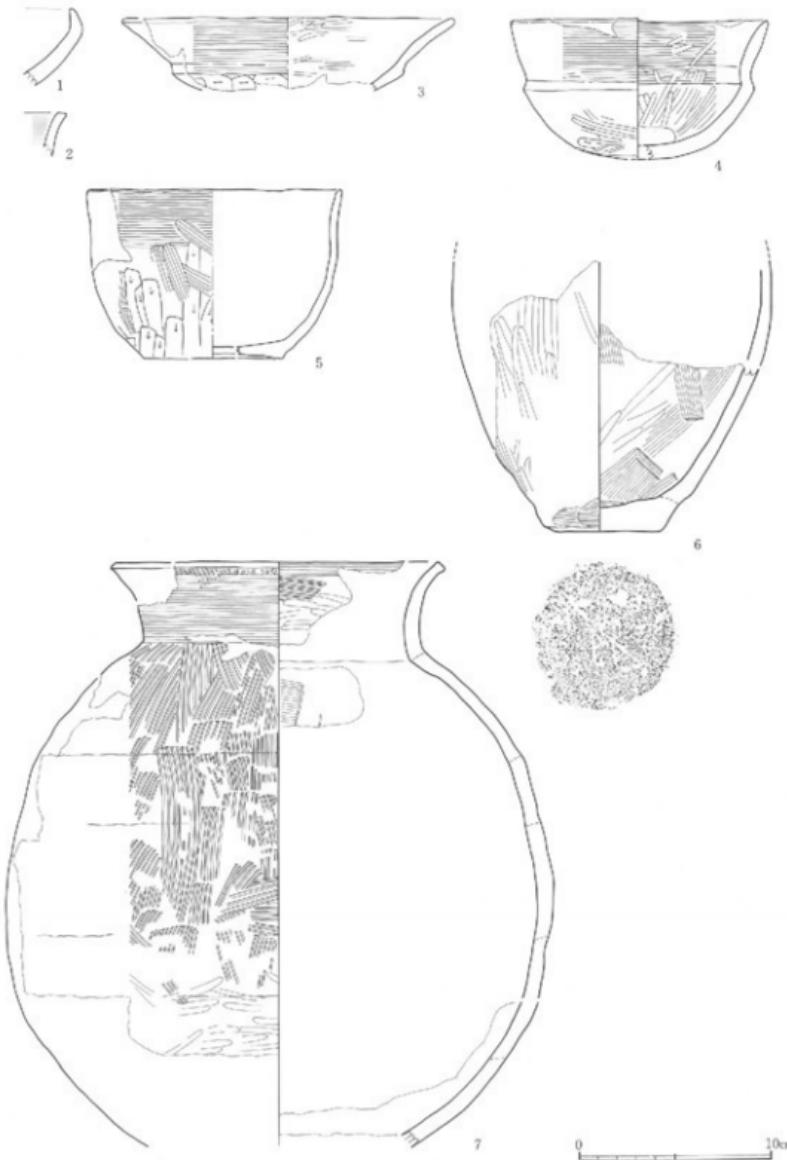
SX02 (第 153~156 図)

I 区東部 (0~10~11 区付近) に位置し、5 号鉱状遺構 (溝 a~d) に切られる。上部は、天地方返しにより削平され、また、新しい土坑 (鉄塔の基礎坑など) により攪乱を受けている。規模は東西約 5.5 m × 南北 5.6 m 以上、深さ 0.04~0.19 m で、さらに調査区外に伸びる。形状は不定形で、調査時にもプランは不明瞭であった。東壁寄り底面には不定形の浅い凹部があり、この付近で、甕 6 個体・壺 4 個体・鉢 1 個体 (実測可能分)・須恵器壺片 1 点が、集中的に出土している。

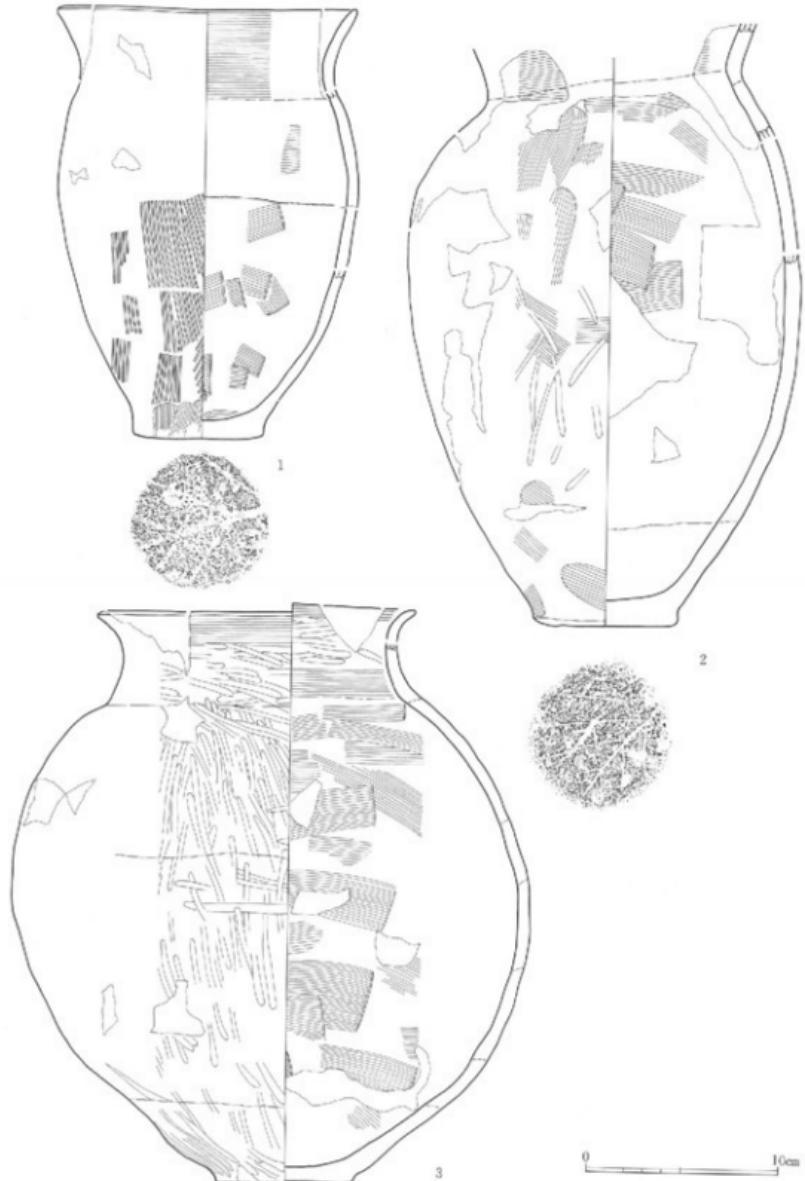
出土遺物は上述のとおりで、甕は長胴形と球胴形の 2 種類があり、底部に木葉痕をもつものがある。甕体部の調整は粗密があるが、最終調整は磨きが多い。壺は、有段丸底のものが多いが、第 154 図 1 のように口縁部が屈曲しやや内傾するものもある。第 154 図 2~7 の壺や甕の口縁端部が角頭状を呈するものがある。この特徴は古墳時代中期後半~後期頃に時折みかける。



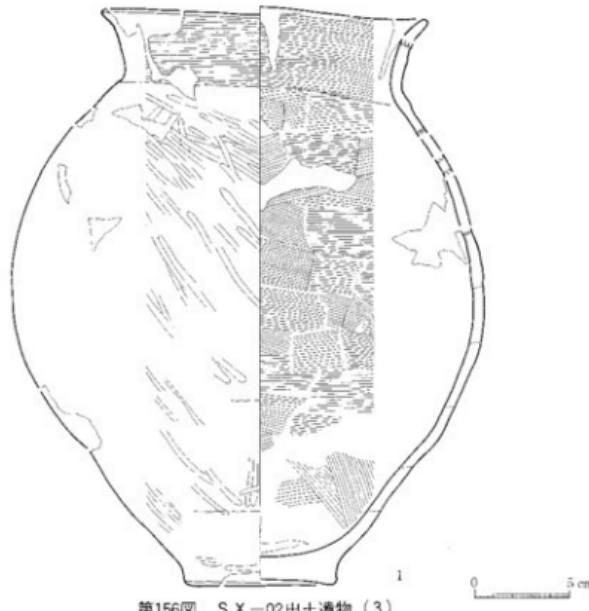
第153図 SX-01・02・03平面・断面図



第154図 S X-02出土遺物 (1)



第155圖 SX-02出土遺物（2）



第156図 SX-02出土遺物（3）

第155図2の壺胎土には金雲母が目立つ。これらの土器群は、底面あるいは底面よりやや浮いた状態で出土したが、一括性の高いものと判断される。祭祀行為に関わるものであろうか。

SX03（第153図）

I区東部（N-10・11区付近）に位置し、5号畝状遺構（溝c・d）に切られる。SX02との重複関係は明確でない。規模は2.55m以上×1.16m以上、深さ0.09～0.15mで、形状は不定形である。

出土遺物はなく、また、SX02より浅い点から独立して扱ったが、あるいはSX02と一体のものかもしれない。

(2) 奈良・平安時代

奈良・平安時代に属する遺構は、住居跡1軒・土坑跡1基・溝跡3条・畝状遺構5基を検出した。SD06としたものは、1号畝状遺構の一部と理解し欠番とする。

住居跡（SI）

SI04（第157～161図）

I 区中央（0-7・8 区）に位置し、SK13・SD24 を切る。南東部は電力鉄塔の基礎坑により一部破壊されているが、他は削平や搅乱を受けておらず極めて保存状態が良い。南北に拡張し、床を上げて改築を行っている。規模は、新期が $3.94\text{ m} \times 3.87\text{ m}$ ・壁高約 58 cm 前後を測る。形状は不整方形である。カマドは東壁南寄りに位置するが、残存状況は悪く、故意に破壊したものであろうか。内部には支脚に転用されたとみられる須恵器壺（第 160 図 8）が出土した。煙道はトンネル状を呈し天井部が残っている。長さ 1.65 m、幅 0.36 m、深さ 0.35 m（煙出し部深さ 0.48 m）を測る。床面は古期の住居を埋めて床面とし、その後 2 回の貼床を行っていることから、新期床面は計 3 回の変遷が認められる。5 層上面（床 1）、6 a 層上面（床 2）、7 a 層（床 3）の 3 面である。このうち、床 3 では、東壁寄りにカマド焚き口焼土や袖の基底部が若干検出された。柱穴・貯蔵穴・壁溝は不明である。床 1 の上面では炭化物層あるいは炭化物を含む層（2 a・3 a・3 c 層）が認められたことから、住居の最終段階あるいは廃絶後に火災にあった可能性もある。

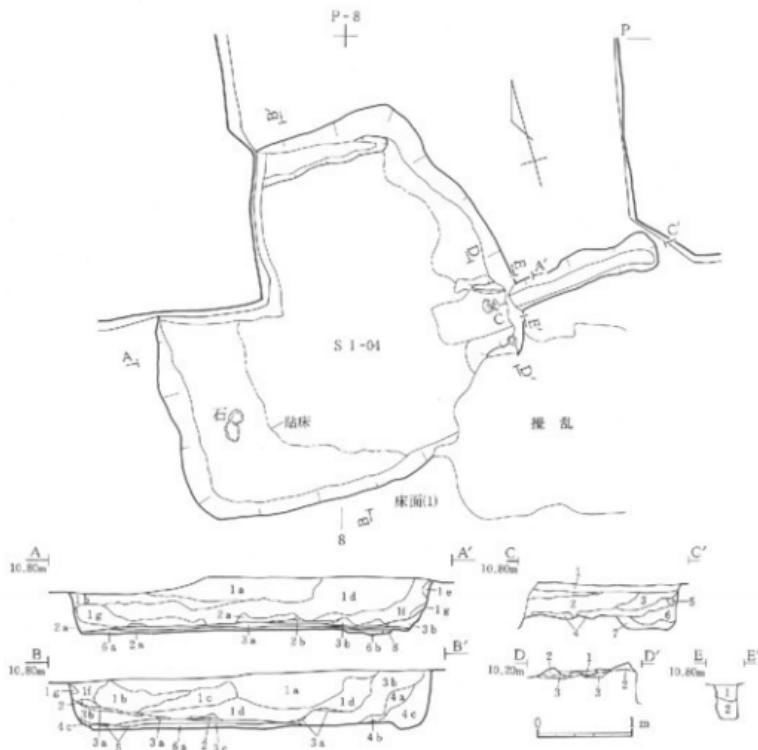
古期の住居跡は、新期のものより小さく、深い。その規模は、検出面で $3.47\text{ m} \times 3.24\text{ m}$ 、壁高推定約 74 cm を測る。形状は方形である。カマドは東壁やや南寄りに位置するが、残存状況は悪い。煙道の特徴は前述したとおりで、改築した痕跡はなく古期のものを新期段階で再利用している。床面（床 4）は平坦で、南壁よりビット、不定形の凹地、カマド前と南脇に炭化物の分布が認められた。また、カマド手前より鍬鋸先・鉄鎌が出土し注意をひいた。古期段階でも柱穴・貯蔵穴は不明であり、壁溝はない。古期段階は、奈良時代の可能性もある。

出土遺物は、土師器壺・小型壺・長胴壺・須恵器壺・高台付壺・壺、鉄器（鍬鋸先・鉄鎌・不明）、弥生土器がある。第 160 図 1・2 は土師器壺で、ロクロ調整？後いずれも体部下端に削り調整を加えている。3・4 は土師器壺で、3 は小型、4 は長胴壺であろう。5～14 は須恵器壺で、いずれも底部切り離しは回転ヘラ切りで、9・13 は体部下端に削り調整を加えている。8 は、新期段階（床 1・2 に対応）のカマド支脚に転用されたとみられる壺で、外面には 7 条の沈線が巡り、内底面には浅く円線が認められる珍しいものである。沈線は金属器を模倣したものであろうか。15・第 161 図 1～5 は鉄器である。15 は鍬鋸先の完形品である。第 161 図 1・3 は鉄鎌であろう。2 は、図上端に木質が残り、下端は尖っており錐のような製品が考えられる。4・5 は性格不明であるが、ベルトの鉗金具あるいは釘などが予想される。

土坑（SK）

SK12（第 166 図）

I 区東端（N-12 区）に位置し、5 号畝状遺構に切られ、6 号畝状遺構を切る。上部は天地返しにより削平されている。規模は北辺 1.4 m 以上、東辺 0.3 m 以上である。深さは 0.1 m 前後で、底面は平坦である。方形の土坑と理解したが、豊穴住居跡の可能性もある。遺物は出



SI-04 土層記表

部位	土色・土性	堆 積 物
1a	10YR 5/8 黄褐色シルト	堆積物少少
1b	10YR 4/8 砂質粘土シルト	堆積物少少
1c	10YR 5/8 黄褐色粘土シルト	堆積物少少
1d	10YR 5/8 黄褐色粘土シルト	堆積物少少
1e	10YR 5/8 黄褐色粘土シルト	堆積物少少
1f	10YR 5/8 黄褐色粘土シルト	堆積物少少
1g	10YR 5/8 黄褐色粘土シルト	堆積物少少
2a	10YR 4/8 黄褐色粘土シルト	堆積物少少
2b	10YR 4/8 黄褐色粘土シルト	堆積物少少
2c	10YR 4/8 黄褐色粘土シルト	堆積物少少
2d	10YR 4/8 黄褐色粘土シルト	堆積物少少
2e	10YR 4/8 黄褐色粘土シルト	堆積物少少
2f	10YR 4/8 黄褐色粘土シルト	堆積物少少
2g	10YR 4/8 黄褐色粘土シルト	堆積物少少
3a	10YR 4/8 黄褐色粘土シルト	堆積物少少
3b	10YR 4/8 黄褐色粘土シルト	堆積物少少
3c	10YR 4/8 黄褐色粘土シルト	堆積物少少
3d	10YR 4/8 黄褐色粘土シルト	堆積物少少
3e	10YR 4/8 黄褐色粘土シルト	堆積物少少
3f	10YR 4/8 黄褐色粘土シルト	堆積物少少
3g	10YR 4/8 黄褐色粘土シルト	堆積物少少

SI-04 深道東西土層記表

部位	土色・土性	堆 積 物
1	10YR 5/3 黄褐色細粒土質	
2	10YR 6/4 黄褐色細粒シルト	
3	10YR 5/4 黄褐色色シルト	地土ブロックを含む
4	10YR 3/3 砂質地土質シルト	地土ブロックを含む
5	10YR 5/6 黄褐色シルト	
6	10YR 3/4 黄褐色地土質シルト	地土ブロックを含む
7	10YR 4/6 黄褐色地土質シルト	地土ブロックを含む

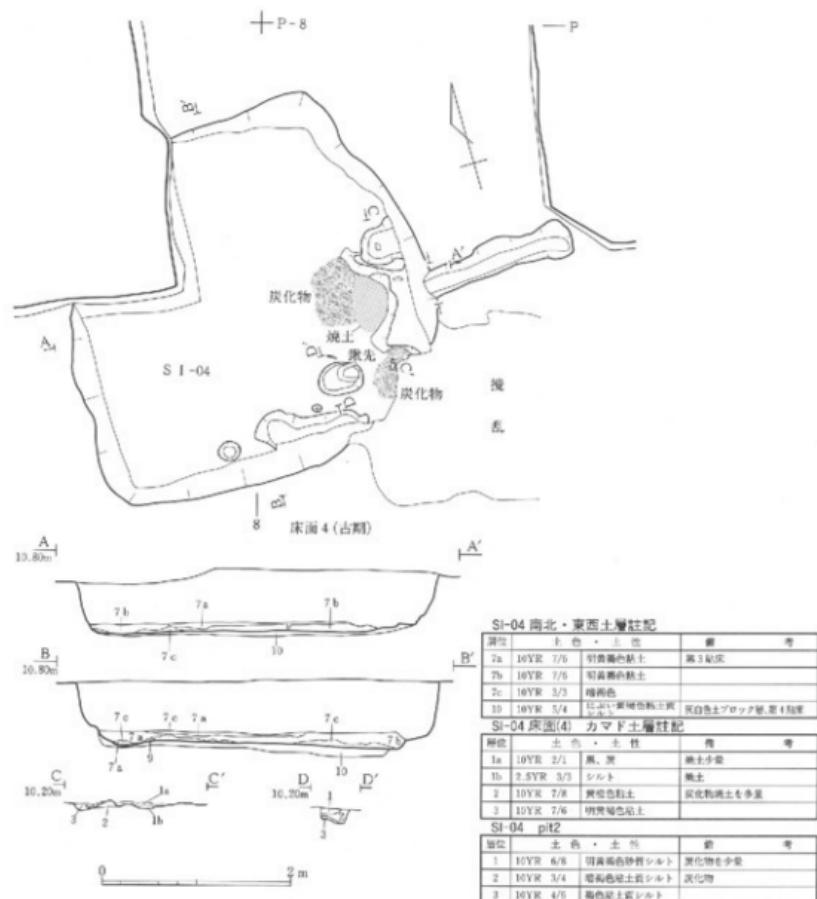
SI-04 カマド土層記表

部位	土色・土性	堆 積 物
1	10YR 2/1 塚化物	地土を含む
2	10YR 4/4 黄褐色地土質シルト	
3	10YR 8/2 成黄褐色粘土	

SI-04 深道南北土層記表

部位	土色・土性	堆 積 物
1	10YR 5/3 黄褐色細粒土質	地土をブロック状に含む
2	10YR 6/4 黄褐色色シルト	地辺部が構成している

第157図 SI-04平面・断面図(1)



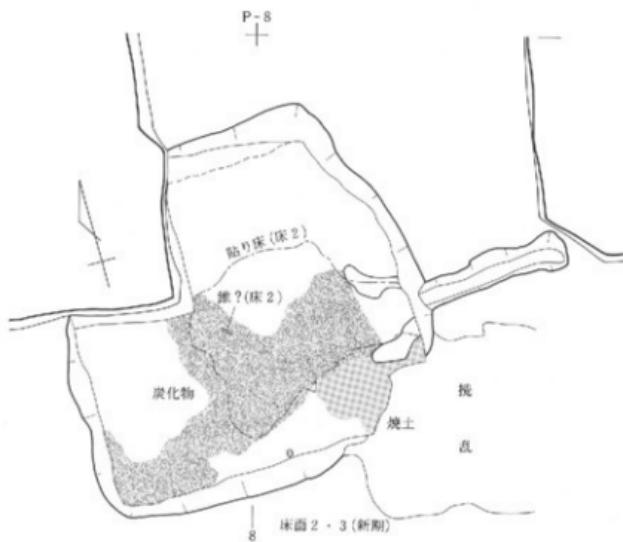
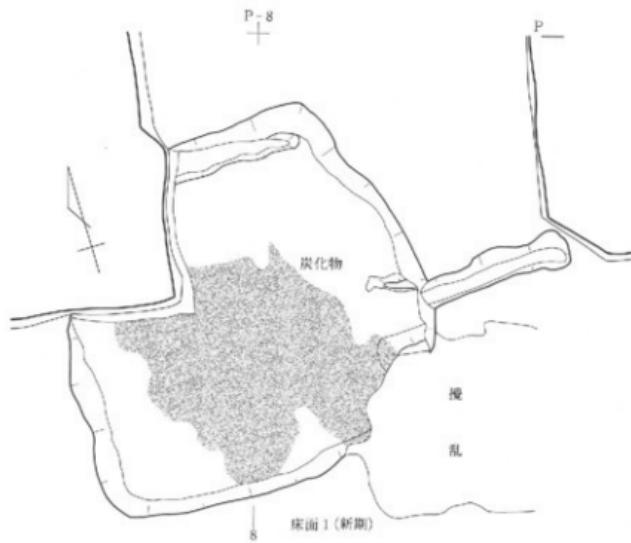
第158図 SI-04平面・断面図（2）

上していない。遺構の重複関係から、奈良～平安時代のものと考えられる。

溝跡 (SD)

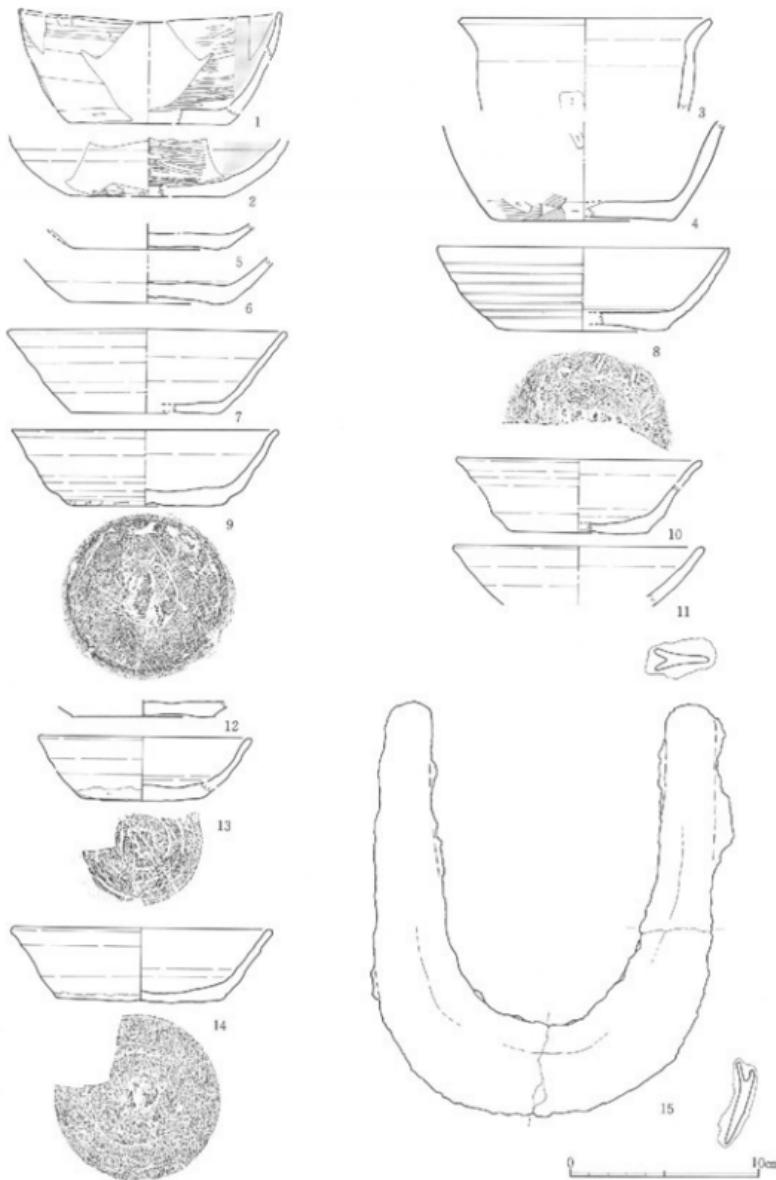
SD07 (第162図)

II区西部 (E・F-18区) に位置し、SD08・09を切る。上部は天地返しや搅乱坑により、削平されている。規模は検出長約7.2m、幅0.4～0.5m、深さ0.03～0.19mを測る。方向は南北で真北に近いが、緩く弧状を呈している。

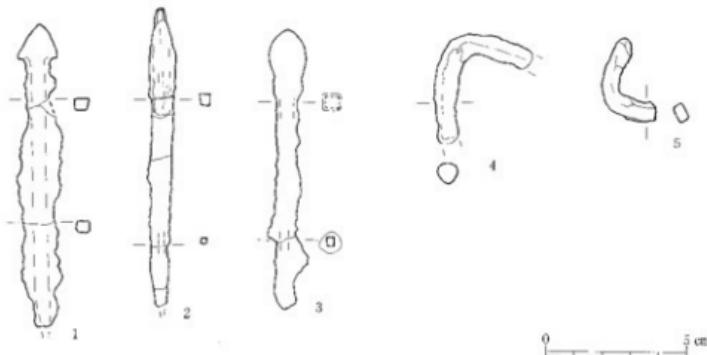


第159図 S1-04平面・断面図 (3)





第160図 S I - 04出土遺物 (1)



第161図 S I - 04出土遺物（2）

出土遺物は土師器片(非クロクロ)、須恵器壺片がある。図示できるものはない。重複関係から平安時代の溝跡と考えられる。

SD08 (第 162・163 図)

II区西部 (E-16・17、F-18 区) に位置し、SD09・2号畠状遺構を切り、SB01～05・SD07 に切られる。上部は、天地返しにより削平をうける。規模は検出長 13.3 m 以上、幅 1 m 前後、深さ 0.17～0.46 m を測り、西側で序々に深度を増していく。方向は南北方向から西方へ屈曲し、N-9°-E から N-81°-E へ変化する。断面形は鍋底状に近い。

出土遺物は、土師器鉢・壺、須恵器壺・鉢・短頸瓶・長頸瓶？・壺、弥生土器がある。第 163 図 1 は口縁部が屈曲する土師器鉢で、管見では類例がない。内面は淡青色を呈し、底部に木葉痕がある。2 は土師器壺で、底部に木葉痕がある。3 は同一個体とみられる壺で、底部切り離しは回転ヘラ切りである。4 は短頸壺。5 は口縁部が内側に屈曲する鉄鉢形鉢である。6・7 は壺体部破片である。3～7 は、いずれも須恵器である。遺物から判断して、奈良時代の溝跡である。位置関係から、後述する 2 号畠状遺構を区画していた可能性もある。

SD25 (第 168・169 図)

1 トレンチ西部 (J-K-11 区) に位置し、7 号畠状遺構に切られる。上部は、天地返しにより削平をうける。規模は検出長 1.8 m、幅約 0.7 m、深さ約 0.2 m を測る。方向は東西を示し、N-82°-E である。また、規模を減じる溝跡が南へ伸びる。方向はほぼ真北を示す。断面形は鍋底状を呈する。

出土遺物は、土師器壺、須恵器壺がある。第 169 図 2 は丸底風平底の内黒壺である。3・4

は須恵器壺底部片である。3は切り離し不明で、回転ヘラ削り調整を施す。4は明確でないが、回転ヘラ切り？後ナデ調整を施しているものと思われる。これらの遺物の特徴から、奈良時代の溝跡と考えられる。

1号畠状遺構（第164・165図）

II区西部に位置し、SA01・SB05に切られ、SD05・09・20を切る。上部は、天地返しにより削平を受けている。規模は南北（溝a～n間）16.7m、東西（溝c）17.2m以上を測る。東側にさらに広がり、北側へも広がる可能性がある。溝跡はa～nの14条あり、南側では間隔が不規則である。長さは最長のもので17.2m以上、幅は0.3m前後が多く、深さは0.2～0.3mで両端部が浅くなっている。方向は北部のもので、N-75°～77°-E、南部のものでN-80°～88°-Eである。

出土遺物は、土師器高壺・小型壺、須恵器壺、石製模造品、種子、昆虫（羽）がある。第165図1・2は古墳時代中期の高壺と小型壺であろう。3・4も中期の石製模造品で、円板と剣形のものである。須恵器壺は図示できないが、底部切り離しが回転ヘラ切りのよう、奈良・平安時代のものと考えられる。SI04と関連する可能性もある。

2号畠状遺構（第164図）

II区中央部に位置し、SD08・SB01に切られ、SI01を切る。上部は、天地返しにより削平を受けている。規模は南北8.7m以上、東西約18mと推定される。溝跡はa～gの7条あり、いずれも深い部分が削平を免れて残ったものと考えられる。また、溝gは方向を異にするが、特徴が類似していることから、この遺構の一部と理解した。長さは最長の溝で5.4m、幅は0.3m前後、深さは0.1m未満のものが多い。方向は、N-74°～87°-Eでややばらつきがある。

出土遺物は、非クロロの土師器片が少量ある。

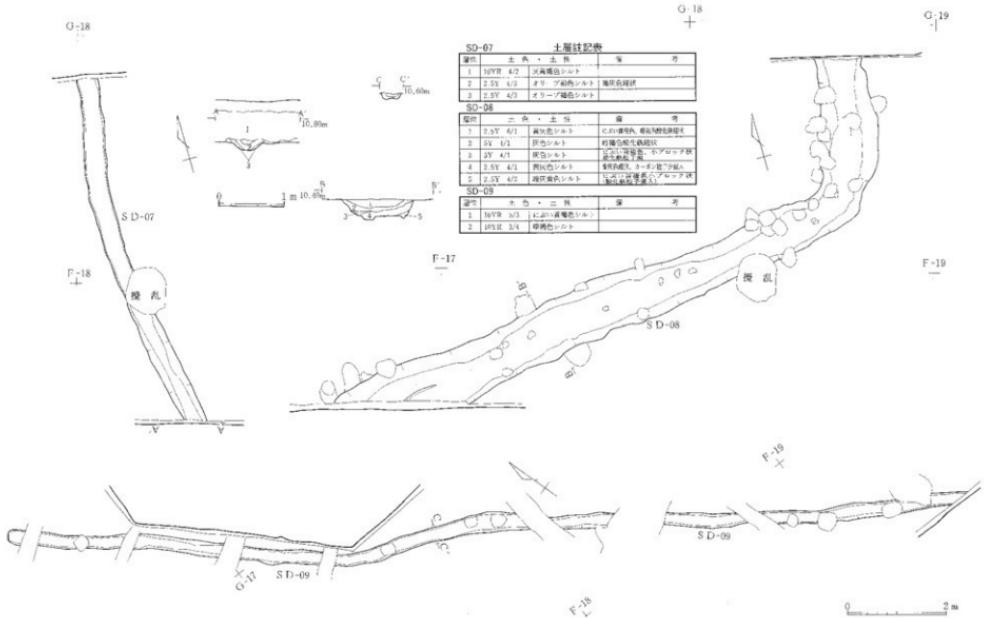
5号畠状遺構（第166・167図）

I区東部に位置し、SD14に切られ、SX01～03・SK11・12・6号畠状遺構を切る。上部は天地返しにより削平され、溝bは攪乱を受けている。規模は南北8m以上、東西10m以上とみられる。溝跡はa～eの5条あり、ほぼ等間隔で並ぶ。西辺の溝端がおよそ削っている。長さは最長の溝（溝d）で約9m、幅は0.2～0.7m、深さ0.1～0.15mである。方向はN-74°～80°-Eで、各溝間の振れ幅は少ない。

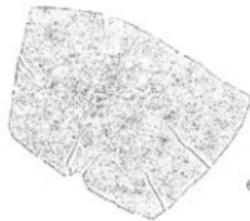
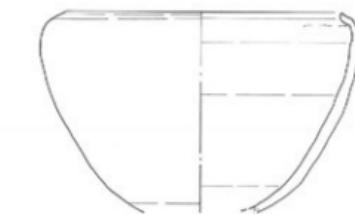
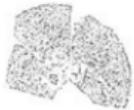
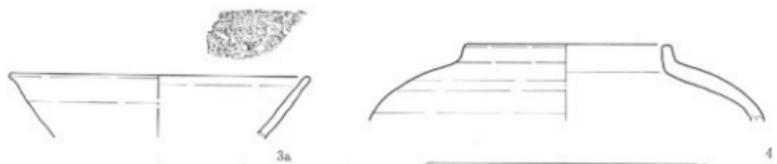
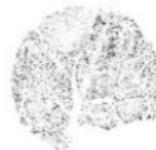
出土遺物は土師器壺・高壺・甕がある。第167図1は住社式の壺、2は南小泉式の高壺と考えられ、溝bから出土した。甕は図示できないが、ロクロ使用のもので溝cから出土している。この甕破片から、平安時代の遺構であろう。

6号畠状遺構（第166図）

I区東部位置し、5号畠状遺構・SK12に切られる。SK11との重複は明確ではないが、この



第162図 SD-07・08・09平面・断面図

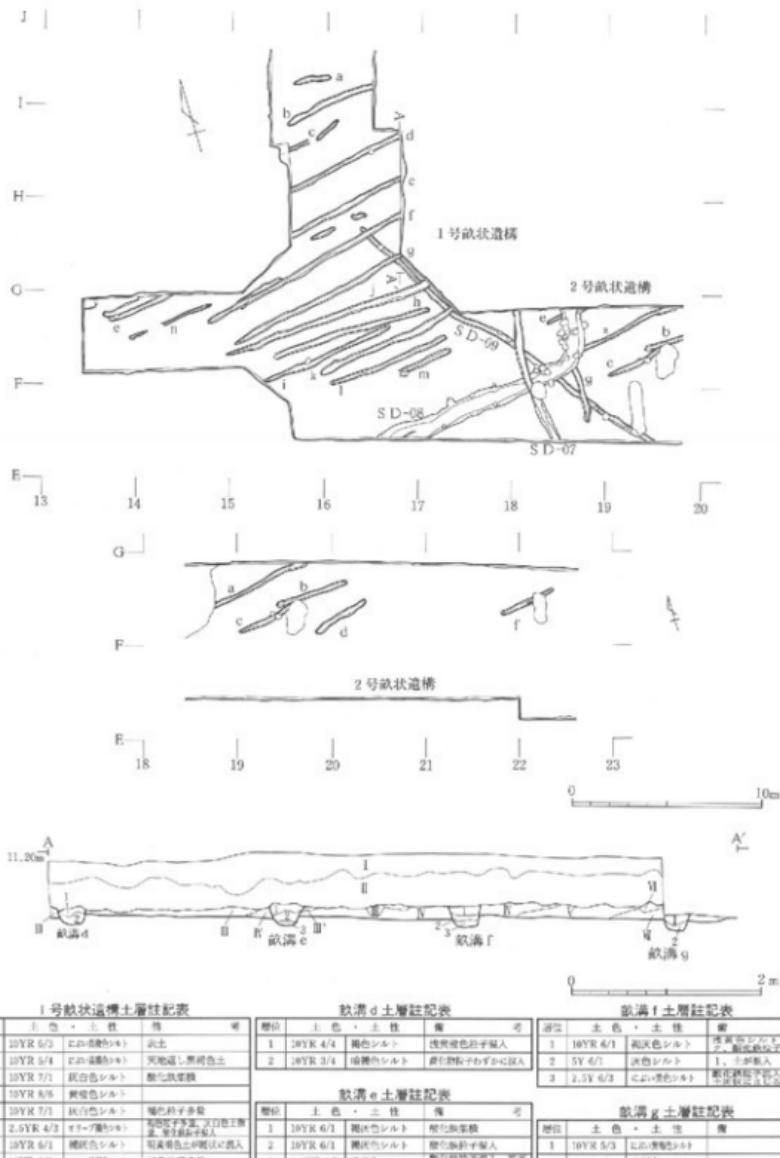


6

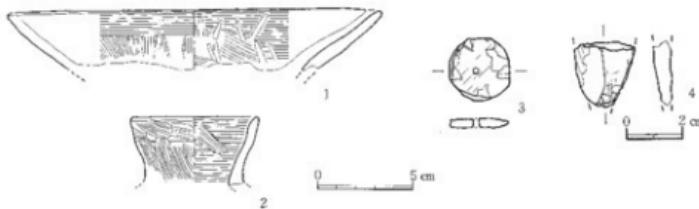


第163図 SD-08出土遺物





第164図 1号・2号鉱状造構(Ⅱ区)平面・断面図



第165図 7号歴史遺構(II区)出土遺物 3・4:1/2

土坑より新しいものと思われる。上部は天地返しにより削平、西端の溝fは擾乱坑により搅乱をうけている。規模は南北1.6m以上、東西8m以上で、南側や東側へさらにひろがるものと予想される。溝跡はf~hの3条あり、fとgの間にもう1条あった可能性もある。長さは溝hで1.6mを測るが、本来の長さは不明である。幅はいずれの溝も0.3m前後、深さは0.05~0.12mである。方向は、N-24°~29°-Eでほぼ揃っている。

出土遺物はないが、遺構の重複関係や調査時の所見から、奈良~平安時代の遺構と理解した。

7号歴史遺構(第168・169図)

1トレンチに位置し、SK15・SD25を切る。上部は、天地返しにより削平を受ける。規模は不明である。溝跡はa~dの4条ある。長さは溝bで2.9mを測る。幅は0.2~0.3m、深さ0.05~0.13mを測る。方向はN-80°-E前後であるが、溝dはN-65°-Eとずれている。

出土遺物は、土師器壺・須恵器甕がある。第169図1は溝bから出土した土師器壺で、逆台形を呈する。奈良時代のものであろう。須恵器甕は体部破片で、時期を特定できない。壺の出土から奈良時代頃の遺構と考えられるが、溝bは溝cに切られており時間差がある。

(3) 中世・近世

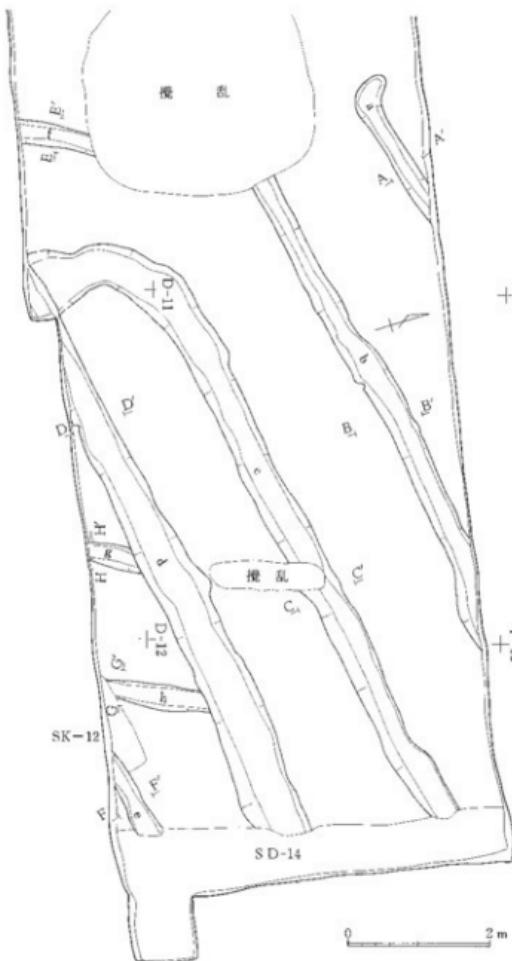
中世・近世に属する遺構は、柱穴列1条・掘立柱建物跡6棟・溝跡6条・塚1基である。このうち、塚に関しては精査を行っていない。

柱穴列(SA)

SA01(第170図)

II区西部(F-13~15)に位置し、SD5・20・1号歴史遺構を切る。上部は削平を受け、残存状況は不良である。この遺構は、西端で北側へ曲がり、東西9.3m、南北約3.2m以上を測る。東側は、さらに伸びるかどうかは不明である。柱穴は、主要なものは20~30cmで、深さ6~20cmの規模である。主柱穴とみられるものは、1.6~2.2m(約5.3~7.3尺)と間隔が不揃いである。方向は東西が約N-86°-E、南北がN-11°-Wである。

出土遺物はない。後述する建物跡と方向がおよそ合うこと、柱穴の特徴の類似や重複関係に



第166図 5号・6号窓状遺構（I）平面・断面図

矛盾しないことから、中世と考えられる。ただ、どの建物跡に対応するか不明である。また、柱痕跡の認められるものがあることから、塀や棚が想定されよう。

掘立柱建物跡（SB）

SB01（第171図）

II区中央付近（E-F-18・19付近）に位置し、SD08・09・2号窓状遺構を切る。また、SB02・

03と重複関係にあるが、新旧は不明である。上部は天地返しにより、削平を受けている。規模は不明だが、南辺部3間（6.7m）以上、西辺部2間（6.25m）以上である。南側に庇が付くものと考えられる。柱間寸法は、7尺・8尺が混用されている。方向は西辺でN-28°-Wを示す。柱穴は25~35cmのものが多く、深さは23~56cmで、特に南辺の柱穴は50cm前後で揃う。柱痕跡には、角柱を使用したことが判明するものもある。時期を決定できる遺物は出土していない。

SB02（第172図）

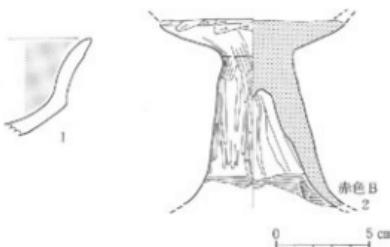
II区西部（E・F-16~18）に位置し、SB04・SD08・09・20を切る。また、SB01~03とも重複関係にあるが、新旧は不明である。上部は天地返しにより、削平を受けている。規模は東西4間（推定10.4m）、南北3間（約7.2m）以上とみられる。この建物跡は、東西2面に庇が付くものと考えられ、北辺側は縁であろうか。柱間寸法は、7~9尺がみられる。方向は東辺でN-16°-Wを示す。柱穴は残存状況の良いもので30~40cm、深さは16~58cmまであるが、残りの良いもので40~50cmを測る。柱痕跡は四角形を呈するものが多く、角柱を多様している。このことから、II区の建物跡のうち最も新しいものと予想される。土師器が少量出土しているが、時期を決定できる遺物はない。

SB03（第173図）

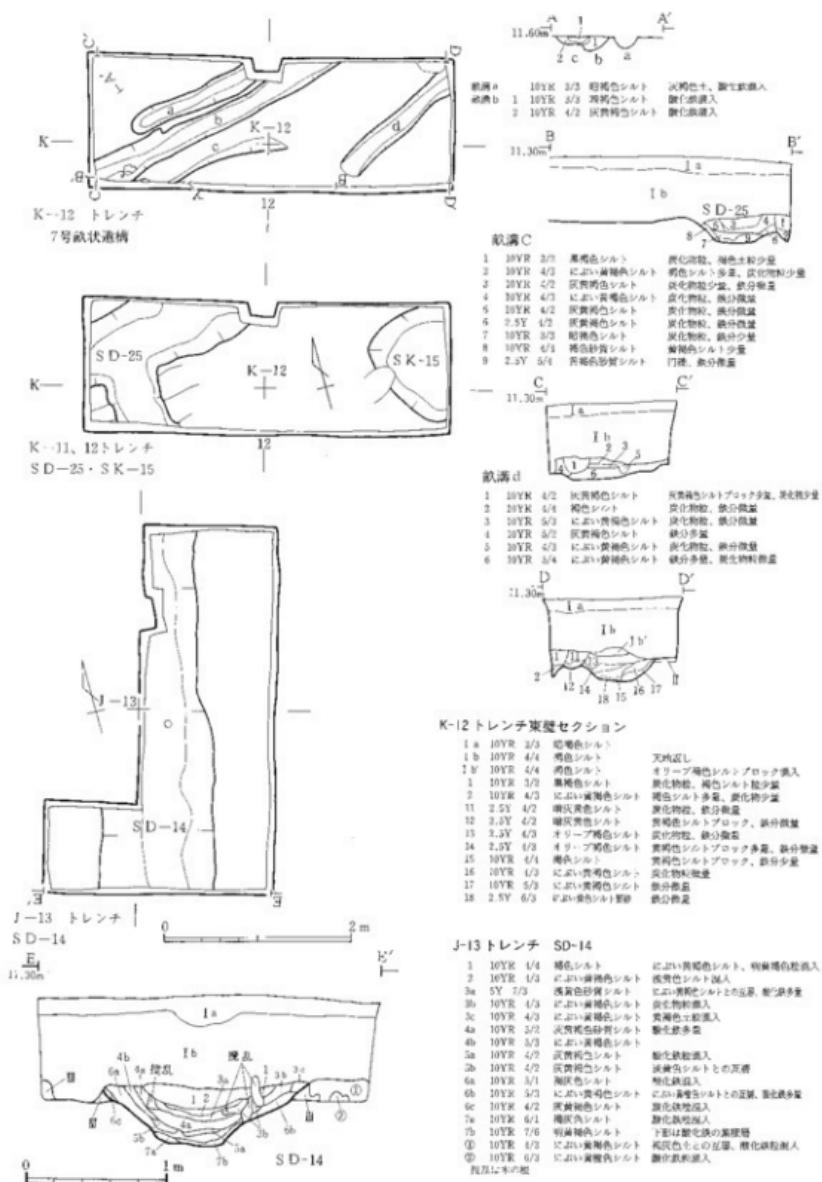
II区西部（E・F-16~18区）に位置し、SD08・09・20を切る。SB01・02・04と重複関係にあるが、新旧は不明である。上部は天地返しにより削平を受けている。規模は不明だが、東西3間（7.36m）以上、南北2間（推定5.3m）以上と予想される。北側に半間とみられる縁あるいは庇が取り付く。柱間寸法は7~9尺がみられる。方向は東辺でN-15°-Wを示す。柱穴は20~30cmで、深さ30~40cm代のものが多い。一部に角柱が認められる。出土遺物はない。

SB04（第174図）

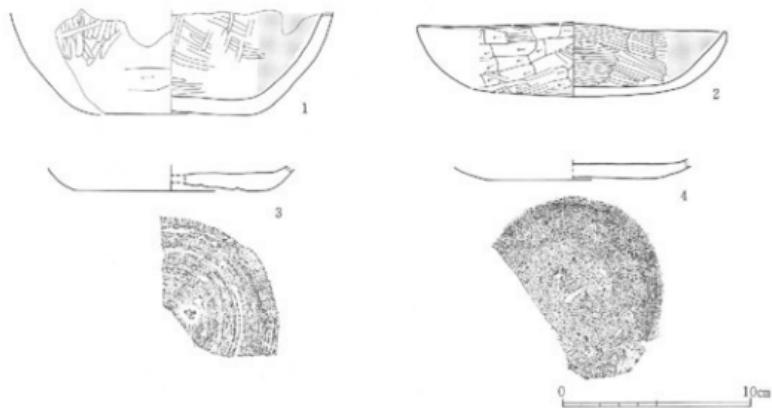
II区西部（F-16~18区）に位置し、SD05・08・20を切る。SB02・03・05と重複関係にあるが、新旧は不明である。上部は天地返しにより削平を受けている。規模は不明だが、東西3間（9.2m）、南北1間（3.8m）以上である。北側に庇が付くが、東側は半間程（4尺）しかなく縁であろうか。柱間寸法は不揃いである。方向は東辺でN-3°-Eと、他の建物跡に比べ、真北に近い。柱穴は20~30cmが平均的で、深さは30~40cm代が多い。時期決定できる遺物はないが、角柱と確認できる柱穴はなく、最も古相を呈する建物跡と思われる。



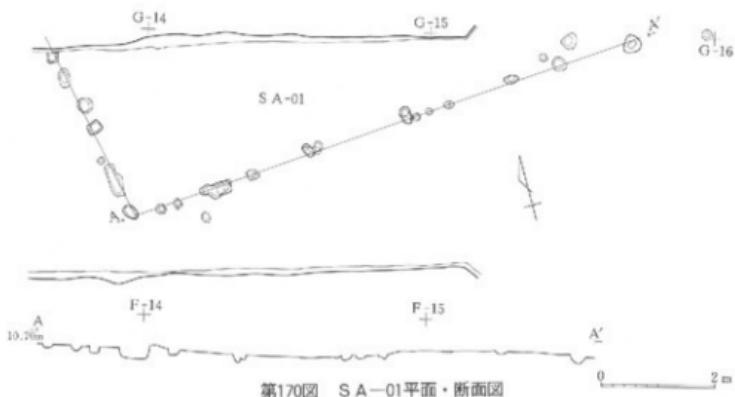
第167図 5号竪穴式住居遺構出土物



第168図 トレンチ平面・断面図



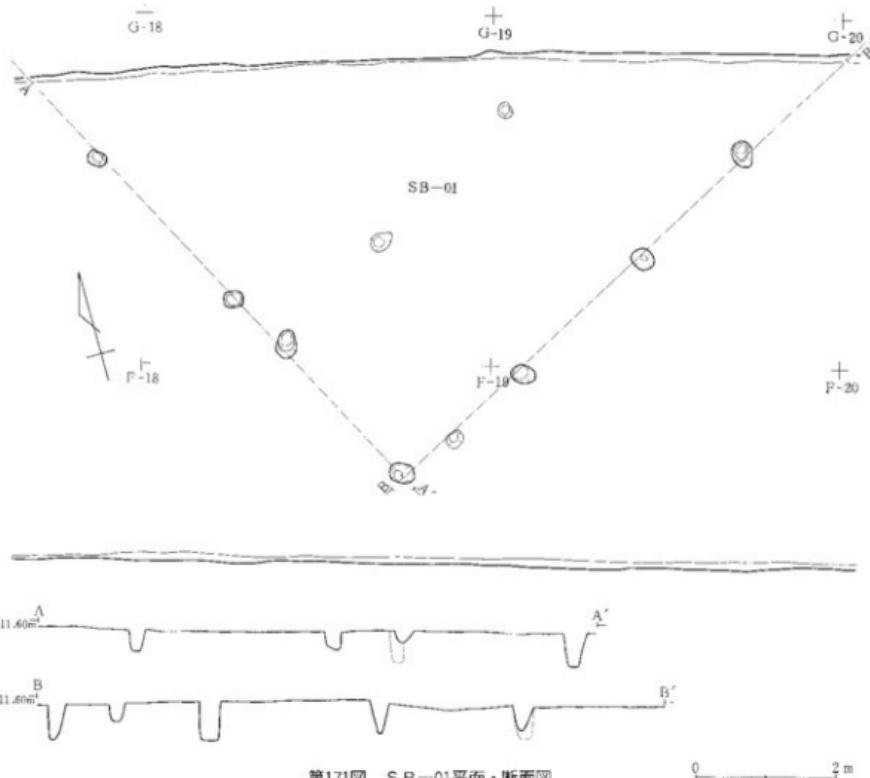
第169図 SD-25・7号歎状遺構（トレンチ）出土遺物



第170図 SA-01平面・断面図

SB05（第175図）

II区西部（F-15・16区）に位置し、SD05・08・1号歎溝状遺構を切る。SB04と重複関係にあるが、新旧は不明である。上部は天地返しにより削平を受けている。規模は不明だが、南北2間（5.5m）以上の建物跡と推定した。方向は東辺でN-27°-Wを示す。柱穴は30~40cmで、深さ18~29cmを測る。柱間寸法は8.5尺前後である。柱痕跡は北端は不明確だが、他は四角形を呈し、角柱とみられる。建物方向がSB01とほぼ一致し、対をなす建物跡の可能性もある。時期決定できる遺物は出土していない。



第171図 SB-01平面・断面図

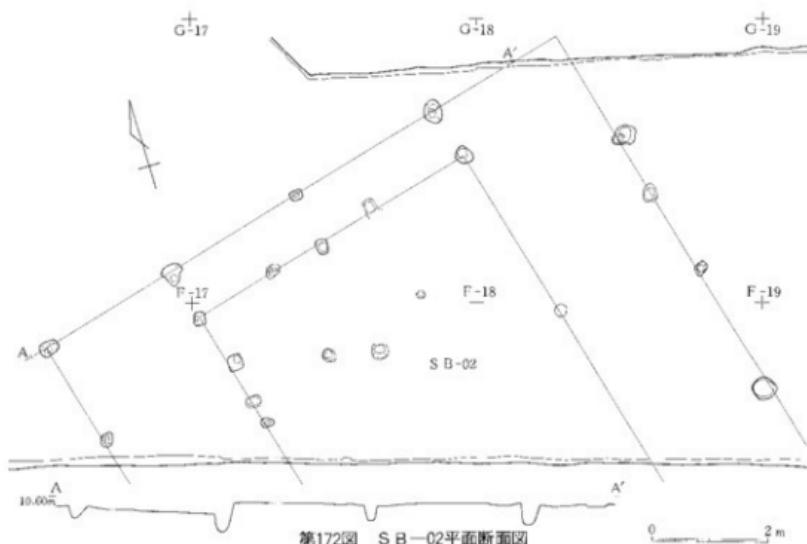
SB06 (第176図)

I区中央 (N-5・6区) に位置し、SD12 に切られる。SD13 と重複関係にあるが、直接新旧を決められない。規模は桁行3間 (南辺総長7.5m)、梁行2間? (西辺総長4.52m) の東西棟建物跡である。西辺中央には、柱穴の痕跡らしいものがあった。柱間寸法は、8尺を基準にしているものとみられる。方向は N-8°-W を示す。柱穴は 20~35 cm で、深さ 14~30 cm である。出土遺物はないが、手捏ねの土師質土器が出土した SD12 より古いことから、鎌倉時代前半頃と予想される。また、在地の甕が出土した SD13 より古いと考えられる。

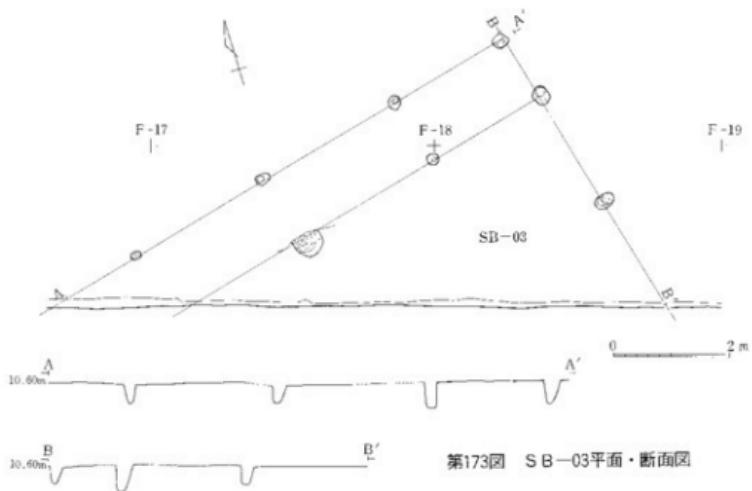
溝跡 (SD)

SD01 (第177・178図)

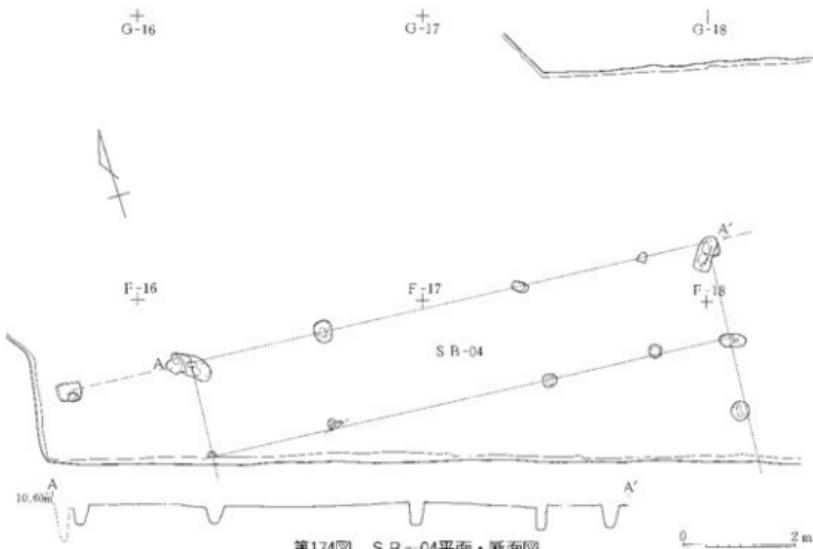
II区北部 (I・J-15・16区) に位置し、他の遺構との重複はない。上部は天地返しにより削



第172図 SB-02平面断面図



第173図 SB-03平面・断面図



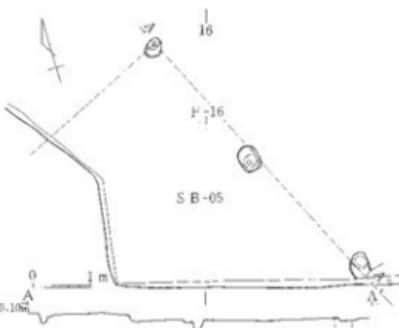
第174図 SB-04平面・断面図

平を受けている。規模は検出長が 5.58 m、幅 70~97 cm、深さ 27~42 cm を測る。方向は東西方向を示し、N-82°-E である。断面形は鍋底状を呈し、西側では段差が認められる。

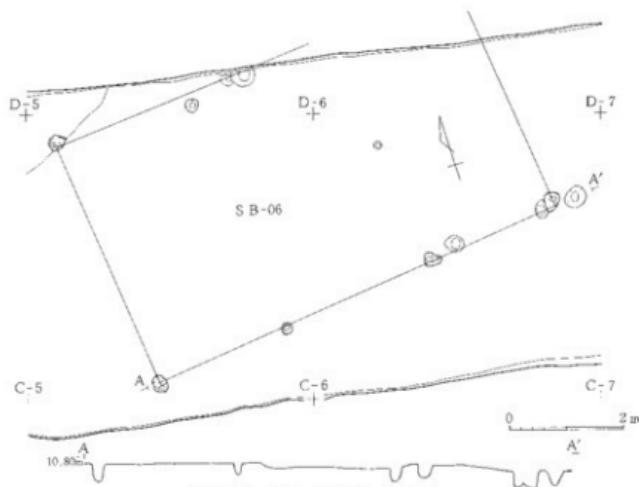
出土遺物は、土師質土器皿・土師器片・須恵器高台付壺・甕・瓦がある。第178図 1 は布目瓦である。他は図示できない。土師質土器皿は、ロクロ使用の小皿体部であり、この皿の出土から、溝跡は中世と考えられる。

SD02 (第177・178図)

II区東部 (E-F-22・23区) に位置し、SI01を切る。上部は、天地返しにより削平を受けている。規模は検出長約 8.2 m、幅 80~126 cm、深さ 31~61 cm を測る。方向は N-39°-E である。底面や壁面下部では鉄分の集積が認められ、底面レベルは北東側へ下がる。この溝は水路と考えられる。断面形は、鍋底状を呈している。



第175図 SB-05平面・断面図



第176図 SB-06平面・断面図

出土遺物は、土師質土器皿・土師器壺・瓦・弥生土器片がある。第178図2は内黒の土師器壺で、古墳時代後期のものである。3・4は土師質土器皿で、底部には糸切り痕を残す。中世のものである。5・6は布日のある平瓦で、古代のものである。土師質土器の存在から、この溝跡は中世と考えられる。

SD10 (第177図)

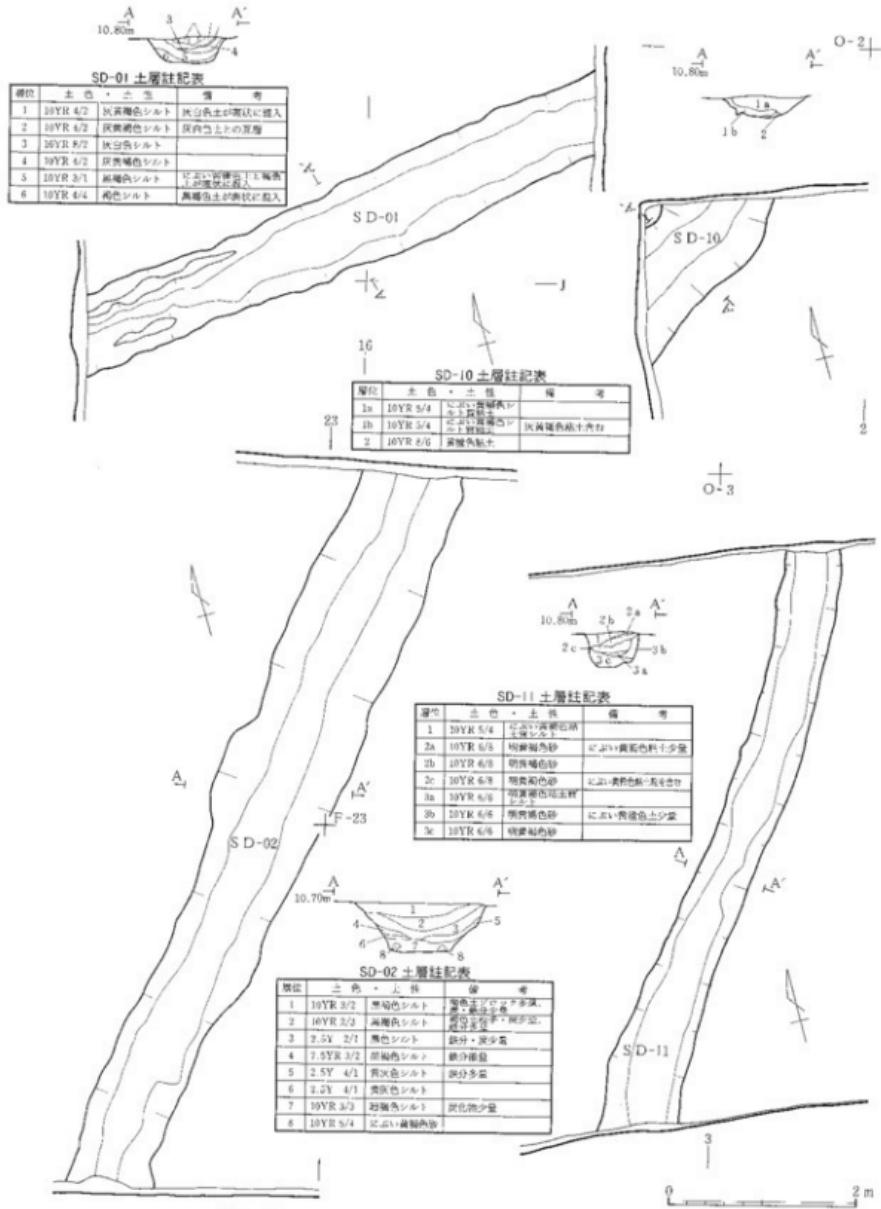
I区西端部(N-1区)に位置し、他の遺構との重複はない。上部は、天地返しにより削平を受けている。規模は検出長2.2m、幅約1m、深さ22~26cmを測る。方向はN-61°-Eである。断面形は皿状を呈している。

出土遺物は、土師質土器皿・須恵器壺がある。第180図1は土師質土器の小皿で、底部には糸切り痕が認められる。この小皿の出土から、溝跡は中世と考えられる。

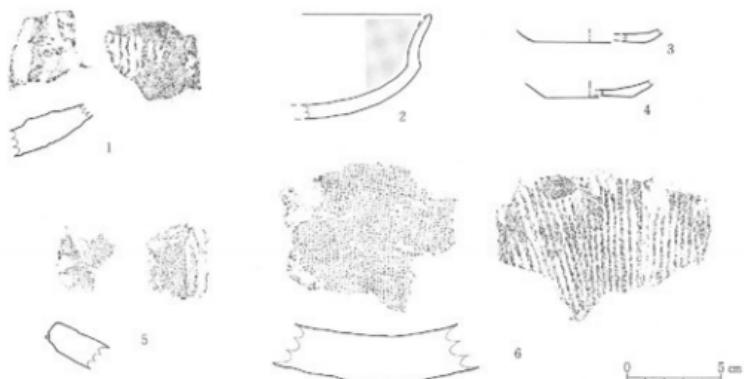
SD12 (第179・181図)

I区西部(N-4・5区付近)と北部(Q・R-7区)の二ヶ所で検出し、SB06を切る。西部は天地返しにより、北部は近代の水田により、それぞれ上部を削平されている。規模は西部と北部を合わせると、長さ28.6m、幅1.06~1.3m、深さ40cm前後であるが、北部では削平が著しい。方向は約N-56°-Eである。断面形は「U」字形に近く、底面レベルは北東側へ下がっていく。

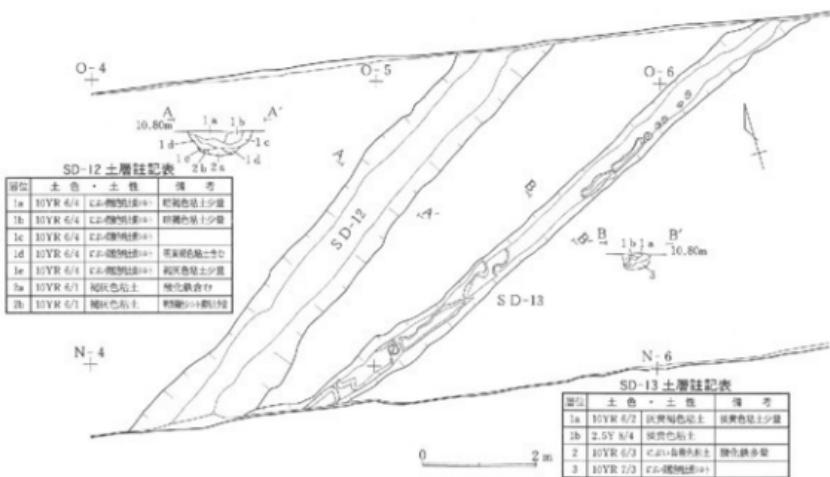
出土遺物は、土師質土器皿・須恵器壺・壺・石製模造品(円板形)がある。図示できるものはないが、土師質土器は手捏ねの小皿と思われる。この小皿の出土から、溝跡は中世と考えら



第177図 SD-01・02・10・11平面・断面図（中世）



第178図 SD-01・02出土遺物 (1:SD01, 2~6:SD02)



第179図 SD-12・13平面・断面図



第180図 SD-10・13平面・断面図 (1:SD10, 2:SD13)

れる。

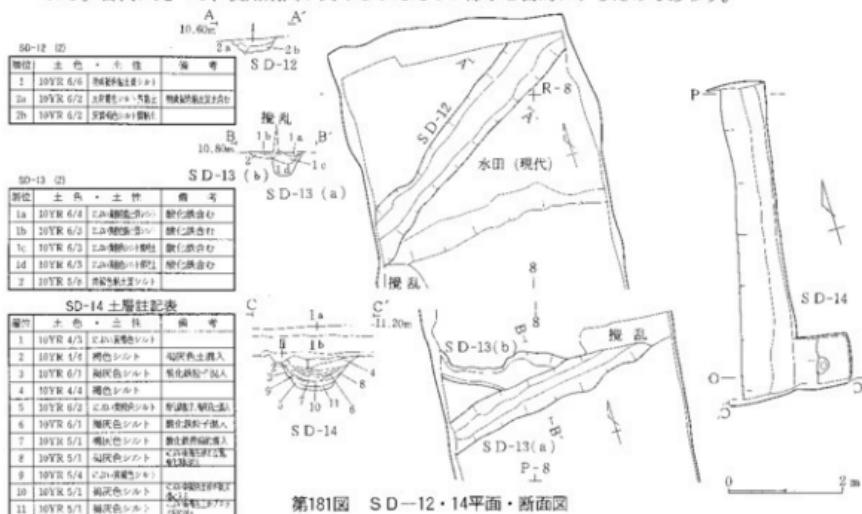
SD13 (第 179・181 図)

I 区西部 (N-5 区付近) と北部 (P-7・8 区) の二ヶ所で検出し、SD24・SX04 を切る。また、SB06 より新しい (SB06 の項参照)。西部では、上部を天地返しにより削平されている。規模は西部と北部を合わせると、長さ 21.6 m、幅 49~70 cm、深さ 33~40 cm (西部は削平のため浅い) である。方向は西部で N-64°-E、北部で N-78°-E と弧状を呈する。断面形は鍋底状を呈し、溝底レベルは北東側へ下がっていく。西部では、溝底にピットや段差がみられる。北部では、北西方向に派生する極めて浅い溝跡がみられる。

出土遺物は、土師質土器の小型鉢? と須恵器坏・短頸壺がある。第 180 図 2 は奈良時代と考えられる短頸壺である。土師質土器は図示できないが、中世あるいは近世のものと考えられる。溝跡の時期は、中世以降と考えてよい。

SD14 (第 168・181 図)

I 区東端部 (0-12 区) と 2 トレンチの二ヶ所で検出した。規模・形態・方向・埋土の特徴から、二ヶ所で検出した溝跡を同一のものと判断した。5 号畠状遺構を切る。上部は天地返しにより削平されているが、特に 2 トレンチで著しい。規模は長さ約 32.2 m 以上、幅 1.2~1.3 m、深さ 53~60 cm (2 トレンチでは約 30 cm) である。方向は南北方向で、約 N-10°-E を示す。断面形は鍋底状に近いが、壁は開らか。溝底や底面下部には、SD02 同様鉄分の集積層がみられる。遺構内に鉄分の集積層が形成される現象は、当遺跡では中世以降に特徴的に現われる。古代に比べて、使用期間が長くなったためか滞水を目的にするためであろう。



第 181 図 SD-12・14 平面・断面図

出土遺物はない。5号畝状遺構を切り、後述する塚の直下を通ることから、中世墳の溝と考えられる。

塚（第133図）

I区とII区の間に位置する。塚の精査は、所有者不明で行っていない。SD14上にのるものと思われる。規模は直径約5m、高さ約1mである。周辺部は削られており、本来は若干大きいもの予想された。塚の西および南ヘトレンチを設定して古墳の可能性を探ったが、周溝等は確認できなかった。頂上部には、天保年間と思われる墓石（女性）がある。従って、近世の塚と推定した。

(4) その他の遺構と遺物

その他の遺構

この項では、時期を特定できない遺構を扱う。土坑7基・溝跡2条・埋没河川がある。

土坑（SK）

SK01（第182図）

II区東部(F-25区)に位置し、他の遺構との重複関係はない。上部は、天地返しにより削平を受けている。規模は 0.74×0.59 m、深さ0.13mで、方形を呈している。この土坑は二重構造になっており、下部にさらに土坑が認められる。下部の土坑は、 1.06×0.91 m、深さ0.59mで、楕円形を呈している。性格・用途は不明である。出土遺物はない。

SK02（第182図）

II区北部(I・J-16区)に位置し、他の遺構との重複関係はない。上部は、天地返しにより削平を受けている。規模は 1×0.94 m、深さ0.2mで、不整円形を呈している。出土遺物は、非クロロの土器壺・須恵器壺の細片がある。この遺物で、時期を決定するのは難しい。

SK04（第182図）

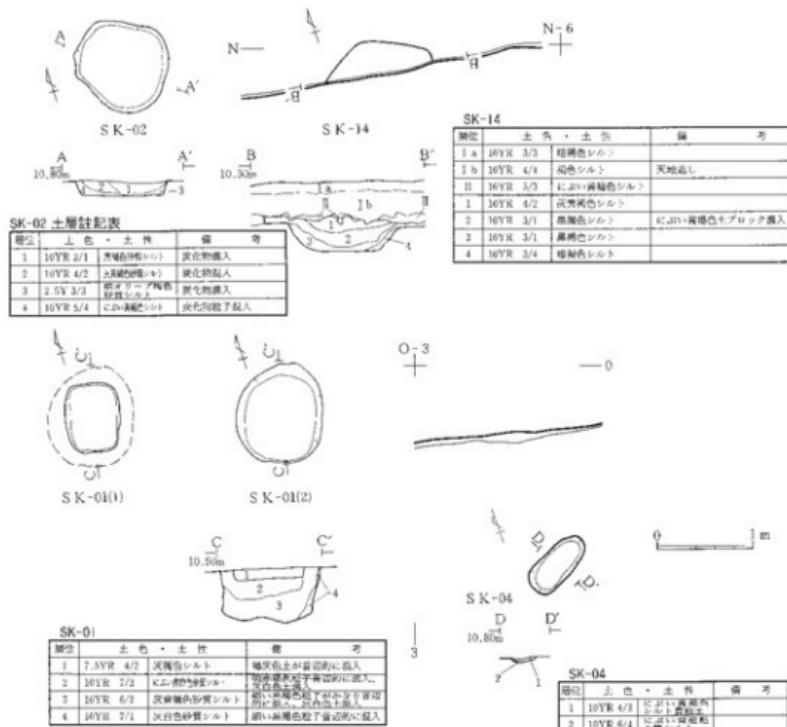
I区西部(N-3区)に位置し、他の遺構との重複関係はない。上部は、天地返しにより削平を受けている。規模は 0.73×0.34 m、深さ0.09mで、楕円形を呈している。底面は北東側へ下がる。埋土は2層あり、粘土(10 YR4/3)・シルト(10 YR6/4)である。出土遺物はない。

SK11（第145図）

I区東部(N-0-11区)に位置し、5号畝状遺構に切られる。また、6号畝状遺構よりも古いと考えられる。規模は 1.52×0.89 m、深さ0.8mで、不整楕円形を呈している。出土遺物はない。時期は明らかではないが、あるいは古墳時代のSX02などと関連する可能性もある。

SK13（第145図）

I区中央部(0-8区)に位置し、SI04・鉄塔基礎坑に切られ、SD24を切る。規模は東西2.9



第182図 土坑平面・断面図（時代不明）

m以上・南北3.2m、深さ0.2mで、楕円形を呈するものと予想される。出土遺物は、住社式とみられる土師器壺・甕？、南小泉式とみられる高壙が出土している。しかし、いずれも小破片で、時期決定は難しいが、平安時代以前であることは確実である。

SK14 (第182図)

I区中央部(M-5区)に位置し、他の遺構との重複関係はない。規模は一部の調査に限られたため不明であるが、検出長は1.3m、深さ0.39mである。出土遺物はなく時期は明確ではないが、黒褐色シルトが堆積しているのが特徴的で、中世の可能性もある。

SK15 (第168図)

1トレンチ東部に位置し、7号畠状遺構(溝d)に切られる。上部は、天地返しにより削平を受けている。規模は一部の調査に留ったため明確ではないが、南北で1.23m、深さ0.16mである。形状は楕円形を呈するものと予想される。出土遺物は住社式とみられる土師器壺、非口

クロの土師器壺がある。しかし、いずれも小破片で時期決定が難しい。

溝跡 (SD)

SD11 (第 177 図)

I 区西部 (M・N-2・3 区) に位置し、他の遺構との重複関係はない。上部は天地返しにより削平を受けている。規模は検出長約 6.4 m、幅 0.54~0.8 m、深さ 0.33~0.38 m である。方向は N-33°-E を示す。溝底レベルは北東側へ下がっていく。I・II 区通して、この溝跡だけに砂の堆積が認められた。流水によって運ばれたものであろう。出土遺物はない。

SD24 (第 151 図)

I 区北部 (0・P-7・8 区) に位置し、SI04・SK13・SD13 に切られる。規模は検出長 2.65 m、幅 0.43~0.55 m、深さ約 0.2 m である。方向は N-33°-W を示す。出土遺物は土師器壺壺があるが、小破片で時期決定は難しい。古墳時代以前とみられる。

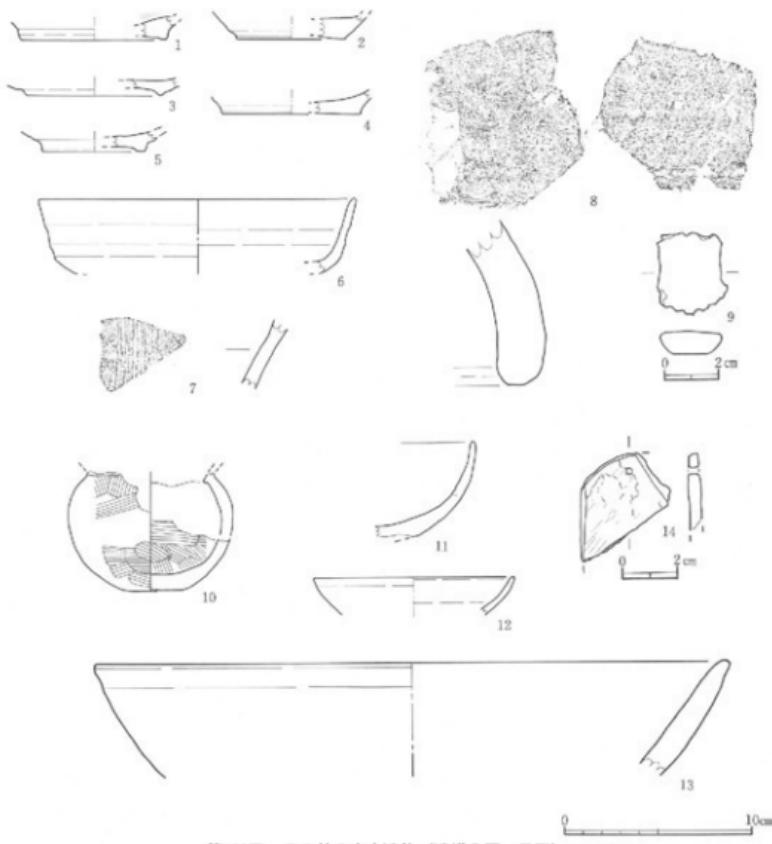
埋没河川 (第 133 図)

II 区では二ヶ所に深掘トレンチを入れたが、両者ともに不整合で傾斜する層群を確認した。II 区東部の深掘トレンチでは基本層の VII 層と IX 層の間 (第 132 図) に、II 区西部の深掘トレンチでは VII 層と XIV 層の間 (第 132 図) にみられる。どちらも、氾濫原堆積物である砂礫層を削り込んで下がっていき、埋没河川と考えられた。東部の河川跡は、SD04 や SD03 の直下にあり、方向も SD04 とほぼ同じとみられる。規模は不明である。古墳時代以前の河川跡であろう。西部の河川跡は、SD05 と SD20 の直下にあり、これらの溝跡よりもさらに広い川幅と予想される。北は、I 区東部へ伸び、南は東部の河川跡に合流する可能性がある。なお、河川堆積層を直接不整合に覆う VI あるいは VII 層相当層より、土師器小型壺・壺 (第 183 図 10・11) が出土している。河川跡は、古墳時代中期以前であろう。

I 区では三ヶ所に深掘トレンチを入れ、標高 8.7~8.8 m まで下げたが、II 区で確認した砂礫層 (標高 9 m 前後) は検出できず、変って厚い砂層の堆積がみられた。埋没河川が何条存在するのかは不明だが、I 区の全域に渡って河川あるいはこれと関連する土層が堆積しているものと予想される。I 区東部の河川跡は、SX01~03・5 号・6 号歎状遺構の直下にあるものと思われ、II 区西部の河川跡と連続するものであろう。西部の深掘トレンチ (第 184 図) では、河川跡内に堆積した VI あるいは VII 層相当層より、弥生時代の壺が出土している (第 185 図 1)。I 区中央～西部にある河川跡は、古墳時代あるいは弥生時代以前とみられる。本調査区の南西側、第 14 次調査地点でも埋没河川跡が検出されており、どうやら遠見塚古墳の西側に集中しているようで今後も注意しておく必要があろう。

その他の出土遺物 (第 183・185 図)

この項では、基本層・河川跡・天地返しなどから出土した主な遺物を扱う。第 183 図 1 は低

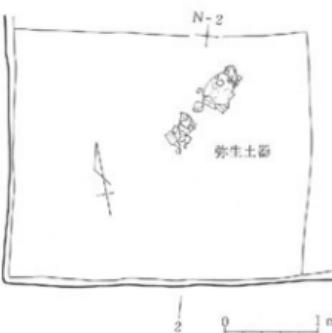


第183図 その他の出土遺物（遺構I区・II区）9・14：15

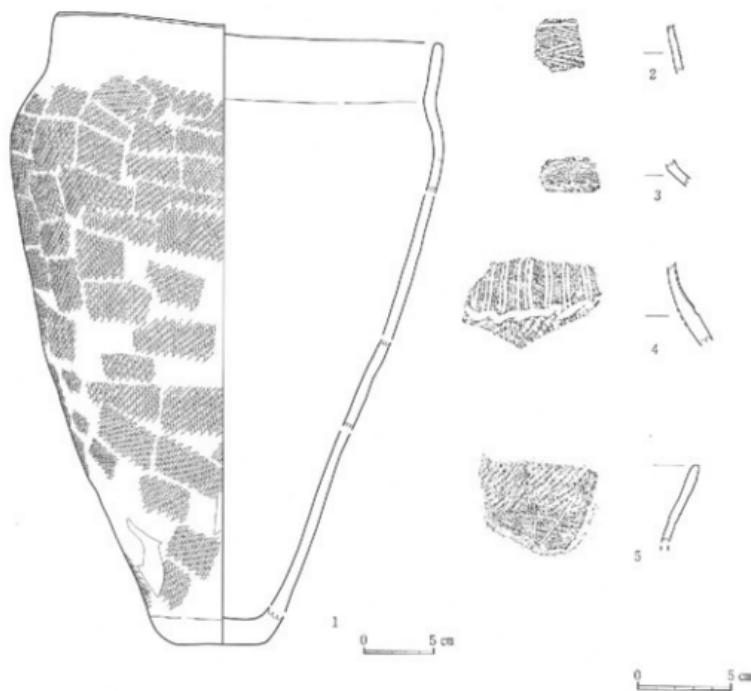
高台の土師器杯で、ロクロ使用・内面黒色処理を施している。2・4は土師質土器小皿で、底部には糸切り痕が認められる。3は志野丸皿と予想される。16C末～17C初と考えられる。5は瀬戸・美濃の鉄釉皿であろう。江戸時代のものとみられる。6は須恵器杯である。7は鉄釉擂鉢で、岸窯系であろうか。8は古代の丸瓦であるが、布目や網目はみられない。9は鉄製の把手あるいは耳と思われる。10は基本層のVIあるいはVII層相当層から出土した土師器小型壺である。南小泉式期のものであろう。11も同一層から出土した土師器杯で、10と同一時期のものであろう。12はロクロ使用の土師質土器小皿である。中世のものである。13は、渥美産とみ

られる鉢で、12～13 C 壁のものであろう。14 は剣形の石製模造品で、古墳時代のものである。1～9 は、I 区の天地返しから出土したものである。10～14 は II 区から出土したもので、10・11 は II 区西部深掘トレンチ、12～14 は天地返し出土である。

第 185 図 1～5 は弥生土器である。1 は I 区西部深掘トレンチ (NO. 1) 出土の甕で、樹形圓式以前とみられる (第 184 図)。2～4 は十三塚式と考えられる甕である。5 は山形沈線文をもつ甕の口縁部であろう。時期は不明である。



第184図 深掘トレンチ土器出土状況



第185図 その他の出土遺物（弥生土器）

23. 第18次出土遺物観察表(1)

(単位 cm)

団体名	品物名	原寸	種類	記録	状況	寸法	持	備	
SI-01 (青物)									
137-1	143 31	アラビア内 光地透彫	土器	陶	口徑 (15.3)	高さ (5.7)	外面口縁部b、体部e、内面山腹部b→d、体部d、底部。白粉	B	
2	209	床 底	土器	陶	14.8	-	3.9 外面口縁部b、体部e、内面山腹部b→d、体部d、底部。白色透彫	C	
3	370	アラビア 模様	土器	陶	(14.0)	-	(5.3) 外面口縁部b、体部e、内面山腹部b→d、体部d、底部。黑色透彫	E	
4	139	アラビア 模様	土器	陶	-	-	外面口縁部b、体部e、内面山腹部b→d、体部d、底部。黑色透彫	A ₂	
5	251	アラビア 模様	土器	陶	-	-	外面口縁部b、体部e、内面山腹部b→d、体部d、底部。黑色透彫	A ₃	
6	251 (251)	アラビア 模様	土器	陶	-	-	外面口縁部b、体部e、内面山腹部b→d、体部d、底部。黑色透彫	E	
7	143	アラビア 模様	土器	陶	-	-	外面口縁部b、体部e、内面山腹部b→d、体部d、底部。黑色透彫	B	
8	31	アラビア 模様	土器	陶	-	-	外面口縁部b、体部e、内面山腹部b→d、体部d、底部。黑色透彫	A ₂	
9	398	床 底	土器	陶	-	-	外面口縁部b、体部e、内面山腹部b→d、体部d、底部。白色透彫	A ₃	
10	130	アラビア 模様	土器	陶	-	-	外面口縁部b、体部e、内面山腹部b→d、体部d、底部。白色透彫	A ₃	
11	116 372	田 植	土器	陶	支脚?	(11.7)	(6.0) 外面c、(ヘラ)、内面c、(ヘラ)、白色		
12	16	植物付 大底丸	土器	陶	蓋(小)	13.6	-	外面口縁部b、体部e、内面山腹部b→d、体部d、底部。白色透彫	小型A
13	377	野 草 火	土器	陶	蓋(小)	15.8	6.8	外面口縁部b、体部e、(ヘラ)→d、(ヘラ)、内封。NO.6	中型B
14	298	床 底	土器	陶	蓋(小)	20.2	-	外面口縁部b、体部e、(ヘラ)→d、内面口縁部b、体部e、(ヘラ)、(柱孔)、口輪。NO.1	大型A
15	357 366	野 草 穴	土器	陶	蓋	26.3	8.1	外面口縁部b、体部e、(ヘラ)→d、内面口縁部b、体部e、(ヘラ)→c、内封。NO.7 外面口縁部b、体部e、(ヘラ)→d、内面口縁部b、体部e、(ヘラ)→c、内封。NO.8	大型B
138-1	363	カマド陶器	土器	陶	高	18.6	7.2	36.2 外面口縁部b、体部e、(ヘラ)→c→d、(ヘラ)、内面口縁部b、体部e、(ヘラ)、底部木裏 灰7、NO.3	大型D
2	365 178	野 草 火	土器	陶	蓋	(17.6)	-	(16.6) 外面口縁部b、体部e、内面口縁部b、体部e、(ヘラ)、内面底部b、口輪。NO.4	
3	303	床 底 穴	土器	陶	蓋	16.3	-	(13.5) 外面口縁部b、体部e、(ヘラ)→d、内面口縁部b、体部e、(ヘラ)→c、内封。NO.16	大型D?
4	369	野 草 穴	土器	陶	蓋	-	7.56 (33.4) 外面口縁部b、体部e、(ヘラ)→d、内面口縁部b、体部e、(ヘラ)、白粉。NO.5	大型D	
139-1	364	カマド陶器	土器	陶	高	22.0	6.1	27.2 外面口縁部b、体部e、(ヘラ)→d、(ヘラ)、内面口縁部b、体部e、(ヘラ)、灰7、NO.3	中型C
2	361	カマド陶器	土器	陶	二重蓋	5.1	3.1	6.2 外面口縁部b、体部e、(ヘラ)→d、内面口縁部b、体部e、(ヘラ)、内面底部b、口輪。NO.1	
3	16	野 草 火	土器	陶	二重蓋	4.7	-	4.9 外面口縁部b、体部e、(ヘラ)→d、内面口縁部b、体部e、(ヘラ)、内面底部b、口輪。NO.2	
4	365 カマド内 土	土器	陶	二重蓋	2.8	-	1.8 外面口縁部b、体部e、(ヘラ)→d、内面口縁部b、体部e、(ヘラ)、内面底部b、口輪。NO.4		
5	301	床 底	土器	陶	二重蓋	5.9	-	2.75 外面口縁部b、体部e、(ヘラ)→d、内面口縁部b、体部e、(ヘラ)、内面底部b、口輪。NO.4	
6	363	カマド陶 器	土器	陶	二重蓋	5.8	3.1	7.4 外面口縁部b、(ヘラ)→d、内面口縁部b、体部e、(ヘラ)、内面底部b、口輪。NO.2	
7	127	床 底	土器	陶	二重蓋	2.6	2.3	0.8 外面口縁部b、(ヘラ)→d、内面口縁部b、体部e、(ヘラ)、内面底部b、口輪。NO.2	
8	424	野 草 火 模様化上面	石	陶	コハク	1.1	1.0	0.5 不整六角柱状。孔1↑、灰7、灰2	
SI-02									
141-1	355 103	アラ ビア	土器	陶	环	10.9	5.5	外面口縁部b、(ヘラ)→d、体部e、(ヘラ)、内面口縁部b、底部透彫、盖輪	B
2	103	床 底	土器	陶	环?	-	-	外面口縁部b、体部e、(ヘラ)、内面口縁部b、底部透彫、盖輪	A ₂
3	102	床 底	土器	陶	环	-	-	外面口縁部b、体部e、(ヘラ)、内面口縁部b、底部透彫、盖輪	E
SI-03									
144-1	198 142	アラ ビア	土器	陶	环	16.6	-	(4.6) 外面口縁部b、体部e、(ヘラ)、内面口縁部b、底部透彫、盖輪、白色透彫、白粉	B
2	132	床 底	土器	陶	环	-	-	外面口縁部b、体部e、(ヘラ)、内面口縁部b、底部透彫、盖輪、白色透彫、白粉	D
3	142	アラ ビア	土器	陶	环	-	-	外面口縁部b、体部e、(ヘラ)、内面口縁部b、底部透彫、盖輪	D
4	145	アラ ビア	土器	陶	二重蓋	(4.9)	4.2	外面口縁部b、体部e、(ヘラ)、内面口縁部b、底部透彫、盖輪、白色透彫、白粉	
SI-04									
146-1	79	アラ ビア	土器	陶	环	(13.6)	-	4.2 外面口縁部b、体部e、(ヘラ)、内面口縁部b、底部透彫、盖輪、白色透彫、白粉	B

24. 第18次出土遺物観察表(2)

(単位 cm)

区分名	遺物名	深 度	種 别	形 種	規 格	記 号	特 徴	備 考
SK-20								
146-2	331 土器 鋸	土 耙 鋸	鋸	(35.6)	-	16.7	外圓口鋸部 b、体部 d (へラ)、内圓口鋸部 b、体部 c (へラ)、白附	小量 D
SD-02(古物)								
130-1	40 木 手 工具 鋸	手 鋸	鋸	口幅	幅2	露高	無記	A ₂
SD-04								
130-2	257 石 1 扇	土 刻 刀	刀	-	-	-	外圓口鋸部 b → d、体部 d ?、内圓口鋸部 b → d、体部 c → d、赤色處理、白附	E
3	256 磁土 下 鋸	土 刻 刀	刀	-	-	-	外圓口鋸部 b、内圓口鋸部 b、白附	B
4	269 B-2a 土 鋸	土 刻 刀	刀	18.6	7.7	(31.0)	外圓口鋸部 b、体部 c、内圓口鋸部 b、体部 c (へラ)、外圓口鋸部 b 有著しい、白附 大量 A	
5	369 石 刻 刀	石 刻 刀	刀	11.0	6.4	厚5	四面加工 S-1	
6	281 磁土 削	石 刻 刀	刀	2.55	2.4	厚3.5	毛2+	
7	91 磁土 削	石 刻 刀	刀	(1.9)	(2.3)	0.4	毛2+、大鋼品	
SD-05								
150-8	37 土 土 刻 刀	土 刻 刀	刀	11.6	5.6	幅4	外圓口鋸部 b、体部 c (へラ) ?、内圓口鋸部 b、体部 d (へラ)、内圓口鋸部 b	E?
9	21 土 上 刻 刀	上 刻 刀	刀	4.2	(2.2)	無記	無記?、茎部點合記	
10	51 土 上 刻 刀	上 刻 刀	刀	-	-	-	外圓口鋸部 b、体部 c → d、内圓口鋸部 b、体部 c → d (故材切)、白附、赤色 E	A ₂
11	53 土 土 刻 刀	土 刻 刀	刀	-	-	-	外圓口鋸部 b、内圓口鋸部 b ?、体部 c → d	A ₂
12	37 土 土 刻 刀	土 刻 刀	刀	-	-	-	外的不規、内圓 d ?、黑色處理	E?
13	37 土 上 刻 刀	上 刻 刀	刀	-	-	-	外圓 b、内圓 b、黑色處理	B
14	37 土 土 刻 刀	土 刻 刀	刀	-	-	-	外圓 b、内圓口鋸部 b → d、体部 c → d	B
15	37 土 土 刻 刀	土 刻 刀	刀	-	-	-	外圓口鋸部 b、体部 c、内圓 b、内圓黑色	E
16	37 土 上 刻 刀	上 刻 刀	刀?	-	-	-	外圓 b ?	D?
17	37 土 土 刻 刀	土 刻 刀	刀	-	-	-	外圓平面刃狀、内圓、赤鉄灰→ナゲ削し? Scか?	
18	47 磁土 上 鋸	石 刻 刀	刀	-	-	-	外圓自然斜、内圓カロ、体部ナグ	
SD-20								
150-19	340 磁土上 鋸	二頭 鋸	鋸	-	-	(8.5)	外圓口鋸部 b、内圓口鋸部 b、体部 c、白附	B ₁
19	248 土 土 刻 刀	土 刻 刀	刀?	-	-	-	-	
21	189 磁土上 鋸	石 刻 刀	刀	長さ 5.6	幅3	厚3.5	毛2+	
SX-02								
134-1	225 土 土 刻 刀	土 刻 刀	刀	口幅	幅2	露高	外圓口鋸部 b、体部 c → d、内圓口鋸部 b、体部 c → d (底付)	D
2	294 磁土下 刻 刀	土 刻 刀	刀	-	-	-	外圓 d、内圓 d、黑色處理、無記號、NO.4	E?
3	292 土 土 刻 刀	土 刻 刀	刀	27.6	(3.9)	外圓口鋸部 b、体部 c、内圓口鋸部 b、体部 d、無記、NO.2	A ₂	
4	296 磁土下 刻 刀	土 刻 刀	刀	13.6	-	(3.3)	外圓口鋸部 b、d、体部 c → d、内圓口鋸部 b、d、体部 d、赤色 (黑色處理?)、白附	B ₁
5	293 土 土 刻 刀	土 刻 刀	刀 (へラ)	(13.3)	-	9.1	外圓 L型鋸部 b、体部 c → d、内圓全周 C (へラ)、NO.2	
6	294 土 土 刻 刀	土 刻 刀	刀	-	6.3	14.5	外圓伊勢刀、c、内圓傳墨 C (へラ) → d、冠部木彌頭、NO.3	
7	283 土 土 刻 刀	土 刻 刀	刀	21.8	-	(31.7)	外圓口鋸部 a → b、体部 c → d (へラ)、内圓口鋸部 a → b → d (へラ)、体部 c (へラ) → b → c、白附、NO.2	A ₂
153-1	292 土 土 刻 刀	土 刻 刀	刀	15.9	6.9	23.1	外圓 L型鋸部 b、体部 c → d、内圓口鋸部 b、体部 c (へラ)、浅鉢水瓶頭、NO.1 互に B	
2	295 磁土下 刻 刀	土 刻 刀	刀	-	7.7	(32.2)	外圓口鋸部 b、体部 c (へラ)、内圓口鋸部 b、体部 c (へラ)、下平 c、浅鉢水瓶頭 大量 D	
3	293 土 土 刻 刀	土 刻 刀	刀	16.5	7.3	31.0	外圓口鋸部 b、d (へラ)、体部 d (へラ)、内圓口鋸部 b、d (へラ)、体部 c (へラ)、白附 (へラ)、白附、NO.3	A ₂

H : ハサギ b : 橫ナギ c : ナギ d : ヒガキ e : 研り

25. 第18次出土遺物観察表(3)

(単位 cm)

部類No	実物No	組 容	種 別	計 測	法 算	特 徴	圖
156 1	299	土 壁 等	壁	17.3	8.0	30.9	外周口縁部b、体部d、内側口縁部b、体部c (ヘラ)、内面無色、白粉、NO.3 人型D
SI-04 (素直、平安)							
160- 1	313	灰陶25.6周	上 鋼 筒	耳	14.0	6.1	8.4
2	241 302	カマド内 土 蔊 等	环(大型)	-	8.4	(3.2)	外周口クロ?、颈部付近ヘ(ク)、内面口クロ?、内面内ハタリか
3	245 304	カマド内 土 蔊 等	环(小)	門牌	周縁 13.2	高さ 6.0	外周口クロ?、内面口クロ?、クロ付は不明瞭
4	352 p12.加土	上 鋼 筒	壁(井筒形)	-	9.6	(3.3)	外周c→e、内面c、クロ不規則
5	131	鐵 7.7	鐵 瓶 筒	环	-	7.7	(1.35)
6	132	鐵 1.7	鐵 瓶 筒	环	-	8.4	(2.6)
7	131	鐵 1.7	鐵 瓶 筒	环	14.5	8.0	4.5
8	260	8.7? 内 漆 直 筒	漆 直 筒	环	15.1	8.8	4.5
9	260	8.7? 内 漆 直 筒	漆 直 筒	环	14.0	8.2	4.1
10	267	8.8 (2) 漆 直 筒	漆 直 筒	环	13.6	7.4	3.9
11	353	カマド内 漆 直 筒	漆 直 筒	环	13.1	-	(3.2)
12	320	漆 7.6? 漆 素 直	漆 素 直	环	-	7.6	(0.8)
13	351	漆 5.4 (1) 漆 素 直	漆 素 直	环	11.0	6.3	3.4
14	269	漆 5.4 (2) 漆 素 直	漆 素 直	环	15.6	6.5	4.0
15	428	漆 5.4 (3) 金銀製品 磁、先失	金銀製品	磁	高さ3.1 幅 22.1	厚さ 17.8	鉢。p12.上面
161- 1	131	漆 1.7 盒 黄黑調品 磁	漆	高さ8.0 幅8.6	0.45	鉢。黒朱墨文調	
2	425	漆 5.4 (2) 金銀製品 不 明	金銀製品	不 明	今高 (10.0)	0.1	鉢。船形に水質模様、卓?
3	427	漆 5.4 (4) 金銀製品 不 明	金銀製品	不 明	高さ3.1	1.3	鉢。?
4	426	漆 5.4 (5) 金銀製品 不 明	金銀製品	不 明	33.0	-	鉢。紋章あるいは町?
5	381	漆 5.4 (6) 金銀製品 不 明	金銀製品	不 明	約3.8	0.4	鉢。紋章あるいは町?
SD-08							
163- 1	55 65	漆 千十郎 筒	鉢	口径 (26.0)	底径 (8.8)	高さ 11.0	外周口縁部b、体部c、内側口縁部b、体部c、送頭木製頭、舟脚
2	60	漆 上 附 筒	壁	-	8.4	(5.4)	外周口縁部c、内側口縁部c、送頭木製頭、舟脚
3a 3b	56 60	漆 土 一層 瓦 筒	壁	16.0	7.8	(4.5)	外周口クロ?、内面口クロ?、底部ヘタ切り
4	62	漆 土 二層 瓦 筒	漆 瓦 筒	11.0	-	(4.1)	外周口クロ?、内面口クロ?
5	141 28	漆 土 二層 瓦 筒	鉢	14.6	-	(10.7)	外周口クロ?、内面口クロ?、船形
6	62	漆 土 二層 瓦 筒	漆 瓦 筒	-	-	-	外周口クロ?、内面口クロ?、船形ヘタ
7	67	漆 土 二層 瓦 筒	鉢	-	-	-	外周平行のみ、内面内弧のあと裏張。口付
T字形状遺物(11)(C)							
165 1	264	漆 土 一層 筒	土 壁 筒	高 环	19.95	-	(3.3)
2	344 157	漆 土 一層 筒	土 壁 筒	环(小)	6.7	-	(3.75)
3	85	漆 土 一層 筒	石 制 筒	月 旗	高さ3.3	幅 2.15	厚さ0.9
4	155	漆 土 一層 筒	石 制 筒	月 旗	(3.0)	(2.1)	(0.6)
S字形状遺物(11)(C)							
167 1	175	漆 土 一層 筒	土 壁 筒	环	口径 12.0	底径 5.5	外周口縁部b、体部d、P型J、黑色起算、白粉

26. 第18次出土遺物觀察表(4)

(厘米 cm)

部類名	品目名	基 本	規 格	等 級	法 令	情	備
167- 2	182 道 土 上 植 物 耕 破	-	-	(10.1)	外園口徑e、表面b、d、内面縫合部c→e (ヘラ)、表面g		A.
7号の伝統色 (E-11, 12) (シenko)							
169- 1	321 清 池 増 土 地 直 年	-	56.0	(3.6)	外園口径c (ヘラ) → d (ヘラ)、内面黄褐d (ヘラ)、黑色處理、白刷		
SD-35 (K-13+12トレンシング)							
169- 2	476 鳥 土 上 植 物 種	36.3	-	3.85	外園全園c→d、内面白邊暗d、黑色E洋、白刷		
3	466 鳥 土 深 水 植 年	-	10.4	(3.4)	外園ロクロ、園内ヘラ切り、内園ロクロ		
4	405 道 小 深 水 植 年	-	9.2	(1.0)	外園ロクロ、园内ヘラ切り?→c、内園ロクロ		
SD-36 (中段)							
179- 1	41 鳥 土 石 年 年	長さ (5.8)	幅 (4.3)	厚さ (1.7)	表面布目、凸面頭目→テテ済し、鏡成不良、青平。(古代)		
SD-37							
175- 2	188 墓 土 上 植 物 破	口徑	表面	裏面	外園口徑暗b、表面c ?、内面d、黑色處理、SD-31と間違か		E.?
3	188 墓 土 土質伊豆 破	八 面	-	6.8	(3.7)	C.、底部を切り、黒込みに若干赤色部分が有	
4	189 墓 土 土質伊豆 破	小 面	-	6.6	(3.6)	D.、内面未沿り?	
5	7 道 土 上 破 年	平 破	厚さ (4.3)	厚さ (3.3)	門面右石、芦面ナギ?、土石底面、原瓦 (古代)		
6	188 墓 土 破 年	平 正	厚さ (3.6)	厚さ (10.8)	凸面右石、凸面地盤 (A.)、(古?)		
SD-38							
180- 1	77 墓 土 土質生 破 小 面	口徑	表面	裏面	A. ロクロ、内面未切り、深研		
SD-39							
180- 2	432 両 破 植 物 破 破 年	-	-	-	外園ロクロ、内面ロ鉢状のクレ、斜削えて直線		
直角外 (1. 1回)							
183- 1	112 1 大 木 金 破 土 上 植 物 破	-	7.9	(1.25)	外園ロクロ (直角削り)、内面d、黑色處理、青苔、削り出し?		
2	26 1 大 木 金 破 土質土破 破 小 面	-	5.8	(1.2)	C.、ロクロ、底部未切り、摩手		
3	413 1 大 木 金 破 土質高瀬 破 破	-	7.2	(1.0)	美石形、文政 (直角)、1回削		
4	26 1 大 木 金 破 土上植土 破 小 面	-	7.4	(1.3)	D.、ロクロ、内面未切り、房下、植物陰影と斜面か		
5	416 1 大 木 金 破 土中植土 破 破	-	6.4	(1.4)	植物、削り出し音谷、難い直角、(古?)		
6	108 1 大 木 金 破 植 物 破 不	27.0	-	- (4.0)	外園ロクロ、直角削れc (ヘラ)、内面ロクロ、削り出し不規、青苔		
7	22 1 大 木 金 破 土質高瀬 破 破	-	-	-	削れ、頭7条 (頭高い)、薄手美形状?, 12c		
8	23 1 大 木 金 破 土質高瀬 破 丸 破	厚さ (5.3)	厚さ (4.2)	厚さ (2.5)	直角ナギ、凸面ニア、難い直角		
9	25 1 大 木 金 破 土質高瀬 破 土質配石 破 年	2.9	2.5	0.85	難、墨書き4.0g、難物?		
10	413 P-12 1 大 木 金 破 土 上 植 物 破 (小)	口徑	表面	裏面	外園上部c、下部c→c、内面d→c (直角)、直斜		小柱 A?
11	336 P-12 1 大 木 金 破 土 土 耕 破	-	-	-	外園ロ鉢状b、多葉c→d、内面d縫合b、内葉c→d、難物、直斜		
12	143 1 大 木 金 破 土質土破 破 小 破	10.8	-	(2.0)	A. ロクロ		
13	422 1 大 木 金 破 土質高瀬 破	-	34.2	-	(6.1) ロクロ、難直?、12c~13c		
14	26 1 大 木 金 破 破 破 不 可	厚さ (5.1)	厚さ (5.1)	厚さ (0.5)	丸ナギ、大頭品		

27. 第18次出土遺物觀察表(4)

(単位 cm)

出土地點	遺物名	層位	種類	質地	文	様	特徴
仰生上部							
185-1	258	I 区 漢 塚	III 青 銅	銅	漢文 (LR)	-	口径 底径 高さ 27.2 6.0 45.0 □筒形内外面・底部内面・底面周縁・側面腰式以降
2	95	SU 02	壇 I 磨	青?	-	沈羅文(二本一組)	十三層式
3	195	SU-04	壇 I 磨	青?	-	沈羅文(二本一組)	十三層式
4	226	II ph.99 K	壇 I 磨	青	漢文 (單行)	沈羅文(二本一組)	十五層式
5	22	O - 12 区	天地透し	青?	漢文 (單行)	山西沈羅文	-

第3章 分析と考察

ここでは、第16～18次の出土遺物・検出遺構について分析・考察を行う。出土遺物は縄文時代～江戸時代のものがあるが、数量の多い古墳時代と中世～近世を扱う。

第1節 古墳時代

古墳時代の遺物・遺構は各次調査区毎に存在するが、ここではそれらを総合的に扱う。

1. 土師器の分類

土器の分類は、第14次調査時の分類（佐藤洋：1987）を基に新たに分類を行った。その結果、中期～後期の土器群は5大別11形式41類型が明らかとなった。これは、器種別に形態や法量をグルーピングして得られたものである。

坏

坏A：体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部が屈折し端部が開くもの。この類型には、内外面に屈折（稜）をもつもの（A₁）や内面に屈折（稜）をもつもの（A₂）、さらに、内外面の屈折が不明瞭あるいは省略され、口縁端部がやや外反するもの（A₃）がある。

底部は、平底・凹底・丸底がある。（A₁：第31図1・A₂：第87図9・A₃：第87図8）

坏B：体部が内湾しながら立ち上がり、そのまま口縁部に至るもの。この類型には、深浅の差がある。底部は平底・丸底がある。（第12図3・第89図3・第100図1）

坏C：体部と口縁部の境に段をもつもので、口縁部は直立ぎみのものが多い。境の段は器高の上半部にある。底部は凹底・丸底があるが、平底は不明である。須恵器坏の影響で出現するものであろう。（第12図1・第19図1）

坏D：体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部がほぼ直立するもの。体部と口縁部の境に稜が形成されるものと不明瞭なものがある。また、口縁部は若干内傾や外傾の変異がみられる。底部は凹底・丸底のものがある。（第19図2・第80図2）

坏E：体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反あるいは外傾するもの。体部と口縁部の境に稜や段をもつ。稜や段が器高の上半部に位置するもの（E₁）と下半部に位置するもの（E₂）がある。E₁類には平底・丸底、E₂には丸底がある。（E₁：第85図4・E₂：第137図3）

坏類は変異が大きく、今後は資料の増加に伴って分離独立すべきものが存在する可能性もある。また、黒色処理や赤彩を施すものがある。黒色処理は坏E類に特徴的にみられるが、坏A・C類にも存在することが判明した。赤彩土器には、器表面に赤色顔料を塗布したもの（赤色A）と、あたかも粘土中に顔料を混ぜたごとく胎土自身が赤色～赤褐色を呈するもの（赤色

B) がある。後者には胎土中の砂粒が目立たず、精製の胎土のものがある。この他にも、赤彩文様と思われるもの（第74図2）や内面黒色処理・外面赤彩を施した破片がE類にみられる。

高环 环部と脚部が揃っているものが少ないので、脚部に主眼をおく。

高环A：脚部が「ハ」字状に開く、開脚形のもの。A類には、脚部が末広がりのもの（A₁）と裾部として明瞭に区別できないが、下半部が急に広がるもの（A₂）がある。A₂類には、脚端部が捲れ上がるものがある。环部は、口縁部が外傾や外反するもの、下端の稜の有無がある。（A₁：第8図4・A₂：第89図6）

高环B：脚部に屈折があり、柱状部と裾部に区別できるもの。柱状部が中膨らみのもの（B₁）と柱状部が円筒状あるいは下方にやや開くもの（B₂）、そして、裾部が有段のもの（B₃）がある。A類同様、环部口縁が外傾・外反するものや环部下端の稜の有無があり、口縁外反や稜の消失は新しい要素とみられる。（B₁：第29図9・B₂：第71図5・B₃：第79図1）

高环C 高环Bと同じ形態で、柱状部が中実となる短脚のもの（第99図7）。このC類は、第14次調査のSI01の高环（B₂類で、やや短脚化し柱状部の器厚が肥厚したもの）や第29図4から形態変化したものと予想される。

高环には、この他に須恵器の影響とみられる短脚で透かし（長方形か）のある破片（第59図4）がある。また、环同様赤彩土器（赤色A・B）がある。

壺 壺類は、大型・中型のものが壺と区別しにくいが、球形で体部最大径が、頸部径の約2倍以上のものを一応の目安とした。なお、大型のものはちょうど2倍前後で、器面の特徴や調整などから分類したものもあり、また器高が30cm以上・25cm以下を基準に3種に大別した。

大型壺A：体部が球形で、「く」字状口縁のもの。口縁部が外傾するもの（A₁）と外反するもの（A₂）がある。（A₁：第89図9・A₂：第155図3）

大型壺B：複合口縁（有段）のもの。口縁部の粘土紐を折り返すか、段が残るように貼付して段を形成している。（第30図2）

大型壺C：口縁部の中位に粘土紐を貼付して、凸帶状に仕上げたもの。実際には、段状に仕上がっておりB類と類似している。（第24図5）

中型壺A：体部が球形で、「く」字状口縁のもの。（第30図6）

中型壺B：体部が球形で、口縁部が直立ぎみのもの。（第8図13・第19図3）

中型壺C：体部が球形で、口縁部が外反するもの。（第137図13）

小型壺A：口縁部径が器高や体部最大径とほぼ等しいもの。（第8図11）

小型壺B：口縁部径が体部最大径より小さく、体部はソロバン玉に近い状態を呈するもの。口縁部高は、体部高の約1/2以下である。A類より大型化する。（第8図12）

小型壺 C：口縁部が有段のもの。体部の特徴が不明で、中型になる可能性もある。(第30図4)

小型壺 D：短頸のもの。(第89図5) 須恵器短頸壺の影響であろうか。

小型壺：小型壺で、体部に穿孔をもつもの。体部は不整球形である。小型壺Bとほぼ同じ形態のもの(A)と口縁部が外反するもの(B)がある。B類は外面のほぼ全面がミガキ調整に変化している。(A：第87図2・B：第26図5)

甕 壺類は法量の差により、器高28cm以上・20cm以下を基準に3種に大別した。

大型甕 A：体部は球形に近く、口縁部が屈折して「く」字状を呈するもの。(第12図6)

大型甕 B：体部は球形に近く、口縁部が直立ぎみで上半部が外傾(外反)するもの。口縁部の下半にヘラナデを施した後に、口縁部を横ナデしたものがある。(第26図6・第154図7)

大型甕 C：体部は球形に近く、「く」字状口縁で、口縁部径が体部最大径を上回るかほぼ等しい広口のもの。(第80図8)

大型甕 D：体部中央付近に最大径をもつ胴張り長胴のもの。口縁部の屈曲が弱く、外反あるいは上半部が外反(B類の口縁部類似)する。底部に木葉痕をもつものもある。体部にミガキ調整を施すものが多い。(第75図3・第138図1)

中型甕 A：体部は球形に近く、口縁部が屈折して「く」字状を呈するもの。(第19図3・第85図8)

中型甕 B：体部が張り、口縁部に屈折がなくゆるく外反する長胴のもの。底部に木葉痕をもつものがある。(第75図4)

中型甕 C：体部が上方に開き、口縁部は屈折せずゆるく外反する広口のもの。頸部に段の付くものもある。(第96図4・第139図1)

この他に、体部の最大径が下半部にある下彫れの甕の存在も大型・中型に予想されたが、断定できるものはない。

小型甕 A：体部は球状に近く、口縁部が外傾・外反するもの。(第87図11・第137図12)

小型甕 B：体部が張り、口縁部は屈折が弱く直立あるいはゆるく外反するもの。(第99図8)

小型甕 C：体部は上方に直立あるいはやや開き、口縁部はゆるく屈曲・外反する広口のもの。口縁部径が体部最大径を上回るものが多いとみられる。また、頸部に段のつくものがある。(第74図11・第96図2)

小型甕 D：体部は直立ぎみで、口縁部が屈折するもの。(第146図2)

小型甕 E：台付のもの。台部は、高坏の脚部の形態・調整と類似している。(第74図14)

甕 法量に大小の差があり、器高25cm以上と15cm以下の2種に大別した。ただし、中型のものが存在するかは不明である。

大型瓶 A：体部が球形に近く、口縁部が「く」字状を尾する無底のもの。(第10図4)

大型瓶 B：中型甕 C と同形態で、広口・無底のもの。(第87図13・第137図15)

小型瓶 A：体部が上方に開き、口縁部に至る鉢形単孔のもの。口縁部の屈折のないもの(A₁)と、あるものの(A₂)がある。A類には、口縁部が肥厚するもの、やや外反するもの、指押え痕などがみられる。(A₁：第91図4・A₂：第26図2)

小型瓶 B：砲弾形で無底のもの。口縁部は外反する。(第74図13)

甕には、この他に第30図3の把手の出土例から、把手付甕の存在が予想される。また、底部が多孔のものも予想されたが出土していない。

以上が土師器の分類であるが、他に壺・小型鉢・ミニチュア土器・支脚用土器?が出土している。なお、本遺跡では11次調査時に関東系土師器が出土しているが、今回は出土していない。

2. 須恵器

古墳時代の須恵器は、器形全体が判明するものがなく分類は割合する。ここでは調査区毎の器種を提示するに留めたい。

第16次調査区：有蓋直口壺（台付？）・小型甕・瓶類・器台（高坏形か）・甕

第17次調査区：壺・無蓋高坏・小型壺・小型甕・二重甕？・器台（高坏形か）・甕

第18次調査区：明確に古墳時代に属するものはないようである。

なお、17次調査区付近で、過去に樽形甕が表探されている。また、調査時に、17次調査区西側の烟地表探という土師器模倣の無蓋壺（坏E類か）を、地元の方に見せていただいた。

調査時に出土した須恵器は、陶色 TK208 前後のものが主体であるが、陶邑窯と比較した場合シャープさに欠けるなど、ストレートな対比ができない。大部分は、在地などの地方窯の製品とみられ、明確に陶邑窯など遠隔地の製品と理解されるものはないように思われる。

3. 各器種の消長と土器組成

ここでは、遺構単位に器種の組み合わせを検討し、器種毎の消長や組み合う頻度などを明らかにし、二期の抽出を試みてみたい。検討する土器群は、先行研究の結果明らかにされた南小泉式から住式に属することは明らかであるが、各型式の概念や上器組成が充分明らかになっているとは言いがたい。宮城県を中心として、東北地方の土師器編年を明らかにしたのは氏家和典氏（氏家和典：1957）で、この点は高く評価されるが、氏の提示された編年資料を今日的視点からみれば、南小泉式土器のなかには壺属型式を認証していると思われるものがある。また、引田式土器には、宮城県と福島県では形態の異なる坏類が同一型式として認識され、かなり時間幅のあるものとなっている。両型式の土器組成は、型式学的に選別されたものが多く、確証がもてないものもある。こうした点から結果的に、その後の土器組成の理解に差や混乱が生じている。ここでは、この問題に充分答えることができるか分からぬが、本遺跡の組成や

表28 第16~18次調查主要遺傳器種組成表 (一)

市立小学校はトヨタ市立小学校と並んで、上河原町の北である。

表28 第16~18次調查主要消費品種相處(2)

その変遷の試案を示すことにしたい。

さて、各調査区の出土土器を主要遺構別に表1・2に示した。この表は、遺構毎にどのような器種組成となるか、さらに遺構間の器種組成の差を比較するために作成したもので、数量を示したものではない。この表に基づいて特徴を比較すると、いくつかの差を見出すことができる。たとえば、壺では壺A～D類のいずれかにE₁類が共伴するもの、E₁・E₂類が共伴するものの、E類が全く共伴しないものなど組成に差が見出せる。氏家の編年によれば、壺E₁類は引田式、壺E₂類は住社式以後と理解される。また、壺E₂類と大型壺Dは遺構内で共伴する頻度が高い。次に、小型壺のうちA類は南小泉式、B類は引田式の特徴とされている。本遺跡では過去の調査において共伴した例はないが、今回の第16次調査区SI01でA・B類の共伴例が確認でき、過渡期の現象であろう。したがって、小型壺はA類の消長の中でB類が出現し、B類の盛行期にはA類は消滅しているものと予想される。B類の出現をもって型式を区別する日安になるものと思われるが、この点はB類の消長が明確になることが望まれる。このように、各器種内での時間的变化や組み合の頻度を検討し、遺構の重複・土器の接合関係や過去の調査例を考慮した結果、以下のような器種組成及びその変化によるグループングが理解できた。

〈第1グループ〉

壺はA₁～A₃・B・C・D類があり、特にB類が主体的である。底は平底・丸底が混在し、凹底は少ない。平底から丸底へ変化していくものと考えられるが、平底の比率が比較的高い。高壺はA・B各類があるが、B₂類が多く、B₃類は不明である。壺類は大・中・小の各類型があり、小型壺A類が多く、大型壺B類の存在が特徴的である。壺類の数量は、壺類を上回る。壺は大・中・小の各類型があるが、相対的に少ない。大・中・小いずれもA類がみられ、体部が長胴化するものが現れる。大型壺B類も出現するようであるが、極めて少ない。竈は大型A類があり、おそらく小型A₁類が伴うのである。

このグループの住居跡は基本的に炉をもつ。また、このグループに属するとみられる昭和60年度調査1号住居跡（埋蔵文化財発掘調査研究所：1987）では、炉とカマドが共存しているよう、本遺跡では古いカマドの例であろう。須恵器出土例は、第17次 SI14で埋土中にTK208併行とみられる器台があり、また、第4次調査1号住居跡は炉をもつので、床面より TK216～208頃の縄が出土している。このグループは、遅くとも TK208以前であることを示している。また須恵器の出土しない住居跡のなかには、第12次調査住居跡出土土器のように壺の保有数が少なく平底である点、高壺の保有数が多い点など古相を呈するものがあり、時期的に細分されることが予想される。このグループでは、遺構単位にみた場合に壺の保有数の増加や丸底化が進行しているものとみられる。細分の問題については、資料の増加を待ちたい。

〈第2グループ〉

坏類はA₁～A₃・B・C・D類があり、A₂・B類が主体的である。平底は激減し、丸底が主体となる。遺構毎の坏保有数は、第1グループに比べ増加している。また、A・B類には、後期以後の特徴とされる黒色処理を施すものが少數出現している（第16次SI01など）。黒色処理を施す坏は、第3グループ以後に引き継がれるが、祭祀行儀などと関連して出現するものかもしれない。この坏の出自や出現時期の再検討が必要である。高坏は、A・B各類型のものがある。A₁類には脚柱状部が中実のものがあり、C類の祖形となる可能性がある。遺構単位でみた場合、高坏が出土するものとしないものの差があるが、いずれにしろ第1グループに比較して、総体的に減少している。坏部の口縁が外反するものや下端の稜の消失したものが、目立つようになる。脚部が短脚のものも、少數みられる。壺類は大・中・小あり、大型B類は段が目立たなくなる。小型壺はB類が増加し、A類は僅かに残る。C・D類もみられ多様である。小型甕はA・B類がある。このうちA類は小型壺B類に穿孔をもつものであるが、第15次調査SI3より出土している（渡辺・宮崎：1989）。甕類は大型A～C類、中型A類があり、長胴化を示すものがある。小型甕は不明である。瓶は大型A類・小型A₁類に、小型A₂類が加わるようである。

このグループの住居跡は、ほとんどカマドへ変化しているが、戸が僅かに残る。須恵器を出土した住居跡は、第16次SI08（埋土中）・第4次16号住居跡（土坑内）にあり、いずれもTK208～23頃とみられる。

〈第3グループ〉

坏はほぼ丸底であり、A₁～A₃・B・D類に、E₁類が加わる。C類は不明である。坏口縁部外面にまでミガキ調整を施すものがあり、第4グループへ引き継がれる。高坏は激減し、B₂類が残る。このB₂類は短脚化の傾向を示し、柱状部の器厚が厚手となるもの（第14次SI01）がある。壺も激減し、大型A₁類などが僅かに残る。小型甕はB類があり、外面全面ミガキ調整で、口縁部が外反するものが出現する。甕は大・中・小がある。いずれもA類が主体的であるが、大型B類・中型B類の存在が特徴的である。瓶は詳細不明である。

このグループと同時期と考えられる遠見塚古墳12トレンチ出土の第III・IV群土器（結城慎一・工藤哲司：1979）には、土師器模倣の須恵器坏がある。この坏は、今回分類した土師器坏C・E₁類と同形態の二種類であり、陶邑とは比較しにくい在地の須恵器である。なお、赤彩土器のうち、赤色Bとしたものはこのころ減少するようである。

〈第4グループ〉

坏はE₂類が新たに加わり、分類したすべての類型が出揃う。ただし、これまで伝統的に製作されていたA₁～A₃類は激減する。また、黒色処理するものと赤彩するものが、どちらが主体とは言えない状況である。高坏はほとんどみられないが、A₂類あるいはB₂類から変化したとみられるC類が出現し、短脚となる。壺も僅かで、大型A₂類・中型C類がみられる。甕は増加し、

表30 段階別主要遺構一覧

過去の調査資料	
第1段階	第15～18次調査区選択 16次 SII02・SII06・SII07・SII11 17次 SII02・SII09・SII14・SII12
第2段階	16次 SII01・SII05・SII08・SII03・SII12 17次 SII04・SII06・SII07・SII11
第3段階	16次 SII06・SII11 17次 SII02
第4段階	17次 SII01・SII03・SII18・SII09・SII10 18次 SII01・SII02・SII05・SII06・SII07・SII10

多様である。大型では、新たにD類が出現し主体となる。小型壺も多く、バラエティに富む。大型・中型の壺底部に木葉模をもつもの、中型・小型の壺頭部に段の付くものが現れる。「下膨れの長脚壺」は明確なものは確認できず、ハケ調整の壺が主体とはなっていない。壺や壺では口縁部高が大きくなり、ゆるく外反するものへ変化している。

〈第5グループ〉

本遺跡では、第4グループに後続するグループが存在する。これからは、栗圓式に相当する土器群であるが、まだ資料が少なく今後の課題としたい。

以上のグルーピングに基づいて、各グループの器種組成・各器種の消長を表29に示した。まだアバウトなグルーピングであるが、各グループはそのまま画期として理解できるものと判断し、時期的変化を示す「段階」と呼称する。なお、時期的に近接する混入品を選別廃除できなかった点や、各グループ内で時期差の予想されるものがあるなど、今後精度を高めなければならないと考えている。

4. 編年との対比

県内の土師器の編年研究には、氏家和典氏編年・宮城県教育委員会編年(丹羽茂:1983)・加藤道男氏編年(加藤道男:1989)などがある。このうち、前2者と比較する。また、最近福島県で行われた編年に関するシンポジウムのうち、柳沼賢治氏編年(柳沼賢治:1989)と比較する。ただし、簡単な対比に留めざるを得ない。

第1段階は、氏家編年の南小泉式に相当し、宮城県編年の南小泉式A~B群段階に相当するものであろう。また、柳沼編年の南小泉式古~中段階に相当するものと考えられる。第2段階は黒色処理など後期的様相が現れ初める段階で、氏家編年の引田式、宮城県編年の南小泉式B~C群段階以後とみられる。柳沼編年では、南小泉式新段階から引田式古段階に相当するものであろう。第3段階は、従来資料が少なく、県内では充分に区別認識されていなかった段階である。この段階は、特に壺E₁類と壺大型B類・中型B類の出現および壺A₃類の増加が特徴的である。住社式に至る過渡的な様相をもつ。氏家編年の引田式から福島県朽木遺跡資料を分離し、「佐平林式」を福島県では提唱されたが(日黒吉明他:1978)、これに近い内容をもっているようである。また、柳沼編年の引田式新段階に相当するものであろう。第4段階は、氏家編年の住社式である。柳沼編年では住社式古段階を中心に、新段階を含んでいるもの(第18次SI01出土土器など)と考えられる。

なお、第1段階以前に、塩釜式との過渡的な段階が存在するのかどうか問題となるが、この点は不明である。今回は出土していないが、第11次調査の住居跡や溝跡から関東系土器が出土し、これらは第4~5段階の土器群と関連するものとみられる。第4段階から第5段階への変化にはなお介在する土器群が予想されるが、本遺跡では不明である。おそらく、栗遺跡の9・

10号住居跡出土土器（東北学院大学研究部：1979）例のような土器群が、住社式の終末あるいは過渡期として予想される。続く第5段階の土器の把握も、今後の資料の増加を待ちたい。

5. 遺構の時期

以上のような土器の分類、段階の設定に基づいて、遺構を選別したものを表30に示した。本遺跡の古墳時代の集落跡は、第2段階を主体とするようであるが、時期を確定できない遺構も多い。今回も例外ではなく、確定できなかった遺構については出土遺物や重複関係から、以下のようにまとめることができる。

第16次

第1段階以前：SI03・SK13、第2段階以前：SI09・SK14、第3段階以前：SK07・09、第4～5段階：SD05

第17次

第1段階以前：SK15～20・SK27、第1～2段階：SI06・SI17、第1～3段階：SK28、第2段階以前：SI16、第2段階以後：SI13、第2～3段階：SI15、第3段階以後：SK26・SD12、古墳時代（段階不明）：SI19

第18次

第2段階以前：SD20、第4段階以前：SK13・SK15・SD04、第4段階頃？：SK05・SD03・SD05・3号敏状遺構・4号敏状遺構・SX01・SX03、第4段階以後：SK06～08、古墳時代（段階不明）：SI03・SD24

6. 注目される遺構・遺物

次に各調査区で注目される特徴的な遺構・遺物についてふれておきたい。

〈土器製作〉第16次調査では、火廻のないSI05で粘土溜の土坑が検出され、工房跡あるいはその関連施設と考えられた。この土坑の粘土中からは、捏ね鉢として転用された須恵器の壺下半部が出土した（写真3左・上から2段目）。なお、壺上半部破片は、床面とSK12から出土したもののが接合した。さて、粘土は前述したように、単味で土器焼成実験を陶芸家の大場拓俊氏にしていただいたところ、製作が可能であることが判明している。したがって、SI05の性格は土器製作に関連する施設とみられ、本遺跡では初めての検出である。

〈SK12について〉第16次調査 SK12は出土遺物が特徴的で、出土土器の約九割が壺・高壺・壺（中型・小型が出土し、後者が主体）で占められ、これに若干の壺・甌・大型壺・須恵器壺がある。調査時でテンバコ約4箱分の量があり、本遺跡の1基の遺構の土器量としては異常に多い。器種組成の偏在性は、祭祀行為を示唆するものと思われ、行為後に土坑に廃棄されたものと考えられる。また、黒色処理した壺も出土している点も注目される。この壺は、初現期に祭祀用として出現し、集落内や墓前の祭祀に使用されたのではないかと予想している。長野県

などでも5世紀後半頃に、黒色土器が出現しているよう興味深い(原明芳:1989)。なお、この種の土器は、一般に普及するのは第4段階以後である。また、この土坑では木炭片・焼土と共に、鉄滓2点の出土が注目される。鉄滓の出土は、本遺跡内で鉄器生産が第2段階には始まっていたことを示すものであろう。さらに、大沢正巳氏の分析(第4章参照)では、この鉄滓が大陸系の鉄素材を原料としている可能性が高いとの結果を得ている。やや先行する時期には、在地の須恵器生産も開始されており、仙台付近では在地首長が先進地から工人あるいは技術を積極的に取り入れていたと評価されよう。なお、本遺跡では第14次調査SD07(第4段階以前)からも鉄滓1点、また、古墳時代の鉄製品は、これまでに刀子・鉄鏃・鎌?が出土している。

〈石製模造品の製作〉第16次調査SI08では、本遺跡で初めて石製模造品の製作工程を知ることのできる資料が得られた(第22図)。この住居跡は、模造品の工房を兼ねていたことになる。その工程は、まず集落内に一定の大きさの母岩を搬入し、1段階として剥離加工や切断調整(施溝は確認できない)を行って、目的の大きさに近づける(荒割)。荒割のものは、SK12でも出土している。荒割と次の形削とは、区別のつけにくいものもある。2段階として、前述の加工を側辺部を中心に加工し、さらに目的の大きさに近づける(形削)。3段階はさらに加工を加え、円板や剣形など目的の形が明確になる整形の段階である。続く4段階は、研磨や穿孔の段階と考えられるが、この段階の資料は得られなかった。5段階として完成となる。また、加工する過程で生じたチップも出土している。石質は、粘板岩・片岩に近いものと思われる。他に、砥石はないが敲石が出土しており、関連するものと予想される。県内では、専用工房や工房を兼ねる住居跡の発見はないようで、貴重である。なお、古墳時代の祭祀体系を明らかにし、これへの位置づけが今後必要であろう。

〈出土鏡〉第17次調査SD01より、銅鏡が出土している(第123図)。この鏡は全体の約1/4の破片で、鉢の部分は分離している。青緑色の鏡がつき変形していて、全体の特徴は明確でない。推定鏡径約6.5cm、厚さ0.3cm(鏡縁部)である。鏡背の文様は鏡上上がりが悪く、鏡が付着して判然としない。乳が1ヶ所認められ、鉢は円鉢である。最も内側の円圏を鉢座と判断して作図した。内区では乳と弧状の文様らしきものがあり、外区には一部に鋸歯文帯がみられる。以上の特徴から、小型鋤製鏡と考えられる。内区の文様が定まらない点鏡式は不明であるが、あるいは擬文鏡の一種かもしれない。この鏡はSD01(中世~近世)の南壁付近より出土し、ちょうどSD09重複する部分に相当する。鏡は古墳時代中期以前とみられるが、遺構の年代とは一致しない。なお、出土鏡としては、県内で3例目となる。

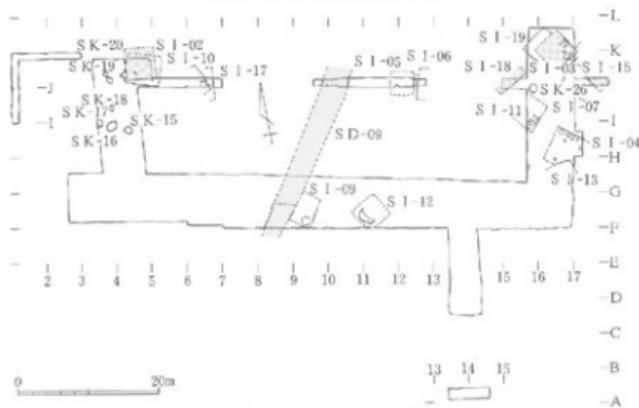
〈焼失住居跡〉第16次SI01・第18次SI01は焼失住居跡で炭化材が比較的良く残存していた。第16次SI01は垂木材の残りは悪いが、桁・梁材とみられる部材が位置関係を保って検出された。その外周には、炭化材片や粘土質シルトの混じる比較的厚い焼土が分布している。焼土に

粘土質シルトが混じるのは何故なのか。あるいは土屋根であった可能性があるかもしれない。次に、第18次 SI01 は垂木材とみられるものが多く、分割材を使用しているようである。これらの配置には、一定の方向性や単位をもっている。また、枘穴をもつ材（第134図C-5）や板状に比較的薄く加工した材もみられる。炭混じりの焼土は、柱穴に沿うように分布しているが、北側では壁側へ2条件びており、間仕切りや入口施設を反映している可能性もある。

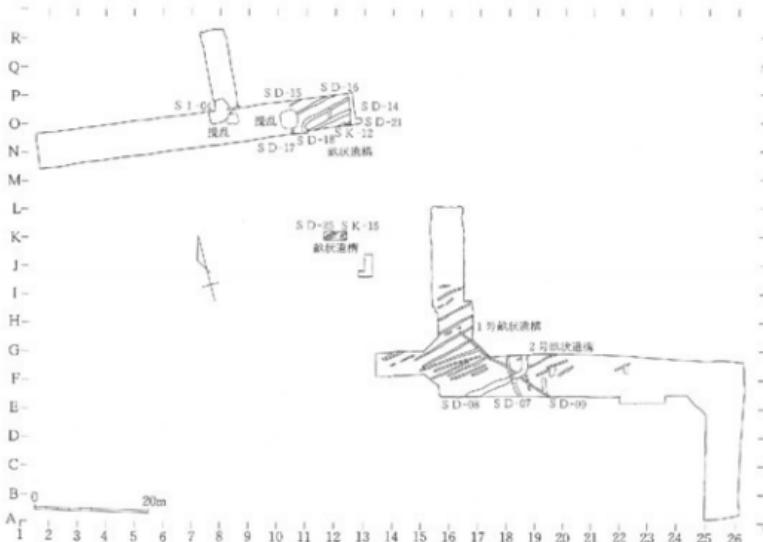
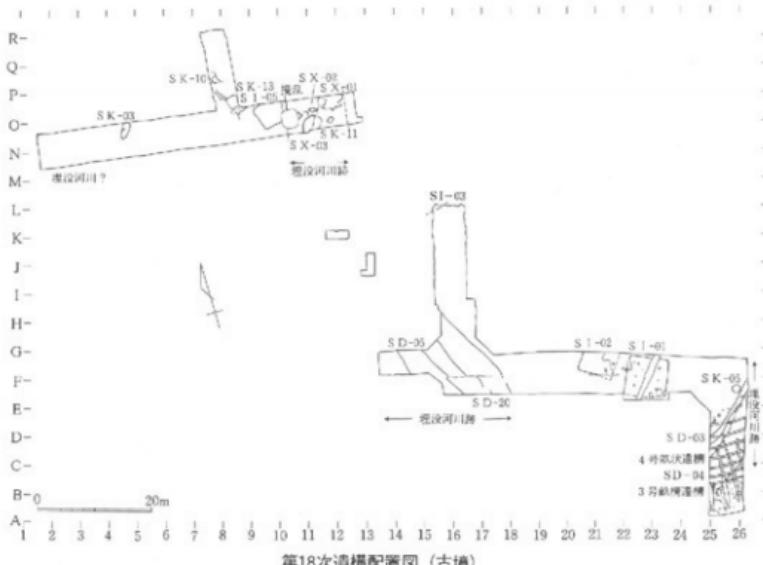
以上が、堅穴住居跡の上屋構造を予想できる貴重な事例であるが、他に第16次 SI07・SI11、第18次 SI02 も焼失住居である。また、炭化材の樹種同定の結果、5種類以上の樹種を使用していることが明らかになっている（第4章参照）。



第16次遺構配電図（古墳時代）



第17次遺構配電図（古墳時代）
第186図 各次時代別遺構配電図（1）



第187図 各次時代別造構配置図（2）

第2節 中世・近世

1. 中世遺物

1) 土師質土器

土師質土器には、皿類（かわらけ）を主体に壺・鉢類がある。その概要は、第16次が1,309点（皿1,307点・鉢2点）、第17次が118点（皿109点・壺7点・鉢2点）、第18次が10点（皿のみ）で、破片総数1,437点が出土した。各次調査区の皿類の出土率を比較すると、第16次1.57/1m²・第17次0.14/1m²・第18次0.009/1m²の個数となる。各調査区は200～250mで近接しており、著しい差を示している。換言すれば、皿類は特定の場所で大量に消費されていることになる。ちなみに、第16次の皿類出土量は第17次の約12倍、第18次の約131倍の量で、皿類の性格・使用方法を反映している。本遺跡では、むしろ第18次の出土傾向が一般的である。また、古代の集落跡出土土師器とは、その傾向を異にしている。なお、壺・皿以外の器種は、後述する中世陶磁器の項で扱う。

分類

さて、ここでは壺・皿について分類を行う。

壺 全体の器形が理解できるものはないが、壺と予想されるものを扱う。

壺A：輪高台のもの。高台は貼付によるものか不明で、高台内は屈折なく皿状にくぼむ。内外面に粗雑なナデ及びミガキ調整を施す。ミガキは、高台内にもみられる。内外面は赤褐色を呈し、堅地で砂粒はほとんど含まれないようである。ロクロ使用と予想されるが、明確ではない。（第116図2）

壺B：体部が内窪して立ち上がり、底部の厚い平高台のもの。ロクロ使用（底部回転糸切り）で、内面は再調整によりロクロ目を消去している。内外面は橙色を呈するが、芯の部分は壺A同様黄褐色を呈している。焼成は堅致で気孔がみられ、砂粒は僅かである。深皿の可能性もあるが、壺として扱う。（第110図7）

皿 皿は、法量・ロクロの使用の有無・器厚差により分類できる。法量差によって区分し、ロクロを使用しないものをA、使用するものをBとし、形態・器厚等で細分する。法量差は、口径12～13cm代（底径は主に7～8cm代）のものを大皿（L）、口径6～8cm代（底径は主に4～5cm代）のものを小皿（S）とする。なお、口径9～10cm代、底径5～6cm代のものが僅かにあるが、今回は小皿として扱っておく。器厚差は、底部や体部下半に主眼をおき、厚さ1cm前後のものを厚手、厚さ0.4～0.6cmを薄手とする。

A類：A類は手づくね手法で製作されたもので、底部は丸底あるいは丸底風平底である。口縁部に横ナデ調整を施す。型押成形のものはない。大小の皿の存在が予想されるが、

大皿は確認できない。個体数は少ない。3種に細分される。

SA₁類(厚手)：丸底で、口縁部に横ナデ(1段)調整を施す。底部との境に明瞭な屈曲をもち、底部には不明瞭な指頭痕がみられる。口縁端部は、三角形状を見する。厚手で、灰白色を呈している。(第110図5)

SA₂類(厚手)：粘土円板の縁辺を銷み上げて成形したと思われる厚手のものである。口縁部は、横ナデを施す。底部外面は平滑で、口縁部との境に稜をもつ。丸底風平底である。稜の一部にけずり調整がみられる。(第63図23)

SA₃類(薄手)：全体は不明だが、口縁部横ナデが底部近くまでみられる。底部は丸底風平底である。口縁部との境に稜ではなく、底面に指頭痕がみられる。薄手である。(第63図26)

B類：B類はロクロ使用のもので、大皿、小皿があり、厚手・薄手の差が認められる。大皿(L)は6種類、小皿(S)は8種類に細分した。底部切り離しは、基本的に回転糸切りである。

LB₁類(厚手)：全体に厚手で、体部は内弯ぎみに立ち上がる。底部糸切りで、見込み(内底面)に指ナデ調整はみられない。(第56図7)

LB₂類(厚手)：全体に厚手で、体部は内弯ぎみに立ち上がる。底部糸切りで、見込みに指ナデ調整が施される。外底面には糸切り後に板状圧痕の有無が認められる。口縁端部は、三角形状を呈する。(第124図2・3)

LB₃類(薄手)：全体の器形は不明で、底部糸切り、見込みに指ナデ調整はない。外底面の板状圧痕は付かないようである。薄手である。(第56図2)

LB₄類(薄手)：体部は内弯ぎみに立ち上がり、立ち上がりがLB₁～₃類より急である。底部糸切りで、見込みに指ナデ調整・外底面に板状圧痕が認められる。薄手である。本類が最も主体である。(第51図28)なお、見込みの指ナデ調整の例を第52図1・2に示した。

LB₅類(薄手)：全体の器形は不明であるが、ロクロ目が比較的明瞭なものである。大型品として扱ったが、その中では小ぶりの一群である。底部糸切りで、見込み指ナデ調整や外底面の板状圧痕はみられない。比較的薄手である。(第64図2)

LB₆類：その他のもの。類型化できるかどうか判断できないものを一括する。本類には、口縁端部が屈折し稜を形成するもの(第35図15)、口縁端部が外反するもの(第51図29)、口縁端部が外方へ屈折するもの(第65図8)などがある。いずれも薄手のものである。

SB₁類(厚手)：口径・底径の差が大きい厚手のもので、口・底径比0.4前後である。体部にゆるい屈曲をもつ。底部は糸切りであろう。(第115図12)

SB₂類(厚手)：口・底比約0.6前後の厚手のもので、底部は高台状に厚く切り離されている。糸切りは、幅広で低速回転によるものであろう。内底面が凸状を呈するものもある。

(第56図3・4)

SB₃類(厚手)：直線的に外傾して立ち上がる比較的厚手のものである。口・底径比は約0.6である。SB類の底部切り離しは回転糸切りであるが、本類には静止糸切りもみられる。(第56図1)

SB₄類(厚手)：口径と底径の差が小さい厚手のもので、見込みに指ナデ調整を加える。口・底径比は0.7～0.8である。底部は明確ではないが、静止糸切りの可能性がある。(第35図4・第64図4)

SB₅類(薄手)：体部外面に屈曲をもつ薄手のもので、見込みに指ナデ調整を加える。口・底径比は0.7前後である。上半部は比較的直立ぎみである。(第51図8)

SB₆類(薄手)：外傾するか、やや内弯ぎみに立ち上がり、口径と底径の差が比較的小さい薄手のもので、見込みに指ナデ調整、外底面に板状圧痕がみられる。口・底比は0.7前後で、やや変移が大きい。まれに、口縁端部が平坦あるいは内ソギとなるものや器高の低いものがある。SB類では、本類が主体となる。(第51図23・第52図2)

SB₇類(薄手)：体部の内弯度の比較的強い薄手のもので、見込み指ナデ調整、外底面に板状圧痕がみられる。口・底径比0.6～0.7である。(第35図12・第51図30)

SB₈類(薄手)：体部は外傾して直線的に立ち上がるものとみられ、見込みの指ナデ調整や外底面の板状圧痕はみられない。口・底径比は明確ではないが、0.6前後であろうか。数量が少ないので明確ではないが、将来は細分が可能かもしれない。薄手とやや厚手のものがあり、底部は糸切りである。(第65図4・5)

その他のSB類：分類不可能のものが多数存在し、今後類型が増加する可能性もある。

以上が土師質土器の分類であるが、小型の鉢や古代の赤焼土器などと区別しにくいものもある。

次に、遺構別の出土傾向を検討し、各種型の組み合わせ及び消長について考えてみたい。出土傾向については、表31・32に示した。まず、第16次出土資料を検討する。この表をみると、SD02が独自の組成を示している。手づくねのものはないが、LB₁・SB₂・SB₃類の組成が分かり、厚手のものが主体で、薄手のLB₅類が加わる。この溝跡から在地鉢・中国青磁皿が出土し、前者は13C後半～14C前半、後者は上層より出土し14C前半ないし中頃と考えられる。従って、土師質皿は鎌倉時代と理解できる。さらに、SB₂類は鎌倉との比較(服部実喜：1984・河野真知郎：1986)から、12C末～13C前半に納まるものと推定され、この組成中古相を呈するものと考えたい。

また、SD01 8a層とSX02(SB01)の皿類組成は、LB₄・SB₆・SB₇の各類の組み合わせに共通性がみられ、これにLB₅・SB₄類が僅かにみられる。SD01では、底面で14C後半～15C前

半の中国青磁玉縁碗、10・11層で15C前半頃の中国青磁盤が出土されている。横脚跡は底面で検出されたが、SD01 南壁側では横脚柱穴跡が 8 a 層上面より掘り込まれていることから、8 a 層中の皿類は先の玉縁碗の年代より古いと考えられる。SD01 開削後で、横脚構築以前の土器群と評価してよいのではないか。一方、8 a 層と共通する SX02 (SB01) の皿類は、土壘構築以前のもので、共伴した温美・在地の陶器は、同時期かこれより古いもので矛盾しない。薄手で法量に規格性がみられ、14C中葉前後と推定しておきたい。また SD01 は SD02 より新しいことから、LB₄類から LB₅類へ変化したものと考えられ、皿類の薄手化は14C前半頃に始まるものと想定される。鎌倉でも、薄手化の傾向が指摘されている（河野真知郎：1986）。

土壘積土の皿類は SX02 と共通する特徴のものや手づくね (SA 類) など古い時期のものが含まれるが、土壘上面で LB₅類の皿、14C後半の東濃産山茶碗片が出土している。LB₅類は14C後半頃の後出の類型と考えられる。同類の皿は、第17次調査 SD02 でも出土している。

VI区では、3層が最新の中世の包含層であるが、ここから SB₅類が出土した。この包含層からは、14～15C前半代の陶器が出土し、15C前半の古瀬戸陶器が最も新しい。従って、SB₅類は上・下限は明確ではないが、15C前半頃に存在した類型とみられ、前述の LB₅の消長と重複していた可能性もある。

IV区の天地返しでは比較的多くの皿片が出土し、SX02 の皿類に近い特徴もみられるが、厚手のものも多く SD02 の皿類と共通する皿類もある。SA₂・SA₃類もここより出土している。これらの皿類は、元来土壘積土中に包含されていたものと予想される。注目されるものは、14C前半以前の楠葉型瓦器碗が出土している点である。県内初の出土であり、SD02の皿組成から SX02 や SD01 8 a 層の皿組成への変化が、14C前半以後にあることを傍証するものと理解したいのだが、天地返し出土というのは、誠に残念である。

次に、第17次出土資料を検討する。

SE01 は、塙B類・皿 SA₁類及び若干の LB 類・SB 類が出土している。塙は第17次調査区の特徴で、第16次調査区では出土していない。さらに、ここからは中国青磁櫛描蓮弁文碗・常滑甕が出土し、前者は山本信夫氏の御教示では、12C後半～末頃のもので、後者は岩手県柳ノ御所跡（筆者実見）に類例があり、12C末前後と考えられる。従って、塙B類・皿 SA₁類は、12C末以前と考えられる。SE01 とほぼ同時期には、SK06・08・23 などがある。これらの遺構から、塙A・B類・白色土器片（皿？）が出土している。SK23 出土の塙Aは、類例がなく評価が定まらないが、12C代を想定しておきたい。

SK12 出土の皿には、SA₃・LB₅・SB₁類がある。このうち、SA₃類は第16次IV区、LB₅類は第16次の土壘積土より出土している。この二種類の皿は、14C前半以前と理解される。SB₁類は、本遺跡では他に出土例がない。この SB₁類に類似する例は、多賀城跡第50次調査南区第2層出

表31 溝拂別土師質土器器種組成表（第16次調査実測区分）

器種 通称	塊	手づくね皿		17 クロ 大皿		厚手 手		口 手		薄 手		土質十器		瓦質土器		馬 器	
		A	B	厚手	手	厚手	手	厚手	手	厚手	手	厚手	手	鉢	瓶	火鉢	鉢
I区 SD02				SA ₁	SA ₂	SA ₃	SA	LB ₁	LB ₂	LB ₃	LB ₄	LB ₅	LB ₆	LB ₇	LB ₈	LB ₉	
研究所 SD03						1	2		3						3	1	
V区 SD18								10							1		
II区 SX02															9	2	
II区 SB01															1		
III区 土器中															1		
II区 土器上															1		
IV区															2	1	1
VII区3層															2		
VII区5層																	
VII層20層															12	12	
VIII区															1		2

研究所：経営文化計量測定研究所 昭和63年度調査分

表32 遺構別土師質土器器種組成表（第17・18次調査実測図分）

遺構	器種	手づくね皿		口フロウ大皿				厚手薄手				口フロウ小皿				土質土器				瓦質土器		瓦鉢		火鉢		灰鉢		
		塊	手	厚手	薄手	厚手	薄手	厚手	薄手	手	薄	厚手	薄手	SB	SB	鉢	鉢	鉢	鉢	鉢	鉢	鉢	鉢	鉢	鉢	鉢		
SE01	A	4	2	SA _b	SA _c	SA _d	SA _e	LB _a	LB _b	LB _c	LB _d	LB _e	LB _f	LB _g	LB _h	SB _a	SB _b	SB _c	SB _d	SB _e	SB _f	SB _g	SB _h	SB _i	SB _j	SB _k	SB _l	
SK12	B															1	1											
SK23	C	1														2	2											
SK06	D		2													1												
SK08	E															1												
SK10	F																											1
SD04	G															22		1										4
SD07	H															2												1
SD11	I															1		1										1
SD02	J															1	2	1	22	1	1	1?	12	2		25	5	1
SD06	K																											1
SD01	L															1?	1			4						5		
SD08	M																		2								2	
(18次)																											3	
天地盤上																												
SD10	N																		1									
SD12	O																			1								
天地盤上																											2	
SD01	P																											1
SD02	Q																											2

上例など「かわらけII_b類」とする皿に側面觀・法量が近く(宮城県多賀城跡調査研究所:1987)、時期は12C代と理解されている。SB₁類も12C代と理解し、前述の SA₃・LB₃類とは時期の異なるものと考えておきたい。

SD02では各種の皿がみられ、使用期間が比較的長かったものと考えられる。上層では、中国梁付碗・皿・瓦質風炉などが出土し、16Cまで下がることが確実であることから、皿類の中にも16C代のものが含まれている可能性もある。例えば、SD01や02で SB₆類の中の口縁端部が軽く面取りされているもの(第120図12・第124図6)が、その可能性があるかもしれない。

以上の検討の結果、以下のような組成と変遷が理解できよう(第33表・第188図)。

A期: 塩A・B類、皿SA₁・SB₁類

B期: 皿SA₂・SA₃、LB₁・LB₃、SB₂・SB₃類

C期: 皿LB₄・(LB₆)、SB₄・SB₆・SB₇類

D期: 皿LB₅、SB₈類など

A期は、塩・手づくね皿・ロクロ皿の組成で、12Cと考えられ、上限は不明確だが後半から末期頃のものである。B期は13C~14C前半とみられ、器種のバラエティに富んでおり、今後類型の増加や時期的細分が可能になるものと思われる。なお、LB₆類はまれな存在である。C期は14C中葉を中心に、その前後のものと考えられる。下限が不明確であるが、この時期の皿類が最も多い。D期は、おそらく15C前半を中心としたものとみられる。この時期には、C期にみられた器種がなお存続していた可能性がある。

ここで注意したい点は、器種組成が上述のように明確に変化するのではなく、他の時期の器種を混じながら漸次変遷していくのが実態であろう。従って、上記の器種組成の変遷案は、特徴的なものを抽出して示したものにすぎない。また、A期の段階には、SA₁類の大型品(LA類)の存在も予想されたが、全く確認できなかった。これは、柳ノ御所遺跡や多賀城跡で出土していることから、遺跡の性格差によるものかもしれない。

最後に、胎土の特徴について述べておく。A期では、砂粒の目立たない比較的良好な粘土で赤褐色・橙色・灰褐色などを呈している。古代の赤焼き土器と区別しにくいものがある。B期は砂粒の目立たないもの、砂粒を多量に含むもの、粉質のものなど精粗の差が大きい。この差は、工人の違いや時間差等によるものかもしれない。C・D期のものは、細砂を含むがあまり目立たないものに統一された感がある。若干、金雲母・黒色粒子・褐色粒子(スコリア?)が含まれる場合がある。

2) 中世陶磁器

ここでは、調査区及び産地別に述べる。なお、数量に関しては、接合後の破片数である。

表33 土師質土器皿類の推定消長

時期 器種		12 C	13 C	14 C	15 C	16 C
境	A	?	-	-	-	-
	B	-	-	-	-	-
手 附 ね 皿	SA1	-	-	-	-	-
	SA2	-	-	-	?	-
	SA3	-	-	-	-	-
ロ ク ワ 皿 (大型)	LB1	-	-	?	-	-
	LB2	-	-	?	-	-
	LB3	-	-	-	-	-
	LB4	-	-	-	-	-
	LB5	-	-	-	-	?
	LB6	-	-	-	-	-
ロ ク ワ 皿 (小形)	SB1	-	-	-	-	-
	SB2	-	-	-	-	-
	SB3	-	-	-	-	-
	SB4	-	-	-	-	-
	SB5	-	-	-	-	-
	SB6	-	-	-	-	-
	SB7	-	-	-	-	-
	SB8	-	-	-	-	?

第16次調査区

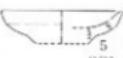
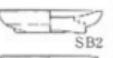
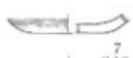
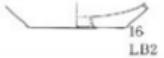
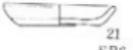
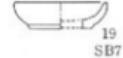
この調査区では、古瀬戸24点・常滑62点・渥美17点・東濃3点・須恵器系陶器？2点・在地107点・不明（東海地方か）4点・不明8点・中国磁器36点・瓦器1点（楠葉型）・瓦質土器1点・土師質土器1,309点が出土し、総計1,574点である。

古瀬戸 古瀬戸製品は24点であるが、内訳は平碗2点・天目茶碗2点・碗？2点・折縁皿2点・おろし皿2点・入れ子1点・盤7点・瓶類4点・小型壺？1点・合子1点である。これらは、井上喜久男氏の御教示によると13～15Cの窯窓の製品で、大窯製品はみられない。13C代のものは少なく、14C後半～15C前半のものが主体を占めている。

常滑 常滑（知多）製品は62点あり、器種を特定しにくいが甕51点・壺7点・鉢4点と理解した。鉢には、山茶碗窓系とみられるもの2点が含まれる。時期の明確でないものもあるが、13～15C前半の時期のものと考えられる。

渥美 渥美製品は17点あり、鉢1点・壺2点・大型甕14点である。時期は明確ではないが、12～13C頃のものと考えられる。

東濃 美濃東部の製品は3点あり、いずれも薄手の山茶碗である。県内では初めての出土と

	埴類	皿類 SA類	SB類	皿類 LB類
A 期	1 埴A 	3 SA1 	5 SB1 	
	2 埴B  消滅か	4 SA1 		
B 期		6 SA2 	SB2 	13 LB1 
	傳手化 ↓	7 SA3  消滅か	SB2  SB3 	14 LB1  15 LB1  16 LB2 
C 期		17 SB4 	20 SB5 	23 LB4 
		18 SB6 	21 SB6 	24 LB4 
D 期		19 SB7 	22 SB7 	25 LB6 
			法量分化か	小型化? 30 LB5 
		26 SB6 	28 SB6 	
		27 SB6 	29 SB6 	

0 10cm

- | | | | | | |
|-----|----------|-------------|----------------------|-------------|---------------------|
| 1 | 第17次SK23 | 6・7 | 第16次X02 | 26・27 | 第17次SD02 |
| 2~4 | 第17次SE01 | 8・9・11・12 | 第16次SD02 | 28・29 | 第17次SD01 |
| 5 | 第17次SK12 | 10
13~16 | 第17次SD07
第16次SD02 | 23・24
25 | 第16次SD01
第16次X02 |

第188図 南小泉遺跡土師質土器埴・皿類変遷試案

思われるが、過去の調査で須恵器などと誤認されている可能性があるかもしれない。時期は、井上喜久男・藤沢良祐両氏の御教示によると14C後半である。

須恵器系陶器 須恵器系陶器とみられるものは2点あり、壺の頸部付近の破片で叩き目は確認できない。12~13C代のものであろう。

在地陶器 ほぼ県内で生産されたと考えられる瓷器系陶器である。県内には幾つかの窯が発見されており（藤沼邦彦：1976・1982）、水沼窯を除けばいずれも生産時期は13C中葉～14C前半頃と考えられている。ちょうど、北条得宗家が県内にも所領を拡大した時期と符号する。また、後述する白石窯を例にとれば、流通圏は狭く、おそらく半径30~50kmではないかと想定され、水運や陸路が利用されたのであろう。

さて、在地陶器は総数107点出土しているが、その特徴によつて5グループに分類される。

1類、白石窯 県南の白石市内にあり、東北窯に代表される窯跡群である。焼成が良好である場合は胎土が黒色系の色調を示し、胎土中に大きな白色粒子（長石か）を含み、器表面に鉄分の噴き出しがみられる。この窯跡群の製品と考えられるものは39点あり、壺23点・鉢（無台）10点・壺3点・小型壺3点である。SD02出土例が最古で、SD01が多い。

2類、未発見の窯の製品 であろう。胎土の色調は暗緑灰色～暗青灰色のものが多く、胎土中に白色針状物質（海綿骨針）を含むのが特徴で、まれに軽石あるいは凝灰岩片を含む。本類は12点あり、すべて壺片である。VII区での出土が多く、線刻画らしきものがある。また、SK02と08の接合例もみられる。

3類、未発見の窯の製品 であろう。胎土の色調は灰色～緑灰色を呈し、焼き締めが弱く、厚手の一一群である。胎土中には、まれに軽石あるいは凝灰岩片が含まれ、2類との類縁関係が予想される。本類は26点あり、壺15点・鉢（無台）7点・擂鉢4点である。擂鉢は、擂目が1条・2条・6条のものがみられる。壺には、表面に布目圧痕をもつ例がある。

4類、未発見の窯か、あるいは白石窯の系統 と予想される。胎土の色調は、青黒色～暗緑灰色のものが多い。サンドイッチ状に色調の差がみられる場合が多い。白色粒子（長石か）や鉄分の噴き出しが、まれにみられる。本類は17点あり、壺16点・鉢1点である。SD01で出土例が多く、SX02や土壘積土中でも出土している。

5類、上記以外の在地窯の製品 と推定されるものである。本類の中には、比較的均質な砂粒を多く含むものがや目立ち、資料の増加によって一群を成す可能をもつものがある。本類は13点あり、壺5点・壺2点・鉢3点・有台鉢1点・台付皿1点・器種不明1点である。有台鉢は13C前半頃と推定され、福島県八郎窯（寺島文隆・飯村均：1987）の製品に類似する。台付皿は、須恵器系陶器の可能性もあり12~13Cと予想される。

以上、在地陶器について述べたが、「今泉城」での所見（佐藤洋：1983）の延長線上で理解し

ており、本遺跡や今泉城跡などの遺跡では複数の在地窯から供給されていたと理解される。

産地不明陶器 産地を特定できないものは11点あり、甕4点・壺3点・鉢2点・皿1点・器種不明1点である。これらには、東海地方のものと予想されるものが4点ある。

中国陶器 中国製品は36点あり、いずれも磁器である。青磁は19点で、碗14点・盤1点・皿2点・器種不明2点である。碗には、鶴蓮弁文6点・細弁蓮弁文1点・無文3点（端反り1点）・玉縁口線（内面に陽刻文様）のもの1点・器種不明2点がある。いずれも、龍泉窯系とみられる。青白磁は10点あり、小壺1点・合子蓋1点・瓶子6点・壺（瓶）蓋1点である。白磁は6点あり、印花文水滴3点・合子2点・小壺1点である。水滴は2個分とみられる。合子のうち1点は印花吳須斑文をもつもので、伊野近富氏の御教示によれば、福建省德化窯系の製品とみられる。釉調は、やや白濁している。時期は不明確である（明代か）。染付（青花）は、碗と思われる小片が1点ある。染付製品などの出土から、城館の機能が停止あるいは低下した後も、住居者がいた可能性が残る。

以上、中国陶器について述べてきたが、優品が含まれ器種もバラエティに富んでいる点、青白磁が多い点、他の調査区と比較して階層差を示しているものと思われる。

土師質土器 前述した皿以外では、鉢が2点出土している。時期は不明であるが、一応中世として扱う。鉢には、小型鉢と予想されるもの（第64図6）と口縁部の突出するもの（第63図25）がある。後者は口縁部の特徴から、近世に近い後出のものと考えられる。

瓦質土器 明確ではないが、瓦質土器らしき鉢片が1点SX02より出土している。

瓦器 瓦器は、楠葉型小型碗がIV区で1点出土している。県内では初めて確認されたものである。この瓦器は、かつて河内国攝管家領楠葉牧だった周辺で生産されたもので、生産地から直接搬入されたものか、鎌倉などを経由して間接的に入ったものか興味のある問題である。時期は、小片である点や編年が確定されていないことから、14C前半以前としておく。いずれにせよ、城館成立以前の可能性が強く、住居者の性格とも関わるものと思われる。

以上、第16次調査地点では、土師質土器の多量消費、古瀬戸焼などの大型品の存在、中国磁器の特色、山茶碗・瓦器碗という希少品の存在など、本遺跡での他の調査区にはみられない特徴が指摘できる。

第17次調査区

この調査区では、古瀬戸9点・常滑21点・渥美5点・在地51点・産地不明陶器4点・中国磁器23点・土師質土器122点・瓦質土器8点が出土しており、総計244点の陶磁器片が出土している。

古瀬戸 古瀬戸製品は9点あり、天目茶碗3点・鉢1点・盤（大鉢）2点・香炉1点・梅瓶？1点・器種不明1点である。このうち、鉄釉製品は天目茶碗と梅瓶？で、他は灰釉製品である。

天目茶碗のうち1点は、大窓期の美濃窯の製品の可能性もある。香炉は、体部に斜格子文をもつ珍しい例である。13~16Cのものがあり、14~15C前後のものが多い。SD01に多い。

常滑 常滑製品は21点あり、壺12点・鉢7点（有台6点・無台1点）・壺1点・窓口壺1点である。有台鉢は、同一個体の破片とみられる。壺のうち、SE01から出土した2点が12C末頃、有台や窓口壺は13C頃とみられる。その他は、時期が明確でない。SD01・02で多く出土している。

渥美 渥美製品は5点あり、いずれも壺あるいは壺の破片である。12~13C頃のものとみられ、SD02などで出土している。

在地陶器 在地製品は51点あり、第16次の分類に基づくと1類（白石窯）25点・2類3点・4類6点・5類17点である。1類には、壺22点・壺2点・鉢1点、2類は3点とも鉢、4類は壺4点・鉢2点、5類は壺10点・壺1点・鉢6点である。4類には格子状押印をもつものがある。5類は、第16次と同様砂粒を多く含むものや桜花印をもつもの（4点）が注意を引く。桜花印は、県内の中世窯では確認されておらず、やはり未発見の窯の存在が予想される。3類としたものは出土していない。これらは、第16次同様13C中葉~14C前半頃のものであろう。

產地不明陶器 產地不明のものは4点あり、碗？1点・壺2点・器種不明1点である。

中國磁器 中国製品はいずれも磁器で、23点出土している。内訳は、青磁17点・白磁5点・染付1点である。青磁には、薺花文碗1点・薺弁文碗8点・無文碗3点（端反2点）・輪花碗（内面に輪花文）1点・柳葉薺弁文碗1点・碗と思われるもの2点・梅瓶1点がある。これらは、龍泉窯とみられる12C後半~15C頃のものである。白磁は内面に文様をもつ印花文碗1点・文様の有無の確認できない皿4点である。碗は14C、皿は13Cのものとみられる。染付は、SD02から出土した皿1点がある。見込みに「寿」字文をもつもので、16C後半のものであろう。

第16次のものと比較すると、器種は碗・皿が主体で、瓶類は僅か1点で器種組成に大きな差が認められる。

土師質土器 前述した碗・皿以外では、鉢類2点が出土している。このうち、1点（第120図2）は、口縁部に凸帯の巡ぐる火鉢かと思われる。もう1点は詳細不明である。

瓦質土器 瓦質土器は7点あり、土風炉6点・火鉢1点である。土風炉は茶の湯などに使用する道具で、SD02の1~3層とSD06の2層より出土している。口縁部にスタンプ文、胎土に細砂が含まれている。これらは、同一個体の可能性がある。堀内明博氏の御教示では16C中~後葉とみられる。火鉢は外面の磨きが顕著で、口縁部凸帯間に雷文帯、体部上半に火窓をもつ。これは、タイプの異なる土風炉の可能性もあるが、火鉢として扱っておく。前述の土風炉とは同時期のものであろう。第16次調査区にはこれらの器種は出土していないが、これは第16次の城館がすでに衰退したためであろう。

第18次調査区

この調査区では、古瀬戸4点・常滑1点・産地不明陶器1点・中国陶器2点・土師質土器10点が出土しており、総計18点である。

古瀬戸 古瀬戸製品は4点あり、I区東端部で鉄釉皿？・鉢？各1点、II区では灰釉瓶類1点、SD01上の天地返しより灰釉鉢皿1点が出土している。小片で時期が明確ではないが、14～15C頃のものであろうか。

常滑 常滑製品は、II区西部の壺1点があるにすぎず、時期も不明である。

産地不明陶器 産地不明のものは、I区西部より出土した壺の口縁部破片1点がある。須恵器系陶器の可能性もある。

中国磁器 II区より青磁碗2点が出土している。文様の有無不明で、龍泉窯系のものとみられる。釉層の厚手と薄手のものがあり、13～14C頃のものであろうか。

土器類 皿以外の土師質土器や瓦質土器は、出土していない。

以上、調査区別・産地別に遺物を観察してきたが、これらを表34にまとめた。本遺跡では、第18次調査区のような出土傾向が一般的で、第16・17次の傾向はむしろ特異であり、住居者の性格・階層と密接に関っていると考えられる。特に、第16次調査区の遺物は、在地有力者層から城館期には、のちに国人領主クラスへと成長するような身分・階層の居住者の存在を推定させる。非日常性をもつ土師質土器皿については、地域の政治的権力の集中度と皿の数量は相関関係にあるように思われる。土師質土器皿の多さは、中国製品の出土率を下げる結果となり、関東あるいはそれ以西の遺跡の出土傾向に近い。一方、第17次調査区では12C後半頃から16Cと居住期間が長いが、第16次調査区と重複する期間をもち、少なくともこの期間は被官層や近親者の屋敷だったのでなかろうか。ここでの陶磁器の出土傾向は、在地陶器の出土率が高く、中国磁器は碗・皿に器種がほぼ限定されているのが特徴である。また、第18次調査区では建物跡の変遷が認められるが、遺物が少なく性格や評価を定めにくい。

2. 近世遺物

ここでは、調査区別に遺物について述べる。なお、以下で使用する「城下町期」は位置と環境の頃で述べたように、若林城下町の存在した寛永4年から同14・15年頃の期間を指す。従って、城下町期の遺物は、およそ1630年代を下限とすることができる。

第16次調査区

この調査区では、中国磁器2点、肥前磁器40点、瀬戸・美濃磁器2点、産地不明磁器27点、瀬戸・美濃陶器13点、唐津系陶器11点、北部九州陶器1点、岸窯系8点、大堀相馬19点、堤15点、産地不明陶器22点、瓦質土器1点、土師質土器5点があり、総計166点の陶磁器・土器類が出土している。明治以後の染付（墨絵・銅版転写）や色絵磁器などもあるが、これらは割愛す

表34 産地別出土破片数とその比率（中世）

調査区 産地	第16次		第17次		第18次		数量
	数量	%	数量	%	数量	%	
中国 磁器	36	2.29	23	9.6	2	11.1	61
古瀬戸	24	1.52	9	3.8	4	22.2	37
常滑	62	3.94	21	8.8	1	5.6	84
渥美	17	1.08	5	2.1	0	—	22
東濃	3	0.19	0	—	0	—	3
須恵器系	2	0.13	0	—	0	—	2
在地	107	6.80	51	21.3	0	—	158
不明陶器	12	0.76	4	1.7	1	5.6	17
土師質土器	1,309	83.16	118	49.4	10	55.6	1,437
瓦質土器	1	0.06	8	3.3	0	—	9
楠葉(瓦器)	1	0.06	0	—	0	—	1
計	1,574	99.99	239	100	18	100.1	1,831

る。

磁器

中国 中國磁器は2点あり、染付皿・白磁瓶類各1点である。前者は小片で特徴不明であり、後者は口縁端部に虫喰がみられる。いずれも明末頃のものと考えられ、城下町期のものであろう。

肥前 肥前磁器は40点あり、染付35点・白磁1点・色絵2点である。器種は碗8点・皿20点・壺瓶類5点・鉢2点・器種不明5点である。これらの磁器には、SD01出土の染付ひだ皿(第47図7)や山水文皿(第47図5)、IV区西部出土の染付皿(第63図1)など古手の一群がある。これらは1,630~1,640年代の製品であるが、城下町期かその直後のものと考えられる。城下町期直後の1,640~1,650年代には、SD01出土の染付皿(第47図6)などがあり、17C後半にかけて増加傾向を示す。また、いわゆる「くらわんか手」など18Cのものもある。19Cには色絵碗などが加わるが、陶器の出土が多くなり肥前磁器の出土率は下がる。城下町廃止後は畠地となつたと言われるが、17C中葉以後増加傾向を示すことから、城下町期以後も住居者がいたことは明らかであろう。

瀬戸・美濃 瀬戸・美濃磁器は2点あり、いずれも染付碗である。これらは、幕末かそれ以後のもので、SD01 II区1層・V区I e層出土である。これ以外にも表土や天井返しより出土し

ているものに可能性があるが、明確ではない。

産地不明 産地不明は27点あり、染付10点・白磁？13点・色絵（上絵付）1点・青磁？1点・不明2点である。器種は、碗9点・端反碗1点・皿3点・小环？1点・段重1点・瓶類2点・急須2点・型物1点・不明7点である。大部分は表土や天地返し出土のもので、19C以後のものであろう。染付などには、東北地方や瀬戸・美濃の製品が含まれている可能性もある。

陶器

瀬戸・美濃 瀬戸・美濃陶器は13点出土している。ほとんど美濃窯製品とみられ、鉄釉天目茶碗1点・灰釉皿4点・志野菊皿1点・鉄釉擂鉢2点・飴釉火入？1点・鉢4点（灰釉1点・鉄釉1点・長石釉2点）がある。長石釉鉢は、いわゆる「笠原鉢」である。天目茶碗・志野菊皿は大窯終末期のもので、他は連房式窯の製品であろう。16C末～18Cのものがあり、17C代が主体である。このうち、城下町期のものは、天目茶碗・志野菊皿・灰釉鉢・長石釉鉢各1点と灰釉鉢2点の計6点である。大部分は、SD01（II・V区）より出土したもので、志野菊皿はSD01（V区）6層（近世の最下層）より出土している。

唐津系陶器 唐津系のものは11点あり、灰釉碗4点（2点は京焼風）・褐色釉碗1点・青緑釉皿2点・刷毛目文皿1点・灰釉鉢？1点・鉄釉瓶1点・器種不明（灰釉）1点である。灰釉碗・褐色釉碗・青緑釉皿は、17C後半～18C前半のものである。刷毛目文皿・器種不明のものは17C代であろう。灰釉鉢？・鉄釉瓶は時期が不明確であるが、17～18Cのものであろう。大部分はSD01より出土し、特にV区1・2層に多い。確實に、城下町期と言えるものはない。

北部九州 北部九州のものは壺1点で、SD01（II区）6層より出土したものである。斑唐津に類似するもので、内面にアテ具痕を有する。これは城下町期のもので、17C前半以前のものである。

岸窯系陶器 岸窯系陶器は、福島市飯坂所在の岸窯及び周辺で予想されている窯跡群を指す。鈴木功氏の御好意で、調査資料を実見させていただいた。開窯時期はまだ明確ではないが、本遺跡の出土例から推定して、寛永年間頃と考えている。この窯の製品とみられるものは8点あり、いずれも擂鉢である。体部上半を鉄化粧し、口縁部に黒褐色の飴釉を掛けるもので、この窯の製品では古手のタイプと予想される。本遺跡などでは、この窯が調査される以前は唐津系統の一種と認定、あるいは産地不明として扱っていたものである。これまで、第9次調査区や第14次調査の近世墓などで出土しており、城下町期のものと考えている。

大堀相馬 大堀相馬統は、元禄年間頃に開窯したと伝えられる福島県浪江町に所在する民窯である。この製品は19点あり、碗6点（灰釉5点・白濁釉1点）・皿2点（白濁釉）・土瓶4点（白濁釉・灰釉山水文・黒色釉・青釉各1点）・瓶類2点（鉄釉・なまこ釉？）・器種不明3点（灰釉2点・飴釉と白濁釉の内外掛け分け1点）である。これらの製品は19C代を中心とするもの

だが、灰釉碗などには18C代に遡るものがある。大部分は、表土や天地返し出土のものである。

堤 堤焼は、元禄年間頃開窯と伝える地元（仙台市）の窯である。藩制時代には、杉山焼とも称していた民窯である。-時期文献上品も生産していたと言われるが、はっきりしない。考古学的調査も行われたことはなく、内容は未解明のままである。さて、堤の製品は15点出土し、壺5点（鉢袖3点・なまこ袖1点・不明1点）・小型壺1点（鉢袖）・鉢？2点（鉢袖）・培塿2点（鉢袖）・器種不明5点（鉢袖4点・鉢袖1点）がある。いずれも、19C前半以後と予想される。器種は、大堀相馬・肥前磁器などと競合するものはほとんどなく、この窯の性格を良く示している。大部分は、表土や天地返しより出土したものである。

产地不明 产地不明のものは22点あり、碗5点・鉢？6点・急須1点・土瓶（溢）1点・壺？1点・器種不明7点である。これらは、17~19Cのものであるが、城下町期のものはない。

瓦質土器 この土器には、SD01（V区）3層より出土した鉢1点がある。近世のものとみられるが、時期不明である。

土師質土器 この土器は5点あり、火鉢（火窓あり）1点・角鉢1点・型物（人形？）1点・器種不明2点である。火鉢は中世の可能性もあるが、城下町期のものと推定しておきたい。角鉢は、赤色顔料が塗られている。これらは、SD01（II区）・表土・天地返しより出土している。近世の皿類はないようである。

第17次調査区

この調査区では、中国磁器5点・肥前磁器23点・产地不明磁器10点・瀬戸・美濃陶器24点・唐津系陶器2点・岸窯系陶器2点・大堀相馬17点・堤6点・产地不明陶器11点・瓦質土器19点・土師質土器3点があり、計122点である。

磁器

中国 中国磁器は5点あり、いずれも染付である。碗1点・皿3点・器種不明1点である。文様は詳細不明で、底部に砂粒の付着したものもある。これらは16C末~17C前半のものと考えられ、SD01 1・2層より出土している。城下町期のものであろう。

肥前 肥前磁器は23点あり、染付17点・白磁6点である。染付は、碗8点（陶胎1点）・皿3点・瓶2点・土瓶？1点・徳利1点・壺？1点・器種不明1点である。白磁は、皿1点・紅皿1点そして、白磁か染付の無文部か不明のもの4点（碗2点・皿1点・器種不明1点）である。これらのうち、染付網目文碗（一重）が17C後半で最も古く、染付広東碗・型押白磁紅皿・白磁皿（蛇ノ目四形高台）は、19C前半頃で最も新しいものである。SD01や北側トレンチ表土に多い。城下町期のものはない。

产地不明 产地不明のものは10点あり、染付5点・白磁か染付の無文部か不明のもの3点・器種不明2点である。器種は、碗3点・小型碗1点・皿2点・鉢1点・急須1点・不明2点で

ある。白磁とみられる急須は19C前半以後とみられ、瀬戸・美濃の可能性もある。その他も19C以後のものであろう。

陶器

瀬戸・美濃 この製品は23点あり、大部分は美濃窯製品である。志野2点（碗・皿）・志野織部2点（鉄絵丸皿）・織部5点（折縁皿2点・皿1点・角向付1点・器種不明1点）・鉄釉天目茶碗2点・灰釉碗1点・灰釉皿8点（折縁皿）・段付白天目茶碗1点・黄瀬戸軸鉢？（緑斑）1点があり、これらは城下町期のものである。志野は大窯、その他は連房式窯の製品とみられる。SD01（IV～VI区）の1・2層に多く、VII区表土のものと接合するもの（志野織部皿・白天目茶碗など）がある。調査区西部のSD01やVII区付近に集中する傾向がある。

城下町以後には、5トレンチで出土した鉄絵の筒茶碗1点がある。19Cのものであろうか。

唐津系 この製品は2点出土している。青釉軸皿（17C後半～18C前半）と長石釉香炉（17Cか）である。いずれもSD01（IV・V区）出土のものである。

岸窯系 岸窯系のものは2点あり、灰釉盃？と鉄釉擂鉢である。17～18Cと予想され、城下町期のものではないようである。

大堀相馬 大堀相馬は17点あり、灰釉碗2点・白濁釉3点（碗2点・不明1点）・白濁釉端反碗3点（飴釉流し）・青灰色釉碗2点・青釉土瓶5点・なまこ釉？土瓶1点・土瓶（釉不明）1点である。皿類は確認できない。これらは、18～19Cもので、出土傾向に偏在性はみられない。表土出土のものも多いが、SD01やSK03からも出土している。

堤 堤の製品は6点あり、鉛釉焰口2点・鉢？1点・土瓶？1点・なまこ釉壺1点・器種不明（飴釉）1点である。いずれも、19Cのものと思われる。

産地不明 産地不明のものは10点あり、碗2点・皿1点・壺1点・香炉1点・器種不明5点である。時期は不明確だが、近世のものであろう。いずれも、表土出土のものである。

瓦質土器 この土器は19点あり、擂鉢18点・火鉢？1点である。擂鉢は、口縁部が外方に水平に突出するもので、擂目は太く7条前後のものである。SD01（V区）2層に多く、市内の他の遺跡でも見立つものである。本遺跡では、第7次調査区第6号土坑（井戸）で17C前半の美濃灰釉皿と共に伴し（結城慎一・工藤哲司：1983）、また、仙台城三ノ丸跡のI期の遺構より出土したもの（結城慎一・佐藤洋：1985）と類似している。今回出土したものも、17C前半の瀬戸・美濃製品と共に伴し矛盾しない。城下町期のものと考えてよい。火鉢と予想されるものも、SD01出土で、城下町期のものと思われる。

土師質土器 この土器は2点あり、詳細不明であるが鉢・壺の可能性がある。いずれも、SD01より出土し、近世のものである。

第18次調査区

この調査では、肥前磁器25点。產地不明磁器36点。瀬戸・美濃陶器7点、唐津系陶器7点、大堀相馬22点、堤10点、產地不明陶器11点があり、計118点である。本調査区はI・II区の二ヶ所に分かれており、南側のII区で多く出土し偏在性が認められる。なお、中国磁器・瓦質土器・土師質土器は出土していない。また、トレンチ出土のものはII区に含めた。

磁器

肥前 肥前磁器は25点あり、染付碗13点（I区9点・II区4点）・染付広東碗1点（I区）・染付皿3点（I区1点・II区2点）・染付壺1点（I区）・白磁？碗1点（II区）・種類不明の碗1点（I区）・青磁1点（器種不明・II区）・上絵付色絵皿1点（I区）・種類不明の壺1点（II区）・器種不明2点（I・II区各1点）である。これらのうち、染付網目文碗が最も古く、17C中～後葉である。染付広東碗・同端反碗・色絵皿などは、19C前半のものである。絶じて、江戸時代後期～幕末頃が主体である。I・II区表土や天地より出土している。

產地不明 產地不明のものは36点あり、染付碗16点（I区1点・II区15点）。染付皿2点（II区）・染付鉢1点（II区）・白磁碗7点（I区1点・II区6点）・白磁皿3点（I区1点・II区2点）・白磁鉢1点（I区）・白磁徳利1点（II区）・白磁壺1点（II区）・白磁器器種不明2点（I区）・色絵碗2点（I・II区各1点）・色絵皿1点（I区）・色絵鉢1点（I区）・種類不明の瓶1点（II区）である。このうち、白磁としたものには、染付の無文部破片の可能性もある。瀬戸・美濃、肥前、地方窯の可能性があるが、不明確である。I・II区の天地返しに多い。

陶器

瀬戸・美濃 瀬戸・美濃製品は7点あり、灰釉碗1点（II区）・灰釉皿1点（II区）・志野皿4点（I区）・鈴釉鉢1点（I区）である。このうち、志野や灰釉の皿5点は16C末～17C前半と考えられ、城下町期のものである。その他のものは、城下町以後の17～18C代と考えられる。I・II区の天地返しより出土している。

唐津系 唐津系のものは7点あり、碗2点（長石釉・灰釉各1点）・刷毛目文皿？1点・鉄釉鉢2点・刷毛目文大鉢1点・器種不明（長石釉）1点である。このうち、鉄釉鉢・刷毛目文皿？各1点が16C末～17C前半と考えられ、城下町期のものであろう。その他は、城下町以後で17～18C代と考えられる。すべてII区天地返しより出土した。

大堀相馬 大堀相馬の製品は22点あり、碗10点（灰釉5点・灰釉鉄釉掛け分け1点・鉄釉1点・淡青色釉2点・不明1点）・皿2点（灰釉1点・灰釉鉄絵1点）・山水文上瓶2点・器種不明8点（灰釉3点・淡青色釉2点・白濁釉1点・不明2点）である。碗は灰釉・掛け分け各1点がI区出土で、他はII区である。皿・土瓶・器種不明は、すべてII区出土である。これらは18～19Cのもので、天地返しや表土のものである。

堤 堤の製品は10点あり、鉛釉焰烙3点（I区1点・II区2点）・鉄釉鉢5点（II区）・素焼き鉢1点（I区）・器種不明1点（I区）である。いずれも19Cのものであろう。天地返しや表土から出土している。

産地不明 産地不明のものは11点あり、灰釉碗1点（I区）・鉛釉小皿1点（II区）・鉢3点（II区鉄絵2点・I区素焼き1点）・擂鉢1点（I区）・土瓶1点（II区）・器種不明4点（I・II区各2点）である。擂鉢は18C以前のように思われるが、他は19C頃のものであろう。

以上、第16～18次の近世陶磁器の概要について述べたが、表35・36に城下町期とそれ以後の時期に2大別し、破片数とその比率を示した。これらの表から、城下町期は破片数が少ないが瀬戸・美濃の共膳具を主体に、中国磁器や唐津系陶器がこれを補っていた。調理具は岸窯系と在地の瓦質擂鉢がある。また、今回は出土していないが、遺跡には丹波焼の擂鉢が少量搬入されているようである。一方、貯蔵具は全くみられない。共膳具や貯蔵具には、漆器や木器の存在が予想されるが、本遺跡では地下水位が低いためか出土例がほとんどない。

城下町期以後は、瀬戸・美濃が減少し、変わって肥前磁器・唐津系陶器の共膳具が増加していく。中国磁器は全く出土しなくなる。18C以後は肥前磁器と競合しながら、大堀相馬の共膳具が増加していく。幕末頃には大堀相馬が主体的となり、肥前や瀬戸の磁器が補っている。提も器種が競合しない形で、調理具や貯蔵具が増加していく。

陶磁器の変遷をみると、第16次調査区付近では近世を通じて住居者がいたことが推定される。第17次調査区では、城下町期には建物跡の発見もあり屋敷跡とみられるが、その後は屋敷地だった可能性は低い。第18次調査区は屋敷地だったかどうか疑わしいが、江戸時代末期には陶磁器が急増する点から、付近に住居者が現れた可能性が考えられる。

3. 第16～18次調査区出土瓦

今回出土した三ヶ所の調査区の瓦は、過去の調査と比較して多い傾向が指摘できる。特に第16・17次調査区に多い。第16次調査区では66点出土し、布目瓦16点・煙瓦46点・種類不明4点である。布目瓦の内訳は、軒平瓦1点（文様不明）・平瓦5点・丸瓦9点・不明1点である。煙瓦は、平瓦33点・丸瓦3点・棟瓦5点・不明5点である。布目瓦には、繩目や布目をナデ消すものや小型品と予想されるものがあるが、中世と判断できるものはないようで、いずれも古代瓦と考えられる。煙瓦はすべて近世のものと考えられ、棟瓦を含むことからおよそ18C以後の瓦も含まれている。第17次調査区では36点出土し、布目瓦13点・煙瓦22点・不明1点である。布目瓦は、平瓦11点・軒丸瓦1点（重弁蓮華文）・丸瓦1点である。中世の遺構から出土する瓦は、布目瓦に限られ煙瓦は出土していないが、布目瓦も中世と判断できるものはない。なお、SE01とSK10の布目瓦に、接合関係が認められた。煙瓦は、平瓦11点・丸瓦3点・棟瓦1点・不明7点である。煙瓦は調査区西部に集中する傾向があり、SD01（IV・V区）やVII区周辺に多

表35 産地別出土破片数と比率（城下町期）

産地	数量	第16次		第17次		第18次		計
		数量	%	数量	%	数量	%	
中国磁器	2	11.1		5	10.9	0	—	7
陶器	瀬戸・美濃	6	33.3	22	47.8	5	71.4	33
	唐津系	0	—	0	—	2	28.6	2
	北部九州	1	5.6	0	—	0	—	1
	岸窯系	8	44.4	0	—	0	—	1
瓦質土器	0	—		19	41.3	0	—	19
土師質土器	1	5.6		0	—	0	—	1
計	18	100		46	100	7	100	71

表36 産地別出土破片数と比率（城下町期以後）

産地	数量	第16次		第17次		第18次		計
		数量	%	数量	%	数量	%	
磁器	肥前	40	28.0	23	31.5	25	22.5	88
	瀬戸・美濃	2	1.4	0	—	0	—	2
	産地不明	27	18.9	10	13.7	36	32.4	73
陶器	瀬戸・美濃	7	4.9	1	1.4	2	1.8	10
	唐津系	11	7.7	2	2.7	5	4.5	18
	岸窯系	0	—	2	2.7	0	—	2
	大堀相馬	19	13.3	17	23.3	22	19.8	58
	堀	15	10.5	6	8.2	10	9.0	31
	産地不明	22	15.4	10	13.7	11	9.9	43
土師質土器	0	—		2	2.7	0	—	2
計	143	100.1		73	99.9	111	99.9	327

い。VI区SK03では平瓦・丸瓦各3点が出土し、大堀相馬の土瓶と共に伴していることから18C以後と考えられる。また、調査区西部に集中する傾向は、VII区で発見された建物跡と関連する可能性があるかもしれない。第18次調査区では26点山土し、布目瓦4点、焼瓦22点である。布目瓦は、平瓦2点（I区1点・II区1点）・丸瓦2点（II区）である。中世遺構ではSD01・SD02で出土しているが、古代の瓦と考えられる。焼瓦は、平瓦9点（I区）・丸瓦2点（I区）・製

斗瓦？1点（I区）・不明9点（I区3点・II区6点）である。この瓦は近世と考えられるが、平瓦には砂粒が目立たず焼成良好のものがあり、近代の瓦が含まれている可能性が残る。

瓦について概観してきたが、中世には瓦葺建物はないものと考えられ、近世についても純瓦葺建物は予想しにくく、棟や庇など部分的に葺かれていた可能性はある。古代瓦は、平安時代の集落跡が存在しているが、これまで瓦葺建物跡は発見されたことはなく、瓦葺建物を想定するのは難しい。集落の住居者が他の遺跡より持ち込んだものであろう。

4. 中世・近世の遺構について

ここでは、遺構の重複関係や出土遺物の検討に基づいて、遺構の特徴・組み合わせ・変遷について述べる。なお、ここで使用する「屋敷跡」は、後述する第17次調査において建物跡・井戸・土坑類等がセットとなることから、これらの遺構組成が一世帯を単位とする遺構群（「屋敷跡」）と理解できよう。この屋敷跡には、敷地を区画する溝（堀）の有無がみられる。官衙遺跡などの特殊な遺跡を除けば、古代の集落では竪穴住居跡や建物跡1軒が基本的単位とみられることが大きな違いがある。このような遺構のセットは、中世以後の基本的な単位であろう。これに共通する例は、山口遺跡第10次調査地点（中富洋：1989）でも確認され、また、多賀城跡第50次調査 SX1629 平場跡の遺構群（宮城県多賀城跡調査研究所：1987）も類似した特徴をもっている。このような屋敷跡の成立は、第17次調査区の例を始め、上述の2遺跡例等から考えて、遅くとも12C後半頃と考えられ、以後近世を通じて、前述の遺構のセットが基本的な構成単位となったのである。ただし、中世城館や近世城郭とは区別して考える必要がある。土塁の有無や堀といった防御施設の内容や規模などが問題となろうが、今は検討の余裕がなく今後の課題としている。現状では、防御施設のないものや防御機能の低いものを想定している。

第16次調査区

中世遺構

屋敷跡A 北西部（I・II区）で、SD02・06の区画溝で囲まれた空間が屋敷跡となろう。内部には、SB02・03、SK02やピット群が存在する。SD04も、内部の区画溝の可能性がある。時期は、出土遺物からほぼ鎌倉時代を通じて存在していたものと考えられ、SD02上層より出土した中国青磁皿が下限を示すものと考えている。また、屋敷跡西辺の区画溝は、西側の調査区（埋蔵文化財発掘調査研究所：1988）のSD03やその北側の第5次調査区の1号溝（金森安孝：1982）が該当するものと推定され、一辺約半町規模の区画溝をもつ屋敷跡を想定することが可能となる。建物跡の重複や区画溝（SD02）の改修から、この屋敷跡は2時期の変遷があったものと考えられる。SD02の中央部の浅い部分が入口部分を示すものと考えられ、SD02から派生するSD09・10が排水溝とみられる。

屋敷跡B 屋敷跡Bは重複から2時期に細分され、古期はSD12・15とSD01古期（南側の10・

11層堆積部分)で区画される屋敷跡と判断した。東辺の区画溝は不明だが、北辺で約60mと推定される規模をもつようである。内部の遺構は、VIII区南端溝? (SX03)・SK09などで構成される。SD16(古期)も、この段階の可能性がある。時期は、13C中～後葉と考えられる。新期は、SD01(古期)をそのまま利用し、西辺はSD11に変えられ規模を拡大する。内部の遺構は、櫛跡とみられるSA01・02、そして、SD12・15を埋め立ててSB01・SX02が構築される。SB01は、柱穴深度が約1mもあり矢倉跡と予想される。SD08もこの段階のものであろう。VI区では中世第2面(SB05)が相当するとみられる。VIII区では、重複の認められるSD08・SK05・08・10・15がこの時期のものと考えられる。北部の23層下で予想される溝もこの頃のものと思われる。このうちSK08出土陶器は、屋敷跡AのSK02出土のものと接合関係が認められる。また、この屋敷跡では、土師質土器皿BS₂・BS₃類が出土しておらず、屋敷跡Aより後出と考えられるが、接合資料などから併存する時期があったと理解される。新期段階は、櫛・矢倉とみられる施設が付設され、溝が移設され溝幅の拡張など防御性が現れてくる特徴がある。後続する城館跡へ変化する過渡的な段階の屋敷(館)跡と考えられる。時期は、14C前葉頃であろう。

城館跡 城館跡は、II区で発見された土塁跡と北辺を区画する幅14～15mのSD01(古期)で区画されるものである。VIII区北部でも、土塁の基底部かさらに下位の整地層とみられる土層が確認されている。II区の土塁積土は版築状を呈し、SB01やSX02を覆っている。SD01(古期)は城館北辺を区画する溝で、東西約76m以上の規模をもつ外堀であろう。外堀は、VIII区の東側で南方向へ曲がることが推定できる。SD01(古期)は、V区で橋脚跡が発見されたことから、城館北側に出入口があったと考えてよい。内部では、VI区中世第1面・SD16(新期)・SB06・07があり、遺物包含層の2・3・5層などもこの段階のものである。これらの層は新旧関係が認められることから、さらに細かな変遷がある。VIII区では、中世第1面・集石遺構・遺物包含層(3・5層)・前述した北部盛上整地層(23層)が、城館段階のものである。時期は、出土遺物から14C後半から15C前半頃に存続していたと考えられる。

城館廃絶後の特徴 この時期にはどのように利用されていたか明確ではない。ただ、SD01(古期)II区8層は、中国染付碗・永楽鉢などが出土し、志野など近世陶磁器を混じえない特徴的な層である。SD01(V区)との対応は不明である。城館跡かその近隣に、16C中～後半頃に住居者がいた可能性がある。

近世遺構 現在みられる道路や建物などは近世の城下期の町割方向を踏襲していると考えられる。方位は、南北方向がおよそN-10°～20°-Eである。過去の調査でもこの方位と一致するものと考えられる遺構がある。I区のSD04、VI区II層上面で検出したSD07が該当するものと考えられる。また、前述したSD01も新期段階のものは、中世の堆積層を掘り直し、方向はそのままで再利用している。志野などの近世陶磁器が出土している。近世段階の堀底は、7層(鉄

分集積層)である。SD01は18C頃には埋没がほぼ完了し、その後は傾斜地か若干の凹地となつた。

第17次調査区

中世遺構

屋敷跡 C この屋敷跡はSE01の位置や時期が日安となり、SB02~04・SK06~10・SK21~23で構成される。ただし、区画溝は伴わないようである。調査区外にも、遺構の存在が予想されるが、規模は不明である。また、SK04・05も帰属する可能性がある。この屋敷跡は、建物・土坑に重複関係が認められることから、2時期以上の変遷があり、井戸跡出土遺物から12C後半~13C初頭頃と考えられる。ただし、SK23出土の塙Aの評価が定まらず、上限は検討の余地を残す。区画溝の確認できない屋敷跡の例には、山口遺跡第10次調査区の遺構群があり、現在刊行準備中である。時期もほぼ同じである。

屋敷跡 D SD08で区画された屋敷跡と理解した。主要な遺構は調査区外と予想されるが、屋敷造営時には、前述の屋敷跡Cの土坑群を埋め立てたものと考えられる。なお、SK12は、この屋敷跡か後述する屋敷跡Eの段階のものであろう。時期は、屋敷跡CとEの中間に位置づけられることから、13C前半頃と推定したい。

屋敷跡 E SD07・11で区画される屋敷跡と理解した。屋敷跡Dとほぼ重複する位置にある。SD07と11との距離は約52mあり、一辺約半町規模と推定される。SD04はSD11に接続するものと考えられ、給水用の溝であろう。SD07では常滑有台鉢・在地の白石窯窓(1類)など、SD04ではLB₄類とみられる土師質皿が出土していることから、13C中葉から14C前葉頃に納まる時期と考えられ、第16次調査屋敷跡Bとおよそ併行する。

屋敷跡 F SD02・06で区画される屋敷跡と理解した。屋敷跡Eと重複した位置にある。SD02・06間は約52mあり、一辺約半町規模をもつ屋敷跡と推定される。西辺のSD02はSD07と重複し、溝幅は増しているが深度は浅くなっている。南辺の溝はSD01寄りに移設していることから、南北規模は屋敷跡Eより拡大している可能性もある。SD02の溝底には土坑(陥穴?)が付設され、西壁面には柱穴列が検出されたことから柵が付設されたと考えられる。防護性が付与された屋敷(館)跡である。ただし、土器は確認できない。SD02上層では16C後半頃の中国染付が出土し、近世陶磁器を混じえない。瓦質風炉も出土しているが、同一固体とみられるものはSD06でも出土している。この屋敷跡は、出土遺物や屋敷跡Eに後続することから考えて、14C中葉以降から16C後半頃に納まる時期と推定される。

屋敷跡 F 廃絶後 この段階の遺構は、屋敷跡と理解してよいか不明である。SB01・07・SD03が、この段階のものである。SB01とSD03には重複があり、幾つかの変遷が予想される。また、SD03はIII層起源とみられる土層によって埋め立てられている。出土遺物がほとんどなく時期

を決定しにくいが、屋敷跡Fより後出であることは、明らかである。下限は明確ではないが、SD03が埋められている点やVII区で多く出土した江戸初期の陶磁器がI区で階無に近いことから、16C後半頃から17C初頭頃（城下町期以前）と推定しておきたい。

その他の中世遺構 帰属の不明確な遺構には、SB06・08・13・14・SK02・13・14・24・25がある。これまで述べてきた屋敷跡の何れかに属するものと考えてよいと思われるが、評価が定まらない。また、SD01は中国青磁端反無文碗の出土から、14C後半頃には開削されたと考えられる。中世期にはSD16から分岐する用水堀と考えられるが、城下町期にはV・VI区の分岐部分が埋め立てられ機能を停止した。その後、V区以東は18C頃に埋没をほぼ完了していたと考えられる。SD16は、在地の白石窯の壺・壺片が4層～底面で出土し、遅くとも14C代には開削されたと考えられる。SD01と同時期か先行する堀と理解している。また、SD16は、5トレンチのSD05へ続くものと予想され、現在も使用されている「佐久間堀」のルーツとみられる。ただし、近世段階には、調査区外に移動しているらしい。I区SB05やIV区SA01は、SD01の中世段階に並設された堀などの可能性もある。

近世遺構

近世遺構は、城下町期とそれ以後に分けられる。

屋敷跡G 城下町期と考えられる遺構は、SB09～12・SK01・SD13～15がある。建物跡は輪線が中世のものと異なり。城下町々割と一致する。V～VII区では、江戸初期の遺物が集中的に出土している。このような特徴から、上述の遺構群は城下町期の屋敷跡の一部と推定する。SD13～15は道路跡の側溝と考えられることから、屋敷跡西辺には南北方向の道路や堀が存在したものと思われる。なお、SB10とSD13には道路からはみ出すように蚕食現象が認められる。

城下町期以後の遺構の状況は、良く分かっていない。基本層のII層が耕作土になった可能性があるが、遺構の発見は階無に近い。今回の調査では、SK03が城下町以後の遺構で出土遺物から18C以後のものである。

第18次調査区

中世遺構

第18次調査区では、発見された建物跡が、中世の屋敷という単位で理解できるかどうか明確ではない。II区西部の建物跡に可能性があるが、井戸や土坑などの関連遺構が検出されず、区画施設も明確ではない。SA01・SD02・03なども、建物群を開くような施設かどうかはつきりしない。発見された遺構に比べ、中世の出土遺物が極端に少なく、生活の匂いが薄い。

細かな時期を推定できる遺構は少ない。I区では、SB06・SD12・13が鎌倉時代の遺構と思われる。SD12からAS類の土師質土器皿、SD13から在地の中世鉢が出土している。II区では、角柱の存在や方向から建物跡は中世と予想できるが、細かな時期は推定できない。角柱を多用

するものほど新しいと推定して良ければ、SB04 → SB01・03・05 → SB02 の変遷が想定できる。ところで、建物跡の性格は不明だが、特定の位置に 4 回程の立て替えを行っている点は、建物の性格や空間利用に何にか特別のものがあったのではなかろうか。

推定を重ねてきたが、一応の特徴は指摘できたものと思われる。

近世遺構

この調査区では、近世と判断できる遺構はないが、幕末頃に陶磁器が急増する特徴がみられる。なお、調査区外に墓石（天保期）を乗せる塚が存在する。

以上、各次の中世・近世遺構について概観してきたが、総合的にみると 6 時期の変遷を考えられる。これらを整理し、まとめると表37になる。

I 期は、建物・井戸・土坑という中世的な屋敷を構成する遺構の組成が揃う段階である。その起源は、古代の官衙遺構や廬守館に求め得るかもしれない。この段階では、溝や柵などの区画施設の有無があるようで、第17次の屋敷跡 C は区画施設のない事例と考えられる。市内に類例を求めるに、前述の山口遺跡第10次調査区例があり、今泉遺跡の I 期の遺構群（1983：佐藤洋他）及び昭和54年度調査（1980：篠原信彦）の 1 号獨立柱建物跡や 2 号井戸跡などで構成されるものも可能性がある。この段階の屋敷跡の住居者は、中世初期の開発領主層と評価できるかが課題となろう。この時期は、12C 末あるいは13C 初頭頃を下限とする。

II 期は、I 期と同様の遺構構成であるが、区画を目的とした溝が伴う。第16次の屋敷跡 A・B、第17次の屋敷跡 D・E があり、成立の遅い屋敷跡ほど区画溝の幅や深さが拡大する傾向がありそうである。この時期は、14C 前葉頃を下限としてほぼ鎌倉時代に相当する。

III 期は、国人領主クラスの城館が出現する。第16次の城館跡が該当する。土塁は版築状に積まれ、外堀（SD01）は幅14~15m と巨大で、おそらく一辺約 1 町規模のもの予想される。在地の領主として知られる国分氏との関連が問題となろう。II 期末から III 期初頭には、軍事緊張が高まる社会情勢に対応するように、第16次屋敷跡 B（新期）や第17次屋敷跡 F に防御施設や溝幅の拡大などの特徴がみられる。また、第16次城館跡の南200m の第 4 次調査区では、15C 前半頃を下限とする屋敷跡が発見されており（1984：結城・佐藤）、この時期の屋敷跡である。

IV 期は、第16次の城館廃絶後の時期で、およそ戦国期から若林城下町成立以前と考えられる。ただし、城館は遠隔地に移動したということではなく、隣接し後に若林城となった城館が、戦国期以後の中世城館の可能性を残している。屋敷跡などの遺構が激減し、現状では第17次の屋敷跡 F とその後の遺構群だけである。この屋敷跡 F も、15C 後半～16C 前半の遺物は明確ではない。この地の住居者たちは、他の地点へ移動したものと思われる。戦国期を中心とした遺構の発見に期待したい。

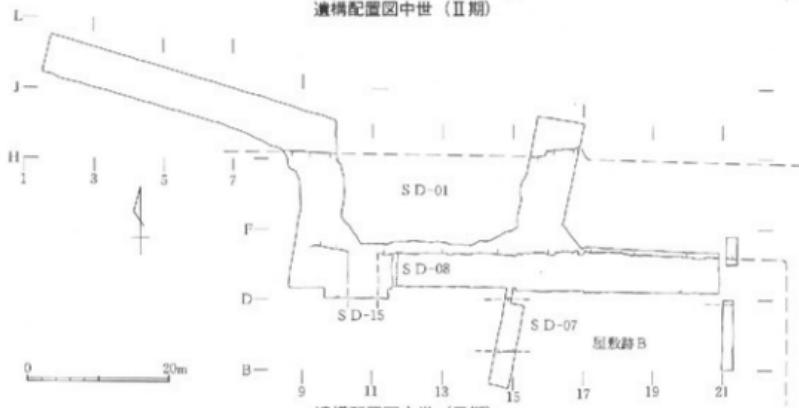
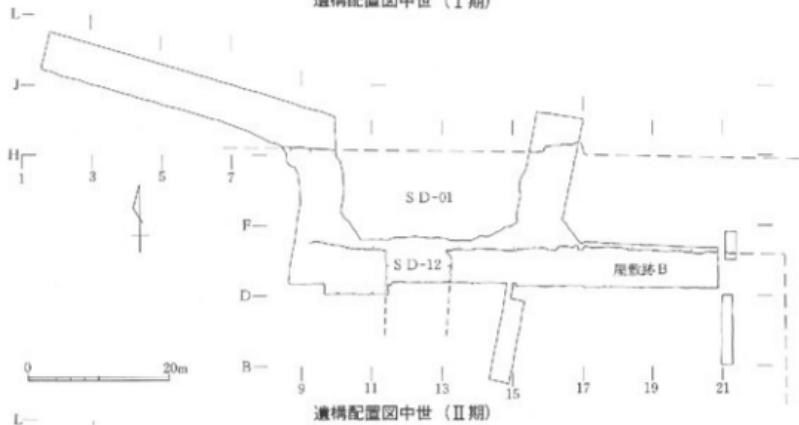
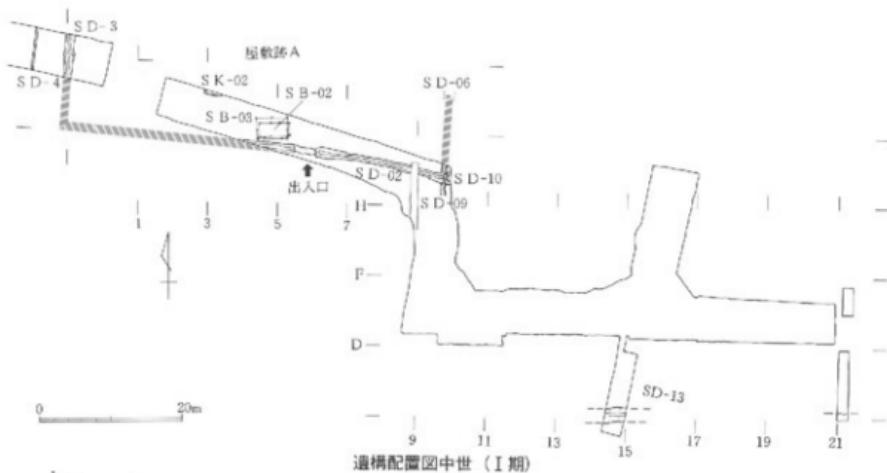
V 期（城下町期）は、若林城やその城下町が形成された時期である。若林城は伊達政宗晩年

表37 時期別造構の変遷時

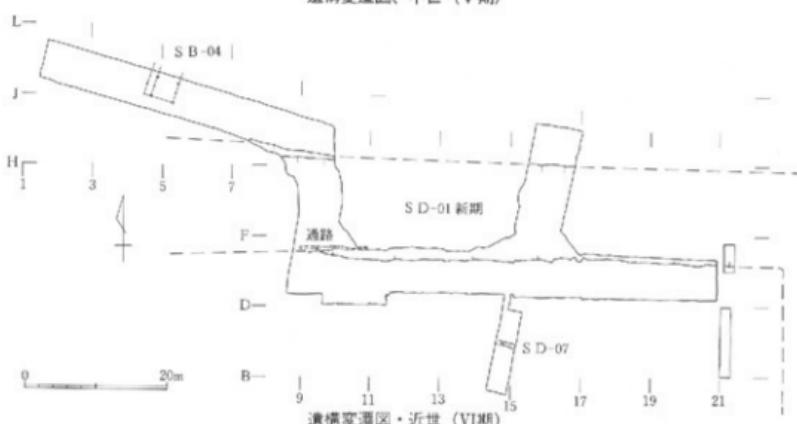
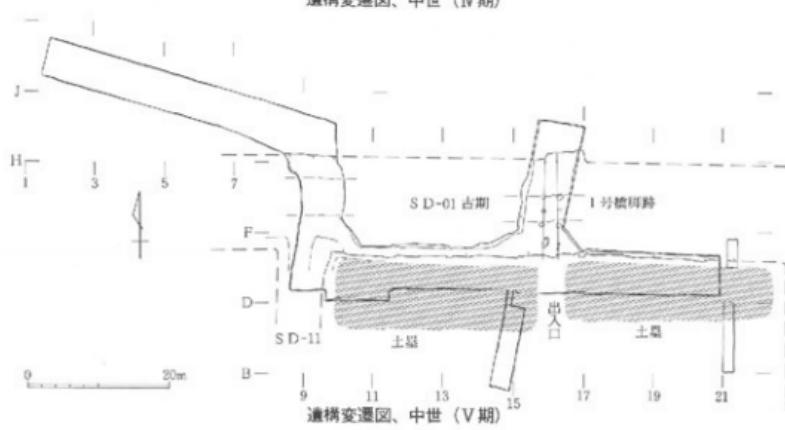
时期	I期		II期		III期		IV期		V	VI期		備考
	12C	13C	14C	15C	16C	17C	18C	19C		17C	18C	
16 前	原敷跡 A	[?]	[?]									
	原敷跡 B	(5)	[?]									
16 次	(6)			[?]								
	城館跡			[?]								
16 次	SD01		[?]	[?]	[?]	[?]	[?]	[?]				
	近世遺跡								[?]			18C培塿発見
17 前	原敷跡 C	[?]	[?]									
	原敷跡 D		[?]									
17 中	原敷跡 E		[?]	[?]								
	原敷跡 F			[?]	[?]	[?]	[?]	[?]				
17 後	原敷跡 F								[?]			
	原敷跡 G								[?]			
17 次	SD01		[?]	[?]	[?]	[?]	[?]	[?]				
	SD16		[?]	[?]	[?]	[?]	[?]	[?]				18C培塿発見
18 前	SK03											
	SB06		[?]									
18 中	SD12		[?]									
	SD13		[?]	[?]								
18 後	II区建物跡	[?]	-	-	[?]							II区の遺物より想定
	近世塚								[?]	[?]		上限不明

の城跡で、石垣は使用されていないようで、堀と土塁で築かれたものと予想される。「仙台市史1」によれば、この城は寛永4年に造営され、同16年解体されたという。城下町のうち武家地部分は、寛永14・15年頃には解体移転したようである。また、町奉行がおり、一個の独立した府城を形成したと指摘されている。その後は近世絵図類をみると、武家地は畠地に、町屋は城下町「仙台」に組み変えられた。

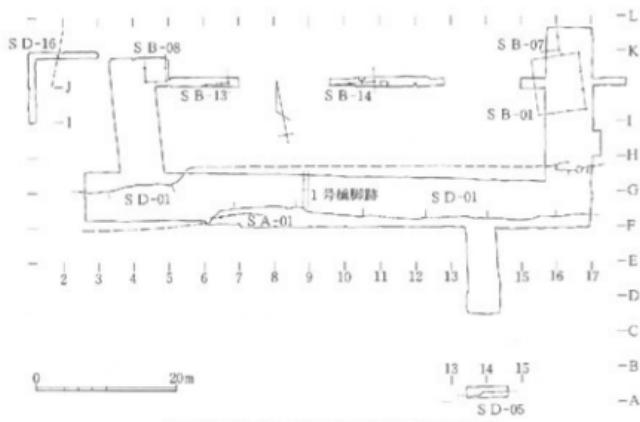
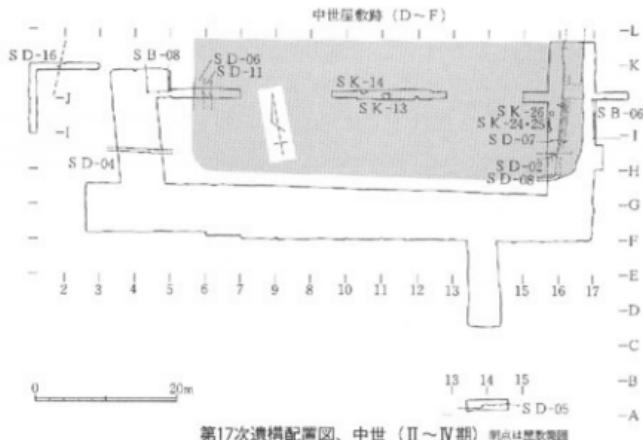
さて、第17次調査区では屋敷跡の一部が検出されたが、城下町の屋敷跡のモデルとなる事例は、第14次調査地点の屋敷跡（第17次の西方約230m）である（佐藤洋：1987）。この地点では、庇付建物・井戸・墓・区画溝で構成される屋敷跡で、墓には金箔押巴文鳥食瓦の瓦当部や仙台城三ノ丸跡出土と同文の軒平瓦などが副葬されていた（結城慎一・佐藤洋：1985）。また、第11次調査地点では、屋敷跡のうち人口付近を調査した（結城慎一・佐藤洋：1984）。ここでは、屋敷区画溝とそれから派生する溝（道路側溝か）、階段を伴う半地下式室[△]・門柱（冠木門か）などが検出されている。近世の屋敷跡の構成も、基本的には中世屋敷と変わらない。屋敷普請に伴う盛土造成などは、これまで確認されていない。今後は、屋敷跡の構造や規模の解明などが課題となる。



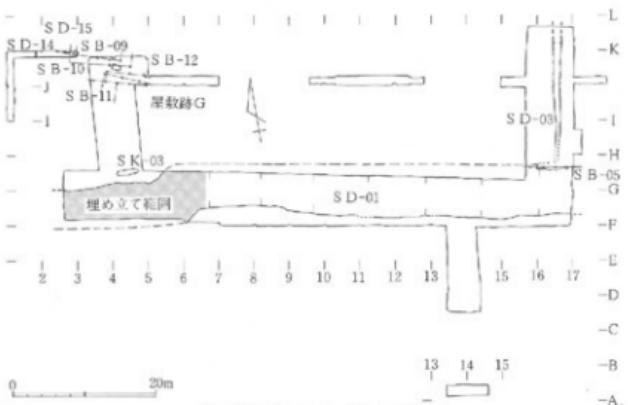
第189図 中世・近世遺構変遷図



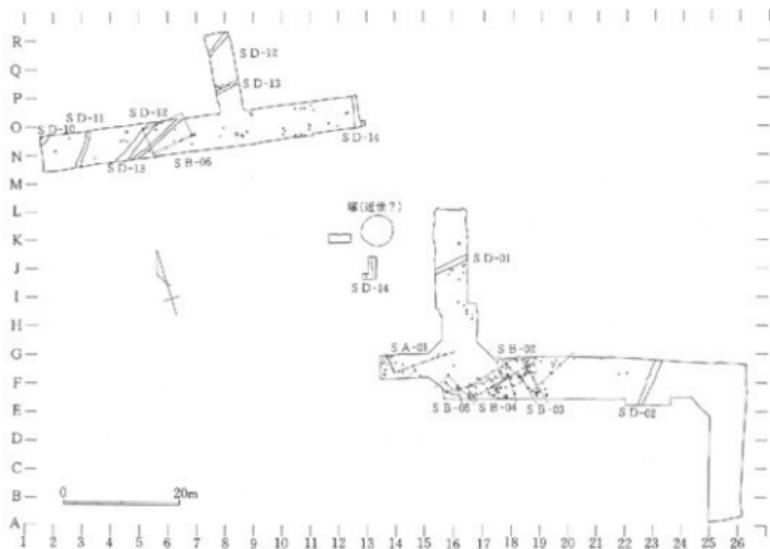
第190図 中世・近世遺構変遷図



第191図 中世・近世造構変遷図



第17次遺構配置図、近世（VII期）



第18次中世遺構配置図（中世）

第192図 中世・近世遺構変遷図

題となろう。

VI期は、城下町廃止後の時期である。前述したように、近世絵図類をみると町屋以外は、島地になったようである。これまでの調査では、ほとんど遺構は検出されていない。僅かに、今回報告した第17次調査のSK03と第6次調査III区14号土坑(渡辺弘美:1983)が確認されているに過ぎない。その他では、V期以前の溝や堀の上層部、あるいは表土や天地返しから遺物が出土する程度である。なお、第18次の塚は未調査であるが、近世のものと考えられる。

以上であるが、各期の内容は今後さらなる検討が必要があり、今後の課題としたい。

引用文献

- 氏家和典 1957 「東北土器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- 宇野隆夫 1982 「井戸考」『史林』第65巻第5号 後に、「考古資料による古代と中世の歴史と社会」 真陽社 1989 所収
- 奥津春雄 1977 『大仙台園の地盤・地下水』 宝文堂
- 金森安孝 1982 「南小泉遺跡」『年報3』 仙台市教育委員会 (第5次)
- 北村信・石井武政・寒川旭・中川久夫 1986 『仙台地域の地質』 地質調査所
- 工藤哲司・結城慎一 1983 「南小泉遺跡 都市計画街路建設工事関係第2次調査報告」 仙台市教育委員会 (第7次)
- 河野真知郎 1986 「鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古』第21号 神奈川考古同人会
- 小林清治 1954 「第2章 城下の拡張と二ノ丸の構築」『仙台史1』 仙台市
- 佐藤甲二 1985 「南小泉遺跡 第12次発掘調査報告書」 仙台市教育委員会
- 佐藤洋・山田しょう 1983 「今泉城跡」 仙台市教育委員会
- 佐藤洋 1987 「南小泉遺跡第14次発掘調査報告書」 仙台市教育委員会
- 篠原信彦 1980 「今泉城跡発掘調査報告書」 仙台市教育委員会
- 寺鳥文隆・飯村均 1987 「八郎窯跡群」 福島県聚楽町教育委員会
- 東北学院大学考古学研究会 1979 「仙台市中田町栗遺跡発掘調査報告書」 仙台市教育委員会
- 中富洋 1990 「山口遺跡 第9・10次調査報告書」 仙台市教育委員会 (近刊予定)
- 丹羽茂 1983 「宮前遺跡」「朽木横穴古墳群・宮前遺跡」 宮城県教育委員会
- 服部実喜 1984 「中世都市鎌倉における出土かわらけの編年位置づけについて」『神奈川考古』第19号 神奈川考古同人会
- 原明芳 1989 「長野県における「黒色土器」の出現とその背景 — 5世紀末の食器具様式の成立との関連で—」『東国土器研究』第2号 東国土器研究会
- 藤沼邦彦 1976 「宮城県地方の中世陶磁器窯跡(予窯)」『東北歴史資料館研究紀要』第2巻 東北歴史資料館
- 藤沼邦彦・中村光一 1982 「袈裟縫文を出土した石巻市水沼窯跡」『東北歴史資料館研究紀要』第8巻 東北歴史資料館
- 埋蔵文化財発掘調査研究所 1987 「宮城県仙台市南小泉遺跡」第4集

- 埋蔵文化財発掘調査研究所 1988 「宮城県仙台市南小泉遺跡」第11集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1987 「II区第50次調査」「多賀城跡」
- 日野吉明他 1987 「佐平林遺跡(I~IV区)」「母郷地区遺跡発掘調査報告II」 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 柳沼賢治 1989 「福島県中通り地方の土師器について」「福島県に於ける古代土器の諸問題」 万葉の里シンポジウム実行委員会・鹿島町教育委員会
- 結城慎一・工藤哲司 1979 「史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報」 仙台市教育委員会
- 結城慎一・佐藤洋 1984 「南小泉遺跡都市計画街路建設工事関係第3次調査報告」 仙台市教育委員会 (第11次)
- 結城慎一・佐藤洋 1985 「仙台城三ノ丸跡」 仙台市教育委員会
- 渡部弘美 1983 「南小泉遺跡—青葉女子学園移転新宮工事地内調査報告書—」 仙台市教育委員会 (第6次)
- 渡部弘美・宮崎明 1989 「南小泉遺跡—第15次発掘調査報告書—」 仙台市教育委員会

参考文献

- 赤羽一郎 1984 「常滑焼—中世窯の様相—」 ニューサイエンス社
- 加藤道男 1989 「宮城県における土師器研究の現状」「考古学論叢」 芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
- 小林三郎 1983 「古墳時代鐵製鏡の鏡式について」「明治大学人文科学研究所紀要」第21冊
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1984 「国内出土の肥前陶磁」 国録
- 白鳥良一・加藤道男 1974 「岩切鴻ノ巣遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書I」 宮城県教育委員会
- 芹沢長介他 1981 「日本やきもの集成〔1〕北海道・東北・関東」 平凡社
- 田口昭二 1983 「美濃焼」 ニューサイエンス社
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」 角川書店
- 辻 秀人 1989 「東北古墳時代の分期について(その1)」「福島県立博物館紀要」第3号
- 中村治 1978 「第6章 和泉陶色窯出土遺物の時期編年」「陶色III」 (8) 大阪文化財センター
- 樽崎彰一編 1977 「世界陶磁全集」3 小学館
- 日本貿易陶磁研究会 1982 「貿易陶磁研究」第2号
- 長谷部楽爾編 1977 「世界陶磁全集」12 小学館
- 藤沢教 1988 「裏町古墳出土の銅鏡について」「年報9」 仙台市教育委員会
- 藤田良章 1988 「中世の食器・考—〈かわらけ〉ノート—」「列島の文化史」5 日本エディタースクール出版部
- 三上次男編 1981 「世界陶磁全集」3 小学館

第4章 自然科学的分析

第1節 南小泉遺跡炭化材同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料はNo.1～24の24点である。いずれも古墳時代のものとされる住居址から検出されたもので、各住居の建築材と考えられている。No.1～11とNo.12、13はそれぞれ中期（5世紀）のものとされる第16次 SI01とSI07から、No.14～24は後期（6世紀）のものとされる第18次 SI01から検出されたものである。なお、第16次 SI01は第18次 SI01より古いものとされている。

2. 方法

試料を乾燥させたのち木口・狂目・板目の3断面を製作、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。同時に電子顕微鏡写真図版（図版1～3）も製作した。

3. 結果

No.4は材の実体がなかった。また、No.7、9、10は試料の状態が不良で広葉樹としか判らなかった。これらを除く20点が以下の5種類（Taxa）に同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。

- ・コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種 [*Quercus* (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) sp.] ブナ科 No.2、3、5、11.

環孔材で孔間部は1～2列、孔間外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火災状に配列する。大道管は横断面では円形～楕円形、小道管は横断面では多角形、ともに単独。單穿孔孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ（*Quercus mongolica*）とその変種ミズナラ（*Q. mongolica* var. *grosseserrata*）、コナラ（*Q. serrata*）、ナラガシワ（*Q. aliena*）、カシワ（*Q. dentata*）といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）にミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。

このうち平野部で普通に見られるのはコナラで樹高20mになる高木である。古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ (*Q. acutissima*) に次ぐ優良材である。

- ・コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種 [*Quercus* (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp.] ブナ科 No14、15、16、17、18、19、21、22、24.

環孔材で孔圈部は1～3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。大道管は横断面では円形、小道管は横断面では角張った円形、ともに単独。單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性・單列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、コナラ亜属の中で果実が2年目に熟するグループで、クヌギとアベマキ (*Q. variabilis*) の2種類がある。クヌギは本州（岩手・山形県以南）・四国・九州に、アベマキは本州（山形・静岡県以西）・四国・九州（北部）に分布するが、中国地方に多い。材の解剖学的特徴のみで両者を区別することはできないが、試料はクヌギである可能性が高い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材・橋木などの用途が知られる。

- ・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 No 1、12、13、20.

環孔材で孔圈部は1～4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～梢円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った梢円形～多角形。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性・單列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材・橋木や海苔粗朶などの用途が知られている。

- ・ヤマグワ (*Morus bombycina*) クワ科 No23.

環孔材で孔圈部は1～5列、晚材部へ向かって管径を漸減させ、のち柵状に複合する。大道管は横断面では梢円形、単独または2～3個が複合、小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は單穿孔を有し、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性II～III型、1～6細胞幅、1～50細胞高。柔組織は周囲状～異状および散在状。年輪界は明瞭。

ヤマグワは北海道・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木で、多くの園芸品種があり、養蚕に利用されている。材はやや重硬で強韌、加工はやや困難で、保存性は

高い。装飾材や器具・家具材として用いられる。

・ケンボナシ (*Hovenia dulcis*) クロウメモドキ科 No.6、8.

環孔材で孔間部は1～3列、孔間外で急激に管径を減じたのち漸減する。大道管は横断面では梢円形、単独、小道管は管壁が厚く、横断面では円形～梢円形、単独および放射方向に2～3個が複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性III～II型、1～5細胞幅、1～50細胞高。柔組織は周囲状～翼状、散在状およびターミナル状。年輪界は明瞭。

ケンボナシは北海道（奥尻島）・本州・四国・九州に自生する落葉高木で、時に植栽される。材の重さ・硬さは中程度で、加工は容易、材質は良好である。このため建築装飾材・家具材として賞用され、器具・楽器・旋作・薪炭材などにも用いられる。

以上の同定結果を一覧表で示す（表1）。

表1 南小泉遺跡出土炭化材の樹種

試料番号	検出遺構など	種名
1	16次 SI01 1	クリ
2	16次 SI01 2	コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種
3	16次 SI01 3	コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種
4	16次 SI01 4	材実体なし
5	16次 SI01 5	コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種
6	16次 SI01 6	ケンボナシ
7	16次 SI01 7	広葉樹（散孔材）
8	16次 SI01 8	ケンボナシ
9	16次 SI01 9	広葉樹（散孔材）
10	16次 SI01 10	広葉樹（散孔材）
11	16次 SI01 11	コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種
12	16次 SI07	クリ
13	16次 SI07	クリ
14	18次 SI01 1	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種
15	18次 SI01 2	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一一種
16	18次 SI01 3	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一一種
17	18次 SI01 4	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一一種

18	18次 SI01 5	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種
19	18次 SI01 6	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種
20	18次 SI01 7	クリ
21	18次 SI01 8	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種
22	18次 SI01 9	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種
23	18次 SI01 10	ヤマグワ
24	18次 SI01 11	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種

4. 考察

今回同定された樹種は炭化材としての検出の報告例の多いものであるが、各住居址別の樹種構成にはやや違いが認められる（表2）。ただ、この違いが、推定されている建築時期の違いと関連づけられるものであるのか否かは、群馬県渋川市中筋遺跡出土炭化材の同定例*（高橋1988a）もあり即断できない。また、各資料はその使用部位も推定されているが、添付資料に示されているような出土状況は、着火後速やかに土屋根**の崩壊などによって埋積し、空気から遮断されることで炭化した部材のみが残存できたものであることを示していると思う。したがって、このような状況での少數の試料から用材の違いを読み取ることは困難である。

なお、遺構や出土状況などの詳細は不明であるが、栗遺跡試料（光谷 1982）では、今回同定された樹種は認められていない。

表2 南小泉遺跡出土炭化材の住居址別の樹種構成

樹種/住居址	16次 SI07	16次 SI01	18次 SI01
コナラ節		4	
クヌギ節			9
クリ	2	1	1
ヤマグワ			1
ケンボナシ		2	
広葉樹		3	
合計	2	10	11

*：ここでは同時期に建築・使用されたと思われる隣接する住居址間で、その樹種構成に明らかな差が認められている。

**：筆者は、群馬県富岡市田篠遺跡発掘報告書の中で触れられているように（高橋 1988b）、当時の窓穴住居は、（少なくとも関東地方では）十屋根をもつものがより一般的な形態ではなかったかと考えているが、東北地方ではこうした考えを支持するような知見は得られていないのであろうか。

引用文献

- 光谷 拓実 1982 粟遺跡出土炭化材樹種同定結果、「仙台市文化財調査報告書第43集 粟遺跡 粟圓式土師器様式遺跡調査報告」、仙台市教育委員会、299。
- 高橋 利彦 1988a 中筋遺跡出土炭化材の樹種、「渋川市発掘調査報告書第18集 中筋遺跡第2次発掘調査概要報告書」、群馬県渋川市教育委員会、42-47。
- 1988b 炭化材の樹種、「(財)群馬県埋蔵文化財発掘調査報告書第84集・関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 田篠上平遺跡 後期古墳と奈良・平安時代の集落跡の調査」、群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業公団・日本道路公団、287-293。

第2節 南小泉遺跡祭祀土壌出土鉄滓の金属学的調査

大澤 正己

概要

宮城県下でも最古級に属する南小泉遺跡出土の鉄滓を調査して次のことが判明した。

- (1) 鉄滓は、鉱石系鉄素材を原料として、鉄器鍛造時に排出された鍛錬鍛滓（小鍛冶滓）に分類される。
- (2) 鉱物組成はワウタイト（Wüstite : FeO）主体、化学組成は全鉄分（Total Fe）が56.5%と多く、ガラス質成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$) は、21.75%と少ない。随伴微量元素は低め傾向で、特に、二酸化チタン (TiO_2) 0.12%、バナジウム (V) 0.002%と低値を特徴とする。
- (3) 鍛冶に供された鉄素材は、不純物の少ないので、大陸産の可能性をもつ。産地同定は、今後の研究課題としておきたい。

1. いきさつ

南小泉遺跡は、仙台市若林区遠見塚一丁目に所在する。当遺跡の5世紀中頃に比定される祭祀土壌より出土した鉄滓は、宮城県下でも最古級で、当時の鍛冶工房の所在を実証する重要な試料となる。仙台市教育委員会より、この鉄滓の金属学的調査の依頼を受けたので、鉱物組成の調査を行った。

2. 調査方法

2-1 供試材

2-2 調査項目

- (1) 肉眼観察
- (2) 崩微鏡組織

Table.1 供試材の履歴と調査項目

符号	試料	出土位置	試料サイズ		調査項目			
			計測値	重量	崩微鏡組織	断面硬度	CMA	化学組成
MSB1	鉄滓	祭祀土壌 SK12 2層上部	80×65×30 (mm)	215 (g)	○	○	○	○

供試材は、水道水でよく洗浄した後、中核部をペークライト樹脂に埋め込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1,000と順を追って研磨し、最後は被研面をダイヤモンドの3μと1μで仕上げている。

(3) CMA (Computre Aided X-ray Micro Analyzer) 調査

EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) にコンピューターを内蔵させた新鋭分析機器である。別名X線マイクロアナライザとも呼ばれる。分析の原理は、真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後にとらえて画像化し、定性的な測定結果を得る。これを標準試料とX線強度の対比から元素定量値をコンピューター処理してデータを得る方法である。

(4) ピッカース断面硬度

ヴェスタイト (Wüstite : FeO) の鉱物組成の同定を目的として、ピッカース断面硬度計 (Vickers Hardness Tester) を用いて硬度の測定を行った。試験は、鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもってその荷重を除し商を硬度値としている。

(5) 化学組成

鉄滓の分析は次の方法をとっている。

全鉄分 (Total Fe)、酸化第1鉄 (FeO)：容量法、炭素 (C)、硫黄 (S)：燃焼赤外線吸収法、他成分：ICP 法（高周波プラズマ発光分光分析法）。

3. 調査結果

(1) 肉眼結果

表皮は赤褐色と黒色のまだらを呈する。上面側は平坦で肌は滑らかであるが周辺部の一部に気泡を露出し、木炭痕を少々残す。裏面は半円突起状で、弱い反応痕をもち、赤褐色で木炭痕がある。破面は赤褐色で気泡少なく、緻密質である。比重大。金属鉄の鉄化物を少量含む。

(2) 顕微鏡組織

Photo. 1 に示す。組織の大半は①～③で占められる。鉱物組成は、白色粒状で大きく成長したヴェスタイト (Wüstite : FeO) が大量に晶出し、その粒間を淡灰色棒状結晶のフェアライト (Fayalite : 2FeO · SiO₂) と基地の暗黒色ガラス質スラグが埋める。これらの組織は、鍛錬鍛治滓特有の崩壊を示すものである。

④、⑤は、金属鉄の鉄化したゲーサイト (Goethite : α-FeO · OH) が残存する。該品には、炭化物のパーライト (Pearlite) の析出した痕が認められて、鉄中の炭素 (C) 量は、0.2%前後であろう。

当鍛冶工房で使用された鉄素材の一部は、このレベルの炭素量であったと想定される。

(3) CMA 調査

Table. 2 に高速定量分析結果を示す。分析箇所は Photo. 2 の SE (2 次電子像) に示したヴォタイト (Wüstite : FeO) とファイヤライト (Fayalite : 2FeO · SiO₂) の晶出部と基地の暗黒色ガラス質部分である。

検出元素は、基地の鉱物組成に見合ったもので、強度 (Count) 順に並べると鉄 (Fe)、珪素 (Si)、アルミ (Al)、カルシウム (Ca)、カリウム (K)、マグネシウム (Mg)、ナトリウム (Na) となる。随伴微量元素は少ない。リン (P) やチタン (Ti) を極く微量含有するので、磁鉄鉱系素材を用いた鍛冶作業での排出滓の可能性をもつ。

Photo. 2 は高速定量分析で検出した元素を視覚化した特性 X 線像である。白色輝点の集中度が分析元素の存在を表す。

白色粒状結晶のヴォタイト (Wüstite : FeO) から鉄 (Fe) が、淡灰色棒状結晶のファイヤライト (Fayalite : 2 FeO · SiO₂) は珪素 (Si) と鉄 (Fe) に白色輝点が集中する。また、暗黒色ガラス質部分は、ガラス質成分の珪素 (Si)、アルミ (Al)、カルシウム (Ca)、カリウム (K)、マグネシウム (Mg)、ナトリウム (Na) らに白色輝点が表れる。これらの結果から鍛冶に供された鉄素材は、不純物の少ない高純度材だったと推定される。

(4) ピッカース断面硬度

Photo. 1 - ⑥ にヴォタイト (Wüstite : FeO) 結晶の硬度圧痕を示す。硬度値は、433~442 Hv である。ヴォタイトの文献硬度値 (日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真及び識別法』1968) が 450~500 Hv であり、これに準じるものである。

(5) 化学組成

Table. 3 に示す。南小泉遺跡出土鉄滓は、顕微鏡組織で見たように、ヴォタイト (Wüstite : FeO) が大量に晶出していたので鉄分が多い。全鉄分 (Total Fe) が 56.5% で、このうち、酸化第 1 鉄 (FeO) が 54.4% と酸化第 2 鉄 (Fe₂O₃) が 20.2% の割合である。

ガラス質成分 (造滓成分系 : SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は、21.75% と逆に低めである。該滓の特徴は、随伴微量元素が少なく、特に、二酸化チタン (TiO₂) 0.12%、バナジウム (V) 0.002% と砂鉄特有成分は少なく、更に硫黄 (S) 0.030%、銅 (Cu) 0.002% となる。

鍛冶に供された鉄素材は、砂鉄系は否定されて鉱石系となる。このことは、CMA 調査で述べた如く、磁鉄鉱系の可能性が高い。

参考までに、Table. 3 に仙台市内周辺の 8~10 世紀末に属する砂鉄系鉄素材を鍛冶した時に排出された滓 (精錬鍛冶滓・鍛錬鍛冶滓) や砂鉄製錬滓を提示している。南小泉遺跡出土鉄

Table.2 高速定性分析

POS.NO. HOLD NO. X(MM) Y(MM) Z(MM) COMMENT (8 CHARACTER)
 [0 : END] [C • R : SAME]
 3 : 1 40,000 40,000 11,000 MSB 11
 POS.NO. 3 READY(PAGE)?
 COMMENT : MSB-11
 ACCEL. VOLT. (KV) : 15
 PROBE CURRENT : 5.000E-08 (A)
 STAGE POS. : X 40,000 Y 40,000 Z 11,000 28-JUN-90

CH(1)				TAP				CH(3)				LIF				CH(2)			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y-I	6.45	238	*****+*****	HI-I	1.14	70	*****+*****	TI-K	2.75	123	*****+*****								
RE-m	6.73	362	*****+*****+*	PB-I	1.18	64	*****+*****	BA-I	2.78	97	*****+*****								
SR-I	6.86	266	*****+*****	TL-I	1.21	67	*****+*****	CS-I	3.03	82	*****+*****								
W-m	6.98	193	*****+*****+*****	HG-I	1.24	68	*****+*****	SC-k	3.15	64	*****+*****								
○ SH-I	7.13	3812	*****+*****+*****+***+	AU-I	1.28	55	*****+*****	I-I	3.15	64	*****+*****								
TA-m	7.25	177	*****+*****	PT-I	1.31	62	*****+*****	TE-I	3.29	50	*****+*****								
RD-I	7.32	147	*****+*****	IR-I	1.35	49	*****+*****	○ CA-k	3.36	810	*****+*****+ +++								
Hf' m	7.54	129	*****+*****	OS-I	1.39	55	*****+*****	SB-I	3.44	66	*****+*****								
LU-m	7.84	205	*****+*****	ZN k	1.44	54	*****+*****	SN-I	3.60	46	*****+*****								
Yb' m	8.15	469	*****+*****	CU-k	1.54	41	*****+*****	○ K-k	3.71	391	*****+*****+***+								
○ AL-k	8.34	1191	*****+*****+***+	NI-k	1.66	35	*****+*****	IN-I	3.77	40	*****+*****								
BR I	8.37	164	*****+*****	TM-I	1.73	37	*****+*****	U-m	3.91	41	*****+*****								
ER-m	8.82	77	*****+*****	CO k	1.79	36	*****+*****	CD-I	3.96	35	*****+*****								
SE I	8.99	65	*****+*****	○ FE-k	1.94	6028	*****+*****+ - + + + + +	TH-m	4.14	25	*****+*****								
HO-m	9.20	54	*****+*****+	GD I	2.05	16	*****+*****	AG-I	4.15	23	*****+*****								
DY m	9.59	42	*****+*****	MN-k	2.10	24	*****+*****	PD-I	4.37	20	*****+*****								
AS-I	9.67	46	*****+*****	EU I	2.12	15	*****+*****	RH-I	4.60	17	*****+*****								
○ MG k	9.89	121	*****+*****+ -	SM-I	2.20	10	*****+*****	CL-k	4.73	17	*****+*****								
TB-m	10.00	39	*****+*****	CR k	2.29	10	*****+*****	RU-I	4.85	15	*****+*****								
GE I	10.44	22	*****+*****	ND-I	2.37	7	*****+*****	S-k	5.37	10	*****+*****								
GA-I	11.29	22	*****+*****	PR I	2.46	6	*****+*****	MO-I	5.41	11	*****+*****								
○ NA k	11.91	82	*****+*****+ -	V-K	2.50	7	*****+*****	NB-I	5.72	10	*****+*****								
**	14.72	8	*****+*****	CE I	2.56	6	*****+*****	ZR-I	6.07	8	*****+*****								
F k	18.32	6	*****+*****	LA-I	2.67	8	*****+*****	P-k	6.16	14	*****+*****								

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT

NA MG AI SI K CA FE 検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT

P TI SE ND ER

Plot.2の(2次電子像)の分析結果である。ワズライト(Wilshire: FeO)とファイサイト(Fayalite: 2FeO • SiO₂)、ガラス質スラグを分析対象としている。検出元素を強度順に並べると次の様になる。鉄(Fe) 6028, 硅素(Si) 3812, アルミウム(Al) 1191, カルシウム(Ca) 810, カリウム(K) 391, マグネシウム(Mg) 82である。鉄とガラス質成分で不純物はほとんど認められない。磷(P)、チタン(Ti)が微量含有されているところから磁鐵鉄系の鉄素材の可能性をもつ。

Table.2 南小糸通跡出土標本(MSB-11)のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果。

Table.3 仙台市周辺出土鉄滓の化学組成

試料番号	遺跡名	出土位臯	種別	推定年代	全鉄分		金属鉄	焦化第Ⅰ鉄	-酸化鉄	二酸化鉄素	重マグネシウム	重カルシウム	重マリナイト	酸化カリウム	重ナトリウム	ニ化チタン	酸化クロム	硫黄	五酸化磷	炭素	バナジウム	銅	遺滓成分	T/T・Fe	V/T・Fe	注
					(Total Fe)	Metallic Fe	(FeO)	(Fe ₂ O ₃)	(SiO ₂)	(Al ₂ O ₃)	(CaO)	(MgO)	(K ₂ O)	(Na ₂ O)	(MnO)	(Cr ₂ O ₃)	(S)	(P ₂ O ₅)	(C)	(V)	(Ca)					
MSB11	南小泉	SK12.2層上部 新紀土壤	鐵錆鐵治滓	3C中頃	56.5	0.09	54.4	20.2	14.7	3.33	1.98	0.63	0.72	0.39	0.65	0.12	0.020	0.030	0.22	0.10	0.002	0.002	21.75	0.0012	0.0000	1
MSB1	トノ内	SI-28a区4層	鐵錆鐵治滓	9C	50.8	0.10	53.8	12.7	20.9	6.34	1.99	0.64	0.89	0.41	0.07	0.37	0.019	0.061	0.16	0.16	0.007	0.009	37.63	0.0043	0.0001	2
2	〃	SI-28 墓土	〃	〃	56.1	0.07	54.2	20.0	12.3	4.36	0.82	0.49	0.61	0.39	0.06	0.38	0.024	0.067	0.13	0.13	0.006	0.005	18.88	0.0041	0.0001	〃
2A	〃	SI-28 墓土	〃	9.36	0.10	2.65	10.3	58.5	17.1	2.75	1.73	2.21	1.69	0.17	0.68	0.046	0.049	0.33	0.13	0.010	0.007	83.98	0.043	0.0011	〃	
3	〃	SI-28 墓土	精錬鐵治滓	〃	47.3	0.13	46.8	15.4	20.1	5.42	1.22	1.94	0.64	0.37	0.14	4.99	0.039	0.655	0.26	0.29	0.039	0.005	28.79	0.06	0.0008	〃
4	〃	SI-28 墓土	〃	49.0	0.52	51.7	11.8	18.9	5.32	1.21	1.02	0.74	0.40	0.13	5.20	0.050	0.085	0.23	0.19	0.044	0.008	27.59	0.061	0.0009	〃	
5	〃	SI-28 墓土	鐵錆鐵治滓	〃	56.5	0.24	62.5	10.9	17.1	4.81	0.80	0.54	0.53	0.32	0.09	0.24	0.023	0.031	0.44	0.10	0.046	0.003	24.10	0.0025	0.0008	〃
6	〃	SI-28 墓土	〃	15.2	0.12	5.89	12.2	52.9	17.6	2.94	1.56	2.71	1.24	0.20	0.99	0.041	0.025	0.25	0.18	0.016	0.007	78.05	0.045	0.0012	〃	
7	〃	SI-28 Pt2 墓土	粘土	〃	5.79	0.06	1.84	6.15	67.3	17.7	0.82	0.58	1.07	0.87	0.03	0.82	0.044	0.005	0.05	0.13	0.068	0.001	88.34	0.08	0.0014	〃
D-881	喜山	精錬鐵治滓	8C代	50.3	—	57.2	8.36	18.40	4.35	0.97	0.70	—	—	0.09	1.74	0.03	0.016	0.20	0.08	0.027	NH	24.42	0.021	0.0093	3	
D-882	〃	鐵錆鐵治滓	〃	60.6	—	62.5	16.53	8.40	1.91	0.36	0.25	—	—	0.04	0.37	0.02	0.011	0.12	0.15	0.009	NH	10.92	0.0037	0.0001	〃	
D-883	〃	砂鉄製錬滓	〃	50.8	—	54.9	11.63	9.63	3.21	0.70	1.18	—	—	0.23	10.04	0.06	0.013	0.21	0.09	0.012	NH	14.77	0.1185	0.0001	〃	
D-884	〃	精錬鐵治滓	〃	52.0	—	53.0	15.34	15.64	3.42	0.67	0.52	—	—	0.07	1.25	0.02	0.015	0.15	0.17	0.019	NH	20.25	0.0144	0.0002	〃	
G-881	黒森	1号土壙	砂鉄製錬滓	10C頃	37.0	—	44.5	3.541	15.60	4.78	2.38	2.61	—	—	0.95	23.10	0.055	0.029	0.032	0.09	0.18	0.005	25.37	0.3742	0.0027	4
G-882	〃	〃	〃	47.1	—	50.9	10.79	8.26	3.51	1.09	1.96	—	—	0.83	21.93	0.074	0.027	0.069	0.10	0.27	0.006	14.82	0.2791	0.0032	〃	
G-883	〃	7号土壙	〃	31.0	—	37.0	3.20	27.0	5.89	2.17	2.44	—	—	0.96	19.99	0.062	0.023	0.046	0.10	0.28	0.007	37.50	0.3848	0.0051	〃	
G-884	〃	3号土壙	〃	21.48	—	10.85	17.81	43.0	11.62	1.70	9.99	—	—	0.31	6.32	0.028	0.041	0.13	0.23	0.099	0.009	57.31	0.1764	0.0025	〃	
G-885	〃	4号土壙	〃	38.0	—	46.0	3.21	20.20	4.42	1.79	2.19	—	—	0.83	19.10	0.073	0.029	0.076	0.19	0.25	0.006	28.60	0.3013	0.0037	〃	
G-886	谷津B	不明	〃	28.9	—	34.8	2.61	23.64	7.67	3.75	4.36	—	—	0.72	14.19	0.045	0.028	0.13	0.03	0.21	0.006	39.42	0.2943	0.0041	〃	
G-887	蒲沢山	衣面採取	〃	32.1	—	38.2	3.36	24.66	5.98	2.00	4.16	—	—	0.88	14.51	0.047	0.034	0.099	0.06	0.24	0.007	36.80	0.2709	0.0042	〃	
G-888	芦見	〃	〃	33.0	—	40.0	2.73	23.52	6.74	2.53	4.47	—	—	0.94	9.35	0.045	0.035	0.11	0.02	0.23	0.012	39.26	0.1698	0.0039	〃	
G-8811	谷津B	不明	4146313.1	7.93	—	6.90	3.67	64.5	16.32	1.43	0.83	—	—	0.14	2.37	0.010	0.005	0.074	0.04	0.037	0.008	83.08	0.1791	0.0026	〃	

注) 1. 大澤正己「南小泉遺跡標本に抽出した鐵滓の金属性的組成」[『南小泉遺跡発掘調査報告書』(仙台市埋蔵文化財調査報告書第140号)] 仙台市教育委員会 1990

2. 仙台市教育委員会「福原伝兵よりの依頼分析、平成2年度報告書作成室」

3. 大澤正己「那山跡出土「欽厚の金属性的組成」[『那山遺跡』(仙台市埋蔵文化財調査報告書第156号)] 仙台市教育委員会 1993

4. 仙台市教育委員会「1988年度調査依頼額、未報告分

Table.4 古墳時代前・中期の鉱石系鍛錬鍛冶滓出土例

遺跡名	所在県	指定年代	羽口出土状況	鍛冶炉灰出	鉱物組成	化学組成(%)				注
						Total Fe	CaO	TiO ₂	Cu	
博多58次	福岡市祇園	4C初	有	有	Wüstite + Fayalite	59.5	1.09	0.13	0.049	1
松木	福岡県那珂川町	4C中頃			Wüstite + Fayalite	48.8	3.95	0.11	0.004	2
松木A	福岡県那珂川町	5C前半			#	45.9	3.99	0.15	0.016	2
野坂一町間	福岡県宗像市	5C中頃			#	43.7	1.85	0.30	0.010	3
小戸	兵庫県川西市	4C後半	有		#	41.3 ~51.3	0.7 ~1.37	0.15 ~0.24	0.016 ~0.079	4
酒波	兵庫県三原郡三原市	5C中葉	有		#	39.4 ~67.0	0.9 ~2.14	0.14 ~0.18	0.039 ~0.19	5
大原	大阪府柏原市	5C末~6C	#	有	#	53 ~66	0.32 ~1.53	0.083 ~0.27	0.003 ~0.007	6
大和川今浪	奈良県松原市	5C前半			#	47	1.14	0.84	0.005	7
土師27-1	# 堺市	5C後半			#	27.8 ~42.7	1.9 ~3.8	0.18 ~0.37	0.012 ~0.020	7
横南北	# 堺市	#		有	#	46 ~55	0.59 ~2.0	0.23 ~2.1	0.019 ~0.043	8
森	# 交野市	5C後~6C前	有	有	#	43.06 ~56.6	1.8 ~3.34	0.14 ~0.25	0.001 ~0.016	9
長瀬高浜	鳥取県羽合町	4C末~5C初			#	57.7	4.44	0.14	0.008	10
行人塚	埼玉県大里郡江南町	5C初~中	高坏脚軋用羽口	有	#	44.0 ~62.0	2.8 ~5.7	0.23 ~0.51	0.006 ~0.010	11
御旗山中	# 大宮市	3C中型	#	#	#	34.0 ~62.0	2.7 ~8.8	0.54 ~1.29	0.008 ~0.063	12
御藏台	# 大宮市	3C中葉			#	49.0 ~57.0	3.70 ~6.0	0.40 ~0.59	0.010 ~0.026	12
中山	千葉県四街道市	5C前半	高坏脚軋用羽口	有	#	49.0 ~63.0	0.42 ~2.1	0.20 ~0.58	0.005 ~0.065	13
南小泉	宮城県仙台市	5C中頃			#	56.5	1.98	0.12	0.002	14
永作	福島県郡山市	5C後半		有	#	39.0 ~53.0	1.4 ~2.4	0.24 ~0.44	0.013 ~0.030	15

滓は、これらに比べて二酸化チタン (TiO₂) やバナジウム (V) は極めて少なく、特に、Ti / Total Fe の比が0.0012と低値である。該品は成分的にみて、鉱石系鍛錬鍛冶滓に位置づけられる。

4.まとめ

南小泉遺跡出土鉄滓は、祭祀土壤から検出されて5世紀中頃に比定される。鉱物組成は、ワスタイト (Wüstite : FeO) 主体、化学組成は全鉄分 (Total Fe) 56.5%、ガラス質成分 (造滓成分系 : SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) 21.75%、随伴微量元素は低めで、鉄器鍛造加工時に排出された鍛錬鍛冶滓 (小鍛冶滓) に分類される。二酸化チタン (TiO₂) 0.12%、バナジウム (V) 0.002%と低めから鉱石系鉄素材が想定される。CMA 調査で鉄滓から微量の

リン (P)、チタン (Ti) を検出するので磁鉄鉱の可能性がある。

鉄滓を生成した鍛冶加工時の鉄素材は国内産か、大陸側からの搬入品が注目される。調査鉄滓は1点のみで、断定はできないが、随伴微量元素が少なく、純度の高い鉄素材が使用されているので、大陸産と考えたい。

Table. 4には、4～5世紀における列島内での鍛冶滓の出土状況を示している。北は宮城県の南小泉遺跡から、南は福岡県までの祭祀土壇や鍛冶工房からの出土品である。これらは、鉱石系鉄素材の鍛冶作業時の鉄滓に分類される。

現在、国内の鉄生産（製錬：砂鉄もしくは鉱石を木炭を使って還元する工程）の開始時期については定説がない。弥生後期説、古墳時代5世紀説、6世紀後半説らが議論されている。列島内の5世紀代は、技術革新の時期である。

筆者は、須恵器の製作と鉄生産はほぼ同時期からの開始と想定している。製鉄原料の木炭窯と須恵器焼成登り窯は同系窯業技術と考えるからである。

だが、5世紀の鉄生産は初期段階で、国内需要を満たすものではなく、鉄素材の大半は大陸側に依存したであろう。この反映がTable. 4に提示した鍛冶滓の成分系である。鉄素材は国内産ではなく、大陸産ではなかろうか。国内産鉄素材であれば、砂鉄系の場合二酸化チタン (TiO_2) やバナジウム (V) は高めとなり、鉱石系はリン (P) や硫黄 (S) の有害元素が多くなるであろう。

しかし、鉄素材の産地同定はひとまず置いて、南小泉遺跡周辺には、5世紀中頃に鍛冶炉が存在し、純度の高い鉄素材を用いて鉄器鍛造加工がなされたことが実証できた。

Table.4 の参考文献

- 註1 福岡市教育委員会発掘調査 報告書準備中
- 註2 大澤正己『松木遺跡出土鉄滓の金属学的調査』『松木遺跡』I (那珂川町文化財調査報告書第11集) 那珂川町教育委員会 1984
- 註3 原 俊一他『埋蔵文化財発掘調査報告書 1984年度』(宗像市文化財調査報告書 第9集) 宗像市教育委員会 1985
- 註4 兵庫県川西市教育委員会報告書準備中
- 註5 大澤正己『兩流道路出土複形鉄滓と鍛造剝片の金属学的調査』『兩流遺跡』兵庫県教育委員会 1990
- 註6 大澤正己『大槻遺跡及び周辺遺跡出土鉄滓・鉄剝の金属性の調査』『大槻・大槻南遺跡～下水道管渠埋設工事に伴う～』大阪府柏原市教育委員会 1984
- 註7 大澤正己『大阪府所在土師遺跡27-1街区、大和川、今池遺跡、高御浜遺跡出土鉄滓の調査』『大和川・今池遺跡』III 大和川・今池遺跡調査会 1981
- 註8 大澤正己『新日本製鉄研修センター内出土鉄滓・鉄製品の科学分析調査』『土師遺跡発掘調査報告書』その1 球市教育委員会 1976

- 註9 文野市教育委員会『森遺跡』I、II 1989、1990 鉄滓分析は未報告
- 註10 烏取県教育委員会提供試料未発表
- 註11 大澤正己「本田・東台I、II遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『本田東台・上前原』(江南町文化財調査報告書第8集)埼玉県大里郡江南町教育委員会 1988
- 註12 大澤正己「御藏山中遺跡出土鉄滓と鉄器の金属学的調査」『御藏山中遺跡』大宮市遺跡調査会 1989
- 註13 大澤正己「中山遺跡鍛冶工房跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『中山遺跡・水流遺跡・東原遺跡』(財)印旛都市文化財センター発掘調査報告書 第11集 印旛都市文化財センター 1987
- 註14 大澤正己「南小泉遺跡祭祀土壇出土と鉄滓の金属学的調査」『南小泉遺跡』(仙台市埋蔵文化財調査報告書第140集)仙台市教育委員会 1990
- 註15 福島県郡山市教育委員会調査。福島県文化センター寺島文峰氏経由入手試料未発表。

第5章　まとめ

1. 縄文時代の土器が初めて出土し(第17次調査区)、今後本遺跡において包含層や遺構の存在が期待される。

2. 弥生時代は、青木畠式併行から天王山式の可能性がある時期までの土器が出土した。特に、第18次調査区の深堀トレンチからは完形に近い甕が出土し、その出土層は埋没河川内とみられるが、従来「地山」と呼んできた黄褐色粘土質シルト層より下位に相当する可能性が出てきた。今後、検討すべき問題点である。

3. 古墳時代は、中期～後期の住居跡32軒・竪穴遺構2基・土坑21基・溝8条・畝状遺構2期・性格不明遺構(祭壇関係?)3基を検出した。石製模造品製作工房を兼ねる住居跡・土器製作用と考えられる粘土溜めをもつ竪穴遺構・鉄滓の発見・分析による鉄器生産が明らかになったことから、第16次調査区付近は中期集落内の生産部門を担った空間と考えてよい。上屋の建築部門材の材質・小型微製鏡・祭祀に関連するとみられる土器群・古手の黒色処理を施す土器、住社式の良好な土器群など注目すべき遺物も多い。

また、今回出土した土器と過去の調査出土土器を検討し、5～6世紀の土器群の変遷試案を示し、本遺跡が第2段階(氏家編年の引田式期)が主体となる集落跡であることを明らかにした。なお、型式学的先入観を排除するよう務めたが、土器群のグルーピングと変遷については不充分なものである点は否めず、今後さらに検討の必要を感じる。

4. 奈良・平安時代の遺構・遺物は希少であり、今回の調査でもこの傾向は変わらない。第18次調査で、僅かに住居跡・畝状遺構・溝が検出できた。注目したい点は、住居跡では須恵器の所有が土師器に対して極めて多い点、天地返しを受けない住居跡は、壁高70cm前後があったという点である。

5. 中世では、12世紀後半より16世紀の遺構の存在とその変遷を明らかにできた。本遺跡では、建物跡・井戸・土坑という遺構構成を屋敷跡と認識し、出土遺物から遅くとも12世紀後半には成立したと考えた。この屋敷跡には、周囲を区画する溝(堀)の有無があることも判明している。このような屋敷跡を構成する遺構の組成が、中世・近世を通じて屋敷の基本的な単位となるものと考えられる。

また、第16次調査区では城館跡の一部が発見され、構造的な特徴が明らかになった。特に、屋敷跡Bから城館跡への構造的变化を知ることができたものと思う。一方、この城館跡は、「古城書上」など江戸時代の記録にある「小泉村、古城」の記載や当地の領主である国分氏などの関連が、今後の追求すべき課題であろう。

遺物は、岡産や中國の陶磁器・土器の組成を明らかにできたものと思う。県内初の楠葉型瓦

器や東濃産山茶碗の出土は注目される。土師質土器（かわらけ）については、県内ではまだ編年が確立されていないことから特徴と変遷を明らかにしよう努めたが、試案の段階であり検討すべき点も多い。この種の土器は、領主が城館に職人を抱え込んだり、都市に住まわせて生産させたり、あるいは、商人・職人が売り歩いた可能性がある。したがって、今回示した変遷試案が他の遺跡にどの程度普遍化できるかどうかは、現状では不明である。

6. 近世は、江戸時代初期の遺構・遺物が比較的継って検出されている。江戸時代初期の遺構は、若林城下町（寛永年間）の一部と考えられる。第16次調査区では、中世城館の外堀を掘り直し再利用している。また、第17次調査区では中世以来の堀を城下町期に埋め立てている。このような特徴から、近世初期に中世以来の堀の改変が進行したものと考えられる。第17次調査区では、屋敷跡の一部と考えられる建物跡や道路の側溝と予想される溝を検出したが、過去の調査を含めてみると、屋敷の造営時には盛土整地を行っていない点や瓦葺建物はほとんどなかったとみられる点が特徴であろう。

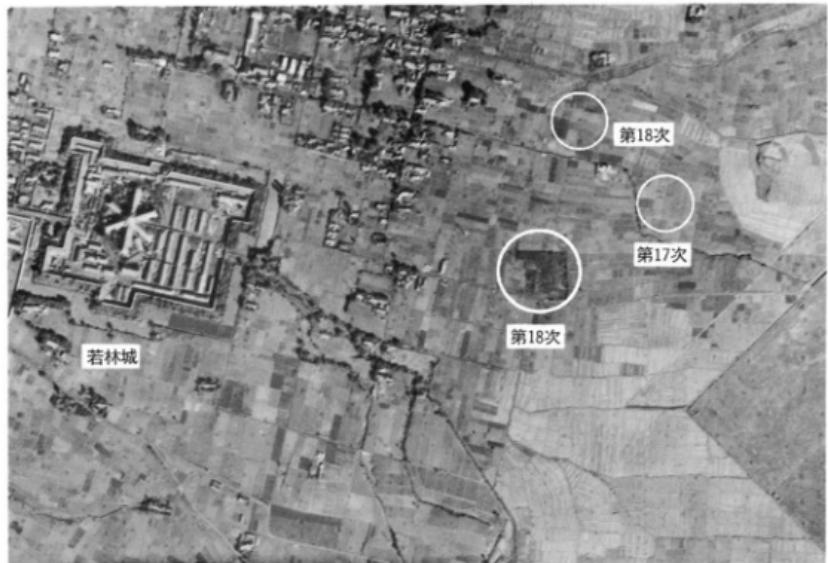
近世の建物では、城下町期とその後の陶磁器組成を明らかにすることができた。したがって、陶磁器の使用の実態や流通の問題など今後の解明すべき課題を究明する一助となろう。

写 真 図 版

写真1 南小泉通跡空中写真

写真1 南小泉通跡空中写真





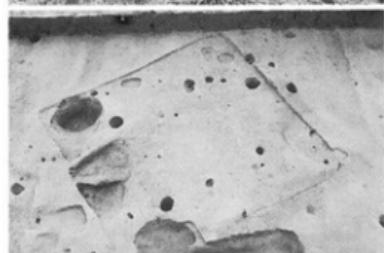
南小泉遺跡空中写真(1947) 建設省国土地理院



調査前全景
(右手の高まりは土塁痕跡)



II-V区全景



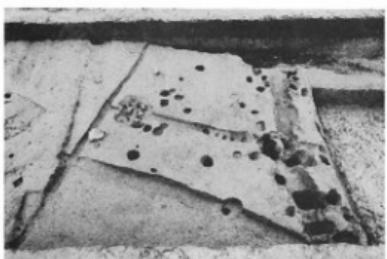
S101全景



S101炭化材出土状況

S101カマド全景

写真2 第16次調査遺跡全景・検出遺構



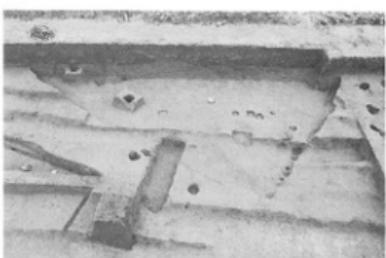
S102・03全景



S105全景



S105粘土溜土坑



S106全景



S107全景



S108全景



S110カマド縫道部



SK03全景

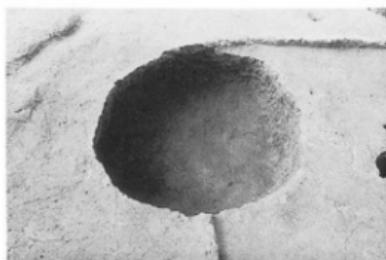
写真3 第16次調査検出遺構



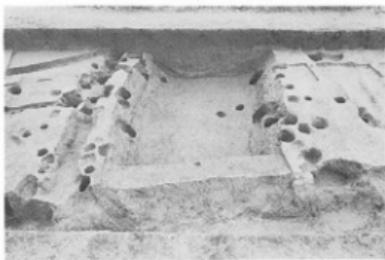
SK 06全景



SK 12全景



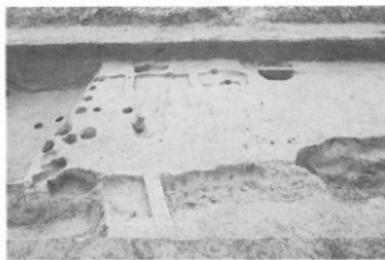
SK 14全景



SD 04・05全景



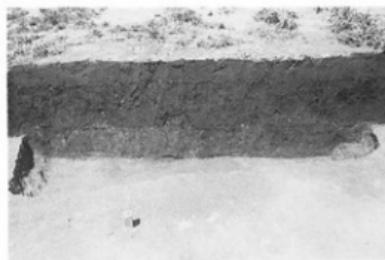
SA 01
(IV区→II区)
溝群は天地返し



SD 02浅溝部(入口か)



SD 02全景



SK 02全景

写真4 第16次調査検出遺構

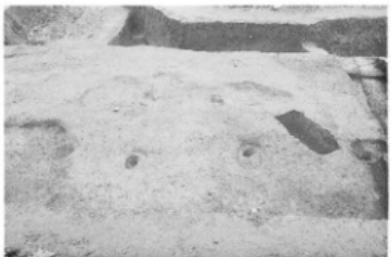
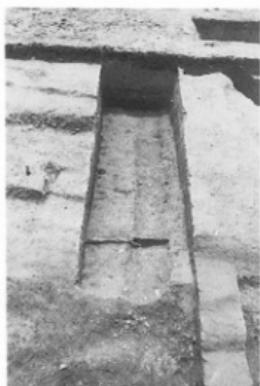


写真5 第16次調査検出遺構



SD 08全景 (トレンチ内)



VI区柱六群



SD 13全景 (VI区)



IV区トレンチ全景 (SD 01)



IV区トレンチ配石遺構



IV区トレンチ下層面



雅区トレンチ (SK 05 - 08)



SK 05全景

写真 6 第16次調査検出遺構

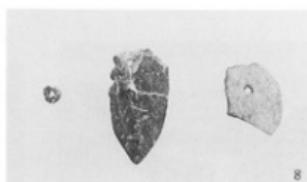
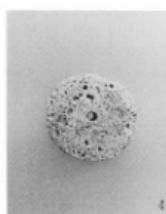
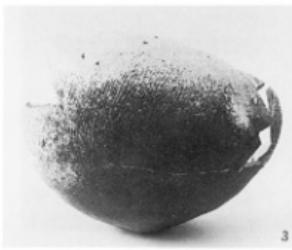


写真7 第16次調査出土遺物

1~5: SI 01 9~13: SI 05



8
(刀子)



10

1~4 : SI 05
5~8 : SI 06
9~13 : SI 07



13

写真 8 第16次調査出土遺物



1～5 : SI 08 7～9 : SI 11
6 : SI 10 10 : SK 03

写真 9 第16次調査出土遺物



写真10 第16次出土遺物

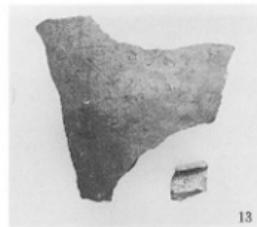
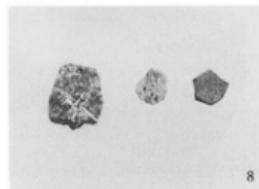
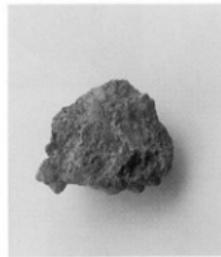
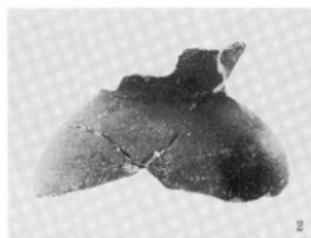


写真11 第16次調査出土遺物

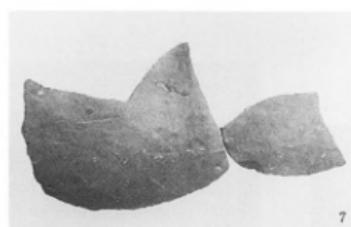
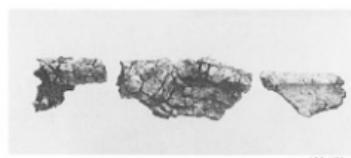
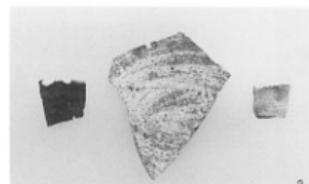
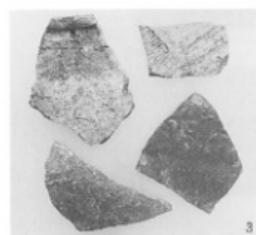
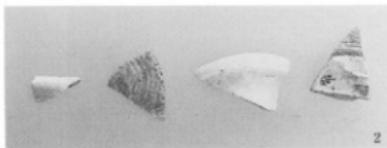
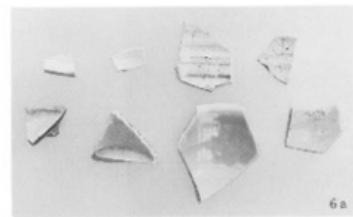


写真12 第16次調査出土遺物

- 1 : 西区・窓区出土
2・3 : 窓区配石道構 (2の左端は西区出土)
4・5 : 窓区
6~9 : SK 05
10・11 : SK 10
12・13 : SD 01



銅製鉢金具(波金)



- 1 : II区土器・IV区
2 ~ 5 : III・IV区天地返し
6 : IV区天地返し
7・11: 売探
8 : VI区5層
9・10: IV区天地返し
12: V区IC層

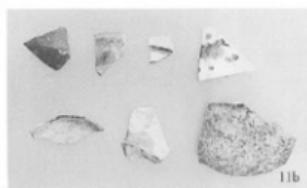
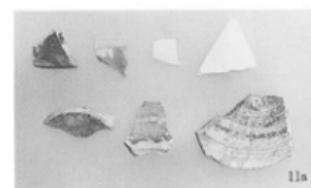
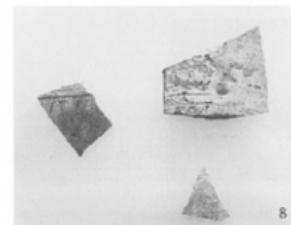
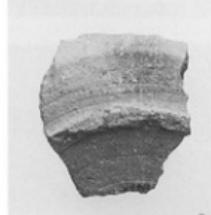
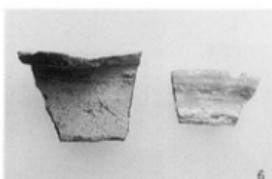
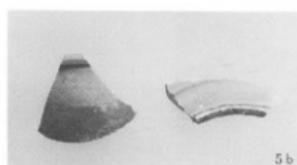
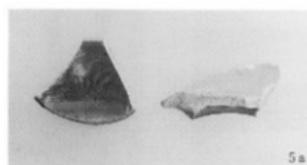
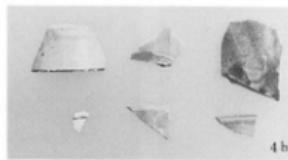
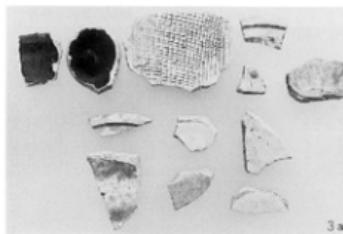
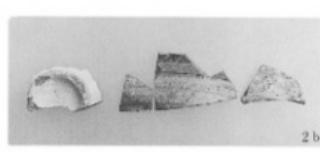
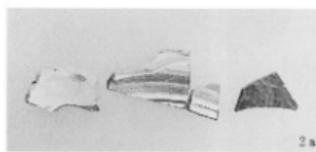
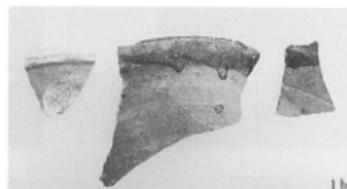
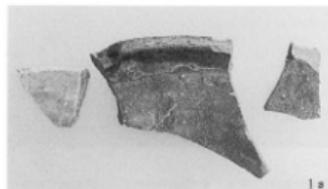
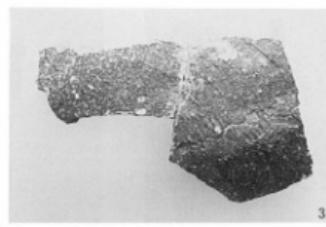


写真13 第16次調査出土遺物



1~4 : SD 01 基土
5 : SD 01 (左溝底・右11層)
6~8 : SD 01 基土

写真14 第16次出土遺物



6



12



7



13



8



14



9



15



10



16



11



17

写真15 第16次調査出土遺物

1~5: SD 01埋土
6~17: SD 01 8a 層 (6~11・17は大型皿、12~16小型皿)

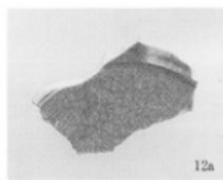
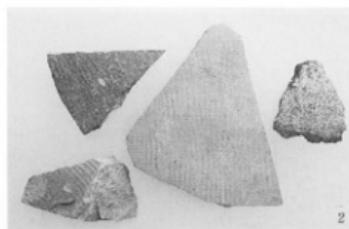


写真16 第16次調査出土遺物

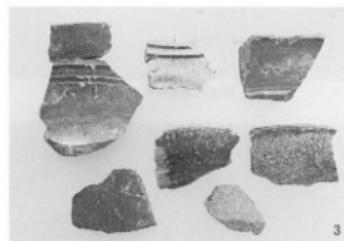
1~10: SD 01埋土 11~15: SD 02



1



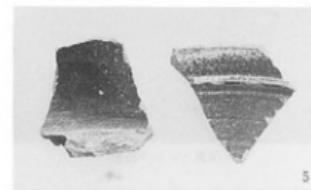
2



3



4



5



6



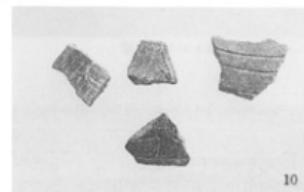
7



8



9



10



11



12

写真17 第16次調査出土遺物

1：土師器 7・8：石製模造品・石製品
2～6：須恵器 9～12：弥生土器



調査前近景



調査区全景(東より)



調査区全景(西より)



SI 01深掘トレンチ西壁



SI 01深掘トレンチ北壁



SI 01全景



SI 02全景



SI 03・19全景

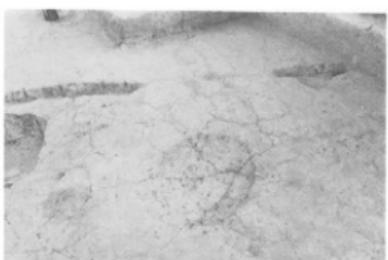
写真18 第17次調査検出遺構



S103カマド検出状況



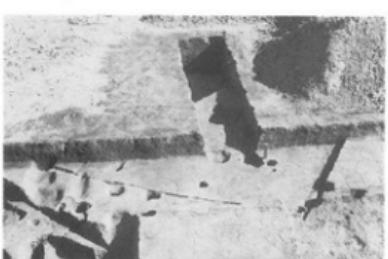
S104全景



S104カマド検出状況



S106全景



S107全景



S107内ピット遺物出土状況

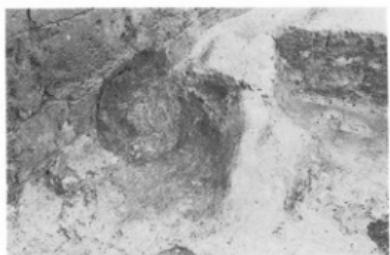


S109全景



S110全景

写真19 第17次調査区検出遺構



SII 10 カマド検出状況



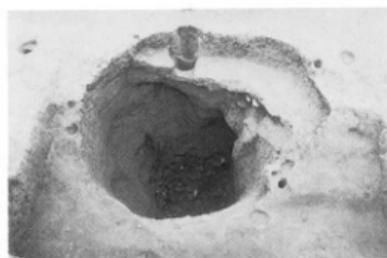
SII 11 全景



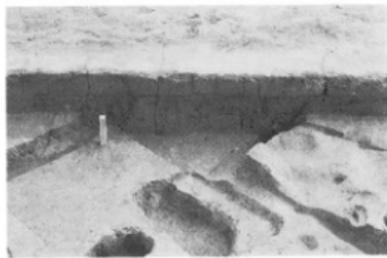
SII 11 カマド検出状況



SII 11 貯藏穴遺物出土状況



SII 12 現存部 (深い穴はSE 01)



SII 15 全景



SII 17 全景



SII 18 全景

写真20 第17次調査区検出遺構



SB 01・02・06全景 (中央は SD 02)



柵区建物跡全景 (SB 08~12)



6 トレンチ全景
(SB 9・10)
(SD 13~15)



4 トレンチ
(SB 13)
全景



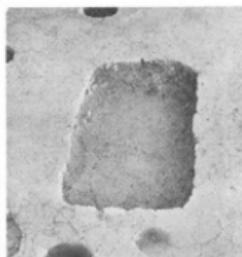
3 トレンチ (SB 14) 全景



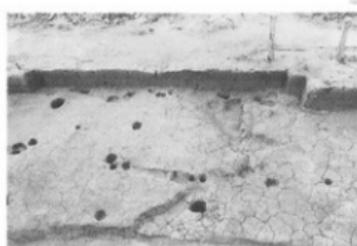
SB 03~05全景



SK 03全景



SK 01全景



SK 04・05全景



SK 06全景

写真21 第17次調査区検出遺構

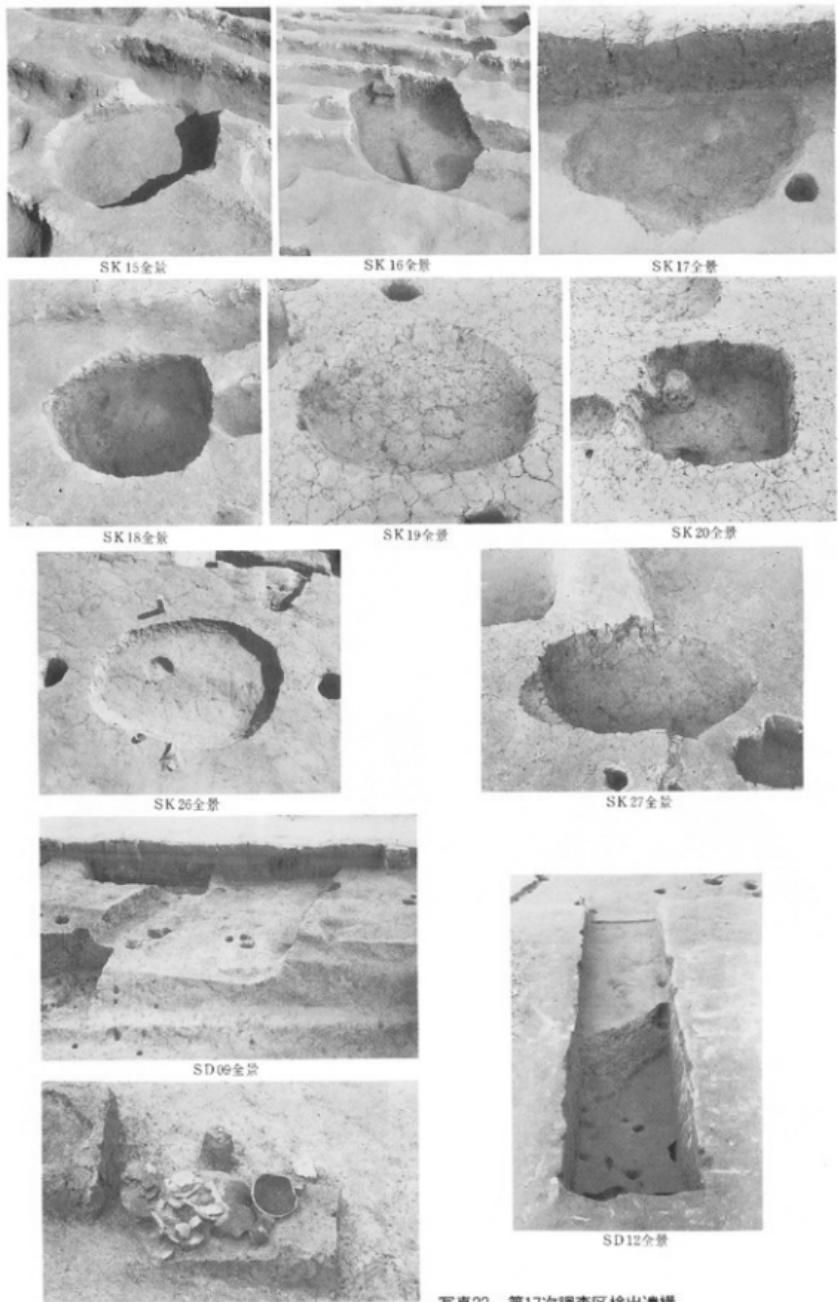
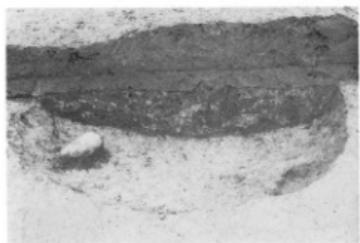


写真22 第17次調査区検出遺構



SK 07全景



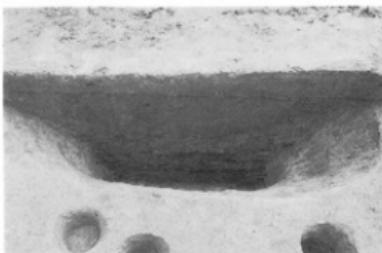
SK 08全景



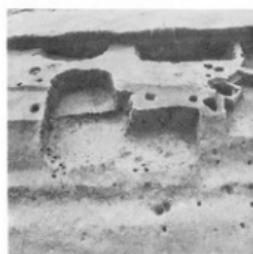
SK 10全景



SK 11全景



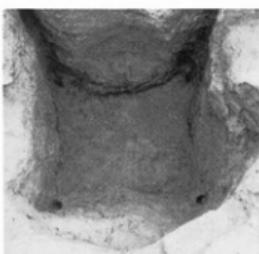
SK 12全景



SK 21~23全景



SE 01全景



SE 01本体内部



SD 01Ⅱ区全景

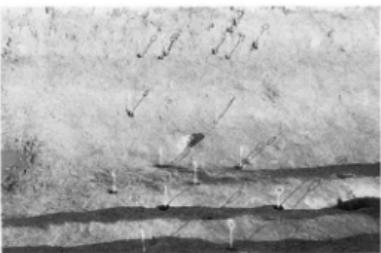


SD 01Ⅱ区東壁断面

写真23 第17次調査区検出遺構



SD 01 背区全景



SD 01 背区植脚跡



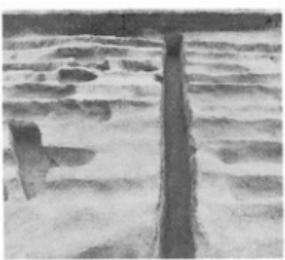
SD 01 V1区全景



SD 02 全景



I区 SD 02・07・08断面 (Jライン北壁)



SD 04 全景



SD 05 全景 (5トレンチ)



SD 07断面 (H-15) (西壁)



SD 06・11全景 (4トレンチ)

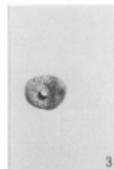
写真24 第17次調査区検出遺構



1



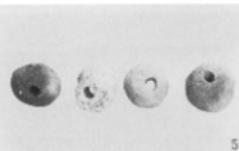
2



3



4



5



6



7



8



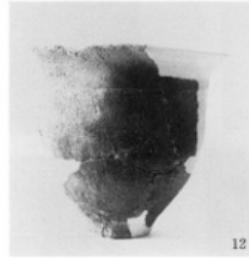
9



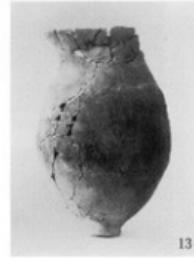
10



11



12



13



14



15



16

写真25 第17次調査出土遺物

1~5: SI01

6~7: SI02

8~16: SI03

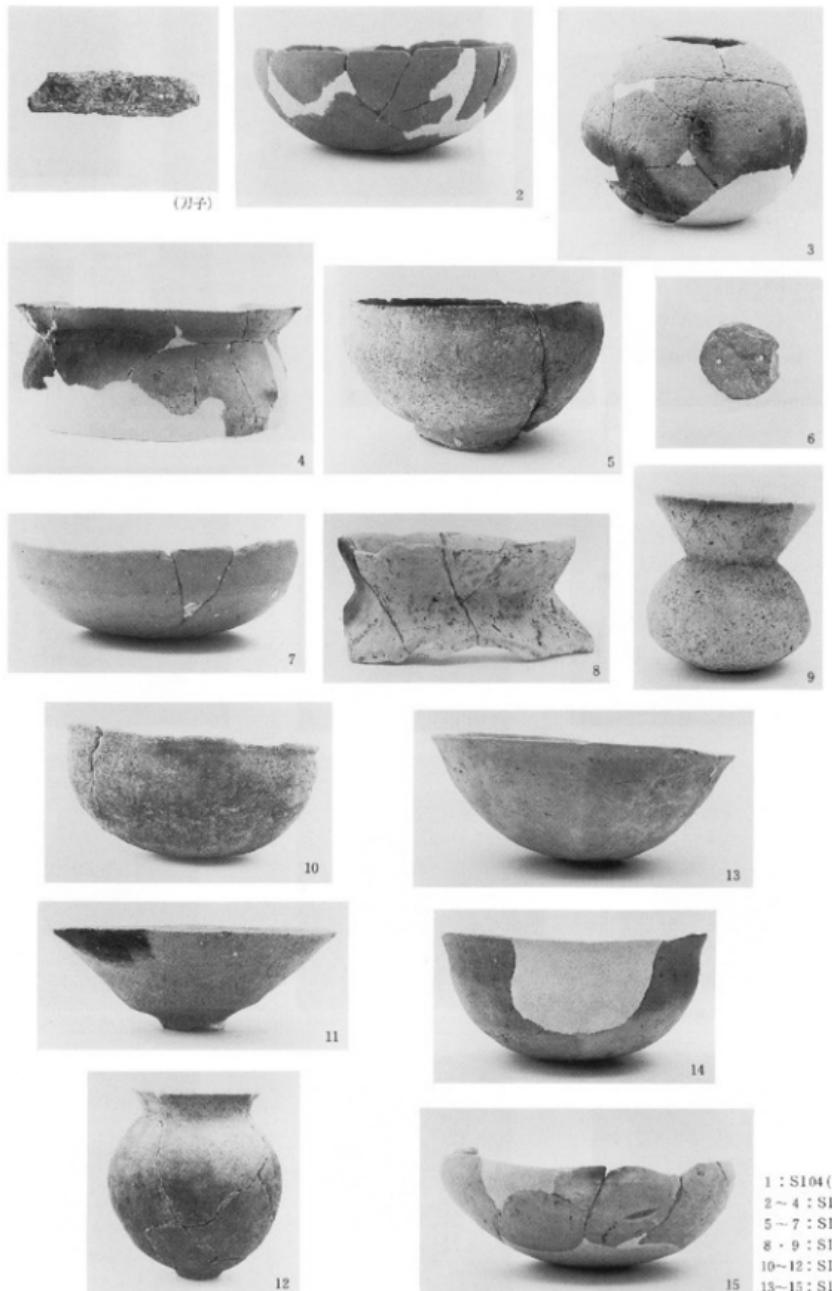


写真26 第17次調査出土遺物

1 : S104(刀子)
 2 ~ 4 : S106
 5 ~ 7 : S107
 8・9 : S109
 10~12 : S110
 13~15 : S111



1



2



3



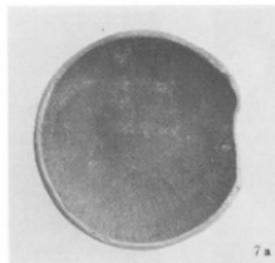
4



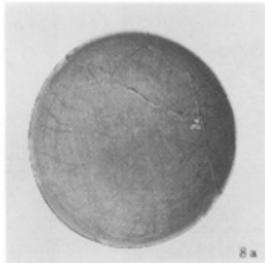
5



6



7 a



8 a



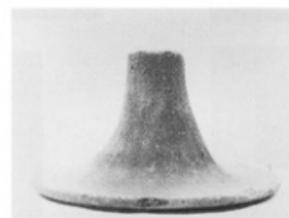
7 b



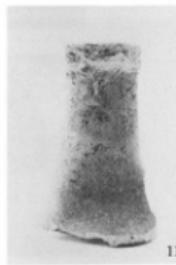
8 b



9



10



11

写真27 第17次調査区出土遺物

1~5 : SI 11 6~11 : SI 12

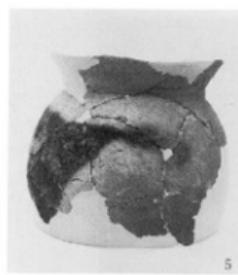
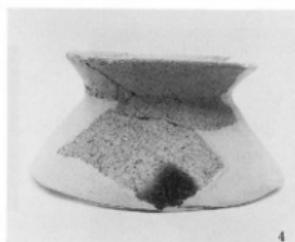
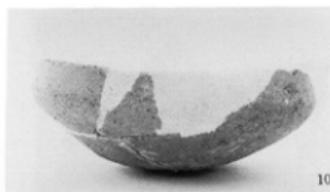
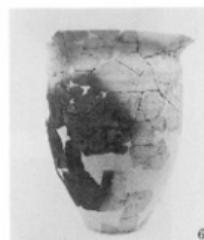
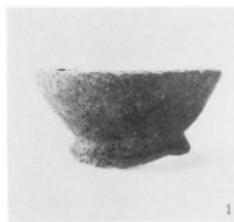


写真28 第17次調査区出土遺物

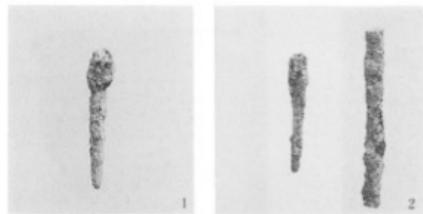
1~10: SI12



1 ~ 2 : SI14
3 : SI18
4 ~ 6 : SD09
7 ~ 12 : SD10
13 : SK26



写真29 第17次調査区出土遺物



1 : SK12 (釘) 4 ~ 5 : SD01
2 : SK21 (釘) 6 ~ 9 : SD01・02
3 : SE01

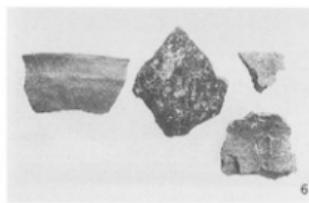
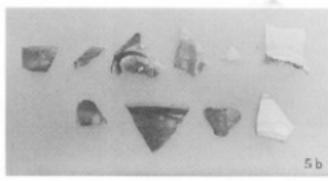
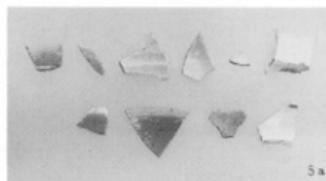
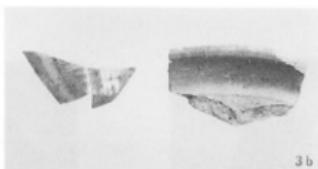
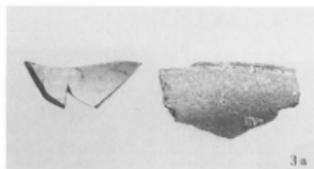


写真30 第17次調査区出土遺物

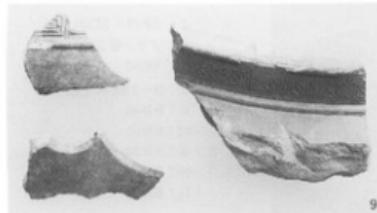
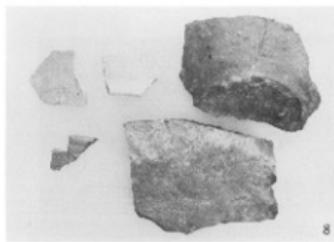
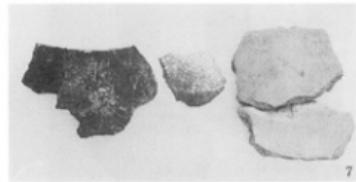
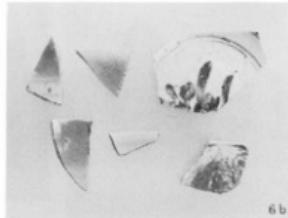
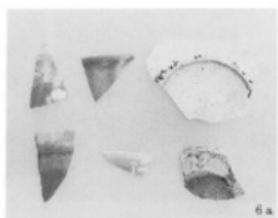
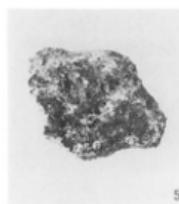
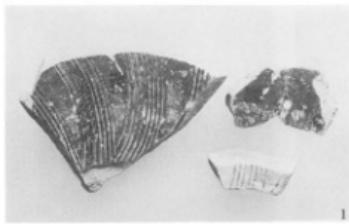
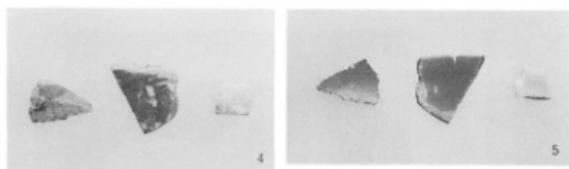
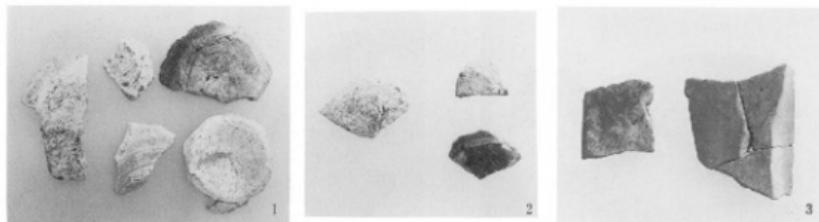
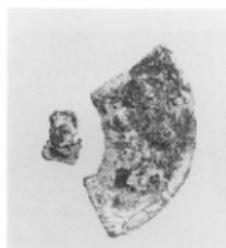


写真31 第17次調査区出土遺物

1~5: SD01 6~10: SD02
左から2番目は野蒜か



6 (石製品)



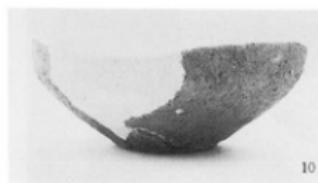
7 (銅鏡)



8



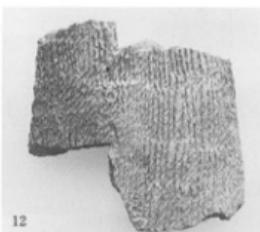
9



10



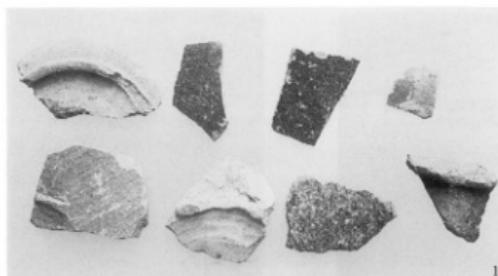
11



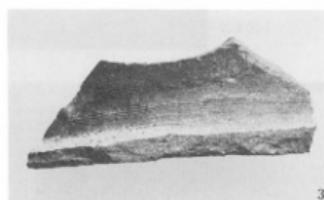
12

- 1 : SE01・SD01・02
- 2 : プラン確認面
- 3 : SK03
- 4・5 : B-14II区 大地返し
- 6 : SD06
- 7・12 : SD01
- 8・9 : SD02
- 10 : SD04
- 11 : SE01・SD10・SK11

写真32 第17次調査区出土遺物



2



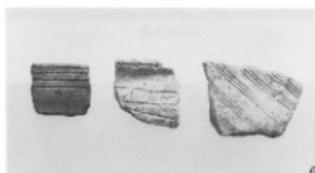
3



4



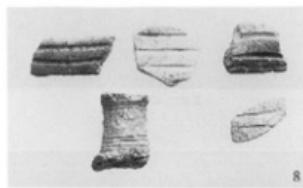
5



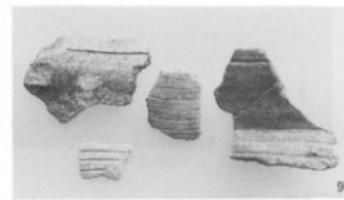
6



7



8



9



10

1 : SD01

2 : SK01 - I 番

3 : SD02

4 ~ 9 : 弥生土器

10 : 石器

写真33 第17次調査区出土遺物



調査附近景（I区）



I区全景



S105全景



SK 13全景



SX 01~03全景



SX 02遺物出土状況(1)



SX 02遺物出土状況(2)



5分鉄溝状遺構

写真34 第18次調査検出遺構（I区）



SI04(床1)全景



SI04(床4)全景



SI04(床1)カマド検出状況



SI04(床4)カマド検出状況



SI04鍋・獣先出土状況



SD06全景



SD11全景



SD10全景

写真35 第18次調査区検出遺構(I区)



SD 12・13全景(Ⅰ区西部)



SD 12・13全景(Ⅰ区北部)



SD 12部分(Ⅰ区北部)



SD 14(Ⅰ区東部)



SK 04全景

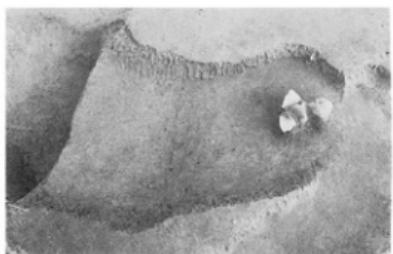


SK 05全景



SK 11全景

写真36 第18次調査区検出遺構(Ⅰ区)



SK 10全景



SK 12全景



SK 14全景



No. 1深掘トレンナ跡生土器出土状況



No. 2深掘トレンナ南壁



No. 1深掘トレンナ南壁



調査前全景(II区)

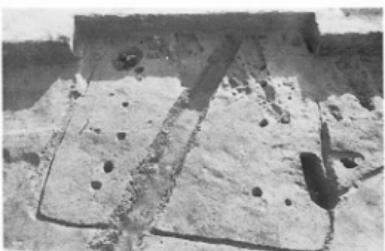


II区全景

写真37 第18次調査区検出遺構(I・II区)



S101炭化材出土状況



S101全景



S101カマド棟出状況



S101貯蔵穴遺物出土状況



S102全景(炭化材出土状況)



S102カマド棟き口



S103全景



SK01全景

写真38 第18次調査区検出遺構(II区)



SK 05全景



SK 06全景



SK 07全景



SK 08全景



3号・4号鉢状石構全景



SD 03・04全景



SD 05全景



SD 20全景

写真39 第18次調査区検出遺構(II区)



1号鉄溝状遺構全景



SD 07~09



II区西部建物跡・溝・放溝状遺構



II区西部建物跡 (SB 01~05)



SD 01・SK 02全景



SD 02全景

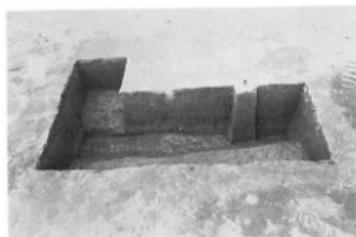


1 トレンチ 7号鉄溝状遺構全景

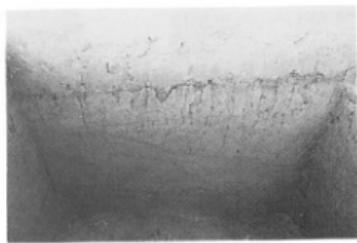


1 トレンチ SK 15・SD 25全景

写真40 第18次調査区検出遺構 (II区)



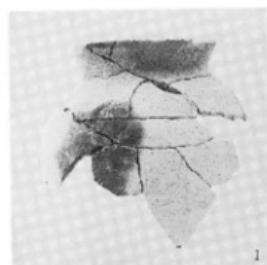
2 レンジ SD14全景



II区西部深掘No.2 レンジ北壁断面



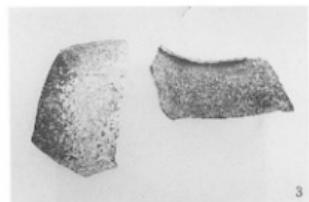
II区東部深掘No.1 レンジ東壁断面



1



2



3



4



6



5



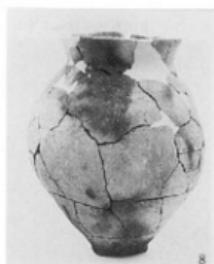
7



8

- 1 : 2 : SD04 6 : 7 : SD20
3 : SD08 8 : II区深掘
4 : 5号欲満状造様 No.2 レンジ
5 : SD25

写真41 第18次調査区検出遺構(II区)・出土遺物



1 : SI05
2 ~ 10 : SX02
11 : SK 10

写真42 第18次調査区出土遺物

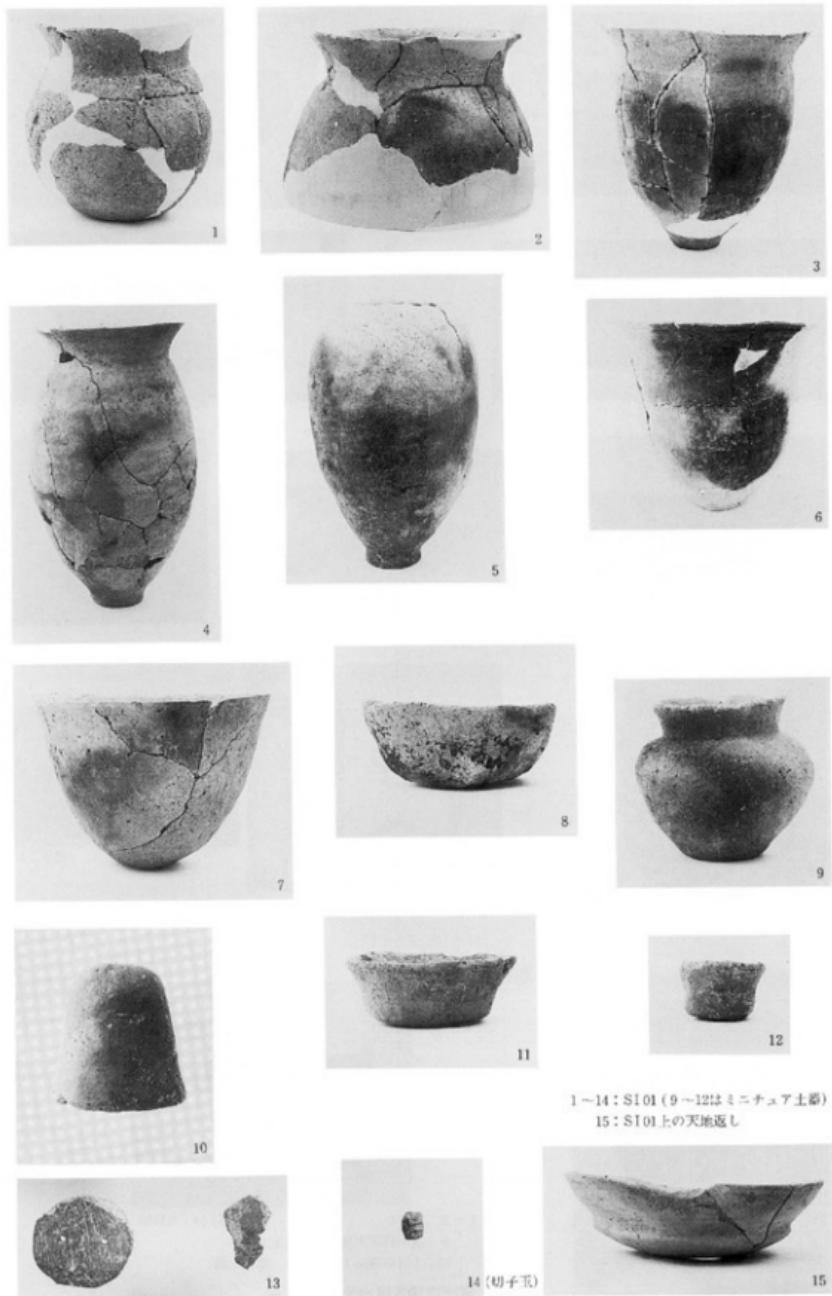


写真43 第18次調査区出土遺物

1~14: SI01 (9~12はミニチュア土器)
15: SI01上の天地返し



1



2



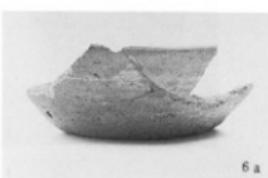
3



4



5



6a



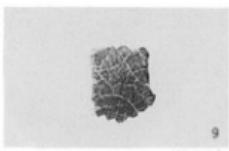
6b



7



8

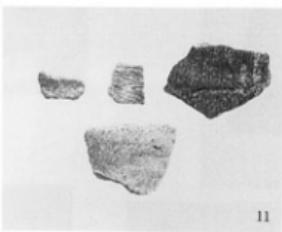


9

(把手?)



10



11

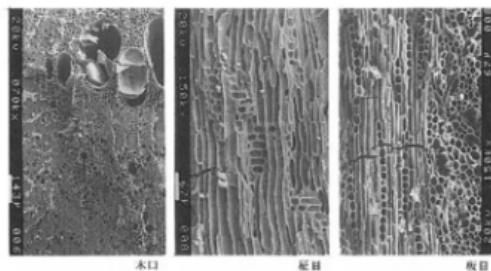
1~8: SI04

11: SI04・SD02

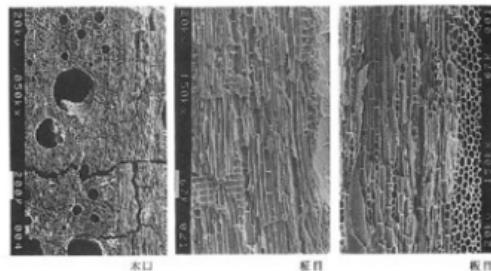
9: 0-12区天地返し(弥生土器)

10: I区深掘No.1トレンチ(弥生土器)

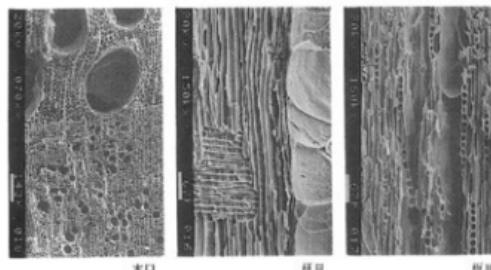
写真44 第18次調査区出土遺物



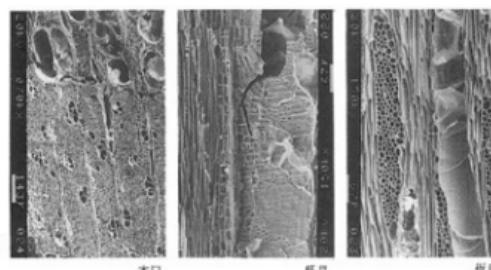
Quercus (elegans, Lepidobalanus sect. Prima) sp., No. 5



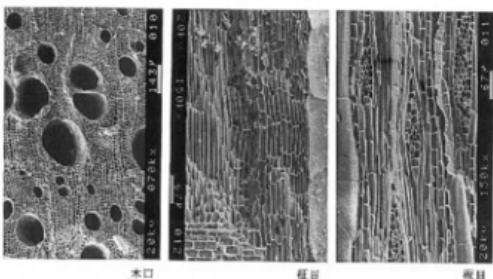
Quercus (elegans, Lepidobalanus sect. Currela) sp., No. 15



Castanea crenata No. 12



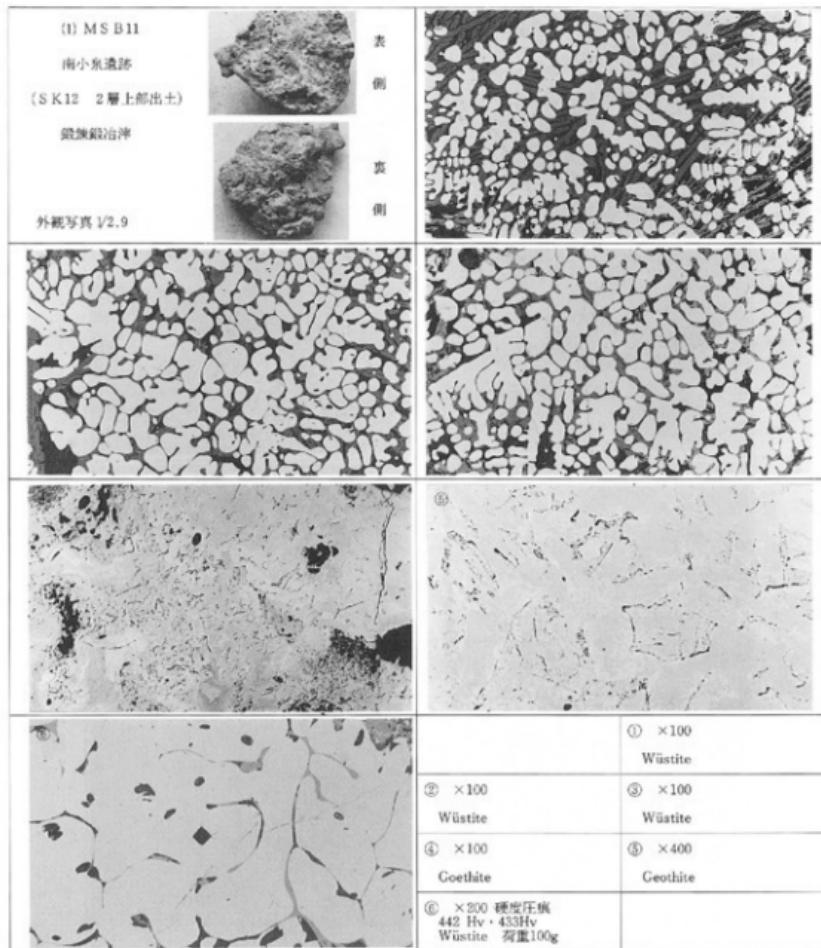
Morus bombycina No. 23



図版 3

Bouviers delacis No.6

写真 2 電子顕微鏡写真



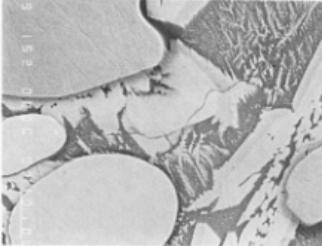
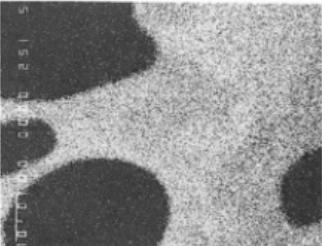
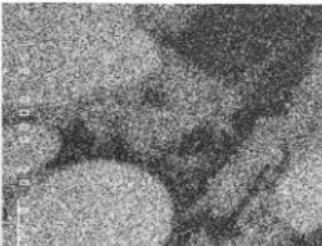
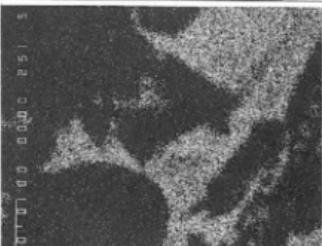
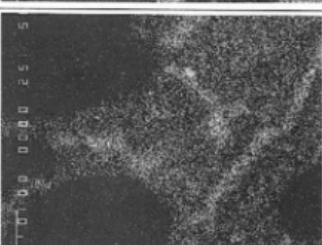
SE			Si
Fe			Al
K			Ca
Na			Mg
顯微鏡 組織 $\times 100$			

Photo. 2 南小泉遺跡出土鉄滓(M S B-11)の特性X線像($\times 1500$ 縮小0.56)

仙台市文化財調査報告書第140集

南 小 泉 遺 跡

第16~18次発掘調査報告書

平成 2 年 3 月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市青葉区国分町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷 (株) 東 北 プ リ ン ト

仙台市青葉区立町24-24 TEL 263-1166

